KAIZO

改造

五月號

1928



コーラスの春風は
矜らかに 和やかに
爛漫の花を散らして
快く咽喉を過ぎ行く。

コーラスの旋律は
内面に 嚴かに
總身の血管に
交響して若やぐ。

森永

コーラス

乳酸菌榮養飲料

CH—27



改造五月號目次

共産黨事件につき

田中首相が九腸寸斷するが如くしかく日本共産黨事件は深刻に進展していたであらうか、我々は事件の内容がモット具體的になるまでその批判を差控へる而し大體の推斷では所謂日本共産黨のとつた態度が小兒病的であつたことを云へる。だが舊勞農黨の構成大衆の大部分が噂の如き陰謀計畫を支持するものとは認めがたい。特にその部局黨員の大部分は自國を愛する點に於て既成政黨の諸要素に劣るものではあるまい。我々は政府が執つた態度が果して遺憾がなかつたか、この點も國民大衆の前に今後展開さるるであらふ陰謀計畫の全相を知り得てのあとに嚴正に見たいと思ふ。だがこうしたことに對して直にあはてはためいて大國民としての襟度を失はないやうにしたい。——沈着と冷靜——この言葉に對し一應はすべての社會事相をふりかへつて見る必要がある、そして世界の大勢を洞察する必要がある。國粹黨も保守黨も今后の日本がどこに行くか、そして現在どこを歩いておるかを深く考へて見たならばそうした輕噪な批判もできない筈である。我々は同胞の唯の一人でも無意義な苦難に陷れたくない。できることなら大衆皆と我國の行くべきところを正當に見とどけ、そして我々の建てなくてはならぬ文明と國礎の前に全努力を傾けたいのである。今回共産黨一部の人々の行動が矯激にわたればとて舊勞農黨全般の人々を非國民扱ひし又全然結社を禁ずるが如き策に出でたならその結果或はそれ等の人々はかへつて地下運動に潜入し其方面の運動がますます尖鋭化し、階級の對立がいよいよ深刻味をますばかりではなからふか、そうなると田中内閣の所期はかへつて反對の結果を齎らすのみである。かうした社會相を現前する當局は時節柄一方の思想にあまり偏在することがかへつて我國の前路を不利に導くものであるといふことを深省してもらいたい。そして大衆の一人でも故なく毀つけぬやう深く意をとめるのが當局としての忠實なる任務である。



團結權を死守せよ

—野田の爭議について—

末弘嚴太郎

一

普通選擧は八名の無產黨議員を議會に送り出した。極端なる選擧干涉と醜惡なる投票買收と戰ひつゝ尙且これだけの成果を擧げ得たことは、政戰の經驗に乏しく且又資金の貧弱な無產諸政黨として明に一の成功なりと言ふことが出來る。私は此所に彼等と共に萬歲を唱へ彼等政治行動の花々しい門出に向つて心から祝意を表したいのである。

しかしながら此際特に私の力を入れて言ひたいことは、政戰の小成功に陶醉して彼等無產諸政黨の注意が政治行動の上にのみ集中されてはならないと言ふことである。成程政治行動も無產者解放の方策として一の有力なものであるに違ひない。しかしながらそれは明に一の方策であるに過ぎない。加之政治行動成功の基礎には飽くまでも確固たる無產勞働者の結成がなければならない。勞働者の目醒めた而して確固たる團結を基本としてのみ無產者的政治行動は發展し且成功を收めることが出來るのである。若しも無產政黨殊に彼等の代議士が此基礎を忘れて政治的行動にのみ沒頭し、かくして彼等の行動が不知不識

の裡に既成政治の濁流中に引き込まれてゆくならば、選擧戰の成功も畢竟は「一將功成萬骨枯」の嘆を發せしむるものたるに過ぎない。私はかくの如くにして名のみ無產政黨を標榜して實は何等既成政黨と擇ぶ所なき無產者を踏臺とするに過ぎない――無產政黨の發達しゆくことを心より恐れるものである。

　無產者の政治行動は彼等解放運動の一方策である。而かもそれは飽くまでも一方策たるに過ぎない。それよりも一層根本的であり、又一層重要なものは、無產者の團結であり、團結による經濟行動である。無產者の團結と其經濟的鬪爭とは獨り彼等政治行動の基礎として重要なるのみならず、それ自身無產者解放の中心方策として獨自の働きをもつものである。私は無產政黨諸君の注意が飽くまでも此點に集中されむことを切望して已まないものである。

　殊に昨秋以來天下の視聽はとかく無產者の政治行動にのみ集中され勝ちである。而かも其間に勞働者の經濟行動は――一面經濟界の不況に災されてゐる結果であるとは言ふもの丶――動ともすれば萎微振はざるの狀況に在る。殊に野田の爭議の如き發始以來既に半歲を超えて未だ解決の曙光をすら見るに至らず、千餘の勞働者と其家族とは日々の米鹽に窮して幾多の悲劇事は日に日に繰返へされつ丶ある。而かも資本家の態度は終始嚴として動かず、殊に彼等主張の根本が彼等工場の中より永久に勞働者の團結を驅逐し去らむとするにあるを見るとき、吾々どうしてか默止することが出來やう。爭議の題目として賃銀其他個々の問題が爭はれてゐる限り、吾々は尙默して成り行きを見てゐることが出來る。けれども、今日野田の資本家の飽くまでも主張し飽くまでも達成せむと企て丶ゐることは、勞働組合の破壞に在る、組織勞働者の排斥に在る。而して彼等の態度確固として動かず戰勝たずむば終に已まざるの狀を示しつ丶あるのを見るとき、吾々はどうしても「勞働者よ！　團結權を死守せよ！」の叫聲を發せざるを得ないのである。

　今日の資本家は既に其實力に目醒めてゐる。大正八九年勞働運動擡頭當時の彼等と全く其趣を異にしてゐる。彼等が今日勞働者の組織化に向つて極度の抑壓を加へつ丶ある有樣は最早大正年間のそれではない。嘗て彼等が勞働組合を忌み嫌つたのは單に多年彼等の味ひ來つた溫情主義の甘夢を破られた驚きの衝動に過ぎなかつた。然るに今日彼等は最早其實力に目醒め其立場の何たるかを自覺してゐるのであつて、彼等現在の行動は意識的であり計畫的である。彼等は今や經濟界の不況と一般社會の反動的傾向とを利用して勞働組合を粉碎し勞働者の團結を否定し去らむとしてゐるのである。是れ私の特に「勞働者よ！　團結權を死守せよ！」と絕叫する所以である。

二

元來資本は勞働の協力を要求し勞働は又必然資本と提携すべきものである。資本と勞働とは各異なつた人々の手に獨占せられつゝあるにも拘らず、彼等が互に正しき意味に於て提携し協調することは、產業の必然に要求する所であり、勞資の共々に要求する所でなければならない。しかしながら、團結なき個々の勞働者は正しき意味に於て資本と提携し得ない。團結なき個々の勞働者と資本家との間には對等がない。對等なきもの丶間にどうして提携があり得るか、どうして協調があり得るか。正しき提携と協調とは唯獨り對等者間の自由意思的結合によつてのみ成り立ち得るのであつて、非對等者間には單に隷屬が成り立ち得るに過ぎない、溫情的保護が成り立ち得るに過ぎないのである。

資本家は動ともすれば溫情を口にする、而して唯溫情的保護と協調とがありさへすれば足りると言ふ。けれども、現代の法制は飽くまですべての人間を自由平等の人格者とする立場の上に立つてゐる。資本家と勞働者とを對等自由の人格者と考へ、彼等相互の自由意思的契約によつてのみ勞資の結合が成り立ち得るものと考へて居る。隷屬は飽くまでも現代法制の排斥する所であり、溫情的庇護に飽くまでも現代人の潔しとせざる所である。此故に、法制は又同時に自由放任主義の上に立つて萬事を出來得る限り各人の自由決定に放任するを以て其根本的基調としてゐる。賃金其他勞働條件は直接國家に於て之を規定することなく、勞資各好む所に從つて自由に協定せよと言ふのが現行法の主義である。蓋し國家の權力を以て外部より濫りに交涉を加ふるが如きは產業其他社會各般の機構をして自由なる發達を遂げしめる所以でない、又各人をして自ら自由に決定せしめ約束せしむることが頓て各人をして喜んで其自ら決定し約束したる所を爲し遂げしめる所以であつて、かくして各人をして各其所を得しめ各人をして喜んで其職とする所に力を盡さしめることが社會をして頓に圓滿なる發展を遂げしめる所以だからである。

しかしながら社會の實際は事實容易に此理想を實現せしめない。殊に社會の分業及び協働的關係が複雜緊密の度を加へれば加へる程、社會人相互の關係は事實上漸次に標準化し又必至的となつて、各人の自由決定は事實甚しく制限を受ける。從つて、萬事を各人の自由決定にのみ放任して置くだけで、之に國家的統制を加へることを怠ると、自由の名の下に小數の社會的實力者が萬事を決定した上其結果を一般人に命令し強要するが如き現象を生ずるのであつて、現代勞資の關係の如き正に其現象の一に外ならないのである。

故に、勞資の關係についても國家的權力を以て之に統制を加へることが必要となるのであつて、勞働者保護法・最低賃金法其他勞働立法の如き實に其必要から生まれるのである。しかしながら、現代經濟組織の下に於ける產業は本質的に之を完全なる國家的統制の下に置き難い。賃銀其他勞働條件を完全なる國家的統制の下に置くことは事實到底不可能であつて、產業の主要部分は自由放任の主義の下に置かるゝの外ないのである。果して然らば、賃金其他勞働條件の決定も之を當事者自由の協定に放任しつゝ、而かも其結果が資本家專ら決定し勞働者唯之に服從するの外なきが如き弊害に陷ることを防ぐべき方途を講ずることが、正に現代國家の責任であらねばならない。而して勞働者の團結及び之によつて對等的立場に立ちつゝ資本家と平等的協定を爲すことを公認し、彼等に向つて團結權と團體交涉權とを確認し與ふることこそ正に其責任を盡すべき唯一の方策であらねばならない。

現代人は隷屬的保護を好まない、萬事を己れの好む所に從つて自己の責任を以て爲さしめよと言ふのである。而して自由主義の根本精神は正に各人の自發心と自己責任の精神とを發揚せしむることによつて愈々各人の力を發揮せしめ以て社會全體の生き〱した發展を計らむとするにある。此故に、勞働者に向つて勞働條件協定の權能を確保し、彼等をして自己生活の基本は自ら之を決定し得べく又事實自ら之を決定し得たと言ふ信念と喜びとを感ぜしめることに、現代國家必須の責任であつて、之を怠る限り社會に到底勞働者から眞に心の底から燃えた勞働を期待することを得ないのである。

三

資本家並に專ら彼等を支持する——若くは彼等によつて支持せらるゝ——政治家達は動ともすれば、國家の產業を名として勞働立法の完備を阻み若くは又勞働者の團結を妨げやうとする、そうして勞働組合を以て國家產業の賊なりと揚言するをはゞからないのである。

勿論現在の如く國と國とが互に經濟的に國境を閉鎖し各國それ〴〵國際的經濟競爭を前提として其經濟生活を築いてゐる以上、國家產業の隆昌は國民の等しく希念すべき所、勞働者と雖も之を無視して濫に爭ひ只管利己を計らむとするが如き素より許すべきではない。けれども、產業は決して獨り資本家のものではない。資本家は單に產業の一要素たる資本の所有者に過ぎない、而して資本の所有者たる關係上產業それ自身の管理者たる立場に立つてゐるに過ぎないのである。彼等が如何に資本を獨占してゐても、勞働の協働を得ざる限り終に何事をも爲し得ない。產業は畢竟資本勞働の協力によつてのみ成り立ち得るのである。此故に、資本若し國家產業の責任者であるならば、勞働亦

全く同一の權利を以て責任者たる地位を主張し得る譯である。而して法制が勞資の結合を勞資兩者の自由契約に委ねてゐる以上は、勞資互に平等の立場を維持しつゝ平等自由の協定を爲さしめ、以て勞働者にも亦國家産業の責任を分擔せしめ、かくして共分擔者たる自覺を與へてこそ初めて、自由主義的法制の理想が實現せられ、國家産業の隆盛を計ることが出來るのである。資本家のみ獨り産業の責任者なりと自負し、專ら資本の立場のみから産業の經營を考へ、自ら獨り萬事を決定して勞働者に命令し、彼等を永く隷屬的地位に置いて其勞働を搾取せむとするが如き、現代法制の根本精神と矛盾するものであつて、其到底許すべからざる素より言ふを俟たない。

現に資本家並に彼等に加擔する人々は、現在吾國の勞働者が徒に要求する所のみ多くして能率上らず一般に寧ろ怠業的氣分にあると言ふ非難を加へ、動ともすれば之を勞働運動の罪に歸しやうとしてゐる。しかしながら、今日は最早他人をして奴隷の如く牛馬の如く働かしめ得べき時代ではない。勞働者も亦人間の貴さに目醒めた人格者である。人格者に向つて奴隷の勞働を要求することそれ自身が抑も間違つてゐるのである。資本家若し人格者に向つて心より喜びたる勞働を要求せむと欲するならば、先づ彼等に向つて自由協定の機會を與へねばならない、彼等と自由に平等に契約して彼等にも亦「吾自ら擇びたり、吾自ら約したり」との信念を與へねばならない。契約遵守の精神は吾々人間の均しく抱いてゐる範疇的要求であつて、それを利用して契約の完全なる遵守を社會的に實現せむとするのが契約自由制の根本精神である。從つて資本家若し勞働者に向つて勞働義務の完全なる履行を要求せむと欲するならば、先づ彼等に與ふるに自由の契約を以てせねばならない。然らずして、今日尚此根本義を悟らず、依然として勞働者より奴隷的勞働を要求し、而かも彼等の怠業的精神を非難するが如き、抑も資本家の態度として根本的に矛盾してゐる。若しも彼等の非難するが如く現在の勞働者に怠業的精神が漲つてゐるとするならば、其罪の大半は寧ろ資本家にある、人を人として取扱はない彼等の態度に在ると言はねばならないのである。

此故に、眞に國家産業の隆昌を希ふ人々はよろしく勞働者に向つて團結を許し與ふべきである。團結せる勞働者と自由に平等に協定して契約の實を彼等に與ふべきである。然るに、資本家は今尚一般に此根本義を理解してゐない。そうして、專ら獨り自ら決定して之を個々の隷屬的勞働者に命令し、かくして彼等より順從なる遵守を要求しやうとしてゐる。事の矛盾之よりも甚しいものが何所に存するであらうか。私は玆に改めて資本家の覺醒を要求せざるを得ないのである。

四

かくの如く、産業が自由放任の原理の上に築かれてゐる以上、勞働者に向つて團結權と團結による團體交渉權とを許し與ふべきは、制度上必至の要求である。此故に、國家としても此等の權利を勞働者に保障し與ふべきは正に其義務であつて、政府は此際よろしく速に法律の制定改廢を行ひ以て其當然の義務を履行すべきである。

其意味に於て、私の先づ第一に要求するものは「勞働組合法」の制定である。そうして、少くとも嘗て社會局の勞働組合法原案中に示されてゐた「雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者ガ勞働組合ノ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ズ」「雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者ガ組合ニ加入セザルコト又ハ組合ヨリ脱退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ズ」と言ふが如き規定を設ける必要がある。無論民法によれば、二週間の豫告を以てしさへすれば何等理由を示さずして勞働者を解雇し得るのであるから、縱令かくの如き規定を設けても組織勞働者の解雇を絶對に防止することは出來ないけれども、現在野田足尾等の資本家によつて公言せられつゝあるが如き組合員たるの故を以てする解雇は少くとも之によつて防遏することが出來る。

第二に、私の主張したいことは勞働爭議調停法の改正である。現行の調停法は公益企業についてのみ强制調停主義をとつてゐるだけで、其他の一般企業については任意調停主義をとつてゐる。其結果當事者の孰れか一方が調停手續の開始を拒絶する限り、他方が如何に調停を希望し又官廳乃至輿論が如何に之を希望しやうとも、終に調停を開くことが出來ないのである。嘗て同法制定の當時勞働者組合側の人々は殆どすべて强制調停主義に反對した。けれどもかくの如きは――私の當時指摘した通り――吾國勞働組合の實勢を洞察せざる直譯的意見である。現在吾國の如く勞働組合の實力が未だ充分發達してゐない國に於ては、資本家の勞働戰術として最も有力なるものゝ一は組合否認であり團體交渉の否認である。組合が如何に威張つても資本家が組合の名を以てする一切の交渉を拒否する限り何とも出來ないのが現狀である此故に、縱令第三者――調停委員會――の立會の下に於てゞも、法律の力によつて强制的に資本家との交渉を開始し得る途の開けてゐることは、勞働者にとつて又勞働組合にとつて寧ろ甚だ有利である。現在野田の實例を考へて見ても、資本家が頑として應せざる限り官廳乃至輿論が如何に爭議の解決終止を希望しても、如何ともし難い有樣である。私は此際よろしく速に調停法を改正し、一般企業についても或る條件の下に强制的に調停を開始し得る途を開くべきであると主張したいのであつて、勞働組合側の人々もよろしく從來の概念的な反對論を

抛棄されむことを希望してやまないものである。

五

今や反動的の氣勢は全國至る所に漲つてゐる。資本家は此機運に乘じて猛然勞働組合を粉碎せむとして居る。野田を見よ。足尾を見よ。資本家の如何に頑强なる態度を示して居るかを見よ。私は此際心より勞働組合の奮起を熱望して已まないものである。

團結權は現代勞働者の必然享有すべき社會的基本權である。勞働者は之を有するによつてのみ資本家と對等に協定し得る、そうして契約の自由を享有し得るのである。而して勞働者をして眞に契約の自由を享有せしむることが、頓て彼等に勞働の喜びを與へ産業の責任負擔者たる自覺を與へ得る所以なることを考へて見ると、政府は勿論資本家としても寧ろ喜んで勞働者團結權を是認すべきである。

野田の資本家は人格者たる勞働者から今尙封建的順從と奴隷的勞働とを期待してゐる。蓋し現代制度の根本精神に目醒めざるもの、吾人の最も非難して已まざる所のものである。私は一面勞働組合の奮起して團結權を死守せむことを希望して已まないと同時に、資本家の現代に目醒めむことを切望して已まないものである。

（昭和三、四、九）

野田爭議籠城記

小泉七三

一

野田には、大正十年十月、總同盟野田支部が創立されて以來、

大正十一年…桶工問題と木村事件
同　十二年…新制度反對のストライキ
同　十三年…賃銀値上の食言と要求提出
同　十四年…丸三事件及小麥事件
同　十五年…ナシ
昭和　二　年…丸三問題とストライキ

と毎年必らず爭議が起り、そして、其何れの爭議も會社が組合を破壞せんとする挑戰に端を發してゐる。丸三には前後二回に及んで起されてゐるが、之などは最も露骨を極めたものである。十五年には起らなかつたが、夫は春の大火災の復舊工事に力を注がねばならぬ事情があつたからだ。如斯、野田の爭議と云へば必らず資本家の組合壓迫に基づくものと定まつてゐる。此度の爭議も、既に松岡駒吉氏が本誌二月號に於て明かにされてゐる通り、茂木一家が組合を破壞せんとしたことから起つたのであつて、勞働組合に取つては、恰も唐突に頭を毆りつけて喧嘩を賣られた形である。前にも述べた樣に野田支部は幾度となくそうした無法な喧嘩を仕かけられた。そして已むなく買つた事もあれば、仲裁する者があつて平穩に濟んだこともあるが、此度の戰はすでに二百日に及び、數百萬の富は無意義に費ひ果され、廿餘名の人々は囹圄の身となり、五名の廢人と三名の變死者、百餘名の重輕傷者を出し、三百五十餘名の小商人は、或は店を閉ざし、或は「窮民救護共濟會」と稱する爭議の影響を受けて貧窮せる人々を救はんがために組織されたる團體の扶助を受けて、辛うじて糊口を凌ぐの悲慘なる境遇に陷り、畏くも直訴事件までも起すに至つたが、尚、解決の曙光さへ見えず、愈々益々深刻化するばかりで、此後いつまで繼續され、如何に結末するのか豫想だも許されない有樣である。

然るに、會社は、かくまで猛烈な深刻な戰の種を蒔いてゐながら、今尚「丸三問題は之を以てストライキを決行すべくその理由甚だ薄弱である」と云ひ、また「丸三と會社との關係は、會社は丸三に出資もして居り、其繁榮は衷心より望む所であり、ことさらに其衰廢を圖る如きは出來るものではありません」と云ひ、更に彼は「貨物の取扱ひが間に合はぬので、本社は丸三に對し十分念を押したる上貨物の一部を新設の丸本に取扱はしむことにしたのであります」と云つて、一言にして盡せば、會社は組合に對して喧嘩を賣らないと云ふのである。

こゝで私は、本當に會社は丸三の自然消滅を計らないか、そして丸三は今も尚隆々として發展してるか何うかを見るために、左の表を提示しよう。之は本年二月中に丸三運送店で取扱つた貨物噸數と賃銀と從業員數を現はしたものである。總員が七十六名もゐるのに、かく出勤者が少いのは貨物を全部丸本に移されてしまつたので、交代に出勤してゐるからである。

(表)

月日	噸數	總金額	從業員數	月日	噸數	總金額	從業員數
二月一日	二六	三、三八円	一八名	二月十六日	八	一、〇四円	一二名
二日	二二	二、八六	二〇	十七日	ナシ		一七
三日	八	一、〇四	二四	十八日	二六	三、三八	一七
四日	三八	四、九四	二五	十九日	二一	二、七三	一三
五日	二〇	二、六〇	二三	二十日	四一	五、三三	一六
六日	五三	六、八九	二〇	廿一日	三四	五、五九	一八
七日	五三	六、八九	一九	廿二日	二三	二、九九	二一
八日	一三	一、六九	二三	廿三日	九	一、一七	一六
九日	一八	二、三四	二五	廿四日	三〇	五、七〇	二三
十日	四八	六、二四	二二	廿五日	一六	二、〇八	二四
十一日	三八	四、九四	二〇	廿六日	三一	四、〇三	二五
十二日	七二	九、三六	一九	廿七日	一九	二、四七	二五
十三日	三一	四、〇三	二六	廿八日	四八	六、二四	二一
十四日	八	一、〇四	二五	廿九日	四四	五、七二	一九
十五日	一五	一、九五	一九				

此表に見る如く、辨當持で出勤しても一錢の收入もない日さへあるのであつて、丸三は事實上滅亡し、其從業員は失業者と同樣の狀態に置かれてゐる。夫どころか、現在では帳簿までも丸三のを丸本に移して使用してゐるのである。此儼然たる事實の前には、如何に頑迷不遜な茂木と雖も、一言半句も辯解の辭はないだらう。

三

九月十六日ストライキを決行するや、會社は丸本運送店の人夫と過

井戸淺草方面より無頼の徒を集め來つた暴力團を組結し、組合の正々堂々たる態度に對するに暴力を以てし、隨所に於て爭議團員に暴行し危害を加へしめまた或時は幹部の××をまでも企圖したのである。會社が暴力團を組織した目的は、直接的に爭議團に脅威を與ふると共に、他面夫に依つて爭議團の暴力的行爲を誘發して、以て官憲の取締を嚴重ならしめ、其壓迫を利用せんとするにあつたのである。十月十三日の演說會妨害事件、同廿日の爭議團員拉致事件、十一月五日夜の幹部××計畫、十二月一日の六工場及十五工場前の鐵棒事件、同十一日の行德爭議團の破壞事件、同卅日夜の十四工前の傷害事件、二月六日の殺人未遂事件等は、其前者に屬し、竹槍問題等は爭議團が後者の目的の爲に利用されたのである。以下私は、夫等會社の暴力的橫行の跡を簡單に述べよう。

十月十三日夜、爭議團では野田劇場と萬座の二ヶ所に於て、爭議眞相發表演說會を開催した。すると會社は其演說會を攪亂せんとして、其一組は太田顧問指揮の下に野田劇場に他の一組は萬座にと入り込み、演說會が始まると同時に、數名の暴漢は大聲を發しながら演壇目がけて飛び出したが、何れも警官の爲に捕へられて其目的を果すことが出來なかつた、形勢の不利なるを見た太田は殘る者に引あげを命じて退場し、萬座の方は全部檢束されて仕舞つたので、演說會は無事に終つたが野田醬油の顧問ともある者が暴力團の指揮者とは驚かされる。

十月廿日の堀越梅男外一名の拉致事件は、之また實に兇暴極まるもので、堀越等數名の爭議團員が同志たる岡田夏太郞方にゐると、淸水七之助外廿余名の暴力團一味がトラックに分乘し來つて、堀越等を包圍し、、、、、、等を拔き放つて居合せたる者を追ひ散らし、堀越外一名を遮二無二トラックに乘せて運び去つたのであつた。之を知つた爭議團員は、非常に激憤して大擧丸三前に殺倒し、危く血の雨を降らさんとしたが、警官の爲に抑制されたので、大事に至らずして濟んだ。淸水等一味廿余名は直ちに檢擧され、堀越外一名の爭議團員は直ちに歸宅して終りを告げたが、若し警察の手配が一刻遲かつたならば、爭議の幕は此時下りたかも知れない。此事件は竹槍問題と同じく、そうした事によつて爭議團の暴力行爲を誘發するために仕かけられた一つのトリックであり、爭議團は間一髮にして危機を免れたわけである。

十一月五日のと二月六日のは、共に幹部に危害を加へんとして計畫されたる組織的な陰謀であつた、其十一月五日の計畫は、自警隊員中村八重吉を負傷せしめたる三浦義太郞が罰せらるに及んで暴露したのであるが、其計畫は、一隊は幹部の者と見たら背後に白ペンキを以て印をつけ、他の一隊は少し間隔を置いて伏し、其印のついた者が通りかゝつたら之を害すると云ふのであつた。たま〳〵中村八重吉が幹部と見違へられて重傷を負はされ三浦一味が全部檢擧されたので、幸にして幹部は無事なるを得たのであるが、彼三浦が、、、、とは安いものではないか。二月六日のも同樣に幹部の××計畫たつたことは、大非

清太自らの告白によつて明かであるが、二度迄も××をはかるとは、實に恐ろしい話しである。大井は目下殺人未遂で千葉地方裁判所の公判に附されてゐるので、此事件については多く言ふことを愼しまねばならぬが、大井も三浦等と同様幹部を、すことが出來ずして、櫻井勇太、戸塚信夫、山崎幸吉の三名に重傷を負はしめたゞけである。

十二月一日　六工場及十五工場前の二ケ所に於て、野口三郎、大月留吉の兩名がやはり暴力團の一味の爲に、野口は丸太で、大月は鐵棒と釘を打ちつけてある六尺棒を以て毆打され、野口は幸に比較的輕傷で免れたが、大月は左肘關節を碎かれ、顏面及背部等メチヤ〳〵に負傷させられて、全治するまで四週間も要した。

十二月十一日の行德爭議團の襲擊事件は茂木國太郎（重役の二男）が四十余名の暴力團員を、トラックを以て行德に送り、行德爭議團の少人數なるに乘じて、滅茶々々に破壞してしまつたのである。檢事が現場臨檢の際「こんなに壞はすなら火をつけて燒いてしまふ方が早かつたらう」と云つた一言に依つても其如何にヒドク打壞はされたかを想像されるだらう。然るに、此時現場にあつた、、警察署の、、、、は彼等暴力團の、、、、、、、、、して居り、また其後に於ても之を放任して顧みず、、、、等も、松岡駒吉氏が檢事總長を訪ねて其無責任を詰るまで活動をしなかつたのである。

此他にも、彼等の暴行は限りなくあるのであるが、大體以上にとゞめて、次は彼の奸佞なる畫策を暴露しよう。

四

武田と上杉が爭つてゐる時に、謙信が信玄の軍勢に米鹽を送つたと云ふことは、今も一の美談として傳へられてゐる。然るに、野田醬油は國際戰爭ならぬ今次の爭議に於て、人もあらうにかの、、、、で知られてゐる、、を使つて、爭議團の兵站部たる購買組合の差押を行ひ、以て爭議團を糧食攻めに遇はさんとしたのである。爭議團員と雖もかつては茂木一家の從順なる僕であり、野田醬油をして今日の大を成さしめたる忠勤なる從業員ではないか、百年の仇敵に巡り合せたかの如く、かくまでするとは殘酷なものである。謙信の爪の垢でも呑ましてやりたい位だ。

彼はまた、爭議團の集合所を狙つて、之を路頭に投げ出さんとした。卽ち、、、、の某幹部を籠絡して爭議團の集合所にあてられてゐる野田劇場を買收せしめ、卽時立退きを要求せしめたものである。けれども爭議團は、前の持主との契約——爭議解決まで借用すること——を主張して動かなかつたから、、、、は力を以て立退かせると稱して、東京方面より多數の應援と武器を得、威勢を示したが、爭議團も負けてはならぬと種々用意を整へたれば、兩者の衝突は避くべからざる勢となり險惡なる空氣は野田全町を包んで益々濃厚となり、種々の流言は行はれ町民は戰々恟々として日沒後は戸外にある者稀な狀態となり、さながら戒嚴令下にある思であつた。そうした極度の緊張の中に

數日を過ぎた十二月十三日未明野田警察署は縣官の總動員を行つて、疾風迅雷的に、、、の三ケ所の宿所を襲つて、ピストル、日本刀、大和杖、コン棒等盡く押收し幹部の總檢束をなしたので、ようやく衝突の危機を脫した。そして倉持直吉氏と爭議團幹部との間に妥協成り、從來通り野田劇場は爭議團の集合所として使用することになつて落着し、會社の集合所追ひ立て策は失敗に終つたわけである。

斯樣に、組合側は至つて穩健に正々堂々の陣を敷いてゐるに對して、彼は絕えず陰險なる奸惡なる方法のみを以て攻勢したのであつて、時に乞食まで使つて組合に對する惡宣傳の具に供したことすらある。其他小なるものに至つてはあまりに多過ぎるから、會社の暴力的方面の事は此位にして次に彼の頑迷さを見ることにしよう。

五

二月二日、爭議團は臨時總會を開いて、要求全部の撤回と、爭議解決に關する一切の權限を松岡駒吉氏に一任することを決定した。けだし、爭議の徒らに延引することは爭議團の本意にあらず、從つて之が解決の爲には一切の感情と行掛りを拋擲することを必要と信じ誠意を披瀝したものである。松岡氏は右の決定を齎らして會社に對し會見を申入れたが、ストライキ開始以來頑として會見を拒否してゐた會社も爭議團の態度があまりに公明なるため、之を拒絕することは社會的に不利なるを見て、心中矛盾を感じつゝ、松岡氏の會見申込を應諾したのであつた。會見は、二月六日、八日、十三日の三回に亘つて行はれたが、其はもと〳〵會社には解決する意志があつての會見でなくて、政策的たものであると云ふことは、松岡氏が、

一、勞働條件については、積極的に主張しない、但會社の發表に對しては、批判し、訂正し、要請することあるべし、

二、解雇については、少數の責任ある幹部の解雇を認む

との最も穩當なる意見を提出したに對し、彼は、

一、要求は認め難し、

二、爭議團は速かに解散すること、

三、解雇者の復職を認めず、

但十二月二十日附解雇者中百五十名は適當の時期に於て採用することあるべきこと及び當時處分宥恕者四十二名中會社に於て事情精査の上差支なしと認むる者は同時期までに復職を容認すること、

四、解雇者に對しては百圓づゝ給與す、

五、本爭議に關し提起の刑事問題告訴は直に取下げること、

と云ふ樣な案を提示してゐるのを見ても、其精神を視ひ知ることが出來る。二月十八日更に會見が行はれる筈であつたが、松岡氏は

「一昨日十三日御提示の解決貴案は余りに距離甚だしく從つて十八日には御伺ひすること困難と存じ候に付御諒承相成度候何れ總選擧後重ねて御意を得たく存じ居り候何貴方に於かせても更に御考慮置き下され度希望致し候」

との書を送つて會見延期し、現在に及んでゐる。會社がかくの如き高慢無禮な態度に出でたのは、爭議團の要求撤回を、爭議團が戰鬪力を失ひたるものと誤信した結果であることは云ふまでもないが、他人の足もとをねらふ其不誠意、自己の利害あるを知つて社會を思はず、隣人を顧みざる我利々々亡者には實にあきれたものである。

然るに、今尚彼は自己の非を悟らずして、先般の直訴事件當時の如きも、爭議團に於ては緊急總會を開いて一般團員に謹愼と自重を訓令し、團長以下幹部の一同もひたすら謹愼の意を表して一切の活動を中止してるのに比し、會社は、新聞記者の前にだけは「誠に恐懼の至りです萬事協調會の添田氏に依頼してありこの際會社側は是非共解決したいと念じて居ります」と語りながら、其背後に於ては「會社從業員諸子に御承知願ひたきこと」と云ふ、見出しの印刷物を秘密に分配して、裏切者や新工員を激勵してゐるのである。左にその印刷物の要點をあげよう。

「一省略……

二、世間ではあの事件が動機となつて、爭議が急に解決するやに云ふものもあり新聞にも出て居りますが……中略……會社の方針は從來と少しも變らないのですから、よく御承知下さい、

三、こういふ際ですから種々の流言浮説が出勝ですけれども、くれぐれもつまらぬ噂に迷はされぬ様願ひます。會社の方針乃至決心はその折々文書なり口頭なりで御知らせしますから、それによる外會社決定意思なるものなきことを御承知下さい、

四、省略……

三月廿三日　野田醬油株式會社」

一體何たる不謹愼な仕業であるか。口には恐懼に堪へぬと云ひながら、かゝることを爲しつゝあるとは。

世人の多くは、此爭議を勞資双方に頑強に其主張を固執してゐる爲に、解決せざるが如く見るのであるが、其實は、獨り會社の頑迷なる爲にかく延引してゐることが明白になつた。

六

かくの如く爭議は、二百日を超えた今日茂木一家の頑迷の故に、益々紛糾し深刻化して其止る處を知らないが、此大爭議に對して、縣當局政府は如何なる措置をなしたらうか。先づ私は、政友會と野田醬油の平常に於ける關係より述べよう。

野田醬油と政友會は古くから關係があつて各方面から密接に結ばれてゐる。並木が工場課長に收まつてゐるのは、有吉横濱市長からの蔓があり、齋藤逸喜から小川平吉にも通ずれば、岩崎清七からは更に鈴木喜三郎にも通ずると云ふ風に。更に一方に於ては、縣會に高梨忠八郎を出し衆議院には川島正次郎を送つて、中央又は地方政界との連絡を保持してゐるのである。かゝる關係にある野田醬油が、一朝事有る時に彼のもとに走つて援を乞ふのは理の當然であるが、然し、一當

利會社の爲に、、を利用することは許されるか何うか。巷間に傳へらるゝ噂に依れば、、、は今次の野田爭議に於て大枚なる選擧費用を得て、會社の組合破壞策を援助してゐるとの說盛んであるが、眞僞はしばらく別として、、、、、、、、、が國民からかゝる疑惑を以て迎へらるゝが如きは、其事自體既に重大なる問題と云はねばならぬ。以下私は福永知事と鈴木內相が、此爭議に對して取りたる態度を見よう。

福永知事は、昨十二月十五日野田町の小賣商人三百五十余名の代表者青木貝造外四名が小賣商人の窮狀を訴へて、爭議解決の促進について懇願せるに對し、「會社から此度の問題については調停をしない樣にしていたゞきたいとの申出があるから、調停に立つことは出來ない」と、斷り、また其頃開會中であつた縣會に於ける質問に對しても、夫と似たり寄つたりの答をしてゐるのであるが、會社から如何なる申出があり、組合から如何なる依賴があらうとも、縣政の障碍であり、國民の利福に反する問題であるならば、斷乎として之を處置すべき筈なるに、夫が出來ないのは一體如何なる故であるか。敢て私は福永知事が、、の猿轡を嵌められたのだとは云はぬが、そうした疑惑を深くする事は遺憾である。

三月廿九日の都下の各新聞に、鈴木內相の談として

「勞働爭議に徒らに官憲が仲に入ることはよくない、だから千葉の勞働爭議だつて治安が紊亂されるやうなら何時でも官憲を發して取締る樣に福永知事に命じてあるが、勞働爭議の調停には立たぬ云々……」

と云ふ記事がある。此の鈴木內相の勞働爭議に對する意見なるものは表面上當然の事なりと雖も前記福永知事の態度と對照して組合、、、を援助する爲の、卑怯なる勞働組合、、であり、不公正極まるものであると云ふことが出來る。

七

過去七ヶ月の間、かくも頑迷なる會社を敵とし、更に官憲の無理解なる壓迫と迫害に抗しつゝ、鬪ひ通して來た組合は、此後如何にして彼に對抗し、如何にして組合の堅壘を守らんとするか。

組合は一切の行掛りを拋擲して解決を希望せるにも拘らず、會社が尙其眞意を解せずして、あくまでも組合を滅亡せしめんとする野望を棄てず、四圍の人々また漫然として之を傍觀する以上組合の採るべき手段、進むべき道は自ら明白である。即ち、行く所まで行く——人事を竭して天命を待つのみである。

今や野田に於ける勞働爭議は、千葉縣の一郭に於ける勞資の爭ひにあらず、また一個の勞働條件に關する利害得失の問題に非らずして、夫は實に全國的な勞働者團結權の生命に關する重大問題であり、二大對立階級の代表的戰鬪である。されば、爭議團員は勿論其家族も共に、勞働組合と生死を共にするの覺悟を以て、政府の反動的政策と策應して組合を潰滅せんとする頑迷固陋なる茂木一家を徹底的に膺懲し、其迷夢を覺醒せしむると共に、更に一般の頑迷なる資本家階級の猛省を促すために、決死的鬪爭を以つて、逆襲肉迫すべきである。

戰は、勝敗を論ずべくあまりに深刻になつてゐる。此上はたゞ此七ヶ月の長きに亙る戰を、將來の勞働組合運動の上に意義あらしめんとする外望を有せないものである。(四月四日)

教育の根本問題

杉森孝次郎

一 教育の存在理由

個々人は、かれらが低齢期にあればあるほど、可能的習性としての高等者だ。

この位置は權力階級及び責任階級にとつて刺戟的だ。それらの階級は、低齢期個々人に對して必然、關心的態度を取る。

その階級が社會的でなく、利己的である限りに於て、その階級を技術家とし、低齢階級を素材とするかたちに於て、反社會的習性決定の過程が進出する。いはゆる教育は、現實には多少常にこれだ。

すくなくとも意識的、主觀的には、責任階級が、低齢者に對する愛、同情を一面に於て要件とし、社會、文化の可能的最善保存を他面に於て要件とするかたちに於て、その可能的習性に對する決定的努力に發展する現實が、どの社會、どの時代にも常に多少ある。規範的意義に於ての教育はこゝにそれの根城を持つ。

二 教育の階級的轉位

權力階級が生産的大衆の手に移りつゝある。その生産的大衆は目下無産だ。

かくして、權力決定の範疇から考察しても、教育の新努力と新方向が社會の生産的無産階級によつて標示される傾向が、最近に及んでいよく明確に、發達して來たことはすこしの不思議もなく理解される。いかなる貧兒にむかつても適用されうる、またいかなる貧者によつても採用されうるものであることが、新教育方法にとつての生命的一要件だが、その背景に生産的無産大衆の社會的、政治的成長、進出の不可抗的大勢力が主として存在することを鮮烈に看取しないことはできない。

例へばラスセル氏が、その最近の一著『教育論』に於て、現代の教育理論を、ロック及びルーソーのそれに對比させ、十九世紀以前に現はれた最も進歩的、改革的な教育理論であつた後者でさへもが、いかに不

十分に社會的であり、いかに具體的に、專一的に貴族階級向きのものであつたかを注意してゐるが如きは、事實の單純なる一記述だが、この事實を說明する社會的事情は生産的無産大衆の新たなる發生及び發達をもとより樞軸とする。機械以後の敎育は、行動的及び理論的に、生産的無産大衆に久しからずして先づ集中する歴史的必然がある。いまや、その過程は世界的に顯著だ。ラスセル氏がその著のなかでも敬讃してゐるモンテソーリ夫人及びマーガレット・マクミラン孃の場合の如きは、既成秩序の環境內に於ける新努力、新運動を例示するものであり、例へばニーヤリング氏の近著『ソーヴイエット露に於ける敎育』に見えるやうな場合はそれの無條件的一形式だ。

モンテソーリ夫人のローマに於ける新敎育方法的企業も、マクミラン孃のデツトフオード（ロンドン南東市外地）に於けるそれも、その社會の最下層兒に第一的關係を有することは、單なる技術的意義以上、時代的、社會的意義を特標する。多少の新技術はその背景を生命とするものにほかならない。

わが國に於て、昨今、いはゆる試驗地獄、入學難が、殊に小學校卒業者の問題として、公的論議の一主題とされつつある。それが一つの輕、愚、狂視を許さない現象であることはたしかだが、他面に於て、それと隣接した、そしてそれよりも實質に於て重大な現象が比較的に無視されてゐることは注意を値ひする。

實に、現在の小學校卒業者の大部分的、壓倒的多數は、貧ゆゑに、義務敎育以上の敎育を享ける希望を最初から絶つてゐる。それらの兒童が、文字通りに貧ゆゑにさうするのであつて、能力や興味ゆゑにさうするのではないことは特說するまでもない。

義務敎育を、勿論質に於て改善する必要も多大だが、男女ともに十八歳まで延長することは、すでに世界に多少の先蹤と先例もあることだが、わが國の問題としてまた、たしかに切實だ。國富全體が低いならば、現在の國際事情からしては當分あきらめる理由もあるが、國內的私富ゆゑに小學卒業生の少數は上の學校に志願することができ、私貧ゆゑに多數はそれもできないことは、國民的見地からして斷じて許容すべからざる現象だ。

勿論、その案の實現のためにも經費問題がある。われらは、しかし、その案の實現を經費問題ゆゑに斷念してゐるのではなく、その案の實現を本氣に問題として見たことがないから、經費問題を確實に意識するまでに到つてゐない。この場合、われらの現在の狀態は唯物史觀によつてよりも、唯心史觀によつて說明される性質のものだ

三　敎育の質の改善

その一　敎育の社會的實用化

現在の小學校そのものが、それでさへもが、恐らくはもつと社會的實用化されうる餘地がある。かりに義務敎育を十八歳までに延長したとする。その曉には、敎育の社會的實用化の餘地が、その高年段階に

進むほど增大することに疑ひはない。物質、社會の兩世界に對する認識、理解、及び評價が、またそれらを準備ともし、背景ともする技術が、敎育が不斷の目的とする獲得物だ。

生徒の各自及び全衆の物質的及び社會的直接環境を廣義教材に取り入れる餘地が、學校教育の各體系と各段階を通じて多少、總じては多大に、發見されえないか。

物的環境に對する、一身、一團の直接の興味に導かれての學術的認識の、學校體系に於て占むべき位置については、ここでは多言しない。現代が最も急要とするところのものは社會認識だからだ。

家庭の職業はなにか。勞働者か、小作人か、工場主か、地主か、商人か。家庭の收入はなにか。例へばかうした問題を選擇することによつても、それが道德的に自由な限りに於て、生徒を學術的社會認識へ成長させることができよう。そこに賃銀、小作料、配當、利益、勞働時間、物價等々が見つかる。それらの各の存在理由はなにか。修身、倫理の時間に學んだ多少の原則や綱要と照らし合はせて、その間に不兩立、背反はないか。あつたなら、その問題をどう解くか。家庭の貧富別があるか。勿論あるとして、その原因はなにか。所有權、相續權に對する生徒の興味、能力相當の分析も、敎師の保導的協力によつて、發達しうる。家賃、地代、預金、利子、保險、これらのものの構成要素と關係事情はなにか。交通機關を自由に利用しうる人々と、さうでない人々とがあるわけはなにか。錢と閑の現在の分布、分配の支配則はなにか。それの社會的、道德的價値はなにか。個人及び集團としての生徒の行動的直接關心の範圍内に、社會に對する完全なる學術的認識へ生徒を導きうる材料は無限に豐富だ。學制の組織に、その可能を利用する責任と自由を新たに取り入れることだけが殘されてゐる。

現在の組織に於ては、演繹があつて歸納がない。しかも、その演繹の權威即ち假定された原則が實は原則假なきものである場合が甚だ多い。政治、經濟、倫理の世界に於てこれは極めて顯著だ。

かかる時代にあつては、また社會にあつては、歸納の必要が殊に高い。新歸納を隨處に發達させ、蓄積し、それによつて新演繹いな眞演繹の權威たるべき新原則を發見、確立する時代的、社會的必要が大きい。この努力は小學校に於て開始されることを遲すぎると見るべき理由はあつても、早すぎると見るべき理由はない。社會に對する學術的認識は一つの習性でもあり、一つの熟練でもある。習性と熟練とが關する限りすくなくとも、それは各人の一生に於て早く始められるほど效果的だ。

社會認識ほど全社會的に達しない、また純知的興味に一任しない認識はない。個々人、個々團の私的利害、慣習がそこには餘りに專制、干渉の手を伸べる。幼年期から嚴格に、しかし純眞なる好知、愛正の、その時期に於て殊に旺盛な自發的興味を開發する方法によつて、社會に對する學術的認識、及びそれを條件とする良心的評價を生徒の各個

及び全國に養成することが、その弊を防止するために最も有効であるにちがひない。

問題は、この場合にも、勿論決して簡單ではない。現存の社會、文化を總般的に進歩、改善させる責任を有する教育、そこに自己の機能を確認するほかない教育が、現實には逆に、現存の政治的、經濟的、習慣道德的秩序及び權力の支配と決定を不定限的に甘受または屈受する多少の必然さへもがほとんど存するがゆゑに、この問題は、教育者同志の組織の發達と、教育當事者の反省の進歩と、輿論の新發達とを、それの解決のための最低限要件とする。

以上、社會に對する學術的認識と、それを條件とする良心的評價の學校體系に於ける早くからの養成に比較的に注意を集中したが、生產技術的諸熟練の養成は、それと表裏する一枚に屬する。社會は、實に廣義の生產及び消費以外のものではない。

恐らくは小學校からしてが多少、現制下に於てのそれは、さきにも言うた通り、もつと社會的實用化されうる不備、缺陷、餘地を持つ。職業と學問、職業と技術との間に、また職業と社會、社會と自己、人生そのものとの間に、眞實には許容することのできない隔絶が現代に於ては保護されて存在する。社會有用の生產的技術、行動、生活を賤視する封建時代的習性がいまなほ强い。その結果、社會の生產能率は制限され、卽ち技術は發達せず、學校その他に於けるいはゆる教育、それの內容としての學、藝、德、品性等は非社會的な、時代錯誤的な、虛僞と無生命とに於て畸形なものとなる。校内の事業と校外の社會との間に現代が示す如き溝渠を設けることは、その兩者の各の損失だ。

農業地、漁業地、各種工業地は、その直接の自身の社會内の小學校及びその上の學校にとつて、活きた實驗室ともいふべき効果を生じうる。學校と、それらの社會的、しかも生產的特殊發達との間に特殊の關係を發達させないことは大きな浪費だといはねばならん。そこに、學校からいうて、すくなくとも教材、研究問題を、その直接社會内の身邊的事實、經驗、關心に取り、觀察、知識、興味、技術、熟練、推理、改良、發見、新工夫等を發達させる、勿論その學校内に發達させる事情的便宜がある。教育はこれを現在以上に利用する必要を、大體からいうて、示す。

いはゆる補習學校、各種職業教育學校の、年齡に於て中學校にほぼ相當するそれらの、發達が望まれる。しかし、これは、その年齡の或人口に生計を與へることが主目的のもの、卽ち現在通りのものであつてはならん。それは教育でなく、生計の奴隸を少年に課するものであるからだ。

小學校から連續して十八歲位までは、深く、精しく專門化しない程度に於て、各の男女が生產技術及び社會技術を、それの實際と原則と目的とにわたつて修得する機會を與へられることが正しい。それは、實に、時代を條件とする個性の開發、訓練が必要とする最小限方法に屬する。

その下ならしが出來た上に始めて、各の男女は、最も適當な職業のための專門的教育に進むことが概則としては正しい。

現在の小學校教育は、もつと社會に、物質技術及びいはゆる社會技術の兩路によつて接近する必要がある。現在の補習學校及びいはゆる實業または實用諸學校は、もつと生計目的から解放され、したがつて社會技術に對する學的關心を保育される必要がある。現在の中學校及び高等女學校は、もつと實質的に生産技術及び制度學に、純乎たる教育的良心にもとづいて、直往、敢進する必要がある。

補習學校、各種中等實用學校を生計目的から解放するためには、教育費の全部的社會負擔、いまのところでは國家負擔が必要だ。教育費の文字通りの社會負擔、即ち國際的または人類社會的負擔を成功させる努力もまた勿論根本的一必要だ。この努力と共に國防の必要が客觀的に制限され、軍備費を教育費へ向上轉化することができる。

中學校または七年制高等學校は大學を目的とし、大學は特權、特典、虛榮を目的とする現狀は根本的に改廢されねばならん。最近の失業または就職難に於ける、勿論わが國のそれに於ける、最も特徴的な一現象は教育殊にも高等教育の病弊をそれが强烈に反映してゐることだ。反社會的、非社會的な「學業」を修了し、それで卒業後、社會に自分が機能することを期待するならば、それはその當人の不明、父兄の不明、それを期待させる教育組織の時代錯誤、その組織を保持する國民的社會、國家の愚を綜合的に意味する現象だといはねばならん。

一人が社會に機能することは、かれがその社會が必要とするなにものかを生産することだ。現在の大學の各部が、いかなる程度にその機能資格を學生に準備するやうにできてゐるかは多少の否定、懷疑によつて答へられるほかない一問だ。いはゆる法文科方面即ち廣義の社會科學教育の方面に於て、その遺憾を構成する材料が殊に多大だ。極端な一例として「哲學」を見よ。今日のいはゆる哲學、大學哲學が、どれほど現在の社會、生活、それらに屬する諸問題を根本智的に照らすか。概していへばそれは絕無に近い。哲學は文字通りに極端な一例にすぎない。政治學、經濟學、社會學、法理學等にも同樣の遺憾が多少感ぜられる。

一人が社會的に機能することは、かれが過去の社會に役立つことではない。過去の社會に役立つことは絕對的に不可能だ。一人が社會的に機能することはかれの現在の社會、及びその後の社會に役立つことだ。過去を認識し、評價することも、勿論現在及び將來の社會に役立つ以外のことではない。

現在の大學の或部分が示す教育は、しかるに、過去に役立つことの可能を迷信してゐるに等しい性質のものだ。

教育の社會的實用化と私が呼んだところのものは、いひかへるならば教育の社會的機能化だ。その機能化が、現制にあつては、生徒または學生が人として、殊に卒業後に、かれの社會に機能するやうな教育を與へられないといふ意味に於ても、多少未發達だ。

その二　現代教育に於ける眞理愛の缺乏

大學の存在理由は分析されて二つとなる。その一は職業教育に屬する。殘りの一は內容的間に屬する。前者は生產といふことばの或適用を蓋ひ、後者は創造といふことばの或適用を蓋ふ。前者は功利的であり、後者は自身目的的だ。文化、研究、享樂等は、それらのことばの或適用が關する限りすくなくとも、その後者に屬する。

根本に於て、その兩者間には、勿論、二元別はない。しかし、特徵に於ては多少明確にその兩者の識別が成り立つ。そして、いふところの後者の一代表型である眞理愛主義に不徹底な生活と社會は、いふところの前者の能率に於て必然損失する。第一流の發明は、直接經驗が關する限りすくなくとも、功利的であるよりも自身目的的だ。これを逆にいふならば、自身目的的な研究や眞理愛が發達してゐないならば、そこもしくはその社會からしては高級發明は期待されない。けれども人生の問題は、個人的規模の場合に於ても、社會的規模の場合に於ても、發明によつてのみ解決される。他は解決の名を値ひしない。眞理愛は、しかしながら、それ自身だけですでに、一つの深絕價だ。人間性に於ける知性の根柢は直接に全性能に連續する。

大學が示す功利教育と眞理教育とは、學校體系の各段階が同樣に多少示すところのものだ。その各段階を通じて眞理教育がいかに不自由、不成熟を、現在、明示しつつあることか。

理性といふことばには傳統的に多少の迷信が發達してゐる。しかし、われらは、そのことばからその迷信的要素を洗除し去つてそのことばを保存、使用することができる。さうするとき、教育の基礎的一要件は、理性の開發、訓練に疑ひもなくある。

いかなる唯物史觀論者も、いかなる經濟決定論者も、いかなる環境一元論者も、かれ自身の說の權威をかれ自身のさうした事情力に歸し去ることには反抗する立ち場にある。いかなるフロイド學者も、その性決定的學說自身の眞理的權威をかれの性衝動に歸し去る立ち場にはゐない。いかなるプラグマチストも、そのプラグマチズムが眞理だといふ根據をば單なる實用價以上に默證する（以上三例はラスセル氏の一著內の暗示に負ふ關係のもの）。生活または存在のそとに理性は絕對に不可能だが、理性は生活または存在の單なる或部分によつても同樣に絕對に不可能だ。理性は生活綜合の意識以外のものではない。

論爭、討議が有意義である根據は、その生活綜合の意識そのものとしての理性の存在に對する、すくなくとも無意識的な、確信を除いては不成立だ。一つの判斷が單なる獨斷、迷信から識別されうる、即ち學術的價値ある判斷だと認められうる基礎條件は、その判斷が十分なる理由の意識の責任を持つてゐることにある。そして、その理由の意識なるものは決して單に事情的なものではなく、隨がつてまた各人各別的なものでもなく、活きた一つの普遍的存在、すくなくとも可能的存在であるほかない。それは、實に、一つの絕對的標準物として各の理論家、理論鬪爭家、論明者、論爭者によつて、たとひ無意識的にな

から、使用、信認されてゐる。

教育は、實に、この理由性能の根本的保護と徹底的助成をそれの原則深的一要件とする。理由の意識の發動、開發をまつて人間關係の統整は始めて可能にされる。社會が十分に社會であり、社會となるための根本要件は、一人が十分に一人であり、一人となるための根本要件と同様に、理由の意識の發達であるほかない。それは、卽ち、理性の發達であるほかない。

現代を見よ。それは單なる機械の自然力によつて生活範圍の擴大と雜多とを與へられた。しかし、そこには理性のそれに相當する新發達なきがゆゑに、それは社會の十分なる新發達とはなつてゐない。國民がこれを示し、階級が一層近くこれを示す。

現代が最も急要とするところのものが、それの最も根本的な側面に於て、批判的社會意識、批判的社會意思の發達であることに疑ひをいだく餘地はないが、それは理性の經驗的、具體的發達にほかならず、そしてそれの機會が第一に教育の世界に存することは最も注意される必要がある。

最近、わが文部省は、高等學校入學試驗に關する一つの心得として、「推理」、「理解」、「判斷」等の德に新評價を示したやうであつた。しかし、それらの德に對する評價は、わが社會組織の政治的、經濟的根本現象に對する十分なる理解、判斷、推理にまで到達しないならば、それは極めて無意味に近い不徹底なものであり、また、その評價は、その政治的、經濟的根本現象に對する正しき理解、判斷、推理から始つてこそ、せめてもの教育的一新意圖としての意義を自作しうる。

日本に於て、いはゆる教育、倫理方面の當局や専門家までもが、いなむしろそれらを一根城としてさへ、社會組織の根本的現實に對する純眞なる認識、思索、判斷を棄絶してかかつてゐる牢乎たる慣習が存することは、すくなくとも日本の發達のためから考へて、最も憤慨されべき現象に屬する。慣習とのみいひ去つては恐らくは誤解されよう。それは卑屈と不聰明との二要素に分析されるものにほかならない。それは最悪型の慣習に屬する。

現代に自然科學はあるが社會科學はない。現代に物質技術の發達はあるが、社會技術のそれに比すべき發達はない。現代の一切の不安、不自然、それとしての緊張、不幸、軋轢、破壞、浪費は主としてそこから來る。教育の現代に於ける最大責任が、したがつて、社會科學の、卽ち學術的社會認識の促進にあることは不可爭だ。それには、現實の社會技術卽ち制度を、それの原則觀念にむかつて、ありのままに、且つ批判的に認識することが必要な一方法だ。その自由が現在の教育者にはない。制度の不自由がそれの條件だが、制度は人によつて改廢される。されば、人にその自由を欲する意識がないといふ結論が避けられない。

いまや、世界は、眞の信仰的、したがつてまた宗教的資格なき二三

の、または一二の運動、主張に、それ自身の、名に於て必ずしも宗教的でない、しかし實に於て宗教的な內的必要を應急的、同時に短慮また淺念的に強ひて滿たさしめつつある。教育のかかる時代に於ける責任は必然、その必要を明視して、それに眞の正しき滿足を與ふるにある。新社會の健全なる誕生はその滿足を母體とする。

愛知、愛眞、敬知、敬眞、これに無限に、絕對無條件的に邁往、徹底することが新教育の憲章に於ける第一則であらねばならん。學的であることが新人生觀の根本要件であるがゆゑに、新教育は最も綜合的に最も愛學的、殉學的であらねばならん。知が學だ。新教育は新宗教だ。理性がそれの本綱だ。社會、個人、生活はそれによつて維持されない限り十分に社會、個人、生活であることができない。社會に對する無制限的學的認識が、新教育が養成すべき最も必要な一習性だが、この目的を達成するためには、教育の機能的獨立が先づ獲得される必要がある。それには、前言した通り、教育者の組織が必要だが、しかし、その成員たるべき個々の教育者が、眞理愛の時代的絕對必要に自身先づ覺醒する必要がある。

新自由主義の立場より

鶴見祐輔

一　新自由主義黨の結成

第一次の普選は、殆んど何人も豫想しなかつたやうな不思議な政局を現出した。二大政黨が各々二百二十名前後の多數の議員を選出しながら、その孰れもが獨力で議會を支配することが出來ないといふ形勢がそれである。これは元より日本に特有なことでなくして、外國にも屢々其の例のあることであるが、たゞ日本の現狀を一層複雜ならしめてゐる事情は、その二大政黨の中間に介在する幾十個の議席が、一個の少數黨に屬せずして、四分五裂してゐるといふことである。しかもこの四分五裂せる少數黨並に個人議員相互が、その思想政策に於て相容れざる溝渠を有してゐることである。

それは過渡期にある現代日本を如實に縮圖したる如きものであつて單純にこれを一個の社會現象として客觀すれば、頗る興味ある事實であるけれども、實際國政を擔當する人々に取つては、困難至極の政狀であると言はなければならない。

この狀勢を批判解剖することは、人々の立場によつて異るところがあらふ。私の立場より之を言へば、この紛糾せる現狀は、日本の三大思想潮流の混淆の結果であると思ふ。それは保守思想と、急進思想と、漸進思想乃至自由主義思想との錯綜の結果である。

保守思想を最明白に代表するものとして今日の政友會があり、急進思想を代表するものとして、左翼無產黨がある。乍併、誰人が自由主義思想を代表せるやは、議論の分れるところであつて、民政黨は自ら自由主義黨を以つて任じて居るやうであるし、實業同志會も、革新黨もその意向のやうである。しかし私達から言へば、社會民衆黨のごときは多量に自由主義思想を代表してゐるのである。ゆえに日本の漸進的進歩黨たる人々は、果して誰人であるかは明白ではない。寧ろ日本の自由主義者は、右は民政黨より左は社會民衆黨の間に分散してゐるといふことが正當であらふ。

斯のごとく自由主義者の分裂してゐることが、今日の日本の政局を紛糾さしてゐるのであつて、若し自由主義者の大同團結が出來て、そ

の戰線が整理せられたならば、日本の政界の分野は明白となり、政局も亦安定するであらうと、私は考へてゐる。

その自由主義者の戰線の整理といふことは、民政黨では出來ないであらうと私は思ふ。また社會民衆黨内の人々は、自由主義者と呼ばれることすらも快しとせざる人々が多いであらう。しかし民衆黨の候補者に投じられたる投票のうちには、多分の自由主義的投票があつたことだけは、民衆黨の人々と雖承認するであらう。

そこで日本の自由主義投票を結成する仕事が、今日の日本の政界の一つの必要事である。その仕事を爲さんと欲して、我々新中立團は結成せられたのである。（恐らくは此一文の印刷せらるゝ頃には、會名が出來てゐるであらう）

投票數から言つて、九百八十六萬餘の總有效投票のうちから、政友會と民政黨の各々四百二十六萬、計八百五十二萬と、無産黨の四十七萬とを除けば、剩すところの八十六萬が中立と實同並に革新の得票であつた。この八十六萬が大體に於て自由主義者の得票である。

然るに今回の中立候補者は、新聞の手痛き攻擊と、各政黨の挾擊との爲めに、非常なる苦戰をして、各地に於て慘敗した。此等の人々の選擧後に異口同音に叫んだことは、我々は結束して一つの團體を作らなければならぬといふことであつた。

若し此等の人々の思想に、何等の共通點が無いならば、彼等は自ら結成せんと試みるよりも、既成政黨に入るか乃至は無産政黨に入るべきである。然るに事茲に出でずして、困難なる途を選んで新政黨を組織せんと決意したる所以は、彼等が思想上、二大政黨にも無産政黨にも入ることが出來ない爲めである。それは別言すれば、彼等は自由主義者としての自分の道を守つてゆきたいのである。

かゝる要望を代表して、私達の新中立團は成立したのである。故に我々の思想的根抵は自由主義にある。これに新の字を冠して、新自由主義といふのは、十九世紀の英國の自由黨の主義政策と區別せん爲めである。更に言へば、十九世紀の英國思想界を支配したベンサムの思想體系と區別せん爲めである。

二

抽象的觀念としての自由主義は、これを定義すること頗る困難である。ホッブハウス教授はこれを定義して、自由主義とは個人人格の有する自己指導力を基礎としてのみ社會は安全に建設せらるべく、且つや、此基礎に於てのみ眞實の公共團體あり、又、かくの如くにして建設せらるゝに於ては社會の基礎は深遠且つ廣汎にして殆んど際限あるなし。故に自由は、個人の權利にあらずして社會生存の必要事なり」と言つてゐる。

しかし、ジョン・モーレーのやうな賢儒は、かゝる六ケしき定義を下さないで、自由主義とは心の框（ゼ・フレーム・オヴ・マインド）なり、と言ふサンドの言葉を裏書してゐる。要するに自由主義とは、社

會主義のやうな明白な體系を持つた思想の謂でなくして、自由なる心境を有する人々の社會と人生に對する態度の謂である。この意味に於て、自由主義自身はその個人々々によつて、千差萬別の特異性を有する。故に故アスクヰス伯の言つたやうに、自由主義者は分裂するのがその一特徴である。各國の政治史を見ても自由黨は全盛に達すると必らず分裂する。

然らば自由主義の觀念を説明し、乃至は自由主義者を結成することは、それ自身に於て矛盾であるのかといふと、それは必しも左様でない。自由主義思想は、抽象的觀念として求めるよりも、これを歴史的事實のうちに求められる。それは何故であるかといふと、自由主義者は抽象的觀念を中心として結成せずして、ある社會現象又は政治問題を中心として團結したからである。例へば選擧權の擴張とか、言論の自由とか世界平和の爲めになる軍備縮少とか、一部少數者の專權に對する民衆の解放とかいふやうな問題を中心として結合し、且つその結合を永續さして來てゐる。それは明白に定義することは出來ずとも、思想感情の上に於て自ら一致點があるからである。

此の意味に於て、現在の日本は自由主義を要求する政治的時期に立つてゐる。今日の自由主義の內容は、ベンサムの言つたやうな功利的倫理觀に基く個人中心の思想ではない。從て自由放任の政治思想では勿論ない。ジョン・スチュアート・ミルの社會思想から、トーマス・ヒル・グリーンの理想主義的人格論を取り入れて、自由主義の觀念は非常に變化してゐる。それは適當なる國家の統制を一般個人の活動に對して認める點に於て、寧ろ資本家專制を容認する保守主義よりも團體主義の觀念を多量に含有してゐる。

しかし自由主義者は勿論、個人々格の完成を主張する點に於て特有なる主義を持つてゐる。そのことが今日の日本に痛切に要求せられることである。

強き個人を作らずして、強固なる社會の出來やうわけがない。正しき個人の集積でなくして、正しき國家の出來やうわけがない。その意味に於て、自由主義の鍛錬はいづれの國民も必ず通過しなければならぬところであつて、日本は開國以來外敵に對し國家を防衛する必要上中央集權の強力政府を求むるに急であつたゝめに個人自由の思想の陶冶を閑却してゐる。今や國際的に安全になつた日本が、新しき政治生活を初める爲めには、どうしても自由主義の訓練を必要とするのだ。

三　言論自由の要求

ゆゑに自由主義者は、第一に言論の自由を要求する。言論の自由は人格完成の必須要件である。自分の考へることを隱慝する習慣程、人間を弱くし且つ虚僞にするものはない。ことに今日只今の日本に於て我々は言論自由の如何に高貴なる人間の權利なるやを痛感する。この言論自由獲得の爲めに治警法、新聞紙法出版法等の改正運動には、保守主義者以外は全部同一戰線に立ち得ることゝ思ふ。

四　産業上の自由主義

英國のケーンス教授は、最近の英國自由主義協會の講演に於て喝破して、今日及明日の自由主義の問題は從來と一變した。それは産業的或は經濟的である、と言つた。それは何の奇もないことのやうであるが、過去に於て英國の自由主義者が、宗教上の自由、學問上の自由、政治上の自由の爲めに戰つた歷史を振り返つて見れば、頗る意味の深い言葉である。

今日の日本に於ても、自由主義者の眼目とすべき目標は經濟問題であると思ふ。

歐洲大戰中急速に發達したる日本の産業の結果として、日本の社會が經濟上の大變遷途上にあることは、言ふまでもないことであつて、今日の日本の各般の問題が悉く經濟問題に究局するの觀あるは、何人も認むるところである。從て普選第一次の議會が國民に對して負ふ義務はかゝる經濟問題の處理である。

此點に於て、保守主義者と急進主義者と自由主義者との立場が明白に分れてゐる。保守主義者は大資本家と結托せる關係上これを資本黨とも稱することが出來る。彼等の要求は世界を通じて同一である。それは生産を眼目とするが故に、能率本位である。その産業の能率を擧げんが爲めに他の一切が犧牲とせられる。これに對して各國の勞働黨は分配の問題にその勢力を集中する。即ち正義の要求である。それが爲めには、産業自身の能率が阻害せられても已むを得ずとする。英國の石炭業者の罷業の如きは適例である。その爲めに英國の石炭輸出業の衰亡も亦已むを得ずとする。斯のごとき能率と正義との要求が各國の資本家と勞働者との間に於て、正面より衝突しつゝあるときに、自由主義者は別個の立場より、一國産業の能率を阻害することなくして如何にして一般勞働者の正義の要求を貫徹すべきやを研究する。

今日の日本は、急激なる人口增加の爲めに、從來の産業のみを以つてしては、全國民を養ふことを得ざるに到りつゝある。日本の工業發展は焦眉の急である。その工業發展の爲めには、工業的國際競爭に堪えるだけの能率を擧げなければならない。それが産業合理化運動として現はれてゐる。しかるに、能率を擧ぐることに專念すれば、勞働條件を改善して、勞働者の正義の要求を滿足さすことが出來ない。さなきだに世界の工業より立ち後れんとしつゝある今日の日本の工業が、勞働者の正義の要求の爲めに全然國際競爭に堪ゆるだけの能率を失つてしまふといふことであつたら、人口增加の今日の大勢として、國民の苦痛は更に一層深刻化するものと見なければならない。こゝに日本國民の直面せる一大困難がある。例せばある米國の資本家は私に語つて、今日の日本の工業會社の一特徴は、多額の解雇手當退職手當を支拂ふことである。かゝる義務を有する爲め、日本の資本家は不景氣となつても俄に勞働者及使用人を解雇することを得ずして、不經濟なる操業を繼續してゐる。從てかゝるハンデイキヤツプを有する日本の工

業は、歐米の工業と對等の競爭をすることは六ケしい。日本も歐米流に退職手當などやめて、いらない使用人はづばく首を馘つたらよろしい。工業の競爭に涙は無い。日本が激烈なる國際競爭に對抗するの法はこの外にはない、と語つた。これは明白に能率のみを本旨とする資本家の立場である。

條件、此點に關して自由主義者は、能率の要求と正義の要求とを調和する獨自の立場を主張しなければならない。例せば今日の日本の産業は、米國の如く、次第に二大資本系統の組織中に織り込まれんとしつゝある。而してその趨勢は近年に至つて益々露骨に政治上に顯はれて來て、經濟的二大資本勢力が政治的二大政黨と相援引して存在せんとするかの如き觀を呈せんとしてゐる。ことに昨年の經濟恐慌以來その形勢が顯著である。これに對し外國に於ては常に、大勞働組合が結成せられて、强硬に對抗してゐる。日本に於ても次第に同樣なる形勢が出現するであらう。

その爲めに、此の大資本系統に屬せず、大勞働組合にも屬せざる多數國民の地位は次第に安固を缺かんとしつゝある。その一般大衆を此等二大勢力より防衞することが自由主義者の仕事である。

今日の資本的企業は、その多數株主の意思によつて動かされてゐるのではない。その大會社を支配する爲めには五割一分の株を有することすら必要でない。米國のモルガン系其の他が大製造工業會社の支配權を掌握する方法を見ると、大てい二割内外の株券を買取るだけのやうである。して見れば一國内の二割の資本を所有する人々が八割の資本を有する人々に指揮號令してゐるのである。斯のごとき少數者の專權に對し一般大衆を擁護することが自由主義者の事業である。

一切の生産資本を國有國營とすべしとの主張に對しては、自由主義者は、その國有國營の結果、極端なる官僚政治の出現せんことを嫌忌する。かゝる一掃的國有國營よりも、國家の完全なる統制の下にあるトラストの如きが、却て個人の創意を保有しつゝ、一般民衆の福祉を增進するものなりとして主張する。國有國營主義と私有私營主義との調和が、自由主義者の産業政策の眼目である。

たゞ如何にして近年激增せる大資本に對し、完全なる國家の統制を加へて、この大資本の社會化を行ふべきやといふことが重要なる點であつて、これは賢明なる一般大衆の後援と監督との下に初めて可能である。その爲めにする一般民衆の教育と、大資本事業に關する知識の公開とが必須の條件である。

工業資本が次第に少數者の手に集中し、工業勞働者が次第に全國的大同團結を作つて資本に對抗するに對し、この大工業資本家と大勞働組合以外にある一般國民大衆が、何等の政治的組織を有せずして孤城落日の境遇に陷ることが悲慘なる全世界の現象である。それが爲めに此等の無組織なる一般國民大衆を結成し、工業資本家の專制と、工業勞働者の專制とより之を防衞せんとする試みが、名目を異にするけれど殆んど一樣に各國に於て行はれてゐる。或國に於ては勞働黨といふ

名に於て行はれ、或國に於ては自由黨といふ名に於て、其の他千種萬態の名に於て行はれてゐる。しかし、其の共通の心持は自由主義的であつて、私をして言はしむれば此等の人々は廣き意味の自由主義者である。

五　生活費の低下

工業の統制といふ問題に直ちに關連して起つて來ることは、生産費の低下、乃至は生活費の低下の問題である。日本の今日の法外なる生活費を引下げることは、焦眉の急務であるが、これは犠牲なしには行はれ得ない。それは一般國費の節約と關税の整理に俟たなければならない。

乍併國費の節約を以て漫然たる行政整理と結論することは出來ない。今日の政費のうちより、自由主義的立場から必要なるものと必要ならざるものとを鑑別して、その不要なるものを節減するのであつて漫然たる天引策によつて、幾萬の失業者を出す如きは、社會政策の實施と矛盾する。政費の節減に依つて政府事業より離れたる人々は、新産業政策の樹立によつて、新しき活動部門を見出し得るやうな用意が政治家になければならない。

また政費節減の問題は、必然的に我々の外交政策より出發する。我々が帝國主義的侵略政策を眼目とするか、國際協調による平和政策を基調とするかによつて、政費の大部分たる軍費の問題が決定せられる。自由主義者が國際協調論者たることは言ふまでもないことである。

生産費の低下の結果として、初めて健全なる工業の勃興が所期せられる。而して、工業の勃興によつて初めて増加せる人口に對して、職業を與へることが出來る。日本の今日の憂は職業の不足である。有爲の人間が働くべき職なく、職あるも十二分の活動を爲し得ざる現狀より脱出することが、現前の急務である。

關税の整理と言つたのは、言ふまでもなく無暴なる保護貿易政策に對する修正の意味である。歐洲戰爭以後世界の苦悶は極端にして無用なる關税墻壁の建造であつた。米露の如き大國ならいざ知らず、他の小國中國に至つては、永久に保護政策を以つてしては立てない。日本の如き島國が不自然なる保護貿易政策を以つて立ち得ざるは火を睹るよりも明かである。國際協調の立場よりするも、生活費低下の爲めにも、關税の整理改正は今後の日本の一大緊急事である。

六　農業政策

工業振興の問題は當然農業如何の問題を提示する。

私は日本の工業勃興が、英國十九世紀中葉の誤りを繰り返へしてはならぬと主張する。それは英國が工業立國策の採用と共に、農業を捨てる結果と爲つたのを指示するのである。私は日本は農業を失つてはならないと主張する。それは農業立國といふ意味から言ふのではない。國家の大局よりして我々は、農業を失ふことなくして工業を發達

せしめ得ると主張するのである。その策は工業的地方分權である。大工業が都會や海港地に集中するのは當然であるが、中小工業まで都會に集中する必要はない。中小工業はこれを農村に分布することが健全なる日本を建設する所以である。農業と工業とが農村に併立することが理想である。その爲めには、交通機關の完成、動力の分布、全國の工業的規格統一が條件である。

農業は工業に比して引き合はぬ仕事である。而して、國家に對する重要性に至つては軒輊がない。從て農業は國家に於てこれを保護する必要がある。工業によつて得たる所得を削いて、日本の農業を保護することが、永遠に日本國家の利益である。

七　社會政策

社會政策の實施については、自由主義者は殆んど一致したる主張を持つ。勞働條件の改善については、自由主義者は無産黨の人々と同じ戰線に立つであらう。又社會保險、救貧制度、教育上の機會均等主義住宅政策等についても、今日の日本は新しい施設を必要とする。

此點に關しては十九世紀の自由主義者が、個人自由の思想に囚はれて、却て極端なる弱肉強食の社會を現出したるとは根本的の相違がある。二十世紀の新自由主義は、正當なる國家の統制によつてのみ、初めて眞實なる個人の自由があることを主張する。故に國權の發動による社會政策の實施は、自由主義精神と背反するものではない。

八　外交政策

新自由主義の立場と政策とを論じ來りて、茲に吾人は當然なる一點に到着した。それは新自由主義者の政治的重要點がその外交政策であるといふことである。

日本の工業の發展のためにも、日本の關稅の整理のためにも、また日本の政費の節減のためにも、日本の工業資本の統制のためにも、日本と外國との關係が殆んど先決問題として存在する。工業振興のための原料の買入、製品賣出の市場の獲得、工業資本の輸入より、關稅の相手國との關係、軍備縮少の基礎としての國際平和、大工業發展の必然的結果たるトラストやカルテルの國際的地位、食糧輸入の相手國、移民送出の相手國等殆んど日本の國策の根本が、日本對世界の關係に押し詰められてゐる。

日本の國民生活の打開の爲めにも、人類一般の福祉增進の一單位としての日本としても、我々が外交政策の根本を立て直さなければならぬ必要は、日ましに急を告げつゝある。

此の外交政策の根本は、左右兩極端の思想は明白である。最左翼は世界革命を理想とするがゆゑに、所謂資本主義國の國家單位の外交を否定するであらうし、最右翼は絕對自國本位で、その爲めには如何なる手段方法をも顧る必要はないのであるから究局は武力的侵略主義に外ならぬ。然るに此兩者の中間にある自由主義の外交は、人類全般の

福祉と一國民の福祉との一致を信條として出發するがゆゑに、勢ひ世界平和を目標とする國際協調主義に歸着する。

今この原則によつて日本の外交政策を點檢するならば我々は今日の外交に向て修正を要求しなければならぬ幾多の重要點を發見する。殊に日本外交の重點たる對支政策に於て然るを見る。

道德の原則を國內生活に於て行はるゝごとく、國際生活に實行せんと欲することが、自由主義者の熾烈なる要求である。而して將來の人類文化の興亡はこの國際道德の新原則の實行せらるゝや否やによつて決すると信ずる者に取つては、外交政策の基調は目前的なる一國の物質的利害のみを以つて決定することは出來ない。ことに各國の民衆が外交問題に對して深厚なる興味を感ずるに至つた今日としては、國民全體の納得出來るやうな原則の上に立つた外交政策でなくしては強力なる民衆的後援を得難い。此意味に於て日本の外交は、日本國民一般の利益に合致し、且つ日本國民の道德的良心の滿足する如き方向を取らなければならない。その如何なるものなるかは、說明を要せずして明白だ。

九　一つの困難

自由主義といふ文字を用ゐて政治運動を起すことは、日本に於ては特有なる困難がある。それは國家主義とか社會主義とかいふ文字は、數十年來用ゐられてゐる爲めに、其の贊否に拘らず內容が明白である。然るに自由主義なる文字は、眞實の意味に於て日本に普及せられてゐない。故に文獻の基礎を有せざる自由主義運動は、今後幾年かの啓蒙時代を通過しなければならない。その心持に於て日本人は自由主義的氣分を充分に持つてゐる。たゞ自由とか自由主義とかいふ文字が用ゐられてゐないのだ。從て新自由主義の政治運動は、非常なるハンディキャップを持つてゐる。

今後若き日本のうちから偉大なる天才が現はれて、自由主義といふものはこれだ、と明白に表現してくれるまでは、この運動は可成り障害が多いことを私は認める。乍併、實際上の必要としては、今日の社會が現實にこれを要求してゐるのであるから、抽象的觀念としての科學的表現を俟たずとも、その實際運動自身は伸展してゆくものと私は信ずる。(三、四、一〇)

大衆講座

第三インタナショナルの話

田中九一

一

四月十日の都下各新聞の夕刊は一齊に、『日本共產黨員千餘名の大檢擧』を報導して、花見氣分でウットリしてゐた全國民の神經を緊張せしめた。二月の總選擧頃から新聞に、[illegible]農黨に關する『某重大事件』の五字のみの掲載を許して、世人をして闇夜に目隠しをして引きずり廻されるやうな不安を抱かしめてゐた政府が、わざ〳〵臨時議會閉際にその『眞相』を發表せしめた眞意はいろ〳〵に取沙汰せられてゐるが、然し今それを論議しようとするのではない。こゝに問題にしたいのは、『司法省發表の事件の概要』中にある次の文句である、『……日本共產黨は革命的プロレタリアートの世界黨第三インターナショナル日本支部として、我帝國を世界革命のくわ中に誘致し云々……』（東京朝日新聞四月十日夕刊。）

大正十二年の共產黨事件の時も矢張、第三インタナショナル日本支部云々といふ事が、その事件の危險性を證明する殆ど唯一の理由であつた事は、未だ我々の記憶に新なる所である。

では、この名を呼ぶだけで妖怪のようにこわがられてゐる『第三インタナショナル』とは一體何物か？　我々は之を妖怪視しておびえる前にその正體をつかまねばならぬ。そうしてそれが果して枯尾花であるか、惡魔であるか、或は又親切な友人であるかを見究めた上で、之に對する態度を決定しなければならぬ。私が不遜にもこの講座を講く理由は、微力ながら出來得る限りこの正體を明るみへ出そうとするにある。この目的を最もよく果し得るために、私は一切の個人的意見から離れて、ありのまゝの正體を示す事に努めるであらう。

二

第三（共産）インタナショナルの則る共産主義が妖怪視せられたのは今始つた事ではない。今から丁度八十年前、マルクスとエンゲルスとに依つて發表せられたるあの有名なる『共産黨宣言』も冒頭に『ヨーロッパに妖怪が徘徊する――共産主義の妖怪が。』と言つて、當時の支配階級が如何に共産主義におびえたかを示してゐる。而して我國ではこの共産黨宣言そのものが一種の妖怪待遇をうけて、その正體を見究める事すら出來ないが只その最後が、『萬國のプロレタリア團結せよ！』の語で結ばれてゐる事だけは、誰しも知る通りである。

『萬國のプロレタリア團結せよ！』

之こそ實に、第三インタナショナルのみならず、凡てのインタナショナルの根本精神であるのだ。では、マルクスは如何なる意味で萬國のプロレタリアにこの標語を投げ與へたか。全世界の人類の協力を說いた者はマルクスの前に幾人もあつた。釋迦は三千年も前に人間のみならず虫けらに至るまでも慈悲を垂れる事を教へた。然るに戰國時代の僧は自から武器を取つて人をなぎ倒した。何故に？ そうする方が彼等に得であつたから。又キリストは二千年も前に、人類に對して等しく神の子として愛し合ふ事を教へた。然るに世界大戰が勃發するや、全世界のヤソ教僧侶は、それぐ自國の勝利、敵國の惨敗を、唯一の神に祈つた。何故に？ そうする方が彼等に得であつたから。どれ程高遠な教養も、利害の前には一文の値打もない。然して諸國のプロレタリアを團結せしむる利害關係は何か？ それは彼等が一様に資本主義的被搾取者である、といふ地位である。資本主義は元來國際的なものである。資本は利潤を求めて何處へでも行く。資本主義が發達すればする程諸國の資本は益々國際的にのびて、網の目のように全世界を被ふ。その結果その下に搾取せらるゝ勞働者の利害關係は、資本主義の發達と共に益々國際的に一致するに至る。プロレタリアよ、早く自已の地位を自覺して一致團結せよ！――とこうマルクスは教へるのである。

この說が正しいか否かは實に無産階級の國際運動の是非を決する重點であるが、然し私は最初の約束通り、その判斷は讀者に委して、直に第三インタナショナルに移る。

三

第三インタナショナルと言ふのは、世界で第三番目に强いインタナショナルといふ意味ではない。之は多くのインタナショナルの中、古いものから順次に第一、第二とつけたにすぎぬ。第一インタナショナルは資本主義の勃興期（一八六四――一八七六）の産物にして、少数先覺者就中マルクスが、發生しつゝあるプロレタリアートに對して、將來の進路を示す役目を果した。第二インタナショナル（一八八九年より世界大戰までをその前期とする）は資本主義の隆盛期に於て、諸

國プロレタリアートの組織を整へる役割を果した。この間に諸國プロレタリアートの組織は偉大なる發達をなし、大戰勃發當時の第二インタナショナルは、二十七ヶ國の約千二百萬の會員を持つ大組織となつてゐた。然し正にこの資本主義の隆興期の産物たる事から、第二インタナショナルの中には救ふべからざる腫瘍、即ち日和見主義が起つたのである。と第三インタナショナルの指導者達は言ふ。

第三インタナショナルは、この日和見主義に對する批判から生れた。故に第三インタナショナルの性質を知るためには、先づ彼等の日和見主義評を聞かなければならぬ。『日和見主義とは、少數勞働者の一時的利益のために、大衆の根本的利益を犠牲にすること、換言すれば勞働者の一部分がプロレタリアートの大衆に對抗して、ブルジョアジーと結托することを意味する』と彼等の或者は言ふ。では、一部の勞働者はどうしてこんな態度をとるか？　それは資本家階級が、之等の一部の者（勞働貴族）に對して特に賃銀其他の有利な條件を與へてその闘爭心を和げるからである。而して資本主義が隆興期にあればある程、資本家が勞働貴族を養ひ得る餘裕は益々潤澤である。從つて大戰前の第二インタナショナルの内部に、日和見主義が勢力を占めたのは怪むに足らぬ。但し勞働大衆はこういふ特別待遇を受けないから、勞働貴族のように日和見主義に陥つてはゐないが、然し勞働者の政黨も組合も皆日和見主義者に獨占せられてゐる結果、勞働大衆の要求を實現する事が出來ぬ。では、勞働大衆は如何にしてその要求を實行し得るか。

日和見主義者の説得に依つてか？　否、日和見主義者の立場には、前述のような固い經濟的根據を持つてゐる。從つて單なる説得は何の役にも立たぬ。大衆は只日和見主義者との分離に依つてのみ、その害毒を免れ得るにすぎぬ、──之が彼等が第三インタナショナルをつくつた理論的根據である。

この理論に基いて舊第二インタナショナル内の左翼（ロシアのボルシエヴイキ、ドイツ社會黨の左翼分子等）は早くから（一九〇七年前後から）第二インタナショナル内に左翼の一分派を結成する事に努めたが、また賛成者が少くて實現し得なかつた。いよ〳〵一九一四年世界大戰勃發の時、第二インタナショナルの指導者達が、──平時には口先で萬國勞働者の團結を約束しながら──それ〴〵自國資本家の主戰政策に加擔するに至るや、レーニン等は今こそ實例を以て日和見主義者の本性をあばく時だと考へて大いにその宣傳に努めた。そうして戰時中ずつと左翼分子のみのインタナショナルの組織に骨折つたが、しかしこの時もまた多くの人の賛成を得ずして實現出來なかつた。ようやく一九一九年三月に至つて、ロシア革命の基礎も略々固り、又ヨーロッパの勞働運動内にも、大戰とロシア革命との影響をうけて、著しく左翼が擡頭したので、始めて左翼のみのインタナショナルを組織し得た。之が即ち第三（共產）インタナショナル（コミンターン）である。

第三インタナショナルはこの創立大會に於て、その根本的立場を表明した。前述の如く彼等にブルジョアジーのみならず、日和見主義者

をも敵視する。従つてこの創立大會に、第二インタナショナル（一九一九年二月に再建せられた）を、『黄色の、體裁破りのインタナショナルにして、ブルジョアの道具にすぎざるもの』と認め、之と決定的に闘ふ事を力説した。而して彼等は第二インタナショナルの日和見主義的性質を最もよく示すものは、第二インタナショナルが無産者解放の手段としてデモクラシーを主張する點である、と指摘し、無産者解放の唯一の有効なる手段は、（前述の司法省發表の事件の概要中にも、『…無産階級の獨裁政治を樹立し云々…』とある如く、）無産者の獨裁である、と斷言してゐる。實に之こそ第三インタナショナルの根本的立場である。獨裁か、デモクラシーかは、ロシア革命勃發以來第三、第二兩インタナショナルの間に常に爭はれて來た所であつて、議論は殆どしつくされた觀がある。從つて何れが正しいかは、只實踐を以て證明するの外はないやうに思はれる。この點に就て、デモクラシーの模範的國家といはれるイギリスと、無産者、、を布いてゐるサヴエート聯邦とを比較する事は興味ある事と思ふが、この短い講座の範圍外にわたるから、只讀者諸君の研究に委せる事とする。

この根本的立場から、第三インタナショナルの組織が規定せられる。即ちその構成分子は、無産者、、のための運動に、、、、ような選り拔きの精鋭でなければならぬし（精鋭主義）、且つ之等の、、は指導者の指揮に從つて敏活なる行動をとり得るように組織せられねばならぬ（集權的組織）と彼等は主張する。この組織の根本方針は、第二回大會（一九二〇年七月—八月）に於て[illegible]二十一ヶ條に依つて定められてゐる所である。

第二回大會は又、規約をつくつて第三インタナショナルの機關とその權限を定めた。それに依れば、最高機關は毎年一回定期的に開かるべき世界大會であり、この大會の下に執行委員會があつて、大會の決議を執行し、又大會が開かれてゐない期間中、第三インタナショナルの全仕事を指導する任に當る。この規約は第五回大會（一九二四年六月—七月）に改正せられ、この新規約は新に擴大執行委員會を設けた。擴大執行委員會は、少くとも年二回開かれ、世界大會に代る事が出來る。事實、第五回大會以後、世界大會は一度も開かれず、毎年費用と時間との節約せられる擴大執行委員會で濟ましてゐたが、今年は五年振りで第六回大會が開かれる筈である。

以上、甚だ簡單ながら第三インタナショナルの立場と、その構成とを述べたから、次には創立以後今日に至るまでの、彼等の活動に就て略述する。

四

第三インタナショナルは創立當時（一九一九年）には、彼等の、、が非常に近いものと考へてゐた事は、當時の執行委員長ジノヴイエフの次の言葉にもよく現はれてゐる。「今やドイツに於ける共産主義の、、は全く避くべからざるものとなつてゐる。本年當りに於てはまた、個別

的敗北はあるであらう。黒色は多分まだ、こゝかしこで一時赤色に打勝つであらう。それにも拘らず、最後の、、、、のものだ。而もそれが、最近數ヶ月、或は恐らく數週間の中に、運動は目まぐるしく進展するが故に、我々はこう確言し得る、一年後には我々は既にヨーロッパに××××のための闘爭があつたことを忘れるであらう、何となれば一年後には全ヨーロッパが××××となるであらうから。尙ほ××××のための闘爭は既にアメリカに更に又恐らくはアジア及其他の地方にも突進するであらう。』

實際當時のヨーロッパは、ジノヴイエフのこの豫想が必ずしも妄想である、とは言ひ得ぬ狀態にあつた。就中ドイツは一九一八年十一月の革命以後極度の不安動搖の中にあつて、その行先は何人も斷言し得ぬ狀態にあつた。從つて第三インタナショナルの世界政策は、先づ第一にドイツに攻撃の手を集中した。所が其後のドイツは彼等の豫期に反して、一種の安定を見るに至り、其他のヨーロッパ諸國も亦容易に第三インタナショナルの手に陷りそうもない形勢を見せた。

この失敗の原因はどこにあるか。第三回大會（一九二一年六月――七月）は之を十分に研究した結果、彼等自身の力の不足が、この失敗の最大原因の一である、と正直に認めた。從つて彼等の最大の急務はこの力の充實を計る事、換言すれば、廣く勞農大衆の間に根を張る事である、とした。『大衆へ！』之が第三回大會の掲げたる標語である。第三インタナショナルが精鋭主義を取つた事は前述した通りである。では、この精鋭主義と『大衆へ！』の標語とは矛盾しないか。矛盾せず、と彼等は言ふ。×××員は依然精鋭分子のみより成らねばならぬ。之は×××の根本的立場をすてない限り不變であると彼等はいふ。然るに精鋭は大衆から遊離して何事も出來ぬから、大衆の種々の組織（その最も普通なものは勞働組合、又事情に依つては他の政黨、其他種々の組織）に、、して、この大衆組織を×××の支配下に置かねばならぬ、といふのが彼等の所謂大衆政策である。

この質（精鋭）と量（大衆）との兩性質を彼等は如何にして兼ね備へんとするか？　曰く、共同戰線戰術に依つて。實にこの共同戰線戰術こそは、大衆獲得のための『唯一の、しき道』である、と彼は言ふ。

實際、最近數年間の第三インタナショナルの活動の大部はこの共同戰線に向けられた。然らばこれは如何なる戰術か。共產インタナショナルは一九二一年十二月の執行委員會の宣言に依つて、この戰術を世界に明かにし、更に其後第四・第五兩大會の決議を以て、一層之を明確に規定した。今之等のものに基いて、共同戰線戰術の要點を列擧すれば、

一、共同戰線戰術の目的は、大衆、就中右翼指導者の勢力下にある大衆を、×××の勢力下に持ち來すにある。

二、その方法は、右翼の諸組織と共同の運動をなし、その運動の最中に右翼指導者の裏切的行爲をあばき、以て大衆をして右翼幹部に背かしめる。

三、右翼幹部にかゝる共同鬪爭に應せない事が多いであらうから、之に對しては右翼の大衆自身の間に、共同鬪爭の氣分をつくり、以て右翼幹部が之に從はざるを得ないようにする。

第三インタナショナルに屬する凡ての黨員が、各國に於てこの共同戰線を實行しようとした事は、誰しも知る所であらう。然しこの戰術は今までの所十分なる成功を收めてゐないように見える。

最後に第三インタナショナルの對資本主義國政策の最近の趨勢を一言すれば、彼等は今日の世界資本主義が一時的安定期にある事を認めるが、然しこの安定は決して永續きしないものと主張する。而して世界資本主義諸國中最も早く彼等の勢力下に歸する可能性あるものはヨーロッパである。とにらんでゐるようである。ヨーロッパ諸國の中で、何れを先に攻擊するかの問題は、その時々この狀勢に依つて變化するのは怪しむに足らぬか、世界戰爭直後のドイツ攻擊より、今日はイギリスを主たる相手としてゐるものゝ如くである。彼等の對支政策も、その對英政策の一と考へる時、最も理解し易いと思ふ。この外に第三インタナショナルはイギリスの寶庫インドにも眼を光らしてゐるらしい。之等を思ふ時、イギリス政府が、事毎に第三インタナショナルの主力サヴエート聯邦に對して挑戰的態度に出る意味がわかるであらう。

要之、第三インタナショナルの世界政策は中々彼等の思ひ通りに進行しない。この停頓狀態を打開するために、積極的に攻勢に出る事を主張したジノヴイエフ等は、多數の反對を受けて第三インタナショナルを追はれ、その後には漸進政策を主張するブハリンが(執行委員長としてゞはない、執行委員長の職はジノヴイエフが追はれて以來なくなつた)采配を振つてゐるといふ。この漸進政策は前述の如く、先づイギリスに向けられてゐるようだ。その成功は何時の事だか、今の所全く見當がつかぬ。だから第三インタナショナルの手が支那に伸びた、と云つても、、、、、、、、、、、、、、、、、にその勢力が及ぶものとも思はれぬ。大急ぎでまとめる事を餘儀なくせられ、十分に說きつくさなかつたのは遺憾である。(四月十二日)

經濟時評

政府と實同との政策協定
營業收益税委讓の是非

杉　山　幹

普選第一の總選擧において、政府並に與黨は、衆議院に絕對多數を占めむと、手段を選ばず惡戰苦鬪したにも拘はらず、その結果に全く豫期に反し、辛うじて當の反對黨たる民政黨と相伯仲するの勢力を占めたに過ぎぬ。かくして政友會內閣の運命は、中立、革新、實同等いはゆる第三黨の向背によつて決せらるゝ事となつた。こゝに於て政府は先づ實業同志會の懷柔に着手し、田中首相の命を受けて、望月遞相・大口大藏次官の二氏は、僅かに四名の黨員を擁する武藤實同會長を、わざ〳〵大阪の私邸に訪ぬること數回、いはゆる政策協定に努力した結果、漸く重要政策に關する兩者の意見大體合致し、今は只その細目に亙る協定を進めつゝありと傳へらるゝに至つた。

由來、實業同志會は行財政の緊縮整理を主張し、國債の償還額增を唱へ、營業税による國民負擔の輕減を叫び、關税その他消費税整理の急務を說き、金解禁の即時斷行を强調するなど、その從來の主張に政友會の夫れと氷炭相容れざるものあるに拘はらず、今回重要政策に關し兩者の意見はゞ合致したと傳へらるゝは、いづれの讓步によるか、兩者從來の主義政策の相反する事の大なるより見て、兩者の妥協成立には必ずやそこに塗飾改論の甚だしきものあるか、或は實行の意志なくして目前を糊塗するの無責任なる妥協苟合を豫想せざるを得ぬ。

しかして武藤實同會長が、政府に對し要求した政策の主なるものは營業收益稅の地方委讓、並に金解禁の二項であつて、政府も大體武藤氏の意見を容認し、たゞその實施の時期、並に財源等に於て決する處なく、目下調査中であるといはれて居る。果して然らばこの二大政策なるものは斯くも容易に妥協さるべきものであるか、而してその今後における運命は如何になり行くものであるか、聊か左に考察を記して見やう。

一、稅制改革後のわが租稅體系

凡そ一國の稅制は、歷史の產物である。當初より體系を按じ、制度全體の組織と各稅相互の脈絡とを考へて、組立てられたものは、全く無いのである。かの臨時財政經濟調査會の答申の冒頭にも

惟ふに我國の直接國稅は從來隨時必要に應じ之を新設し又は其の一部を改正して今日に至りたるものにして制度として組織完全を缺き相互の脈絡十分ならず從て其の體系として未だ完備したるものと認むること能はず

と斷言してゐる通り、我國の稅制は過去に於て屢々改正されたけれども、その多くは戰時事變の急に應ずるために、增稅又は新稅創設が繰返されたもので、時として減稅的の改正が行はれたといつても、それは右の急激なる增稅の流弊を矯正するため、部分的に稅制整理を講じたに過ぎなかつた。

されば何れの日にか稅制の全體に亙り、その組織上の缺陷、脈絡の不備不完全を補正するために、一大整理を必要とした。この意味に於て稅制整理のための個々の整理を求めるなれば、前には大正九年原內閣の下に於ける所得稅の根本的改正あり、次には大正十五年第五十一議會に於て、憲政會內閣の下に行はれた稅制整理を擧げ得る。前の所得稅改正こそは、勤勞所得輕課、財產所得重課の社會政策的要求を滿たすを目標とし、かねて綜合課稅主義を徹底せしめて、こゝに所得稅の面目を一新するの大改革が實行された。これは華府の軍縮會議を豫想せざる當時に於て、一大軍備擴張の必要に迫られ、酒稅等の改正と相俟ちて增收計畫を樹つるの餘儀なきに刺戟せられた偶然の收穫かも知れぬが、改革の趣旨目的に至つては、確に時勢に順應したものであつて、資產階級擁護を以て能事足れりとする一部固陋なる反對論を壓倒し、進步的改革を斷行し得たのは、原內閣の功業の一つに數へて然るべきものである。殊にこの所得稅改正が前驅となり端緒となり、いひ換へればポンプの呼水となつて大正十五年の稅制整理が行はれ、前後首尾相應じて、こゝに我國の稅制は、制度全般に亙つて、まづ／＼組織を整へ體系を備ふるに至つたものである。營業稅が廢止せられ、代つて營業收益稅の創設せられたのは、十五年の稅制整理に屬する。

二、わが國營業課稅の由來

明治新政の初には、營業稅なる名稱は無かつたが、商工その他の生

業に對し專ら舊慣によつて課せられ、明治八年布告によつて地方税としてこれを認め、殊に明治十一年十二月の布告を以て、各府縣の營業税に關し劃一なる規定を設けた。その後明治廿九年までは、各府縣にて課税し地方税として存續したが、日清戰後の經營に歳計膨脹し、增收を圖るの必要に際會したのと、從來各府縣區々の課税で負擔の不公平なりしを矯正するために、明治廿九年三月法律第卅三號を以て、はじめて國税としての營業税法が布かれ、翌卅年一月一日から實施せられた。

その後營業税には幾回となく部分的改正が行はれたが、主なるものは日露戰爭當時、非常特別税法により遂に税額十五割からの增徴と、その後相次で行はれた減税的改正である。時に大正十二年（三月法律第九號）の改正に於ては、利益不足の場合の免税處分につき新なる規定を設けて、幾分たりとも實際の負擔能力との適合を圖つたのであつた。

三、惡税の評判高かつた營業税

しかし營業税に對する非難、惡税呼はりは年と共に高くなつて來た。その非難の焦點は營業税の外形標準にある。課税標準は、畢竟税額を決定する尺度であるが、このモノサシが歪んだり、狂つてゐたりしては、途方もない税額が決定せられ、國民の負擔能力に應ぜざる課税をなす事になる。舊營業税は、當初から課税は外形標準により、最初は課税物件たる營業の種類廿四種を列擧した。外形標準とは、投下資本とか、賣上金高又は建物賃貸價格や從業員の數などにより、營業の規模或は資本や勞働の收益能力を按じ、間接に營業の純益を推定するの方便である。販賣業は賣上金に課税するにしても、吳服屋と八百屋が同一税率でも困るし、米屋と材木屋が同樣の取扱ひを受けるのも穩當でない。然らば吳服屋は幾干、米屋は百分の幾つといふ風に、取扱ふ商品の種類に從つて、的確に税率を按配し得るかといへば、これは不可能である。營業の利益は商品によつて違ひ、營業の場所についても地方的差異の生ずるのは、看易いところである。これに殆んど一律の外形標準を當嵌めては、課税が實際の收益に副はぬ非難不平の生ずるのは、蓋し當然であらう。

元來この外形標準といふのは、フランスの營業税を範としたもので、いはゞ佛國式である。ところが右の不適當の缺點に鑑み、出來るだけ營業上の實際の收益を發見し、その純益に課税せんとする純益標準が、一方に生まれた譯で、プロイセンの一八九一年の營業税法がこのお手本を垂れたから、これを普國式と名けられる。詳しくいへば、普國の營業税は、純益標準の外に、資本額といふ外形標準を併用して、相互に補はしめたのである。

營業の純益を狙つて課税することは、外形標準も純益標準も同樣であつて、たゞ兩者に、間接直接の差があるのみである。營業の純益といふのは、要するに營業より生ずる個々の所得の謂ひであつて、所得

税が正面から人について所得を攻撃し、營業税乃至は營業收益税が、側面から物について所得を攻撃し、所得税の網を遁げたる所得を遺漏なく抑へて税することによつて、所得税に對して、營業收益税が、收益税として即ち、補完税としての役目を果さんとする。それなれば、所得税が直接所得を捉へ、營業收益税が同じく直接所得を狙ふのは、遺漏なく所得を抑へるといふ補完税としての役目の上に、却つて不都合を來しはせぬかといふ疑問がある。約言すると、純益標準では、所得捕捉上の缺陷を補充せしめるといふ補完税本來の特質を失はしめる危險がある。これを主なる理由として、かの臨時財政經濟調査會の研究に於ては、純益標準を捨てゝ、舊營業税の外形標準を修正維持するの主張が勝つたのであつた。

しかし前にもいふ如く外形標準は、どこまでも器械的である。故に補完税たるの機能に多少缺くる憾みはあつても、一躍營業收益税が純益標準に乘替へたことは、徴税の實際上の便宜から、納税者との間の紛紜を避けるために賢明の措置であつたといはざるを得ぬ。これを以て我が税制が、その體系組織を整へ得たことと、並に營業收益税創設の是非とが、大體諒解される。

四、營業收益税のわが税制上の地位

營業收益税委讓の利害得失を論ずる前にまづ今日國税の組織上、營業收益税の占める地位を明かにせねばならぬ。財産所有の事實に向つて税するのは財産税であるが、財産なり資本なりを財源と看做し、これを利用して生産たり營利をなす場合に、その生産營利の行爲乃至事實を税するのは收益税であつて、その土地に税するを地租、家屋に税するを家屋税、資本に税するを資本利子税、營業に税するは營業收益税といふことになる。

今日家屋税は國税より除かれ、地方税として存するのみであるから、國税としての收益税は、地租、營業收益税並に資本利子税の三者を數へる。地租は土地の收益に課せられるが、土地は農業の基礎でありこれによつて收益を擧げるが故に、地租は農業に税する農民税となる。營業收益税の課税範圍は、國によりて必ずしも同一ではないが、商工業並にその補助業を網羅するものであるから、營業收益税は、營業の收益を税し、即ち商工業に課するものであつて、商工税となり大體に於て都市の税となる。我が直接國税は現に所得税を中軸とし、その左右兩翼に、農業税と商工業税との收益税を配し、この三者が直接國税の根幹、脊梁を成してゐる。收益税が所得税に對し補完税たるの作用をなしつゝあるは、前に述べたる通りであるが、この收益税が補完税であるとは、大體今日の實際についてはじめていひ得られるので、昔に溯つて租税發達の沿革を辿ると、收益税は古くから發達し、後に起つた所得税が一時は收益税の補完税たる役目を勤めた時代もあつたのであるが、その後所得税の發達により主客その地位を替へるに至つたまでである。

本來收益税の性質として、財産なり資本なりを基礎とし、この上に營まれた經濟的活動、いはゞ人の稼ぎから生まれた收益を税するのであるが、この場合の收益といふのは、まづ所得の一部であつて、收益があればそれが何人の手にあるやは殆んど問ふところでない。そこで收益税は『物を追うて人を見ない』といはれ、この箇中に、その特長と缺點とを併せ藏してゐる。何といつても個人的經濟關係を顧みないから、その課税が實際の擔税力に副はぬ場合が多い。應能負擔が手際よく適合しないから、國税としてこれを全國的に課税するには、益々課税の不公平を増すに至る傾きがありともいはれる。これは個々前述の如く收益税と所得税とが、主客その地位を取替へた有力なる原因を成すものであつて、更に進んで、限られたる、地域に於て、農工商の實情に即した課税方法によるときは、この缺陷は相當矯正され得るといふ見地から、收益税はその本質上、寧ろ地方税に適するとの議論が生じた譯である。

五、財經調査會の委讓案

臨時財政經濟調査會は、原内閣當時に發せられた税制整理の諮問に答ふべく、大正十一年加藤友三郎内閣に至つて漸くその成案を得た。これは正式に調査會總會の決議として成立するを得ず、取敢へず參考案として政府に送付されるに止まつたが、成案の要旨は――

一般所得税を中樞とし別に一般財産税を創設して之が補完税たらしめ現行地租營業税は之を地方税に委讓すると
いふにあり。

當時財産税の創設に對して、世上の非難蝟集し、本案は學問的遊戯案なりとまで酷評せられ、主としてこの點が暗礁に乘り上げて、遂に調査會總會の正式決議たるを得なかつたものである。財産税を國税として創設し、地租營業税を地方に委讓する案は、プロイセンに於て藏相ミッチエルの税制整理に於て初めて斷行せられ世界に範を示したのである。財經調査會の成案は、畢竟この先蹤を追ふものであつて、決して獨創的の整理案ではない。しかし一たび調査會の成案によつて、兩税地方委讓が高調せられるに及び、翌大正十二年春の第四十六議會（加藤友三郎内閣の下に一部分ながら減税的整理が本議會にて成立した）に於ては、まづ國民黨の後身革新俱樂部は、地租營業税の無條件地方委讓を提唱し、政友會また地租の單獨地方委讓を主張して相見え、憲政會内閣の税制整理案を成立せしめたる第五十一議會（大正十五年春）に於ては、政友會は國庫の補充財源を主として關税の増收併に府縣復興費打切りに求め、これによつて地租全額の地方委讓を中心とする市町村地租法案を提出して、徹頭徹尾政府案と爭つた。地租委讓は、在野黨たる政友會が、殆んど唯一の新政綱であつて一たび政權を握つて局に當るに及び、地租委讓がその實行の第一歩を踏み出したのは、當然の順序である。なほ革新俱樂部は、事實上政友會に吸收されたのであるから今日に於ては、この政派の嘗て唱へた兩税委讓論が、政友會の地租委讓の傘下に包容せられ終つたのは、更め

ていふまでもない。

六、民政黨の兩税委讓反對論

右は委讓論の大體の推移であるが、これに對抗するものは、民政黨の現狀維持論である。元來加藤（高明）內閣に於て、税制整理を計畫立案したる税制調査會は、大體に於て歳入總額に增減を來さしめない方針約束の下に調査を進め、まづ第一に直接國税の體系は、所得税を中軸とし、これが補完税として、現行收益税（地租、營業税）に修正を加へたるものを配することに一決した。この調査の體系論は民政黨によつて今尙ほ維持せられ、政友會が地租全額（六千七百萬圓）を昭和五年度より市町村に委讓せんと主張するに對し、民政黨は、七大政策中の第六項に、『市町村義務教育費中教員俸給費の全額國庫負擔の實現を期す』の旗印を掲げて、應酬してゐる。この政友、民政兩黨の對時のみでは、營業收益税委讓は今日現實の問題に非ず、たゞ將來地租委讓の揚句、營業收益税の地方委讓に一歩接近するを想はしめるばかりである。

かく現實の問題としては、一時立消えの觀ありし營業收益税の地方委讓が、忽然政界の大問題たるに至つては、その數奇なる運命に驚かざるを得ない、普選第一回の總選擧に臨むだ政友、民政兩黨のスローガンにあつては、營業收益税について政友會が唯りその輕減を呼號したのみである。

七、實業同志會の從來の主張

然るに實業同志會は、地租、營業收益税の全廢を叫むで起つた。實同のいふ廢減税にはこの兩税の外、なほ淸涼飮料税、織物消費税中の毛織物消費税を全廢し、所得税の免税點を引上げ、砂糖消費税、登錄税、印紙税、酒税、關税に亘り減税し、かねて煙草値下げを掲げ、別に示す社會政策的施設の經費と共に、右の廢減税は『行政財政の整理をなし現在の十一省を外務、內務、國防、産業、大藏の五省に廢合し國費の上に大節約を加へ』て、こゝに消極的に補塡財源を求めるにある。

實業同志會の現有勢力の微弱なるは兎も角として、その主張、殊に營業收益税の表面的廢止論が、政界に一大波紋を描き出したのは、いふまでもなくこの問題が、政友會との政策協定の肝腎の楔子たるによるのである。

然らば協調は如何に展開し、如何なる實を結ぶであらうか——これを營業收益税のみに限局して觀察するのが、本稿の目的である。

まづ第一に實同は地租、營業收益税の全廢をいふが、立入つて點檢すれば、要は地方委讓である。武藤山治氏著『實業政治』（頁一五二——一五四、一六一——一六五）を參照すれば明白に左の結論が示されてゐる。

吾々は以上の理由により、地租及び營業税を今廢せんとするものであるが、これは直に兩税の地方委讓を意味するものでない。否な吾々

は兩稅の金額を地方に委讓することには反對である。何となれば吾々の兩稅廢止は、一面に於て農、商、工業者の負擔輕減を目的とするものである。勿論兩稅の廢止と共にその一部を新なる地方の財源となしこれを以て地方稅中の惡稅を整理することはもとより差支へない。吾々はその方針を以て地方稅を整理せんとするものである。

即ち結果に於ては、地方委讓と相選ばず、たゞ稅額に大小の差あるのみ。故に營業收益稅に減稅を實行するとせば、この差はそれだけ近接するわけである。

八、問題は財源と實施期

次に、政友會は地租單獨の委讓論であるが、これは臨時財政經濟調査會が、地租營業稅の半額委讓を一階梯とするに對し、同樣財源關係から、まづ地租のみの委讓を行ひ、營業收益稅を他日に留保する漸進的用意に出でたもので、二大收益稅の中、農業稅のみを地方に委讓し、商工稅はいつまでも國稅として存置せしめるものでないから、時期金額は別とし、兩稅委讓の趣旨に於ては、政友會と實業同志會との主張が、相一致すべきは當然である。

然らば兩稅委讓による中央財源の缺陷は、何によつて補塡するか、いひ換へれば、兩稅の身代りとなる財源を、何處に求めるか。實業同志會は、既記の五省廢合による思切つた行政財政の整理を以て、國費を節約し、これで埋合はせんとする。政友會の兩稅委讓は何分現在に於ては未完成の案であるから、從つてその代り財源は知るに由もないが、少くとも地租については、既に明白に公示されてゐる。即ち大正十五年度以來關稅增收を、當時の憲政會內閣は平年一千九百萬圓と見たに對し、當時政友會は四千萬圓を下らずと算定し、その開き二千一百萬圓と、財政整理による事業繰延以外に、復興復舊費に充當さるゝ分六千五百萬圓の恒久財源が將來浮いて來るのを引當てにしたものである。たゞ營業收益稅については、その代り財源の的確なる見据ゑは、恐らく政友會として今日直ちにつけかねるであらう。

政友會は、拓殖省の新設を計畫してゐる、十一省を十二省に增すものであつて、實同のいふやうな五省廢合は、思ひもよらぬところである。更に實業同志會は、新規剩餘金は全額公債償還に充當せよといふ。かくては自由財源は、空虛となる外はない。要するに積極的に新稅を起すか增稅するか、消極的に實同式に大節約をやるか、二途その一を選ばない限り、兩稅委讓の補塡財源を捉へるに由もない。政友會內閣が保護主義關稅政策により鐵、木材等に一層重課して、增收を目論むことは知れてゐるが、これによつて右の補塡財源は十分であらうか。昭和五年度不成立豫算を見れば、地租は六千七百餘萬圓、營業收益稅は六千一百餘萬圓、この合計は約一億三千萬圓に達する。全額委讓なれば、これだけの補塡財源を物色するを要し、實業同志會のいふが如く、その一部の委讓のみの許されるものなれば、その全部と一部との差は、國稅に於て減稅とならねばならぬ。

兩者の政策協調が首尾よく整ふたとしても、財源の明示はこの際これを避け、地租は兎も角、營業收益税の委讓の時期は、『なるべく速に』となるが、落ちではあるまいか。この邊首尾よく參りさすれば、お手拍子喝采といふところである。

九、無責任なる無條件委讓

余は地租、營業收益税の如き收益税は、徴税の實際の便宜から見て地方委讓に贊成するに吝かなるものでない。しかしその無條件委讓ほど無責任なるものはないと信ずる一人であつて、まづ豫算關係から、積極消極を問はず、適當なる代り財源を見出だすことを要件とすると共に、跡は野となれ山となれで、委讓後の國税の體系を、措いて顧みぬ論者に同ずることは出來ない。

均しく代り財源といつても、委讓は地方附加税の消滅となるなれば、それだけ直接税の輕減を結果するのであるから、この富者階級の負擔たる直接税に減じて、その代り財源を民衆的負擔たる關税その他の消費税に求めることには、絶對反對を叫ばざるを得ない。この嚴正なる社會政策的要求を裏切つてまで、兩税委讓を斷行する必要を認め難いのである。

體系論としては、兩税委讓後、所得税の補完税を何に求めるかの問題を生ずる。これに對する答案は、臨時財政經濟調査會は參考として、財産税を掲げた。特別所得税とも見るべき資本利子税のみが、唯一の補完税として殘るとあつては、體系は紊され、組織は破られざるを得ない。

要は財源と地租體系との兩面に、滿足なる解決が下されたとき、はじめて兩税委讓に贊成することが出來る。地租或は營業收益税の一方のみの地方委讓が、失當不公平なるは多くいふを俟たぬ。たゞその一方いづれを前後するかは、財源關係から中間的の階段としてのみ是認され得るものである。（三、四、三）

政府の政策と矛盾する金解禁

先づ其準備を急ぐが大事

一、最近の爲替暴騰の原因

わが爲替相場は正金銀行の建値において、去る一月廿四日以來對米四十六ドル八分の七と釘付に保合つてゐたが三月末となつて形勢は俄然一轉し、久しい間の保合を離れて數日間に四十八ドルまで昂騰した。即ち一ドル八分の一方の恢復である。更に市場相場は四十八ドル四分の一の唱へも現はれたほどで、爲替市場は久し振りの活況を呈したのである。尤も四月に入つてからは落付氣味となり正金建値は四十七ドル八分の七、市場相場はこの建値を中心に小高下を演じてゐるに過ぎぬが、それにしても反落の氣配更になく、一ドル方の高位を保つ

に至つた。

この躍進の原因はいろ／＼あるが、主なるものとして三つを擧げることが出來る。第一は貿易の好轉である。これはまた貿易の數字上には著しく現はれて居らぬが、三月以來爲替銀行の取引はかなり好化を示してゐるのであつて、即ち生糸等の輸出は意外に多く、一方輸入は財界不況に祟られて一般に減少した。棉花のみについて見るも四月上旬までに前年同期に比し六十萬俵の買付減少である。第二は東京電燈會社の外債發行接近であつて、同外債は五日頃までに約二億圓の成立が確實となつたこと。第三は政府と實業同志會との政策協定である。前記の如く實業同志會を代表する武藤氏は金解禁問題に對しては即行論者であつて、機會ある毎に持論を高調し來つたものである。この武藤氏が政府と政策協定を行ふ以上、該問題は政友會の傳統的政策を全然一變せざるまでも、何等かの方法によつて金解禁の對應策が示現さるゝだらうとの期待が少なからず人氣を刺戟し前記の原因と相俟つて從來の形勢を一變せしめたのである。

前記原因中第一及び第二に姑く措くとし、われ／＼の最も注目を惹くのは第三の問題である。今更いふまでもなく政友會は從來金解禁の反對論とまではゆかずとも、少なくともこれを歡迎せざるものである。その政友會が金解禁に對し、何等か對應策を講じやうとは夢にも信ずることは出來ず、一片の浮說とほか思はれない。然しながらこゝに看過してならぬことは政友會と昵近なる某有力者は、政友會は必ずしも從來の政策を固執するものでないことを洩らし、[illegible]官の最近における口吻の如きは、從來と甚しく相違せる點等より綜合考察して、此際單に一片の浮說とのみ一蹴し去ることは出來ぬのである。殊に最近民間銀行業者においても、該問題につき詳細なる調査を行ふことゝなつてゐるほど、金解禁は切實な問題と化して來たのである。

二、最近の解禁尙早論

金解禁については最近有力な反對論者もかなり多い、日本銀行總裁井上準之助氏の如きはそれである。その外市中有力銀行家の多くは即時解禁を好まぬものである。これ等反對論の理由とするところは大體次の如くである。

（一）今は通貨膨脹政策を執つて居るから、金解禁はこれと相容れぬものであること、即ち昭和二年法律第五十五號により、來る五月八日までは特別融通の期間中で、この法律が已むを得ないものとすればその立法の趣旨に從はざるを得ざるべく、その結果は異常なる通貨膨脹となり、通貨膨脹は物價の騰貴を誘致するから貿易の逆調を招來し、かゝる時機に解禁するは最も危險であるとするもので、この論者中には、日銀の特別融通が或る一定度に回收され通貨が收縮するとき即ち今後少なくとも數年間は行はるべきものでないとするものもある。

（二）解禁と同時に金は多額に流出し通貨の急激なる收縮となつて財界は一種の恐慌に襲はるゝこと。

(三) 爲替相場は解禁とともに當然正貨現送點に恢復するから、現在の相場を採算の基礎として取引したる當業者に甚大の損害を與ふるのみならず、輸入關係品の低落から諸商品の値下りとなり商工業に甚大の影響を與ふること、等である。

三、解禁は不可能に非ず

以上の反對論は勿論一面の理由がないではないがこれ等の理由のみを以つて金解禁論を覆さんとするには餘りに薄弱な論據である。先づその(一)について見るに、今は通貨膨脹政策を執つて居ることは事實である。これがため日本銀行の貸出は七億圓乃至八億圓臺の巨額に上り、兌換券發行高は常に十二、三億圓の高位にある。然しながらこの膨脹は主として日銀の特別融通によるものであつて、これは金融恐慌直後においては或は必要缺くべからざるものであつたかも知れぬが今となつては甚しく變則なものであるから、その手加減如何によつては如何樣にも牽制し得るものである。にも拘らず最近は立法當初の趣旨を沒却して却つて濫用の氣さへ現はれて居るのである。若し當局者に金解禁を大眼目とする確乎たる方針さへあらば、今日ほどの通貨膨脹を惹起せず、疾くにこれを抑止し得た筈である。單に特別融通制度の存することをのみ理由として金解禁を否定することは到底出來ぬことである。のみたらず一面には通貨膨脹の對應策としての金解禁論さへ現はれてゐる。然しこれは直ちに首肯さるべき問題ではない。同じく通貨膨脹則ち特別融通の期間中にあつても、それを巧用すると濫用するとは大たる差であつて、今の遣り方は寧ろ濫用に近く、かかる時機においては金解禁の如きは全く相容れず甚しく危險性を有するものであるから、少なくとも現在の遣り口が變らざる以上これを首肯することは出來ぬ。(二)は金の流出であるが、これは解禁すれば果して幾何の流出があるか何人も明確にすることは出來ぬ、然しながら最近は圓に對する思惑は一時より著しく減退してゐるからこれだけ流出は少ないと見ることは間違ない、卽ち一時一億五千萬圓乃至二億圓といはれた圓の思惑は一昨年から昨年へ掛けて殆んど利喰され、昨年頃は米國の某銀行がかなりの圓思惑を初めたやうであるが、これも四十六ドル見當で何れも利喰し今は思惑によるものは殆んどないのである。思惑によるものが少ないとすれば、たとへ解禁したからとてさほどの流出があるべき筈のものではない。或は英、米、支那、印度等各國への流出を慮るゝものあるも、今は特に支那とか印度方面の流出が多いといふことはあり得ない。要するにその流出は懸念するほどのものではない。のみならず流出の如きは金解禁には必ず伴ふものであるからこれを慮るゝとすれば遂に解禁の機はないことゝなる。更にまた金の流出によつて通貨は急激に收縮するといふのであるが、わが國の發行制度においては必ずしもさうでない。英國の如く一定額までは證券を準備とし、これを超ゆる場合は必ず鑄貨及地金の準備を必要とするのであるから、若し鑄貨及び地金が減少すれば直ちに通貨に收縮することに

なる。ところがわが國においては正貨準備を超えて保證發行を許すのであるから、正貨の減少が直ちに通貨の收縮となる譯ではない。たゞ牽制作用と人氣作用とが手傳ふのみである。故に金の流出による通貨收縮はわが國に於いてはそれほど懸念すべき問題ではない。(三)は爲替相場が直ちに正貨現送點まで恢復するから、それだけの損害を免れぬとするのであるが、現在の爲替相場四十七ドル八分の七とすれば正貨現送點との開き僅かに二ドルである。これ位の差のみを以つて非解禁の理由とすることは出來ぬのであつて、平常における相場の動搖さへこれ以上甚しいことを經驗してゐる。例へば大正十四年頃においては四十ドルから一、二ヶ月後には四十三ドル半となり、十五年春は四月に四十七ドル半と僅か三、四ヶ月間に四ドル方の急騰を演じてゐる。更に最近においても三月末には、二、三日中に一ドル以上の昂騰を告げたのであるから、この相場變動は以つて理由とするに足らぬのである。

四、先づ準備を急げ

かくの如く金解禁反對論は薄弱であつて、到底これを覆すに足らぬのである。現政府がこれに目醒めて、これを必要とするに至つたとすれば一大進歩たるとともに吾人の賛するに遲疑せざるところである。然しながら金解禁に對しては充分の準備がなくてはならぬのであつて、若し準備なくして解禁したとすればこれほどの危險はないのである。翻つて現政府の諸政策及び諸施設を見るに悉くこれと相容れないものばかりである。財政策はいふに及ばず通貨政策その他の諸施設は何れもこの方針に背馳する。かくの如くにして金解禁を云爲する政府は寧ろ噴飯に値するものであるが、若し政府に眞意あらば先づこれを斷行する前にこれ等諸政策諸施設を根本的に改變すべきことを進言せねばならぬ。これ金解禁の準備に外ならぬ。

金解禁の準備として吾人は根本的のものと、應急的のものとを必要とせざるを得ない。根本的のものとしては、財政策その他あらゆる經濟政策及諸施設の改變である。財政策については先づ豫算の切り詰めである。從來の政府もさうであるが、殊更に現政府は豫算の緊縮については冷淡である。豫算の膨脹はいふまでもなく徒らに物價を高からしめ、國民の負擔を増大して根本的に產業の發達を阻碍すること甚しいのである。更に經濟政策については最も重大な關係を有するは通貨政策である。これは前記の如く特別融通のみならず、救濟資金支出の如きは通貨の膨脹を招來するは明かでこれ等を一擲しては收縮策に改めねばならぬのである。その他諸經濟政策もこれに準繩すべきは言ふまでもない。

この根本的準備とともに必要なるは應急的即ち技術的準備である。先年英國においてはこの準備として、對外放資の制限、ニューヨークにおけるクレヂツト(ニューヨーク準備銀行に二億弗、モルガン商會

に一（償弗）の設定、イングランド銀行の公定歩合引上げ等を以つてした。また井上準之助氏はわが國における準備として英國で行つたものの外、預金部資金及び一般の歳計剩餘金を以つて海外における爲替を買入るゝこと及び日銀正貨準備の一部を現送して在外正貨を充實せしむることを擧げて居る。これ等の或るものは應急的準備として採用する餘地あることは勿論であるが、余のこゝに主張せんとすることは金解禁の間接的準備として現在の在外正貨制度を廢止することである。わが在外正貨は歐洲戰前即ちわが國力がまだ經濟的に充分發達するに至らなかつた當時は或は必要であつたかも知れぬが、今日となつては單に一種の遺物たるに止まらず、不自然なる爲替相場を現出せしめるものである。これはカッセルの言辭を藉らずとも明らかなところで、現在文明各國何れもかゝる制度を存置するものはない。故に今日これを廢止して爲替相場を自然に歸せしめ、更に金解禁後において在外正貨なくして決濟し得る訓練慣習を必要とする意味においてこれを主張するものである。それに國債利拂等のためのみにこれを存置する如きは甚しく無意味のものといはねばならぬ。かくして準備ならば一路解禁に邁進すべきであつて、吾人は政府に實業同志會の要求に應ずるの意ありといふを好機とし先づその根本的準備の改善を希望して已まぬものである（三、四、三）

時評

農民組合合同の暗礁

山川均

組合運動方面における、分裂主義の實踐的な清算の一歩として、また戰線統一に對する大衆の熱望の、具體的な實現の一着手として、大なる期待のうちに進められてゐた農民組合の合同協議は、四月六日の會議によつて、遂に不成功に終つたと報せられてゐる。この報導は、統一戰線を待ち望んでゐる大衆に、若干の失望を與へたにちがひない。

しかしながら農民組合の合同は、たゞ單なる農民組合の合同の問題ではなくて、それはわが國における無産者運動の全線に亘る分裂主義的傾向の、完全なる克服と清算、新方向の確立といふ、遙かに廣汎にして重要な問題の解決の一部分として進行しつゝある作用である。それ故に農民組合の合同は、たゞ單なる農民組合の合同以上に重要な意義を持つのであるが、それ故にまた、その實現の上には、より大きな困難が伴うてゐる。かくの如き重要にして困難な問題が、たゞ一回の試みによつて、すらくと解決せられなかつたことは、決して今後におけるその實現に失望すべき理由となるものではない。

□

農民組合の合同は、その衝に當つた統一論者が、誠意と努力を傾倒したにもかゝはらず、何故に不成功に終つたらうか？　合同協議會を破綻に終らせた最も主要な禍根は、協議の進行中に、すでに醜悪なその姿を現はしてゐたといふことができる。

これより先き、三月十七日の三全國組合（日農組合、全日同盟、全日組合）代表者の協議會は、合同協議の基礎的一前提として、六ケ條の申合せを採用した。當時、新聞は、この協議會には『心配されてゐたいはゆる宗派的分裂主義者の排撃の言葉は一つとして聞かれず』す

らくと六ヶ條の申合せが採用せられたと傳へてをり、勞働農民黨もまた聲明書を出だし、この『合同條件』を說明して、次の如く云つてゐる。――『…特に何々主義の排除といふ條件のなかつたことは、之こそ眞實に勞農大衆の要望を實現せるものにして、我黨は衷心よりの喜びを禁じ得ない…且つ農民組合合同の條件に、勞農政黨の合同を入れたのは、全く正當なる決議である…』。

しかしながら實際には、この聲明書が說明した二つの點――これこそ眞實に、協議會を破壞せしめた暗礁の所在であることを見落してはならぬ。

□

これは四月六日の協議會において、さきの六ヶ條の申合せに對して中部農民組合の代表者から提出せられた修正案によつて、最も明白に實證せられてゐる。この修正案は、一面においては（即ち、政黨問題については）、勞農政黨に對して、合同後の農民組合を中心とする新農民政黨の組織を主張する全日同盟への妥協の方法を意味するものではあるが、同時に一面には（即ち、農民組合運動の指導精神については）、日農、全日側の見解に對して、中部農民組合、農民組合總同盟側の意見を積極的に主張したものと見ることができる。

十七日の申合せは、いはゆる『宗派的分裂主義』については、言及してをらぬ。これは協議會が『宗派的分裂主義』を認容したゝめではなくて、その淸算をもつて、合同を可能ならしめる當然自明の根本條件と見做したからである。『宗派』に由來すると否とを問はず、一切の分裂主義の徹底的な淸算を伴はないでは、戰線の統一はもとより考へることができぬ。それ故に分裂主義に對する鬪爭と、その完全な克服淸算の努力は、嚴密に云へば、合同の條件とはいふことができぬ。それは農民組合が合同する條件といふよりも、むしろ合同協議會に參加する前提條件なのである。眞實に戰線の統一を目的として合同會議に參加する者は、分裂主義と徹底的に鬪爭して、完全にこれを淸算する決意と共に、その自信をもつてゐなければならないことが、當然自明の事柄だからである。

かやうに戰線統一の運動は、分裂主義との鬪爭を既定の事實とし、分裂主義を完全に淸算しようとする一致した決意を前提條件として、初めてそこから出發する。組合は、たとへば共產主義、社會民主主義といふやうな、いはゆる一定の指導原理を基礎として結合するものではない。從つて組合は、共產主義社會民主主義等々の排除をもつて、合同の條件とする必要がない。これに反して、分裂主義的な理論と實踐とは、それが共產主義、社會民主主義、或はその他の如何なる指導原理に由來するかに論なく、合同運動はこれが否定に出發しなければならぬ

十七日の申合せは、これらの指導原理については、當然にも、何事をも語つてをらぬ。たゞ申合せの第一項は、『農民運動は日本の農村事情に即したる運動たること』といふ言葉によつて、今日まで分裂主義

と密接に結びついてゐる極左的運動方針の否定を、婉曲に言ひ表はしてゐる。

これに反して修正意見に、『農民運動は共産主義に反對する精神に基き、農村の事情に即すること』を要求する。即ち修正意見に『共産主義』を否定することによつて、共産主義に對立するところの、或る指導原理をもつて、農民組合の合同の條件とし、農民組合の結合の基礎とすることを提議してゐるのである。

この思想は、無產政黨合同問題の方面では、勞農黨の極左主義者によつて代表せられてゐる。勞農黨の極左主義者は、事實上、社會民主主義の排撃を合同の必要條件と見做すことによつて、社會民主主義に對立する或る指導原理をもつて、無產政黨合同の條件とし、從つてまた事實において、この指導原理を、無產政黨の結合の基礎とすることを主張してゐるものである。かように四月六日の合同協議會を難破せしめた右翼の主張は、政黨の合同問題の方面において極左主義者の主張してゐるところを、農民組合合同問題の方面において、右翼主義者がそのまゝ採用して、逆さまに復報したものだと云つてよい。かように右翼主義者と極左主義者とは、互ひに兩極に立つてゐるにもかゝはらず、少なくとも戰線統一の問題については、その見解の樣式において、精密に同一の系統に屬する兄弟たることを證據だてゝゐる。從つて戰線統一の上に、精密に同一の影響を與へてゐることは少しも不思議でない。

□政黨問題については、十七日の協議會は、『合同せる組合の力によつて、無產政黨の統一を可及的急速に行ふこと』を申合せた。組織せられた農民は、多くの無產政黨の主要な構成要素である。從つて農民組合の合同は、政黨合同の機運を促進し、その障害を打破する有力な作用となることは、云ふまでもない。農民組合の方面に成就せられた統一戰線は、またかくの如き期待をもつて、政治戰線の統一を實現するために、充分にその作用を發揮せしめねばならぬ。十七日の協議會が、かくの如き期待をもつて、前述の如き申合せをしたことは、もとより至當であつたと云はねばならぬ。

しかしながら合同協議會の申合せは、組合の合同を、政黨合同の上に最も有利有効に作用せしめようとする期待と努力の一致を申合せたものであつて、政黨の合同をもつて、組合合同の條件としたものでないことは明らかである。この點において、十七日の協議會は、原則として、政黨と組合とは、別個の基礎の上に立つ別個の組織であつて、政黨の分裂對立を必然に組合の分裂對立として、組合運動の領域に持込むべきものではない、言葉をかへて云へば、勞働者と農民との政黨は、よし或る場合には、政治的意見の相異のために分裂對立することがあらうとも、勞働者と農民の組合は、政治的意見の相異にかゝはらず、統一を維持すべきものだといふことを、原則的に認めた明快な見解の上に立つてゐる。これはまた、從來のいはゆる宗派的分裂主義、

ないしは極左主義の理論を、完全に排除し清算することを意味してゐる。

これに反して勞農黨の指導者の解釋によれば、この申合せは、勞農政黨の合同を、農民組合の合同の條件としたものであつて、かくの如く組合の合同を、政黨の合同によつて條件づけることを、勞農黨の指導者は、『全く正當なる決議である』と認めて祝福したのであつた。これは理論的には、政黨と組合との性質と職分とを混合した、いはゆる宗派的分裂主義の見解、ないしは極左的政治論の殘滓が、依然として信奉せられてゐることを意味してゐる。然るに實踐的には、かゝる見解は、農民組合の即時的な合同を不可能にするものにほかならぬ。

政黨の合同をもつて、組合の合同の條件としたならば、政黨が再び分裂する場合には、組合は當然に分裂しなければならぬ。また政黨の合同に確かな成算を得るまでは、組合の合同に進出することはできぬ。若し不幸にして、現在の勞農諸政黨は、なほ相當の期間の間、左翼黨と右翼黨とに分立するものだといふ『見透ほし』をする者があると假定したならば、組合の合同もまた、これに照應した對立狀態に整理合同されなければならぬといふことになる。これが政黨の合同を組合の合同の條件とする見解（その根底は、政黨と組合との組織上の混同に陷つたいはゆる宗派的分裂主義、ないしは極左主義の理論にある）の、避くべからざる結論である。

この點についても、四月六日の合同協議會において、右翼主義者は極左主義者と精密に共通した見解を取つた。即ち、申合せに對する修正意見の第三項、第四項に、政黨問題について、『合同せる力により、同一指導精神に立つ無產政黨の統一を急速に促進すること、無產政黨の統一不可能なる場合は、合同せる組合は從來の支持政黨を脫退し新政黨を樹立すること』を主張してゐるのである。

そこで『農民組合の合同の條件に勞農政黨の合同を入れた』といふ讒謗は、三月十七日の協議會の申合せに與へらるべきものではなく、精密に、四月六日の右翼主義者の修正意見に與へらるべきものであつて、この點についても、右翼主義者は、極左的見解をそのまゝ採用しその思想上の一致共通を實證したのである。

政黨の合同を、組合合同の條件とすることが、『全く正當』だとしたならば、その實踐上の結果はどうだらう？　少なくとも勞農黨が社會民主主義者の徹底的排撃をもつて、合同の事實上の必要條件として固執してゐる間は、少なくとも勞農黨の指導者諸君から社會民主主義者のレッテルを貼付せられてゐる人々に取つては、全ての勞農政黨の合同は、不可能に見へるにちがひない。そして右翼的な『同一指導精神に立つ無產政黨の統一』のみが、實現可能と思はれるにちがひない。これを條件とした農民組合の合同は、いふまでもなく、全ての農民組合の合同ではなくて、右翼的な政黨に照應した、右翼的な農民組合のみの合同でなければならぬ。若し四月六日の協議會に、申合せの修正意見として提起せられた右翼の見解が、其後實踐の上に發展し、全て

の農民組合の合同運動に對抗する右翼的組合の合同運動にまで具體化することがあるならば(その蓋然性は充分にある)、この運動は、精密に、勞農黨指導者の見解と共通な見解をその理論的根據として、その上に發展するものだと云はなければならぬ。

勞農黨は何處へ往く?

—(作)—

—(評

對立指導精神の排撃征服による合同は、かつては左翼黨をもつて任ずる勞農黨指導者の主張であつた。勞農黨は昨年の『指導精神にこだはらざる合同』の提議によつて、暗々裡に、この主張をひるがへしたかの觀があつた。しかるに最近の農民組合合同協議會における右翼主義者をもつて任ずる人々の、『同一指導精神に立つ無産政黨の統一』の主張は、合同問題を再び指導精神の問題に引き戻したものであつて、それは言ふまでもなく、無産政黨の合同の前に、新たな障害を附け加へたものである。

それと同時にこの主張は、その直前に開かれた勞農黨擴大中央執行委員會の合同問題に對する決定に對する右翼の題答を意味してゐる。そして勞農黨の擴大中央執行委員會の決定が、同じく合同問題の前に新たな防禦を布設したものであることは、爭はれぬ。

□

合同問題に對する勞農黨の新方針のうちには、從來の方針に見ることができなかつた、重要な二つの主張が加はつてゐる。即ち、第一には『勞働者農民の政府を作れ』といふスローガンをもつて、合同の『旗印』とすることであり、第二には、勞農黨に合同政黨の內部にあつて社會民主主義者と徹底的に鬪爭するために、社會民主主義者に對する批判の自由を確保されなければならぬ、といふことである。

中央常任委員會を通過したこの決議の草案は、勞農黨內部における反對意見の影響を受け、多少の修辭上の改訂を加へて、擴大中央委員會に附議せられたものゝ如くである。たとへば、社會民主主義者に對する批判の自由については、『社會民主々義者に對する批判の自由を到る所に獲得せねばならない』となつてゐる。『到る所に獲得する』とは、一たい何所で、誰から獲得するのだらうか? 勞農黨は、現在、社會民主主義者に對する批判の自由を完全に確保され、また完全に行使してゐるのではなからうか? してみれば、この『到る所』とは、いふまでもなく、決議の草案が率直に明言してゐるように、合同政黨の內部でなければならぬ。『……黨員の批評の自由を黨內に確保することが絕對に必要である、それは今日わが黨に於て確保されてゐると同じく合同後の黨內に於ても充分に確保されねばならない……』草案は明らかに、かう云つてゐる。

一般的に、無產政黨の內部における批判の自由は、吾々もまた熱心にこれを要求する。これなくしては、大衆的な運動の健全た發達は望まれない。けれどもこの決議の要求する批判の自由とは、決して一般的な意味での、批判の自由ではない。この草案が、『今日わが黨において確保せられてゐる如く』、合同後の黨內においても確保せられることを絕對の必要條件とする批判の自由とは、一般的な意味での、異つた意見に對する批判の自由——黨內デモクラシー——を意味するものでないことは、精密にかゝる批判の自由こそ、勞農黨の內部においては今日、完全に鎭壓せられてゐる事實によつても知ることができる。現に勞農黨の指導者が、對立指導精神を征服せぬ限り、絕對に合同に反對すると主張してゐたほんの最近まで、無產政黨合同の主張は、勞農黨の內部において、いかに反逆的な危險思想として鎭壓せられたか。現に擴大中央執行委員會において、この決議に反對した一中央委員は、懲戒的な查問委員會に附せられるといふ驚くべき復讎を受けたのではなかつたか。

かくの如く、決議の要求する批判の自由とは、大衆政黨の內部におけるデモクラシーの要求なのではなくて、特別に、社會民主主義者に對する批判の自由であつて、決議の草案は、『社會民主主義を排除するといふことを合同の條件とすることは不可であるが……』と斷はつてゐるにも拘らず、合同政黨に對して、特に社會民主主義者に對する批判の自由をのみ確保せよと要求することは、事實において、政黨の合同が、社會民主主義者の排撃を條件として行はれることを、巧妙に要求してゐるものにほかならぬ。合同政黨をして、社會民主主義排撃の上に立たしめようとすることは、社會民主主義に對立する何らかの指導原理をもつて、合同の條件たらしめようとする主張以上のものでも以下のものでもない。

各國の共產黨が、社會民主黨と一時的な共同戰線を結ぶ場合には、常に批判の自由を要求した。また英國共產黨の勞働黨加入問題の喧ましかつた當時、共產黨側のほとんど唯一の加入條件は、同じく批判の自由であつた。英國における共產黨の勞働黨加入は、共產黨が勞働黨に消解するのではなくて、共產黨は依然として、獨立の黨としての存在をつゞけるものである。それは第一には共產黨であるといふ事實により、第二には、獨立の黨として存續するものだといふ事實により、共產黨が勞働黨の內部にあつて、黨として批判の自由を要求し、これを加入の條件とすることは、固より至當であつた。社會民主主義と徹底的に鬪ひ得る黨は、世界廣しといへども、前衞黨のほかには在り得ない。『わが黨の中には勞働組合主義者も社會民主主義者も共產主義者もすべて包擁されてゐる』といふ意味での大衆的政黨が、ひとり社會民主主義者に對する批判の自由の確保をもつて、合同の事實上の條件たらしめようとすることは、大衆黨と前衞黨との混合折衷の惡夢から醒めきらない證左であるばかりでなく、左の手に『卽時無條件合同』の旗を掲げつゝ、右の手では合同を無限に遷延する障害物を築づいてゐる

るものであつて、右翼主義者の分裂的傾向への合流以外の何ものでもあり得ぬと云はなければならぬ。

□

『勞働者農民の政府』のスローガンが、合同問題にいま一つの暗礁を加へたものであることも、云ふまでもない。擴大中央執行委員會への提案では、このスローガンは、『共同鬪爭の中心スローガン』として說明せられてゐる。けれどもそれはどこまでも『合同方針』の一項目なのであつて、その意味はさきの草案においては、一そう率直に、從つてまた、一そう明快に說明されてゐる。卽ち『大衆黨の合同問題には、階級的立場、政策的規準が必然に要求される』。しからば勞農黨指導者が、階級的立場に立つた合同政黨の政策的規準と認めるものは何だらう？ それは『勞働者農民の政府』といふスローガンであつて、草案はこれをもつて『合同の旗じるし』としなければならぬと主張するのである。

『勞働者農民の政府』といふスローガンは、かつて『プロレタリア××』なるスローガンに代へて、主としてドイツ××黨によつて用ひられたこと、このスローガンが國際的に、いかなる內容をもつて理解せられてゐるかは、いやしくも無產階級運動に關心を有する人々の熟知するところである。從つてこのスローガンが、現在わが國の情勢の下に、適切なスローガンであるか否かはしばらく別問題としても、このスローガンの採用を、大衆黨の合同の條件とし、或は明白には條件とはせぬまでも、これを合同問題と結びつけることさへも、合同問題の前に、大なる暗礁をおく結果となることは自明である。

いはんや勞農黨指導者が、いかなる內容を與へてこのスローガンを採用したかは、極めて曖昧である。擴大中央委員會における當局者の說明は、何らこのスローガンの內容を明らかにしないで、一そう曖昧ならしめた。このスローガンが、初めて『無產者新聞』によつて提唱せられた當時の說明によれば、それは純然たる合法的な意味に說明せられたスローガンであつて、勞働者と農民の政黨が議會に多數を占め、勞働者と農民の現實的要求を實現する勞農政黨內閣の出現によつて、といふことにほかならぬ。かくてこのスローガンは、何時の間にか勞農黨のスローガンとなつたが勞農黨の合同方針草案もまた右と同じ見解を取り、『我黨は勞働者農民の大衆黨である‥‥卽ち、勞働者農民の政府を樹立し、その政府の下に於て八時間勞働、失業手當法、耕作權確立等の現實的要求を實現する目的をもつた‥‥組織である』と說明せられてゐる。もしかような解釋を取るとしたならば、同じ草案が、『勞働者農民の味方でなくて敵である』と云ひ、『徹底的に鬪爭せねばならぬ』といふ社會民主主義の『議會萬能主義』とは、そもそも何を指すのだらうか？ 社會民主主義者の『議會萬能主義』とは、無產政黨が議會に多數を占め、無產政黨內閣の出現によつて、八時間勞働等々の實現を目的とすること以外の、何を意味するのであらうか？

勞農黨は合法的な政黨である。從つて勞農黨の採用する一切のスロ

ーガンは、合法的な内容をもつて採用せられたものでなければならないことは言ふまでもない。けれども假りに前衛黨的立場に立つて言ふならば、非合法的なスローガンを合法的に歪めることは、最惡のメンセヴイズムであることを忘れてはならぬ。

□

『一切の大衆黨の中、我黨は最も闘爭的な勞農大衆より成る最も左翼的な黨である、こゝから合同實現のために我黨が果すべき重大な任務が出て來る……』。合同方針はかくの如き責任感の上に立つてゐる。從つて吾々は、合同問題については、勞農黨に最も多くを要求し、勞農黨の態度の批判において、最も嚴格でなければならぬ。

勞農黨(精密にいへば、勞農黨の分裂主義的黨官僚)は、かつては對立政黨がその指導精神を棄てない限り――即ち、武裝解除をして軍門に降つて來るのでない限り――『絶對に』合同に反對することを主張した。けれども分裂主義的理論の正しいと否とにお構ひなく、現實の必要は、大衆の間に、戰線統一の要求を釀成した。勞農黨指導者は、少なくとも一年近くの間は、勇敢にこの大衆的要望の逆流に抗しつゝ、非合同論の態度を、終始一貫して守ることができた。次には、いはゆる『無條件合同論』を『徹底的に排擊』しつゝ、『指導精神にこだわらざる合同』へと航路を變へた。分裂主義の理論によれば、勞農黨に『その上に起つた分裂のために、不純分子を陶汰し得たことによつて、一層強くなることができた』。しかるに『まだ少しもその形質を變へてゐない不純分子』と、指導精神にこだわらないで握手の手を差し延べるのが、この新方針であつた。しかしながら、これは『無條件合同論』への降伏ではない!その證據には、吾々は無條件合同論を徹底的に排擊しつゝある!

けれども『時間』は人をして大膽ならしめる。今日は、『即時無條件合同』といふ言葉も、勞農黨指導者の耳に、もはや反逆的に響かぬものとなつた。かくて勞農黨の舵は、公然と『即時無條件合同』に向けられてゐる。

しからば勞農黨は、『今日に即時無條件合同の航路を、眞實に、眞直ぐに走つてゐるだらうか?『指導精神克服』の旗印は『無條件合同』の旗印に變はつたが、社會民主主義者の徹底的排擊、勞働者農民政府樹立のスローガン等々の、綱としてなされる新發明によつて、即時無條件合同の進路には、次から次と、新たな機械水雷が布設せられてゐる。一たい合同に對して、どうしようと云ふのだらう?吾々を乘せてゐる勞農黨の船は、合同の海を、何を目標として、どの方角に走つてゐるのだらうか?一たいそれは、走つてゐるのだらうか、それとも一と所を旋回してゐるのだらうか?大衆はかくの如き疑惑に滿たされてゐる。まことに極左的分裂主義の舵取りにみちびかれ、戰線統一に對するいよいよ益々高まりゆく大衆的要求の浪に漂ひつゝ、勞農黨は何處に往かうとするのであるか。

反動的帝國主義ブルジョアジーの彈壓政策は、日々に、、と、、さ

を加へてくる。それは今日以後、いよ〳〵ます〳〵加はつて來る。そして戰線の極度の分裂狀態は、そのために絕好の條件を提供してゐるものにほかならぬ。勞働者と農民は、彈壓と强襲との前に、到るところの戰線において、無殘な後退をよぎなくされてゐる。戰線の統一は無產階級がこれに答へる唯一の正しい答である。階級の一部に加へられた襲擊は、階級全體に加へられた襲擊であるといふ階級的格言は、ただこれを繰返へすために作られた格言ではない。かくの如き階級意識と階級的立場の嚴守とは、統一戰線に對する誠實な貢獻によつてのみ初めて實證せられるものである。勞農は──自ら左翼的政黨をもつて自任するところの勞農黨は──少なくとも首尾一貫した、合同に對する確乎とした、定見のある見解と方針との確立によつて、その左翼的性質を實證する責任がある。

しかしながら黨大衆が自らの力によつて、分裂主義的思想の殘滓を淸算し、黨の內部における批判の自由とデモクラシーを獲得し、黨大衆が自らの手に合同問題を取り上げ得た時にのみ、勞農黨は合同問題に對して、初めて混亂と浮動のない、確乎とした進路を發見することができる。(四月七日)。

四月十日、勞働農民黨の上に、突如として解散命令が下だされた。反動的ブルジョアジーの、、、、は、勞農黨の存在を奪つたばかりでなく、本稿の批判の意義をも失はしめた。從つて本稿の撤回を希望したが、この時すでに組版を終つてゐたゝめに、もはや削除することができないで、遺憾ながらそのまゝ發表せられることゝなつた。

戰線の分裂は、完全に、支配階級の『分割支配』の具に供せられた。階級運動の一陣營に加へられた損害は、全運動全戰線に與へられた損害である。反動的ブルジョアジーは、その巧妙な分割的攻擊によつて全階級運動に挑戰したものである。いやしくも階級的立場に立つ全運動がこの强壓に答へる唯一の力ある答は、鞏固な統一戰線の實現以外に求めることはできぬ。(四月十一日追記)。

國粹團體の批判

對蹠的存在としての國粹團體

蠟山政道

一

近頃新聞紙などによつて、頻りに國粹主義或は皇室中心主義を標榜する反動的諸團體の行動が報ぜられてゐる。同時に、其種の團體自らによつて莫大な費用のかゝると思はれる尨大な廣告によつて、その主義綱領が公にせられてゐる。

何時の時代に於ても斯種の極右團體の存在しなかつたことはないし、又社會の一部に斯種團體の存在理由が全然ない譯でもないから、今日特に斯種團體の行動を云爲するにも當らないのである。假令、その標榜する嚴肅なる主義綱領と其の實際的行動とが相一致しないで、如何はしい動機や行爲があつたからとて、特にそれを是非する必要はない。幕末から明治維新にかけての尊王攘夷の行動などに斯種の非難のあつたことは、今日歷史家の明證する所であり、いはゆる大衆文學などの中にさへ現れてゐる所であつて、今日では一箇の笑柄になつてゐる位の所である。獨り今日の國粹團體をのみ是非するに當らないのである。又或は云ふかも知れぬ。今日の反動的團體の活動には今日の支配階級たる資本家が自動的或は受動的に參與してゐるのであるから、反動期又は沒落期に入れる資本主義の變形的な現れとして見る時に、そこに考ふべき意義がありやしないか、と。これに對しても、斯くの如く資本主義の推移といふが如き根本的な事實と直接に因果關係を有するものとは考へられぬから、この見地から特に之を評價するに足りないと思ふ。斯種團體の今日の行動は、もつと皮相的な一時的な事態と牽連してゐるものであつて、その社會的政治的意義は現今の國民的問題として、極めて稀薄なものであると考へる。

勿論かうした見解の出づる根據としては、今日の我が日本國家及び國民の當面しつゝある事態を如何に考察するか。その事態に對して斯種團體がその行動の目標として掲げつゝある問題を如何に評價するか。この二つの論

點に就て語る所がなくてはならぬ。それを明かにする事なくして、漠然と事例を過去の我が歴史に求めたり、或は諸外國殊に伊太利のファシズム等に比したりすることは、頗る當を得ない議論である。而して、私の結論としては、今日の國粹團體の行動が頓に頻繁を加え喧噪を加え來つたのは、その積極的主張なり方策なりが、我が日本國家の當面しつゝある事態に對してその意義の重要性を斷現し來つた爲めではなくして、或る一、二の方面に於る一時的な表面的な事象に對する對蹠的な存在として、其の意義を主張し來つたものであると考へる。その一、二の方面に於る事象とは、大衆的無産黨の假面を被りつゝ、實は小數の秘密結社的な共産黨的分子の無謀なる活動によつて刺戟せられ、醸成され、國内に彌漫する漠然たる反動的傾向がその一つである。他の一つは、過般の總選擧に際し、現政府の執りたる目的の爲には手段を選ばざるていの、、、、、、、、きとなり、或はそれに勢を得て、或は遂に政府の弱點を利用して、無遠慮に露骨にその行動を表面に現し來つたのである。總選擧後に於ける政友民政兩黨の對峙の關係は、依然として斯種團體の活動跳梁に充分なる餘地を與ふる間隙を作り出したのである。これらの内政事情に胚胎する間隙こそは一時的な皮相的な事態であるが、しかも斯種團體の活動にとつては好箇の機會を提供しつゝあるのである。

私は、斯く見る。然し翻つて、かゝる一時的な事象に對する對蹠的な反動的な存在としてではなく、その事象の如何を問はず、その主義綱領及びそれを實現するに足る組織なりに、我が日本の目下逢着しつゝある、國際的及び國内的問題に對して、積極的な意義を有するものがあるならば、斯種團體の行動に對する私の評價は自ら異らざるを得ない。然し、私は不幸にして、その積極的意義を見出し得ない。從つて、斯種團體の今日の活動に對しては、前に陳べたるが如き、一、二の社會的、政治的事象に對する對蹠的存在としての意義を有するに過ぎぬと斷定する。その理由に就ては、順序を分つて論述することにしよう。

二

先づ始めに、斯種團體が、堂々と天下に呼號し、自己の存在理由を高唱する處の所謂赤化防止、共産黨撲滅の旗幟や、民政黨の議會中心主義の排撃といふやうな戰術を見る。私は勿論多くの時を費して、斯種諸團體の發表する文書を一々點檢したこともないので、これを詳細に論評することは出來ないが、時々眼に觸るゝ處から得たる印象的記憶から云ふなれば、彼等の社會主義及び我が國の社會主義運動に對する智識には、多くの研究不足と分析不明と判斷錯誤とがある。現在の社會主義にも種々なる立場がある。況んや其の將來の趨向は獨斷を許さない。この點は、社會主義を頭から否認する斯種團體の側はかりでなく、社會主義を肯定する者の側にも同様の事情が存することは否めない。が、しかし、これを敵として論破し、その何れにも無關心なる中立的なる國民大衆に向つて、敵の誤謬と

弱點と非違とを明かにせんとする側に於ては、一層敵陣の内容を誤りなく認識することが必要である。然らずして、十束一からげに赤化主義と稱し、非國民主義と云爲するが如きは、赤手によつて大河の勢を阻まんとする愚擧である。宜ろしく河水の流れを堰とめんと企つるよりは、寧ろその根源たる産業化の大勢そのものを斷つべきである。若し、この社會的趨勢そのものを阻止せんとするが如きは、天に向つて唾する空なる業であると悟るならば、今少しく聰明なる戰法を用ふべきであらう。而して、かやうな態度に出づることは、自己の存在理由を失ふことであつて出來ない相談であると云ふならば、自己の積極的立場の薄弱なることを語るものであつて、その純眞なる動機は國民多衆の疑ふ所となり、問題とさへされぬやうになるであらう。

然し乍ら、斯種團體の裡にも心ある者は、相當の理解を社會主義及び我國の社會主義運動に對して有してゐるに違いない。先頃東京帝國大學内に於て新人會員との間に釁を醸したる七生社員の公にしたる聲明書の中には、かうした闘爭に超然たる第三者に對して、多少首肯せしむるやうな言分が存してゐたことは事實である。この七生社なるものが、大學外の國粹團體と如何なる關係にあるか、詳しくは私の與り知らざる所であるが、廣義の反動的國粹團體と見ることを許さるるならば、この一團の者は大學に席を置く人々であるせいか、その主張には幾分人を首肯せしむるものがあつた。即ち、それは專ら新人會と稱する左傾的學生團體の言論行動の是非に集中してゐる點である。新人會そのものに對する私の意見は別に存するが、斯團體の近時の行動が、この團體の抑の發生當時に關係のあつた幾多の先輩をすら顰蹙せしむるやうなものを多分に有し、況んや第三者をして憤慨せしむる數々の非違を犯して來たことは事實である。此の意味に於て、斯の團體と全く對蹠的地位にある七生社員の立つて之を糺彈せんとする心意に對しては、一樣の同情をさへ持つてゐた者が自由主義的立場にある人々の間に在つたことは事實である。然し乍ら、七生社員の實際にとつた行動は、この自由主義者の同情さへ裏切るやうな性質のものであつた。これ、感情の激する所一時に發したものであるか、或は彼等の思想的態度に胚胎する必然的なものであるか、必ずしも明白でないが、若し後者であるとすれば、彼等の掲ぐる大義を根本的に無意味ならしむるものであつて、一個の社會的立場としては致命的な缺陷と言はねばならぬ。

若し、國粹團體が社會主義運動中の共産主義者の活動に對しての對蹠的存在として、その意義を主張せんとするならば、彼等は暫く眼を世界の大勢に放つて、その社會主義運動中に於る共産黨の地位を見究むる必要がある。今日の我國に於る如く、共産黨の政治的地位の不明瞭なるは、世界各國にその類例を見出し得ない一箇の變態に過ぎない。それは我國の社會主義運動の幼稚なると、歴代の政府當局が執り來れる、、、、、によつて結果されたる社會主義運動の畸型さに原因する

ものである。何れの國に於ても——ロシアを除き——共産黨は、國内政治に對しては微力なる少數黨であるが、、、政黨としてその存在が認められてゐる。共産黨の活動が直に社會運動の全傾向と混同されるが如きは、全くあり得ないのである。我國に於ても、かくの如き状態に至るべきことは、こゝ數年間の事である、と私は見てゐる。議會を中心とする活動の道が拓かれるに至つた今日、目下のやうな曖昧な、欺瞞的な日本共産黨の地位は決して永續し得るものでない。これは、私の多年の主張であるが、今日益々その主張を裏づける傾向を馴致しつゝある。かゝる趨勢を無視し、勞農黨の活動がいつまでも共産黨の活動であり、延いて我が國社會運動全體の傾向であるといふが如き目安と宣傳の下に、その活動の基準を立つるとするならば、獨り國粹團體のみならず、何人にとつても、大なる違算であり、過誤である。

三

若し、然らずして、その非常の觀察はどうであれ、一汎の社會主義運動又は民主主義運動に對する反對運動として立つものとすれば、國粹團體の行動には自ら別個の觀察が必要となつて來る。即ち、最近の總選擧及びその後に現れたる政友會對民政黨の爭ひに際して、いはゆる議會中心主義の是非が問題となつてゐるが、此の問題に對する國粹團體の行動には、前段の共産黨に對する議論と別箇の態度が必要となつて來る。これにも一時的な現象と見る觀察と永續的なものと見る觀察とが立ち得る。私の觀察は前者と見るものである。

我國に於る立憲政治は、議會政治即ち政黨内閣政治の主義を明確に樹立する機會無くして、ずる〱べつたりに、その實に近づいて來た。伊藤公や桂公による政黨組織の行はれた時、原敬氏による内閣組織の實現した時、又最近に於る清浦内閣の沒落の時期等に於ても、公共の問題に對する政治的意識の稀薄、明白なる理義を壅蔽せざる封建的意識の存續等の事由によつて、この明々白々たる事實すら、一個の政治制度として明確たらしむる機會とならなかつたのである。故にかやうな問題が今日に至つてすら、事新らしく持ち上げられる事情を殘してゐたのである。從つて、政友會の關係によつて、選擧政略として此の問題が利用せられ、又國粹團體によつて仰々しく持ち出されたとしても、決して不思議ではないのである。今更ら乍ら、我國民の政治的思想の幼稚及び政治的訓練の缺乏が託れるのであるが、立憲政治の母國として誇つてゐる英國民の大多數すら、ジノヴイエフ書簡事件などによつて、淺薄的な群集心理に支配され、まんまと保守黨政府の術策に陷つたこともある世の中である。それを考へれば、鈴木内相の行動が不評であり、國粹團體の主張に動かされつゝある者の比較的少き樣子であるのは、寧ろ我國民の政治的自覺の相當進んでゐる證左となり得るであらう。

議會中心主義なる主張に就ては、その文字が妥當であるや否やに就ては非議する者はあ

らう。然し、その言ひ現はさんと欲する內容に就ては、今日少しく政治の何たるかを解してゐる者にとつては毫も問題とならない。皇室と政府との關係に就ては、憲法の明文は明かに之を規定してゐる。議會中心主義なるものは、一國の主權の法律的構成に關する議論ではない。それは統治組織の構成態樣に對する政治學上の技術的概念である。從つて議會中心主義に對するものは、官僚的無責任內閣制度であるか、或は全然今日の如き議會制度を根據とせざる職能制度による統治組織かの何れかである。從つて議會中心主義即ち政黨的責任內閣制度に反對する者は、この何れかに論據を求めねばならぬ。而してその制度の理論的權威を明白にすると共に、今日の我が日本が當面せる內治外交上の諸問題を解決するに、今日の議會制度の不適當なる所以、自己の新考案の妥當なる所以を論證する必要がある。總て改革を要求する者は、それが右傾であれ左傾であれ、改革理由に就て擧證の責任がある。

然るに、我が國粹國體論者の積極的主張の中に、この點に就て我々を首肯せしむるものがあるか。消極的な反對理由や感情的な絕對理由に未だ以て、この國家の大問題を決するの資格を有しない。この點に就て、フランスの極右黨たるドウデーやモラスの一派は、今日大學生や地方青年の間に、相當の多數の信者と相當有力なる組織とを有してゐるが、その思想上の根據には偏頗にして、狹隘なる議論であるが、現存政治秩序に對する有力なる反對論がある。殊に思想家としてのシャルル・モラスの地位は定評がある。奈翁以來の中央集權的統一政治に對する反對、共和制的議會中心主義に對する職能的地方的分權の主張、共和政府のアンチ・クレリカリズムに對する反對等の如きは、一方的乍ら他にも共鳴者を有する一大思想運動の潮流に合してゐるものである。殊に近時この黨派に屬するバロアは伊太利のファシズムの行政的、經濟的制度を參照して、經濟政策の樹立に其の主張を傾注してゐる。勿論、私はモラスやバロアの意見に反對であるが、しかもこれらの人々の主張には傾聽を拂ふべき何物かがある。然るに、今日の我が國の國粹國體論者の積極的主張によつては、我々學徒の研究に値する理論や政策を何一つ提供されてゐないのである。それの出づるに當つて、根本的に討究しても決して遲くはないのが今日の現狀である。

然らば、他方我國の當面しつゝある國際關係や內政事情には、歐洲戰後に於る伊太利に於て、鼎の輕重を問はれたる議會の迷蒙せる如きものがあらうか。卑見を以てすれば、今日の我國の國際的地位は、我國の歷史始まつて以來の順境と安易なる狀態にある。實力以上にそのプレステイージは昂つてゐる。表面上は少くとも困難な事態ではない。少くとも、政治制度としての議會がその適不適を問はれねばならぬ狀態にはない。又その內政事情に於ても然りである。幾多解決を要する大問題はある。然し、それは議會制度であるが故に解決されないのではない。政黨は議會と不可分の關係にあるものであるが、政黨の無能と

粗惡とは、直に議會制度そのものの無能乃至惡を語るものではない。勿論私と雖も今日の我が日本の議會制度の完全なることを主張するものでもなければ、又世界一般に於ける議會制度に議論が存在してゐないと云ふものではない。否その反對である。然し、今は議會制度に就ての改革を論議してゐるのではなく、その制度を否認する立場の謂れなきことを云爲してゐるのである。

個々的の事件や個人的の場合に、國粹團體の行動が、喧擾を惹起し、世相頗る紛亂を極めてゐるが如き感想を抱いてゐる向もあらうが、冷靜にその行動の因由や根據を考察する時、それは現在日本の特殊事情に脈附する對蹠的存在としてのみ意義あるに過ぎずして、その特殊事情さへ過ぎ去るならば、國粹團體の守るべき限界その當然なる活動範域に止まるであらう。それは共產黨の場合と同樣である。政治は綜合的行動であり、全面的活動である。從つて理想と現實との妥協であり、一部と全部との調和である。

如何なる宗派も黨派も、國民的黨派として活動せんとする限り、この政治的原理に背馳するを許されない。今日の國粹團體の社會的政治的活動を一、二の社會事象に對する對蹠的存在としてのみ見る所以はここにある（四月五日）

反動團體を煽動す

高畠素之

一

反動派とは何處の毛唐が考へ出した言葉か知らぬが、どうも理屈の辻褄には合ひ兼ねる文字だ。動あれば必らず反動がある。これは物理學的眞理だから、ピンポン玉の實驗を俟つまでもなく先刻承知の事實である。だが、物理現象ならぬ社會現象に於いて、社會主義が正道で國家主義が反動だといふ理屈は、どこを押せば出て來るのか了解に苦しむ。恐らく、唯物史觀流の社會進化論を盲信した結果だらうと思ふが、果たして然るか否かはお釋迦樣でも御存知なきところ、辨證法なみに正反を決定するのは前途遼遠の事業に屬する。寧ろ現實的な條件を中心として論ずる限り、却つて國家主義的な傾向が正動を指示し、社會主義的な一派が反動を代表すべき筈であつた。流行とあれば致し方なく、けふ日では警視廳的役人でさへ國家主義的諸團體を『反動派』の名稱に於いて十把一束にし、主義者の跳梁跋扈を恰も社會的正動であるかに見做す皮肉に陷りつつある。大いに怪しからぬ話しだが、今更らそんなことを憤慨しても始まらぬほど、擧世滔々としてデモクラ的流行に支配されてゐる。

一の運動は、それが大きければ大きいだけ、

その反動もまた大きいのが當然である。無產諸黨の議會進出や共產黨一派の陰謀露見やに依り、一方のいはゆる左傾的運動が猛烈となるにつれ、他方これが反對勢力たるいはゆる右傾的一團が硬化し出したのも、素より物理上の必然なる反映でなければなるまい。議會中心主義に對する諸團體の一齊射擊、、、、、を始め勞農黨本部、評議會本部、大山邸に對する、、、の毆り込み、東西朝日新聞社に對する數度の襲擊等、いはゆる反動團體の活躍も可成り目覺ましきものがある。出題の趣意は、斯うした反動團體の亂暴狼藉を何と見るかといふにあるらしいが、實のところ、是非善惡は別に感じないのである。理屈をいへば五分と五分、民政黨の總務迪の如く、自分で喧嘩の種を蒔いて置きながら、對手が買つたのは不埒だといつて尻を首相官邸に持ち込んだに比較すれば、未だしも彼等の暴狀は嘿默し得るであらう。寧ろ反動團體の暴力行使は、毒を變じて藥となし得る意味に於いて、時に取つての清涼劑たるを失はぬのである。

二

現代日本人の常識に從へば、反動派と暴力團とは同義異語である。嚴密に理屈を追求するなら、暴力の行使は必らずしも反動團體に限られた譯でなく、いはゆる社會主義一派も大いにこれを慣用するのである。ただ併し、暴力行使を、、、する限りに於いて、いはゆる暴力團が必らず反動的色彩を帶び、凡ゆる大衆的運動に對して背面する事實は否定すべくもない。暴力團の斯くの如き反動性は、決して昭和日本の特產ではなかつた。東西古今を問はず然り、稗史演劇で美化された俠客や町奴にしたところで、多くは豪商大家の、、に過ぎず、その、、、、ついて生活してゐたのであつた。強きを挫き弱きを助けるといふ例の標語にしても、これは自分の醜惡な心理的動機を醇化する手段であつて、、、の信心と大して相違を發見されない。生活は生活、看板は看板、この二つを巧みに使ひこなす點が暴力團の暴力團たる所以であり、今も昔も變らぬ器用さを發揮してゐる。

彼等は切齒扼腕して忠君愛國を唱へる。だが、折角の忠君愛國ではあるが、この場合は俠客町奴の『弱きを助け強きを挫く』と一般の空念佛で、やむにやまれぬ、、、の發露から暴力を行使するのではない。、、、動機から暴力行使のやむなき結果に陷つたため、それを巧言令色する必要上、さも純粹な精神的動機から出發したかの如く見せかけようとして、斯くは忠君愛國を、、とするに至つたものと解せられる。實際、暴力團彼等に取つては、腕一本が身すぎ世すぎの元手だ。故に、貧乏人の味方をしてゐたのでは肝腎の、、が成り立ち兼ねる。善くも惡くも、富强者の御用を聽從してその利益を擁護する立場を取らねばならぬから、勢ひ反動的色彩を發揮するやうにもなつた。暴力團即反動派の因果關係は玆に生じ、國家主義そのものまで戲畫化してしまつたのである。

だが、デモクラ的氣分が上下の心髓を蝕ばみ、思想には思想を以つて對抗せよといふ常

識が瀰漫した今日、單なる大義名分論で暴力を行使したとあつては、傍の見る目が承知しなくなつたのも事實である。曲りなりにも理屈をつけ、暴力を行使するのやむを得ざる所以を公表するのでなければ、世間に通用しなくなつたも時勢なればこそ、その意味では反動を特色とする彼等と雖も、時代の潮流には無關心であり得なかつた。

三

その最も代表的な實例は、新聞廣告に依る議會中心主義に對する攻擊に求められる。まさか民政黨だつて、皇室中心主義を否定するつもりで『議會中心政治の徹底を期』した譯でもなからうが、動機の如何に拘らず『天皇統治の下』にやらうといふ限り論理の矛盾を免れず、柄のないところへ柄をすげられたも身から出た錆と許するの外はない。たうとう事端を擧げ、暴力團體の取締りに就いて泣きを入れたのだから蛇蠍の觀を免れず、暴力團としては最近の上出來であつた。殊に腕一本の武器を強行するに至らず、新聞廣告といふ商賣ちがひの文化的方法を以つて勝負を挑したとあれば、尙ほ更ら彼等の鼻も高いことであらう。彼等が從來慣用した手段は、怪文書に怪寫眞、どのみち白晝の天日に晒されては憚り多いものばかりだつた。が、今度ばかりは、自腹か他腹か知らぬが兎に角も廣告料金を負擔し、堂々と對手に肉薄したのである。拳固以外の元手の投下には極めて節約的な彼等、かう決心するまでには、淸水の舞臺から飛び降りる以上の勇氣を必要としたであらうが、恐らく今後はこれに味をしめ、愈よ新聞社の收入增加に貢獻することと思はれる。反動團體の最近の傾向として、敢て筆頭に算へる所以である。

議會中心政治反駁の廣告文面は、素より相も變らぬ大義名分論であつた。不自然と思はれる迄の、、、、、、の誇張は、それに比例して動機的不純を暴露せしめるに十分であつたが、それなりにまた、獨特の癖を發揮した團體も一二は見受けられる。癖とは何んぞ、同じ右傾でも正體はただの鼠でなかりさうな、それである。例へば、、會の如き、明白に議會輕蔑の口吻を洩らし、おのづからファスシストの意氣に通ずる破壞的要素を披瀝してゐた。、、會に至つては、國體政治の道義日本のといふ神主流の臭氣を一面發散しながら、立憲勞農黨の議會主義を攻擊して甚だ痛快、戰法の如きも無産黨のそれを濫用した傾きがあり、稚氣は稚氣として愛すべき部分を多量に認められる。が、以上の二團體は現在は兎にかく過去に於いて筆者と多少の因緣もあるので、贔屓の引き倒しに終らざる限り細評は御免を蒙むりたい。

四

正動であると反動であるとを問はず、大衆萬能の時代となつた今日に於いては、善惡好厭に拘らず、凡ゆる運動は大衆的でなければならなくなつた。少なくとも表面だけなりと、斯く見せかけねばならぬ必要に迫られて來た

のである。その意味に於いて、いはゆる反動團體と雖も、從來の如き概括的な名分論だけでは、到底存續を許されぬ狀態に置かれてゐる。自己の立場を有利に展開するには、萬人を承服するに足るべき理論的是正が必要である。若し彼等に思想的立場なく、徒らに空疎な大言壯語を享樂してゐるならば、遂に救はれ難き存在として取り殘されてしまふであらう。左傾に五分の理屈があるなら、右傾にも五分の理屈があるべき筈である。五分と五分との理屈を、如何に巧妙に俚耳に入らしめるかに依り勝敗の分岐は決定する。

ボリシエホーズムかファスシイズムか、分け上る高嶺の月に二つはなく、流れ落ちる谷川の水に變りはない。果して然りとすれば、いはゆる反動團體はその反動的立場を硬化すべきである。凡ゆる徹底した思想は暴力に結果する、といふリープクネヒトの命題を逆用すれば、幸ひにして鬼の暴力を惠まれた諸君であるから、餘すところは唯だ金棒の思想のみ。反動團體最近の傾向は、どうやらこの金棒の發見に苦心しつつあるかの如くだが、國勢力の用心棒を以つて滿足してゐた從來の態度に比較すれば、一段も二段もの進步だと見なければなるまい。斯くて腰拔役人に突擊し、極道富豪を恐喝し得たなら、黑赤混淆の決戰を試みるも愉快であらう。——などと、これは少し反動團體に肩を貸し過ぎたやうであるが、現在の如くフヤけ切つた彼等にそれだけの活を入れるのは容易なわざでなく、恐らくは空望に歸することと思はれる。

三ツ兒の魂は百まで、俠客渡世の昔から暴力團はえて用心棒を以つて滿足し勝ちだつたが、昭和の暴力團もどうやらその亞流を追隨するかの如くである。口惜しければ緊褌一番して見ろッ、喝。

暴力團の横行とその對策

細迫兼光

一

勞働農民黨は、一再ならず暴力團の襲擊を受けた。無產者新聞や、評議會や、無產青年同盟等もその例に漏れず、我等の集會にして彼等の妨害に遭つた事は枚擧に遑がない程である。最近に於ける勞働農民黨の直接に關係する場合のみでも、昨年の十一月七日朝、彼等は書記一人が留守番してゐた本部を襲擊して机、椅子、書棚をヒックリ返し、書類を撒亂し、黨旗三旒を强奪し去り、委員長の私宅では、委員長を辭職して○○會へ入れと、苦笑を禁じ得ざる『勸告』をして歸つた。十二月には、自働車に乘つてわれ等の大會を襲擊した。今年に入つては、三月廿三日の夜、本部と委員長私宅とへ爆發物を投げ込んだ。

彼等の本領は、新聞雜誌等の『不敬』の文字を見付け出したり、大喪中の華族の舞踏會をカギ付けて、、、、、にする處であるが、最近その直接的暴力行爲が目立つて來た。之は階級對立の尖鋭化を物語る事勿論である が、之れを、、、、、との關聯に於て見る事に誰しも不自然を感じない。

勞働農民黨及び無産者新聞の襲撃に就いては告訴を提起したが、今以て何等の音沙汰がない。强奪された黨旗三流が後に警視廳の手から返還された所を以て見ても、暴漢が何者であるかは、、、、、、、、してゐる筈であるのに。

去年の十月、われ等の演說會が神田の靑年會館で開かれた時の事である。その直前の演說會でビラを撒いて解散させた〇〇會の者が乘り込んで來てゐるのを見て、私は神田錦町署長に、彼等を場外に出す事を要求したが、聽きいれないので、『彼等は必ずビラを持ち込んでゐてそれを撒くに決つてゐるが、それを口實に解散させる樣な事のない樣に』に念を押しておいたが、開會するや直ちに案の定、ビラを撒き散らし始め、署長は『、、、、』とばかりに解散を命じ、、、、、、、、、を檢束した。我等の演說會には、一度來た人の必ず經驗する樣に、會場入口で紙切一枚に至るまで嚴重な身體檢査をやるのであるが、彼等に限つて多數のビラの持ち込める事は不思議（？）な事である。

三月五日には、彼等は旗を押し立てゝ、首相官邸に、勞働農民黨の解散を、おせつかいにも、陳情に出掛けたのであるが、警官は彼等を邸內に入れて、それを見物しようとする通行人を追ひ散らしてゐた。

議會中心主義か、皇室中心主義かが問題になるや、鈴木內相を支持する爲めのかなりな料金を要する新聞廣告が數次見られた。

四月三日には、祖國愛と何とかの國民大會と銘打つて、民政黨と赤化の輩を糾彈すると叫んで、『酒、辨當、無料、豐富といふ屋外集會が芝公園で行はれる事になつてゐたが、雨が降つたので如何なつた事か。

大島の揃に、セル袴、ゴム草履か何かのゾロリとした風で、頭に三角疑といつた樣な人體が、、、、の廊下を我物顔に濶歩してゐるのも偶然ではない樣だ。之は政友會に限つた事では斷じてない。我等は床次民政黨總開が、その方面に緣故淺からぬ事を知つてゐる。

彼等は、口に、、、愛國、正義を叫ぶ資本家地主の、、であり、その政府の無産階級彈壓の、、、である。最近では常盤炭坑の六千の坑夫の生死の爭議に際し、公然兇器を提げて坑夫を傷け資本家を守つた。野田の爭議ではピストル、日本刀、竹槍等を自働車に滿載して野田に乘り込まんとし、或は爭議團を襲擊し逆宣傳をバラ撒いた。最近會社が各方面に發送した『野田爭議の眞相』には『爭議團側では、會社で夜警夫を傭入れた事を頻りに非難してゐるが（中略）此の際に於て出入口の監視や火の元の注意の爲め、此の種或る數の人が必要であり操業開始後又同樣の必要なる事は申すまでもない事だと

存じます」

といつてゐる。

或は昨年、日本農民組合の奈良縣の爭議部長米田君が日本刀で瀕死の重傷を負はされた。北九州の、特に炭坑地方での血なまぐさい話は數限りなくある。

田中政府が濱口政府に代らうとも、それが資本家地主の政府である限り、彼等暴力團の、、、、、、、には毫も變動を來さないのである。

二、

暴力團といへば、我々は直ぐに暴力行爲處罰法を聯想する。

この法律は人の皆知る樣に、去る五十一議會に於て、

江木司法大臣が近時團體の威力を用ひて暴行脅迫、器物毀棄、又は面會強要、強談威迫等の罪を犯し、或は兇器を携へ或は常習として此の種の犯行を爲すものがあります。又不逞徒黨を利用して良民に迫害を加ふる者も消に少くない……法の不備なるために之を取締ること能はざる場合も之少くない。乃つて新たに法を設けまして是等の行爲を嚴重に取締るの必要を認めました」

山口政二『政府は此の提案をなすに當つて勞働運動、小作運動、水平運動等を此の法案によつて取締らんとする意志を以て致されたのであるか』

江木司法大臣『勞働なり、小作なり、水平運動などを此法律によつて取締る意思があるかどうか、是はさう云ふ意思を持つて居らぬのであります』

といふ八百長問答の後に、勞働者農民水平社同人の猛烈な反對を押し切つて作り上げたものである。

又、從來暴行罪は親告に依らなければ罰する事が出來なかつたが、此の法律によつて親告を待たずに、それら暴力的徒黨を檢擧する爲めである、とも說明せられてゐた。

然し、それら暴力的徒黨の出沒を政府自ら手を下して檢擧しようとする氣配も見えないばかりでなく、江木法相の舌の根の乾かぬ內に「勞働なり小作なり水平運動など」が種々として、此の法律の名によつて彈壓を受け、現にそれが續けられてゐる事は覆ひ隱す事の出來ない事實である。糺彈の爲めに面會して『我は水平社の者であります』といつた行爲、小作米の交涉に行つて『私は農民組合の者であります』といつた行爲等が、直ちに、、、の呻吟に値する事になつた。此の法律の名によつて、眞に暴力的徒黨の罰せられたものよりも『勞働なり、小作なり水平運動など』の罰せられたもの丶方が比較にならぬ、、い事は、現在材料の持ち合せがないけれども、斷言して憚らない。

然かも、その少數の、眞に暴力的徒黨の偶々罰せらるゝ事すらが、小の虫を殺して大の虫を生かす爲めであつて、此の法律の無產階級彈壓法たるの本質を粉飾する爲めの、、、以外の何物でもない。見よ、誰が目にも、、、、、として異論のない徒黨が、公々[illegible]隱然として橫行濶步してゐるではないか。

だからと云つて、我々は此の法律を活用して彼等をセン滅せよとは要求しない。それは資本家地主の必要が拒否する事であつて、資本家地主の、、には不可能な事なのである。

最近田中首相が暴力團に關して言明したといはれる、右翼たると左翼たるとを問はず、之の種の暴力行爲は嚴重に取締る、といふ言葉は、江木前法相の言葉よりも、より正直である。、、、、、、、、、、、、、、、れてゐるかは既に我々の知つた處である。無産階級は、他の惡法と共に、この惡法の撤廢の爲めにあくまで闘はねばならぬ。

三

暴力團の拔コのセン滅は資本家地主の、、の能く爲し能はざる處である事は既に述べた通りである。又無産階級が彼等の暴力からの擁護を資本家地主の、、に求める事のお門違ひである事は今更いふまでもない事である。無産階級はそれ自身の力によつて之に當らなければならない。すべての勞働者は工場を基礎として勞働者自衛團を組織しなければならない。すべての農民は農村に於て農民自衛團を組織しなければならない。而してそれは、單なる腕力にすぐれたものの集合であつてはならず大衆的な組織にまで進められなければならない。此の無産階級自身の大衆的、、的組織こそは、眞に勞働者農民が自己の爲めの秩序ある訓練と眞の民主々義的な組織とを持ち、以て自己の資本家地主の政府の、、更らにはその、、たる暴力團の襲撃に對する強力なる力を持ち得るに至る組織である。

然しながら、それは單に、暴力に對する組織としてのみ理解せられたのでは足らない。それは一方に於て、あらゆる隅々にまで推し擴げられて、如何に些細なる反動的、、、な現れに對しても主動的、、、となり、又全體的にも、、、なすべての組織、すべての現はれに對する主動的勢力となり、小市民、下級俸給生活者、小地主、自作農、未組織勞働者農民、等の自由を擁護し、自由を獲得し得る者は、眞に自覺と組織を持つ勞働者農民であるといふ事實を示し、無産大衆を我等の指導、影響下に導き、資本家地主に對する強大なる闘爭力を形成すべき使命を持つものとして理解せられる事を必要とするのである。

編輯者附記　以上三稿は昔本月十日以前に校了になつたので、文中にある勞農黨、評議會、無産青年同盟は今は解散してゐます。

福田氏論文「河上博士の『眞摯なる態度』と『事實の虚構』」(二月號掲載)正誤表

頁　行	誤	正
六二上—二	流通の正義」	流通の正義」
六七上—五	河上博士等の譯『資本論』	河上博士等譯の『資本論』
六七下—一一	云ふに委せる』ことが、	云ふに委せ』ることが、
六七下—一二	私は、眞に科學的批判に よつて行はれる	私は、『眞に科學的批判に よつて行はれ』る
六七下—一三	『總ての判斷を』	『總ての判斷』を
六九下—一二	政冶的	政治的
七二下—一六	すなはち本文	行を改む
七四上—四	「かく言へばとて、	かく言へばとて、
七四上—一二	行はれたのであるるから。	行はれたのであるから。
七四上—一二	その意において	その意味において
七四上—一四	訂正するのであらう。	訂正するであらう。
七四下—一七	三割八分	三割二分
七四下—一八	殘六割二分	殘六割八分
七六上—七	約三割八分	約三割二分
七六下—一八	第三節價値形態」	第三節『價値形態』
七八上—一一	r model	remodel
八〇上—四	『讀者に矢ぐ』をも、	『讀者に告ぐ』をも、
八二上—一七	一頁大にさまつて	一頁大にをさまつて
八二上—一九	Voywort	Vorwort
八二上—二一	序文まはた序盲	序文または序言
八三上—三	Torin se	Torinese
八三上—五	sl a edi zione	alla edizione
八四上—八	特に執筆した第一版の序 文」	特に執筆した『第一版の 序文』
八八上—七	思ふものでなる。	思ふものである。
九〇上—一二	『だが其れが	『だが』其れが
九〇下—一	V xi rb ld	Vexierbild
九七上—一八	同一文でないことは、兩 序文	同一文でないことは、『兩 序文
九八上—一二	淺學なり	淺學なりと
九九下—一三	『陣營だの』	『陣營』だの
一〇〇下—七	き變』られ	き變』へられ

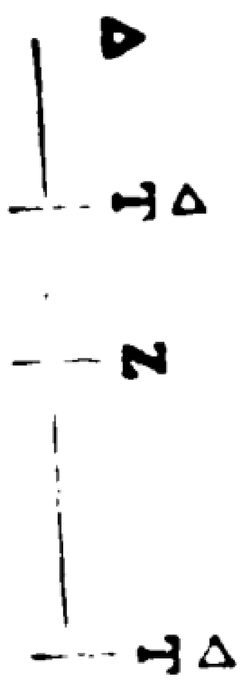
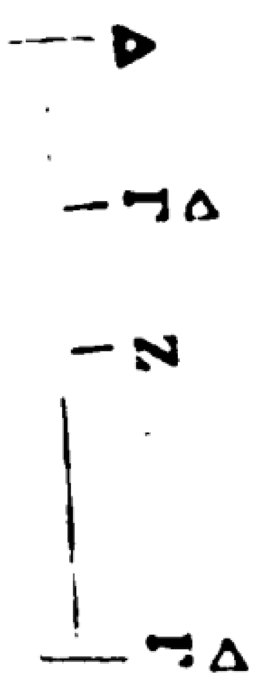
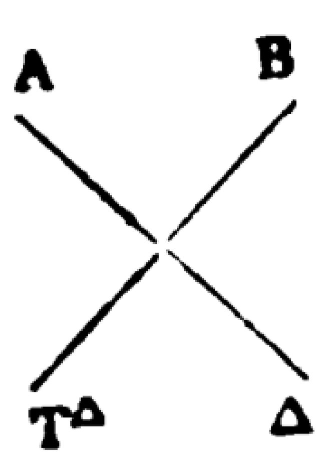
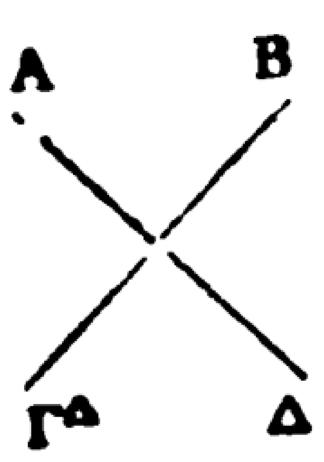
一〇一上—二一	ドラーンののなど	ドラーンのなど
一〇一下—一二	Gradin	Grudin
一〇三下—一六	Forschritt	Fortschritt
一〇四上—一	Meis nersch n	Meissnerschen
一〇四上—一	erh lten	erhalten
一〇四上—一	Fi ma	Firma
一〇四上—二	Aufra e	Anfrage
一〇四上—六	Die zgen	Dietzgen
一〇四上—七	enth t n	enthalten
一〇四上—二四	ab esetzt	abgesetzt
一〇四下—二	Ausgn e	Ausgabe
一〇五上—一二	ドラーン註検	ドラー註。検
一〇六上—一七	よれば、同は	よれば、同書は
一〇六上—一七	二圖本	二圓本
一〇八下—二	nieuts.	nichts..........
一〇八下—三	mans	man
一〇八下—五	ausspricht	ausspricht
一〇八下—一一	f rtig	fertig
一一〇下—二	ab trakte	abstrakte
一一〇下—七	abstrakte menschlich- er	abstrakter menschlich- er
一一一下—二	человвческiй	человѣческiй
一一一下—四	человвческаго	человѣческаго
一一一下—一六	tonpo	tempo
一一一下—二〇	правращается	превращается
一一三下—一九	要求しては居らぬのであ る」は	要求しては居らぬのであ る」は

（終）

福田氏論文アリストテレースの『流通の正義』（其三 其四 其一）正誤表

頁　行	誤	正
	（三月號）（其二）	
五四下—五	一一二頁三b	一一三二頁b
五九下—五	A. Trendelenburgs	A. Trendelenburgs.
五五下—一五	に	に）
五六上—一七	置かねばならぬ、本誌一月號八	置かねばならぬ。本誌一月號八
五六下—五	前段一—八七頁	前段四頁—八七頁
五六下—一〇	此の長い用を	此の長い引用を

五六下—一二	故にこそ私は	故にこそ、私は
五七上—一三	speciebus	speciebus
五七下—一〇	Lieonis	Leonis
五七下—一四	pp. 9 et seq.	pp. et seq. qu. 58 et seq.
五九上—一八	レスチユチオーネ	レスチチユチオーネ
六〇上—五	ウゴーグロチウス	ウゴー・グロチウス
六〇上—七	ライプニツ	ライプニッツ
六〇下—一	Cambridge Vol. I	Cambridge (1853.) Vol. I
六〇下—二	Matter, forme, & power	Matter, Forme, & Power
六一上—一〇	ル第二十行	ト第二十行
六一上—一一	ト第十六行	ル第十六行
六一下—一六	πλεονέκτης (プレオネクテ)	πλεονέκτης (プレオネクテス)
六二上—八	ἄνισος (ワニソス)	ἄνισος (アニソス)
六二上—一四	(法律踰越	(法律踰越)
六二上—一七	μείον	削る
六二下—一	μείον	μεῖον
六二下—三	περιέχει καὶ κοινόν	περιέχει καί κοινόν
六三上—二	νόμιμον	νόμιμον ノミモンの下に置く
六三上—六	παρανομον	パラノモンの下に置く
六三上—七	不正義 ἄδικον	不正義 ἀδίκαιον
六七下—一八	順次に吟味して見よう。	順次に吟味して見よう。其一。
六九下—三	ものであると」。	ものである」と
六九下—六	ἀδικεῖ	ἀδικεῖ
六九下—七	ὕλη	ὕλη
六九下—一三	ἄδικος	ἄδικος
七一上—八	δικαιοσύνη	δικαιοσύνη
七一上—八	δίκαιον	δίκαιον
七一上—九	ἔστιν	ἔστιν
七一上—一〇	ἴσα	ἴσα
七一上—一〇	μεριστά	μεριστά
七一上—一〇	κοι ωνὰ	κοινων ἴσοι
七一上—一一	τούτοις	τούτοις
七一上—一一	νισον	ἄνισον
七一上—一二	διορθωτικόν	διορθωτικόν
七一上—一七	γαθραία	λαθραία
七一下—一	ψευδὴς μαρτυρία	ψευδομαρτυρία
七一下—一一	(一)	(一)

頁行	誤	正
七一下—一五	ditio	ditio
七一下—一八	μισθωσις	μισθωσις
七一下—一八	Conductio ;)	Conductio,
七二上—一	などがある。これら	などがある。『これら
七三上—五	directiva	directiva
七三上—一七	ゐないのであると』。	ゐないのである』と。
七三下—九	若しは	若くは
	(四月號)(其四)	
七三下—八	proporito discreto	proportio discreta
七三下—九	Proportio Continuo	proportio continua
七四上—一五	全體が全體に於けるが如く。	全體が全體に於けるが如く、
七四下—一〇	間である。	間である』。
七四下—一五	Proportio	proportio
七四下—一六	continuo	continua
七五上—二	delicte	delicto
七九上—一一	δ χατις	ἐιχατις
七九下—九		
七九下—一三	Γ分である。	ΓΔ分である。
八〇上—十二	る。	る』。
八一上—六	法律、自ら各人が	法律は、各人が
八一上—一四	併に	並に
八一上—一七	を蒙つた人の損欠に	を蒙つた人の損失に
八一下—一六	διορθωτικὸν	διορθωτικὸν
八一下—一七	δικαιον	δικαιον
八二下—九	δικη	δικη
八三上—一七	αδικια	αδικια
八四上—四	Γ=7 D=3	Γ=7 Δ=3
八四上—五	Πは	Γは
八四上—一九	ΓΔ=AEB とす	ΓΔ=AE とす
八四上—三		
八六上—八	κοινωνιας	κοινωνιας
八六上—八	αλλακτικαι	αλλακτικαις
八六下—四		
八六下—一六	得られるであらう反對。	得られるであらう。反對
八七下—五	χρεια	χρεια
八七下—一〇	ノミスマ νομισμα	ノミスマ νομισμα
八八下—六	交換はいはれない。生産	交換は行はれない。生産

頁段行	誤	正
八八下—八	者が バーネット二二 其反對 九」其條の解 に	者が バーネット二二)。其反對 九頁其條の解 に
八九上—七	價格の意〉かくて・	價格の意)。かくて
八九上—一四	πρὸς δὲ τὴν (マロス・デ・テーン)	πρὸς δὲ τὴν (プロス・デ・テーン)
八九上—一四	ἱκανῶς	ἱκανῶς
八九下—一三	ロッス氏は、第四章の	ロッス氏は、第三章の
九〇下—六	Γは(Aが、	Γ(Aが、
九〇下—七	ところの仕事)	ところの仕事)は
九一下—一一	schling	schlingen
九一下—一二	enfrapper	frapper
九二上—一五	Βαναυσία (ネイヤン)	Βαναυσία (ボイヤン)
九二下—一一	Ποιοῦν	Ποιοῦν
九四下—一五	プフエンドルク	プフエンドルフ
九六下—六	ἐημίας (ゼーミアス)	ζημίας (ゼーミアス)
九六下—六	μέσον	μέσον
九六下—六	δίκαιον (チカイオン)	δίκαιον (ヂカイオン)
九六下—六	τὸν	τῶν
九六下—七	ἐκούσιον	ἑκούσιον
九六下—七	ἴσον	ἴσον
九六下—八	τὸν	τὸν
九六下—八	ἀκούσιον	ἀκούσιον
九六下—八	τὸν (トン)	τὸν (トーン)
九六下—八	ἐν (エン)	ἐν (エン)
九六下—八	τοι (トス)	τοῖς (トス)
九六下—九	ἀκούσιος (アーシオス)	ἀκούσιος (アークーシオス)
九六下—九	συνάλλαγμασιν	συναλλάγμασιν
九六下—九	in obligntionibux (イン・オブリガチオニブス)	in obligationibus (イン・オブリガチオニブス)
九七上—一七	obligntiinibus	obligationibus
九八上—三	διορθωτικόν (ヂオルソチコン)	διορθωτικόν (ヂオルソチコン)
九八上—四	δίκαιον (チカオン)	δίκαιον (ヂカイオン)
九八上—四	ἐπανορθωτικόν (エパノルソチコン)	ἐπανορθωτικόν (エパノルソチコン)
九八上—五	私が前段にあげた通り(前段五頁)	私が前段あげた通り(前段七十六頁)
九八上—七	更らに(前段十十一頁)	更らに(前段八十一頁)
九八上—一三	の取引不任意たると	の取引(不任意たると
一〇〇下—六	κοινωνίαι (マイノニアイ)	κοινωνίαι (コイノニアイ)
一〇〇下—六	ἀλλακτικαί (アラクチカイ)	ἀλλακτικαί (アラクチカイ)
一〇〇下—一七	理解して得たもの	理解し得たもの
一〇一上—三	ところであるから』(前段二頁)	ところであるから』(前段七十三頁)

──（講田氏論文正誤表）──

頁・行	誤	正
一〇一上――五	ἀξίαν（アン）	ἀξίαν
一〇一上――五	ὅτό	τό
一〇一上――七	ὁμολογοῦσι	ὁμολογοῦσι
一〇一上――一二	Secundum（セクンドム）	Secundum（セクンドム）
一〇一上――一八	五頁のバーネットの言を玩味されたい。	七十六頁のバーネットの言を玩味されたい。
一〇二上――五	εἶ·αι	εἶ, αι
一〇二上――六	ϲϙ	αἱ
一〇三上――一	ア氏説の中核が	ア氏説の中核が
一〇三下――九	云々。前段九頁。	云々。前段八十頁。
一〇三下――一四	前段十頁。	前段八十一頁。
一〇四上――一七	からである。前段原稿の九一―二頁	からである。
一〇五上――一〇	たるに過ぎない」かくて	たるに過ぎない。前段八十九頁。かくて
一〇五下――五	前段十八頁	前段八十九頁
一〇六上――一三	ἐνδέχεται（エンデヘタイ）	ἐνδέχεται（エンデヘタイ）
一〇七上――一三	第五章、第八節。	第五巻、第八節。
一〇八上――一一	so und so	soundso
一〇八下――一〇	*Quanti*	*quanti*
一〇八ト――一〇	domo detur.	domo detur. p. 53.
一一〇下――一六	に應じし十二月號（其一）追	に應じて
三八下――一八	ジエー	ジー

(福本和夫著)

經濟學批判のために

唯物史觀のために

四六判三九〇頁
定價金壹圓
送料拾八錢

四六判三六五頁
定價金壹圓
送料拾八錢

燦として輝く鬪爭
の二大記錄
最廉價版としての刊行

著者の名はすでに大衆のものである。有産者經濟學の批判のために、無産者階級の歷史觀のために、敢然として戰へる著者の功績は偉大にして其の鬪爭の投じたる波紋は今やまことにはかるべからざるものがある。今日まで哲學者は世界を色々に解釋したにすぎなかつた。だが肝要な問題は世界を變革することでなければならぬ。この世界變革のための、輝かしい鬪爭の二つの記錄を、茲に、切實なる江湖の需に應じ最大の廉價をもつて、普く大衆に提供しえたることをよろこぶ。前書は嘗て、「經濟學批判の方法論」として、後書は「社會の構成＝並に變革の過程」及び「唯物史觀と中間派史觀」其の他として刊行されたるものであるが、此の廉價版においては、鬪爭實踐の敎訓に基く幾多の内容上並に構成序列上の新なる訂正加除によつて、其の面目を全く新にしてゐる。

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番　電話芝 自一一二一 至一一三四

三越の研究

經濟眼から見た三越

下田將美

一

三越が株式會社としてのデパートメント・ストーアの中で最も大きなものであり、最も良い成績を擧げてをるものであることは、今更らしく云ふまでもないことである。白木、大丸、高島屋と並べて見ても、資本金から云つても、配當率から云つても一番上位にある。關東の大震災にはどの百貨店も火に包まれて莫大な商品を灰にしてしまつた。建物は荒廢に歸した。あゝ云ふ大事變の時には組織が大きければ大きい程、打擊も亦大きいわけで、三越の損害は隨分尠からぬものであつた。駿河町の三越の入口に長々とうづくまつてゐたトラフアルガー・スクエーアのネルソン塔まがひの大獅子が白粉のはげた女のやうに無慘に傷だらけになつてゐた震災後の光景は、私のまだ忘れ難い生生しい記憶に殘つてゐるが、三越の營業內容はあの當時大石像の獅子よりももつとひどくなつたやうに世人からは思はれてゐた。事實ひどい打擊であつたには違ひない。それは震災の年の十一月に當時千二百萬圓の資本金を七百萬圓に減資して、大整理をやつたのでも明らかである。しかしその後三越はメキ／＼と恢復して行つた。さうしてその翌年には千五百萬圓に增資して、反つて震災前より大きくなつてしまつた。同じに燒けた白木屋が同じやうに、震災の十一月資本金を半額減資して七百五十萬圓としたまゝ今日まで經營が面白く行つてゐないのに較べれば、一割五分といふ良い配當を行つて、私達から見ればチト無鐵砲に手をひろげすぎると考へられる程、益々發展してゐる三越は、何と云つても百貨店の王樣の地位は動かせない。世は不景氣の風がすさまじく吹き捲つてをるとは云つても、一度び三越の中へ入つて

見れば、そも／＼不景氣とはどこの國だと云ひたい位に、押すな／＼の盛況である。きらびやかな服裝をした婦人連や、モガ、モボにいたるまで、樂園にでも遊んでゐるやうな呑氣な樣子をしてねり歩つてゐる。誠に天下は太平である。けふは帝劇、あすは三越、誰れが造り出した文句であるかは知らないが、上つつらの都會文化を象徴したものとしては誠に申分のない名文句である。それ程三越は繁昌してゐる。然らば三越は何故にかく流行し、この流行ることによつて、どんな影響を各方面に及ぼしておるのだらうか。私はこの點を經濟に關する範圍だけで少し書いて見たいのである。

二

百貨店の經濟上から見た經營上の利益は書物などにはいろ／＼書いてある。けれども何と云つても普通の小賣店と違つて著しく有利な點は豐富なる資本の力による仕入れ原價の低廉と云ふことに歸着する他はない。普通アメリカあたりではデパートメント・ストーアは生産者の直取引が多いので、他の小賣商のやうに煩雜な仲介者の手を出來るだけ省いて、それだけ仲介手數料の支拂を輕減することが出來、仕入れ原價を安くしておるのであるが、三越などでは決して生産者との直取引が大部分を占めておるわけではない。寧ろ問屋から安く買へるやうな組織になつてゐる。呉服類や雜貨類等の種類によつて仕入れの方法も違つておるので一がいには云へないが生産者との直取引は總體から見て問屋の手をふるものより恐らくは少いであらうと思はれる。殊に呉服類などは生産者の直取引よりも問屋から買付ける方が有利な條件が多分にある。

假りに呉服類のすべてを生産者から直取引するとすれば、何と云つても大資本の力によつて大量に仕入れをするのであるから、安く値を殺して買へることは間違ひはない。けれどもそれと同時に生産者の直取引には限られた時期があつて、いつでも好きな時に好きなものを選んで買ふことも出來ないし、大量取引であるだけにその商品に對するリスクの全部を百貨店が負はなければならない。仕入れがうまく圖に當つて、良く賣れた時には儲けも大きいが一つ間違へば損失も大きい。だから問屋から買入れるのと非常な値開きでもあれば別であるが、もし問屋から安く仕入れ得るものならば、寧ろその手を通した方が、勝手なものを勝手なだけ仕入れ、しかもいつでも間に合つて、危險の度の少いだけ有利である。三越などは問屋から安く仕入れ得る條件が備はつておるので、多くは直取引よりも問屋の手を通す方をやつておるのである。松坂屋は名古屋が中心になつて仕入れをしておるので一時生産者からの直取引を主としてやつたこともあるが、成績は餘りよくはなかつたらしい。本來大資本の百貨店などは生産者と直取引をしてゆくのが原則である筈なのに、實際は問屋の手を經てゐるといふのは、問屋から思ひ切つて安く仕入れるからである。呉服類は關東と關西とで卸賣の方法が違ふ、桐生、足利をはじめ關東は主にせり賣であ

るが、關西特に京都などは昔からいろ〳〵の仲介人の手を經るのが慣習になつてゐた。機元が作り出したものは上仲買、下仲買へと順に渡り、更にそれが一二の問屋を經て初めて小賣店へゆくわけで、少くもそこに三つや四つの仲介が生産者と小賣店の間に介在してゐた。これは生産者が金融上に豐かでなかつたゝめに順々にこうした手をへて、やりくりをしておつたのであるが、歐洲大戰を境にして生産者は非常に富んで來ており、最早金融上の便利のために煩雜な仲介人を必要としなくなつたので、今では生産者から問屋、若くは生産者自らが問屋の地位を兼ねて、上下の仲買人なんてものはなくなつてしまつて來てゐる。三越などは今日では問屋の手をへて生産者の造つたものを買つてゐる。これなども直接生産者から買つた方がよかりさうであるが、矢張り實際には問屋をへた方が三越にとつて有利なのである。然らば何故かやうに直接生産者との取引よりも問屋の方が利益なのかと云へば一言にして云へば問屋からすばらしく安く仕入れられるからである。

それならば三越の仕入れに對して問屋筋が何故さやうに安く賣るのかと云へば、それには數々の理由がある。三越と取引をしておると云ふ無形の信用上の利益もあらう。大量に買入れてくれると云ふ利益もあらう。しかし何と云つても最大の利益は金融上の利便が非常に多いと云ふことである。拂ひは確實であつて、しかも比較的短期の手形で支拂はれる。しかも三越の手形ならば云ふまでもなく一流手形であるから割引くにしても極めて低率である。そこで問屋筋は三越に賣ればすぐに金になつて、しかも生産者へはさうすぐに支拂ひはせぬ。その間に金のやりくりがどうにでもつく。これ程有難いことはない。そこで三越へならば出來るだけ安く賣つてこの利便に浴しやうとする。三越の仕入れ原價は安くならざるを得ない。無論たしかなことは私達にわかりやうはないが、平均して見て問屋筋が三越へ賣るものは雜貨で五分位の利益しか得てはゐないであらう。呉服ならば木綿ものは二分か三分の薄利、その他のものでも五分以上の口錢にはなつてゐまいと想像される。これによつて見ても、いかに三越が小賣商に比して有利な仕入れをしてゐるかは明らかであらう。

かうした低廉な仕入れをすることの出來る三越は、今度は販賣の方面から云へば又恐ろしく有利な條件が備はつてゐる。三越はいかに大なりと雖も結局は小賣商である。右から左に金になる商賣をしてゐる。日々の賣上げは大分に秘密にしてゐるやうであるが大よそは見當はつく。しかもその大部分が現金である。得意廻りをして月末勘定になるものは何と云つても日々の賣上げよりは少い。總體から見て賣上げの六割五分までは現金で殘りの三割五分位が掛賣になるのだと云ふから、流動資本の豐富さも知るべしである。これに所謂商品切手のやうな、小さく見えて實は甚だ小さからぬ無利子の金をさへ使ひうるのであるからすばらしいものである。

更に小賣商であることの特點として、資本流動の回轉數が非常に速

い。恐らくは一ヶ年に資本の回轉數は七回以上を下らぬであらう。假りに七回として見ても同一の資本が一年に七回も利益をあげるのである。大資本に對して驚くべき有利さだと云はねばなるまい。

以上大略の記述から見てもいかに三越が、仕入れに對しても、叉販賣上に於ても有利な武器を擁しておるかの一斑は覗ひ知ることが出來るであらうと考へる。

三

さて然らばかうした安い仕入れをすることが出來、有利な經營をすることの出來る三越が、小賣業者にいかなる影響を及ぼすかと云へば云はずして明らかである。世には三越のやうな大規模の百貨店は經營費に非常な莫大な金がかゝる。東京にしろ、大阪にしろ目貫の場所に大きな土地と建物とを擁して、しかも多數の人を使ひ、人件費だけでも非常なものである上に廣告その他も始終はでに大げさなものを出してゐて、その費用だけでもすばらしいものがある。から云ふ莫大な經費はいやでも商品の上にかゝつて來るのであるからさう安くは賣れない。百貨店の一つの欠點は經營費のかゝることであると論ずるものもある。正にこれ一面の理である。けれどもいかにも大げさなものに考へられる經營費も取引額の大きいことや、利益率の多いことと對照して見ると實はそれ程に重大なる負擔ではない。結局すべてを差引いても小賣商よりも安く賣られることは本質である。しかも百貨店だけに殆んど無いものはないと思はれる位に、すべてのものが一つ建物の中で求められるのであるから、小賣商にとつては大いなる脅威であり壓迫である。

すでに安く便利に賣られることによつて壓迫される上に、三越は問屋側に對して絶大の力を持つ。問屋側から云へば三越は金拂ひもよし、大量の取引も出來、金に困つた時には無理だと考へられるやうな投賣をしても急を救ひうる有難い得意先きであるから、前にも述べたやうな薄口錢で取引をするが一般の小賣商に對してはさうはゆかぬ。どうしても三越よりも高く賣らねばならぬ上に、場合によつては三越へ安く賣放つた穴を埋めるために小賣店に高く賣られねばならぬといふことさへ生じてくる。小賣商なるものは正に二重の壓迫である。十數年前百貨店の繁榮を見て、佛國では「小賣商は亡びる」と云ふ書物が書かれて、百貨店に對抗する小賣商の合同運動が唱へられた。我國に於ても正に同じやうな現狀にある。此不景氣の世に、小賣店の店頭には客數は少くなつても三越には日々蟻の群るやうに男女の客が押よせる。小賣商への壓迫は正に如實に三越の中で見られうるわけである。

更にその手はのびて地方へゆく。私は先頃臺灣へ一ヶ月程の旅をした。臺南へ行くと公會堂は三越がかりうけて盛んに出張賣りを大規模に行つてゐた。臺北の鐵道ホテルでも矢張り同じ大出張賣りが行はれてゐた。地方の小賣商はこのためにどれ程客を奪はれたことか。單に

小賣商だけではなく、地方の小賣商に卸賣をする問屋筋も亦間接の打撃をうけたことであらう。百貨店の伸びてゆく勢はどこまで同じやうな小さな商人に痛撃を與へるかはかり知られないものがある。弱きものは大きく強きものに益々壓倒されてゆく。この事實は三越對小賣商の上にはつきりと見出されるのである。

四

百貨店對小賣商の問題は同じ商賈上の競爭者としての問題である。小賣商人だけの立場から見たならば重大なる問題には違ひない。しかし乍ら生産者から消費者への手に渡るまでに餘りに多數の仲介者の手を經るやうになつてゐたゝめに、商品の價格が手數料のために高くなりすぎる從來のやうな組織は、結局百貨店のやうな大量の仕入れによる安價なる商賈機關の出現を見せずには置かない。これは消費經濟の進歩に伴ふ當然の過程である。最後に殘る問題は果して百貨店によつて民衆はより安いものを求めることが出來るかどうかと云ふことである。消費經濟の上から見て百貨店は果してよき仕事をしておるであらうかどうかとのことである。これが最も重大なる問題として殘されるものである。

三越は今もやつて居るかどうかは知らないが店員に三圓の懸賞金をかけて、他所の店より三越で高く賣つてゐるものを發見させたものであつた。普通一般にありふれたものは確かに三越は安いと云つても差支へないやうである。しかしかうした安い値段で賣つておつても三越の利益は驚くべき高に上つてゐる。三越の人に聞くとまづ平均して賣價一圓に對して利益は十六錢位に當ることになつてゐると云ふことである。賣價の一割六分の儲けとすれば原價から見れば二割位の利益にはなる。しかし平均しての利益は二割以上には勿論なつてゐるであらう。それでなければ一割五分の株主配當をしてゆくわけにはゆくまい。資本の回轉率の速度の早いことや、その他を考へて見れば消費者へ供給するものは正確に云へばもつと〳〵安くすることが出來る筈である。

しかし一般の民衆へ、ともかくも從來の小賣店よりも安く品ものを賣ることが出來るのならばそれで社會的には確かに立派な意義を有しておるではないか。消費經濟上決して無意味な組織ではないではないか。消費階級としては三越その他の百貨店を讃美して然るべきではないか。と云ふ人があらう。もしも必要な安いものばかり買ふのならば三越は正によき百貨店であり、よい組織であるとも云ふことが出來るであらう。しかし實際問題としてはさう簡單には參らぬ。

百貨店への一つの有力な非難として、値段のわかつてゐるありふれたものは安くして置くが、値のわからぬやうなものには高い値をつけて置くと云はれてゐる。これは或程度まで確かに本當のことであらう。しかもこのありふれたものだけが安くて、その他のものはそれ程安くないと云ふ所に消費者としての考へるべき點がある。もしもすべ

ての人が三越へ行つて必要だけの安いものを買つて來るのならば文句はないが、一度び三越の門をくゞれば、そこに見られるものはきらびやかな購買欲をそゝるやうな贅澤なもの、不必要なものがゴロ〳〵飾り立てゝある。消費經濟に自覺のならぬ虚榮心の強い婦人達などは三越へ入つたが、最早、買はでもいゝものを買ひたくなつて買つて來る。三越と云ふ名からうける誘惑は、多くの婦人達にとつては、決して本當に安いものをばかり買ふのではなくして、寧ろ高價な不必要なものを買ふと云ふ傾向に奔らせることは爭はれない。ありふれた普通のものならばひとり三越ばかりではなく、どこでも安く賣つてゐる。値が違つたことにしても大したことはない。時によるとポプラーなものは小賣店の方が顧客吸收のために儲けなしの原價で賣つてゐるものもあるので反つて三越より安いものがまゝある。そこで三越へ來る客は實際にはポプラーなものを買ふのではなくして、寧ろ高價なもの、無駄なものを余計に買ふと云ふことになるのである。これでは百貨店を消費經濟上の善設備だと云つて讃美ばかりはしてゐられなくなる。もとよりこれは三越に對する非難であるばかりではなく、根本的には今日の消費者の無自覺に歸せなければならないことである。けれども消費者をこゝまで誘惑して來る大きな力が百貨店にある以上は、又その點に三越はじめすべての百貨店が大努力を重ねておる以上は、消費經濟と云ふ立場から云へば、安いものを賣ると云ふことよりも、寧ろ無駄な贅澤なものを買はせられると云ふことの方が余計に重大問題である。百貨店を單純な經濟政策論ばかりで、一かいに論ずることの出來ない點は實にこゝに存するのである。

けふは帝劇、あすは三越。この名文句が現代の虚榮生活の好箇の表現である限り、一般の民衆の生活問題から見た三越なるものは決して、生活費の安價なる供給所ではなくして寧ろ贅澤なる無駄な消費の奬勵所である。消費經濟の改善に志すものは單純に百貨店の理論上の利益ばかりを論ずべきではなくして、このかくれたる無駄な消費の誘惑をよく考ふべきであらう。

五

三越は今後どこへ往く。百貨店はこれからどこへ往く。米國では一時旺盛を極めたデパートメント・ストアがだん〳〵にチエーン・ストーアに押されて來た。メール・オーダー・ビズネスにも押されて來た。日本ではまだその時代は來さうにもない。今の所では百貨店は品ものをより安く賣つて顧客を吸收すべきか、サービスをよくして客扱ひの改善によつて繁昌をはかるべきか、この二つの道の何れかを主としやうとしておるらしい。米國でもメーシーのやうな安價主義でつき進んでおるものもあるが、大部分はサービスの改善に全力をそゝいで行かうとする傾向にあるらしい。三越にしろ、大丸にしろ、松坂屋にしろ恐らくは今後の競爭はこの點に力を入れて行くつもりであるだらう。今日でも百貨店より誰れが見ても高いものを賣つてゐる小賣商店が立

叢な三越白木に對抗して、しつかりした分野を占めてゐるものがあるのは、全く客扱ひの馴れてゐる所にある。少數の顧客の趣味嗜好までも知りぬいて望みのまゝの品ものを提供する特點は小さい店の有力な武器である。百貨店のやうな大組織ではこれは仲々實現出來難い所である。しかし競爭は續く。百貨店が伸びてゆくにつれて小賣店は客扱ひの萬全を期するためにいよ〳〵努力するであらうし、百貨店も亦この領分を蠶食してゆかうとするであらう。

買ふに氣持よく、客扱ひのよい方がだん〳〵に勝つてゆく。三越の評判がいゝの惡るいのと云つても詮じつめればこゝに落ちるのが今日の有樣である。大阪では大丸が評判がいゝ。その理由も矢張りこんな所にありはしないだらうか。しかし百貨店がサービス改善にいよ〳〵努力してその結果、大きく云へば國民の消費經濟の上にどんな影響を來す。もしもそれが結局奢侈の奨勵をいよ〳〵大きくするだけに止まるならば、決して喜ぶべき傾向だとは云へないであらう。

サービスの改善もいゝ。同じ買ふならば氣持よく買へるに越したことはないからである。けれども、もう一歩すゝめて何故安價提供をもつて徹底させないのであらう。三越の内容なり、利益なりから見て、より安くしうる余裕は私は充分に認めることが出來る。

嘗て歐洲の大戰の後米國で官民一致の物價引下運動が旺盛になつた時に、ワナメーカーは各新聞紙に大々的の廣告を出して、國家のために物價引下の先驅となる旨の宣言をして値下割引を發表した。ワナーメーカーの投じた巨石は忽ちにして他のデパートメント・ストーアと小賣商を動かした。對抗上廉賣をせずには追付かなくなつたのである。この運動は擴大して遂に生産者側までも引づり込んだ。米國羊毛會社、アーバツクル製糖會社、フォード自動車會社まで進んで廉賣運動に参加して價格の引下を行つた。百貨店の威力も亦大なりと云はなければならない。

英國には贅澤なものを賣り、顧客の購買心をそゝることに全力をつくしてゐる百貨店も多いが、同時に消費組合運動の一つの現はれとして出現してゐる本當に消費經濟改善を目標とする大きな百貨店もあるから云ふ例を見て日本の百貨店のすべてが同じやうなたゞ華やかな虚榮市場としての將來ばかりを目がけて進んで行くのは、果して當を得たものであるだらうか。三越とさへ云へば最も贅澤な買物場所でゝもあるかのやうになつてゐるのは永い目から見て果していゝことであらうか。三越は大きう大きうとなりすぎてゆく。反省する前に、まづ進め進めと手を八方にひろげてゆくやうに見える。進むのはいゝが同時に内を固め同時に三越の進み行く分野を靜かに反省する必要があらう。敢て余計なことを一言つけ加へて筆を擱く。

三越藝術を作れ

秦豊吉

一

古い佛蘭西の言葉に、女の求むるもの、神これを求めたまふ、とある。女の求めるものとは、云はずと知れた「好い着物」といふ事である。「好い着物」とは、實は「流行の着物」といふ事である。流行の求むるもの、女これを求めたがる、と言ひ直しても、大した違ひはないやうである。

流行とは衣裳に現れた女の情操である。流行の世界とは、女の世界である。女の着物は常にその時代の文化と共に變化する。潑剌たる女の精神のない處に、潑剌たる流行はない。

日本の女に流行があるか。甚だ多くの日本の女には詩的精神が欠けてゐる。甚だ多くの日本の女には美的感覺が鮮でない。甚だ多くの日本の女が、心身共に從屬的生活をしてゐる。甚だ多くの日本の女が……餘りに平凡な女ばかりである。

かういふ女の世界には流行がない。日本の少女に斷髪が流行したと云はれた。僕の見る處ではこの斷髪は摸倣と氣紛れであつて流行とは言へない。なぜならば唯髪を切れば好いといふ丈で、いかに美しく髪を切るかといふ事を忘れたからである。斷髪の美は長髪の美に勝るとも劣らない。然し日本の若い女には、斷髪の美を發見する丈の詩的精神が欠けてゐた。そこで鳥の巣のやうな斷髪ばかり出來てしまつた。歐州に見るやうな新しい女性文化の表現としての髪にならなかつたのである。

流行は發明するものではない、發見するものだといはれてゐる。美しい斷髪はねばりの強い日本の黒髪でも極めて美しく出來上る筈であつたのである。然し日本の若い女にはこの美がどこに在るか分らなかつたのである。もとより美容院とか美髪師の何々女史は、命題的に髪をいぢり廻して技巧を弄す事は出來るが、新しい生活精神を表現する藝術としての斷髪を作り上げる事は出來ない。そこで斷髪は無慘にも段々影を潜めかけたのである。

着物に就ても同樣である。本年の流行は、若向きとして[illegible]色、中年

向として淺黄紫紺、とかいふやうな色合の反覆とごく僅かばかりの模様の描き直しはある。然し現代の女の生活をより生々とし、女の精神をより美しくし、女の個性をより鮮にし、女の文化をより高くする爲の流行といふものはない。流行の無いといふ事は、女の生活の退歩であり、停滯である。しかも流行が女の本能であり、「何を着るか」といふ事が女の範疇命令に拘らず、日本の衣裳は形に於て着方に於て色合に於て何年たつても同じ事である。少しも日本の衣裳には、今日及明日の生活の意匠と色彩と形が無い。

一つのものは二度と同じでない、とはヘラクリトスの言葉だ。日本の女の生活が、從つて日本の社會の生活が今日から明日へとより好きものになる爲には、より美しきものになる爲には、必ずここに流行が無ければならぬ。そして今日の日本の條件から見て、流行に對して最必要なものは、日本の流行に對する最好き發見者を求める事である。女の美の生活に正しく且實際的方向を示す指導者を置く事である。日本でこの仕事の出來るのは、今のところ恐らく三越が唯一であらうと思はれる。

二

西洋の着物の流行は、衣裳サロンの手で出來る。日本にはかういふ意味のサロンはない。もしかういふものを設けるとすれば、やはり三越といふやうなものに頼らなければ、ほかにはそれ丈の資格も資力もないからである。三越位の店は歐米へ出しても決してひけは取るまい。唯殘念なのは三越程の店が日本には唯一つだといふ事である。かういふ希望は三越のデパートメントストアとしての目的に違ふかも知れない。然し今の日本のデパートメントストアの意味は、歐米で解してゐる意味とは餘程違ふ。然しそんな事は構はない。他には今のところ出來ない仕事だからである。そこで三越に對して流行といふ上にどういふ仕事をして貰ひたいか。

まづ僕の考へるのは、今日まで三越が何か流行を作つたかといふ事である。僕の知る限りでは無い。「明日は三越」といふ極めて巧妙な標語は喧傳されたが、日本の生活に、女の文化に美的方向を示したと見るべき流行は無いやうである。

然し日本の女の衣裳といふ問題には、頗ろ多くの困難な問題が纏ひ付いてゐる。日本の着物は將來一種の假裝として、或は寛濶な家庭服として以外永續して用ひられるものでないと思ふ。洋風生活の增加と仕事の簡易化とは、到底高價な所謂貴婦人向衣裳といふものは亡びるであらう。唯現在としては今日の日本の着物を、それをなほ多くの女が着る以上、いかに多忙で輕快な今日の生活に順應させてゆくかの問題がある。

嘗て元祿袖といふものが好まれた事があつた。然し日本の少女はそんなものに滿足しないで、今日の西洋服に着換へたのである。この次には、少女以上の女が日本の服を脫ぎ捨てるであらう。この過渡期に

あつてさへ、日本服の形に着方に、少しも溌溂たる新しく生きやうとする精神が現れて來てない。日本の着物をいかに着るか、いかに新しい形を作るか。これは今日の日本の女には到底考へられない創意を要する問題である。形を變るとは、日本の着物の建築的、彫刻的表現である。もし三越サロンがかういふ問題に深く入つていつて、現代の生活即女の衣裳といふ點に、最も大膽な開拓をしてくれたら、今日の女の生活はもつと自由な新鮮なものになるであらう。

日本の着物は今日まで繪畫的でばかりあつた。なぜ日本の女は永遠に今日の着物といふ形の中に束縛されてゐなければならないか。重量と死藏といふ以外に多くの美を空費してゐる帯はどうか。女の衣裳で唯一の色彩的變化を與へる半襟はどうか。その襟はいつものしのやうに重ねられてゐなければならないか。なぜ裾はあゝ深く合はせなければいけないか。もつと襟を開いて胸を露してはいけないか。なぜ日本の女の着物の形はいつまでも同じか。

いかに着るかといふ事と同時に日本の流行として何を着るか、といふ事も考へ直して貰ひたいものである。日本の印判趣味は遂に絹製となり、模様人となつて先づ西洋の女に着られた。日本の因習を見事に蹴飛ばして、この大膽な創意を敢てした西洋の女の前に、日本のすべての衣裳屋も女も全く顔色はあるまい。西洋人の東洋紀行記に見る日本の女の衣裳と着方は、僕等の見て始めて彫刻的な快活な變化に富んだものがある。かういふ見方からも日本の女が永遠に同じ箱に入つたやうな形をしてゐなくても好いではないか。

かういふ事は物を賣る丈のデパアトメントストアの仕事としてなら、それで十分である。然し僕は三越がどこまでも現代日本の女の生活を流行によつて改革し誘導してゆく位置に、明日の文化の爲に立たん事を求めるのである。三越に求める譯は、日本にこれだけの設備と條件を持つべきサロンがほかに無いからである。

三

巴里と流行といふ事は離せない。なぜ巴里に流行が起るか。それは巴里の藝術的雰囲氣の力に外ならぬ。巴里で作られるものはすべて美くはない。然し巴里では一切の美しいものが許される。夥しい衣裳サロンも、この藝術的雰囲氣の中にある。

この藝術的雰囲氣を三越も亦持つて貰ひたいものである。今日の三越はこの精神には甚だ乏しいやうだ。簡單な實際的な一例を擧げやう。流行衣裳の着付をした陳列人形が、いかに僕等の求めやうとする美的精神と遠いか。そこには更に清新な藝術的表現が無くして、いつも混雜と不統一と停滯と俗氣があるばかりである。あの皺だらけの衣裳周した日本の人形と、獨逸佛蘭西から輸入された新しい彫刻風のモデル人形とを比較して見給へ。いかに日本の人形が二十年前と變りなく、いかに獨佛のものが輕快と新鮮に滿ちてゐるか分るであらう。これは人形の罪ではない。今日に至つても僕等に餘りに縁の遠い表情を

した人形に、構はず着物を着せやうとする三越の罪である。三越に藝術的氣魄が缺けてゐるからである。

東京には衣裳サロンもソサイチイもない。ここに巴里のやうな意味の藝術的雰圍氣を作る事は頗る困難であらう。唯三越が三越としての藝術的雰圍氣をつくり、そこに時代と生活に暗示する正しい詩的精神を醸し、眞の藝術的流行の源となる事は、最も僕の希望する處である。

四

流行は資本主義の最も好む處だとゾムバルトは言つてゐる。資本主義が奢侈を好むものだとすれば、流行は奢侈でなければならない。

僕は流行そのものを奢侈だと思はない。もし贅澤な流行があるならば、それは流行でなくして、必要以上の無意味な余計なものに對する悦びに止る。流行はどこまでも一般民衆の必要な生活意志の反映でなければならない。女は流行によつて、自分の個性を淸く明確にし、その性格を美く向上させるものである。「好い着物を着る」といふ事は、「好い教育をする」といふ事でなければならない。赤くふくれた手に輝くダイヤモンドは、所有を示すものであるが、劣等な「不必要」である。

三越が一本三千圓の帶を賣るといふ事は、流行とは何等關係のない奢侈生活に對する阿媚である。もし三越が資本主義によつて立たうとするならば、三千圓の帶をつくつてゐれば好い。然し同時に三越の文化的價値は零である。ゾムバルトの言ふ資本主義の好む流行とは、金のかゝる不必要の事である。そして金のかゝる流行は、概ね下等な流行であると同時に、流行としての生命は持つてゐないのである。

五

僕は今日の世界の流行即ち女の生活の求むる處を、單純と自然だと思つてゐる。この單純と自然とは衣裳屋の手から生れるものではなくして、女自身の家から工夫される筈のものである。既念乍ら今の日本の生活は、今の日本の女は、自ら新しい工夫と美しい創意を發表する力も情熱も持つてゐない。藝者が流行を作つたのは、流行の原始時代である。今日の所謂有産有閑階級の名流婦人には、流行の詩的精神は分らない。今日の女風俗をより美くし即ち今日の女をより好く教育する爲に正しい流行をつくる事は、日本ではやはり三越のやうな社會的位置と資本的力量を持つものの指導誘發に俟たなければなるまい。「明日は三越」といふ標語は、明日は贅澤へ、といふ意味でなくして、明日はより藝術的な生活へ、といふ意味に變つてこなければならぬ。三越の流行は資本主義の爲に蹂躪され又惡用されてはならぬ。明日の三越によつて美しき藝術的雰圍氣と、穢れない詩的精神とが、今日の女に、從つて今日の僕等の生活に働きかけなければならぬ。かくして三越は初めて日本の文化をさし招き、誘導し、啓蒙し、資本主義によつて毒され易い流行を排して、より好き生活の爲の流行を作り出すもの

になるであらう。時代精神の先頭にたつ三越となつて、初めて巴里にも倫敦にもたいデパートメントストアとなり、今日の日本の生活に積極的意義を齎すものである。物を賣る丈のデパートメントストアは外にもあらう。今日の歴史と背景と位置とを持つた三越が、商業たる三越藝術としての流行を作る事を僕は切に求めたい。

『三越』に現はれたる社會相

長田幹彦

『三越』の如き厖然たる資本團體の存在は、寧ろ縦に、文化史的に觀る方がはるかに興味が深いと思ふが、併し作家たる我々には一寸出來憎い相談である。我々はあゝしたものをも社會事象の一つの現はれとして、これを端的に、平面的にみるやうな性癖をつけられてしまつてゐる。それによつて社會の流動面に觸れ、その中から一つの時代の指向性といつたやうなものを抽出して來るより他はない。そこに作家らしき興味を感じていくのが最も自然なのであらう。

私はそれでも月に二度や三度は、『三越』のあの厳めしいポーチをくゞることにしてゐる。それも何か買はふといふやうな目的なしに、唯漫然とあの店へ引込まれていく場合が多いのである。而も入る時には、いつも同じやうな氣持であつても、歸る時には何かしら一つなり、二つなり收穫があつたやうな感じに囚はれることが多いのである。

流行といつたやうな問題にしても、あすこにはいろんな面白い斷面が露出してゐる。この頃、一般世間では、流行の發源地を無理にデパートメントストアに擱からうとする傾向がある。併し私のみるところでは、これは少し見當が違つてゐやしないかと思ふのである。殊に『三越』から生れて來る流行の型のごときは寧ろ野暮で、田舍臭くて、我我はいつも不滿を感じずにはゐられない。

といふのは、そこに或一つの大きな社會の推移が物語られてゐるのではあるまいか。もうあれだけの大きな店になると、つまり容易に動けないのである。流行といふ意味があまりに實質化され、普遍化されすぎてゐるために、ぬきさしがならなくなつてゐるのである。であるから、『三越』は先づ大きな力で確めて、然る後に又大きな力で社會を掩はふとするやうな強權的な傾向をもつことを餘儀なくされてしまつ

てゐるのである。

たとへば、織物の色の問題にしても、最近流行である淺緑だとか、淡い臙脂、皮色、或ひは萌黄、さういつたやうな輕快な都會色は、寧ろ『三越』から生れたものでなくて、高島屋あたりが流行させたものである。『三越』から現はれて來るもの丶中で、一番傑出してゐるのは、何と云つてもやつぱり茶系統のものであらう。これには何かしらどつしりした大きな立派な脈膊が感じられる。つまり『三越』の意匠部がもつてゐる時代性は、都會、地方兩方面をとつくるめた、地味な、特質的なもので、しかも一般社會の或る歸向を示してゐる。

顧客の方面をみても、その大部分は趣味を生命とする階級でなくて、實用一點張りの中產階級へ移つてしまつてゐる。殊に震災後は、俄然としてその傾向が强くなつて來た。それは又社會の大きな動きを如實に示すもので、『三越』に現はれた社會相の中で一番注目に値するものだと思ふのである。それから特殊な方面では、震災前まで『三越』をリードしてゐた花柳界の趣味が漸次沒落したので、その影響がこの大勢を馴致したものとも云へる。つまりブルジョア趣味の反映が淡くなつて、低い一般の方へ歩み寄つて來たのである。

從つて『三越』は、色に關する流行などに於ては、既に先驅者たり、指導者たるの虚榮を擲つてゐる。尤も最近のやうに、織物までが純然たる機械工業の所產になつて、いづれも大量生產を目標とするやうになつては、『三越』が大きければ大きいほど却つてそれを左右する譯にいかなくなつたのであらう。製品の各種目の單一化といふことが、織物の方面では一番困難であると同時に、これがかうした店にとつては苦痛の一つでもあらうと思はれる。

その代り、實際生活の方面に於ては、『三越』は驚くべき大飛躍をやつてゐる。それは家具であるとか、食料品であるとか、又は臺所用品であるとか、さう云つた方面では經濟政策の讀本通り、單一種目の製品の供給をやつてたしかに一面の現代生活を支持してゐる。こゝに於て、即ち『三越』は初めデパートメントストアの全職能を發揮しだしたのである。所謂『三越呉服店』から脱却して、庶民階級の經濟生活の眞の支配者となつて來た譯である。その勢力は小さな我々の生活にまで及んで、一寸臺所へ入つてみても、何かしら眼につくものは、皆『三越』の供給したものである。新型の料理臺、大根下ろし、菓子の打出器、鼠とり、曰く何に、曰く何に！

事實、我々程度の家の主婦は『三越』によつてどれ位趣味生活を支配されてゐるか分らない。これは便宜と、價格の低廉と、それから所謂生活改善なるものを目標とした一種の概念的流行の追隨である。『三越』に鍵や、家を預けてゐる形である。我々は從つて、何處の家へいつても、三越が發散してゐる體臭らしいものを多少づゝでも感じさせられる。主婦の中には、『三越』へいくことを無上の享樂としてゐる人達が餘りに多いので驚ろかされる。彼女達の包み紙の中に潜んでゐる新型の日用品の、いかに無趣味で、理屈つぽくて、單一的であること

よ。殊に、食料品に至つては、最も呪ふべき背遍と、理論とをもつてゐる。併しそれが現代の食味の標準であるとすれば我又何をか云はんやである。刺身の折詰め、パラフインに包んだ肉の揚げもの、等に至つては、現代日本人の生活の縮圖をみせられてゐるやうで、いさゝか氣味が悪くなつて來る。つまり物の獨自性や異色や、いらざる工夫を否定する『現代』の傷ましき現はれである。

『三越』の入口に佇んでみてゐると、通りに殺到する水のごとくに流入してくる群衆の姿は、實に千態萬様である。日本のもつてゐる現代相は悉くあのポーチの下へ集つて來るといつても決して過言ではあるまい。あらゆる階級あらゆる種別の人間が自分の足で歩いて、さながら一社會のファンシーボールのごとくにあのポーチの中へ呑まれてゆく。日本人の經濟生活が漸々に變化しつゝあるのが、いかにもはつきり分る。先にも云つたやうに、それは庶民階級の大きな行進曲がその基調をなしてゐることは無論である。

私は化粧品部の前へぼんやり突立つてゐた。

今眼の前を飴色をしたスプリングコートを着た洋裝の娘が、群衆に揉まれながら歩いてゆく。襟のところからレーヨンらしい更紗形の模様を一寸のぞかせ、薄藤色のストッキングに赤靴といふ不思議な取り合はせのこしらへである。そのあとからは、細かい縞お召の着物に、龜紋をした秋二重の羽織を着た四十七八の品のいゝ老夫人がついてゆく。それはどうみてもその娘のお母親らしかつた。

と、今度は彼方から絣の脊廣を着た、二十七八のがつしりした、稍粗野にみえる青年紳士が、これも五十がらみの、瘦せた地方人風の老婆を伴つてぶらりぶらりと歩いて來る。青年紳士は誰れか人でも探すやうに、きよろきよろ四邊を見廻してゐる。

この二組の連れは、角を曲るところで、ぱつたり出逢はした。最初に聲をかけたのは、娘の連れの老夫人であつた。青年紳士はにつこり笑つて丁寧に辭儀をしたが、その聲には妙にどぎまぎしたやうな色が現はれてゐた。洋裝の娘の方は、タッシュの中から薄藤色の手帛を取出して、それで口を押へたゞけであつた。

その二組みの人達は、お珍しいところでお眼にかゝりましたといふやうな、稍白けた挨拶をかはしてゐたが、やがてそのまゝひとかたまりになつて、正面の階段の方へ歩いてゆく。私はその様子で、これは例の見合ひだなと感づいた。で、面白半分に彼等のあとをつけてみた。

階段を上つていく娘の足は下からみると、鐵管のやうに太くて、無表情だ。しかも大股に歩いてはゐながら、內輪に爪先を踏んでゐる。洋服の肩もあまり撫肩にすぎるので、縫目ばかりが際だつて突出してゐる。それでゐながら丸い顏には、妙につんとしたやうな、頑高な小生意氣さがぶら下つてゐる。總てが無理で、不自然で、中途半端である。

階上の時計部のところまで來ると、それまで遠慮がましく老夫人とばかり話してゐた青年紳士は、一足遅れて今度は娘と肩を並べて歩きながら、正直らしい恭謙さで、

「あなたは、どんな形の時計がお好きですか。」と、問ひかけた。

彼等の眼の前には、獨逸のカインツルが何處かの製品らしい、不格好な眼覺時計がごたごた飾つてあつた。

娘は凝と落着いた顔で一々それを覗いてみながら、

「さうね、私、これが好きですわ。」と、臆面もなくいふ。娘の指さしたのは、ランドセール形の、最も不格好な眼覺時計だつた。

食堂へいつてみると、その一連の人達は、あのがやがやした大混雜の中で、悠々と皆でお鮨をたべて、紅茶を飲んでゐた。

これがレデーメード三越式見合ひである。

私は四谷に住んでゐるM子といふ不良女學生の知遇を忝うしてゐる。彼女は性質はそんなに惡くはないのだが、併し有名な札つきの不良少女である。

私はつひ先日、新宿の『三越』の分店の食堂で、彼等がやつてゐる不思議な集會をみた。M子は二人の女學生とともに、三田の學生らしい青年達に取圍まれて、平氣でドーナッツを食べてゐた。

「Sちやん。これから何うする。どうせもう今日はサーカスは駄目さ。何處かへいつて遊ばうよ。」とまるで男のやうな地聲でぶつきらばうにさう云つて、M子は袴の紐の下から三つの小さな賽ころを出してみせた。その樣子でみると、彼等は武藏野館の「サーカス」が滿員なのでこゝへ流れ込んで來たものか、又それともこゝを指定して皆で落合つたものか、何方かであるらしかつた。

と、青年の一人はにつこりして、

「おい、Mちやん。そいぢやあすこへいつて、一丁いかうよ。電車の切符持つてる?」男の學生の方がよつぽど女のやうなやさしさをもつてゐる。

M子は合點いて、

「うむ、もつてる。だけど、Fちやんが可哀相だね。もう少し待つてゝやらうよ。

「いや、いゝよ。例の告知板さ。」

五人はやがてさつさと食堂を出ていつてしまつた。M子が出がけに耳打ちをしたので、三人の青年は私の方をぢろぢろみていつた。

私はそれから一週間ばかりたつてM子に逢つたので、いろいろ訊いてみた。と、新宿の『三越』が意外にも彼等の間ではいゝ流行りになつてゐるのであつた。あすこの食堂へ入つてゐれば、大概無事で、その日初めて逢つて、その日すぐに何處かへしけ込むやうな相手が平氣で出來るなぞといつてゐた。そして賽ころを弄んで、金錢の授受をやり、それで男をきめたり、女をきめたりするやうなことも出來るといつた。告知板といふのは、新宿驛の告知板のことで、あれへいろんな

符牒を置いておいて、それを立派な通信機關として利用してゐるのであつた。

『三越』『武藏野館』『小田原電鐵』この間に大きな謎が投げられてゐるのである。都會と郊外との接觸點だけに、『三越』は實用食品以外に、からした安價な歡樂の中繼所をもつとめてゐる譯であつた。

或日私は駿河町の『三越』の貴金屬部の横で、二十三四の、色眼鏡をかけた、官吏の細君といつたやうな女が、二人の脊廣を着た紳士に兩方から挿まれて、階下へ拉せられていくのをみた。その日は非常な混雜だつたので、誰れもその女に眼をとめるものはゐなかつた。

それは萬引常習犯の女であつた。

あとで聞くと、彼女は腕時計を一個盗んで、いつの間にか、局部にかくしてゐたのだといふ。

私は或る貴夫人がかういふ話をして聞れたのを記憶してゐる。同じ寶石類の飾棚の前へたつても、御木本や服部と、『三越』とではまるで感じが違ふといふ。『三越』ではどういふものか、自分達でも若し萬引をやつたらといふやうな不思議な衝動を感じることがある。それは單に店が廣過ぎるから監視が行屆かないであらうと豫想するためではなくて、何かしらあの混雜と動搖が神經に異常な衝撃を與へて、そのためにふらふらと氣迷ひが起つて來るのではなからうかといつてゐた。成る程さう云はれてみると、私にもその心理はよく分る。あの明るい光の中で、渦卷くやうに動亂してゐる人々の影を見ると、何かなしに或る變態な犯罪的好奇心が湧くのではあるまいか。これも現代生活が發する狂躁な無節制なジヤツの生む惡幻覺の一つであらう。

『三越』の生態の斷面は、つまり仕入と販賣の兩面である。それに宣傳に、發送に、收益計算に、支拂、それだけの機關を動かす爲めに何千人の人間が朝から晩まで働いてゐる。

生産者と仲買とブローカー。その間をくゞつて市井の發明家の手になる新案の賣品が洪水のやうに流入して來ては、又洪水のやうに賣捌かれていく。今日よりも一日先の社會生活がかくして知らず識らずの間に築かれていくのである。

宣傳の職能は新聞社、雜誌社から興行師、暴力團、の方へまでも限りなく延びていく。生活そのものゝ中へまでも宣傳が平氣で紛れ込んで來る。國家の横腹へさへ丸に越のマークを張らうとしてゐる。

『三越』の包裝部や、發送部で働く若い女達の間には可成頽廢した生活をしてゐるものがあるといふ。又賣子の中にも、、、さへ指定すれば待合へでも、旅館へでもやつて來る女があるといふ。それで男の好奇心を唆つて、いろんな惡物をくはせる狡猾な媒合容止者がゐる。私なぞも度々その手を喰はされたことがある。併しほんとうに『三越』に關係をもつた女には前後唯だ一度しか逢つたことがない。彼女は帶の間へ、裁縫部の傳票と、電車の定期券を入れてゐた。思ふに、裁縫部

の下請けでもやつてゐる女なのであつたらう。

さうした風紀の問題なぞよりも、彼女達の間に活躍してゐる結核菌の勢力の方がはるかに恐ろしい。あゝした巨大な、華やかな設備の半面には、幾多の犠牲者と、落伍者があることを忘れてはなるまい。

私の知つてゐる某女は、小供服一枚縫つて三十錢の賃金を『三越』から貰つてゐた。數をこなす狡さを覺えれば、仕事は無盡藏である。併しその女は殘念ながら仕事のうへに古風な良心を持つてゐたので一日一枚の能率しか擧げ得なかつたゝめに、間もなく職を解かれてしまつた。さう思つてみると、あすこの商品にも、二重、三重の勞働問題がかゝつてゐるのである。

一番ユーモアに富んでゐるのは、あすこの休憩室へ收容されてくる數多い迷子である。それから小禽部の前で悠然と敷島をふかしながら鳥に見とれてゐる中年輩の紳士である。子供に乳房をくはへさせたまま食堂で辨當をたべてゐるおかみさんである。それからもう一つ、血眼になつてセルロイドの玩具を選り分けてゐる貴夫人である。

雜踏の中で小健めにちよこちよこ掃除をして歩いてゐる男も一寸可笑しい。

『三越』も生態のうへからみると、畢竟一個の商人である。資本主義中の巨人である。社會政策、經濟政策の見地から云へば、勿論問題の對象であらう。民衆の生活品の供給者といふよりも、寧ろ支配者としての強權の現はれである。若し或る實際運動家が、彼に向つて如何なる商品でも標準價格のまゝ販賣しろと絶叫したら、『三越』はあの大きな顏を老獪に引歪めながら苦笑して、

「それでは社會そのものが壞滅してしまふよ。」と、やり返すであらう。三割の配當で、幾百萬の人間から搾取し、幾百人の株主に不健康と、幸福とを分け與へてゐる超然たる存在である。偉なる哉、『三越』！

『三越』は現代社會の顏である。時代の狂瀾のうへに四つの脚をのせて、のつそりと四邊を睥睨してゐる經濟學的スフィンクスである。大地が彼を支へてゐる間は、多々益々庶民の生活は呪ふべき平凡と調一の方へ改善されていく運命をもつてゐるらしい。

偉なるかな、『三越』である。

あくの強い男

前田河廣一郎

趣味

三十人の苦力を、セメントの溜に生埋めしてまで大學校を寄附することは、趣味ではない。洒落にも『馱』の字の王冠をいたゞくやうなラテン系統の語彙を蒐集するチエスタートンの文章は、ひゐき目にも趣味とはおもはれない。趣味といふものは、輕い、至極あつさりした、教養と裕福な生活の花であるといはれてゐる。それも、普通の花であれば造化の功利主義を帶びてゐる美くしさであるが、趣味の花は果をむすばぬところが身上とされてゐる。世界中を、マッチのレッテルを探がしまはつて旅行する貴族、何萬弗といふ『オマー・カイヤム』の詩よ販ものを蚤とり眼でさかす氣持、狐と狸を交尾させて新しい動物を產ましで見せる好奇心、——かういふものが趣味とされてゐる。もつと手輕るな方面でも、趣味といふものは趣味せられる物的當體よりも、趣味する人間の餘裕を暗示するに足るところの廣汎なヂレッタニズムを指呼することになつてゐる。

で、私のやうなあくの強い男には、一生を通じて、趣味といふ心境に觸れずにをはる惧れがある。實際、趣味は、私にとつては苦痛である。たゞ、もつとも幸ひなことには、この無教養を裏書きする不幸を、自分で不幸としない點だけであらう。着物に對しても、人から當てがはれただけのものに滿足し、靴道樂のある世界に、歪んで歩けぬまでに靴をへらし、緣日の松の木は素通りし、展覽會は新聞の寫眞で滿足し、友人の苦心して聚めたレコードに眉をひそめ、里見弴の文章にあまり感心もしない男、これが我流のプラグマテイズムに生きてゐる私の正體なのである。若い時分には、外國で古本なども探がしまはつたことはあるが、それとて、所謂 Book worms のやうに、買つた本を讀まずに一生渇仰してゐるといふ程度のことではなかつた。

もしこの私に、近ごろの學生がマルクス主義に關するパンフレットを網羅してうれしがつてゐると同じやうな、たつた一つの道樂があつたとすれば、それは、おそらく、料理であらう。——と云つても、村井弦齋のやうに、通俗的料理法を著述する根氣もなければ、サヴアラ

ンのやうなエピキユリアンでもない。せいぜい、ビーフに葱の香りをとどめ、ウースタア式の捏麪麭にビーフの肉汁をただよはす程度の――食慾中心主義な、粗野な趣味であるにすぎない。これと云つても、アメリカにゐて、クックをやつたり、スチユアードをしたりした經驗から論ずれば、南阿の金鑛を發見して、今では貧乏人になつてゐる何とかいふ英國人のやうなものだ。私の料理道樂は、『美味求眞』の著者のそれとは、根本的にちがつてゐる。

いま、この蕗の薹のやうな無教養な男が、すこぶる機械的な見地から、世界一の美術國である日本といふものを、ありふれた範圍に於て、批評的に眺めてみたい。

『御』の字

言語學の問題は離れても、日本語ほど、素人眼にもむづかしい言葉はなからう。誰がいつたい、『髮』と『神』と『紙』と『上』との四つの名詞を、ぽつんとそれだけ發音して、聽き手にはつきり頷かせ得る人があるだらうか？

私が、十四年ぶりでアメリカから歸つた當座、日本は、デモクラシー思想と日本語改革運動とが、一對の疫病のやうに流行つてゐたものだつた。デモクラシー思想が日本語に影響を與へ、日本語がデモクラシー思想をどうかするのかと思つて、ひそかに好奇心の眼を瞬つてゐた私は、この二つの小ブルジョア的運動が、何等交互的に牽引し合ふところなく、別々の道を歩いて行つたに對して、私は尠からず失望を感じた一人である。

譬へて見ると、『御』の字である。この極端まで日本語を愛撫しつくしてゐる敬語は、世界のどの國語にも出現しない非文法的な、不合理な封建時代の殘存物である。私は、その頃、むきになつて、日本語から、すべて『御』の字を廢してしまつたらどうか、とさへ考へたことがある。

『やあ、早よう！』

『うな、早よう！で、君の妻の病氣は？』

からなつても少し極端すぎるが、『おみをつけ』『おみあし』『おビール』……となると、これはまた、主客共に、いちいち、各自の姓名を呼ぶにまで『御』の字を附けなければならぬ――といふやうな恐怖さへも誘びき寄せるのである。が、これも不思議でない。現に、お花さんとか、お春さんとか呼んでゐるのだから。と云つて、ここにまた不思議なのは、男性の場合はさうではないのである。いくら對手を尊重するからと云つて、『御』後藤『御』新平とは呼ばない。

私が歸朝後、最初に飛び込んだ東京のカフエでは、女給が、私の『カフエを一杯下さい。』と云つた言葉を、一種の輕蔑をもつて、すつかり語原的にほぐして見せて、から訊きかへした。

『あのウ、おコーシイでございますの？』

事實『おコーシイ』の何事であるかを判じかねた私は、洋服地を行

絶するロシア人のやうに、手眞似で珈琲を飲むジェスチュアを示さねばならなかつた。が、遥かに、その女給君といへども（いや、ちがつた、女ボーイであつた）、次ぎの瞬間に、私の期待したとほり、

『あのウ、おウイスキイでございますの？』

とは反問しなかつた。

こんな具合に、十何年ぶりかで歸つた日本に、劈頭第一私を窮しめたのは『御』の字である。あやまつて『お宅のお電氣がおつき遊ばして、』とか『只今のはおドンでございますか』とか『お電報を打ちませう』とでも云つたなら、おそらく私はシャムから五十年がかりで日本語を研究しに來た篤學な學生とでも間違はれたであらう。それでゐて、はやい話が、『奥さん、話は上手ですな。君の亭主の年齢はいくつでした？』などと云はうものなら早速その家の訪問客のリストから抹殺されてゐるにちがひないのである。

『日本語の全組織は、恐怖と老耄を暗示するかに見える。それは、恰かも、被征服者が、狂暴なる征服者を懼れてゐるやうで、國民としての複雑な要素は、疾うの昔に完全に一體化しつつあるも、國語だけは、たしかに抹殺しがたき戰禍の痕跡を印してゐる。』

この、日本語そのものに對する側面的な文明批評は、曾の帝國大學教授、故アーサー・ロイドが『Everyday Japan』に書き遺したメモである。

心を鎮めて考へて見ると、昨今は、私もだいぶ日本語馴れがして、いい、うまを合はしてゐる、この『御』の字にも、また脈絡として鎌倉時代からの封建制度文化の殘滓が、私達を聯繫してゐることを感ぜざるを得ない。

それで、もつとも滑稽なことは、西洋人、殊にアメリカ人が、ラフカデオ・ハーンの三頁も讀むと、半可通な日本趣味を發揮して、口に文章に、日本のこととなると、何でも彼でも、『御』の字に該當せりと彼等の思惟する『Honorable』を冠するの一事である。デモクラシイの本家といはれるアメリカにも、潜在的な封建思想はあるのである。

敬語

女性に對する、男性の言葉が、アメリカに於けるやうに、特殊扱ひせずに、むしろ征服的——暴慢的であることが普通であるのにも、一驚を喫せられた私である。

歸つた當座、私はよく下宿屋の女中に、何かの用件を命ずる時は、

『Will you please do this——or that?』

といふやうな意味で

『この葉がきを出してくれませんか？——どうぞ、炭を一と籠持つて來て下さいませんか？』

などと、今から思へば歯浮きのするやうな敬語をつかつてゐたものである。

さういふ場合、女中は、ちよつとへんな顔をして私をまじまじと瞶

めながら、恭々しく頭を下げて、私を、雲といふ無表情な眼の上へ、火鉢と称する移動ストーヴと、花鳥風月を描いた衝立や、意表に出た場所に紐の附いてゐる急須などといふものと共に、紙張のドアを閉め切つて、寒さのうちにひとり残し去るのである。

人相があまり良くないところへ、言葉だけは歯に衣を着せたやうに鄭重なので、あるカフエなどでは、まつたくもつて一個不審な狂人――誇大妄想狂、とでも云はるべき種類の人間らしく取扱はれたことがある。

その頃、歸朝した私を、時折訪問した妻が、これも、日本人ばなれのした相貌をして、言葉もどうやらテキサス訛りの小さな日本語だつたので、頭の上に、徳川幕府百五十年記念とちがはない髷をのせてゐた女中には、とかく不審の種らしかつた。

その女中が、ある日、勇を鼓して、思ひ切つて私に、かういふ民族的な質問を発したものである。

『あの女の方もやはり――支那人なんでございますか？』

『うむ、彼女、支那人ある！』

『まあ、お二人とも日本語がお上手でございますこと。』

それ以来、私は、何處へ行くにも、きつとまづ、僕はアメリカに十四年ゐて、昨日歸つて來たんだ、と註釋する必要を感じた。その習慣が、結婚してからも、あと一年ほど續いたのは、自分の唯一の正當防衛であつたと思つてゐる。

人力車

人力車ほど東洋の征服主義を代表してゐる車輛はあるまい。太つた、二十貫大の紳士が、十五六貫の痩せぎすな車夫に、身ぐるみ五六百圓の服装の内包する重量を、勾配の急な道路の上を運搬させて平気でゐる図などは、たしかに、必要以上の憎悪をもつて、人類社会に潜在する階級意識を挑発するものといはねばならない。人力車のたゞ一つの存在理由は、道路の不完全といふ事実にあり、道路の不完全理由は、人力車上の紳士の車夫君その他一般労働者に対する搾取といふ事実にあるのであるから、いくら金紋附の抱へ俥であらうと、いや、さうであればあるほど、車上の一人と車を曳く一人とは、これ以上に恰好な適例を見出し得ないほど、日本に於ける階級闘争の現實を歩いて見せてゐるものといはねばならない。ことに、大禮服を着た軍人などが、馬を持たない不平を嚙みつぶしたやうな顔をして、自動車のある世界に、馬車を驅つて大道を飛ばしてゐる光景を見ると、私には、理屈抜きに腹立たしくなる癖がある。

街

日本の都會の特色は、都會としての設備のないことにあるやうだ。いまでは、だんだん道路も修理され擴大されて來る模樣であるが、それとても、外國人に見せたいやうな大通りだけに限られてゐるのは

遺憾である。

大通りをちよつと油断して横へ外れると、私達は無限の鶏卵大の石が、なまな泥濘の上に撒布されて、その上を、ローラー代りに人間の足で踏みかためさせてゐる光景を目撃する。この鶏卵大の石についても、瓦斯や電話などと同じやうに、役人の怪しい風説などを聞くが、それはべつとして、その道路を利用する市民たちは、巧みな原案者の意図を尊重するためのごとく、つねに足の面積よりも幅廣い、簡單な二本の紐を利用した木製の履物を穿つて、一時に數千本の早搗機械を働かせるやうに、その上を歩行してゐるのである。これは、道路の管理者にとつては、まことに經費の省ける市街設營方法であつて、傍ら、無數に繁昌してゐる下駄屋といふものの利益をも、注意深く保護してゐることに該當する。尤も、下駄屋と街路の管理者とには、何ら有機的な提携のないことは事實であらうが。

これを、アメリカなどで、新都市を開發する方法に比べると、日本のやり方はまつたく逆を行つてゐるといはねばならない。ある土地會社が、一つの新しい都市を創り出さうとすれば、アメリカでは、まづセメントの廣い大通りを造る。それから、複線の電車軌道を敷いて、その最終點へ、電車從業員の住宅を建てる。從業員の家族は、やはり近所に市場の必要を感じて、八百屋や肉屋、太物屋、金具屋などを自然に要求することになる。それに近在のお百姓が購買力を集注するために、勢ひ、その電車の終點から新しい都市が建つて行くといふわけなのである。もちろん、例外もあるが、たいがいの場合アメリカの都市は、都市としての靜脈と動脈とに當る、道路と下水とは、必らずまづ考慮にとり入れてからはじまるのである。

通行人

日本の都會の通行人を見てゐると、パリ・コムミユーンの暴動のやうな感じがしないでもない。あらゆる通行人は、道路といふものを、單に自分の住宅や店舗へ馳けこむための手段としてのみ利用してゐるやうで、そこを通行してゐる間は、何らその道路の美觀などに關心せずに、むしろ腹立たしげに、例の鶏卵大の石を蹴飛ばしながら、利己的に、恣まな歩行をつづけてゐるのである。彼等は、どこが電車道で、どこが車道で、どこが人道であるか判明しない共通の路面を、活版所の活字のケースをひつくりかへしたやうに、各自が自分の目的地點へ最近距離の歩行を營まうとして急ぐのである。おそらく世界の電車系統のうちで、東京の電車ほどベルを鳴らす電車はなからう。しかも、この機械的な立腹の表情に負けずに、徳川時代の道路へ突然姿をあらはしはじめた無數のフオードからは、平和に道路踏み固め工事に從事してゐる市民へ『馬鹿野郎！』『間抜け野郎！』などといふ非合法的な讃辭が降つて來るのである。いろいろな意味で日本よりも劣つてゐるコンスタンチノープルに於てさへも、通行人は、高い税金を拂つて、これまで虐待されることはないであらう。

道路以外の、唯一のデモクラテイツクな交通補助機關としてある電車は、永遠に觸角を働かす蝸牛のやうに、二本のポールから無限の火花を散らして、兩側の、家よりも大きいペンキ塗りの看板をいただいた店の商品を震動させながら、定員より三倍も超過した乘客を滿載して、病人のやうに唸りながら都市の美觀を破壞することに努めてゐる。朝晩のラッシュ・アワーには、鈴なりになつた乘客は、宛然、ふるびた車體を取り毀はしにかかつてゐる勞働者の群のやうな感じをあたへる。誰かゞ『電車は過激派をつくる』と云つたたわけた言葉も、『過激派』といふ言葉に『小ブルジョア的憎惡』といふ言葉を置き換へれば、甚し中らぬことあたなからう。

盆栽

本所や神田あたりの、人家といふにはあまりにトタンの多過ぎる、人家と云はないとすればあまりに南京虫の多過ぎる一帶の建小舍によく見受ける現象であるが、チョコレート色の櫻櫚や、巧みに昆虫を培養してゐる非人工的貯水池の間に、乾からびてこちこちになつた一握の土壤に、季節はずれの植物が、西洋人の髮の毛のやうに突つ立つてゐるのに出つ遇はす。これは、むづかしい推理方法を經なくとも、その植物の持主が、どこかから鉢ごと、その植物を愛翫するのあまり、購買して來たものと見てさしつかへない。かういふ趣味は、元來日本人の『風流心』と呼ばれて、美術的に教養された豐富な日本人の趣味性を代表してゐるものと謂はれてゐるが、一面、[illegible]廣告社の林立してゐる工場地帶やその他の場所に於て、人間のもつとも自然な植物愛好の本能を滿足させるかすかな努力として、私は、その涙ぐましい必要性に動かされるのである。それを、麹町や青山邊の鬱蒼と繁つた老樹の間に建てられた邸宅と比較することは、いま茲に措かう。だが、日本人は先天的に趣味性に富んだ國民であるといふ名義のもとに、豐多摩へんの中産生活者が手間に運んで來る高價な植物を、年に二た鉢も買はせて喜はしてゐながら、都會の衛生と美觀とを度外視して、何らかういふ町々の民衆に對して住み心地の良くなるやうな設備を施こさうとしない家主、區會議員、市會議員、市そのものの僞善さを思ふときに、誰かその『趣味』と稱する惡宣傳に憤怒を感ぜぬ者があらうか。嚴密な意味で云へば、工場地帶といふのは、單に諸工場を聚合した區域を指さすので、工場に近いといふ（つまり、電車賃もない）便宜から、硫酸や瓦斯の横行する區域に勞働者の家族群が住むにまかせるといふことではないのである。

飲食店その他

東京市ほど食べ物屋の多い都會は稀であらう。統計によると、十八の市民に對して一軒の商店があるといふ話であるが、飲食店に關する統計は知らない。それにしても、一聯の殷賑な商店の群を見渡すと、どの街でも、しる粉屋、蕎麥屋、支那料理屋、おでん屋、めし屋、カ

フエ、牛肉屋、鳥屋、喫茶店などの數はまさに人間を飽殺するにあたるほどの數である。これでも食ひ足りないと見えて夜間には、いろいろな手車に積んだ即席飲食店が展開されて客を呼んでゐる。審さに觀察すると、日本人ほど口を動かす國民はないやうである。人口に比例する胃腸病の統計などをとつて見たなら、何もしないで遊んでゐる社會局の役人たちを十分に半年がほどは職務を與へる研究になるであらう。それほど日本人はカロリーを要求するのであるか？——この食慾狂的現象の裏にも、私は、やはり貧弱な道路、より貧弱な家屋、亂暴な温度調節方法、不完全な衣服、滿足な滋養物をとり得ぬほどの賃銀などの、貧困の一般的現象を觀取するのである。ここにも、食物は單に食物のための食物ではなくて、ほかの生活事實と密接な聯關性を持つことは見屆けねばならない。どれほど佐伯博士がマイクロフオンの前で、榮養價値の食物について講義してくれたところが、社會組織に根本的な缺陷があつては、せつかくの講義も、手つ取りばやく、舌味のごまかしの利く、化學的に細工された、大部分は不完全な道路から發揚される塵埃を混じた、一時の腹ふたげの、食物と呼ばれる怪物の橫行を阻止することは出來ないであらう。一日に、勞働者が六七回も食物を攝取することのどんなに勞働力に影響するかを考へたなら、思ひ切つて世人は自分たちの食料問題に新解決法を見出す必要があるではないか。

同じ事が、市民の日夕氣持を發散するための娛樂としての、活動寫眞や活劇やその他の催し物についてもいはれる。ほとんど無批判的に（その實ブルジョア文明の不文律に從つて）提供される各種類のあさい興行物は、いつたい日本人の知識慾にどれだけの研究對照を與へてゐるだらうか、日本人の精神生活にどれだけの慰安を與へてゐるだらうか。食物に於けるカロリーの度合ひと同じように、この精神上の食物に於ても、私は、そこに甚だしい刹那主義を發見するのである。この東京市の廣汎さに對して、われわれは、いくつの音樂堂を誇り得るか？無料公園の大衆的ページエントがいつ東京の何處に催されたことがあるか？歌舞伎を誇り、中將湯を讃へ、帝劇を押し賣りする『美術國』の日本が、どれほどまで、國民の傳統であると揚言する趣味を保護してゐるだらうか？——かういふ人間は、天に向つて唾を吐くやうなものであることは知つてゐても、時に、押入に使用さるべき床の間へ、無けなしの金で買つた贋物の應擧や伊藤博文を誇る男や、高い入場料を拂つて見て來た男変的俳優の演技を嫁入りするまで讃美する處女に出會はしたりするごとに、あくの強い私は、『趣味』といふものの憎むべき機械的半面を見せられる氣持になつて、屠殺者が牛の皮を剝ぐやうに、何の躊躇もなくその一々の傷痕的な構成を曝露してやりたい氣持になるのである。『趣味』よりも、日本人のまづ必要なことは、生活である。

想出の映畫

古川緑波

レッド・ランターン──連理の枝──路上の靈魂──カリガリ博士──キッド──さらば青春──散りゆく花──愚なる妻──オヴアー・ゼ・ヒル──三人妻──良人の危險時代──幌馬車──巴里の女性──

名映畫の想ひ出──物心ついてから、現在まで、何千何萬の映畫を見てゐる私であらうか。

その中の、ざつと此處十年間の映畫を考へただけでも、その數は殆んど無數だ。

十年前から想ひ起して、想出すまゝに幾つかの映畫について、記憶するまゝを書いてみた。

系統的ではない、そして、何の記錄にもよらず、ほんとうの想ひ出すまゝを書いた。

あまり新しいことは、想ひ出にもなるまいと思つて、大正十四年まででとめた。

九年十二月

レッド・ランターン "Red lantern"

「レッド・ランターン」は、所謂問題の映畫と云ふ奴であつた。その内容も、北京に於ける義和團事件を扱つた、充分問題的なものを持つてゐたが、此の映畫が、問題になつたのは、内容よりも公開禁止の厄に遭つたり、大正活映と國際活映が、同時に競爭的に上映したことなどの爲であつた。

大正九年の夏、大活が此映畫の東洋興行權利をホウエル商會から買取つて、條件附の下に公開を許され、帝劇に封切の筈だつた。そこへ國活が又同一映畫を輸入して、警視廳へ檢閱を願出した處、内容が惡いとあつて公開禁止、そのため一度許可となつた大活の分も傍杖を食つて許可は取消しとなつた。

その後半年ばかり保留になつてゐたのが、十二月になつて漸く許可され、淺草六區の三つの館が同時に之を公開した。大活のは一紅燈

祭」と題して、千代田館に封切され、國活のは「赤燈籠」と題して、帝國館、キネマ倶樂部に封切した。

此映畫は、米國メトロ社の、スクリーン・クラシック映畫で、アルパート・キヤペラニ氏が監督し、一代の名女優アラ・ナジモヴァが主演したものである。

劇は、罪惡の影に包まれた北京を背景として、東洋人と西洋人との衝突や、佛教と基督教との問題などを、からませた、或る混血兒の物語で、ナジモヴァは、此の混血兒と、米國の娘との二役を演分けてゐる。丁度、ナジモヴァの藝も圓熟期の作品なので、その演技にも、見るべきものがあつたやうに記憶してゐるが、然し、此れをナジモヴァの代表作品として擧げるのではない。たゞ「レッド・ランターン」と云ふ映畫は、一ぱん、問題の映畫と云ふ感じが強い、何處から見ても、何となく問題の影がさしてゐるやうな氣がする。

九年十月

連理の枝 "For Better for Worse"

映畫も「活動寫眞」と呼ばれてゐた頃には、たゞ奇拔な題名で、觀客を呼んでゐたものだつた。それが段々進歩——と云へば、むろん進歩で、人氣のある俳優の名前で觀客を呼ぶ時代になつて來た。

ブルーバード映畫全盛の頃と云ふのは、正に此のスターシステム全盛の頃であつた。それが又、一段の進歩で、今度は監督の名前を看板に使ふと云ふ時代になつた。

先づ、我國に於て、その名前でお客が呼べたと云ふ監督と云つたなら、むろん之は米國人で、恐らくは「イントレランス」の、ダヴィッド・ワーク・グリフイスか、「ジヤン・ダーク」或は「男性と女性」の、セシル・デミールの二人であつたらう。

グリフイスの方は、人道主義を傾向に振り翳したリアリストで、デミールの方は、人情物を得意とするローマンテイストで、兩々相摩して、文字通り、當時斯界の雙璧であつた。

「連理の枝」に"For Better for Worse"と云ふ寫眞は、デミールが一九一九年に發表した社交界劇で、之はデミールの所謂代表作とか、大傑作とか言はれるべき性質のものではないのだが、私をして言はしむれば、此の映畫は、デミールのデミールらしさを十二分に發揮した、好個の作品だと思ふ。

「連理の枝」てふ題名が、如何にも之は名譯で、丁度西鶴物か何かのやうな匂ひが、此の映畫には流れてゐた。華美一方の、粗暴なアメリカ人には、珍らしい細い人情の動きを描いた藝術品であつた。

デミールの藝も、こゝらが極致だつた、と言つてもいゝかも知れない。パラマウント後期、それから獨立以後は、露骨に金儲け一方の作品ばかり作つてゐて、むろんそれでも他の凡庸監督とは違つた腕を現はしてはゐるものゝ、此の「連理の枝」當時の細かい藝は、その後見られなくなつてしまつた。

デミールが、さうなつたのが悪いのか、それとも、さうさせたのが悪いのか。兎に角、小味な、細かい線を捨てゝ、「愚者の樂園」だの「十誡」だのと云ふ所謂大作品専門の監督にデミールが、成つて了つたと云ふことは、何うも私には淋しい。

セシル・ビー・デミールと云ふ監督が、昔は、小味な――と云ふのは語弊があるが、兎に角細かい線で氣の利いた中篇物を作つてゐたと云ふことを書き止めたい。

路上の靈魂

十年四月

純映畫劇――と稱するものが、我國に生れたのは、之より大分以前の事になるが、歸山教正氏の一派によつて作られた「生の輝き」「深山の乙女」等と云ふのが、即ちそれで、此の「純映畫劇」と云ふのは、それまでの日本映畫（お囃子鳴物、聲色入りの所謂新派悲劇の類ひ）に對する、破壞運動とも云ふべきものであつた。

そして、その後大正十年四月に至つて、松竹キネマ研究所作品「路上の靈魂」が、歸山氏の純映畫劇運動によつて破壞された日本映畫の荒原に、之は建設の第一歩を踏み出したものと言へよう。

そんな氣がした、そんな意氣込だつた。

小山内薫氏自ら陣頭に立ち、村田實氏が監督し、日本映畫界未曾有の大作品であつた。

時と金と、そして涙ぐましい程の努力とが、映畫と云ふものゝために犠牲にされたことは、此の「路上の靈魂」以前には、無かつたと言つていゝだらう。

シュミットボンの「街の子」と、マキシム・ゴリキーの「夜の宿」から、牛原虚彦氏の手によつて脚色された物語は、少くともそれ迄の日本映畫界には求められない立派なものであつた。村田實氏の監督も、その頃迄「迷ひ」の時代に在つたかの如く、頗る自信なげに見えた氏が、此の映畫には、打つて變つて明快な自信ありげな腕を振つてゐた。小山内薫氏は、自ら俳優の一人として出演したりして、之も並ならぬ熱心さが覗はれた。

「路上の靈魂」は、先づ何よりも先に、此の映畫の關係者一同が心を一にして、必死の努力を惜しまなかつた、と云ふことが、はつきりと畫面から感じられ、それが觀客の心を打つた。それだけでも、此の映畫は記念されていゝ。

松竹キネマ研究所と云ふものは、其後間もなく潰れてしまひ、小山内氏は、映畫界から去り、村田氏は其後日活へ去つたが、然し、此れらの人々によつて作られた、「路上の靈魂」の一篇は、此れらの人々が、映畫のために盡した、最初の努力を物語るものである。

出演俳優の中に、東鄕是也と云ふのがある。之は、後年の鈴木傳明で、明治大學在學中の彼が、本當の處女出演であつた。そして、東鄕是也　To Go Tree と洒落てゐたわけであつた。彼が希望の彼岸

に達した今日にしてみれば、此の洒落も無意味ではなかつた。

カリガリ博士 "The Cabinet of Dr.Caligari"

十年五月

表現派映畫「カリガリ博士」が、淺草キネマ倶樂部に封切された時程、當時の學生映畫ファン間を騒がしたことは、珍らしいことだつた。表現派の藝術など、云ふものが、未だ我國に普及され、理解されてはゐない頃であつた。大正十年五月。キネマ倶樂部は、本郷邊りの學生を常華客としてゐた館だけに、學生間の評判を得て、素晴しい大入りが續いた。

デクラ、ビオスコープ社が、ロベルト・ウイーネの監督によつて製作し、名優ウエルネル・クラウスが主演した此の映畫は、全く當時の映畫界には、驚くべき「變り種」であつた。

然し、表現派映畫とは云ふもの、、此れは表現派の舞臺劇を、映畫によつて紹介した——と云つた態のもので、さう云つた意味で珍らしい觀物——目先の變つたものには違なかつたが、純粹な、映畫の藝術と云ふ上からは、果して何の程度までの、價値があつたであらうか、之は大いに疑とするところだ。

然し、此の「カリガリ博士」の一篇によつて、それまであまり問題ににされなかつた、獨逸映畫が、ファンの間に、かなり認められるやうになつて、我が國映畫興行界に、獨逸映畫の道を開いたことは、特記していゝことだと思ふ。

キッド "Kid"

十年七月

チヤールス・スペンサー・チヤツプリンの、ミユーチユーアル、エツサネイ等の會社に於ける作品（一卷物、二卷物のみ）が、我が國に紹介された當時、チヤツプリンは、「アルコール先生」と呼ばれてゐた。之は、伊太利のアンドレー・デートが、「新馬鹿大將」と呼ばれた式の、一種の愛稱であつた。それが、何時の間にか、「アルコール先生」などと云ふ珍妙な愛稱を蹴飛ばして、チヤツプリンは、つひに、チヤツプリンで、通るやうになつてしまつた。いや、チヤツプリンは、チヤツプリンでなくては、ならなくなつてしまつた。

むろん、之は、チヤツプリンと云ふ名の方が、「アルコール先生」などと云ふのよりも、愛嬌のある名だつたからでもあらうが、それよりも先に、チヤツプリンは、妙な愛稱などで呼ばれるには、あまりに偉大だつたのである。

「犬の生活」"A Dog's Life"「擔へ銃」"Shoulder Arms"等、ファースト・ナショナル入社後の映畫が、紹介されるに至つて、つひに、チヤツプリンは、喜劇映畫界の王者たるに止らず、全映畫界の王者になつてしまつた。

チヤツプリンの喜劇は、笑ひばかりの喜劇ではなくて、涙の喜劇で

た。

ある、之は「キッド」を得て、一般の定評――常識となつてしまつた。

「キッド」は、チャップリンの最大傑作では、ないかも知れない。然し、人の心を打つ點で、所謂涙の喜劇と云ふ點で、此の映畫は、少くとも、チャップリンを語るには、最も適はしいものであらう。藝術的に、完成されてゐると云ふ點からは、私は「キッド」よりも、「犬の生活」の方を採る。然し、「犬の生活」の齎す涙よりは、「キッド」の齎すそれの方が、ずつと「大衆的」である。少々大袈裟に言つてみれば、「キッド」を通して、あらはされた、チャップリンの「救ひ」――「慰め」は、生きとし生けるものゝ、心の扉を訪れずには置かないだらう。實に、宏大無邊と言ひたい位。

「キッド」の重要な一役のために、チャップリンは、ジャッキー・クーガンと云ふ、可愛らしい少年を發見した。そして、監督としてのチャップリンは、神の如くにクーガンを指導して、立派な効果を擧げさせた。

此の映畫によつて、ジャッキー・クーガンは、一躍大スターになつてしまひ、とつくにチャップリンの下を離れて獨立し、現在の如きは、頗る小憎らしい少年（？）俳優となつて、おさまり返つてゐる。

さらば青春 "Good-bye Youth"

十年十月

淺草の、帝國館と云ふ小屋が、米國ユニヴァーサル會社の、ブルウバード映畫と云ふのを、續々封切してゐた頃。一方、電氣館の前のキネマ俱樂部では、歐洲物の夢のやうな戀物語だの、繪卷物のやうな、ロマンスだの、そんな美しい映畫の數々を封切してゐた。

ピナ・メニケリの「火」「王家の虎」や、ガッビー・デスリーの「紅燈の影」、ジャック・カトランの「呪の湖」等、之らの映畫は、歐洲獨特の燃ゆるやうな戀を扱つた、そして、歐洲獨特の風物――アルプスの雪、里の夕映え、伊太利の古寺院などを背景にした、現實を離れた、ローマンテイツクな――凡そ、アメリカ映畫の持つジャズの響きとは境を異にした、莊重な絃樂の音にも比すべきものであつた。

今も尚、伊太利あたりでは、此うした夢のやうな映畫が、作られてゐるのかも知れない。だが、獨逸映畫は、今は、こんな夢物語を捨ててしまつた。佛蘭西映畫すらも、此うした「甘さ」を捨てゝしまつた。「甘さ」は、高尚ではないかも知れない、けれど人間と云ふものは、「甘さ」を好む性質がある。幾つかの、甘い、歐洲映畫が、私には忘れられない。

キネマ俱樂部に、「さらば青春」が封切されたのは、丁度此の甘い歐洲映畫の、最後のものであつた。

「アルト・ハイデルベルヒ」を捻つたやうな筋で、若い學生マリオと云ふのが、笈を負うて、伊太利はトリノの大學へ入り、下宿屋の娘ドリナと戀におちる、そして又エレナと云ふ美しい婦人があらはれ、や

がて、マリオが卒業して、トリノの町を去る——たゞ、それだけの物語を、監督オウギュスト・ジエニナは、何と軟い調子で、何と甘い調子で物語つたことだつたらう。

マリア・ヤコビニの、ドリナの明るい美しさ。エレナ・マコウスカの、エレナの妖しい美しさ。トリノの街の古びた家々に、さんさんと降り注ぐ太陽の色——文句なしに、酔へた映畫だつた。いゝ心持に、おしまひまで。

その頃の辯士は、寫眞の終り際に、「歌ふ」と稱して、七五調で朗々と結びの文句を喋つた。此の映畫のラスト・シーン、マリオを乗せた汽車が、トリノの街を出て行く、ブリッヂの上から、ドリナが白薔薇の花を、汽車の上へ、はらはらと投げかける——

辯士が、そこで精一ぱい張つた。

「歓楽よさらば、戀よさらば、そして、おゝ青春よさらば」

甘いと言つて笑はれても仕方がない、私は、うつとりと涙ぐんで見てゐたものだ。

散りゆく花 "Broken Blossoms"

十一年四月

「イントレランス」と云ふ、すばらしい大作品を作つて、名匠の名を鳴らした、ダヴイッド・ワーク・グリフイスが、ユーナイテッド・アーチイスツ社に入つてからの作品、「ブロークン・ブロッサムズ」は、莫大な權利金で、有楽座で封切された。

此の映畫の原作は、トーマス・バークの"The Chinkand Child"で、グリフイスは、バークの描いたライム・ハウスの情景をうつし出して、此處に、グリフイス獨特の「詩のやうな、繪のやうな物語」を創り出さうとしたのであつた。

そして、世評は、全く彼の意圖した通りが實現されたことを賞めるものばかりで、一篇の、實にも美しい詩的な物語として、大なる好評を博した。

が、私は之は随分と、世評を嗤ひたいのである、「ブロークン・ブロッサムズ」の一篇を、「詩的」大傑作也とするのは、凡そ滑稽だと思ふ。

グリフイスと云ふ人は、所謂リアリストでしかない、微塵も「夢」のない、「詩」のない人である。それが、「詩の美しさを」と、狙つたのは分る、そして、それは映畫の上にも歴然としてはゐるが、結果は、少しも詩的なものは出てゐない、却つて現實的なもので、彼が特にそれと意識しないで現はしたものゝ中に、優れたものがあつた。それは、彼が狙つた「詩」とは、凡そかけ離れたもので。私が「ブロークン・ブロッサムズ」を、グリフイスの代表的傑作としたくないのは、此處である。

やはり、グリフイスを代表するものは、「イントレランス」以後は、「東への道」"Way Down East"ではあるまいか。

愚なる妻 "Foolish Wives"

十二年二月

グリフイスの、古い戰爭映畫「世界の心」"Heart of the world"に獨探の役を演じた、背の小さい、憎々しげな向疵の男があつた。

その後、此の獨探俳優は、ユニヴアーサルの、之も戰爭映畫で、「君國の爲に」Heart of Humanity と云ふのに、やはり獨探の役を演じて、頗る巧な演技を示した。

そして、此の獨探俳優は、ユニヴアーサルに於て認められ、一躍監督の地位を與へられた。

之こそ、エリツヒ・フオン・ストローハイムその人であつた。

ユニヴアーサルに於ける、彼が監督としての第一回作品は、「アルプス颪」"Blind Husbands" であつた。彼は、監督の傍、主役として、此の映畫に出演し、監督としても、亦俳優としても、非常なる成功を收めた。それ以來、ストローハイムの名は、一層高まつて、第二回作品の「愚なる妻」Foolish wives が、我國へ來ると云ふ前などは前景氣も頗る盛であつた。何しろ、此の「愚なる妻」と云ふ映畫は、絶對的に藝術家氣質であるところのストローハイムが、費用一切おかまひなしで、社長の泣き言もかへりみず、何十卷とか云ふ滅茶々々な大物に拵へ上げてしまつたのを、段々に整理して、十五卷物にしたものだ、と云ふやうなニユースが、方々に書き立てられてゐたので、ファンの期待も大きかつたわけである。

此の映畫に於ても、彼ストローハイムは、原作脚色並に監督を一手に引受け、尚主役に扮して出演したのであつた。

そして、此の「愚なる妻」こそは、期待に背かない、いや、期待以上の立派な藝術的作品であつた。

徹頭徹尾のリアリズム――米國人の風習、生活に對する痛快なる皮肉、諷刺、米國に於て、此の映畫が、多くの批難を蒙つたと云ふのは、あまりにも手痛き、此の諷刺によるものに違ひない。ストローハイム獨特の、性に對する鋭い描寫、此處に於ても亦、彼は徹底せるリアリズムの人であつた。

いさゝかも詩的なものをと狙つた跡はない、然し、此の徹底せるリアリズムの描寫の中に、却つて我々は多くの、詩的なものを見ることが出來た。

ストローハイムは名人である。

俳優としてのストローハイム――彼の演技は、むろんリアリズムに立脚してゐる。そして、之程映畫的な、立派な演技を、私は、あまり見たことがない。今でも、私は「愚なる妻」の中の、彼のすばらしい演技を、まざまざと、思ひ浮べることが出來る。

ストローハイムは名優である。

オーバア・ゼ・ヒル "Over the Hill"

十三年五月

「オーヴアー・ゼ・ヒル」程、澤山のお客を呼んだ寫眞は無いかも知れない。何となれば、今まで幾ら、藝術的には優れた映畫があつても、多くは戀愛を取り入れてゐるから、教育上云々と云ふやうなことで、一家揃つて見物に行くと云ふことが出來ない――ところが、此の「オーヴアー・ゼ・ヒル」は、教育上非常によろしい、と文部省が太鼓判で推薦した。それに又、日活の宣傳が中々うまくて、「六十歳以上の老人は無料」と云ふ所謂マザース・デーと云ふ奴を作つたりしたので、小學生でもお爺さんお婆さんでも、一度は見るべしと云ふやうな具合になつて來たので、當時何處へ行つても「オーヴア・ゼ・ヒル」の噂で持ち切つた位である。

之は、むろん我國ばかりでの話ではない、米國に於ても、此の映畫が、そんな意味で非常に當つたので、此の映畫の後から、雨後の筍の如く「母性愛」映畫と云ふ奴が續出するに至つた位である。

全く、あれだけ當つたのも無理はない。極く通俗に、平易に、母の愛、子の愛と云ふ、誰の身にも覺えのあることを、中々巧く物語つてゐるので、誰しも此の映畫には泣かされた。

藝術的に何うだと云ふやうなことは、此の映畫には無用だつた。映畫の一般性と云ふものを、語るには、最も適はしい例である。

此の映畫に、母親の役を演じたメリー・カーと云ふお婆さんは、之一本で非常な人氣を呼んで、各社から引つぱり凧となり、方々で母親役を演じてゐたが、その後段々に又人氣も衰へてしまつたらしい。「オーヴア・ゼ・ヒル」では、孝行な息子によつて、晩年を幸福に送るメリー・カーも、現實の映畫界に於ける晩年は、甚だ淋しくなつて行くやうである。

三人妻

十二年五月

「路上の靈魂」を發表して間もなく、松竹キネマの研究所は、なくなつたが、その後、松竹蒲田映畫は、商品として段々成績を擧げて來た。人氣俳優も澤山出て、中々華やかになつて來た。

一方、日活の向島映畫は、丁度その頃、過渡期にあつて、女優も盛に使つた映畫を作つてゐる一方に、まだ女形の出る新派ものなども撮つてゐると云ふ有樣だつた。むろん、間もなく女形は姿を消して、松竹の蒲田映畫に對抗して行くやうになつた。

然し、丁度震災の前あたりは、確に日活は、松竹に一步を讓つてゐた。その中に在つて、尾崎紅葉山人の原作「三人妻」が、日活で製作された。之はオペラ館で封切されたゝめに、一般には餘り評判には、ならなかつたが、之は實に日活が、創立以來の傑作とも云ふべき立派な作品で、私は敢て之を、松竹の「路上の靈魂」と、並べて考へたいのである。

紅葉山人の「三人妻」は、むろん優れた作品ではあるが、所謂映畫向きの物語とは言へないだらう。全く又、之を單に映畫化された日には、隨分と、妙なものに成つたに違ない。ところが、當時日活には、

田中榮三と云ふ監督がゐた。

田中榮三は、それ迄に「京屋襟店」等の、下町情話と云つたやうなものを、好んで手がけ、又常に成功を見せてゐたが、此の「三人妻」に於ても、彼は非凡の腕を示した。

田中榮三の描き出した「情緒」は、紅葉山人の原作の味と寸分違はないものだつたと言ひたい、細かな鋭い、性に對する觀察。それが、何より有難いことには、全然アクが拔けてゐたことだ。江戸つ兒ならではの、纖細な心づかひ――こんなものを日本映畫の上に見たことは初めてだつた

田中榮三は、その後、何う云ふ譯か、監督を止めて、專ら脚色家として「紙人形春の囁き」「彼を繞る五人の女」等の作品を發表してゐるが、私は、脚色家としての彼に對する期待以上に、監督としての彼を囑望する。

彼の再起を望む者、敢て私一人でないことを信じてやまない。

良人の危險時代　"The Dangerous Age"

十三年

此の映畫の題名は、餘り多くの人に記憶されてゐないかも知れない。又、此の映畫の監督者ジョン・エム・スタールの名も、グリフイスやデミール程一般では無いに違ない。

然し、ジョン・エム・スタールは、私をして言はしめるならば、まことに得難き名匠である。

スタールの作品は、「良人の危險時代」以前にも、かなり我國に紹介されてゐる、ウアールド社時代の「鳩の指輪」を初めに、「男に捨てられた女」「人の妻」等、ファースト・ナショナル社時代の「嫉妬」「其家の女」等々。そして之等の作品は、アメリカ映畫には珍らしい、因緣がかつた人情物ばかりで、何處かに日本人の心持に近いものが常に伺はれた。

私は、第一回の「鳩の指輪」以來、すつかりスタールの愛好者となつて、彼の作品は、殆んど洩らさず見て來たが、彼の扱ふストーリーは、必ず因緣話で、阿彌陀物に屢々その影を見せる、あの因緣の神秘――と云つたやうなものが、彼の作品には、常に漂つてゐた。アメリカの監督としては、全く異色のある人で、その監督の技術も、並々ならず優れてゐた。彼の第一の武器は、個性の描寫――指導法だつた。丁度現在エルンスト・ルウビッチュが、アメリカへ渡つてからの作品に見るやうな、活殺自在な指導振りだつた。ルウビッチュ程のユーモアは無い、明るさは無い、その代りに、妙に「鬼氣」を持つ人だつた。恐ろしい因果物語が、正にその「鬼氣」を以て觀客に迫るのを、私は屢々見た。

此の異色あるスタールの、やはりファースト・ナショナルに於ける作品「良人の危險時代」は、少くとも私にとつては、忘れ得ぬ名映畫であつた

ストーリーは、從來彼が好んで手をつけた因縁物ではない、之はデミールなどが手がけたがりさうな、家庭劇であつた。

そして、スタールは此の映畫を轉機として、得意とした因縁物を離れて、明るい人情劇の世界へ入らうとしたらしかつた。そして、之は無事に成功した。

四十代の男が、餘り世帶じみて、少しも若い情緒の失くなつた妻に不滿を感じて、うか〱と二十の乙女に迷つて、妻を離別しようとする、そして結局は、沁々と己れの愚かさを知つて元の妻の手に歸ると云ふ、此の平凡なストーリーが、一たび彼に依つて物語られるや、實に魅力に富んだ興味深いものとなつた。

此の物語の主人公が、その妻に向つて、お前には Sweetness と Romance が無さすぎると言ふところがある。此の字幕は、丁度スタールその人が、世の映畫製作者達に對して、皮肉を言つてゐるのではあるまいか――と、そんな氣のする程、此の映畫は、Sweetness と Romance に富んでゐた。

そして、俳優の指導に巧みであると云ふことが、如何に監督として、強味であり得るかと云ふことを、此の映畫は充分に立證し得るであらう程、實に自由な指導振りを示してゐた。

スタール、此の名匠は、その後餘り惠まれた境遇に置かれないらしく、近くは「囁きの小徑」と云ふ小品が、我國にも紹介されたきり、鮮く消息を聞かない。

然し、私は、ジョン・エム・スタールの名は、紀念されていゝと信じてゐる。

幌馬車 "Covered Wagon"

十三年九月

紐育で六十週間打ち續けたと云ふ、大評判の「幌馬車」は、我國に於ても、鐘や太鼓の大宣傳で、漸く封切された。

アメリカ建國史の一頁の挿話を材としたものだから、我が國の觀客には、アメリカの觀客で熱狂した程の感激は得られなかつたには違ないが、然し、そんなことを離れても、此の映畫は實に興行價値と云ふ點から、滿點に近い映畫であつた。我國に於ても、充分に成績をおさめることが出來た。

此の映畫の興行價値は、無論老練なる監督ジェームス・クルーズの、凡庸の遠く及ばぬ妙手腕にも因ることであり、色々な意味で充分元のかゝつてゐることにもよるのだが、然し、私は此の映畫を見て、第一に、「何と！ アメリカと云ふ國は、映畫的なことよ」と感じた。即ち、此の映畫の絕大なる興行價値は、此のアメリカ魂が、映畫全體に滿ち溢れてゐたことに起因するのではあるまいか。

アメリカと云ふ國――風土の如何に映畫に適切なるかは、我國を引き合ひに出して論ずる迄もない。そして、國民の肉體に於ても、同然である。之等のことは、「幌馬車」を待たなくても、既に我々の充分感

じてゐたことであるが、此のアメリカの「國民性」が、實に此處迄映畫的であらうとは、全く「幌馬車」が、初めて此の意味の感歎を私にまで、感歎せしめたのであつた。

スピード。明るさ。朗らかな歩調。金髪のやはらかな光。他、他、幾多の「映畫向き」な條件が、此の「幌馬車」と云ふアメリカ映畫を通じて、私に迫り、私は乃ち、我國の如何に「非映畫的」であるかを併せ考へて、憂鬱を感じないわけにはゆかなかつた。

監督の技巧や、俳優の演技、撮影の技術等は、我國に於ても、大いに勉强すれば、彼に及ばないとは思はない。然し、此の明るさ、此のジヤズの音と共鳴する國民性、此のスピード。これは、我國では鯱立ちしても、眞似は出來ない。

むろん、アメリカ式の映畫を以て理想とするわけではない。ジヤズバンドの響きに感心して、急に日本音樂に愛憎をつかしたのではない。たゞ、アメリカと云ふ國は、その國民性と云ふものによつて、此處迄映畫と云ふものを「身につけ」てしまやがつたか、と、一寸口惜しがらずにはゐられなかつたのだ。ジヤズの音をきいても、せめて日本の映畫が、邦樂の三味線藝術程に迄完成されてゐたら、決して憂鬱にはならずに濟んだらう。が。

しかく、「幌馬車」は、アメリカ映畫を最もよく代表し得るものであつた。

幌馬車が、蜒々迂曲して、山野を越えて一列に並んで行く、あの壯觀。その壯觀による觀客の喜びを、抜け目なく見逃さなかつたプロデューサーが、近頃の「ビッグ・パレード」以下の戰爭物に目をつけたものに違ない。

巴里の女性 "Woman of Paris"

十三年十月

本稿の「キッド」に於て、私は、チヤールス・スペンサー・チヤップリンに就て語つた。そして、更に「巴里の女性」によつて、彼を語らうと思ふ。

「巴里の女性」の一篇は、米國映畫界の驚異であつた。ダブ〳〵のズボン、家鴨のやうな歩きつきで、滿天下を笑はしてゐたチヤップリンが、此の偉大なる藝術を生み出したことは、如何なる意味に於てゞも正に驚異であらざるを得なかつた。

チヤップリン自身の原作・脚色・監督に成つた「巴里の女性」は、勿論從來彼が作つてゐたやうな喜劇の樣式を執つたものではない、確固たる彼の藝術的手腕によつて描かれたる「悲劇」である。

此の映畫以前にも、チヤップリンの數多い喜劇の中に、鋭い「悲劇」の織り込まれてゐたのを、我々は見て來てゐる。「犬の生活」「キッド」等、喜劇の形式をとつた「悲劇」だと言つても、異論はないだらう。

そして「巴里の女性」は、純然たるチヤップリン自身の創作的態度

によつて成つた、それを悲劇とか人情劇とか一言で言ひ切つてしまへるやうなそんな簡單ではないところの様式によつた「悲劇」である。

ストーリーは、甚だ簡單だ、然し、彼チヤツプリンによつて物語られた時、何とその生々した香り！　批評家は、此の映畫を評するに當つて、例の如く原作・脚色・監督と、各部門に渉つて、その批評を成さんとして、その餘りに渾然として、その一々を分けることの困難なるにぶつかつたであらう。

「巴里の女性」の一篇は、人間の香りに包まれてゐた。出場人物の一人一人が、皆人間の弱さを以て、各々の悲劇を釀して行く。涙、人間の涙。

誇張なしに言ふ、チヤツプリンによつて、初めて映畫といふものゝ中に、眞の「人間」が表現された。

而も、此の映畫には一點の「觀衆への媚」すらもない、立派な藝術作品であつた。

俳優の演技も素晴らしかつた。

髭の名優アドルフ・マンヂユウは、此の映畫によつて、初めて檜舞臺を踏み、そして今日あるを得たのである。

新刊紹介

◆**ソウエート・ロシアの社會保險**（社會保險制度は將來の社會政策上關心すべき問題である。著者露都に滯在し社會保險を視察調査し纏めて本書の收穫となつた。時機を得た好著である。）梅浦健吉著・定價八十錢・東京神田・巖松堂）

◆和・漢・英三文對錄**古事記神代卷上・下**（太田潤校訂・チエムバリン英譯・定價各五拾錢・東京市小石川區茗荷谷町五二・世界文庫刊行會）

◆詩集**暮春賦**（衣川光義著・定價六拾錢・福島縣安積郡豐田村・北方詩人會）

◆詩集**發足**（牛谷三郎著・定價一圓・東京市牛込區若松町四〇・椎之木社）

◆**色葉句抄**（百田宗治著・定價一圓四拾錢・東京市麹町區下六番町四八・厚生閣書店）

◆**英國勞働運動の戰術とレーニニズム**（ロゾウスキー著・和田軌一郎譯・定價三拾錢・東京市牛込區肴町一二・南宋書院）

◆**ロシヤ放浪記**（和田軌一郎著・定價九拾錢・東京市牛込區肴町一二・南宋書院）

チャプリンの「サーカス」

林房雄

験によると、チャプリンは「サーカス」の次ぎには「ナポレオン」を作るさうである。私はそれに期待をかける。――これは、「サーカス」にかけた期待がはづれたといふ意味でないこともない。

＊

チアーリイの持ち味は、ペーソス・ナンセンス――こんな言葉があるかどうかは知らないが――である。これが、彼の喜劇を他の三文喜劇から區別する。腹のへつた浮浪者を主人公とする以上、ナンセンスもペーソスを伴はないではをれないであらう。「キッド」と「ゴールド・ラッシユ」でも、その點は遺憾なく成功した。「鋸屑の世界、そして笑ひと涙の世界」と最初のタイトルをもつた「サーカス」もその限りでは成功であらう。

――私はこの映畫を二度見て、二度とも、ぎつしり壽司詰めの觀客達の波のやうな哄笑の連續を聞いた。

「何時見ても、チャプリンは面白いわね！」

その通り！

＊

だが、チャプリンを現代の英雄にしたものは、彼がペーソス・ナンセンスの天才であると同時に、一個のしかめつ面の人生哲學者――リタ・グレイの離婚理由書の指摘するところによれば、「社會主義者」であることとであらう。この哲學の故に、彼はゲオルゲ・グロッスの友人であり、アプトン・シンクレアの所謂「ユーモアの天使」であり、ソヴエート・ロシヤが招いてもつて映畫を作らせようとする「民主的藝術家」であり得たのであらう。

「キッド」に「ゴールドラッシユ」に盛んに顔を出した、このしかめつらの哲學が、「サーカス」には一向出てこない。「觀客を笑はせ得ない道化役者」と「まじめな失敗」の故に名喜劇役者となる主人公との對照による喜劇哲學、または終りの場面で、星の印のついた戀人と過去の生活の名殘りの紙きれをひよいと蹴つとばすあの浮浪人哲學も、哲學としてはすでに陳腐だ。リタ・グレイのヒステリイが、彼をこゝまで萎みこませたのか？どうかさうであつてくれないように！

＊

つまり、「サーカス」は小品である。――と斷言することによつて、若い批評家諸君のように、チャプリンよりも私の方が偉いことを示さうといふのでは毛頭ないが、少くとも、「キッド」や「ゴールドラッシユ」に比べて、これは小品だ。「ナンセンスの中のナンセンス」だ――この言葉のもつ文字通りの意味に於て。

「ナポレオン」に期待する。だいいち、題材からして、ひどく闊々しくつて景氣がいい。

漱石の思ひ出（八）

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

三十五　謠の稽古

長いことやめて居りました謠を、又思ひ出したやうに始め出したのは此頃からであつたでせうか。話は少し前後しますが、この正月の元日に、森田さん鈴木さん松根さん小宮さんなどといふ常連の外に、森卷吉さんなども見えて、森田さんが新調のフロック・コオトを着ていらしたので皆がひやかしたり、御當人も大得氣にしてらつしやると、こん度は森さんの奥さんが、三重吉さんの小說の愛讀者だといふ話から、森さんが自分の奥さんに參るつてらつしやるなどと、例によつて例のとほり惡口やら冗談やらで盛んなところへ、ひよつこり紋付袴の禮裝正しく虚子さんが入つて來られました。正月に紋付を着るのに不思議はないのですが、森田さんのフロック・コオトとの對照で殊更目立ちましたのか、そんなところから謠の話になつて、どうです一緒に謠ひませうかと、虚子さんが夏目を誘はれます。謠つてもいゝねといふやうなことで謠が始まりましたが、其うち虚子さんが近頃鼓を打つてるといふやうなことを言はれると、それは是非聞かせたさいとなつて、車屋を走らせて虚子さんのお宅から鼓も取り寄せることになりました。愈々鼓が來ますと、虚子さんは皆がひや〳〵する前で、臺所から七輪をもたせて來て、かん〳〵する炭火で皮をあぶつて、さて夏目に謠へといふのです。夏目も鼓を入れて謠つたことがないので澁つて居ますが、皆さんが面白がつて謠へ謠へとすゝめるものですから、ついその氣になつて謠ひ始めました。と虚子さんが力強い掛聲を入れて、ポンと鼓をお打ちになります。夏目の謠聲がブル〳〵と震えて仕舞ひます。それではいけない、鼓を氣にしないでいつものとほり謠へといふ注意なのですが、又掛聲諸共ポンと來ると、謠手がヘナ〳〵になります。とう〳〵終ひには鼓に敗けて、皆目謠へなくなつて自分でも笑つて投げ出します。皆さんもお笑ひになります。虚子さんお一人、仕方がないもんでやりかけた謠を一人でお謠ひになつて、御自分で鼓を打

つてかへられました。夏目の謠は散々の不評判で、普段頭ごなしに惡口を言はれてゐるので、此時だとばかり私迄が皆さんの尻馬に乘つてひやかしたものです。此日森田さんはおろしたてのフロック・コオトででろ／＼に醉拂つて、沓足袋が破けてゐるから奧さんお出しなさいと、玄關で素足になつて駄々をこねて居られました。

それから謠を少し本式にやらうといふことになつて、虚子さんの紹介で寶生新さんに來て頂くことになりました。外の家元だと御禮も大變だし、其上御飯を出したりして中々手がかりであるが、新さんは手輕に來てくれるといふので、何でも其頃一週二度づゝ來て下すつて、一月八圓かの御禮だつたとおぼえて居ります。

ところが新さんが稽古日にいらつしやらない日が時々あります。名人といふものは氣が向かないと謠ふなどもいやなのだらう、まして出稽古などには來たくもない日があるのだらう、さういふ氣持は自分にもわかるが、しかし今日が稽古日だと思へば、此方もその積りで先生を迎へる氣で居るから、何となく心が落ちつかない、さうして外のことには手がつかない。此方もその意氣で居るのだから、さう／＼はぐらかされるのも困る。がこれはえらい先生を頼むからのことで、えらくなければ文句はないのだから、一つ其のえらくない方の先生から繼けて來て貰ふやうにしようかなどと申しまして、ともかく話し合ひの上でと新さんに其旨手紙をやりました。新さんがおいでになつて、どつちでもいゝといふお話で、又元通りおいでを願つて居りました。

一體稽古でも何でも、下手上手はともかくとして、やりかけると中々熱心にやる方なので、謠も一時は相當熱心にやつたやうです。やり出せば自分で面白いのも一つでせうが、又折角先生が氣を入れて下さるのだから、其手前少しは上手にもならなければといふ氣持もあつたでありませう、一週二度の出稽古だけでは足りず、後では神田にあつた新さんの出張所へ散歩へ出た序などにお邪魔に上がつて稽古もしてゐたやうでありました。安倍能成さんや野上さんなども其頃の同門であつたでありませう。

こんな調子で胃が大變惡くなる迄はともかくにも續いて謠の稽古をやつて居りました。そこで毎晩夕食を食べると謠ひ始めます。自分では運動の積りなのでせうが、それが毎晩大概時刻がきまつて居りますので、それ又夏目さんの旦那さんの謠が始まつたと近所では言つたものださうです。夏などになると白いものを着た人が、通りがゝりに生垣のところに佇んで聞いてられる方もお見うけ致した。中々いゝ聲だといふ評判ですよと、ある時そんなこんなの評判を申しますと、乃公の謠なんか聞いてるものがあるのかなあと、ひどく謙遜して居ましたが、さうかと思へば、貴方の聲より安倍能成さんの謠の方が餘程いゝなどと人をほめやうものなら、お前には謠なんかわからないいんだ、安倍は一寸聞きのいゝやうに言ひまはしがうまいんだとか何とか申しまして御機嫌斜なのです。

胃をひどくしましてからは、胃に響くからと言つて、近所の醫者な

どは謡はおやめになるがいゝなどとすゝめたものですが、自分では少し位は運動になつていゝ、自分のやうな運動不足なものは、せめて謡なりと謡はないことにはと、この忠告には屈しないでやはりちよい〳〵謡つて居りました。

　前にそんなことがあつたので、新さんも精出して来て下さいましたが、やむを得ずおいでになれない時には、小鍛治さんが代稽古に見えます。新さんの方では、どうせ御殿様稽古なんだからといふ腹がおありなのだから、あんまり厳しいことも言はず、そこのところには手加減がおありなのでせうが、小鍛治さんの方では、お年もお若い上に、至極几帳面なので、少しでも悪いとなると、同じところを何べんでも謡はせになります。それが次の間で聞いてると可笑しいのですが、實に遠慮会釈なくぴし〳〵やられるので、夏目もこれは少し勝手が違ふといつた風に思つてるのでせうが、ともかく謡つてはなほされ謡つてはなほされ汗だくで叩かれてゐる様子です。何しろ小鍛治さんの方では、御自分で修行されたとほり、苦しまされたとほりをやらせようといふのでせうから骨が折れます。後で私が、

「大變な御稽古なんですね。」

と同情して申しますと、夏目は、

「新は世間ずれがしてゐるが、あれがいゝんだよ。」

とつく〴〵小鍛治さんの稽古振りには感心してゐる様子でございました。さうして續けて申しますことには、

「乃公がたまによく出来ると、今度は大變いいですがとほめてくれるのはいゝが、眞面目になつて、しかしこれはまぐれ當りかも知れませんから、いま一度どうか謡つて御覧なさいつていふんだから、あれにはかなはないよ。」

　と、思ひ出し笑ひをして居つたことがありました。

　こんな工合に稽古をして居りまして、番數はかなり上げたやうですが、どれだけに謡へたものか私にはわかりません。其頃本當だかうそだか知りませんが、他の人にくらべるとかなりむつかしい所謂ゆるしものを謡つたりしてゐましたが、どうも新先生小使が欲しくなると、ゆるしもの〵押し賣りをやつて行くやうだなどと笑つて居たことがありました。

お能は虚子さんあたりとよく九段の御能へ出掛けたやうでした。

三十六　煤煙事件

　三月のいつ頃でしたか、まだうそ寒い季節だつたと覺えて居りますが、森田草平さんが夜おいでになつて、例のとほり書齋で夏目と話していらつしやいます。私は前の錢湯に行き、子供たちは例の坑夫の書生の新井と歌加留多を取つてはしやいで居りました。私が錢湯からかへつて子供たちがきやつ〳〵とはしやいでる玄關突き當りの居間へ入りますと、ふとそこの障子がなめたやうに丸く穴があいて居ります。ついぞ見なれない穴で、子供たちでもいたづらをしたのかしらと玄關に

の間に出て見ますと、入口の障子の端が二尺ばかりあいて居ります。おやといつて上り框のところに出て見ますと、玄關の格子戸が細目に開け放しになつてるといふわけ。見れば夏目のはいた下駄もなければ、森田さんの沓も見當らない。外套や帽子も根こそぎやられて居ります。又々こそ泥にやられたのです。仕方がありません。もうおかへりといふ森田さん穿きものがないので、ともかくも下駄を買はせて漸く其場はかへつて頂きました。

常連の森田さんがおいでになるのは珍らしいことでも何でもないのですが、折も折とて丁度泥棒にやられたのと、もう一つは私のところから歸へられて間もなく、例の名高い「煤煙」事件の爲めに、鹽原の山中へ雷鳥女史と驅落ちをされた、其夜の訪問が私たちにそれとなく別れを告げに來られたのだと後からわかつて、特別によくおぼえて居るわけです。

一體森田さんは隨分ずぼらな質で、其頃松浦一さんの口きゝでどこかの宗教學校に教鞭を取つて居られましたが、試驗の日を間違つて、翌日の日曜日に學校へ出たら誰も居なかつたといつた風で、松浦さんあたりから苦情が出たりしたものです。尤もその頃は戀愛事件なんぞで一倍忙しくもあつたのでせう。が、ともかく夏目はそのずぼらさ加減が餘程氣になると見えて、中々口やかましくつけ〱と申します。例へばお湯へ一緒に行つたりなどしますと、行く度にさつさと自分は先に洗つて、さて出がけに、おい、森田、この石鹸箱をきれいに洗つてちやんともつて來るんだよと噛んでふくめるやうに命令するのださうです。何もそれ程に言はなくたつて、僕は今さうしやうと思つたところだのに、先生程人を子供扱ひにする人はないつて、森田さんがぶつ〱仰言ること仰言ること。夏目の方ではいくら言つても彼奴には足りない位に思つて居るのでせう。萬事この調子なのです。

ところがこの森田さんが急に姿をかくしたといふ騷ぎです。私たちも驚きまして、さては先夜は暇乞ひに來られたのだなと思ひましたが、さあといつてどこと目當てのないことで呆然として居りますと、生田長江さんが見立てのお話に、どうも行先は鹽原らしい。搜索に行くから旅費を貸してくれといふことでした。ともかく生田さんが刑事を二人お連れになつて鹽原へ立たれます。程なく鹽原から居たといふ電報が參りました。何でも雪のある山中に立てこもつて死を待つてゐるうち、森田さんが水を取りに下りて來られたのをつかまへたとやらそれから足がついたとやらで、とう〱お二人とも無事に連れ戻されておいでになります。生田さんが森田さんを連れておいでになつて、大變興奮してゐるから、なるべく小言も言はずおいてやつてくれろといふお頼みでした。仕方がない、他へといふわけにも行かずともかく今度のほとぼりがさめて、それから今後の方針のきまる迄居たがよからうといふことになりました。

そこで夏目が私に申しますには、森田を外へ出してはいけないよとかういふのです。萬一のことを慮つてのことでせうが、大の男が仕事も

なしにごろ〳〵してゐて本を讀んだりして居る位のもので、胸にはいろいろもや〳〵したこともあるのでせうから、それを一概に外出させるなと閉門同様の仕置きをしやうとしたつて、それは申す方が無理に違ひありません。始めのうちはえらく神妙に家へすつ込んで小さくなつて居られましたが、段々夏目の目を竊んではちよい〳〵夜など外出されます。それも長いと私が心配すると思つてか、一時間そこ〳〵で歸へつて來られるのですが、或る夜十時頃になつて歸へつて來られたから、どこへ行つたのと、私も一つには義務で一つには好奇心で尋ねますと、程近い榎町の洋食屋へ一ぱい吞みに行つたといふお話。そこでコロッケを食べたらとてもまづい。で今夜家で食べたコロッケの方がずつとうまいといふと、そこの家の者が、貴方はどちらですときくから、辨天橋上の夏目だといふ、では夏目さんの旦那さんかと又尋ねる。いや、旦那さんどころか居候だと斷はつて來たといふ話に、そんなに居候を鼻にかけなくともいゝぢやないのつて笑つたことがありました。

始め森田さんが家にいらした時に、寢る時どこにしやうかといつたら、夏目の書齋へ寢なさいと申しますと、どうも先生の書齋は氣づまりでいやだ、僕は女中部屋で結構だといふわけで女中部屋へ床を敷いておやすみになります。時たまのぞいて見ると、強度の近眼鏡を外づして、キョト〳〵して居られます。さうかうしてゐるうちに、いかにも窮屈さうで見てゐる私が氣の毒になりまして、夏目の留守の時などは、禁を破つて、少しばかりお酒を上げたりします。と始めは内緒内緒で小なくなつて吞んでゐられるのですが、さこいゝ機嫌になつて來ると急に大きくなつて了つて、夏目がかへつて來て床に入つてゐるのに、どしん〳〵と大きな足音を踏んでいばつて書齋に書物を取りに行きながら、「今日は奧さんに御馳走になつて酒をのましてもらつた」と大きな聲でどなつてろうかを通ります。大に勉強でもなさる氣なのでせう。それを見て夏目が、

「又お前吞ましたな。」

と言ひ言ひしたものでした。

さて、其の煤煙事件の眞相といふやうなものは私にはわかりませんが、それから先方の御母堂が再々家へいらつしやるやらで、自然中に立つていろ〳〵話もきくし骨も折るしといつた工合でした。が元來人様の出來てしまつた行爲をとやかくいふ方の質の人ではないので、あんまり批評がましい事は聞きませんでした。たゞ先方で森田さんの方をしきりに惡様に言ひ振らすのを耳にして、一緒に逃げたのだもの、惡いといへばどつちだつて惡いに違ひない。森田がそれについて默つてゐるのが、あれがいゝと申して居たことがあります。さうして自分では自分の頼まれたことを几帳面に申してゐたやうでした。

一體自分が頼まれて引きうけたことは几帳面にする代りには、自分から人に頼んだこと、それから中へ入つて人に引きうけさせたことなどには極めて嚴格で責任をもつて貰ふことを要求して居ました。其後森田さん

が朝日新聞に『煤煙』をおかきになるやうになつてから、時々休載のことがあります。するとどうもなまけてるんぢやないかとしきりに氣にして、下宿迄見に行つたりしました。或時そんなわけで神樂坂を歩いてゐますと小宮さんにお遭ひしたさうです。先生、どちらへいらつしたのです。今森田のところへ行つて見たが居なかつた。『朝日』の小説欄は、休みのないのが自慢なのに、近頃よく休みがあるから、大方又例のづぼらを極め込んでゐるのではないかと見に行つた、そいつは森田の奴怪しからん、小説をすつぽかして遊びに歩くとはといつた案配の問答で、自分の世話したとには非常な責任をもつて居りました。それから自分が朝日新聞社の一人として他へ小説や原稿などを頼む時なども、隨分後輩の人などへ禮をつくして相手を尊敬して頼んだもののやうです。

三十七　猫の墓

九月十三日に猫が死にました。其次にも又次にも猫を飼ひました。夏目といへばすぐ株猫と聯想される程猫には緣があるやうに思はれたものなので、訪ねておいでになる方が緣に遊んで居る猫を見られて、此猫は何代目ですなどとよく聞かれたものです。この死んだ猫は有名な初代の猫ですが、こちらへ越して來てから妙に元氣がなく、殊に死ぬ前などにはたべたものをもどすやらもらすやら、一體にしまりがなくなつてゐて、子供の蒲團といはず、客用の座蒲團といはず　隨分よごしたものでしたが、いつの間に見えなくなつたかと思つてゐるうちに物置の古いへつついの上で冷くなつて居りました。車屋に頼んで蜜柑箱に入れて、それを書齋裏の櫻の木の下に埋めました。さうして小い墓標に夏目が「此下に稻妻起る宵あらん」と句を題しました。九月十三日を命日と致しまして、毎年それからこの日はお祭りを致します。其後文鳥が死んでこゝへ埋められ、それから又犬が死んで同じくここに葬られました。犬の墓標には『秋風の聞こえぬ下に埋めてやりぬ』といふ句が題されて居りました。すると子供たちが眞似をして金魚が死んだりすると、金魚の墓をこさへたりして、まるでこゝは生き物の墓地見たいになつて了ひましたが、猫の十三回忌の時に、小い祠でも建てやうかと思つたのを考へなほして、九重の石の供養塔を建てました。さうして雜司ヶ谷の墓地にあつた萩を移して周圍を飾りました。

初め猫の墓をこさへてかけ茶碗に水を上げたり、心ばかりの供物をあげたり野の花を捧げたりしておきますと、小い子供たちがその水を呑んだりして閉口させたものでした。それで思ひ出すのは、あるとき三重吉さんがこんな句を作られました。『猫の墓の茶碗の水も、氷りけり』これを夏目が聞いて『もではいけない、茶碗の水の氷りけりだな』といつてこれをなほしたといふことを三重吉さんに伺つたことがあります。

十二月に入つてから、三女の榮子がチブスで長いこと寢てゐて漸く癒つたので看護婦をかへして間もなくのことでした。夜中どこかでガタガタといふので目をさましまして、子供を連れて厠へ立ちました。さうしてその足でざつと台所まはりの方を見て歩きましたが、これぞといふこともありません。それが三時頃で、やがて床へかへりましたが不氣味なので目が冴えてねつかれません。してゐるうちに四時を打ちました。もう明け近いとだ、さう思つて始めて安心して寢たところへ、隣りの部屋から女中が得體の知れない叫び聲を擧げて飛込んで來て、ガバと私の蒲團の上に倒れました。何事か一時私にはわかりませんでしたが、段々聞いて見ると、腰をぬかして顫へ聲で『泥棒、泥棒』と叫んでゐるのです。その叫び聲を聞きつけた夏目は、日頃私が炬燵を入れて寢るのを危いからと氣にしてゐたもので、てつきり火事だと思つて飛び起きたのださうですが、泥棒と聞いて早速次の部屋に入つて見ますと、簞笥があけつ放しになつて居ります。そらと台所口へ出て見ると、そこの雨戸が外づれて、外には寒い月が出てゐるばかりで人影もありません。

私が厠へ立つて間もなく、女中も目をさましてはゞかりへ立ちまして、どうも眠られないのでおちおちしてゐると、何やら耳元近くでずるずると引つぱり出した音がする、ひよつと目をあけて見と、すうつと人の影がする、怖い怖いと思つてゐた矢先なので、矢庭にキヤツと叫んで私のところへ飛び込んで來たものださうですが、騷がれた其爲めに泥棒は仕事を半分にして逃げ出したものでせう。

朝になつて警察に屆けます。刑事が來るとやら、泥棒の足跡を見つけたとやらで大騷ぎをしましたが、盜まれたのがみんな帶ばかりで、數へたら十本でした。その中には子供たちの帶もあつて、長女の筆子などは、お正月にしめる一張羅の丸帶をとられたとあつてべそをかくといふ始末でした。夏頃になつて盜まれた中で私のしめてゐた帶が一本出て參りました。市ケ谷監獄かの牢番のおかみさんがしめてゐたさうで、それから段々手づるを求めてさがしたが、さつぱりわかりません。おかみさんも賣りに來る古着屋から買つたといふのみで曖昧でしたさうですが、それなり切りになつて居りました。すると二三年後になつて、その牢番が泥棒であつて、おかみにやる爲めに稼いで、盜つた中の一つ二つをやつて、後はわからないやうに賣り飛ばしたり入質したものであつたさうです。

これが私たちの數多い盜難の最後のものでありました。

それから一週間ばかりして六番目の子供が生まれました。中年に生まれた六番目の人間だといふので、申に人篇をつけて伸六と名づけました。

三十八　滿韓旅行

翌る四十二年の夏頃、當時滿鐵の總裁だつた中村是公さんが出てお

いでになりまして、一度滿洲へやつて來ないかといふお誘ひ。金がないよと申しますと、金はやるから來いとあつて、何でも五百圓かを頂きました。それで中村さんが八月末かにおたちになるので一緒にまゐる筈で居りましたところが、又胃の工合が惡くとても同行が出來ませんで、一船おくれて立ちました。

中村さんとは大學豫備門時代かに一緒に下宿したりして中々親しかつたものらしいのですが、其後ずつとお會ひしなかつた樣子でした。一度ロンドンでお會ひしたとか申して居りましたが、どの道學校を出てから中村さんも夏目も地方生活を多く致しまして、それから夏目が東京へ舞ひもどつた頃には、中村さんは後藤さんの下で臺灣に居られ、それから滿洲といふわけでいつも離れ離れになつてゐたのです。夏目の方では中村さんを、法科の人間には自堕落のものが多いが、あれは全く信義に厚い人間だ、頼めば何でも本氣で親身になつてやつてくれるから、かへつて迂濶には頼めないなどと申して居りましたが、大體其頃は中村さんの方で夏目を大騒ぎしてらしたやうです。學生時代から夏目は西洋かぶれをするでもなければ御世辭を言ふでもなく、ちやんと自分を崩さずに持つてゐて、それでゐて同級生から尊敬されてゐたものだなどと話つて居られたことがありました。

やはり此頃のことでありましたでせう。夏目が中村さんにお會ひしての雑談の折に、

「どうもいつまでたつても貧乏で困る。金が欲しい。」

と申しますと、中村さんが、

「それぢや持つて來てやらうか。」

といふお話。

「そんなんぢやない。世襲財産か何かゞ欲しいんだよ。」

「そいつは困るなあ。」

夏目のゝは突飛で駄々つ兒見たいな言ひ分なものですから、中村さんも驚いてゐられたなどと申して居たことがありました。

丁度其頃は『それから』が朝日新聞に出て居た頃で、毎日それを書いて居りましたが、大概二十回分位書きためては届けて居りました。さうして出發前にすつかり書き上げてまゐりました。丁度其頃西村濤蔭さんが妹と一緒に家に厄介になつて居られた頃で、その原稿を届けるのが西村さんの役目です。松根東洋城さんがいらしての西村さんを捉まへての話に、

「三千代が代助によばれて何と返事をするだらう。どうも待たれて仕方がないが、君知つてるだらう。何て書いてある。」

と中々の執心振りです。

「えゝ、僕知つてゐます。しかし先生はきわどいところをあつさり切りぬけるから食ひ足りない。」

「それが見たいな。」

松根さんは新聞に出るのが待ち切れないかのやうに、しきりに見たがつて居られました。

此時分から段々胃が本式に悪くなつて行つたものらしいのですが、痛んで來ると自分では懷爐かなんかで暖めておいたらいい位にしか考へて居なかつたのですが、旅行中幾度か痛いお腹を抱へて車に乘つた記事が『滿韓ところどころ』の中に書いてあります。
滿洲のかへりには朝鮮へまわつて、總督府の度支部長かしてらした鈴木穆さんのところで御厄介になつて居りました。そこで燒いた樂燒がありますが珍らしいものです。
十月の中旬に旅行から戾つて參りました。玉やら翡翠やらそんなものを大分御土産に買つて參りました。一體が支那趣味の人で、お金もないので大したもの丶買へやう筈もないのですが、それでもちよいく〳〵虎の門晩翠軒あたりへ行つて、何かと買つて來たりして居たものです。隨分紫檀が好きで、お盆でも机でも莨入れでも無闇と紫檀を買ひ集めます。それを見て私が、貴方は何でも紫檀ならい丶のでせう、其中には紫檀の机に紫檀椅子で、何でもかんでも紫檀づくめですましてゐたらいいのでせうが、愛國心のない人だなどと申しますと、夏目の方では、お前は又蒔繪だとか梨地だとか、そんな金々澁つたけばけばしたものならい丶のだらう。蒔繪さへしてあればい丶かと思つてるが隨分下品だなどとけなして居たものです。紫檀の机につやぶきをかけて、光の出るのを喜んで居りました。

三十九　修善寺の大患

次の年になりましてから、胃の工合が益々いけません。始終痛む樣子ですが、やつぱり手當はい丶加減な其場限りで、ありきたりな胃病の藥をのんで、通じでもつけとくといつたことです。親類の年寄りなどが、私の顏を見ると夏目の樣子を尋ねられますから、これ〳〵だと說明致しますと、そんなことして放つておくと癌になつたりするといけないから、專門醫にかゝつたがい丶と注告してくれます。さう言はれて見ると私も氣持がよくないので歸つてきてすゝめますと、癌になつたらなつたで仕方がないぢやないかと、中々それでは診察して貰ひに行かうと申しません。が顏見る度に私が注意するので、其度每に又そのとほり申します、とう〳〵自分でも氣味惡くなつて來たものでせう、內幸町の長與胃腸病院に行つて診て貰ふことになりました。それが六月のことであつたでありませう。
診察の結果、どうも胃潰瘍らしいが、ともかく便を見てといふことで、翌日又參りますと便の中に出血してゐるといふことで、胃潰瘍の診斷を下されました。さうして大したことはないが、家では手當も屆くまいし、每日こ丶迄通つて來るのも大變だから、一時入院したがよからうといふことになりまして、六月の中から一人で入院致しました。幸ひそこで靜かに療養してますうちに大變工合がよくなつて、もう上からうといふことで、七月三十一日に退院致しました。
其頃松根東洋城さんが、北白川宮樣のお附で修善寺へ行つてられるから、病後の靜養に來てはどうかといふことで、自分でも識つた人が居

た方がいゝと思つたものでせう、行つて見ようと申します。松根さんと一緒にゆつくり俳句でも作る氣であつたものと見えます。

ところがいよ〳〵修善寺溫泉へ參ゐるといふ前日、胃腸病院に一度診て貰ひに參ゐりました。行きかへりとも市内電車で、かへりには外濠で神樂阪下におりて、そこから家迄歩るいてかへりました。途中で大變胸が悪くなつたさうですが、車にものらず其儘我慢してかへつて參ゐりました。

その翌日修善寺へ向けて一人で出發ました。途中三島で松根さんと落ち合ふ約束だつたのださうですが、どういふ間違かお會ひが出來ず、そこのプラット・フォームに待つてる間に、八月の暑いさ中だといふのに、非常に咽喉をいためて了つたさうで、汽車に乘つてから、どこかの驛で、西洋人と驛夫とがしきりに何か言ひあつてゐましたが、双方の言葉が通じないので、とんと埒があきません。聞いて見れば西洋人の手荷物がなくなつたとやらで問答してゐたのださうですが、いつまでたつても果てしがつかないので仕方がなく中へ通辯に入つてすぐに用を片づけさせたさうです。が其通辯の時、話したくてもまるで聲が出なかつたには閉口したと後で申して居りました。一體どういふものか胃を悪くする時には、きまつて其前に咽喉を悪く致しました。此時もそれでしたが、亡くなる前にも大變咽喉をいためましてしきりに咳きますので、咳止薬をのませますと、こん度は胃が苦しいといつて、それ切りでやめたことなどがあります。

そんな工合で着いた三日目から早や床について了ひました。松根さんが見兼ねて含嗽藥をこしらへさせてあてがつても、さあおやりなさいと言はなければ、中々含嗽をしない。世話がやけるつたらないなどとこぼしてゐられたことがあります。

さうかうして居るうちに、容體が面白くなかつたものと見えて土地の醫者をよんで診て貰ひますと、東京へ歸へつて治療したがよからうといふことだつたさうですが、病人は動きたくなく歸へりたくないといふので、では主治醫の方へ話をして見て、先方から醫員に來て頂くなり何なり取計らはうといふことで、長與胃腸病院へ電話をかけました。病院の方では自宅の私のところへ電話をかけて様子を報らせやうとしたのですが、合憎其頃はまだ電話を引いて居りません。そこで朝日新聞にかけて聞いたら仔細がわかるだらうといふので、新聞社へ電話をかけます。新聞社ではびつくりしまして、すぐに阪元雪鳥さんが、胃腸病院の醫員の森成麟造さんと一緒に修善寺に急行されました。

そこへ松根さんから電報が參ゐりました。電文が短いのでどんな樣子かさつぱりわかりません、いづれかけつけるにしても、も少し詳しいことが知りたい、さう思ひまして御近所の山田三良さんのところの御電話をかりまして、修善寺の菊屋本店にかけます。すると自分で電話口に出て參ゐりました。自分で電話口へ出て來る位だから、ほつと安心しましたが、それにしても話の様子がいやに他人行儀で、さうして電話も遠いのですが、一向要領を得ません。後で聞いて見ると、私の

妹かと思つて改まつていゝ加減な挨拶をしたのださうですが、それにしても床についてゐる病人を、あの菊屋の長い廊下の、しかも上つたり下がつたりの一道中を、帳場迄呼び出したのかと思ふとぞつと致します。そのうちに不得要領のうちに電話が切れます。仕方がないので電報で問ひ合はせますと、來るに及ばずといふ返電でした。電話口に自身出て來たことと云ひ、又この電報と云ひ、私はほつと致しました。

まだ入院中からの話で、この夏は子供たちを海水浴にやつてやらうといふので、茅ケ崎の海岸に小い家を借りまして、私の母からついて行つてもらつて居りましたのですが、此頃は毎日毎日連日の大雨で、どこもかしこも大洪水、汽車は不通になるし、さつぱりよその樣子がわかりません。茅ケ崎の樣子も知りたいが、どうにも仕樣がありません。そこで矢來の兄さんに頼んで、郵便局の電話で聞いて頂くと、茅ケ崎は大丈夫といふ返事で一安心して居りますと、こん度は箱根の福住へ行つて居た私の妹と一番季の弟とが流れたといふ話。がこれもどうすることも出來ません。そんなこんなのごたごたを水見舞旁々夏目のところへ手紙を書いて、行きたくも行けないことを言つてやつて居りました。

其内に汽車は開通します。まづ何よりも茅ケ崎へ水見舞に參ります、出かけにいゝ案配に箱根で遭難した妹も弟も命からがら避難して横濱にかへつたといふ通知をうけました。それ迄心配するとわるいからと、母には内緒にして居たのですが、もう大びらに言つてもいいのでそのわけを話して、會ひに行つておやりなさいと、入れ代りに横濱へやつて、私は其晩子供たちのところへ泊まらうと思つてゐたのでした。

と、入れ違ゐに、私を追つかけるやうにして、修善寺から家へ打つた電報を、留守居の人からこゝへ打ちかへして來て、修善寺へ急行せよといふことです。すぐ樣子供たちをこゝの家主のお神さんに頼んで、又母のあとを追つて横濱へ參りました。しかし其日はおそくたつて、修善寺行きの汽車には間に合ひません。不安な一夜をそこに明かして、翌朝早々とたちました。

修善寺へついて早速松根さんに會ひました。かなりの出血があつた後で今は落ちついて居るけれども、これがおさまつたら東京へ連れてかへるがいゝといふお話。段々お話を伺つて見ると、此方へ來てからずつと胃の工合が惡くて、此頃は毎日便に出血を見るとのことでした。何にしても並々ならぬ容態のやうでしたが、其晩に又々血を吐きました。

胃腸病院から來られた森成さんが、かうやつていつなほるとも知れない病人にいつまでついてるわけには行かない、胃腸病院の仕事をそのまゝにしてあるのだから、かへりたいといふ私の顏を見てのお話。それはいけないでせう。此方へ來る前に、胃腸病院へわざ〳〵行つて、旅行してもいゝかどうかを伺つて快諾を得て來たのであつて見れば、來るや否やすぐ病氣を發するなどは一部分病院の責任ともいふべ

きことでさう。私からいへばお醫者の診察を遮るとでも言ひたいところだのに、その病人を打つちやつて歸へるなどとは以ての外だと私が抗議を申し込みます。森成さんもお困りになつて、長與さんへ電報をお打ちになる。夏目氏全快迄居よといふ返電がつきます。さうして其上副院長の杉本さんが診察に見えるといふこともわかりました。

前晩あたりのことだつたさうですが、修善寺のお祭りでしきりに花火が上がる。それを縁の端近迄床を引いてもらつて寢ながら眺めて、西瓜の汁をすゝつてゐたが、其中に一粒の種子が入つてゐたのを知らずに呑み込んだので、森成さんたちが心配したことがあつたさうです。が其日は大解血便も少く、この分ならば遠からず東京へ移せると、皆がやゝ愁眉をひらいたものださうです。

杉本さんが見えるといふ日、朝からお待ちしてゐるのですが、胃の工合も惡く顏色もよくありません。氷で冷やしたりしてるのですが、顏の色などまるで半紙見たいで、見て居ても氣持が惡いたらありません。心臟も惡くないやうだが、先生神經でもおこしてるんぢやないかしらなどと、お醫者さんも言つてられたものです。それからしきりに胸が惡いと訴へて居ました。

夕方牛乳を少しばかり呑みましたが、大變氣持の惡い樣子でした。そこへ杉本さんがお見えになつて診察がすみます。やれ〳〵と思つて、お醫者さん達が彼方の部屋に退いて、一風呂浴びて夕食でもたべやうとなさいます間、私が側へよつて話でもしやうと近づきまして、あんまりいやな顏をしてゐるものですから、

「氣持惡いですか。」

と尋ねますと、いきなりすげなく

「彼方へいつてゝくれ。」

と申します途端に、ゲエーッといふいやな音を立てます。樣子が只事でありません。隣室に高田早苗さんがお子樣方をお連れになつていらして居ましたが、そこへ女中さんが來て何やら話をしてゐます。ともかく場合が場合ですからなりふりをかまつては居られません。急にその女中さんを呼びまして、今行かれたばかりのお醫者さんたちを呼んで貰はうとしました。と又ゲエーッと不氣味な音を立てたと思ふと、何ともかんとも言へないいやな顏をして、目をつるし上げて了ゐました。と鼻からぽた〳〵血が滴ります。私は躍氣になつて通りかゝりの番頭を呼んで醫者を呼ばせます。お醫者さんたちは中庭を隔てゝ向ふの部屋に居るのですが、その後姿などがちら〳〵見えてゐるのです。其間に夏目は私につかまつて夥しい血を吐きます。私の着物は胸から下一面に紅に染まりました。

そこへ皆さんが馳けつけておいでになります。顏の色がなくなつて、目は上がつたつ切り、脉がないといふ始末です。それカンフル注射だ、注射器はどうしたといふ周章方です。注射を續け樣に十幾本かを打ちますが依然としてよろしくない。では食鹽注射だといふことになりましたが、合憎と森成さんも杉本さんもその注射器を持合はされ

ない。漸く土地のお醫者から借りて來たもの丶、それが壞はれてゐるといふ始末。壞はれたつて針さへあればいゝ、灌腸器の何とかどうしてと、上を下への騷動です。一晩中壞はれかけた注射器を武器にして、お醫者さんと病氣とが闘はれたわけですが、とう〳〵いゝ案配に脉も出て來て、危いところで一命を取りとめることが出來ました。

後で病人に聞きますと、そんなに騷がれてゐるにも拘らず、自分は血を吐いて了つたら、俄にもや〳〵してゐた胸がからりと晴れた氣持になつてせい〳〵したさうです。さうして皆があはてゝ話をしてゐるのが聞こえるが、たゞ自分でも相手になつて口をきく氣がしない。かうなつた上は子供を呼ばなければいけないでせうなどゝいふのが聞こえるので、急にぽかんと目をあけて、いや呼ぶには當らないよと言つて皆を驚かしたり安心させたりしたものですが、病人なんてものは樂なものだと述懷してゐたことがあります。

社の阪元雪鳥さんが、この危篤の状態に驚いて、各方面へ電報を打つてゐられる。鉛筆か筆かを握つて電報用紙に向ひながら、奥さんしつかりしてらつしやい、しつかりしてらつしやいと、私が此上氣が轉倒でもしてはと思はれるものかしきりにはげましてくれられるのですが、私どころか御自分の手がぶる〳〵震えて、どうしても電報の字が書けないのでした。

社からは池邊さんが來られる、其外いろ〳〵な方々がお見舞にかけつけて下さいましたが、この容態なものですから、會つて頂くわけに參りません。

ところが其日はどうやら落ちついたもの丶、翌日になると杉本さんが院長の長與さんが重態でどうしてもかへらなければならないと仰言います。もう少し居て頂きたいのは山々ですが、それも致方がございません。かへり際に、吐血で病人を殺ろすのは全く醫者の不注意ですから、看護にもよく言つて萬遺漏のないやうに致させますが、しかし御覽のとほりのこの御重態のことですから、もう一度大出血がないとも限りません。萬々一それがあれば絶望だと思つて頂かなければなりませんといふお話。そこで池邊さんにもそのことをお話して、こゝ二三日が大警戒を要する時だとあつて、東京から看護婦を呼んだりして、手當に手落ちのないやうにつとめました。いゝ案配に吐血はそれ切りとまりました。が手足は動きません。これが八月二十四日の出來事であります。

こゝで一寸迷信的なお話をつけ加へておきませう。一體私は元からさういふ質でもなかつたのですが、殊に夏目の頭が病的に惡くていぢめられた頃から、物事を運命的に觀ずるとでも申しませうか、占を見て貰らつたりするやうになりました。別にそれを人に強ゐるといふのではなく、唯だ自分の安心の爲めに見てもらふのですから、こつそり見てもらつたりするのですが、それがいつの間にやらわかつてしまつて、お前はいつも亭主より先に天狗に相談するなどゝ笑はれたも

のです。天狗といふのは私がよく見て貰ふ占者のことです。

この大出血の前日、つまり二十三日のことです。どうも夏目の容態が氣になつて仕方がないので、安心の爲めと思ひまして、天狗に手紙を書いて、容態のことをいつてやりまして、どうか占をして見て、その上祈禱をして下さいと申してやつたものです。すると二十五日に返事が參りました。易をたてゝ見たら、出た易がとても惡い。謂はゞ臍に彈丸が當つて爆發したやうな形だから非常に惡い。が私は齋戒沐浴して一生懸命三七日の間御祈禱して見ませう。どうか一週間一週間が息をぬいて一休みしますから、一週間たつたらそちらの容態を知らせて下さいといふ返事です。丁度二十四日の危篤の日を挾んでの手紙の往復でした。それでそのとほり七日目七日目に此方の容態を報らせてやつて居りました。そしていゝ案配になほつたので禮狀を出しておいて、後で御禮に參りました。すると其時天狗が申しました話が少々怪談めいてゐるのですが、妙に面白いのです。

何でも私からの手紙をうけとつた二十四日の二三日前、どこからともなく見なれない黑猫が天狗の家に入つて來まして、その儘逃げもせず家に居ついて了つて、御飯をやればたべるし、坐はつて居れば膝に來て抱かれるといつた工合でありました。ところが私の手紙で、これから祈禱をしやうと檀を組んだりしてゐますと、いつの間にやら姿を隱くして、それからといふもの幾日たつてもかへつて參りません。妙な猫だなと時々思ひながら祈禱を續けて居りますうち、滿願に近づいてからひよつくり入つて來まして、さうして血を吐いて死んださうです。どうも猫が身代りになつたのぢやないかなどゝ申して居りましたが、さうして夏目と猫とだと取り合はせもよくて益々怪談めいた因縁話になるのですが、それを聞いた時が場合が場合なものですから、非常に感謝したい氣持になつたものです。

余の左傾と前藝入りに就て

片岡鐵兵

私が所謂左傾し、更らに前衛藝術家聯盟の文學部員となり、同時に勞農黨に入つて城西支部落合班で働くこととなつたのは、私にとつて非常に幸福なことである。

この時代に生活しつゝある私が、この時代に於て斯く生きることを慾求するやうになつたのは誠に必然のことである。私は斯う生きる他に生きる立場を發見し得ない。故に斯うなつた。理窟は只それだけである。

私の小ブルジョア性が根強く私の内に根を張つてゐる。其所でこれを克服し清算するために多くの生活的惱みがある。然し、一切の惱みを卒業し、理想的なマルキシストになつてから左傾し、入黨してゐたのでは益々おくれるばかりだ。私はどし／＼働き、日常の實踐を通して私を尖鋭ならしめなければならぬ。

それ故、私は文壇の喧々ゴウ／＼たる罵聲こも顧みず組織の中に入つて行つた。私は次第に急速に訓練されるであらう。

私の斯る轉換をば、何か文壇的なズルイやり方であり、卑しい功利心の表れであるかのやうに非難する者もある。そんな分らずやに人間としての自覺を說いたつて始らぬ。だから私は敢て答へる、さうだ、俺は負ける方へ節操を殘すほど高潔な男ではない。俺は必ず勝つ方の陣營へ參加する薄情者であるのだ！と。

人情――そんな物はコレつぱかしも持ち合はさない。

今日では、プロレタリアの陣營に參加することが最高の知識要求であり、道德命令であるのだ。必ず「勝つ」とは、知識に於て又道德に於ての最高の立場を掴み得る事に他ならない。負けるとは此の逆である。即ち、負けるとは、智的に又道德的に、死ぬることである。

私は生きなければならない。

今度「前藝」に入つた事が新聞に報告されるや、下谷の一勞働者はいち早く激勵のハガキを私に送つて來た。「同志、鐵兵！」と呼び掛けられた事は私を感激せしめた。一人の戰鬪的プロレタリアートから「同志」と呼ばれる幸福は百人の文壇人から罵倒される煩さを償つて餘りある歡びであつた。

二月上旬から半ケ月、中國九州の各都市を改造社の依囑で講演してまはつたが、各地の多くの意識青年も亦私の今回の轉換を祝して吳れた。

私はこれまで多くの小說を書いた。私のそれらの小說を通じて、私に特別の理解を寄せられた少數ながら全國にまたがる青年男女諸君！　諸君がもし必ず勝つ者への正當なる熱情を持つならば、私と共に勇敢に××せよ。諸君がもし社會を、而して歷史を正しく認識するならば、今日直ちに勞農黨に入黨し、左翼文藝陣を積極的に支持せよ！

（三月二十八日）

金融資本支配の過程に於ける
電力産業の争覇

薄茂人

一、遠來の賓客と電力統制

わが電力産業の上に、資本統制を強行しやうとする意圖の下に、昨年結成された日本電氣證券（資本金一千萬圓）は、地球の一半の電力産業を支配しつゝあるアメリカのジー・イー・シー、東京電氣（ジー・イー系）アメリカ電氣證券や、ギヤランテイ・トラスト、ラザート・ブラザースの英米投資團や、三井、三菱、安田、住友、東京電燈、東邦電力や、によつて構成されてはゐる。その構成員より見れば、威風あたりを拂つて堂々たるものがあるが、拂込まれた資本と、その背後の巨大なる資本、それは統制の使命をになはされた資本であるにかゝはらず、創立後一年餘、非活動資本態として冬眠をむさぼりつゝある。

彼等はその原因が、電力の資本統制の過程における金融資本團の對立や電力産業資本の優位といふ、奥深いところにある根本を確めやうともしないで、日本電氣證券の不振は、一つに融資技術の不慣れに據るものと感違ひして、紐育電氣證券の副社長エル・ピー・ハムモント氏を遙々と東京へ呼び寄せて、いはゆる融資技術の長講一席を求めたのである。

ハムモント氏は、最近ヒリツピンに向つて出發したが、帝國ホテルの安樂椅子に落ちついた氏は、日本電氣證券の一聯の資本家群によつて、期待されたところの、融資技術の傳授などは失念したらしく、「電力産業の企業形態としては公益事業とすることはよく無い。資本集中の手段としては持株會社、優先株システムを實行するが良い。營業の基礎としては獨占的經營に限る。各電力會社は送電相互聯系によつて結合されねばならぬ」と長講一席の氣焔をあげたものだ。

毎年五十億圓の電力新資本を投ずるアメリカ、收益三百萬圓以上をあげる電力會社八四社のうち三三社、その總資本の約三割二〇億七千萬圓を、ホールデング、フイナンシアル・コムパニーのもとに統御し

つゝあるアメリカの、遠來の賓客としての氏が、先づかゝる氣焔をあげたことは、あながち無理とは受取れなかつた。そればかりではない。それはわが電力産業の現にトボ〳〵と辿りつゝある方向、それを急速度に押しすゝめねばならぬ方向を、世界資本主義の大きな見解の上に立つて、彼等に科學的説明と明確な指示とを與へたものである。

さればこそ、彼等、わが一聯の電力資本家群は、にはかにざわめいて、電力の大合同、電力統制、電力プール、電力投資團の組織など と、ひつくり返へるほどの騒ぎを演じ、右往左往しつゝあるが、しかしそれは、後にもしるすが如く、わが電力産業の進歩と矛盾の發展に基く、必然の急速度なる轉向のざわめきに外ならぬ。

二、重工業の精華としての電力産業

アメリカ電力金融資本の使徒、ハムモント氏は、彼が雄辯說く能はざる、投資物としてのわが電力産業のために、彼は又、お世辭を振りまく用意をも忘れなかつた。彼は帝國ホテルの安樂椅子の上に語りつづける。

「我國の電力事業は最近駸々として進歩發達し、世界的注目の的となつてゐる、承ればその公稱資本は三十五億圓に達することで、單に三十五億といつたのでは、いかに巨額な資本かといふことを感じ得ないが、鎌倉の大佛は六百七十四年前の建立であつて、その建設のときから一分毎に一圓宛の速度で袋に貯めても昨年末迄に三億五千萬圓餘に達するにすぎない、從つて三十五億圓にするには、六千七百四十年を要する現況であります」

と鎌倉大佛を引き合ひに出して、彼はわが電力資本家を煙に卷いたものだ。だが、それは結局お世辭ではなかつたのだ。世界資本主義產業の精華としての重工業が、黒炭から石炭へ、石炭から石油へ、重金屬から輕金屬へ、と採つて代はりつゝさへあるに、遅れて乘り出したところの、わが資本主義産業の苦惱は、重工業原料の缺乏だつたのである。

石炭、石油、鐵、何に一つ滿足にない。滿蒙積極策、勞農ロシアとの利權協定は、かくてわがブルジョアジーの悲痛なる慾求として叫ばれる。

だが、幸なる哉、高度の落差と豐富なる水量の自然が、ブラックコールからホワイトコールへの世界的潮流に合流すべく、わが資本主義產業を飾る唯一の精華たるべく惠れてある。

それはウイルソン天文台のアボット博士の發明にかゝるといふ日光動力でも、オランダの風光引き立役の風車電力でもない。或は又、アメリカのメイン州フアンデ斗灣の一角や、わが山口縣沖合に計畫されんとする潮流電力でもなく、それはあらゆる産業の動力となる水力電氣の原料と自然的條件である。

諸君は、黒部溪谷の景勝をさぐり、木曾川の風光を觀賞するであらう、かような山又山の溪流には、惠まれたる自然を驅使して二〇億

に近い發電資本が眼覺しい響音をあげて活動しつゝあることを知らねばならぬ。

ハムモント氏の言葉を借りて言へば、一分間に一哩づゝ貯めて、六千七百四十年を要するといふ、巨大資本を投ずるほど、かく發達したわが重工業の精華電力產業は輕工業より重工業への發達の轉向を劃した日露戰後の好景氣時代に、將來の發展の基礎をひろげ、歐洲大戰後急速なる發達を遂げたもので、例のハムモント氏などは、大正一三年から一四年に亘る一ヶ年は、一時間六萬圓づゝの速度で電力資本が膨張したとあきれてさへゐる。

從つて電力技術の躍進振りはすさまじい。これをわかり易いやうに、いゝむさゝびのために全市を暗黒にされることはあつても、高壓送電線の電壓の記錄をしるして參考に供する。

年次	電壓	年次	電壓
明治二一	一、一〇五ボルト	二二	一、一四〇ボルト
二五	二、〇〇〇	二九	二、二〇〇
三二	一〇、〇〇〇	三三	二四、〇〇〇
四〇	五五、〇〇〇	大正　一	六六、〇〇〇
二	七七、〇〇〇	三	一一五、〇〇〇
一三	一五四、〇〇〇		

發電所出力にしてもアメリカ東部の二九萬四千キロの火力、ナイヤガラ附近の四五萬二千キロの水力發電には及ばないにせよ、東邦熱田火力は七萬キロ、信越水力は五萬七千キロを發電しつゝあり、アメリカの廿二萬ボルト送電には及ばないにせよ、十五萬四千ボルトの特別高壓線は、大阪、名古屋、東京と發電地帯とを縱横に連絡されてある。

かゝる電力技術の發達は、當然に電氣機械、電氣化學の進歩を長足ならしめ、紡績、交通、鑛山、製紙、一般機械製作の諸產業の動力化を促進したことはいふまでもない。農村電化の最近の顯著なる進行も又、農村の資本主義化を助成せずには置かぬ。

とりわけ諸產業の動力化は、文字をそのまゝ、生產行程が動力化されるといふ、單純なる意義に解することは出來ない。

これは電力產業の近年の發展段階における特徴として、日本電力が東洋アルミナムを乘取り、小田原電鐵を買收したるが如き、東邦電力が京王電車、揖斐川電鐵株を買占めたるが如き、それはいづれもアルミナム或は電鐵の獨自支配勢力を征服して、それら產業を電力資本の統制のもとに歸屬せしめたことによつても明らかなやうに、產業支配權を眼差すところの電力化である。

東邦電力の東邦證券、東京電燈の東電證券は、かゝる產業支配のための戰鬪的電力資本の役割を今や果敢に遂行しつゝある。

三、合理化過程に於ける矛盾の發展

かやうに產業支配權を眼ざすところの戰鬪的電力資本による動力化と、生產行程を動力化するといふ單純動力化の、いづれにてもあれ、

電力による産業の動力化は、資本主義産業の整理過程において、失業者の再生産と、勞働者の賃銀カットによつて急速におこなはれつゝあるところの、所謂産業の合理化の助成施設として、今や段々としてすすめられてゐる。

整理過程の沈滯期にあつて、ひとり電力産業が高歩調をつゞけ、重工業の精華として、資本主義産業の全面に輝いてゐるのも、要するに、さうした産業合理化の助成施設としての、電力産業の重大性が認めらる、所以に外ならぬが、動力化を合理化の見地から言へば、人間力にとつて代はる自然力、つまるところは勞力の節約である。

英國皇太子の卓見に從ふと、電力は勞力節約の施設ではなく、勞力助成の施設ださうだ。用語もかうなるとむつかしくなるが、勞力節約は勞働者の失業となり、勞力の助成は、勞働者の賃銀カットとなることだけは確からしい。

或る科學者の說によると、人間一人の一日の食糧のエネルギーは三千四百呎噸で、此のうち精神勞働と、筋肉勞働に費されるエネルギーは僅かに一割。これを電力に換算すると四分の一キロワット時に過ぎないといふ。すると東京の電車を動かす鬼怒川電力の料金は、一キロ二錢三厘八毛に負けろ、まけぬで市電と揉み合つてゐるから、一キロ二錢三厘八毛とすれば、人間の勞働エネルギーの値段は、電力料にして五厘九毛にあたる。

雷の稲妻にしても、電圧は一億ヴォルトだが、エネルギーにすれば三キロ七六くらひはある。ナイヤガラ瀑布の發電總出力は百四十六萬キロに達するが、これを人間の勞働力に見積ると四千五百萬人に匹敵すると言はれる。もつと適切な話をすれば、最近ニューヨークの火力發電所で電動揚炭機二臺を設備した。ところで、一臺一人の運轉手で、フールに働かせると、二萬三千人の勞働者が節約し得られるといふ話だ。

といふわけで、事實は英國皇太子の卓見を裏切つて、助成といふより、勞力節約といふところに、電力による動力化の偉大なる功績が見られる。

しかし、それはともあれ、合理的の助成施設として、今や光り輝くわが電力産業に於ても、發展は同時に矛盾の擴大であるといふ資本主義經濟の鐵則に支配され、あらゆる累積された矛盾を曝露しつゝある。

その第一は、卸賣會社（發電專業）と小賣會社（發電兼營）の矛盾である。

その第二は、電力資本（所謂産業資本）では、脊負ひ切れなくなつた、新規固定資本の負擔である。

その第三は、武裝せる内外の金融資本の全面的進出と、電力産業資本との對立である。

以下五大電力會社の對立の趨勢のうちに、それらを說明するであらふ。

四、五大電力トラストの全影

東京電燈、大同電力、東邦電力、宇治川電力、日本電力は、いはゆる五大電力會社といはれる。

それら各個は、原料、生產、販賣を統一し、獨占を確保する地域的トラストを形成する。

五大會社の電力出力（單位千キロ）

	水力	火力	購入電力
東電（關東）	四一二	一五五	二六八
大同（關東、關西）	一六九	一〇〇	七八
宇治（關西）	七六	一〇〇	一三
日電（關東、關西）	一一九	一〇〇	二二
東邦（九州、中京）	三六	八四	一三一
	八一二	五三九	五一二

備考　昭和二年末

この五大會社の出力總量は、全國の自家用發電を含めた水火力發電力の四割強であり、購入電力を加へると六割になる。

だから金融資本の企圖が成就して、東電の提案による電力大合同が成立すれば、アメリカのジー・イー・シー、ドイツのアー・エー・ゲーの「二つの電氣王國」に、さらに日本電氣王國を追加しなければならぬことにならう。

「國家以上の國家」は、それだ。だからこそ、遞信大臣は、之れに對應すべく電氣事業法の改正をしなければ、電氣王國を出現せしめる電力大合同は罷りならぬと、ひそかに示達したほど、政治權力を脅威せしめたのである。

かつ各個の電力トラストは、それぞれの支配下に、おびたゞしい子會社を從屬させてゐる。

東京電燈系　信越電力、京濱電力、吾妻川電力、東北電力、中央電力、關東水力、東信電氣、渡良瀨電氣、笛吹、梓川、小武川、桂川興業　東電證券、

東邦電力系　岐阜電力、揖斐川、東部電力、京王電車、サヌ川電氣、須川電力、富士川、三河水力、東邦證券、東邦蓄積、九州鐵道、名古屋瓦斯、西部合同、北九州瓦斯、東邦電機、九州耐火、九州化學、永樂礦產、名古屋棧橋、

大同電力系　昭和電力、四國水力、大阪電力、木曾川電力、尾三電力、天龍川電力、神岡水電、矢作水力、中越水電、立山水力、東海曹達、豐國セメント、琴平電鐵、東海電極、大同土地、大同電氣製鋼、大同肥料、東濃電化、福澤土木、福興商會。

日本電力系　關西電力、東洋アルミナム、黑部鐵道、庄川電力、因幡水力、飛越水力、飛驒索道、

宇治川電力系　三重合同、山陽中央水電、

五、金融資本の壓力と產業資本との對立

わが金融資本財閥の產業的基礎は、鐵、石炭、銅の重工業に置かれてゐる。從つてかれらの電力產業への支配の發展は、電氣製作の上に

集中されてきた。

三井の芝浦製作所、古河の古河電氣と富士電氣、三菱の三菱電機、住友の住友電線と日本電氣が、それだ。

しかるに逸早くも、電力産業の主體に、支配の手をさしのべたものは、三井と安田の金融資本財閥である。

東京電燈の資本勢力若尾財閥は、東京若尾(本家)と分家若尾(山梨)と横濱若尾の三つの分裂體の結合したもので、一個の商業資本財閥である。最近東京若尾は、若尾銀行を整理して小銀行資本と土地資本(山梨)を分離するまでに、外部の資本の壓力に押されてゐる上に、東電に於ては、三井(借入金)と安田(大株主)並に外國資本(社債)に壓迫されるさへあるに、東邦(東力)日電の電力トラスト侵略の脅威が加重され、商業問屋資本を金融新資本に代位するための資本金に代位するため資金需要は、あはれや商業資本家の肩には背負ひ切れないまでに大きい。

そこを、突いて出現したのは三井、安田の金融資本閥である。彼等が、東電の覇權を掌握するには、だから一學手の勞で遂行されたのだつた。

殊に金融資本の壓力の偉大さを、資本主義の天下に顯揚せしめた事件は、かれら金融資本の一喝によつて、電力戰にしのぎを削りつゝあつた東電と東力(東邦と安田系)の合併を強行させたことである。

金融資本は必然に資本の合同と統制を要求する。それは資本主義經濟の發展段階を歴史的に貫くところの必然的法則である。東電の支配者三井と大株主なる安田、三菱、東京川崎の諸金融資本財閥が、鮮明なる一致行動をもつて、東電、東力の合併を強行せしめたことは、だから金融資本必然の行動ではあつた、しかし東力合併後の東電を主體として、五大電力會社の合同、統制を實現せんとする、その後のかれら金融資本の、さらに、より大きた願望は、(一)かれら金融資本の壓力の薄弱、(二)他の四大電力會社に於ける産業資本の優位、(三)電力會社間の對立、等々によつて達成せらるべくもない。

東邦と大同は産業資本家福澤桃介氏の統制のもとに、日電と宇治電は、大阪商船閥―中橋德五郎主盟のもとに、兩翼をなして發達し來つたのだが、銀資と小資の利害の矛盾の増大するにつれて、統制力の遙かに稀薄たる産業資本の紐帶を破つて、最近東邦(小資)と大同(銀資)、日電(銀資)と宇治電(小資)は、分離、對立するに到つたのである。

大同と宇治電は、老熟したる産業資本を代表し、東邦と日電は、新興の産業資本を代表するものの如く、東邦は金融資本による合同に對抗しつゝあり、日電は小資に轉換して、關西に宇治電・關東に東電の獨占を脅やかしつゝある。

新興の電力産業資本としての東邦と日電は、鬪爭による電力金融資本とのプールを眼差し、電力金融資本としての東電は、平和による電力産業資本との合同を指標とする。

最終の目標は合同とプール、統一の手段に競爭と平和、獨占資本と金融資本の對立の爭點はここにある。

六、英米資本團の進出と各社

しかるに、英米の電力金融資本は、わが電力産業とは由來淺からぬものがある。

ウエスチングハウスは、日本ウエスチングハウスといふ獨立の營業本部をもち、ジー・イー・シーは三井との共同出資のもとに芝浦製作所、單獨には東京電氣、關西聯合電球、大同電氣を經營してわが電球を獨占し、ウエスターン電氣は住友と結合して住友電線、日本電氣を營み、アー・エー・ゲーのシーメンスは古河との共同の下に富士電機をおこしてゐる。

アメリカの投資團ジロン・リードは東電の子供、信越電力のために、社債形態による融資としては、四大會社にだけでも二億二千六百萬圓を投下してゐる。

ハリスフオーヴスは日本電力のために、社債にとどまらないで、株式引受のためのホールデイングコムパニーを新設しやうとさへしてゐる。

それは、明白に、わが電力産業に對する、支配へ踏み入る第一歩の促進された狀勢でなければならぬ。

否、すでに第一歩を踏み入れてさへゐる。アメリカの電力金融資本の使徒、ハムモント氏は、電氣技術を供給するかはりに、事業形態の方面に指示を與へたのであつたが、そのときギヤランテイ・トラストは起つて、東電、東力の合併を強行すべく、三井、安田の金融資本の勢力に、強力なる支持を與へたのである。

かくて、彼等のわが電力産業への企業參與の深度は、外資に依存すればするほど、深まらざるを得ない。現實にも深まりつゝある。だがしかし、だからといつて、英米の資本團とわが金融資本の電力統制政策が、必ずしも全部が一致すると見ることは出來ない。

成る程、金融資本は産業の合同を要求する。その要求は今や強烈である。

だが、日本電氣證券のもとに結合されたモルガン財閥のギヤランテイ・トラストと三井、安田の東電に對する支配政策が、決定的に一致を見たことは確だとしても、その電氣證券の圏外には、モルガンと對立するモルチメル・シフのデイロン・リードと、これと握手する大同電力があり、ニューヨーク諸財團の一敵國をなすシカゴのハリス・フオルブスと、これと提携する日本電力がある。

といふことは、住友の金融資本が宇治電、日電に先端を兇らせてきたにかゝはらず、三井、安田の金融資本の合同政策のために、蹈らなかつたと同じ事態を、かもさないとは限らぬ。

そのことは、住友の資力が、日電、宇治電の産業資本の統制下に、それほどの力強さがないと云ふ、單にさうした理由からのみではな

い。それは、金融資本間、相互の對立、鬪爭の投影でもあつた。

金融資本は由來鬪爭的である。

鬪ひ疲れた東電の支配權を把握した三井と、背後の英米の金融資本は、やがては「平和による合同」の旗を卷いて、「鬪爭による征服」といふ金融資本の本質の電力爭覇の戰術に、暴露し來るであらう。

七、結語

かくて爭覇は展開する。平和か鬪爭か。いづれにもせよ、わが金融資本は、電力産業の支配の擴大を、飽く迄も追求し、やがて確保せずには置かぬであらう。

何故かなれば、電力産業は彼等のために、たつた一つ最後に殘されたところの安全、有利なる利權であるばかりではない。それは彼等の統制のもとに隷屬する諸産業、とりわけ金融財閥盛衰の決定的要因であるところの金屬重工業に生氣をおくり込み、又電力をとほして、諸産業支配のみちを易からしめるからである。

そして資本主義經濟の整理期の、あらゆる客觀的情勢は、金融財閥に、電力産業への積極的進出を強力に促進しつゝあるとき、電力産業資本家は、彼等の進出する全面に起たされて、いかによく自からを防衛し得るであらうか。

新職業部門としての經濟顧問と會計檢査

吳　文　炳

(一)

近代資本主義經濟生活の特質の一つは、あらゆる職業部門に於ける分業といふことである。從來、商業企業の經營困難又は破産に陥つた場合に、之を整理し清算する任に當つてきたものは、職業法律家たる辯護士であつた。而して斯くの如きは寧ろ當然のことゝして、何人も怪しまなかつた處である。然し乍ら、大經營主義の採用や證券市場並に金融市場の發達に伴つて、近代の經濟生活は益々複雜となり、相關的且つ、專門的となるに至つた。此間に處して、あらゆる經濟的事相を精確に觀察し、之を適當に處理するためには、深き商業上、經濟上の學識と豐富なる經驗とを絶對的に必要とする。單に法律的の素養のみを以てしては、到底、事物の眞相を捕へ、迅速且つ正確なる處置を附けることは思ひも寄らない。殊に或る企業を解散せずして其の生命を保たしめ、營業を繼續し乍ら、其の困難を救濟せんとするが如き、比較的長期間に亘り、計劃的な事態の整理が問題となるやうな場合には——而して斯くの如きは國民經濟上より觀るも、また、當該利害關係者より觀るも、極めて望ましいことである——單なる法律家を招聘するよりも、或は法律家を招聘すると同時に、經濟事情に極めて精通せる、商取引に堪能なる經濟顧問をして其の任に當らしむることが、最も時宜に適した方策であると思ふ。

例へば、彼の高田商會の破綻せる場合に於ける整理にしても、思はしい成績のあがらないのは、取りも直さず、其の整理の衝に當るものが、債權銀行の中から選任されるやうなわけで、事業そのものに付ての智識、經驗に乏しく、搗てゝ加へて、所謂、姑、小姑が多くて、其のために制肘されて思ひ切つた行動が執れない爲めである。又彼の[illegible]や[illegible]の如きは、何れも其の經營者が米國仕込みであつて、その經營方法も米國式に行つた點が失敗の原因の一つであつたらう。然も、此等の事業の整理に當つては、何れも職業法律家か然らざれば、比較的經濟上の智識經驗に乏しい人達が其の衝に當つてゐるけれども、斯くの如き場合にこそ、米國又は獨逸などに於て實際に行はれつゝある新職業部門としての經濟顧問の手に依つて整理されたならば、其の效果の如きも、前者に比して雲泥の差異を示すことゝ思ふ。又、例の十五銀行の問題の如きも、強制和議は成立しても、和議管財人や、整理委員などは皆、職業法律家であつて經濟的の議論には精通してゐない人々である。随つて和議の法律的方面は或は完全を期することも出來やう。然も、その實際に事業の内容を分析、解剖して、之に生命を吹込むためには、如何にしても職業法律家のみを以ては心細い次第である。而して此點こそ、經濟顧問の活動領域であらねばならぬと考へる。尤も此の場合にも、法律的智識が不必要などといふ譯では勿論なく、充分此點の

必要も認める。が、然しそれは經濟的智識に附隨して法律の必要が問題となる場合が多い。故に第一義的に重要なのは寧ろ、經濟顧問としての事務なのである。其他、企業の設立、合併和議、破産等の場合に於ては、經濟顧問の活動範圍は極めて廣汎且つ重要である。

又、經濟生活の進展に伴れて、斯かる經濟現象は益々大規模に、愈々頻繁を加へ、經濟顧問に對する世の需要は之に比例して急激に増大することであらう。殊に會計檢査業務が一職業部門として有力となるに至れば、經濟顧問事務は之に依つて尠からざる、便宜と支持とを與へらるることゝなり、經濟生活は一層、圓滑に合目的に進むことゝならう。而して斯くの如き事務の取扱は其の性質上、個人よりも法人組織のものをして當らしむる方が適切であると考へる。然らば果して法律は斯くの如き事務を法人が有效に營み得ることを認めてゐるか。此點に付き、獨逸に於ては千九百二十五年四月十四日、カールスルーエの控訴院が法人の清算人能力を認めたから問題はないが、我國では法律の條文は勿論、判例さへないから疑問の餘地がないわけではない。然し、法人が清算人、破産管財人、和議管財人、鑑定人等になることを禁ずるは積極的の規定がないのみならず、立法上からも特に之を禁ずべき理由はなささうである。成程、現行法は、此等のものが自然人たることを前提として編纂されたものではあるが、法人と雖も公秩良俗に反せざる限り、法令の規定に從ひ定款又は寄附行爲に因りて定まりたる目的の範圍內に於て權利を有し義務を負ふべきことは民法第四十三條の規定する處であり、又會社は其の目的を達するに必要なる事項は定款中に記載なきも、尚其の目的の範圍內に於ける業務として、之を營み得ることは大審院の判例も認むる處である。隨つて、會社は場合に依つては、他人の代理人、保證人となり、又は訴訟當事者ともなることが出來るから、此の意味に於て會社が清算人、管財人等に選任せらるゝも、會社の目的を達するに必要なる行爲であるならば、一向差支へない筈である。現に改正民事訴訟法は明かに法人の鑑定人となり得ることを認めた位で、清算人、管財人の場合にも類推適用さるべきものであらう。斯くて、有力なる營利法人が經濟生活に重要なる地位を占むると共に、其の巨額の資本と信用とに依つて、その法律上並に經濟上、有能なる社員を擁することにより、其の完備せる調査機關を有することに依り、經濟顧問としての活動領域に於て職業法律家たる辯護士に執つて代るべきは當然である。

(二)

更に會計檢査業務が近代經濟生活に於ける一職業部門として如何に有力なる役割を演ずべきかに付て考察したいと思ふ。企業經營の監査の必要に付ては英米では、會計檢査事務の多くは個人としての會計士の獨占する處であつて、就中、英國に於ては免許會計士の如き優秀にして信用厚き會計士が、斯業に從事して居り、又之に對する世の需要が非常に旺んである。然るに、獨逸に於ては、反之、同國信託會社と會計檢査事務とは殆ど不分離の關係に立つてゐる。その理由は、獨逸銀行制度の兼營銀行たる性質と銀行、信託會社の密接なる關係とに緣由する。英國に於ては、兩者に斯くの如き因果關係の認められざるにも拘らず、優秀な多數會計士が、會計檢査事務に從事し、社會の需要の旺であるのは、英國の商事

規定、就中、會社條例が不完全であるため、株主又は債權者の利益を保護する點に於て缺くる處があるため、彼等は自衞上、會計士を起用して企業の會計檢査を行はしむることを餘儀なくされ、會計士は國民經濟上重要なる地位を占むるに至つた。然るに我國の實情は寧ろ獨逸に近く、會社、企業、就中、株式會社の株主又は債權者の利益は、商法の多くの保護規定、例へば監査役（商一八〇—一八九）各種計算書類の作成及公示（商一九〇—一九二）商業帳簿（商二五—二八）等に關する規定、其他會社の設立、株式、機關、定款の變更等に關し、會社財産の保全と業務執行の圓滑とを圖つた一切の公益規定の適用に依り保護されると共に、我國の諸銀行は獨逸の兼營銀行と趣きを異にし、寧ろ英國の預金銀行の性質を有するを以て、直接の企業への參加に依り、企業の會計檢査を爲すの必要に迫られなかつた事情から、會計檢査業務に對する需要は從來、微々として振はなかつた。然し乍ら、商法に於ける保護規定にのみより、會社債權者並に株主の利益は完全に保護される譯では決してない。反對に商法が斯く迄、嚴重なる保護規定と罰則とを設けた裏面には、如何に會社組織に於て彼等の利益が毀損され易いかを暗示するものと謂へるかも知れない。例へば△△土地會社の如き、△△モスリン會社の如きものでも、その破綻の眞因は事業經營の衝に當る者が故意か過失か、何れにしても放漫な方針を採つたゝめであることは否定出來ない。事業經營に當つて最も肝腎なことは會計の整理である。生産、營利の事業が計數を度外視して到底成立し得ないことは勿論であるが、幾度も代る重役が事業を喰物にする徒黨であつてみれば、所謂、蛸配當を平氣で行つたり、續いて起る事業蹉跌の悲慘事を無關心でゐるのに何の不思議があらう。始めより會計檢査を充分にすれば、斯かる失敗も未然に防止することも出來やうが、放漫節度なき重役に依つて經營される事業の會計を檢査し、監督し、多數の株主又は債權者等の利益を保護すべき地位に在る監査役は果して何うしてゐるか。

尤も企業家と投資家とが同一人格であることを常とする、合名會社、合資會社に在つては、大した問題はないかも知れない。然し此の二者の全く分離し、同時に其の組織の益々複雜となり、廣大となる傾向のある株式會社に於ては、株主及び債權者の利益を完全に擁護する爲めには、商法の規定のみを以てしては充分と謂ふことの出來ないことは上述せる處を見ても解る。成程、監査役は株主中より選任され、何時でも、取締役に對して營業の報告を求め、若くは會社の業務及會社財産の狀況を調査する權限は持つて居る。が、然し監査役は飽く迄、會社の機關であつて、多くの場合、取締役の制肘を脱し得ない實狀に在る。隨つて、檢査部監査部と謂ふが如き一企業の內部的檢査部門に依る諸帳簿及貸借對照表の檢査は會社と利害の相反する株主債權者に信頼の價値乏しきは言を俟たぬ。此故に株主又は債權者にして、其の會社に對する彼等の權利保護と利益保全とに付、萬全を期せんと欲すれば、會社の支配に屬せざる獨立せる特殊の會計檢査機關をして、當該企業の諸帳簿及貸借對照表を嚴重に調査し、果して此等が事物の眞相に符合するや否や、隱蔽、誤謬、不正等の事實が介在せざるや否や等を點檢せしめ、他面に經營者を强制して業務執行

を合理的ならしめ、以て不測の損害を防止すべきである。而して斯くの如き會計檢査を實現せんが爲めには、積極的には商法（第一九八條）に依り株主として會社の業務及會社財產の狀況を調査せしむる爲め、檢査役を選任することを裁判所に請求し、消極的には、斯くの如き請求に基き、又は信用ある會計檢査機關に依る檢査を受けざる企業に對しては、可及的、投資することを回避することに依り、企業當事者が進んで自發的に、此等の檢査機關を選任せざるを得ざるやう、間接に之を强制するより外はない。又企業經營者の立場からも、會計檢査を施行する實益は尠くない。卽ち之に依つて、誤謬、不正が犯されざりしや、使用人は果して誠實、且つ愼重に執務せしや否や等を知り、企業の不生產的費用を省き、その活動を緊張せしめて能率を增進し、他の企業に對する競爭能力を促進せしむる等の利益がある。

然らば最初に述べた經濟顧問と會計檢査との二つの新職業部門は如何なる關係に立つものであるかと言ふに、此の兩者は恰も經濟生活に於ける車の兩輪の如きものだと思ふ。何となれば、經濟顧問としての活動が有效に成績を舉げ得るが爲めには、同時に、又は之に先だち當該企業に付嚴密にして妥當なる會計檢査が施行さるゝ事が必要であると共に、會計檢査施行の普及は必然的に經濟顧問活動の機會を頻繁ならしむるからである。此の意味に於て右の兩職業は一個の機關に依りて行はるゝを適當とする。現に英米に於ては經濟顧問としての事務に干與する者は、多く會計士であり、又獨逸に於ても會計檢査を營める信託會社又は會計檢査會社は同時に經濟顧問事務を其の營業種目の中に數へて居る。

斯くて我國に於ても、會計檢査を必要とすべき經濟上の實益——例へば投資を安全にし、或は恐慌の勃發を避くる等——は充分存在して居り、且つ益々大ならんとしつゝある。經濟顧問事務と會計檢査事務とは將に、我が經濟界に新生面を開かしむるものと謂へやう。

春季野球リーグ戰の新陣容

廣瀨謙三

春は來つて球場の若草は年毎に新らしい。麗かに春日は照れど、球界一方の大立物慶應を渡米に送つて、うらゝ悲しと云ふを休めよ、近來やゝもすれば、水平線以下などと技倆から見て惡評する人もあるリーグ戰は、昨春來新人の强豪に賑はされ、今後其勢を續けて、數年後には往年の早明對峙時代を偲ばせて、それにもまさる全盛時代を作り上ぐべき勢ひを見せて居る。今春六大學野球リーグ戰は四月廿一日から開始されるが、其以前には三田稻門、駿臺等の倶樂部戰や、在米同胞スタクトン野球團との對戰、大每、關大、關學等の關西球團の東上あつて、本舞臺前の練習戰には事缺かない。之等の準備戰を經て各チームの陣容はリーグ戰開始頃には相當の充實を來すことゝ豫想される。

昨秋の優勝チームは明大であつた。今春家つたところの打擊は、林、高橋の二名手を送つて三壘遊擊間にやゝ手薄くなつたのと、打擊順に及ぼす影響である。此遊三間は今冬期練習以來五六人の選手に依つて、明大一流の猛練習に依つて爭はれて居たが、結局遊擊は今春新入の大連實業團及廣陵中學に投手及內野手であつた田部が入り、三壘は昨春入學の角田に決定するらしい。其他に小林、吉相、奥、岩淵(早實から新入)等候補者は山程あるから其刺戟だけでも遊三間は昨年に劣らず漸次强くなつて行くことゝ思ふ。明大投手團は中村峯、安田、中津川、中村國等であるが、駿稻戰にはいづれも堂々たる好投を示して今春明大の戰鬪力が侮るべからざることを證據立てた。現在ではリーグ隨一の投手である中村峯が今後腰に故障なく好投を續けて行くならば各チームの脅威である。捕手手塚が病氣のため出場出來ないのは打擊であるが、後を襲ふ井ノ川はいまだ手塚に及ばないが、相當にこなして居る。一壘は鷲尾と松木の競爭で兩者互に出場するらしい。二壘は新主將永沢が廣い守備範圍を誇り、三遊間は前述の通りで、外野は輕快好打好走の鍵村を始め、新進好打の桝、櫻井、米澤等で固め、今春の優勝を目指して居る。問題は林、高橋の二重鎭去つた後の攻守の力の補充如何に依つて、チームとしての實力は昨秋と比較して增減され投手團の好投があれば、豪快巨砲揃ひの明大は、優勝の途に近い。

今春新入選手に關係なく、陣容に異動のないのは早大である。原口投手一人を送り出したゞけで他に變更はない。昨秋來意氣やゝ不振の觀があるが、第一にこのスランプから脫して傳統の早大スピリットのために發奮して其前途を輝かさねばならぬ。陣容其儘成績も意氣も昨秋の繼續では、缺陷は打力の不振と投手團に量より質の傑物のない點にある。今冬來走力の練習には注意を拂はれて居るが其走力を發揮する前には壘に出づべき打力を要し、相手の攻擊力を喰止めるには投手の奮鬪が必要である。素質に於て早大の選手は他のチームに遜色はない。其實力を輝かすべく、其處に十分の發奮力を必要とする。投手團は左投手淺倉、獨特の投法の原川、高橋、多勢及水上、藤本の返り咲きを始め十人近くのウォームアップは保證ではあるが、更にいづれも一工夫して往年の谷口、竹內等の奮鬪をなすべき努力が望ましい。捕手は伊丹、大島、松本、一壘は淺川、西村成、二壘は森、杉田屋、西村滿、遊擊は富永、佐伯、三壘は主將井口黑木、外部は中津川、水原、今井等、多士濟々として球場に滿ち、選手には何の不足もない、明大と共に覇權を爭ふべく豫期されるのは早大であつて、唯一の目標慶應を失つた今春といへど、相手は明大を始めとして、立敎法政、いづれも油斷は出來ない。チーム一同の元氣恢復と投手團の出來榮え、打力の振興如何に依つて早大の成績は左右されるものと豫想される。

吉田、鈴木の兩投手を有して早慶明に劣らない實力を持つやうになつた法政は今夏布哇から米國西海岸の遠征を計畫して居たが、吉田、鈴木兩投手共兵役に徵收されて、突如として投手難に陷つた。止むなく其後は大連商業の投手であつて昨秋入學した圓城寺を以て

埋め、今春入學の廣陵中學から大連實業團に居た左投手で小堀の田岡を以て戰はんとして居る。此兩者共緩球投手で右左を配合したところ、どれ程の成績をあらはすかゞ問題である。いづれにしても法政として左投手は珍らしい。其他の陣容は宿將曾木が退いたゞけで捕手には元氣者の藤田、一壘は實戰に於ての主將は森岡が頑張り、二壘は大港、久保（今春神港商より新入）遊擊は秋田、三壘は岩田西本、外野は吉富、長澤、曾木の後へは猛打岩の新進藤井を、他に新入の島（神港商）も居て、投手藤を除けば堂々たるものである。打順も岩田、藤井あたりが當り出して中心となつたからムラがないが、走壘には著しい缺陷がある。各選手が懸命に戰つて、試合の運びを巧みにするならば、豫想以上好成績をあげ得るかも知れないが、早、明に對しては投手に弱味があらう。

慶應はあらず、帝大東はスキーの挫骨で出られず、明大中村獨り立派な投手振を示して居る時にバッテリーに惠まれたのは立敎で、今春のダークホースとしての聲が高い。昨年肩を痛めて不振であつた左投手片田は返り咲きして最後の一年を奮闘しやうとして居るし、迂廻曲球の鐵岡、未完成の辻、新進龜井に配するに捕手は新主將野田であるからチームの中軸に法、帝のやうな危氣はない。內野は遊擊關口が病氣であるから若し出場不可能ならば、一壘は國友（舊靜岡中）正田、二壘は高濱、遊擊關口、三壘鈴木の位置が、高濱が遊擊に廻つて二壘は服部で固められるであらう外野は森田、三浦、宗近、渡部、片田等昨年と變りはない。今春新入學は岸本藤田（小濱中學投捕）江原（前橋中、三壘）小笠原（北海中、捕）等があるが、有望な新進に惠まれぬ此チームでは、自ら選手を作つて行く程の氣慨がなくては叶はぬ。立敎の成績はバッテリーの奮闘で敵を押へ得ると豫想して、其攻擊力がどれ程迄に發揮されるかに依て決せられるので、昨年のやうな貧打では折角投手の奮闘も無駄にならう。

帝大は唯一の奮闘者東が出場不可能であり今春入學の選手は乏しいし、學校の性質上高文試驗や學業多忙に依つて選手を辭するものもあるから、チーム編成にも苦しい立場にある。今春は勝敗を度外視して戰ひ、今秋の奮闘を期するほかはない。主戰投手は練習時には東以上の球速ある服部であるが、他に遠藤內田及今春水戶高校から入學の高山、田村等のスローカーブを補助投手として戰はねばならぬ。投手では法政と共に苦しい立場にある。捕手には鹽澤の他に今春松山高校から小林が入つた。チームの變動としては一壘改野、三壘岡本が卒業したに過ぎないが、他に選手を今年限りで止める者もあつて土井主將の苦心の程も思はれる。內野は內田、土井、武內、鈴田、齋藤、外野は野本、相良、松浦等であるが、齋藤、松浦、相良等は引退說もあり、一壘の後任も誰になるか現在のところでは陣容が明でない。帝大は春は練習不足にチーム編成難があり、十分の實力を發揮し得ないであらうが、其雄々しき意氣を多とすべきである。

此五大學チーム以外に慶應は留守軍を組織して戰ふがこれはリーグの勝敗に關係のないことであるから略することとして、數多有望の新進を擁しこの試合は三田贔負のファンを喜ばすことゝ思ふ。（四月六日）

メーデーに不思議の行列を見た

田口運藏

一

一九二〇年の五月一日であつた。

この日私等はニユウヨークでまことに不思議な行列を見ることが出來た。それは勞働者の示威行列ではなく、武裝した巡査と在郷軍人團と少年義勇兵などの威嚇的なメーデーの長い行列であつた。

二

ヨーロツパの革命的氣運の影響を受けたからでもあろうが、一九一八年の秋頃から一九一九年の暮れまでは、勞働不安と社會的動搖とはひどくアメリカを脅してゐた。アメリカは英國側に與してヨーロツパ戰爭に參加したので自然に「打倒カイザー」がそのスローガンになつた。大統領ウイルソンの主張するブルジヨア・デモクラシーが國家機關のすべてをあげて宣傳されたので、間接的には社會運動にも勞働運動にも好都合のアトモスフエアを拵へあげてくれた。この社會相が一時的に青年男女の上にもすぐ反映した。眞赤なネクタイが流行し出したのも、斷髮の若い女が濶歩してきたのもこの頃からである。赤い表紙の社會主義的雜誌は彼等の小脇にはさむ散歩用の道具として非常に賣れ行きがよくなつた。所謂パラー・ソシアリスト（御座敷社會主義者）の超階級的の一群もこの氣運のうちに出現したのである。

赤旗は濫用されてきた。どんな右翼の團體までが赤旗を憶面もなくふりかざして得意然としてゐる。ニユウヨークの山の手ブロンクス邊の長屋ではよく借家人同盟のストライキがあつた。ストライキに加盟してゐる家では皆な赤旗を窓から突き出して、それ〳〵組合員であることを誇らしげに社會に表示した。なかに赤旗の持ち合せのない家などでは赤いシアツツとか赤い子供の小さい外套などゝ干竿にしばり付けてかけ出してあるのを幾つかも見うけられた。

モスコウとかロシアとか云ふ文字は非常に刺激の強い革命的の意義が附加されたかのようになつた。ロシアの劇やロシアのオペラは人氣を呼んできた。ロシアン・インとか、カフエー・モスクワとか云ふものが下町に店をだして、パラー・ソシアリストやプロ文藝家の巣となつた。

私と片山老人とはよく三十二丁目にあるロシアン・インと云ふロシア式の小料理家に遊びに行つたものだ。どうかしてふいの金が出來たときとか、或は誰かを客とするときなどはきつとこの家に行つた。退屈で散歩の歸りなどにも立ち寄ることもあつたが、そんな時は私等はレモン・テイを一杯とピロツキー一皿づゝとることにほゞきまつてゐた。それはこの小料理家はプロレタリアを客とするのでなく中流以上の物好きな奴さん連を相手にしてゐるので中々高價であつたからだ。ピロツキーは名稱がトロツキーに似てゐるのと一寸かるくて日本の肉まんじゆの油あげのようなもので片山老人はもとより私も好きであつ

た。たしか高橋龜吉君にも猪俣津南雄君にもこゝを紹介したことがあるやうに記憶してゐる。アメリカでは料理家は大抵ボーイがサーブするが、こゝはロシアのムジーク（農夫）の娘の變形した骨組の強よさうなスラブ女がロシア語でとんちんかんの返事をするので有名であつた。私は彼女達が頸に巻き付けてゐる原色のチップとか頭を包んでゐる眞赤な風呂敷がどうみても原始的に考へらるゝので好きであつた。よくこの店では片山老人の知己に出會すことがあつた。

　ある寒い晩のことであつた。片山老人と私とは入り口のテーブルに向ひ合つてレモンテイを啜つてゐた。

「君はあちらの隅に喋つてゐる毛深い人を知つてゐるだらう」

　片山老人は私に注意した。私はこの隅の方にふり向いてみた。そこには二人の紳士と一人の女とがロシア語で盛に論じてゐる。その一人の毛深い太い軀の紳士は私は知つてゐた。

「あれはトラクツインバーグさんではありませんか」

「さうだ……」

「あの人はランドスクールの教授ですから私はよく知つてゐます」

　其の頃私はランド・スクールと云ふアメリカ社會黨の附屬の勞働大學に通つてゐた。でもトラクツインバーグからは何も教へられてゐなかつた。

「あの男はね、ほんとなら共産黨の方へ來るべき人だが、いまの學校の位置が暖かいので來れないのかも知れない……」

　片山老人はトラクツインバーグのその頃の運動上の位置を私に語つてくれた。當時アメリカには共産黨と勞働共産黨との二つがあつた。互に感情的に反目して左翼陣營内に對立的ではあつたが同じ政策で進んでゐた。アメリカ社會黨は日和見的の態度で第二インターナショナルにも第三インターナショナルにも與しないでゐた。この二つの共産黨は合法的政黨として、秘密運動でなく公然運動に主力をそゝいでゐた。ランドスクールは日和見的社會黨に附屬してゐた。が、生徒も聽講生も共産黨の共鳴者が多いのでつねに面白い闘爭が校内に演じられてゐたのである。

「さうですか、あの人も左翼の人ですか」

　私は尋ねた。片山老人はロイドの眼鏡越しに私の顔をにらみこんで、あごに力を入れながら語り始めた。

「さうだよ。彼の經歴と思想系統から見ればれ……。彼は日露戰爭のとき旅順口で捕虜になつて長崎に送られ、ながらく日本にゐたので相當に日本のことに趣味ももつてゐる。彼も長崎に於いて、浮山の同志と、、、、、の援助のもとに大仕掛けに革命宣傳をしたものだとのことだ……」

　私はこの話を異様に感じた。、、、、、がどうしてロシアの革命家に援助などしたものか、片山老人の話を否定したくもなつて來た。

「そんな馬鹿のことがあり得るでせうか」

「なに！君達はまだ若いよ。ブルジョア〇〇などは目的遂行には高等政策としてひどい手段まで探ぶこともなく用ゆるものだよ。、、、、、がポーランドの獨立運動にその當時〇〇を與へたことも誰も知つてゐる。旅順口の捕虜の内に浮山の革命家がゐたのだから、これにつけこんで、、、、、は色々とこれを利用するために援助したのらしい。勿論決して心からの同情でもなんでもない。要はツアーの軍隊の志氣を弱めることであつたに相違ない。……」

　私はこの説明に依つてブルジョア〇〇の悪らつな手段には今更のやうにびつくりした。話はまだ續いてゐる。

……長崎には大仕掛けにロシア文字の完全なる印刷所までが出來上り、こゝに揃へられた宣傳文は、、、の保護のもとに旅順口方面に、とくに露軍の塹壕內にまかれたものであつた。だから、旅順口の落城は、、、の奮戰よりも內部の革命家の宣傳とアヂテイションが主因であつたかも知れない。旅順口は外部からせめたのでは難攻不落とまで云はれてゐたからね。長い塹壕生活でたへかねられない程に苦しい時であつたから、反逆的アヂテイションは無條件にたやすく兵卒に受け入れられるに相違ない。……見たまい、一九〇五年のモスコウの革命的騷動の主力體は旅順口から歸つた兵卒等であつたと云はれたこともあつた。長い苦しい塹壕生活は失業者の苦痛と同じだ。すぐ眞理をアヂテイションするには好機會である。長崎で宣傳本部に活動した幹部等は戰後ロシアへは歸れないのでアメリカに渡つたのだ。その一人である。……」

私は片山老人の話に依つて事件の裏と云ふものをおそろしく感じてきた。そこにゐるトラクツインバーグをつかまへてもつとくわしく共當時の宣傳上の秘密とか、戰爭と裏の事件との關係などを聽ねてみたくなつた。彼等のテーブルは議論に火がついたとみえてにぎやかである。とにかくロシア人は議論が好きだ。そして、おしなべて討論がうまい。私はしばらく彼等の手を振つてテーブルをこぶしで打つまねをする樣子を見てゐた。この樣子を通してトラクツインバーグの十數年前の長崎での活動を想像してみることが出來た。

私等二人はこの家をぶら〳〵出かけたのは夜も十時半頃であつた。

三

一九一八年の十一月の中旬の雨天のある午後であつた。

カイザーがベルリンを棄てゝオランダに逃げ込んだと云ふ報道がこゝに公表された翌日であつた。ドイツ移民とロシア移民が主催となつてアメリカ社會黨が後援で「ドイツ帝國沒落祝ひ」と「ドイツ共和國出現の祝ひ」とを兼ねて大行列がニユウヨークに行はれた。その頃はまだ共產黨はなかつた。この祝賀行列は社會黨のデモンストレションとなつたのは自然のなり行きであつた。色々の勞働組合も赤い團隊を先頭にしてこれに參加した。アメリカでは勞働組合ばかりでなく、社會黨でも女が過半數である。はしやぎ切つた若い元氣のよすぎる女の活動は常にアメリカのこの種の會合などを海べらの祭り騷ぎの樣な感じをもたせるのであつた。この行列も女が半を占めた。眞赤のネクタイ、眞赤のスカート輪髮に赤いリボン、赤い團旗を振りまわして飛び上りながらスローガンを絕叫してゐる多くの女がこの行列には特に人目を惹いたのである。世界の帝國主義と軍國主義の非難と責任とを一人で請負てゐたようなカイザーが帝位をすてゝ逃げ出したのだから民衆もよろこび狂ふのも當然であつたらう。少しづゝの雨が降つてゐたに拘らずこのデモンストレションに參加した數は一萬と見積れた。小供や野次馬が加はるので段々に大きいものになつた。この行列はカネーギホールの前で解散して、ただちに講演會がカネーギホールに催さるゝ筈であつたので、行列は山の手からカネーギホールに向つて進んでゐる。遠くの高いところから見てゐると、すべてが赤い荒れ狂ふ海の海嘯のように思はれたほどである。その日のスローガンは「打倒帝國主義」、「打倒軍國主義」であつた。民衆の心には戰爭に厭いてゐたので軍國主義の排擊を叫ぶのがいつか無意識のうちに「、、、、」と絕叫するものが多くあつた。六十六丁目の中央公園の角には二十人ばかりの一團となつた、、がこの大行列をもの珍しさうにながめてゐた。「、、

、」のスローガンを中にして、、達はいぶかしげの顔をしてゐた。なかには、
「、、が悪いのでないさ。軍國主義の責任は、、が受くるべきものでない。何をなまいきに女のくせに……」
とぷり〳〵怒り出したのもゐた。行列内でも最もはしやぎ切つてゐる女達の部隊がこの、、達の丁度前に來たとき、、、達の方に向き直つて足踏みしながら「、、、、」を叫び始めた。ある一人の若い赤いスカートの斷髮の女が飛び出した。そして手に持つた團旗の棒先きで、一人のベロを出して激怒を表情してゐた、、の帽子をはたき落した。、、達はいかり出した。行列の幹部もこの女達の狂態を止めんとしてはゐるが、勢にのつてゐる狂亂をいかんとも出來ないでまご〳〵してゐた。いよ〳〵、、達もこの侮辱を加へられたので堪忍の緒が切れたのだ。、、は一とかたまりとなつて、女達の内に飛び込んで手あたり次第に亂鬪し始めた。なぐる。ける。なぐられけられつゝ、上になり下になつて三々五々ひとかたまりになつて路上をころび出した。逃げる女、さけび廻る女、スカートをばさ〳〵に切り裂れても團旗の棒を振り廻して、、に立てついてゐる勇敢な女、ボタンをもぎとられ、片そでが引き裂れた、、、どろだらけの女、顔から血を流して、、の足にくひついてゐる女、悲鳴、怒號、一時は全くの修羅場と化した。いかに勇敢でも、、は小勢なので敗殺した。勝ちほこつた女達は益々元氣づいた。三十人位の女はほとんど半裸體のやうにまで着物はひきさかれた。十人位は傷づいてゐた。でも戦は勝つたので行列は勇しく進軍した。この女達の奮闘振りは丁度、、でもその頃評判になつた赤瀾會の猛さ連が、、、、を演じたのもかくやとしのばされた。奮闘しためぼしい女の五六人は巡査に檢束されて行つた。行列がカネーギーホール前に解散して、本隊がホールに入つた頃、六七十名位の、、が息きつて青くなつてカネーギホールに押しかけてきた。さへぎる巡査と小ぜり合を始めた。密集してゐる群衆は「それ、さつきの復讐だ」とさゝやき始めた。緊張してきた。、、が悪いとさゝやくものがあり、おてんば女が良くないとつぶやくものもあつた。激怒してゐる、、達も多くの巡査にさへぎられて近づくことが出來かねてゐた。どよめいてゐる群衆を押し分けてホールの入口の高い處にのぼつて幹部らしいのが演說を始めた。

「……吾が名譽ある勇敢なる、、諸君も、今日の行列の民衆も同じ兄弟である。兄であり妹であるのだ。婦しやの激昂と、言葉の不注意の用ひ方とから今日の事件が出來上つたのだ。市民であり、勞働者であり、農民である諸君よ、お互に兄弟姉妹の爭ふのを止めて協同の敵に對抗しなければならない。兄弟姉妹と相爭ふようにするのは、吾等が、、、、、、、のトリックにのせられてゐるからだ。制度が悪いのだ。教育が悪いのだ。吾等は、、、、から吾等の兄弟である、、、を解放したいのである。そのために、かく日常鬪爭をしてゐるのではないか……」

宣傳とアジテイションの演說とを商賣にしてゐる社會黨の首領の雄辯はたくみに民衆の氣持ちをつかまへた。民衆は拍手した。どよめきは次第に靜かにおさまつた。さすがにたけり狂うて押しよせた、、達もいまはさからふ相手がなくなつた。一人二人と恥しげに影をかくして終ふた。

その晩の演說會は大成功に終つた。

だが、この出來事はブルジョア社會に驚くべき恐怖と憤慨とを與へたものらしい。「赤旗使用禁止」など云ふ警察令が出た。赤いネクタイにさへも其筋で注意するやうになつたのはそれから遠い後ではなかつた。

四

あらゆる産業部門に總ストライキが決行されて來た。到る所の町、到る所の工場に勞働不安の狀態がおそうてゐた。勞働爭議はどんどん左傾して來た。例の有名な全米鐵工勞働の總ストライキもこの空氣のうちに惹起されたのだ。社會黨は右翼と左翼とに分裂した。左翼は二つの共產黨を樹立した。この勞働氣のうちでは實際に「革命來」と云ふ言葉を信ぜずにはゐられなかつたほどだ。あれほど强大のアメリカ帝國主義の土臺骨をぐら〱動搖させたのである。ブルジョア政府はあらゆる手段をつくしてもこれをくひ止めなければならなかつた。非常手段を決行してプロレタリアに攻勢をとつて來た。當時パルマー司法大臣は「共產黨撲滅政策」を斷行した。色々の、、、、トリックを使用した。これと前後して大規模の暴力團を利用し始めた。革命的運運の中心地であるニユウヨーク州では、とくに强力なるラスク委員會と呼ばれた暴力的私設警察の一團を拵へて左翼運動に彈壓を始めた。これはアメリカ產業資本家に雇れてゐる例のピンカトンとは全く性質の異つてゐるものであつた。上院議員ラスクと云ふ奴を委員長にした州實業會議所の私設警察と見るが正しからう。彼等はいかなる武器の使用も、檢束する權能も司法大臣から附與されてゐた。そして左翼運動を徹底的に彈壓するのがその目的であつた。ラスク氏個人としてもこの暴力團に三百萬ドルをつぎ込んだとうはさされてゐた。、、、、、、「、、、、」とか「、、」とか云ふような、、、、、、、食ふためにするいたづらごとの團體とは少し違つてゐた。ラスク委員會は州議會から非常の權力を與へられたものだから、ずゐぶんらんぼうの手段で左翼運動を彈壓した。一九二〇年の一月一日を期して行はれた例の「共產黨狩り」も彼等の手で行はれたものである。その當時片山老人もラスク委員會の武裝した搜索隊から後をつけ廻されてをつた。ニユウヨークにゐられなくなつて片山老人もアトランチック市の私の隱れ家に形を隱してゐた。その頃の日本の新聞では「片山潜のカナダ落ち」をニユウヨーク電報で告げてゐた。猪俣君のミセスも一月の一網打盡の檢擧の犧牲者の一人となつて長い間ニユウヨークの牢獄にぶち込れてゐた。ミセス猪俣は英語が非常に達者なので、その頃はロシア移民の夜學校に敎師として働いてゐた　ロシア移民はロシア革命の影響を受けて皆なボルシヰウエキになつてゐた。それでラスク委員會もこの移民學校に手を付けたらしい。

片山老人がニユウヨークを逃げた後で老人の荷物を片付けなければならないので、高橋龜吉君に手傳をたのんだことがある。當時高橋君は私と同じ日本人青年會の屋根裏のすゝだらけの室で勉强しておられた。片山老人の荷造りのとき高橋君はあまり上手にどん〱と獨りで荷を立派に作るので、私は不思議に思うた。私は高橋君より脊が太い、丈も高い。そしてどうして半分も仕事が出來ないのかと考へても見た。

「君はどこで荷造りを習うたい」

「これか、僕の本職だないか」

「どうしてさ」

「僕は朝鮮で長い間小僧生活してゐたよ、荷造りが專門さ……」

高橋君は氣焰を上げてゐた。そのとき初めて私は高橋君の小僧見習をした話を聞かせられたのであつた。

片山老人はアトランチック市に隱れてゐるうちに「吾が社會主義第二卷」を書き上げて私に送つて來た。原稿の文字とか數字とかは高橋君が手を加へてくれた、あの千枚以上の老人の勞作がいまどとにあるかを知らない。

私はその後ロシアに渡つたので出版する企てはあつたがその實現は出來なかつた。

ニユウヨークでの取り締りのほとぼりもさめたので片山老人はアトランチツク市を切り上げて四月の末日に再びニユウヨークに來たそして一九二〇年の不思議のメーデーを私と二人で迎へたのであつた。

五

だんだん反動的機運が強くなつて來た。こんどは總ての勞働爭議は法外ストライキの名稱のもとにふみにじられた。共産黨も合法政黨でなくなつた。外國から來てゐた幾多の革命的指導者は市民權を持たないと云ふ理由で追放された。そして、かゝる彈壓は決して左翼ばかりに終らなかつた。右翼社會黨のニユウヨーク市會議員達もその議員たる權利を官憲から剝奪された。たゞ社會黨の黨員であるために。全く憲法上の權利などは勞働運動者及び社會運動者の上には認められてゐない。

アメリカではよく仕掛的事件が拵へ上げられるのである。なにかの目的に官憲とスパイとが故意に拵へ上げる怖しい手段なのである。こんな事件も私は知つてゐる。

ブロクリンの電車從業員の總ストライキのときであつた。私はニユウヨーク、コール紙の記者とストライキの狀勢見學に行つた。車庫の附近に多くのストライカーがたゞ事でないどよめきをやつてゐる。と、ひとつのビラが誰かの手でその附近にまかれたのである。そのビラは、

「……、、來る。ブルジョア政府を倒せ、あらゆる武器をもつて。ストライカーよ諸君の手によつて政府を樹立せよ……」

社會運動に關心を有する者なれば誰れでも、かかるビラは馬鹿かスパイでなければまくことは出來ない。しかるにそれには「アメリカ共産黨執行委員會」と銘を打つてあつた。記者は私に向つて、

「これは仕掛仕事です。ストライキは明日完全に彈壓さるゝでせう……。こまつたことですね」

と告げた。私もどんな夢を見てゐる者でも、現在のアメリカの社會狀勢とプロレタリアの實力とを考へられない筈がない。これはその筋のスパイの手に相違ないと思うてゐた。

はたせるかな翌日のブルジョア新聞は、

「共産黨がブロクリン電車ストライキに於いて、革命的アジテイションをやつた。そのために首領と認められた黨員らしい者は澤山檢束された。ストライキは治安に害あるものと認めて徹底的に彈壓した。

電車は新しい從業員に依つて完全に運轉されてゐる……」と報道した。

このやうの事實を私は知つてゐるので、去る二月中旬のことだ「、、、、」と銘の打たれたビラを各方面にまかれた話を聞いた時は、私はそれは其筋のスパイの仕掛事件だと主張した。一人の同志が私を訪れて、「無産者新聞」の號外を一枚私の前に出したとき、私の想像は全くはづれたことを殘念に思うた。アメリカではスパイがやるやうなことが日本では左翼を以て任ずる一部の人達に依つて行はれたのだ。然も、その社會の狀勢から見てもアメリカのあの當時と同じほどに日本は反動期ではないか。私はこの小供らしい、そして怖しい事件を伴ふであらうことを心配した。私は床の内に天井をにらみながら、つくづく小兒病者の怖しいことを考へた。其筋ではこのビラに依つて社會運動と勞働運動の全般に思ひ切つた彈壓を加へることの出來る好都合の口實をひろひ上げたのであつた。そしてビラの目的はこれと反對のものではあつたらうが。

六

かゝる狀勢のもとにアメリカでは勞働者の

希望通りのメーデーが行はれる筈はなかつた。五月一日は來た。片山老人と私とはどこかへ行くところを考へてみた。しかし、二人の所持金を加へてみても三ドルまでない。とても遠方へは行けない。私は五月一日が私の誕生日でもあり、片山老人が昨日アトランチツク市から歸つて來たのであれば心ばかりでも歡迎會を二人でやりたかつた。片山老人は考へても金は降つて來ないから活動寫眞へでも行かうと提案した。私は活動寫眞はきらひであつたので反對した。丁度その頃日本からS君と云ふブルジョアがニユウヨークに來てゐて、ホテル・オストリアに宿つてゐた。そして人を通して私及び片山老人に會ひたいと申し込んでゐた。そのことを片山老人に話した。片山老人は、

「こんなときはブルジョアのところへ遊びに行つてうまいものをタラフク食ふことが最もかしこいことだ」

と大賛成した。アメリカではこの年はメーデーの行列を許さないのはもとより、いかなる屋内會合もこの日は許されないことを新聞で發表してゐた。私等はS君をホテル・オストリアに訪れた。S君は非常によろこんで私等を迎へた。田口君と云ふ柔道五段の先生も相客であつた。S君は私等をホテルの食堂へ案内した。このホテルは大きくはないがニユウヨーク市でも第一流とされてゐる程に貴族的であつた。第五街通りに面した食堂の左の隅のテーブルを一つ領して私等四人は座をさだめた。

Sは、

「このホテルにウイルソン大統領も宿つてゐます」

いかにも彼がウイルソンと同じ位置にでもなつたつもりに話してゐた。

午後の一時頃であつた。朗々たるラッパの響が勇しくきこえて來た。軍隊を先導にした在郷軍人、武裝せる巡査の一隊、それにつゞいて幾多の少年義勇軍の威嚇的の行列であつた。

「なるほど軍人と巡査がメーデーをやつたのか……」

片山老人は意味ありげに笑うた。

S君は、「日本はアメリカのやうに反動ではない。日本は青年が皆な赤化してゐる」

といかにも寒心したのか、それとも誇大して私等をよろこばせるためなのか、はき出すやうに語つてゐた。しかし、彼の心の内にはほんとうに其樣に考へられて恐れてゐるのかも知れない。大正八年頃の勞働運動の盛になつたのと、マルクス主義が流れ込んでくるのでS君は心の底にはさびしくてならなかつたのかも知れない。それであれば私等のやうなものに會うて好奇心を滿足せしめて嬉しがつてゐる筈もない。

この武裝した巡査と軍人のメーデーの行列は「人類の敵である社會主義を排撃せよ」「文明の破壞者ボルシキウエキを倒せ」と云ふのがスローガンであつた。これは明かに勞農ロシアに對する對露干渉の宣言でもあつた。

ホテルを出た私等二人は第五街通りを行列と逆に山の手の方へとぼ／＼と歸つた。大きな商店や會社の事務所ばかりが軒をつらねてゐる。どのビルヂングも三十階以上のばかりだ。

「物質文明は人間を虫けら同樣にとりあつかつてくるね……」

と片山老人はタゴールのようなことを語りだした。

「いまマルクスが生きてゐたならば、アメリカの資本主義經濟の機能をよく批判分析して偉大なる文獻を吾等に提供することであらうがね……」とさびしく片山老人はつぶやいた。

（一九二八・三・二六）

父よ悲む勿れ(二)

麻生久



二

札幌の叔父が、結婚の話を持つて來て歸つて行くと、直ぐに父は娘を自分の書齋に呼んだ。

彼女が書齋に這入つて行つた時には、父は自分の机の前に立つてゐた。そして、娘が這入つて來るのを見ると、思はず、その悅を包み切れぬやうに微笑した。

彼女は父のその顏を見ると、ほんとに吃驚した。その顏は、彼女が曾て見た事のない程、希望と悅とに輝いて居た。それは又、今五分で死刑の執行を受くる運命にあつた者が、不意にある豫想しない力が現はれて、自分の生命を救はれた時の悅の表情であつた。

父は、彼女が室の中に這入つて行くと、そは〳〵と、大切な客人でも招ずるやうに、

『おゝ多榮子か、よく來て吳れた。さあ、まあ、掛けなさい』

と云ひがら、自分で娘の掛ける椅子を直してすゝめた。そして、又何と云ふ事なしに、

『お母さんはゐるだらうねえ』

と、云ひながら、あたふたと、室から出て行つて、自分で母を引つ張つて來た。

母は、父に引つ張られるやうにして書齋に這入つて來ると、氣遣はしげに父を眺めながら云つた。

『お父さん。貴方は、まあ、今日はどうしたのです。そんなにそは〳〵して』

『うむ、なあに、俺はちつともそは〳〵などしとりはせん。たゞ、一寸御前達にいゝ話をせねばならん事があるのでな、來て貰つたのだ』

さう云つた彼の言葉は、なほ、そは〳〵してゐた。彼は、やつと自

分の椅子に腰を下すと、妻と娘の方を眺めながら切り出した。

「今、忠助さんが來なすつて、多榮にいゝお婿さんを世話をして下さると云ふのだ。その人間は、そら多榮も知つとるだらう。叔父さんの隣りの近藤といふ家の息子さんで、お前なぞは、小さい時にはよく可愛がつて貰つたと云ふことだ。その息子が、今は工科大學を卒業して、室知の炭坑の、ある會社に、研究のため務めてゐる相な。その息子が、多榮なら小さい時から知り合ひであるし、氣心も知合つとるから、是非嫁に貰ひたいと、忠助さんの方に話があつたのだ。そして結婚したら、自分も希望だから、お父さんの山を引き受けると云ふのだ。何でも其息子は大變出來がよくて人物も立派なものだ相だ。多榮は忠助さんの家で會つた事もあると云ふがどうかな」

多榮子は、息もつかずに、一氣に喋つてゐる父の言葉を耳に聞きながら、心は何かあり得ない他人の事を聞いてゐるやうな氣がしてゐた。そして父からそんなに呼びかけられても、何と返事のしやうもなく默つてゐた。

父は娘の茫やりしてゐる顏を眺めると、心が急かれるやうに云つた。

「どうかな。お前は知つてゐるのだらう」

「えゝ知つてゐますわ」

と、多榮子は、機械的に應へて又父の顏を茫やりと眺めた。父は今度は母の方に向つて喋り出した。

「なあ、お母さん。俺はこんな良縁は又とないと思ふがどうかな。多榮のためにもいゝし、俺の炭坑も助かるし、まるで天から降つて來たやうなうまい話だ。俺も年はとつて來るし、忠雄の馬鹿はあんな風だし、一日も早く多榮に良縁を見つけて、身を片づけて貰はんならん。素性も分つとるし、財産もあるし、おまけに多榮もよく知つとるとすれば、こんないゝ婿は、これから先も容易に見つからん。俺には不足はないのだが、お前にも不足はないなあ」

母は、此突然な話をたゞ呆氣にとられて聞いてゐた。けれ共、流石に話を聞いて見れば、娘のためにも、夫のためにも、こんないゝ話はないのであつた。

「お父さん、それはもう、さうなれば不足どころか。有がたい事ですよ」

「うむ、さうだ。それに違ひない」

父は、心の底から我意を得たやうに云つた。そして今度は又娘の方に向いて、

「お母さんも此通り贊成だ。お前にも異存はなからうと思ふが、さあ一生の事だから、よく考へてから返事をするがいゝ。近頃は惡い事續きだつたが、又運が開けて來たやうだ。多榮にも一つお父さんを助けて貰はにやならんなあ」

二二

突如として、天から落ちて來たやうな此話は、流れる處に流れて行かうとする舟を、いきなり、大渦の中に投じて、ぐる〳〵とはてしもなく廻し始めたやうなものであつた。

多榮子は、寄宿で、父からその話を聞いて自分の室に歸つてからも、頭が茫やりして、物のはつきりした意味を掴めないやうな氣がしてゐた。何となく、鐵の棒かなにかで、いきなり頭をうちのめされたやうでもあれば、又、ひどい大嵐が、ぴゆう〳〵と頭の中を吹きまくつてゐるやうでもあつた。かと思ふと又、今聞いた話は皆嘘で、何も心配するには當らないやうな氣もするのであつた。そして總ての印象が茫やりして、何の統一も聯絡もない想念が、冬の空を勝手氣儘に飛んで行く雪雲のやうに、ふつと、現はれては消え、現はれては消えして行つた。そして其あひま〳〵には、有頂天になつて悦んでゐる父の笑顔が現はれるかと思ふと、又、沈み切つた悲痛な痩せた顔が現はれて來た。

そして、こんな取りとめもなく、ぐる〳〵廻つてゐる想念の中に、何故とはなく、彼女は、行き暮れた旅人が、いきなり、其肩に重い荷物をのつけられて、擔がせられた時のやうな重さを感ずるのであつた。

彼女は思はず心の中で叫んだ。

『まあ私は一體どうしたのだらう。この位いな事に自分の意志が痺れて茫やりなつて仕舞ふなんて』

彼女は、どうにかして、自分の失はれた意志の力を取り戻して、物事の正體を判然と掴みたいと焦つた。けれ共其れは無駄だつた。焦れば焦る程、彼女の頭はこんがらかつて行くのであつた。彼女は遂々考へる事をあきらめた。

『私は疲れてゐるのだ。兎に角、今夜はゆつくり眠つて、それからの事にしやう』

彼女は寢床を延べて、其中に力なく身體を横へた。けれ共、其夜彼女は夜明けになつてから、とろ〳〵と微睡したばかりだつた。

併しながら、其後數日の間に、彼女がどんなにして痺れた意思の力を取り戻し、大渦の中に卷き込れた舟の舵をどんな風に取り直したかは、彼女が兄に宛て、書いた手紙の中で、讀者が朧に知られる通りである。

そして、今や彼女が待ち望んでゐた兄が、こんがらかつて縺れてゐる絲を、大膽に素直に解きほぐして呉れるであらう其兄が、やつて來て、明日は、その顔を見る事も、話をする事も出來るのである。

多榮子は、娘が歸つてから、長い間、兄の手紙を手に握つた儘、明日自分の前に開けて來るであらう光景を、色々に想像して空想に耽つた。

もう四年も會はない其兄は、どんなに變つてゐるであらう。そして又、明日兄の處に連れて行つて呉れると云ふ、佐多と云ふ人は一體どんな人だらう。

……脊の高い、棒のやうな人……

彼女は、娘が無雑作に云つてのけた、其言葉を思ひ出した時、思はずひとりでに微笑をもらした。彼女の澄み切つた黒い深い瞳は、今その前に未だ見ぬ若者の姿を描き出しでもするかのやうに、美しく輝いて見えた。

その瞬間、彼女の心の中からは、父の事も、母の事も、そして又、必然に彼女の拒絶から惹き起されるであらうところの悲しい暗い悲劇の事も、一切影を消して、たゞ明るい、そして其事の來る事が待ち遠しい悦びで溢れてゐた。

けれ共、彼女は何時までも、そんな甘い空想に浸つてゐる譯には行かなかつた。彼女はふと、明日どうして家を抜け出すかと云ふ事を考へ出した。

「さうだ。私は母に何とか云ひ譯をして置かねばならない」

さう考へると、彼女の心は、何か知ら、暗い闇の中に引き入れられるやうな氣がするのであつた。

近頃になつてから、母は彼女にとつて一つの怖れであつた。結婚の事に就て、母から何か云はれはしまいか、そして又、何時、如何にして自分の本心を母に打ち明けたらよいか、と云ふ事は、朝も晝も夜も、彼女の頭を占領してゐる解決しがたい重い惱みであつた。何時かは云はねばならぬ事でありながら、それは云ひ出すべき時のない、むつかしい事柄であつた。

二三

それでも、彼女は思ひ切つて立ち上ると母の室に出掛けて行つた。

昔氣質の母親は、もう五十の坂を三つも越した今日でも、夜になれば、乾度、眼鏡をかけて夜仕事をするのを習慣にしてゐた。

武士の家に生れて、昔流に育てられた彼女の一生は、日本の昔の女の概ねがさうであつた様に、自分の夫と子供とのために捧げられた忠實な奴隷の一生であつた。彼女は未だ十七になつたばかりの娘の時に夫と結婚して、自由民權の政治熱に浮かされて内を外に飛び歩く夫の留守をさせられた。故郷を棄てゝ知らぬ他郷の旭川に移住してからは、あらゆる苦みをなめた。それでも彼女は一言も不平らしい事も云はずに辛して來た。派出な事の嫌いな彼女は、夫の全盛時代でも家に引つ込んで、所謂炭坑主の奥様らしい振舞ひは少しもなかつた。平和な静かな生活が、彼女の性格に一番適してゐるやうに思はれた。

彼女は、典型的な優しい親切な心の持主ではあつたけれ共、其性格の何處かには、磨かれてはゐないけれ共、穩やかな誤りのない理智が隠れてゐた。そして、どんな時でも、どんな事があつても、その驚きや、悲みや、悦びを、ひどく顔に表はすやうな事はなく、何時も凪の海のやうな穏やかさを湛えてゐた。そして又、彼女は、ほんとに諦めのいゝ女であつた。若し云ひ得べくんは、古い日本の最もよい女であるのであらう。

多榮子が母親の居間の障子を開けると、彼女は今夜も針仕事をしてゐた。そして、娘の姿を眺めると、仕事の手を一寸休めて、

『もうお前さんのお客さんは歸つたのかえ』

と穏かな聲で尋ねた。多榮子は室に這入つてから母親の傍に坐りながら、何氣ない樣子をして答へた。

『え〻、もうさつき歸りましたわ』

『どう云ふ御用かね』

『い〻え、別に用はないのですけれど、この間貸して上げた本を返しに來たのですわ』

『さうかい。あの娘のお父さんも氣の毒にねえ、未だ足が立たない相だねえ』

『え〻お母さん。ほんとに氣の毒ですわ。もう一生もとの樣に働く事は出來ないでしやう。小供は多いし、食べるのにも困つてあの娘さんが働いてゐるのですわ。坑夫なんて、ほんとに憐れなものねえ』

『だけど、お前それは仕方はないよ。人間は皆廻り合せだからねえ。それに、昔から比べたら今の者達はこれで結構なものだよ』

多榮子は母親の此言葉には、何も云ひ返さうとは思はなかつた。そして暫時、默つてゐてから、今度は思ひ切つた樣に云ひ出した。

『お母さん、私、明日一番で、一寸學校のお友達のところに行つて來ていゝでしやう。夕方には早く歸るわ』

『何處のお友達かね』

『ほら、あの近所の、お母さんも御存知でしよう。内にもよく遊びに來た。あの方から是非一度遊びに來てと云つて幾度も〳〵手紙が來てゐるんです。』

多榮子はさう云ひながら、自分の口からすら〳〵と出て來る、出まかせな言葉に自分ながら驚かずにはゐられなかつた。そして善良な母親を、こんなにして欺く事の心苦しさを感ずるのであつた。それでも母親は、娘の云ふ事に何の疑ひも持たず、氣遣はしげに云つた。

『でも、お前一人で大丈夫なのかい。お父さんも明日夕方にはお歸りだから、それまでに歸つておいでならいゝよ』

『え〻大丈夫よお母さん。私だつて最早小供ではないんですもの、近分位い一人で行けるわ』

多榮子は、何氣なく平氣でさう云つてからほつとした。そして、急いで母の傍を立ちかけた。彼女は、餘り長く母親のそばにゐて、結婚の話を持ち出されるのを内心怖れてゐたのであつた。けれ共、彼女が立ちかけると、母親は仕事の手を止めて、娘の方を見遣りながら、

『一寸御待ち、お母さんは、お前さんに御用があるのだから』

と、穏ではあるが、幾らか改まつた調子で呼び止めて、今度は、ほんとに仕事を片附け始めた。

それを聞くと、多榮子は、痛いところに觸られた樣に思はずビクリとして、母親の顏を不安げに眺め返した。彼女は、急に、待ち掴まれてゐた恐しい事が、自分の身邊に迫つて來た樣に感じた。そして、ひとりでに言葉が辷り出た。

『何か御用』

『あゝ、お前さんの御婚禮の事でね』

母親は仕事を片附けながら無雜作にさう云つて、今度は、又幾分改まつた調子で始めた。

『多榮さん。お前は、今家の事情がどんな風になつてゐるのかもよく御存知だし、お父さんの心持もよく知つてお出なのだから、叔父さんの縁談に異存はないのだらうね。お父さんは是非その心算で話を進めてお出なさるし、今日札幌に行かれたのもそのためなのだよ。私は東京の兄さんにも知らせてやりたいけれど、お父さんがあんな風だから夫れも出來ないけれど、兄さんも乾度悦んでお呉れだよ。お父さんの此頃を御覽、ほんとに若返つて來なすつたやうぢやないかね。それでお前さんに異存がなければ、別に改まる必要もないやうなものだけれど、矢張り物事は判然する處は判然しないと、何だか片附かないやうだから、お前さんの口から判然した事を聞いて置けと、お父さんがお云ひなのだよ。お前さんには別に異存もないねえ』

母親は、さう云ひ終ると、返事を求めるやうに娘の方を見やつた。けれ共、多榮子は、俯向いて、熱々した眼を膝の上に凝と伏せた儘默つてゐた。

彼女は母親の言葉を聞てゐる間に、斷ち切る事の出來ない綱か、ぐい／＼と自分の身體を縛りつけて行く樣な苦しさを感じて來た。そして心の中で必死に夫れと戰ひ續けてゐたのであつた。

母親は、意外な娘の樣子を見ると、慴えたやうな氣遣しさで云つた。

『まあお前はどうかしたのかえ』

それでも多榮子は矢張り俯向いた儘、身動きもせずに、化石したやうに默つてゐた。

『えゝ、お前何處か惡いのではないかえ』

さう云つた母親の聲は、幾分おろ／＼してゐた。暫時してから、

『お母さん。私結婚するのが厭なんです』

と、多榮子は、相變らず俯向いた儘呻くやうに云つた。

『まあ、多榮さん、お前は……』

娘の言葉を聞くと、今度は母親は呻くやうに云ひ返した。そして其年老いた小さな身體が顫えてゐるやうに見えた。

多榮子は、急に顏をあげて、今度は眞直ぐに母親の方を眺めやると、堰が切れたやうに勇敢に喋り出した。その聲の中には必死の力が籠つてゐた。

『お母さん。私、あの人と結婚するのは厭なんです。そんな交換條件のやうな事で結婚して、此窮境を持つて行くなんて。私もう何も、ら

ないわ。そんな生活は厭なんですもの。炭坑主の奥さんだとか、お醫さんだとか云はれて、坑夫達には恨まれて……」

長い間、出口を待ち望んでゐた堤の水が、押し切る事の出來なかつた堰の一角を突き破つた時の樣に、多榮子は、今まで云ふべくして云ひ得なかつた事を、強い力に押されて云ひ切ると、今度は、反對に、寧ろ狂暴に近い心持が胸の中に湧き上つて、もう一歩も退かせない身構へを彼女に與へたのであつた。

眞直ぐに顏を上げて、凝つと母親の顏を見詰めた彼女の表情の中には、其相手を、否自分自身を思ふ樣征服した時に見るやうな、或る大膽さと、冷酷さとが現はれてゐた。

その樣子を眺めると、母親は、飽氣にとられたやうになつて、

『まあ、お前は……』

と、微かに言つた切り、たゞ茫やりと娘の顏を眺めてゐるばかりだつた。

多榮子は、緊張し切つた樣子で、暫時く默つた儘、母親の顏を眺めてゐる間に、何時とはなく、堪らない、淋しい悲しい氣持が、鼠のやうに自分の胸を襲つて來るのを感じた。彼女は、大きな聲を張り上げて、母親の前に思ふ樣泣き伏したい氣持ちに攻められた。

けれ共、彼女は矢張り、顏を上げた儘、歯を食ひしばつて凝とそれをこたへてゐた。彼女の全身は、波のやうに顫えてゐた。

二五

其翌朝は、冬の青空が美しく澄み切つて、氣持よく晴れわたつた碧藍色の空には、たゞ一片の雲の影さへなかつた。たゞ、強い北風は、白雪の地上を飄々と吹き渡つて、空氣は骨を刺すやうに、凛烈であつた。

多榮子は、外の明るむのを待ち兼ねて、寢床から脱け起きた。そして音を立てないやうに、そつと顏を洗ひ、身仕度を始めた。身仕度と云つても直ぐに出來上つた。彼女は一寸鏡の前に坐つて、髮をくるくると束ね、着物は普だん着の儘で、たゞ柔らかな帶を叮嚀に締めた位いのものであつた。

身仕度が出來上ると、彼女は押入から、父の將校マントを取り出して、それを着物の上に引つ掛け、も一度鏡の前に立つて、大きな頭巾を頭からすつぽりと被つた。彼女は鏡に映つた自分の姿を見ると、思はず微笑した。それは、丁度マントの化物のやうであつた。彼女は口の中で叫んだ。

『これなら大丈夫だ』

それから、そつと廊下を傳ひ、玄關に出てゴム靴を穿くと、音を立てない樣に、そつと玄關の硝子戸を開け、辷るやうにして外に出た。

そして、急いで家の前の坂を駈け下り、町の中に姿を隱した。

多榮子は、昨夜、母の前で大膽な告白をしてから、逃れるやうにし

て自分の室に歸り、寢床に這入つたけれ共、一睡も眠る事は出來なかつた。彼女の心の中には、よつびて全く反對な二つの激しい感情が入り亂れて戰つてゐた。

その一つは、たまらなく深い淋しさと、悲みとの感情であつた。そして夫れは、父や母の期待を裏切つて、その父や母の悲みや苦みを踏みつけながら、自分の道を歩もうとする者の悲みであり淋みであつた。けれ共、他の一つは全く夫れと反對な、押し切るべきものを押し切つた時の、勝利と安心の感情であつた。

『あゝ私は、やつと乘り切るべき處を乘り切つたのだ。もうこれからは驀らに進みさへすればいゝ』

多榮子は、よつびて此二つの反對な激しい感情の中に支配されながらも、どうかすると萎縮しやうとする自分の意思に鞭打つて、其力を呼び醒した。そして、出來る丈け、父の事も母の事も、忘れて、たゞ一直線に前に突き進もうと決心した。

一睡もしなかつたに拘らず、多榮子の頭は其日の朝の空のやうに澄み切つてゐた。そして肉體にも心にも、何か知ら大きな力と、悦とが滿ち溢れてゐるやうに思はれた。彼女は自分ながら、よくもこんなに大膽になれたものだと不思議に思はれた。

雪に埋もれた町は、未だ明け切らぬ、黎明の薄闇の中に靜に眠つてゐた。けれ共、其靜な眠りの中には、今萬物が夜明の眠りから醒めて、旭日と共に新しい一日の活動に移らうとする、朝の活氣が隱されてゐた。

彼女が歩いて行くうちに、家の軒端に殘つてゐた薄闇は、薄い紙を剝がす樣に明けて行つた。寒氣はあらゆるものを凍てつけて、そこいらは、ぱり／＼と激しい鋭い音を立てゝゐた。彼女は骨を刺す寒氣と戰つて道を歩きながらも、一種の爽快な氣持が全身を滿ちみちてゐるのを感じた。

彼女は誰にも會はずに、停車場に近い、例の曲角の見える處まで來ると、彼女は一寸立ち止つて其方を眺めた。すると、其角には、頭に黑い羅紗の頭巾を被り、身には同じ羅紗の長い外套を着、足には長靴を穿いた、脊の高い男が、ほんとに棒の樣に突つ立つて、恰も誰か來るのを待つてゐるやうに、こつちを向いてゐた。

彼女はそれを見つけると、急ぎ足に其方に近いて行つて、その男の前まで來ると、又一寸立ち止つて其方に眼をやつた

すると其男は、頭巾の中に隱れてゐる女の眼を探しあてゝ、一寸會釋すると、默つて、のそ／＼停車場の方に歩き出した。

待合室には、一番に乘らうとする者が、もう十人ばかり集まつて、切符を買つてゐた。先に立つた男は、待合室の中に這入つて行くと、も一度多榮子の方に振り向てから、又一寸眼で合圖をして、切符の賣場に立つた。そして、

『M驛まで』

と、太い聲で云つた。多榮子も續いて切符の賣場に立つた。

二六

二人はM驛で降りて、橇が雪の野道を走り出すやうになつてから、始めて言葉を交はした。

佐多が先づ口を切つた。

「僕が佐多です」

「私、忠雄の妹です」

多榮子は鸚鵡返しにさう云つて輕く頭を下げた。けれ共、今更、改つた名乘合は、何か知らバツの惡い滑稽なものであつた。佐多は夫れに氣がつくと一人で笑ひ出した。そして何の蟠りもなく率直に云つた。

「こ奴は少々滑稽でしたねえ。今更名乘をあげなくたつて分つてゐたんだハヽヽ。僕が佐多でなくて、貴女が黒田君の妹さんな事は分つてるんだ。さうでなかつたら、一緒に汽車にも乘らないし、こんなにして橇にも乘りはしない。若し又さうでなくつてこんな事をしてゐたら大變だハヽヽヽ。それにしても僕等は、隨分長い間、唖のやうに默つてゐましたねえ。口が草臥れちやつたハヽヽ」

「ホヽヽほんとにねえ。隨分默つてゐましたわ」

多榮子は、意外な、佐多の何の距りもない率直な氣持に釣り込まれながら、自分も自由な輕い氣持になつて應へた。

「でも危險のある時には、默つてゐるに限るですよ。默つてゐればボロが出ないから」

佐多は、も一度さう云つてから多榮子の方を向いて快活に笑つた。そして又輕い調子で續けた。

「だが最早危險はないですよ。聞いてゐるのは雪の野原丈けで、此お爺さんは、耳の傍で雷がおつこちても振り向きもしないつて勇敢な耳を持つてるんですからハヽヽ」

「ホヽヽまあ、そんなに耳が遠いのですか」

「ほんとに遠い耳ですよ。でも、貴女は、よく、こんなに早く來られましたねえ」

「え丶、丁度父が昨日から札幌の方に行つてゐないものですから」

「夫れはよかつた。僕は又うまくやるのには二三日位いかゝるかと思つて心配してゐた。でもお母さんには何と云つて來ました」

「母には、隨分のお友達の處に行くつて」

「ハヽヽ、飛んだ友達ですねえ。それでも巧い事を云ひましたねえハハヽヽ」

二人は顏を見合はせて無邪氣に笑ひ合つた。多榮子には、此青年とはもうとつくの昔から知り合ひだつた樣な心安さが感ぜられるのであつた。

佐多は相變らず無頓着な調子で話かけた。

「僕け、昨日、貴女の兄さんから貴女を秘密に連れて來いつて命令を受けたんですがね。うまく行くかと心配してゐたんだが、もう此處ま

で來れば大丈夫だ。あと一時間たゝないうちに貴女は兄さんに會はれますよ』

『ほんとにお世話樣でした。』

多榮子は佐多の方に向いて心から感謝するやうに云つた。

『貴女は、もう長く兄さんに合はないんですか』

『もう四年程』

『ほう、四年間も、それぢやあ隨分長い間會はないんですねえ。今度兄さんが來たのは僕にも全く突然だつた。一昨日、此處を兄さんと橇で通つた時には、ひどい吹雪だつた。でも今日は風が寒いがこんなにいゝ天氣だ』

『ほんとに今日はいゝ御天氣ですねえ』

二人は氣持よげに橇の走つて行く雪の野原を眺めた。晴れわたつた東の蒼空には太陽が昇つて、見わたす限り雪の地上は、太陽の光線を浴びて、眼を射るやうにきら〱と光り輝いてゐた。たゞ無限の彼方から、雪に蔽はれた地上を吹いて來る強い北風は、外套の中まで、寒氣を沁みとほすやうだつた。

佐多は、多榮子の方を顧みて勞はるやうに云つた。

『寒くはないですか。僕の外套を上げましやうか。僕は下に二枚もジヤケツを着てるから大丈夫です』

『えゝ、有がたう。でも私ちつとも寒くありませんの、ほんとにいゝ氣持ですわ。貴方は北海道は始めてゞすか』

『えゝ始めてです』

『雪は如何です』

『僕は大好きになつたですよ。北海道の冬は戰鬪的で、僕等のやうな人間には持つて來いです。それに北海道の自然は何となく詩的ですねえ。僕は大好きだ』

二七

多榮子は夫れを聞くと又問ひをかけた。

『貴方は、それでは詩や何かゞお好きですか』

『ハヽヽ、僕は學問がないから、詩なんてものはよく分らないけれど、北海道の秋から冬はよく人が詩的だつて云ふでしやう。だから僕も詩が好きなんでしやう』

『ホヽヽ、さうですわねえ。でも足尾と云ふ處はどんなところでしやう』

『足尾ですか、足尾はひどい處ですよ。狹い谷で、山は禿げちやつて木なんかまるでない處なんです。精煉の毒烟で木が皆枯れて仕舞んです。山はざら〱になつて、死んだ赤い岩が露出してゐますよ。北海道とは、まるで反對だ』

彼は、多榮子の問ひにさう答へると、大きな欠伸を一つしてから云つた。

『御免なさい。僕は二三日忙がしくて、夜眠らなかつたもんだから、

少し眠くなつて仕舞つた。轎が着くまで、暫時失敬しますよ」

「えゝどうぞ」

多榮子が、幾らか吃驚りしたやうな顏をして彼の方に向きながら、さう云つた時には、佐多は、もう兩眼を閉ぢて、いゝ氣持相に轎に搖れながら居眠りを始めてゐたのであつた。

そこで、多榮子も、轎の搖れるに身を委せて、眤つと眼を閉ぢた。けれ共、彼女は、佐多のやうに無雜作に居眠りをする譯には行かなかつた。一人になつて眼をつぶると、又しても色々な感情や想念や光景が、次から次へと浮かび出て、入り亂れながら頭の中を往來し出した。と又、彼女の頭の中には、何時とはなしに、二人の人間が現はれて、彼女の考をそれに集中せしめて行つた。その一人は、今彼女の傍に腰掛けて氣持よげに眠つてゐる佐多であつた。そして、今一人は彼女を獲るために、破產しかけた父の炭坑を引き受けやうとしてゐる、若い紳士であつた。

彼女は、何時とはなしに、此二人を頭の中で比較してゐた。

暫時すると、彼女は眼を見開いて、夢からさめた樣に、佐多の方を顧みた。佐多は相變らず兩眼を深く閉ぢ、兩腕を前に組んで、氣持よげに眠つてゐた。

多榮子は、始めて會つた女の傍で、こんなに容易く無邪氣に眠る事が出來る靑年の態を、一種妙に引きつけられるやうな氣持で、長い間見守つてゐた。深い澄み切つた彼女の黒い瞳の中には、微かではあつたが、何かしら物思はしげな色が漂つてゐた。

佐多が、ふと眠からさめて、兩眼を見開きながら、も一つ大きな欠呻をした時には、轎は最早、町の入口にかゝつてゐた。

彼は晴れ〴〵した聲で叫んだ。

「さあ、もう着きますよ。僕は隨分よく眠りましたねえハヽヽ」

「ほんとに、よくお眠りになりましたわ」

多榮子は、佐多の方に向いて微笑して應へた。

「僕は、忙がしくて夜ゆつくり眠られない時には、何處でゝもちよいちよい眠るんです。でも今日は貴女に始めて會つたのに、居眠りなんかして、失敬しましたねえハヽヽ」

「ホヽヽヽいゝえ、ちつとも構いませんわ。どうぞ御自由に」

「でも、最早眠る暇がないんです。そら兄さんの待つて居るのは、あの二階家です」

佐多は、もう十間ばかりに前方に迫つて來た道の右側の、所謂彼の炭坑運動の巣を指さして云つた。轎は、直ぐに其家の前に止つた。

「さあ降りましやう」

佐多は自分が先きに轎から飛び降りると、多榮子の降りるのを待つて、一緒に家の中に這入つて行つた。そして、圍爐裏にあたつてゐる島山夫婦に、一寸、

「たゞ今」

と聲を掛けてから、彼の後について這入つて來た多榮子を顧みて、

『さあ直ぐに二階に上つて下さい』
と云ひながら、自分が先に靴を脱いで案内した。
朝飯を濟まして、二階に上つて火鉢の前に胡坐をかいたばかりの忠雄は、思ひ掛けなく早く歸つて來た佐多の姿を見ると、思はず大きな聲で云つた。
『やあ早かつたねえ。妹は』
『一緒だ』
その聲と一緒に、多榮子の上半身が、直ぐ佐多の後に現はれた。忠雄は妹と顏を見合せると、
『おゝやつて來たねえ』
と、も一度、懷しげな聲で叫んだ。

二八

多榮子は階段を上り切ると、そこに頭巾とマントを脱いでから、始めて兄の方に向いた。兄妹の懷しげな視線はぴつたりと合つた。
兄と妹は、四年振りに、ほんとに四年振りに顏を合せたのだつた。その瞬間、二人は何も他の事は考へない、たゞ單純な仲のいゝ兄妹であつた。
多榮子は兄の前にきちんと行儀よく坐ると、嗜のいゝ日本の娘が誰でもするやうに、丁寧に挨拶してから、今度は顏をあげて、ほんとに兄の顏を樂々と眺めた。
その濃い眉、その濃い眉の下に、やゝ遜んで、微笑してゐる双の眼、高い大きな鼻、頑丈な其體格、彼女の眼に映る、その一つ一つの四年前も今も、何の變るところはなかつた。けれ共まあ、何と云ふ變り方であらう。四年前の單純な若々しさは、あとかたもなく消えて、年が示す、力強い落着と、底の知れない深さとが、兄の上を蔽ふてゐるではないか。
多榮子は、兄の顏を見詰めながら、つくづくと云つた。
『兄さんも隨分年を取つて變つたのねえ』
それを聞くと、忠雄は、優しく笑ひながら云つた。
『ハヽヽ、兄さんでも年をとつたかねえ。でも多榮さんこそ全く立派な一人前の女になつたぢやないか。あの時は、未だ十七の女學生だつたつけ』
さう云はれると、多榮子は、今更のやうに自分を顧みて微笑んだ。
『まあ、そんなに私は違つたでしやうか』
『違つたとも。大違いに綺麗な女になつたぢやないか。それだからこそ、金持の坊ちやんが持參金付きで養子に來たいと云ふんだよ。兄さんだつて、妹でなくて金持だつたら早速申込んだけれどハヽヽ、ねえ佐多君』
『ハヽヽ、全くだ』
やつと着物に着かへて火鉢の傍に坐つた佐多は、忠雄のぶしつけな冗談に少し辟易しながら、それでも快活に應へた。

多榮子は心持頰を赤めながら兄の方に向いて云つた。

『まあ、兄さんは相變らずの悪口家ねえ。四年振りに始めて會つても直ぐにこんなですもの、、、、、』

三人は顔を見合せて愉快に笑ひ合つた。それで、ともすれば感傷的にならうとしてゐた多榮子の氣持は、明るく晴れ〲となつた。

忠雄は、今度は眞面目な樣子で二人に訊いた。

『君達は朝飯は』

『僕は食つて來た』

『多榮さんは』

『私はちつとも食べたくないわ』

『それぢや、晝飯を早くして貰ふとして、早速大切な話にとりかゝらう。多榮さんは今日のうちに歸らねばならないんだらう』

『えゝ夕方までに』

『それぢやあ僕達はあんまりゆつくり出來ないねえ。だがよく直ぐに來られたねえ』

『丁度、お父さんがゐなかつたんですもの。お母さんには追分の友達の處に行くと云つて來たのです』

『うむ、夫れはよかつた。で、お母さんは別に何も云はなかつたんだらう』

『えゝ別に、だけど昨夜……』

『昨夜どうかしたんかね』

忠雄は、妹の顔の中に現はれた、微かな不安な表情を見てとりながら云つた。

『何かお母さんから云はれたのかい』

多榮子は、兄から直接さう訊かれると、その顔を暗くしながら、強いて押し切るやうに云つた。

『いゝえ別に何とも、だけど、私の方から今度の結婚の話は厭だつて云つて仕舞つたんです』

『ほう、お母さんに斷つて仕舞つた……』

妹の言葉を聞くと、忠雄は、鸚鵡返しに太い聲でさう云つた。そして彼の顔にも、微かな緊張した色が現はれて、心持眉が寄つた。けれ共、彼のその表情は、直ぐにほぐれて輕い微笑に變り、相手に安心を與へるやうな事もなげな調子で後を續けた。

『それは良かつた。どうせ一度越さねばならん峠なら早く越した方が後が樂でいゝからねえ。そしてお母さんはどうした』

二九

『お母さんはどうした』

兄からさう問はれると、多榮子は最一度暗い氣持にならざるを得なかつた。彼女の眼には、あの瞬間の、不意の驚きに放心した母親の、悲しげに自分を見詰めた悲痛な顔が、未だまざ〲と映つてゐた。

それでも彼女は、自分を襲つて來る云ひ難い暗い感情を押へつけ

て、平靜を取り返すやうに努めながら云つた。

『お母さんは、吃驚りしてゐたやうでしたけれど、別に何も云ひはしなかつたんです』

『ふむ、そして納得しなすつたかね』

『いゝえ、たゞ默つて私の顏を眺めてゐましたわ』

『そして……』

忠雄は、も一度追及するやうに訊ねた。多榮子は、それから先きの追及に對しては、もう許しを乞ふやうな眼付きで兄の顏を眺めて答へた。

『たゞ夫れつ切りよ。私、お母さんの顏を見てゐるのが辛くなつて、直ぐに自分の室に歸つたんですもの。そして、今朝は誰にも會はずに來ましたわ』

『さうだつたのかい』

忠雄は、やつと落着いた聲でさう云つてから、何となく暫時默つて、それから今度は妹を慰めるやうに云つた。

『なあに、お母さんは大丈夫だよ。昔から物分りも早いし、諦めも早いからねえ。たゞ問題なのはお父さんさ。暫時は雷が家中に落つこちるだらう。それだつて、お前が厭なものは仕方がないさ。變な苦勞をするよりも、旭川に引つ込んで平和な生活をした方が、いくら幸福だか。今日は札幌に行つたと云つたねえ』

『えゝ、夫れも結婚の事ですわ。お父さんはお前も一生の事だからよく考へろと云ひながら、自分では叔父さんから話があつた時に、もう定て仕舞つてゐるのですもの』

『ハ、、、それがお父さんだよ。お父さんの頭で判斷したら、宇宙の中で、此話位い立派に筋道の通つた話はない譯だからねえ。だつて其男子で、金持で、大學を成績よく卒業した飛び切り上等の息子が、娘と結婚して、潰れかけたお父さんの炭坑を引受けやうと云ふのだもの。多榮さんだつて勿體ない譯ぢやないか。僕だつて飛びつくよ。ねえ佐多君ハ、、』

さつきから二人の話を聞きながら、默つて甘げに煙草をふかしてゐた佐多は、又しても不意の攻撃に狼狽しながら哄笑した。三人は互に顏を見合して高く笑つた。ともすると、陰氣にならうとする室の空氣が其高い笑聲のために明るくなつた樣に思はれた。忠雄は、今度は今までの話に斷案を下すやうに云つた。

『それぢやあ、最早火蓋は切られた譯だ。これからは、如何に巧く戰を進めて、犧牲を少くして良い結果を收めるかと云ふ事丈けだ。だが多榮さん。お父さんは、そんなに單純に諦めないよ。どうしても一と騷動だね。多榮さん御前は大丈夫かね。兄さんはお前にどつちになれなんて事は云はない。結婚したつて惡事をするんぢやないからね。お前のやうな境遇にあるものは何れでも自由に選擇したつていゝんで、兄さんの眞似をする事ばかりが必しも唯一の道ぢやない。殊に女は又男とは違ふんだから』

それを聞くと、多榮子は、幾分不滿氣な表情をして云つた。

『兄さんは、未だ私を十七だと思つてるのねえ』

『ハヽヽ、そんな譯ぢやない。兄さんの言方が惡かつたら勘辨だ』

と、忠雄は妹の顏を見ながら取消すやうに云つた。

『いや別にそんな意味ぢやないんだ。ほんとにお前がさうしたいんなら、その通りに斷行するさ。兄さんは贊成だよ。お父さん達が自分の時代に生きる權利と義務とを持つてゐたやうに、僕等も、僕等の時代に生きて行く權利と義務とを持つてゐるんだからねえ。それがほんとに人間の意志にかなつた事なんだもの。親の思想と感情ばかりを尊重して、その通りにばかり子供がなつてゐたら、人間の世の中は永久に進歩なんかしない譯だ。そんな事が孝行だつたら、孝行と云ふ奴は、人間の進歩の敵だよ……』

三〇

忠雄は一氣にさう云つてから、一寸默つて又續けた。

『そりや幾らかの犠牲は伴ふさ。お父さんだつてお母さんだつて、お前が厭だと云へば悲んだり怒つたり失望したりするに違ひない。だけど、その奴は仕方がないさ。その事のために僕等は、自分の時代と生活を棄てる權利もなければ義務もないんだからねえ。たゞお父さんやお母さんは、息子や娘が自分の通りでないと、自分も子供も、皆駄目になつて亡びて仕舞ふ樣に思つてるんだ。息子はこんなに元氣でピンピンして愉快に生きてゐるのに。』

忠雄はさう云ふと、自分の頑強な身體を揺つて高く笑つた。

『時代の悲劇だとか、親と子の衝突なんて奴あ、要するに簡單な極な事なんだ。そんな悲劇を悲んだり怖れたりするのは無意味で嫌い事だよ。それにお父さんやお母さんにしたつて、僕等がこんなにピンピンして愉快にしてるんだもの、何もわざ〳〵悲しがる事なんざないさ。お父さんは僕の事を不孝者呼ばはりをして怒つてゐるが、僕は不孝者でも何でもありやしない。僕は心の底から善良な父母を愛してるんだ。出來るなら、今だつて飛んで行つて二人に抱きつきたいんだけれ共、向ふで、わざ〳〵不孝者に仕上げて怒つてるんだから行かない丈けだ。それだからつて抱きつくために、自分の生活を棄てる事は出來んからねえ。それぢやあ、切角親よりも後から生れて來た甲斐がなくなるからねえ。そのために不孝者になるんなら止むを得んさ。押し切つて進む丈けさ。ハヽヽ。そして又も一つ親不孝の種が出來て來た。も一度親不孝になれば、今度はもうお仕舞ひだらう。お父さんやお母さんも、もう旭川に歸つて行くさ。その方が、いくら平和で、不要な苦勢がなくなるか知れやしない。もう年もとつたんだし。それに、札幌の坊ちやんだつて、切角小金を持つてゐるのに、其方が安全だ。それに善良な男だからねえ』

忠雄は、それ丈け云つて仕舞ふと、考へるやうに暫時默つてゐた。

多榮子は、兄の言葉を凝と聞いてゐる間に、何か知ら頭の中に幾重

となくかさなつてゐた陰鬱な雲が、だん〳〵晴れて行つて、何となく身も心も輕くなつて行くのを感じた。そして力強い明徹な意思が、ぐい〳〵と自分を引張つて行く樣に思はれた。

彼女の眼には生き〳〵した輝が甦へつて來た。暫時してから忠雄は、

『さてそんな理窟はどうでもいゝとして、此悲劇の結末をどんなにつけるかねえ』

と、妹に相談するやうに云ひ出した。

『多榮さんは、今日歸るんだねえ』

『えゝ、お母さんにはさう云つて來たんだけれど、もう歸らない方がいゝと思ふわ』

『さうだねえ。だがも一度歸らなければ駄目だらうよ。も一度、お父さんの前で一幕演じなければ、此悲劇は簡單に大團圓にならないよ。お父さんは札幌から何時歸つて來るのかい。』

『今夜』

『それぢやあ、今日歸つてお父さんの前で、もう一幕やるさ。そして演劇の頂點で、何時でも兄さんの處に飛び出して來るんだねえハ、、ハ、、』

『さうねえ』

それでも、多榮子の顔には、物に慴えた樣な當惑の色が去らなかつた。忠雄はそれを見ると、輕く揶揄ひげに云つた。

『お上品なお嬢樣には、そんな事は不向だねえ。でも多榮さん。自分の道を切り開いて行かうとする者は、何時だつて、其困難に身を投じて、自分の意思を鍛錬する事が必要だよ』

多榮子は、兄の言葉を聞くと、

『兄さん。私は今夜歸りますわ』

と、きつぱり云つた。

『さうだ、それがいゝ。必要な事は、何時だつて躊躇なくやるさ。多榮さんの役割が濟んだら、兄さんが登場して、一切の結末をつける役割は引受けるよ。も一度親不孝者の役割をねえハ、、、。兄さんも惡黨だねえ』

二人は晴れ〳〵と笑ひ合つた。

『それで家の事はよしとして、今度は佐多君』

忠雄は一つの事に句切りをつけるやうにさう云ふと、今度は佐多に呼び掛けた。

『今度は、僕等の結末の相談だ。坑夫達の方はどんな樣子かねえ』

「放浪時代」と「泥濘」

「放浪時代」と「泥濘」をよんで

武者小路實篤

自分は他人の小說は、中々よめない質だ。今度義理からよまなければならなくなつて、荷厄介な感じをしながら、龍膽寺氏の「放浪時代」と保高氏の「泥濘」をよんだ。「泥濘」の方をさきに全部よんだ。それからよみかけたまゝほつておいた「放浪時代」をよんだ。今「放浪時代」をよみ上げた處だ。

始め「泥濘」の方がよくはないかと思つたが、終りの方をよむと「放浪」の方がいゝと思つた。退屈してゐる時よむのとちがつて、急がしい時、それも義務的に讀まれては、讀まれる方が氣の毒だと思つた。しかしゆつたりした氣持で小說が讀める時を、殆んどもたない、頭のなかが自分の仕事に逐はれ、又讀んでくれと云ふ原稿におはれてゐる自分は强いられなければ中々讀めない。しかしよみ出して見たら兩方ともわりに氣苦勞なしによめた。文章もムダがなく、頭の動きもソツがなく、ものゝ見方も狹くない。又一人わかりではなく材料も兩方とも面白い。しかし「泥濘」の方がより常識的で、我々の頭を全部的に動かしてはくれない。それは「放浪時代」でもさうであるが、兩方を比較して見ても「泥濘」の方が頭の一部きり動かしてくれない。「放浪時代」の方がいく分、我々の頭をちがう方面に動かしてくれ、何か新鮮なものに一寸だがふれさしてくれる。殊に終りの方がいゝ。「泥濘」は最後が一寸いけない。少くも僕はさう思つた。しかし二つとも文壇人として、玄人として通用していゝ人と思つた。むしろ出來すぎてゐる。

「泥濘」も中々よくかけてゐるが、主人公の心の動かし方が少し不足してゐる。なぜ橋川が金を出したがらないか。なぜ夫婦わかれをさしたがつてゐるか、讀んでゐればわかるが、作者はわざとわからなくしたのかも知れないが、わかり方がおそいし、淺い。しかしそれは讀んでゐてさう氣にはならないが、しかし少しはがゆい。

そのかはり文章は無駄がなく、調子ははがゆくない。「放浪時代」の方が文章のゼンマイがゆるい。之は反つていゝ處と思ふ人もあると思ふが、僕には前半をよむのが中々厄介だつた。これは義務的によんだからでもあらうが、少しのんびりしてゐる。

しかし生活や感じ方に淡いが新鮮な獨自性があり、其處が讀んで氣持がいゝ。「泥濘」にはさう云ふ處はない。そのかはりある世相、大阪の商人達の氣質が何處かに出てゐる。「放浪時代」よりは世間が出てゐる

る。それが普通味に墮しやすい處でもある。

「放浪時代」は半分遊びの生活で、貧乏してゐても、貧乏に拘泥しないですむ生活で、そしてきまゝな生活をしてゐる。自我も、僕と云ふ人物も、殊に魔子が生きてゐる。そして皆人間として面白い、そして三人の關係も氣持がいゝ。たゞそれ以上の處が少ない。終りの方でお母さんが出て來るあたり、魔子が一人で歸つてゆくあたり、で少し深淵をのぞかれかけるが、それも深淵と云ふと誇張になる程度で、反つて氣持がいゝが、深いとは云へない。

泥濘は主人公の嫉妬する時なぞも反省もあり、見方も公平であり、人もわるくなく、頭も相當に動き、又生活もかはつてゐるし、文章もムダがなく、はつ切りかけてゐて、わりに複雜であるが、前にも云つたが、それ以上と云ふ處が少ない。點にすると何とわるい點もないが、同時にずぬけた取り柄もない。すべてが乙の上位いで、入選すると云ふ作品だ。

しかしもう一人前と云ふ感じがする。最後の處がもう少し深淵をのぞくやうな感じがすればいゝが、あれはコンベンショナルな感じだ。あれ位いなら疑惑のまゝに終らすか、東京へ逃げ出すやうにでもした方がいゝと思ふ。一寸とつてつけた感じだ。あゝ云ふ結末も不自然ではないかも知れないが、一寸とつてつけたやうな氣がした。終り方としてうますぎるからかも知れない。

しかし相當にかつちりかけてゐた。當選していゝものと思ふ。

慾を云ふと兩方とも深味が不足してゐる。我等の心にひゞく力が少ない。しかしそれは望む方が無理かも知れない。

少くも嘘ものや、ニセものでなく、眞實をかかうとし、誇張も、背のびもせず、材料をよく見、よく生かし、その身にならないとかけない處までかけてゐるのは氣持がよかつた。兩方とも實感に誇張もごまかしも不自然も感じられなかつたのはうれしい。

しかしそれだけ新しいものが生れたとか、恐ろしいものが出て來たと云ふ感じではない。二人の出世作として、二人の今後の仕事の多幸をのぞましてもらう。

二人ともあぶなげのない作家であると思つた。

二人の新作家

前田河廣一郎

立場

この限られた範圍の短評に於て、私は冗漫であつてはならない。先づ、私は、與へられた作品の據つて生じた觀念態を見、次に、技術的方面、更らに、餘白あらば、それらの社會的意義に迄言及したい。これは在來迄の文壇的な印象批評ではない。が、私達は、批評上の主觀主義論は、アナトール・フランス迄で澤山だと思つてゐる。文學批評

の力點は、もはやさういふ Apriori 性にだけ置かれてはならない時代である。

其の一

與へられた二つの作品といふのは、龍膽寺雄作『放浪時代』と、保高德藏作『泥濘』の二篇で、孰れも改造社の懸賞に當選した一般讀書階級からの直接の寄稿である。其點で私も欣んでこの短評を試みたい氣になつた。

第一作、龍膽寺氏の『放浪時代』は筋のない話である。二人の兄弟と作中の主人公が、極めて簡素な思想的生活を營むことを、ヴイルドラックのやうな小ブルジョア的要愼深さと、暖かい色調の勝つたペンで描いたものである。作に起る事件にも人物にも左程の對立がない。凡てはささやかな顯微鏡的ドヌウマンの波動に支配されてゐる。明るい、綺麗的な、印象的な、貧しい知識階級の徐行の世界である。この作家は、日本の近代都市の表面に浮游するモダーニズムを捕へ、そのモダーニズムの批評なき描寫に成功してゐる。併し結果に於て、ブルジョア・イデオロギーの煽りに蠢動する都市的小市民の厭世界觀の波滅の上に、なほも微笑し續けむとする階級的無自覺を暴露することを防ぐわけには行かぬ。作家は人物『自我』をして人類を嗤はしめてゐるが、斯かる非辯證法的自然科學的人生觀の突出は、作家の小ブルジョア性を裏切るものでなくて何だらう！　私はこの作を『新』自然主義小說と呼びたい。其處に、當面の、究極の結論はない。即ち、筋のない話である所以であらう。

其の二

題材の取扱ひや構成や文章の上では、何等の新工夫はないが、保高氏の『泥濘』は、もつと閑納的であり、作家の有つ人道主義の行詰りを正直に語つてゐる。これもやはり無意識乍らも小ブルジョア社會階級の一底面に觸れた作であるが、主人公丑之助が血みどろになり乍らも崩壞し行く彼れの人道主義をもつて、周圍の小資本家達の奸策を一つ一つ發ばき取り、最後に多情なる妻とのカタストローフへ驀進するところ、その企らまぬ暴露に一種の血稅を拂つてゐる。懷疑的な、悲劇を孕んだ遲鈍なテムポー――これは又前記の『放浪時代』の稍空洞な華かさに對比して、何たるデイオニゾス型の作品ぞ！　作家のもつとも損をしてゐるのは、題材を大阪に取つたが爲めに、際立つて客觀的態度を持すべき作家迄も、同じ泥濘中に曳込まれたかの觀を抱かせる點にある。京阪情調といふ古臭いいひけめに依つて。それに、宿命的にアルツイバセフのやうな燐光を浴びせた女主人に、凡ての破滅を寄托せしめたやうな結末は、あざとくも厭世界觀である。

推　測

私はこの二篇を讀んだだけで、日本の一般文藝愛好者の小說を書く年齡の人達に、深く浸み込んでゐる自然主義の染色の濃厚さを知つた。社會組織に於けるプチ・ブルジョア階級の絕望的な行詰まり、その涙ぐむだ樂天主義と自殺的な悲觀――比較的職業化しないこれらの

寄稿によつて、斷然としたそのヴイスタの展開が、私の前に置かれたのである。これらの人々、この階級に朗かな黎明は來ないであらうか――？ 一つは「藝術至上主義」の白日夢によつて人を醉狂せしめ、他は社會構成のあらゆる壓力によつて人を絞殺する、その未解決な記録が自然主義文學である。底深い水溜を示した二本の繪が、前記の二作家であつたとすれば、彼等も亦時代相の反映者であることに興味を感ずる。

「放浪時代」と「泥濘」

廣津和郎

丁度九州へ向つて旅行しようと思つてゐるところに、「改造」から、同誌今回の懸賞當選小説二篇について讀後感を聞かせてくれといふ註文を受けた。

自分は四月號に載つてゐる龍膽寺雄君の「放浪時代」をまだ讀んでゐなかつた。却つて、五月號に發表される筈の保高徳藏君の「泥濘」の方は、前にその原稿――未定稿――を讀んだ事があつたが。といふのは外でもない。保高君は自分の以前からの友人だつたからである。――この事は後で書くことになるだらう。

自分は汽車の中の時間を、無意味に過さずに濟む事を喜んだ。そこで、自分は早速改造の註文を引受けた。

自分は「改造」四月號と、「泥濘」の校正刷――改造社から廻してくれたもの――をスーツケースに入れて、汽車に乘り込んだ。そして直ぐ龍膽寺君の「放浪時代」を讀み始めた。

何よりも明るくて若々しいのが好かつた。自分はこの小説にかなりの愛を感じた。そして今より十二三年若かつた頃の自分を思ひ出した。この小説の中に書かれてゐるやうな友情、友人の生活と主人公の生活との、この曇りのない融合、さう云つたものは、この作の主人公のやうな年齢時分には、完全になし遂げられる。その時代には、友の喜びは己れの喜びであり、己れの喜びは友の喜びであるといふ事が、何の疑ひもなく信ぜられ、信じられるからこそ、實現される。――十二三年前には、自分もよくそれを經驗した。この作者の書いてゐるものと、時代が違ひ、文形は違つても、個人と個人との關係は、單純に、素直に、何の蟠りもなく融け合へた。ところが、近頃は、我々が中年期に這入つて來ると、そんなわけには行かない。各人各々その個人的な生活が、それ自身の發達をしてしまつてゐる。昔のやうな、青年時代の理窟も何もない融合といふものが、たとひ互にそれを望み合つて見たところで、なかなか成し遂げられない。何故かといふと、その人自身の生活がそれ自身の方向を持ち、その人の家族、環境の背景が濃くなり、みんながそのために頭の半分を占領される事になるからである。

自分はこの小說を讀みながら、そんな事をしみじみ思ひ出してゐた。何か異常な事件、友の一人の重病とか、その死とかになると、昔の友情が再び强く動き出して、一時的に、個人的な生活を顧みず、昔に近い熱情によつて動き出すことはあるが、併しその重病が癒え、死の跡片付けが濟むと、又個人のカラの中に引つ込んで行つてしまふ。『放浪時代』はさうした中年期の興褪めを少しも感じない、若々しい靑春の友情の記錄である。自分達が振返つて見て、生涯のうちで、『あの時分は最も愉快だつた』と思ふであらう時代の記錄である。最も望ましく、併しいつか自然にその時期を過してしまひ、過してしまふと、再びそれに歸る事はなかなか出來ない時代の記錄である。

この作が自分に取つてなつかしく思はれる理由の一は、自分自身の靑春期愛惜の念を刺戟して呉れるためかも知れない。

この作者はその作物が印刷になる事は、これが始めてだといふ事を聞いたが、併し作家的手腕は、それ程初心な人のそれではない。相當に文學に志してゐた人のそれである。殊に繪を描くらしいこの作者の筆には、時々繪畫的描寫の新鮮さが、その情景を讀者の眼前にくつきりと浮上らせてゐる。そしてどの人物もどの人物も、相當に浮上つて描けてゐる。殊に少女が好い。又望遠鏡を持出して、月の世界を一回五錢で見せてゐる若い天文學者も好い。主人公たる畫家靑年はその心持はよく描けてゐるが、三人の人物の中では、その風貌が讀後比較的ぼんやりしか浮んで來ない。

が、一口に云つてこの作は、その生活の明るさと、それを描く筆の明るさとによつて、なつかしい心持を起させる佳作の一つになり得たが、併しこの作者が若し作家として立つた場合を考へると、まだ幾多の難關にぶつかるだらうと思ふ。かうした材料をかうした筆で描いて行けば、いつも恐らく相當の效果を擧げて行くであらうが、併しそれも二つ三つこの種類の作を書いたら、作者自身も飽きが來るだらうし、讀者としても、直ぐ單調を感じ始めるだらう。それだから、この作者の未來を考へるためには、尙幾つかこの作者の作物を讀んで見たいと思ふ。

校正刷にはまだところどころ下駄などがあつて、完全なものになつてゐなかつたが、併し讀んでゐて、想像出來ない程ではなかつた。自分はそれを拾ひ讀みしながら、『泥濘』の作者は、新鮮な若々しさでは、『放浪時代』の作者に一歩を讓つても、その物の見方、作家的力倆では、決して劣つてゐない事を感じた。劣つてゐないどころではない。この作者はどんな材料でも相當にこなして行けるだらうといふ事が、この作一つを讀んでも想像出來る。

保高德藏君は今新進作家として出るのが不思議な位の年齡の作者である。中學校時代には宇野浩二君などを友人に持ち、早稻田時代には、田中純、細田源吉、細田民樹、宮島新三郎、直木三十五、靑野季吉の諸君とたしか同級だと思ふ。早く作家を志願しながら、中途父君の事業をついで、實業で苦勞し、この三年ほど前から再び作家たらん

と専心努力してゐた人である。

自分は以前から同君と顔を見知り合つてゐたが、最近ふとした事から親しくなり、同君に會ふ機會が多くなつた。此處まで云つてしまつたら、もつと詳しく云つてしまふのがほんたうかも知れない。といふのは、自分は昨年の秋頃、同君の二つの作物を讀んだ。それはこの『泥濘』の未定稿と、もう一つ矢張り百枚近い作物である。自分はその二つの作が、共に現在の文壇の水準に較べて何の遜色がなく、殊に後の作は、その材料と云ひ、スケエルの大きさと云ひ、今の主観的小説の勢を得てゐる文壇にはめづらしい客観小説として成功してゐることを感じたので、自分はそれを『改造』に紹介した。その時山本實彦氏が、『これは傑作ですか。傑作であることを、責任を以て言明しますか。その責任を持つて下されば、、、、、』と云つた。

自分はその時、自分の性質として、『傑作？　傑作？』と山本氏の言葉を頭の中で反覆した。そして傑作といふ言葉について考へた。傑作とはどの程度からゆるされるべきだらうか。傑作なんていふ言葉は、言葉として最高の言葉である。さういふ最高の言葉を無暗に許容するといふ事はどんなものだらうか。自分は佳作といふ程度なら許容出來る。又優に文壇の水準に達してゐるといふ事なら許容出來る。だが、傑作だと斷言する事は、なかなか出來るものではない。

そこで自分は暫くそんな事を考へた後、『兎に角讀んでくれませんか。僕は相當に好い作と思ふのです』と答へた。答へながら、自分の推薦の仕方が如何に下手かといふ事を考へたが、自分の性質としては、どうもそれ以上答へられなかつた。

そこでその原稿は、『暇が出來たら一つ讀んで見よう』といふ事になつて、改造社の金庫の中にしまはれたらしい。そして山本氏にはなかなかその暇が出來なかつたらしい。

その後保高君が、『それではもう一つ殘つてゐる方を、思ひ切つて懸賞に應募して見よう』と云つた時、自分は同君が本名をそのまま出して、若い人々の作物の間に、彼の作物を投げ出して見ようといふ勇氣に感心し、大いに賛成した。そこで『泥濘』は今一度推敲を施されて、そして懸賞應募として改造社に送られたのである。

だから、『泥濘』の當選は、保高君の喜びである事は勿論、自分に取つても非常な喜びだつたのである。

自分はその喜びに胸を躍らせながら、『泥濘』の校正刷を讀んで行つた。未定稿の時讀んだのよりも、一層おちついた、纏まつた感銘を受けた。この作者の筆は稍自然主義の味を多分に含んでゐる。恐らくこの作者の文學的教養が、專ら自然主義の全盛時代に與へられたものであるからであらう。その地味な、艶のない行き方は、今の文壇で損であるばかりでなく、殊に懸賞小説などには損である。しかしこの作の人間の描き方といふものは、些の危つけのない、しつかりしたものである。良人を愛し、一家の苦境をその美貌を利用して切抜けようと思ふ細君、そしてその美貌を利用して債權者達を操る中、それが良人

の苦境を切り抜けさせるための目的であると共に、おのづから自分の浮氣心をも同時に滿足させて行くといふ事にもなる女の心理、それが見事に描き出されてゐる。此處に現はされてゐる世界は、『放浪時代』の青春の美しさとは全然反對の、中年期乃至老年期の大阪商人の色と慾との露骨な世界である。義理も人情もない、金と色とを臆面もなく漁つて歩かうとする餓鬼の姿である。さうした中に、文學志望の人の好い中年男の主人公が、事毎にそれ等の世態に心を打たれ、思ひを掻き亂される。――自分はこの作はもつと長篇に書いたら、一層好くなつたのではないかと思ふ。主人公の破産に至る經路ももつと詳しく書き、そこに一寸說明されてゐる出資を口實にして主人公の細君をたらし込む男、慾と色との二筋道でその男に接近して行く妻君、その邊をももつと長篇小說の行き方で詳しく描いて行つたら、最後が一層引立つたのではないかと思ふ。

自分は今まで日本の作者の手によつて餘り取扱はれなかつた、大阪商人――最も現世的な、狡猾な大阪のプチ・ブル達の眞相が、この作者の筆によつてもつと暴露される事を希望する。自分は友人だから云ふのではない。若しさうしたものをぐんぐん突つ込んで描いてくれたら、今までの文學の題材に、更に違つた方面がこの作者によつて附加へられる事になると思ふ。

これを要するに、改造社のこの計畫は相當な效果を擧げ得たといふ事が出來ると思ふ。當選二作いづれも見ごたへのあるものだつた。文壇のレベルから云つても、些の遜色あるものでなく、寧ろ最近不振の文壇では、二つながら佳作と云つても過言ではないと思ふ。

（四月三日、長崎にて）

敏先生のおもひで

谷崎潤一郎

こんど上田敏先生の全集が改造社から出るについて、その編輯にあたつてをられる富田碎花氏から手紙が來て、むかし私が文壇へ出た當時、故先生が私の物を激賞されたことがあつたが、その批評は何に出てゐたか覺えてをらぬかと云ふ問ひ合せがあつた。しかし私の記憶する限りでは、三田文學に永井荷風氏の批評が發表されたことはあるが、上田先生の書かれたものはなかつたと思ふ。ただ先生が座談の際に私のものを褒めてをられると云ふ話は、間接には始終きいてゐた。それから一度、神田の何處かで多分北原白秋氏の「思ひ出」の會があつた時に、先生が卓上演說をされ、白秋氏の「思ひ出」と共に私の「幇間」を推稱された記事が、その明くる日の時事新報かに載つたのを讀んだ覺えがある。

私はその會には出なかつたので、その頃はまだ先生と面識がなかつた。荷風氏にせよ、先生にせよ、當時の大先輩たる文學者が、私のやうな無名の青年にそれほど肩を入れ、眼をかけて下さるのは有りがたいには違ひないが、私は身にあまる光榮に感激する一方、却つてそんなにされたために接近しにくくなつたやうな傾きもある。「三田文學」の荷風氏の批評を讀んだ時なぞ、體ぢゆうがぶるぶるふるへて、讀んでしまつてもまだふるへが止まらなかつたくらゐであるのに、——そしてその前から荷風氏を崇拜すること深く、その謦咳にあこがれてゐたことは非常であつたのに、——あれが出たために私はとうとう荷風氏の門を叩くことが出來ずにしまつた。讀んで間もなく、默つてゐても惡いやうな氣がして、荷風氏にハガキ（？であつたと思ふ。長い文句を書くのが恐ろしくて、封書でなく、ハガキにしたのだつたと思ふ。）で感謝の挨拶を述べ、荷風氏からハガキの御返事を頂いたことがあつた。その後自然お目にかかる機會はあつたけれども、やはり何となく恥かしくて打ち解ける譯に行かなかつた。

上田先生は荷風氏よりも尚先輩であつたから、一層近づき難いやうな氣味合ひがあつて、生前わづかに兩三度しかお目にかかつてゐないのである。そしてその兩三度も、明治四十四年の四月から六月まで、京都に遊んでゐた間のことであつた。當時先生は京都の帝大を敎へて

をられ、岡崎邊に住んで居られた。私はもちろん一人でお宅を訪問する勇氣はなかつたが、たまたま長田幹彦君も京都にをつて、先生をよく知つてゐる大學生か新聞記者かが二人を連れて行つてくれたのである。それが岡崎のどの邊であつたか今では見當もつかないが、門口の呼鈴に「これを押して下さい」と云ふ意味が佛蘭西語で書いてあつたのを記憶してゐる。新しい家で、ちようど私たちが案内された客間の天井に工夫が電燈を取りつけてゐる最中であつたから、或ひは外からその時分に轉居して來られたのであらう。當時長田氏は二十四歳、私は二十五歳の青年で、敬慕してゐる先生の前へは出たものの、殆んど何一つ此方から話しかけはしなかつた。ただ先生一人が巧妙な話術でいろいろな話をして下さるのを、畏まつて聞いてゐた。その時の先生の話は私の「朱雀日記」の中の「ディレッタント」と題する一節に引用してある筈である。

此の訪問の後間もなく、今度は先生の方から私達唯二人だけを南禪寺の瓢亭へ呼んで下すつた。くり返して云ふが、大學のプロフェッサアたる人が、年はも行かぬ新進作家をそれまでに遇して下すつたのは、餘程の好意でなければならない。私たちは云ふ迄もなく感激した。が、感激するほどな臆病に固くならざるを得なかつた。微醺を帶びられた先生は、その言葉にも熱情が加はつて、二人の將來を訓戒し、激勵して下すつたが、はかばかしい應酬さへも出來ずにしまつた私たちを、定めし不滿にも齒がゆくも感ぜられたことであらう。私は今に先生に濟まなく思つてゐるけれども、しかし當時の私たちとしてはあれ以上の態度は取れなかつたのも無理がないのである。



上田敏氏

その瓢亭へ招かれた晩は靜かな雨のしとしとと降る晩春の宵であつた。(此の折のことも「朱雀日記」に書いたつもりである。)先生はプロフェサアらしくない、江戸の下町好みの澁い和服で、懷中時計を袂の中に忍ばしてをられた。私はひそかにそのたしなみに感心したが、和服の下にうすいシャツの見えたのが氣にならないことはなかつた。

先生はその後も木屋町の私の宿へ立ち寄られたが、殆んど連日先斗町の茶屋酒に浸つてめつたに宿へも歸らなかつた私は、あとできいてひどく恐縮したことがある。そして遊里に何百圓かの借金を殘してこそこそ東京へ逃げて來たので、先生のお宅へ挨拶に上ることをすら忘れてゐた。

以來私は、一度も先生に會つたことがなかつた。谷中の齋場でお葬式があつた時に私は改めて先生の靈前に額づき、平素の疎懶の罪を謝して、先生の赦しを乞うた。そして齋場の出口に近く立つてをられた永井荷風氏とも、遠くの方からではあつたが、久しぶりに禮を交した。

お葬式のかへりに、小山内薫、木下杢太郎、長田秀雄の諸氏と連れ立つて本郷の方へ歩いて行くと、後ろから鷗外先生が俥で私たちを追ひ越された。先生はあたまをつるつるに剃つて、白髯を伸ばして、黄平の紋服を着て、老漢學者のやうな風采をしてをられた。

「千駄木のメエトルも歳を取つたねえ。」

四人の者が過ぎ行く俥に帽子を取つてお時儀をした時、そのうしろ影を見送りながら小山内氏が云つた。

上田敏氏につき

永井荷風

上田敏先生の全集が出版されますので全集編纂の方々がわざ〳〵拙宅へ御出でになり先生のことについて何か書いて改造と云ふ雑誌へ掲載するやうにとの御はなしで有ました先生の事については既に拙稾かでもの記と申すものに初めて巴里にて御目にかゝつた時の事からその後のことまで委しく書きましたから今別に改めて御話致す材料も御在ませむ此度出版されます全集のはじめにも序文を是非にと云ふ御はなしなので僭越を顧みず書きました次第で有ります大正十二年の春であつたと覺えて居ります上田瑠璃子さまが先考の詩集を佛蘭西の大使クローデル氏に進呈致されるにつき男の人が介添に行くことになり山内義雄さんとわたくしの二人が雉子橋外の大使館へ一緒に參りました瑠璃子さまは鮮な英語でクローデル大使とはなしをされました。上田先生のわが文壇に功献せられた事に種々ありますが佛蘭西文學を日本に紹介せられた事などはその重なるものでありませう。明治三十年代には既に長田秋濤先生がデューマの椿姫やコツペエの戯曲などを紹介せられ飯田旗軒氏がゾラの小説を紹介せられました。是より先森田思軒氏がユーゴーの短篇小説を翻譯せられたこともあります然しいづれも其の紹介は一部分に留まつてゐて近世の佛蘭西文學全體に渉つて紹介や説明をされたのではありませむ。殊に佛蘭西の抒情詩については當時上田先生以外に之を知るものはなかつたのであります シュリイプリュドムの如き高踏派の詩人やポールヴェルレーヌの如き象徴派の詩人の作が始めて日本語に翻譯せられたのは皆上田先生の在つた故であります佛蘭西の大使が上田先生の形見なる瑠璃子さんの手から親しく先生の詩集を受納される事を望まれたのは洵に尤もな事であります。わたくしが明治四十年の春巴里に居りました時は毎日上田先生と瀧村龍太郎君と法學博士松本烝治君の三人づれで遊び歩きました當時の事は既に拙稾かゝでもの記に書いてありますから申上げませむ先生が伊太利亞に居られた時分には藤島武二氏と御一緒であつたやうに聞いて居ります日本の文學者で西洋の音樂や美術の事を根本的に了解してゐる人はいくらもありませむ又西洋の古書骨董の事に趣味を持つてゐる人も甚少いのであります上田先生は巴里滞在中度々わたくしを誘つて古道具屋を見歩き有益なはなしを聞かせて下さいました

磯海の春

中村憲吉

朝がすみ舟こぎ出れば河ぐちは海たひらにて遠きしら雲

朝なぎと船おほく浮きてもろもろの帆のかげながし海にうつりて

凪ぎわたる海の庭には亂れでて島づたふ舟あまた居りける

くが山の段だん畑に除蟲菊しろく咲きそめて春ふけにけり

磯やまを眞ぢかく漕ぎぬうぐひすは畑のうへの山にして啼く

春明きうれひおぼゆれ磯山の郭公どりは海にきこゑ來

磯かげの海にたむろし羽叩くは去におくれたる鴨にかあらむ

釣りぶねへ舟こぎよせて魚買ひぬ海に遊びて空のちかけれ

海なかの舟に炊ぎの火を焚きてひるの火焔のいろぞさみしき

舟にして炊げる飯の潮の香や熱きを吹きてかなしみて食ふ

山ぐにに常あくせくと居るわれは今日海にありて物をわするる

磯山に映ゆる若葉を海にみて過ぎしむかしの命をぞおもふ



淺草底流記

添田唖蟬坊

斷片

×

淺草には、あらゆる物が生のまゝ投り出されてゐる。人間の色んな慾望が、裸のまゝで躍つてゐる。

淺草は、東京の心臓――。

淺草は、人間の市場――。

×

淺草は萬人の淺草である。

誰もがハラワタまでさらけ出す安息地帯である。

×

大衆は刻々に歩む。その大衆の淺草は常に一切のものゝ古い型を溶かしては、新らしい型に變化させる鑄物場だ。

あら以日の夢。すたれた淺草情調のはかない讃美。淺草の現實の姿な嘆き、淺草の新らしい流れを無視する妄斷家よ、退却しろ。

×

淺草のあらゆる物の現はれは、粗野であるかも知れない。洗練を缺いてもゐやう。然し、大膽に、大衆の歩みを歩み、生々躍動する。

×

流行劍劇、チャンバラ。――その愚劣さを嗤ふ御仁よ。あなたはその認識不足を耻ぢなければならない。

暴れ廻る坂妻の劍のキッ尖に、無性矢鱈に強い百々之助の白刄のキラメキに、民衆は

『自らの欝憤』を晴らしてゐるのだ。

×

クラ・ボウのお臀の動きから、新時代の滋養を吸ふモダニストと、銅錢で御利益を購ふ觀音様の信者とが並んで歩いてゐる。

あらゆる階級、人種をゴッタ混ぜにした大きな流れ。その流れの底

にある一種の不思議なリズム。

音と光り。もつれ合ひ、渦巻く、一大交響樂。——そこには諧調の美がある。

×

男は、女は、此の色彩と交響の狂奔の中に流れ込んでは、その中から明日も亦生きやうといふ希望を拾ひ出して、行く。

1　淺草の「衆愚」

晝の淺草は、鳩ポッポと花やしきと木馬とに傾く御家族同伴の行樂を主とした、寧ろ微温的娯樂の世界のやうである。

ところが、一旦夜の幕が落ちたとなると、改めて全淺草は生物のやうに、むく〳〵と起きあがつて、妖しく鋭い光彩の中に、その精悍潑溂さを主張するもの丶様である。

そして夜の娯樂は、端的に、注射的なものになつて來る。

夜八時、興行館の「割引」を待つ人の長蛇の列こそは、淺草の一偉觀である。

觀客席が充滿すると、役者も、唄うたひも、説明者も、グンとアブラがノツて來る。誰でも一足その中に踏み込むと心のタガをゆるめてしまふ安來節に於ける舞臺と野次の應酬の如く、舞臺と客席との境が消えて、渾然一體に溶け合ふところの淺草獨特の空氣が醸されるのは多く此の割引以後の時間である。

淺草の野次は、奇智縦横、且つ犀利な批評眼を持つてゐる。天眞爛漫な野次を爆發させる反面には、淺草人は又冷哲な無言の批評をする。此の野次と聲のない批評との下に、數多の役者、劇團、等々が生き、或ひは葬られて行つた。

淺草の觀衆は、無遠慮で粗暴だ。その代り正直だ。ツマラない芝居を窮屈にカシコまつて辛抱する様なバカな眞似はしない。どんなキラにもたぶらかされない。どんな名門、どんな看板を背負つて來ても、彼等の「心」に觸れるものがないならば、容赦なく默殺してしまふ。

隨分バカげたものや、愚劣なものが流行る場合がある。それは、表面的には如何に腑甲斐ないものであつても、その底を流れる「あるもの」が、民衆の心にピツタリと觸れるからである。

淺草の民衆は教養がないといふことをよく聽く。民衆に教養がないといふことは、民衆自身のせいじやアないんだから、そんな處へケチをつけられちやア困る。もちつと素直にその批評に「民衆の心」を聽いて見る量見になつたらどうか。

此の「淺草人の批評」は、論理的ではない。直感である。理論的でない批評には價値がないなど丶、誰が言ふであらうか。

衆愚の淺草は同時に叡智者の淺草である。

淺草は論理の世界ではない。實行の世界である。具體の境地である。

だからこそ遠慮なく高笑ひも出來やうといふものなのだ。

2　食ひ物屋——事務的飲食時代

飲食店の多いことは、全市を通じて淺草が第一位を占めてゐるが、まつたくどの小路を通つて見ても殆んど軒並飲食店である。

そして、その新らしい傾向は、飲むこと食ふことが電光石火的になつたことである。靜かに食事を樂しむとか、氣分を味はふなど、言つた食べ物屋は無くなつてしまつた。これは一面に寂しいことではあるが、又一面にさうした「氣分」の中に浸つてゐることを容さない、そしてそんな悠長な人間を無くして行くところの時代の動きは、どうもこれを肯くより致し方がない。

草津や一直、其他の宴席や一流料理店が不景氣を喞つのも、あながち不景氣ばかりがその理由ではなからう。

世は擧げて安にして直なるものに流れてゆく。仲見世の大增、牛の松喜、鰻の奴、天ぷらの中清などを筆頭に、多くの飲食店が皆簡單に腰を掛けて食べられる食堂を作る。

まるで飲食店街と思はせる樣な無數の食ひ物に一瞥を投げて見ると——牛では先づ松喜のうまさを推す。米久、ちんやの雜沓。平野、今半、常盤、白雲。あづまは淺草でたつた一軒の夜明し店である。

鳥では金田。うなぎは前川がちよつと離れて駒形河岸だが鰻では一。奴は安いのと信用の置ける點がよかつたが、近頃は女中が不愉快だ。伊豆榮は駄目になり、つるやは一通り。

天ぷらは中清がうまいが勇敢に高い。大黑屋は安いが恐ろしく品が落ちた。しみづが五十錢でいゝ天ぷらを食はせる。

三角は腰掛の開祖。然し近頃の新らしい發展振りは同感が持てない。魚がし料理は比較的安く、氣持がよい。

オリエントは此頃淋しい。賣物の女給にも美人が見當らない。卓子の長い行列が荒涼としてゐる。壁の白いタイルが惡いことには便所の樣な感じがする。聚樂は騷々しい。ちんや稍よし。流行の淺草もカフエ丈けは銀座にさらはれた形である。

すしは都ずし、握りの眞ン中から庖丁を入れるのは邪道だと食通はいふ。然し女のお客には喜ばれてゐる。すし清は一時は飛ぶ鳥落す勢ひだつたが、此頃は溫いすしを食はせる。味も著しく惡くなつた。

金ずし稍よく、大黑はまづい。

支那料理では上海亭が一番うまい。値も相當に好い。五十番は安くうまい。來々軒は昔の繁昌をしのぶよすがもない。

そばは仲店の萬屋が頗る眞面目だ。

かけ醬油とけんちんで淺草黨を嬉しがらせた騎西屋も、高くなり、ガサツになつて昔ほど人を引きつける力がない。

其他大增、大金、みまき、三定、宇治の里、銀鍋から、高級輕喫廉ともいふべきみやこ、花や、萬盛庵、やぶ、よか樓、パウリスタ、共遊軒、蛎めし、駒形どぜう、以下三流四流五流の無數の店、——それ等の著しい盛衰と變化とは、明らかに、高い代價を拂つたり、長く

待たされることを喜ぶやうなノンキ者が無くなつたことを物語つてゐる。

女の酌で飲みに行く男と、さうした客を狙ふ店は別として、民衆は只うまいといふ事の外に、手輕と安價と迅速とを要求して止まない。そして味覺神經過敏。機械的に貪り喰ふ寧ろ投り込む、詰め込むのである。

此の民衆の慌だしい氣持に逆らはないやうに努めて行く店が繁昌するのである。來々軒より五十番へ、三角より野口食堂へ、と繁昌の中心は激しく移動してゐる。

此の著しい現象は、簡易食堂のふえた事とその恐るべき繁昌に見られる。野口食堂、ヤマニバー、三友軒、須田町食堂、ホマレ亭、巴バー、本郷バー、タツミ食堂などでは、十錢の洋食、五錢の料理、十五錢の鍋、十五錢の酒、しかも相當に食へるのである。

これ等の店では何れもシナビたガマロを握つて大威張りで入れる。安心して醉ふことが出來る。そして又一つ著しく目に立つのは此の類の飲食店のお客の中に女性の交つてゐることである。家族連れ、若夫婦、女同志。四五年前まではこんな光景は夢想も出來なかつたものだ。女性の進出、恐るべし矣。

喫茶店の夥しい數にも驚ろく。白十字を筆頭に、中西、ふうき、十番、丸善、つたや、等々々――小さな喫茶店の至る處に介在してゐること。僅かな金でも心易く休息をとれるといふ處に、漸くカフェから喫茶店への流行の動きを見ることが出來る。

甘い方では松邑、秋茂登、梅園の古のれんと三好野の賑盛。甘酒とみつ豆と飲料水で下總屋と舟和の繁昌は凄まじいやうである。

3　大衆の食卓――屋臺店

飲食店にはまだ、最も手ッ取り早い立食ひの屋臺店がある。

屋臺店は觀音劇場前の芝崎町通り、瓢小路一帶、傳法院裏御國座通り、池の端等に、古本屋、おもちや屋、雜貨屋、織物屋、古物商、古着のせり賣屋など、押し合ひへし合ひしてズラリと並んでゐる。

洋食、支那そば、燒鳥、燒貝、おでん、天ぷら、肉うどん、牛めし、フライ、すし、すいとん、あづき、うなぎ――。何れもコップ酒にブラン、ウイスキー、ブドウ酒位は備へてある。此の立食ひ店の中にはヒドいものもあるが又ほんとうのうまい物屋もある。

瓢小路の屋臺の中に、松崎天民のほめてゐるおでん屋がある。「吉人屋」といふ屋號で都鳥をのれんに染め拔いてゐる。創業二十五年といふ、屋臺といへども信用を持つてゐる。然し近頃のおでん屋は殆んど、ハンペン、蒲鉾、ちくわ、さつま揚げ、しのだ、何もかも賣物屋仕入れである。(おでん屋専門の賣物の材料屋がある)上ダネを使つてゐる店は何軒もない。

天ぷらでは、雷門の「天五」といへば可成り有名である。これは五十年前から連綿と續いてゐる古いのれんだ。相當に顧客定連を持つて

ゐる。うまい。けれども値は思ひ切つて高い。到底屋臺店の値段ではない。

芝崎町通りに「東武」といふ天ぷら屋臺、これはなんでも一箇五錢で好みのものを揚げて呉れる。そしてうまい。從つて繁昌で大抵の場合人が一ぱいたかつてゐる。早くタネ切れになるのでいつも早くしまふ。

廣小路並びのすいとんとあづきの專門屋臺。これも古く、一ぱい五錢の此の熱いものは、寒風つのる頃は淺草ッ子にとつての救世主であるといふ。

傳法院裏のフライ屋、ジューツ〳〵と油の音をさせて串フライをあげてゐる。油じみたのれんをくゞり、油の匂ひを嗅ぎながら、あげたての奴をパクつくのは、「淺草の味」である。

一錢の串フライなど喰み居れば
車の下に集ふ犬はも

燒鳥を食ひ〳〵犬の足を踏み

などいふ歌や川柳があるが、屋臺の下には必らず犬が、人間が固くて嚙み切れない肉を投つてくれるのを待つてゐる。これも淺草に於ける一つの生活姿態である。

燒鳥が好きで巣鴨の奥から度々淺草まで出て來た川田といふ男があつた。彼は燒鳥を食つて、公園を一廻りすると、それで滿ち足りたのである。

燒鳥といつても決して鳥ではない。一串一錢、二錢、四足獸の臟物だ。

こいつが中々馬鹿に出來ない味を持つてゐる、などゝいふと所謂食通なンていふ向から嗤はれるかも知れないが、嗤はれてもかまはない。知る人ぞ知る――燒鳥の味、だ。

處が此の燒鳥の奴、可哀想に昔から兎角蔑しめの眼で見られてゐた。その味にはゾツコン惚つてゐながら、暖簾に首をつッ込んで立食ひをやることの出來ないテラヒ屋が澤山ゐたのである。さういふ手合はきまつた樣に、

「犬にやるんですから……」

と言つて買ひに來たものである。

然し時の動きは、人間から此のヘンな虚飾をハギ取つたらしい。今では女でも平氣で屋臺に立つて臟物の燒鳥を食べてゐる。

4　夜の街路の魔術師　（香具師の群れ）

バナヽ屋、メリヤス屋、藥屋、反物屋、草履屋、靴屋、玩具屋、植木屋、樂器屋、本屋、雜貨屋、古着屋、煎豆屋、等々々――淺草の路傍は悉く香具師でうづまつてゐる。

と言つたからつて驚く事はない。高層佳麗の劇場や映畫館の興行師だつて、元を質せば香具師の派生でしかない。

香具師といふ語には、惡い者、ゴマカシ物を賣る手合、詐術をする

聲、といふ響きがある。そこで近代親分倉持忠助君は「香具師」に新らしい定義を下した。曰く、

「香具師は小資本の實業家である──。」

と。香具師は無産者だ。無資本者は商品を多量に仕入れることが出來ない。小量の商品では店舗は張れない。そこでその小量の商品を捌く爲めに技術を持つて立つのが香具師だ、といふのである。

彼等香具師の少數急進者達は、時代的に目覺めて、往年のゴマカシ香具師から脱胎して、無資本を標榜する大道の商人として濶歩すべく陣痛の惱みを惱んでゐる。社會は彼等を見るに、もちつと忠實に、そして色眼鏡を外してやるべきである。

しかはあれ、香具師は舌の尖で木の葉を金にする魔術師だ。人間はマジツクが好きだ。だから昔から香具師は瞞着者でありながら、決してその跡を絶たない、そして人氣者だつた。

瞞着する者があるから瞞着される者があるのか。瞞着される者があるから瞞着する者があるのか。

人類に、あらゆる意味でのスケベイ心が消滅しない限り、瞞着者は御繁昌であらう。そこに私は香具師なるものゝ存在理由を認める。

香具師は心理學者である。いつでも人間心理の弱點を見つけ出してはクイ〱とくゝし上げる。おまけに群集心理を利用する。

彼等の大ジメと稱するもの(これは大きく圓陣に人を集める)には、リツ(法律書)キンケン(統計表)カリス(まじなひの本)ゴエイ(英語速習書)ノードク(處方、藥草類の表)スリク(謎々)ミンサイ(催眠術、護身術極意)パンソロ(算盤熟達法)記憶術、などがある。一流の大ジメ師は、實に秀れた漫談家である。大きく築いた圓陣を、彼等の終極の目的である商品を賣つてしまふ迄、決して崩すやうな事をしない。

例へば、キンケン──これはお上の勤儉奬勵に乘じたもので、

白粉つけたり、香水はやめませう。

化粧する人が我國民中一千五百萬人と見て其費用一人一日三錢づつと見ても、

一ケ年一億六千四百二十五萬圓となる

此の金で六千噸の汽船百六十艘造られる

といつた樣な例を幾つも擧げ、國富比較、國貨、輸出入、米生産と費消高、酒、煙草など統計を示し、我國がどういふ經濟狀態にあるかを述べ、之を救ふには勤儉あるのみであると力說する。そして以上各種統計表を賣るのであるが、その勤儉の趣旨に從へば、そんな統計表なんか買はないで貯金でもした方がいゝ事になるのだが、そこまで勤儉の趣旨が徹底しちやつては、キンケン師汗みどろの雄辯の代價がない。奇體なことには、散々勤儉の話を聞かされて感心したものが、みんな文句無しにその場で無駄使ひをする。統計表を買はされてしまふ。そこにマジツクがあるといふのである。

總じて大ジメ師は商品の原價の五倍から六七倍の利得を擧げる。え

らい暴利のやうである。然し彼等に言はしむるまでもなく、これは決して剰餘價値ではない。獅子奮迅的、噴飯的、浪曼的、實用的漫談に對するまことに當然な報酬である。と言つてもいゝ程に彼等のタンカは微妙、巧妙、奇妙である。

德川夢聲よ、大辻司郎よ。よき街の魔術師について一度聽いて見たまへ、と私はいふ。

5　千束町は性慾の廢墟

淫名を天下に謳はれた往年の十二階下、千束町――脂粉の妖しい臭ひが澱んだ闇の中から、媚笑をたゞへた化粧の顏が、ぞめき歩く男をたぐり寄せる。それは今は見ることの出來ない姿となつた。

天民の「倫落の女」時代には、千を數へる銘酒屋に、二千人の私娼が暗い軒燈の蔭に鼠鳴きをしてゐたが、これが大正五年の私娼撲滅に遭つて萎靡した。

當時私は私娼窟内に「自由倶樂部」を設け、小生夢坊、佐藤女添等と共に、私娼撲滅反對運動をやつたものである。

峻嚴を極めた撲滅策は、遂に私娼の絕滅されたかの如く人をして信じさせた。然し私娼の存在は實に根强く、嚴しい取締りの下にも決して、その根を絕やさなかつた。

震災に依て淺草のシムボル十二階が跡形もなく崩壞し去つても、彼女等は萎ぼまなかつた。震災を機會に根絕を期した増田象潟署長の烈しい干渉の下にも、銘酒屋は蜜柑屋となり、絵葉書屋となり、その蔭から依然營業は續けられてゐた。その頃、曾て五九郎一座の子役だつた×××子が、水々と成熟して蜜柑の後から嫖客に笑ひかけてゐたのを見たことがあつた。

遂に之等を根絕せしむる術を得ず、この地に待合營業を許可して、私娼の群れを放逐した。追はれた彼女等は大擧して龜戸の私娼窟に轉して移動した。從つて今日では私娼窟としての昔日の面影は全く無くなつた。

果して然らば千束町は性慾の廢墟となり終へたのであらうか。

猿之助横丁、御殿横丁、曾ては漁色の大群が泳ぎ廻つた小路々々には、御待合××家の粋な軒燈にひツそりかんと、時折洩るゝものがあればそれはしつぽり濡れる爪彈き。

行き交ふ者も稀れである。飛沫をあげた淫慾の激流は、今や古池の如き靜謐さを保つてゐる。何といふ、變りやう。

だが、待て。その、波紋も立たないやうな靜けさの底に何が營まれてゐるか。ぢツと耳をすまし、闇の底を見透かして見よ。情感の交流が紫電を放ち、慾望の劍戟が火花を散らしてゐるではないか。それは「春」の取引とは違ふものなのである。

舊檢番（從來の花柳界）では姐さん達が青菜の如く不景氣を喞つてゐるといふのに、此の新檢番は、萬事「お手輕向き」なので繁忙を極めてゐるといふ事實を何と見るか。

たゞ障子の穴から呼ばない、といふだけの話である。取引が露はでないだけである。然もその新らしい待合の主人達は、昔の私娼窟に於ける主人達を其儘なのである。彼等は千束に於ける新らしい待合の店と、移動先に於ける銘酒店とを併せ有つてゐるのである。

結局、おンなじことだ。

型が、看板が、變つてもおンなじことだ。

だが、撲滅し得たと信じてゐる。浅草の地を浄め得たと喜んでゐる。

おめでたさよ。然しそれでいゝのだらう。世の御歴々の、廢娼論、私娼撲滅論なるものが、結局體面論でしかないのだから。

浄められたといはれる浅草にも、日本館裏の銘酒店、其他小料理屋、遊戯場に多くの、、、ひ手がゐるといふことは、知つてる者だけが知つてゐやう。

俗に言ふ高等淫賣、浅草のゐまはりに家を持つて、客を漁りに夜毎、活動館の客席の暗がりに、雑沓の渦の中に、飲食店の衝立の蔭に、出没する佳人がふえた。

阿部川町邊には「月六妻」といふのがある。一ヶ月に六回、、、、、、也で、彼女の夫となることが出來るのである。

哀れにも傷ましい、過去には全盛の夢を持つた歌劇女優の流れの果て、或ひは安來節のシンガーが、古着、借着の寒い肩を舞臺にさらす。暖かい自らの憩ひの床を持ち得ぬ者が、樂屋に寝泊りする情けなさ。假りに一夜さの契りであつても、ぬくい夜具の感觸を戀ふらうふれ心を、誰が咎めることが出來やう。

6　乞食でない乞食

浅草に現はれる乞食は、みなそれ〴〵に風格を具へてゐるので愉快である。乞食といふ職業を以てする者は、此の諸君に對してはソゲハないやうな氣がする位だ。如何にこれ等の諸君が、浅草を彩るカビの華であるかといふことに就て語らう。

指が無くて三味線を彈く男――。彼はロハベンチに腰を掛けてゐる。左りの手の指が四本ない。殘つた拇指で、煙管の半分に折れた吸口の方を挾み、その吸口の膨れた部分、凹んだ部分を巧みに利用して絃をおさへる。バチの代りにマッチの棒で彈く。

離れて聽いてゐると、普通に彈いてゐるのとちつとも變りがない。一ぱいの人だかり、みんな感心して煙管の動きを目で追ひ、熱心に聽いてゐる。中には彼と同じベンチに彼に寄り添ふ樣に腰かけてゐるものもある。「立山」を一つ彈いてから、

「今度は春雨でもやつて見やう、しめつぽいものより陽氣の方がいゝからね。」

誰にともなくいふ。さも樂しんでゐるかの樣な話し振りだ。金を彼の膝の脇へ置く者があると、

「ヤ、どうもありがたう。」
と如何にも晴れ〴〵と、まるで友達にでも挨拶するやうだ。然も決して反感を抱かせない快朗な態度である。彼は決して乞はない。泣言を言はない。彼の指の無い理由に就ても、彼自身からしやべることは決してない。誰かゞ執拗に尋ねたならば、彼は斯く簡單に答へる。
「これですかい、工場でやられてね。どうも仕様がない、暫らく寝てゐたが、もう働らくことも出來ない不具になつたんだなと色々考へてる内に、一寸した拍子からこんなことをはじめてね、イヤどうも情けない仕儀でさア。」
と、又もや彈きながら小聲でうたつてゐる。彼を中心にした一團はまことに蟠りがない。彼を卑しむことなく、煙管の折れとマッチの軸に依て生じる音色に聽き惚れる。そして、金を置く者があると、
「ヤ、ありがたう。」
とまるで友達にでも挨拶するやうに、彼は禮をいふ。

時代遲れの風琴を鳴らす老人──。痩せた五十位の、ボロマントを着てゐる。彼はいつも區役所通りの甘酒屋の前の電柱の根ッこにあぐらをかいてゐた。そして古風琴の蛇腹を伸ばしたり縮めたりしながら、唄をうたふのであるが、そのうたひ方が頗る人を喰つたものだ。
「オレは河原の枯れすゝき、コリヤ」
などゝ懸聲を入れてうたつてゐる。彼は帽子を二つ持つてゐる。一つは鳥打、これは冠つてゐる。一つはペチヤ〳〵た學帽。これは膝の前に置いてある。これは錢受である。この中へ錢を投げ込む者があると、彼はうたひながら輕く頭を下げて謝意を表す。但し投げ込まれた物が白い色をしてゐると、彼はわざ〳〵風琴の手をやめて、冠つてゐる鳥打を脱いで、下の學帽に頭が屆くまで最敬禮をする。彼は又中々しやれ者である。顏に綺麗に剃刀を當てゝゐる時が多い。
「山路越へて、ひとり行けど……」
讃美歌をうたつてゐる時もある。かと思ふと、
「猪牙でヱ、、、セツセ」
などゝ「深川」をやる。寒い風が吹き募つて人があまり通らない時でも、彼はひとりで風を見ながら風琴を鳴らしてうたひ續けてゐる。彼は淋しさうだ。然し又如何にも嬉しさうに唄つてゐるやうでもある。人を小バカにしてゐる處もあるが、私にはナンダカ彼はほんとうの淋しみを知り、ほんとうの寞びを知つてゐる男のやうに思へた。が、此頃彼は淺草に姿を見せなくなつた。何處をどうしてゐるのか。

觀音堂の周りの雜踏の中を、文字通り蓬頭垢面、ボロを引き摺つた男が何か分らぬことを口の中でモツ〳〵呟きながらノロ〳〵と歩き廻つてゐる。と、群集の中の一人が彼の手に白銅を一つのせてやる。すると後からく〳〵あはて者が蟇口を開いて小錢を彼に與へる。
さて皆さん、落付いて考へて下さい。彼の見苦しい男は決して乞ふ

てはゐないのです。たゞひとり言を言つて歩いてるだけの話です。それを見ておせつかいな人が、得々として慈善心を綻ばせて財布を開ける。と、皆々之に倣ふ、といふ筋書です。

此の男は「慈善心を喰ふ」ことを知つてゐる悧巧な奴です。

明るい仲店の人波の中を、八十八ケ所巡りの笄をペタ／＼押した白衣を着て、小供を連れて歩く跛の女乞食。永年の間、吾妻橋の上に坐つて、赤ン坊を泣かしてゐた乞食であるが、近來は衣裳を替へて仲店の眩ゆい電光の中に進出して來た。

鈴を鳴らして御詠歌をうたひながら、仲店の舗道をゆつくり往來する。

綺麗な藝妓がよけて通る。

若紳士が銀貨を與へる。

斯くして三四回此の舗道を往復すると、明日の白い米と、刺身と寢酒の代がとれる。彼の亭主は二年前死んだが、乞食の親分だつた。田舍から乞食が上つて來ると、彼の家に『草鞋出し』に來たものだ。亭主が死んでも彼女は姐御です。

其他「哲學者の乞食」と呼ばれる者の如き名物的存在が多々ある。

7 夜の藤棚

瓢簞池、藤棚の傍らに、豫言者アビル。彼は蠟燭の灯に紙の風除けをして左手に捧げて立つてゐる。

其隣りには子供を負つた盲目の浪花節語り。破れ扇で杖を叩いてゐる。

又隣りには猫八と稱する物眞似師。

それ等の人垣の外には風呂敷包を抱へてウロつくヒツパリ（淫賣婦）。

藤棚の下には、浮浪者の群れ。寢ころんでゐる者、しやがんでゐる者、立つてゐる者、寄り掛つてゐる者。ボロ服、印袢天、細の帶、麥稈帽。陰險な顏、狡猾な目。凹んだ目、片目、歪んだ顏、尖つた鼻、つぶれた鼻、曲つた鼻、しやくれた顋、が相親んで語つてゐる。ふさけてゐる。ぼけた四十女もゐる。老婆もゐる。十三四の小僧もゐる。

「夜の藤棚」は生の戯曲「どん底」だ。

九時、――十時、十一時。

觀音堂から此處らを中心として、仲店裏、仁王門、二天門横、ロハ臺、茶畑、雜沓の中、カフエー、其他の飲食店かけて、千狀萬態に變裝された慾望が、奇々怪々な踊りを踊つてゐるのである。

喧嘩、無頼漢、仲直り、掏摸、刑事、前科者、詐僞、持逃げ、田舍者誘拐、色仕掛、淫賣屋の手先、色餓鬼、朦朧車夫、スリ、カツパライ、脅迫と誘惑、軟硬両派不良團の跋扈跳梁、新不良者の發生と蔓延、宵と夜更けと夜明け、――、刻々に變る舞臺面、無限に進展す

る、出沒自在、端倪すべからざる踊りである。

8　浮浪者の天國

夜も漸く更けて、雜沓を極めた活動街が、嘘のやうにアツケラカンと拔けがらになつて、公園全體が森閑とする頃になると、さまぐ＼の風來坊が何處からともロハ臺に姿を現はす。

醉過ぎ、遊び過ぎの歸り損ねたのも、使ひ込みも、家庭の不和から逃れた女房も、立ン坊も、常習浮浪者も、乞食も、廢人も、——巡査の密行に、結びかけた夢を破られながらも一夜を明かすのである。

古顏になるとそれぐ＼に隱れに安らかに眠られる巣窟が定つてゐる。大塵芥箱の中などは特別なクッションの付いた寢床だ。眞冬の彼等の寢方は實に巧みだ。例へば石材の積んである處では、風を除けて石材に二人並んで掛け、一人の膝の上に他の一人が突つ伏すと、その上に、膝を貸した方が被ひかぶさつて、互ひに暖の交流を計つて寢る。

露宿するロハ臺のお客は、無論冬期より夏の方が夥しく多い。寢苦しい木賃宿の追ひ込み部屋より、涼しくて、自由で、金が要らないから、定宿のある勞働者もやつて來るのである。

淺草こそ、何人にも無くてはならない樂天地である。勞働が苦しくても、逆境に居ても、不景氣でも、此處あればこそ、誰もが生きて居られるのだ。たとへ金が無くても、食ひ物が不足でも、家は無くても、身體は不自由でも、ともかくも此處を根城として生きてゐられるのである。

社會の表面に、結構（？）な宿泊所が幾つもあるのに、何故そこに行かないのだらう。宿泊所には彼等を寄せつけない樣々な條件がある。屋根はなくても、寢床はなくても、いろぐ＼の意味から身心を憩はせることの出來ない慘めな者にとつて、淺草は慈悲深い大道者である。親切な宿泊所である。暖かい家庭である。

劇場裏の一つのゴミ箱からでさへ、すし、天ぷら、辨當、カツレツ等、豐富な御馳走が出る。彼等の中の一人が、

「俺はもうカツなんか食ひ飽きてしまつたよ。俺達の生活は中流以上だな。長屋住ひの貧乏人にやア俺達のやうな生活は出來やアしねえ。」

と氣焔を吐くのも無理はない。

此の點から見ても、浮浪者が、規則づくめの生活や、恩義を賣る慈善に不滿を感じ、反感を持つてゐることがよく分る。彼等はみな慈善の束縛を恐れてゐるのである。

食ふ心配のない、寢床のある養育院をわざぐ＼脫け出て來て、淺草の日なたでぬくぐ＼とうづくまつてゐる老人がよくある。養育院には寢食の苦勞はないが、精神的な拘束がある。彼は先づ自分の體を完全に自分の物にして置きたいのである。

大正十四年十月に、東京市役所で浮浪者調査といふものを行つた。

役人共は浮浪者といふと此の調査を唯一無二の武器としていつも持ち出す。が、その中にはチヤンチヤラ可笑しい、嗤つてやるべきものがあるのだ。

曰く——浮浪者は全市を通じて三百八十人居る——彼等の職業は、ビラ撒き、屑拾ひ、飴賣、輕子、立ン坊、掃除人夫、工夫、大工、左官、筆耕等々である。——その收入は最高は大工の百圓、次は輕子、土工の六十圓である、最低乞食の一圓五十錢である。從つて浮浪者の一日一人の平均收入は十七錢五厘である——といつた類のもので、然も一々本人の口から得た數字であるから斷じて誤まりのない、信憑すべき統計である、といふのである。

ところでちつとも信頼出來ない、といふのは、象潟署の浮浪者狩りで、公園だけで六百何十人といふ事がザラにあるので、浮浪者の收入調べなンてのはもう滑稽を通り越してゐる。

浮浪者は一切面倒な交渉を持ちたがらない。小うるさい質問なんか以ての外だ。だから假りに調査なんかある場合は、一時的に他へ逃げてゐる。彼等の中には誰にも知れない穴を持つてゐる者が幾らもある。又調査に捉まつたとしても、いゝ加減にチヤラツポコを答へる。彼等にとつてそんなことはどうでもいゝのだ。たゞうるさいだけだ。

これが浮浪者の心理だ。浮浪者を算盤で彈くことは絶對に出來ない。然もお役人のお目出度さは、自分等の拵へて來た數字を、後生大事に斷つたり、掛けたりして喜んでゐる。

浮浪者を知らうとするならば、氣持の方面から入つて行かなければ駄目の皮である。

彼等は落伍した。どん底に落ちた。一切に棄てられて、一切を棄てた。然し今こそ彼等はしみ〴〵と自分を慈んでやることが出來るのだ。「自らを生きる」といふ點では最も強い彼等は唯一者である。

……………

×

諸人の淺草。淺草の底の流れ、それは明けても暮れても果てしのない、不斷の循環、底の知れない流れである。

×

淺草を眞に理解することはむづかしい。二度や三度ブラついて見たとて何も解る筈はないが、たとへ此の土地に五年十年住んで見たとて、過去は夢だ、將來は空だ。到底現實の淺草、生きた淺草の眞相を捉へる何の足し前にもならない。淺草の流れの底には、底がない。

×

淺草は生きてゐる。

——結——



醬油佛

吉川英治

一

五月雨は人を殺す？……

人入渡世の銅羅屋の龜さんの部屋に居る、日傭取の人足達も、七人が七人とも、雨で、十日も仕事にあぶれて、みんな婆羅門の行者みたいに目を凹ましてゐた。

左次郎は隅ッこに寢てゐた。

うすい蒲團へ柏餅にくるまッて、氣の小さい目をしながら、みんなの馬鹿話を聞いてゐると、何時までも飽きない氣がする。

話といふと、この部屋では、色氣と食ひ氣よりほかになく、就中、十日も仕事が無くつてゐる時は、食ひ氣の方に話が咲いて、勘、竹、由、丑、六、三公、みんな胃袋そのものゝやうな顏をして、

『馬鹿ァ言つてやがら、化物ぢやあるめえし、一人で蕎麥切三十ばいに笹屋の鯖ずしを四十五なんて、食へる理窟があるもんか』

『いや、食はうと思や、食へるさ』

『命がけだッて食へねえ』

『なに食へる』

『食えねえ』

と、食ひ意地の張つた話から、果は、賭食ひのことで唾を飛ばし合つてゐる樣子だつた。

すると、三公が言ひ出した。

『おれの國にや、蜜柑を一籠、食へるか、食へるもんかで、賭をした奴が有つたッけ』

『蜜柑の一籠ぐらゐなら、おれだつて、今すぐ此所で食つて見せる』

『皮も箱も繩も、きれいに食ッてしまふんだぜ』
『そ、そいつあ、無茶だ、賭にならねえ』
『所が、食ふと言つて勝つた奴があるから妙だらう。その代り條件があつた、どうして食つてもいゝと言ふ條件が有つたんだ』
『へえ、でも、食ッてしまつたのかい』
『蜜柑の實を食ふ前に、皮と繩と箱を燒いて、灰を團子にしてペロリとやつてしまつた。食はれた方の奴は、五兩賭をしたんで、世帶をつぶしてしまやがッた』
三公の話が終ると、丑が待つてゐたやうに口を尖らして、
『――だもの、この番附だつて、嘘とは言えねえぜ』と、威張りだした。
仲間外れになつて默てゐた左次郎は、何かと思つて、龜首を擡げてみると、丑がみんなの前に皺をのばして見せ付けてゐるのは、乾物袋になつてゐた番附の切れッ端。
『御世泰平皷腹御免、大江戸大食番附』
と言ふ反古だつた。

二

近年、柳橋の萬八や中洲の泛濟などで、賭食ではないが、大食競べの催しが度々あつた。
一方では黑船を打拂への、佐幕がどうの、勤王方が旗上げするのと、騷いで居るから、御禁制の布令が出てもく、岡場所に隱し淫女は減らないし、富興行は密かに流行るし、萬年青氣狂ひはふえるし、强請や詐欺は横行するし、猥褻淫本は相變らず秘密に版行されて盛に賣れるといふ世の中。
弘化初年だつた。
そんな江戸の時世でゐながら、銅羅龜さんの部屋にゐる日傭取などは、食ふ話ばかりしてゐて、饕食帑禁にたんのうしたことなどは夢にもない。
だから番附に勘亭で刷つてある「御世泰平皷腹御免」なんていふ文字を見ると、躍氣になつて、癪にさわつて、こんな番附があてになるもんけえ――と言ひたくなる。
だが、奇嬌人の大食會が流行の因をなして、この手鍬の仲間にも、この頃、賭食は一つの流行り物になつてゐるので、その反古に書いてある、筆頭連中の名は偉なる英雄の如く見えて、のし餅十枚に煮小豆二升を平げた大關や、大澤庵十六本とか噛つて見せた小結の肩書には、自ら敬意を表したくなつてしまつた。
その中で、ひとり土俵死といふ印のついた名があつた。
『おや、こいつあ、たつた醬油を七合飲んで死んでやがる』
三公が、その果敢なき名を見つけ出して笑ひこけると、年長の由造が、尤もらしく首を振つて、
『うんにや、醬油を七合飲んだのは偉い、』

『どうして怖い？　七合位、酒だと思つて飲みやあ』
『ばかを言へ、酒とちがつて、四合も飲みや眼が眩んでしまつて、カーッと逆上ると何だか何だか分らなくなる。おれも一度醤油賭をして、二合五勺まで飲んだが鼻血が出ちまつて、あとの二勺が飲めなかつた。それを七合も飲みや死ぬたあ當りめえだ、第一、ほかの物ならいいが醤油を飲ませた行司がものゝ分らねえ奴だ』
『さうかなあ』
と、一同は此の説明に感心した。所が、感心しない者がひとり居た。割合にむツつりな六である。
『だつてお前、おれが一度仕事に行つた濱町の砂利場にや、平氣で一升賭をする奴があるぜ』
『醤油をか？』
『さうよ、一升賭をぢや、此度ペロリとやつて、そいつに勝たれてしまふんで、誰でも相手にしねえていふ位、評判になつてゐる男があるんだ』
『可笑いな、それで生きてるかい』
『何ともありやしねえ、毎日砂利場か、深川の佐賀町河岸へ荷揚に出て來るから確なものさ』
『嘘だらう、どう考へても、醤油を一升も飲みやあ死ぬ筈だ』
『だツて、現在、生き證據が居るんだから偽様があるめえ。嘘だと思つたら今度行つて、賭をやつてみるさ』
『よし此度やつてやる。なんてえ男だ、そいつあ？』
『佐賀町で、醤油賭の傳公といや、知らない者はない。だが、傳公は小さい勝負ぢや、首を振るぜ』
『一朱か二朱か』
『何しろ、その砂利場にゐる者が、十五人二十人と組んで、二兩とか三兩とか東になつて纏めなくツちや、何うしてもやらうと言はねえさうだ』
『そんな事を大きな口を叩いて、もし傳公の方が負けたら何うするんだ。まさか水揚人足や砂利場の軽子稼ぎで、一人で二兩三兩といふ金は出せまい』
『ところが、その傳公つて奴は、なかなか金を持つてるんだとよ』
『ふーむ……』
『だから誰も、ツイ退目になつて、引ッ懸るんだといふから面白いや』
『ひどい野郎だな』
みんなが笑ふのに釣込まれて、與次郎もウッカリ蒲團の中でクスクス笑つた。
『おや、居たのかおめえ』
『はい』
『いゝ若い者のくせにして、物臭え男だな。雨が霽ツたから明日は仕事にありつけら、元氣を出せよ、元氣を』

『どうも、暫く休んだせいか、顔が痛くッて……』
と左次郎は又、油氣のない前髪の頭を見せたゞけで、夜具の中へ丸まッてしまふ。
『左次さん』——そこへ、大坂格子の向ふで、銅羅龜のお内儀さんの聲がして、
『親方が呼んでるよ、ちよッと奥へ來て貰ひたいッて』

三

『お前さん、お武家の息子だね』
銅羅屋の龜さんの前に坐ると、いきなりから言はれたので、左次郎は間誤ついた樣子だつた。
『さう見えませうか』
『見えるな』
と、銅羅龜はそこで一服吸つて、煙草を包んでゐる女房の出かけて行くのを待つてゐた。
親方の米櫃も空だと見える。——左次郎はそんな事を考へながら、銅羅といふ通稱を取つたかれの菊花石を眺めてゐた。
『失禮だがお前さん、何か、敵討でも望んでゐる身上ぢやないのか』
急に、聲をひそめられて、左次郎はいよいよ慌てながら、
『飛んでもない、決して、左樣な者ぢやございません』
『だが、お侍の伜だらう』
『はい、そりやあ……』
『幾つ？　お年は』
『十九でございます』
『その青ッ白い蒲柳な體で、日傭取稼ぎはこてえませう。うちの部屋へ來てまだ二月位だらうが、たとへ二月の間にしろ、よく續いたもんだと感心する。又その辛抱は、何か希望が無ければ出來ない辛抱だとおれは思ふが……』
左次郎は蓆のチリをむしッてゐた。垢のついた仕事着にちよッ切袴、身なりはひどいが、襟元の奥が肌白く見えて、この寄子部屋では何うしても掃溜に鶴。
『ほかの事情なら何のこと、打明けても差閊えはあるまい。微な力にもならない癖に、江戸の人間の惡い性分で……どうも聞かずにゐられない』
『では親方、ほかの者には、内緒にして置いて下さいまし』
『だれが、他人になんぞ、話すものか』
『實は少し、尋ね物があつて、殿樣からお暇を戴いて來た體でございます』
『それ見ねえ、おれの眼は、やッぱり違ッて居なかつたのだ。して、國元はどちらだね』
『鳥取の池田家に仕えます者で。はい、因州です。父は納戸方で七十

石ほど頂戴してをりましたが、先頃死亡いたして、家名もそのまゝ潰れかゝッて居るやうな次第で』

『意氣地のねえ話ぢやないか、お前さんに、跡目が嗣げないのか』

『でもございませんが、實は、私の養母お咲と申す者が、六年程前に、仲間ひとりを連れて上方へ出ましたまゝ、遂々歸宅いたしません。――所がその節、同藩の重役から二百金の金を預かりまして、烏丸の某家から讓りうける約束をした元贇燒の花瓶、安南繪の壺を受け取つて來てもらひたいとの事で、序に、頼まれて出立いたしました』

『なる程』

『然るに、養母のお咲も、同行した仲間の一平といふ者も、そのまゝ鳥取へ立ち歸りませんのみか、頼りも沙汰もなく、足かけ六年打過ぎて了ひました。當惑したのは、貧困な父でして』

『さうだらうとも』

『おまけに性來病弱であつた爲、それを苦患にして、幾分天壽を早めたかと思はれます』

『で、その金の方も、安南繪の壺とかも、未に話のかたが付かねえといふ理かい』

『一方の方は父の上役故、きびしい御催促もなさいませんが、何せい、家中では兎角な評判が立つてしまひ、又、元贇の安南繪の壺も、前に一度殿樣のお耳に入れてあつて、ぜひ見せいといふ仰せのあつた品物故、今さら、養母がそれを持たずに手ぶらでは歸れぬ事になつて居ります』

『ふーむ、成程、厄介な筋だな。それぢやお前さんも、容易と跡目願ひも出されまい』

『まつたく、私こそ、實に困つて了ひました。實の母なら氣心も分りませうが、何しろ、十二三の時に、たつた二年程しか、一緒に居なかつた義母なんで』

『家中の評判ッていふのは、何んな事を言ひ立てゝ居るのか、お前さんも小耳に挾んで居なさるだらうが』

『それが……』と、左次郎は急に口籠つて、赤らめた顏で俯向けながら、

『お咲殿が歸るわけはない、以前から、仲間の一平とは、主從以上に親しかつたから――と言ふ風に申します。父の病氣も永年のこと故、そんな噂が立つのも道理かと思はれます』

『ウム、ウム、大きに』

と、銅鑼龜親方の世事に馴れた考へも、それと一致したものか、二ツばかり頷いて、

『で、左次さんが、國元を出て來たのは』

『何でも、この江戸表に居るといふ噂があるもんですから』

『男女か？』

『左樣でございます』

『併し、六年も過ぎて、尋ね出した所で、安南繪の壺を持歩いてゐるわ

けも無からうし、金も無えと來たひには、何うにもならない譯だらうぜ』

『武士ッてうるさいものでして、家中の者達は、左次郎も十九にもなれば、父の怨みを晴らすだらうとか、不德な義母をあのまゝにして置く法はないなど〻申します。又、緣類の者は、所詮、二百金の大枚を御返却することは出來ぬし、又殿樣のお耳にも這入つてゐる品物の事だから、その金を手に入れる法がなければ、せめて、仲間の一平の首だけでも持つて鳥取へ歸つてくれと、かう因果をふくめられました。——で、江戶表へ出て參りましたが、もう路銀も盡きました上に、義母のお咲と一平が、どこに暮して居るものか、皆目、見當はつきませず、途方にくれた末親方の部屋でお世話になる樣な事になりました』

『さうか、ぢや二百兩もする安南絹の金よりも、その一平といふ奴の首を探して歸つた方が、侍らしいし、第一、無代だから手に入れ易いといふものだ』

『所が、生憎なんです』

『何が生憎だ』

『父が弱かつた故か、私も御覽の通りた虛弱でして、所詮、左樣なことが出來るか何うかと、心配に絕えませんので』

『おい〱左次さん、七十石の小祿でも、侍の息子ぢやねえか。確乎おしよ確乎。膽が弱いと思つたら、田舍を稼いでゐるうちに、ウンと天秤棒で鍛へてをくさ。相手が腕利きの浪人とか何とかぢや、少し困るが、なアにおめえ、元仲間をしてゐた男だつていふなら、どんな頑丈だつて多寡の知れたもんだ。居所の分つた時は、おれも助を貸してやる』

御新造の姐さんは乘氣になつた。

梅雨も霽りさうなので、明日の仕事を見越し部屋から歸つて來た內儀さんに、酒を買はせた。

濕氣拂ひを飮んで、鮪の雜魚寢のやうに轉寢になつた若手部屋の隅ッこで、左次郎だけはマジ〱と目を開いてゐた。

そして、寢入つたかと思ふと、何か頻りに、囈言を言つてゐた。

四

部屋で一番元氣者の三公が悄れてゐた。

何日、稼ぎに出て居ながら、湯にも行かず飯の立食にも出かけず、粉煙草をへタいて、塞ぎこんでゐる。

『おい、何うしたい』

兄や由造が訊くと、漸々白狀した。

『奴は、やられちまッたんだ』

『やられたつて、何をよ』

『佛公と醬油樽をして、この間の前借を、みんなアッパッパにしてしまつた』

『こん畜生』

背中をどやしつけて――

「人に默つて、抜け駆を爲樣とするから、そんな目に遭やがるんだ。ざま見やがれ」

と笑つて、兄弟分のために、奉加帳を廻した。

それで、當座の煙草錢が出來たので、三公はすツかり元氣が恢復して、太平樂にその晩、與太物語でから話した。

「一昨日、深川の帳場で、例の傳公と一緒になつた。止しやあい、のに、晝休みに、オイ傳公、一升五合飲むなら二兩賭をしてやらうと言ひ出しやアがつた。すると傳の野郎、フンていふ樣な面をして、一升五合なら五兩賭でなくつちや嫌だと吐かしやがる。そこで、一升三合で折れ合つて、初まることに初まつたが、二兩と來ちや大企なんで、此方組の頭數が足らなくなつた。そこで、おれもツイ誘ひ込まれたといふ理さ」

「そして何うしたい、傳公は」

「いつもより三合も多い醤油を、丼に入れて、ツウときれいに吸つてしまつて、今日は二兩の日當になつたから、左樣なら――とか何とか、涼しい事を吐かして、半日で歸つてしまつた」

「忌々しい野郎だな」

「聞いたゞけでも忌々しいだらう。だもの、おれの身になつてくれ、口惜しくツて、寢つかれねえ」

「もう止せよ、これに懲て」

「意地だ、こんだあ一升五合賭をやつて、あいつに血へどを吐かしてやらなくツこちや虫が納まらねえ」

「だが、不思議だなあ」

もう寢たのかと思つてゐた由造が、突然、尻ツ尾の方で唸つてゐる。

「勝負は兎に角、それで生きてるつて言ふのが餘つ程不思議だよ、何しろそいつけ、たゞの人間ぢやねえぜ」

それ以來左次郎は、醤油賭の話ばかり耳にしてゐた。で、方々へ仕事に出る度に、それとなく傳公の姿を物色する程になつてゐたが、まだ、一度も見かけたことはない。

潮町の砂利場へ廻されて來た日だつた。

こゝの仕事は荒ツぽいので、日傭でも肩肉を盛り上つてるのが揃つてゐる。

で、常に仕事先を庇つてゐる鉋親方が、左次郎だけは、わざとこゝへ廻さないやうにしてゐたが、ほかの出先が途切れたので、暫く辛抱してくれと言ふ話だつた。

二の丸のお城普請へ行く玉川砂利をこの河岸で上げる。

小普請の役人が、床几に掛つて見張つてゐた。

砂利場使ひのパイスケで二百本出が一人前の仕事。舟から河岸へ一荷ごとに擔いでゆく度、小頭から竹篦一本づゝ渡されて、それが夕方の勘定高になる。

肩のいゝのは一人半も串數を稼ぐ。
嘘ッこきといふ帳場だから、みんなわき目もふらない。
汗をタク／＼絞つて、砂利の音、足どり、掛聲、すべて一種の調子に乘つてくる。
『どち奴！　何をしてやがるッ』
陸の砂利山で、突然、荒ッぽい聲がした。
『なんだ此奴は。先刻から人の鼻ッ先にヒヨロ／＼してやがつて、後が閊えてしやうがねえ』
『どうも濟みません、不馴れなのですから』
左次郎は鼻で息をしながら、青白くなつてゐた。
『ばか！　馴れねえと承知してゐたら、こんな帳場へ憶面もなく稼ぎに來るな。どこの馬の骨だ、てめえは』
『銅羅屋の龜さんの家に居ります』
『銅羅龜の部屋にも、てめえの樣な意氣地なしが居るのか。明日は、米の飯を食ッて來るんだぞ』
朝の二刻ばかりで、すッかり肩の皮が剝け、ヒリ／＼と熱を持つて來た。かれは、汗を拭くやうに見せて、始終淚をこすつてゐた。
充分氣をつけてゐたつもりだが、何しろ、二刻もつゞくと、腰の骨が持ち耐えられなくなつて、また誰かの足元へ、ドサッと、天秤を落としてしまつた。
ハッと思ふと、途端に、
『ヒヨロ蛙め！』
と、左次郎は、砂利場の桝から下へ蹴飛ばされてゐた。
すると、それを見た一人の男が、左次郎を蹴つて行つた輕子のうしろへ呶鳴りつけた。
『やい！　やい！　大人氣もねえ眞似をするないッ。前髮ぢやねえか、少しや庇ッてやるもんだ』
男もやはり砂利場の仲間だつた。
腰をさすッて、ぼんやりしてゐる左次郎の側へ寄つて來て、
『おい前髮の兄ンちやん、おれが介添してやるから、氣を落とさずに稼ぎねえ。それに、パイスケの繩をさう詰てしまふから餘計に足の調子が取れやしねえ。どれ、直してやるから持つておいで』
と、自分の天秤を肩から投げた。

五

男は親切に、それから絕えず、左次郎のうしろに尾いた。
天秤を前寄に肩へ當てゝ、後荷の繩の一端をうしろの男に持つて貰つたから、左次郎は前よりも樂になり、足の調子もよく／＼とれた。
『お蔭で、今度は樂になりました』
晝飯の時、そばへ寄つて、改めて禮をのべると、
『まだ、そんな肩をして居ちや、砂利場の仕事は無理だからな』
と、男は三人前もある辨當箱を抱へて、うまさうに頰張つてゐた。

弁當箱も大きいが、男の格好もすばらしい筋肉で出來上ッてゐた。硬緊りに肥えて、骨太で、上背丈がある。年頃は二十二三といふ見當。

左次郎は、この男のザラ〳〵した毛脛も、日に焼けた皮膚も、光る目も、すべて親切氣に富んだ特質のやうに見えて、一ぺんに親しくなつた。

話、話してゐるうちに、どこか因州訛りのある男のことばも、一時、この奇遇と他郷にあるかれの心に、或る懐しさを起させた。

ふと、吸つてゐる煙草入を見ると、それも鳥取の古市で名産としてゐる漆塗細工なので、

『もしも、貴女は鳥取ぢやありませんか』

男は、砂利の中へ落としてゐた火玉を煙管で掻き分てゐたが、ひよいと、横に顔を上げて――

『なぜ？』

『でも、古市の漆塗を持つておいでゞすから』

『ウ、これが……』と、煙草入を見直して、『こりや、四五年前に、誰かの土産に貰つたのよ。……するとおめえは、鳥取かい？』

『いゝえ』

左次郎は自分が訊ね出したことに慌てゝ、

『私も鳥取ではございませんが……』

少し男の機嫌が悪い樣に見えたので、その話はそれなりにして、口を緘んだ。

だが、午過の仕事にも、かれの親切氣は變りがない。

何かに、面倒を見通してくれた。

夕方も、

『おい、おれの分を少しやるから、勘定場へ持つてゆきねえ』

と、自分の竹箆を減らして、數の少ない左次郎の分へ足してくれる。

辛い仕事場が、左次郎には、一日毎に樂しみになつた。朝、砂利場の河岸で、男の雄大な體軀を見るのが、かれの其の日を心強くする上に、無くてならない物になつた。

そんな風に、左次郎の心に少し餘裕がついて來て、ちようど十日目頃。

何時も、部屋は三筋町なので、大川端から新堀を一本道に歸るのだが、親方の言付を頼まれて本所の同職の家へ廻り、少し遅くなつて、業平橋の闇が狭く水をつゝんでゐる掘下水の邊まで來ると――

『もし……』

と低い聲で、誰か呼んだ。

白粉の濃い女である。

白い手が、柳の影で、招いてゐた。

左次郎はオド〳〵しながら、恰度、人通りがないので、後へ戻つ

た。この邊に、夜鷹が出るといふことや、夜鷹の相場や、夜の女の様種な戯れ話は、いつも部屋の者が話すのを、聞かない振をしつゝ或る好奇心が熱心に覺えてゐた

『ね………』

夜鷹は鼠鳴きをして、

『ね………ちよいと』

ニツと、淫らな笑みを向けた。

年増らしいが、痩ぎすで、飢えと好奇の目には、あざやかに美い女

——

左次郎は、砂利を擔いで居るよりも、ひどい動悸をさせながら、

『い、いくら？………』

と、乾いた聲で、女の方へ吸ひつけられて行つたが、何かの途端に、

『あつ！』

と言ふと、すべての意識を押つぼり出して、一目散に逃げてしまつた。

役人でも來たのかと、傍づゑを食つて驚いた夜鷹も、それと共に手拭を啣へながら、ウロ〳〵と近くの露路へ駈け込んだ。

六

どう無理工面をしたのか、銅鑼部屋の連中が、五兩といふ金をそろへて、腕拱みをしてゐた。

そこへ、左次郎が歸つてくると、

『おい、待つて居たんだ』

と、すぐに三公が調子づいて、

『おめえもこの頭割に這入つてゐるんだから、そのつもりで居な』

『な、なんですか、それは』

『馬鹿に息を喘いてるぢやねえか、何うしたんだ』

『遅くなつたので、少し馳けて來たんです』

『そんな事あ、まア何ッ方でもいゝや。此方だけ承知しといてくれねえと困るからな。』

と、由造が中へ割つて、

『みんなの日當もおめえの手間も、七人分だけ、引ッくるめて、今夜無理に親分から前借した譯だ。金はこゝに有る、見て置いてくれ』

『どうなさるのです、それを』

『部屋の交際だと思ひねえ。』

『それは宜しうございますが……』

『明日から七日だけ、おれ達も、砂利場へ仕事に行くことになつた。所で三公の奴が、どうしても癪で堪らねえから、もう一度、醤油賭をするッて言ふんだ。それへ、みんなで半肩乗つた理だから、勝てば、倍になつて返つてくる。その代り、取られても泣言をこぼしちゃ困るぜ』

賽引賭の賑いせいに熱してゐる仲間の話も、かれには何の興味もない。

よい程に聞いて、蒲團を被つた。

そして、夜具の中でジッと目をつぶりながら、昨刻の夜鷹の顔を思ひ浮かべた。だが、あの瞬間に強く襲はれた白粉の顔も、もう種々な疑惑に掻き亂されて、纏まりもつかない印象となつてゐる。

『まさか！』

と、彼は無理に心を落着けようとして、

『……人違ひだ、氣のせいだ……いくら何でも、まさか養母が夜鷹などに』

と、心で叫んだ。

併し、その一方では、又すぐに、

『だが、よく似て居た。白粉こそ濃く、六年の前より若く見えたけれど……』

七

漸々その晩は、お咲のことや、安南綿の簪のことや、亡父の臨終のことなどを考へ出してマンジリとも眠れなかつた。

で、翌朝。

『少し、風邪を引いたあんばいですから、今日だけ一日、休ませて貰ひます』

親方に言つて、また一日蓑虫のやうにくるまツて了つた。

ゾロ〳〵部屋の者が出拂つたあとで、親方の銅鑼屋の姐さんも、中風の身を悶して珍しく何處かへ出て行つた。

左次郎は何にも邪げられずに、好きた事を考へて居られた。もし又母のお咲が江戸に居たツて、相應でゐる氣遣ひはなし、仲間の一平と往來で出會つても、討つ力がないことは、自分にも分つてゐる。

と言つて、叔父の手前、申し譯ばかりにこんな事をして居ても、尚さら自分の身が立たない。

『江戸から姿を隱して、叔父にも鳥取の者にも、一生會はないことにしよう』

かう考へたりした。

併し、賽引賭のまきぞえを食つて、七日分の日傭賃も親方から借出されてしまつてある。當座の小遣だけでも持たずには、まさか、この裸一貫で、何處へ行つて何を爲ようもない。

こんな引つ込思案は、左次郎の持前だつた。

さう斯うするうちに、日が暮れると、今日から砂利場へ出かけた連中がゾロ〳〵と歸つて來たが、みんなグンニヤリして、碌そツぽ口數もきかない。

『おれも明日から、左次公と一緒に風邪ツぴきになるよ。もう、働くのは嫌になつた』

と、誰かゞ、たつた一度、大きな聲で言つたきり、みんな脚氣の様

に足を伸ばして、湯に行かうと先に立つ者もない。

そこへ、親方がのッそりと歸つて來て、

『話がある、みんな、圓くなれ』

と、どつかり坐つた。

菊花石の顏を少し險しくして、電光りのやうに、頬りと右の眼を瞬めてゐる樣子。

お出なすつたぜ——といふ風に、一同、元氣なく膝を直したが、左次郎だけは起なかつた。卒寢入でなく、ほんとにその氣になつて、彼はヤツとトロ〳〵した風だつた。

『なんですか、親方』

『てめえ達や、今日、取られて來たな』

のつけに醬油賭の敗北を言ひ中てられて、ガンと、鐵槌を食つたやうに、

『へい』

と六人共、悄氣た首を垂れてしまつた。

『馬鹿に大人しいぢやねえか。取られてベソを掻く位なら博奕をするな』

『へい……怖れ入りました』

『何も怖れ入る事はねえ、ほんとだ、博奕をやる位な量見のくせに、取られたからッて、餌乾になつたキリ〳〵スみてえに、いやにひッそりして齒軋りを噛んでる奴があるものか』

『もう、懲ました。口惜しくッて堪りませんか、もう諦めます』

『意氣地のねえことを言ふな。明日——と言つちや少し早いが、四五日置いてもう一番やつて見ろ』

『え？……』

『おれが屹度勝たしてやる』

『まッたくですか親方』

みんなが息を吹ッ返したやうに、

『ぢや親方、すみませんが、今度は、あつし等の敵を抵當に、十兩ばかり工面しておくんなさい。そして、野郎に嫌が應でも二升五合飲で果し合を申し込んで、此ッ方が飢え死するか、佛公の奴が血ヘドを吐くか、最後の勝負をしてやります』

『いゝとも、質草入れても、十兩こしらへてやる』

『有難え、拜みます、親方』

『だが、今迄のやうなやり方ぢや駄目だ。』

『へえ？……やり方がありますか』

『實は今だから話すが、何でも五兩貸してくれと言ふ樣子が變だから、今日てめえ達が仕事に出たあとで、おれも一寸砂利場へ樣子を見に出掛たんだ』

『ぢや親方も、晝休みにやつてゐた醬油賭の樣子を見てゐたんで？』

『ウム、眺めてゐた、見事なもんだ、あれぢや幾ら一升飲め、一升五合飲めとかゝッた所で、半白半分に卷き上げられて了ふだらう』

『さうかなア』

『だが、おれも少しや、博奕では慾てゐる人間たし、若い時の覺えもある。あれから傳公が、仕事を半人で切上げて、涼しい顏をして歸るのを見付けたから、奴のあとを尾けて、近所隣りで少しばかり平素の行ひを洗ひ上げて來た。それで今夜は遲く歸つて來たが、その代りにや土産があるぜ……』

と言つて、銅羅屋の龜さんはさも得意氣に、顏の菊花石が一粒一粒笑ふやうにニヤ〳〵とした。

それから三日ほど經つと。

『左次さん、今日は手不足だから、嫌でも仕事に出て貰ひてえな』

と、龜親方も帳場支度で、朝早くから左次郎の枕元へ來て居た。

八

仕事先が二ツになるといふので、竹、六、勘、由、龜親方の五人は兩國から別の方にわかれ、丑、三公、左次郎の三人だけは、何時もの砂利場へ輕子に來た。

背丈が高いので、漆革の煙草入を持つたあの親切な男の姿は、すぐ左次郎の目に映つた。

左次郎がその男と馴々しくしてゐると、仕事の寸間に三公が、

『左次ツ、てめえ、あいつと懇意なのか』

と、不服さうに睨んだ。

何の氣もなく頷いて言つた。

『え丶、あんな親切な人は、見たことがありません』

『けツ、何を言ツてやがんでい！』

左次郎は蹴飛ばされるのかと思つて、飛び退いた。

本當は、部屋の者と一緒に食べなければ惡いと思つたが、その事があるので、左次郎は晝飯の辨當も、久し振な男のそばへ持つて來てムシャ〳〵やつてゐた。

すると、丑と三公が、飯を嚙み〳〵意氣込んで來て、

『さ、傳公、二分五合賭で來い』

と、腕捲りをして前へ立つた。

『傳公ツて？……』

左次郎はヒョイと男の顏を偸み見た。

例の漆革の煙草入を指に挾んで、ふーツとその面へ煙を吐いた男は、クス〳〵ツと肩で笑ひながら、

『まア、今日は止さうよ』

『逃げ張るねい、この間何と言つた、五兩賭でも十兩賭でもしてやるが、砂利場中の者の金を寄せても、それだけは纏まるまいと吐かしたらう』

『賭に意恨なしだぜ、取られたからツて吠えるなよ』

『な、何を吐かしやアがる。憚り乍ら、五兩やそこらの目腐れ金を、取つたツて取られたツて、それでお天氣の變る男ぢやねえんだ』

『ほう……景氣だの』
『かうなりや意地だ、てめえが血へドを吐くか、俺達が飢え死するかだ。さ、こい！』
『いけないよ、お斷りだよ』
『いけねえ？　なぜ不可ねえ？』
『何故ッて、錢無しが二人ばかり、幾ら肩を聳やかしたッて、相手になりやしねえぢやねえか。醤油賭は命がけだぜ、晝休みの茶番ぢやねえんだから、二升五合賭なんて大口を叩くなら、金主を見つけて出直して來い』
『こん畜生』
三公は眞ッ赤になつて、兩手をふところに押し込んだ。
倶利加羅紋々でも見せるのかと思ふと、グッと懷を押つて、
『その口を忘れるなよ、梅忠ぢやねえけれど、實金ぢやねえから目をつぶすな』
と、親方から工面して貰つて來た小判十枚、傳公の前に叩きつけた。

九

左次郎は氣をのまれてウロ〳〵した。
自分に親切な男が、醤油賭の傳公だつた。
それが傳公であつたにしろ、左次郎が好意を持つてゐることに少しも變りはない。むしろ、三公のキザな科白が小憎らしく聞えた。
だが──又直ぐ始まる！　と其處へワラ〳〵寄つて來た砂利場の連中は、みんな一度は傳公にせしめられてゐる組なので、三公の梅忠もどきの啖呵に手を叩いて氣勢を添える。
傳公は口を結んで、砂利山にぬッと立つた。
『よし、賭てやる』
『てめえも見せろ、正金で十兩、有るか』
『ふん……』
煙草入から十兩出して、
『粉だけまけてやら。さ、支度をして來い』
『二升八合だぞ』
退ッぴき出來ない樣にして置いて、丑がそこで、また約束より三合増しを掛けた。
『いゝとも』
傳公は怯まなかつた。
立派だ、侍が果し合をするやうだ──と左次郎は感心して、かれの堂々とした體軀に見とれてゐた。
すぐ酒屋へ飛んで行ッた者がある。丼を探して來る奴がある。知らない者をワザ〳〵呼び立てる者がある。そんな騒ぎに、小普請小屋の役人や、川番所の番太郎まで、何事かと、この人輪へ馳け集まる。
『おれが、可しといふまで、注いぢやいけねえぞ』

傳公は少し居場所をかへて、大谷代を二ツ重ねた上へ、悠々と腰を下ろした。

そして暫く大川を睨んでゐた。

さすがに、この間は、彌次を言ふ者もなく、初めのうちは、

「無智にも程が有つたもの、あんな馬鹿な眞似をして、何が面白いのか」

と苦笑してゐた役人達の顏までが、妙に引緊つて來て、目瞬きもしない。

『さ、注いでくれ』

言つたかと思ふと、傳公の顏は、もう大きな丼に隱れてゐた。

ガボ、ガボ、と眞ッ黑な液體が腹の中へ波を打つて流れ込んで行く樣は、理屈を考へる遑なく、たゞ、驚目を睜らせてしまつた。

『お陰樣で、また今日も半日遊ばして貰えたな。ぢや十兩は貰つてゆくぜ』

と、傳公は煙草入へ二十兩の金を詰込んで、まだ呆ッ氣に取られてゐる周りの者へ、

『あばよ』

と、人のいゝ顏を作つて笑つた。

十

傳公は世帯を持つてゐた。

家は細螺の貝殼を踏みつけた棕櫚際の露路にあつた。

大川を向ふへ越えて、渡舟を上つた途端から、傳公の擧動が少し違つて來た。どうも先刻の悠々然たる傳公とは調子が違ふ。

そゝくさと、一本道に自分の家へ歸つて來る。

女氣はあるらしいが、留守と見えて、そこらに、ふだん着の長襦袢が見えるばかり。

かれは上ると直に仕事着を脱ぎ捨た。そして、引ツかけ浴衣に手拭一本ぶら下げると、大股に横丁を出て、何の錢湯へ急いで來たが、戸に手を掛て見ると、ガタッと鳴つただけで、開かない。

『おや……』

と、氣がついて見ると、千鳥湯といふ、いつも潜る暖簾が外してあつたので、

『あつ……休みか』

彈かれたやうに、そこを出て、次の風呂屋へ飛んで行つた。

所が、そこの暖簾も仕舞つてあつて、盲目格子がシーンと閉まつてゐる。

いゝ、いなせ者が多い深川のことだ。晝や朝湯がから休みの筈はない。かれは、その裏通りの喜撰湯を思ひ出して、一目散に駈け出した。

『休みだ！』

傳公は狼狽した。

血相をかへて、風呂屋の戸をガン／＼と叩きながら、何か大聲で呶

鳴つてゐたが、カランといふ小桶の音も聞こえない。

『ちえッ』と、かれは地團太ふんで、さらに奔馬のやうな勢で往來へ出た。もう思ひ出す湯はこの近くに小町湯とお豐風呂二軒しかなかつた。

『やッ、休みだ！』

唾を吐きかける樣に叫んで、次の一軒へ來てみると、こゝも又、申し合せたやうな休業札。

『今日は幾日だらう』

傳公はクラ〳〵する頭を押へながら考へてみた。休み日ぢやない！風呂屋の休み日にしろ、かう揃つて、何處も彼處も休みといふ筈がない

それから傳公は、氣狂ひのやうになつて、湯屋湯屋と血眼で探して歩いたが、もう目眩と嘔吐氣に堪らなくなつたらしく、兩手で頭を押へたまゝ、眞ッ青になつて、自分の家へ轉げ込むや否、

『ウ――ム！……』

と弓絃を張られたやうに身を反らして、柱の根元へ獅噛みついた。

十一

『野郎、今日ばかりは、餘ッぽど慌てやがつたやうです』

蛤鍋屋の奥で、町内の顏役が笑つてゐた。

『どうも、有難う存じました。お蔭樣で仕返しをしてやる事が出來たといふもんで』

銅羅屋の鉦さん以下、四人の者が、そこで揃つて禮をのべた。

今日の風呂屋の休業は、この連中の口きゝだつた。無論、それを頼み込んだのは、鉦さん方。

なぜ、風呂屋へ目をつけたかといふと、傳公が蛇油賭をした時は、乾度、半日で仕事をやめて歸る事と、すぐに必ず近くの錢湯へ行くことを聞き出したからであつた。

で、その錢湯のおやぢに聞くと、

『はゝあ……』と、頷けた顏をして、

『家でも、度々と言ひ合つて居たんです。何しろ傳さんが飛び込んで來て、ウームと熱い湯に永いこと浸つてゐると、あとの湯が妙によごれて、おまけにすッかり脂ッぽく成つちまうんです。――え、蛇油賭をするんですッて、なる程』

と、その効能を說いて、更に言ふには、

『蛇を食ふ山國の者は知つてゐませうよ。たとへば、蝮蛇の味噌漬なんかを酷く食べ過た時、熱い湯に這入つて、ウンと怺へてをりますと、全身の毛穴からみんな強い精分や脂氣はみんな絞り出されてしまふものです。その筋でさ、そこから思ひついた藝當に違ひありません。萬八の大食會で一升も飲まない人が死んだといふ話を聞いた時、私は、江戸の人間は案外智恵なしだと思つて居りましたよ』

から聞いたので、銅羅鉦さんは、しめたと、町內の顏役から、ほんの二刻ばかり、風呂屋總休みの交渉をやつて貰つた譯である。

でー賑やかに、そこで一杯飲んでゐると、
「大變です、傳公が血を吐いて、死んださうです」
と、知らせに來た者がある。
まさか、死ぬ程の事にはなるまいと思つて居たので、
「えつ！」と、色を變へて總立ちになつた。
「死んだとなると、こいつはア檢死が面倒だ、とに角、拋ッちやあ置けねえ」
今さら驚いて、顏役と親方だけが、例の蛞蝓をザク〳〵踏みしめる露路の奧を訪れた。
見窄らしい、汗と垢によごれのした女が、傳公の死骸にすがつて泣いてゐた。
自業自得とは言ひながら、氣の毒になつて、だん〳〵事情を聞き取つてみると、洞羅屋さんの龜さんは吃驚した——その女が、前々話を聞いてゐた、左次郎の許嫁にあたるお咲だつた。
すると、もしや——と思つたので、男の方を聞いてみると、醬油賣の傳公といふのは江戸へ來てからの變名で、元は左次郎の父に仕えてゐた仲間の一平。
だが、一平は、醬油賣をやり初めてから、すッかり、昔と體質や容貌まで變つてしまつたといふから、左次郎には氣が附かなかつたものと見える。
お咲は隱しなくすべてを話した。
自分が今、廊下鳶で、恥しい夜鷹をして人の袖を曳いてゐることも。

なぜ、さう落して、男女が金のために體までを賣つたり賭たりし初めたかといふと、それは、あの犯罪の安南組の寶を求めて、どうかして、もう一度、故郷へ歸りたいといふ望みが動機だつた。
その代金として、屋敷、親元から預かつて來た金は、まつたく道中の過ちで、お咲が胡麻の蠅に掏られたのだつた。仲間の一平はそれに同情して、自分の郷里へでも行つて金の工面をしようと計つて、日を送すうち、遂に、何もかも外れて、故郷へ歸る機會を失つてしまつた。
たゞ驚いて、何百兩といふ金を貯めるのは一生かゝつても難しいことゝ、一平が悪智恵を出して、醬油賣をやるやうになつてから、お咲も、自分の體を犧牲にしてもといふ氣で夜鷹に身を落したが、實は、もう安南組の寶を求めるだけの金は、とつくに餘るほど貯まつてゐた。
だが——金の額が越えるほど貯まつてくると、こんどは、一平もお咲も、金にその執着が捨てられなくなつた。
で、まつたく、主從の隔てを破つて、夫婦になつたのは、つい去年の事だと言ふ。
その話に、嘘は無ささうであつた。
洞羅屋の龜さんは、何しろ、この奇遇を少しも早く左次郎の耳に入れてやらうと、その晩、滅多に乘らない町駕籠を飛ばして歸つた。
だが、左次郎は、今日の砂利場の職場から姿を隱したまゝ、どこへ行つたものか、銅羅部屋へは歸らなかつた。

（をはり）

凡愚列傳

長谷川如是閑

神に欺された男

『船長！ 怪しい船が見えます。』

揚子江を遡つて行くバターフヰールドの汽船のサルーンで、アイルランド人の船長が四五人の船客を相手に雜談に耽つてゐる所へ、一人の水夫が慌だしく飛び込んで來て、さう叫んだ。

一同は刎ね飛ばされたやうに立ち上つた。

が、片隅にゐた、黑の背廣を着た、瘦形の、無口な中年のイギリス人だけは立ち上らなかつた。

『土匪！ ミストル・ジヤクソン。』

と隣にゐた背の低い、ドイツ人が、隣席のイギリス人は水夫の言葉が耳に入らなかつたのではないかと察して、さう注意したが、イギリス人はたゞ首をふつたまゝ坐つてゐた。

船長も無論立ち上つたが、彼れは兩手をひろげて、

『座つてゐて下さい。』

さういつて、すぐにも駈け出さうとする一同を制して、自分は突立つたまゝ胸の所へ兩手をあて、顏を仰ほむけて、大きい目の球をくるくると回轉させながら上眼を使つて天井を見詰めた。

ミストル・ジヤクソンは、さうしてゐる船長の姿を一寸見たが、苦い顏をして傍を向いてしまつた。

『外へ出ないやうに。』

さう注意して船長は落ちついた足どりで甲板へ出て行つた。

怖いもの見たさの船客等は、窓から外を覗いたが、外はもう薄暗かつた。どす黑い水の向ふは一面の葦で、目に入る一物もなかつた。

やがて船長は、笑ひながら戻つて來た。あとから事務長が頓狂な聲で何か怒鳴りながら入つて來た。

『船長、今度は四萬テールですぜ。』

事務長はそんなことをいひながら船長の背中を叩いた。

船長は數年前に、同じこの航路で土匪に襲はれて人質にとられて二萬テールの金で買ひ戻されたのであつた。

『今度は君の番だ。』

船長はさういつた。

『私では一週テールにも跡めまい。尤も肉にすれば私の方がずつと目方がある。』

と事務長は細長い船長を見上げながら、自分の丸く肥えた身體をゆすつて笑つた。

『何でもなかつたのですか？』

一人の船客は、恐ろしい遍路をして來たやうな恰好で椅子に倒れながらさういつた。

『え〻、民船です。水夫達が臆病になつてゐるものですから。』

船長はさういつて椅子にかけた。

『でも船長はさつきお祈りをあげてゐましたね。』

若いドイツ人は皮肉らしくさういつた。

『習慣でね。』

船長は辯解らしく、然し、眞面目な顏をしてさういつた。

『船長は人質にとられてから非常に信仰家になつたのです。元來あまり教會の御厄介になつた方ではありませんでしたがね。』

事務長はさういつて笑つた。

『命がけの經驗をもつたものは信仰家になります。眞劍になれば誰れでも神を見ます。』

船長はやはり眞面目にさういつた。

『それほど人質の生活といふものは退屈なものです。』

事務長はまた混ぜ返した。

『退屈？』船長は訝いて『それは恐ろしい退屈だ。あらゆる生活を奪はれた退屈だ。そこには退屈の世界があるのではなく、世界のない退屈があるのだ。何もないのだ。たゞの灰色だ。さういふ退屈に投げ込まれたものでなければ神を見ることは出來ない。そこでは、神の外に見えるものは何もないのだ。』

船長が沈んだ口調でそんなことをいひ出したので、事務長も同情したやうな顏で聽いてゐる外はなかつた。

『地上に於ける意味で『救はれる』といふことは全く不可能なのだからね。』船長はつゞけた『私を救はうとして土匪を攻撃するものがあれば、私の首はすぐと切り取られてしまはなければならない。私を救ひ得るものは神の外には誰れもゐなかつたのだ。』

『あなたを救ひ出すために單身土匪の群に入つて行つた、あの勇敢な宣教師のリツプスさんもさういつてゐました。』船客のうちの一番年若らしい一人がいつた。『彼れは、ちつとも恐ろしい土匪の群に入つて行くといふ感じがしなかつたさうです。さうでなかつたら、彼れは決してあなたを救ふ仕事をする氣にはならなかつたらうといつてゐました。あれは全く神がしたことで自分のしたことでないと彼れがいつたのは全くほんとうです。』

『さうです。リツプスさんはそのことを神の御聲で聽いたといつて居

られました。』

船長は今更らながら感謝の念を禁じ得ないやうな頗る敬虔な態度でそれをいつた。

事務長も改宗したやうな態度でいつた。

『さうでした。ウワブスさんは、あの危險な仕事を仕遂げた時に、「神は決して私達を欺かなかつた」といつてゐました。』

船客等は何づれも感謝の祈りを捧げるやうな態度で頷いた。

『神は決して欺かない。神は決して欺かない。』

年嵩の船客は、さう繰り返して仔細らしく首をふつた。

『私の友人に、神に欺かれた男がゐる。』

まるでひとり言のやうにさういつたのは無口のジヤクソンであつた。一同は云ひ合せたやうに彼れの顏を見た。

けれどもジヤクソンはそれきり何にもいはなかつた。

『神に欺かれた？　それは一體何ういふことです？』

年嵩の船客は、ひらき直つて、詰るやうにさういつた。

『たゞさういふ男があつたといふことです。』

ジヤクソンはぶつきら棒にそれだけいつて外方を向いた

『あり得べからざることです。』

船長は、老人を慰めるやうにさういつて、ジヤクソンに向つて

『その人はどんな勘違ひをされたのです？

『勘違ひですつて、その男はさうはいつてゐませんでした。』

『無論、本人は勘違ひとはいふまい。』船長はいつた『があなたにはそれがどんな勘違ひだかわかつてゐるのでせう？』

『わかつてゐないのです。勘違か何うかも私にはわかつてゐません。』

『勘違ひでなくて、神に欺かれたといふやうな無茶なことが考へられますかい！』

老人は多少焦れ氣持でさういつた。

『私はたゞ、その男が確かにさう考へたといふことをいつてゐるのです。』

ジヤクソンはそれを固執する。

『だから私はそれが勘違ひだといつてゐるのです。』

老人も固執する。

『然し、先づその男の神に欺かれたといふ事情を聽かうぢやないか？』

ドイツ人がさういつて仲裁した。

『それは面白ろ相だ』

事務長がいつた。

『ちつとも面白ろいことではありません。』

ジヤクソンは、全くつまらな相にさういつた。

『まあ然し差支なかつたら聽かして下さい、ミスター・ジヤクソン。』

とドイツ人のいふ尻について一同もジヤクソンを促した。

『それは私の同郷の友人でした。』

ジヤクソンは重々しい口調で語り出した。

『彼は恐ろしい信仰家でした。バイブルそのものゝやうな男でした。その筈です。彼れは物心を覺えてから、たゞキリストの言葉の外、此世界に信ずべきものはないことを教へられて來たのです。恐らくあなた方も皆さう教へられて來たでせうが、あなた方は、その教へに反いて、キリストの言葉以外に多くの信ずべきものゝあることを知つてゐるといふ罪を冒してゐるのです。然るに彼れはついにキリストの言葉以外に信ずべきものゝあることを知る機會を與へられなかつたのです。彼れからその機會を奪ふためにあらゆる努力が拂はれたのです。さうしてそれが酬ゐられたのでした。彼れはさういふ風にして、立派な牧師に育て上げられたのです。それは殆んど彼れ自身が知らぬ間にさうされたといつていゝでせう。それが神の思召であつた以上、彼れはそれを何うすることも出來ませんでした。

『彼れの生涯の第一歩が、神の思召で決定された以上は、それから先きも當然、すべてが神の思召で、彼れは彼れの生涯に於て、彼れ自身が決定すべき何物ももつてゐないといふ運命に置かれたのでした。』

『誰れだつてさうではないですか？』

と船長は口を入れた。

『無論、彼れが特にさうであることを高調する必要はない。』

老人も船長の言葉に合槌をうつた。

『神學的には』とジヤクソンは皮肉に笑つて、『あなた方もさうでせう。然し、あなた方は反則だらけです。これに反して、私の友人は反則を行ふ能力を奪れてゐたのです。彼れは神の思召の外に一歩も出ることが出來ない男として成長したのです。實際彼れにとつては、すべての人間的のもの、すべての地上的のものは罪惡でした。いいえ、それを彼れ自身の意志に基けた時にはすべてが罪惡となるのです。だから彼れにとつては、神の思召を人間に傳へるといふことの外に、彼れ自身で思ひ立つことの出來る仕事は何もありませんでした。このことだけは、彼れ自身の意志でやつても罪惡でないと彼れにも考へられました。何となれば神の思召の外のことを思ひ立つ能力を全く奪はれた彼れの思ひ立つたことだから、それは當然神の意志であつて、彼れ自身の意志ではないのです。で彼れは自分の郷里の近い教區の牧師になりました。その外のものに何うしてなれませう？ 所であなた方は、かういふ男が生涯の間にその教區の寺院を見棄る機會があると想像されますか？』

ジヤクソンはさういつて一同の顏を見廻した。誰れも何とも答へるものはなかつたが、ジヤクソンはその答を待つやうに言葉を途切らした。

『先づないだらうね。』

事務長は、たゞ話をつゞけさせるためにさういつた。

『所か、彼れは自分の教區どころか、自分の本國を見棄て遠いくこの極東まで出掛けることになりました。あなた方は、それが何を意味

すると思はれます？」

「無論、神の思召です。」

　老人は即座にそれに應じた。

「さうです。神の意志は彼れを、この支那に送ることでした。極東の未開國民に神の言葉を傳へるといふのが彼れの使命でした。彼れは全くその使命を感じました。さうして、たゞそれだけを感じたのでした。彼れは憐むべき偶像信者たる支那の人民をキリストの言葉によつて悔い改めしめるといふ事の外全く何も考へないのでした。」

「神の思召も全くそれだけだ。」

　と老人はいつた。

「神の思召は全くそれだけでせう。然し、」彼れはつゞけた、「人間の思召は決してそれだけではありません。而して人間は私の友人だけではありません。彼れは無數の人間のうちのたつた一人で、しかも彼れ以外の人間を彼れに從屬させてゐるのではなく、その正反對に、彼れが外の人間に從屬してゐるのです。從つて彼れは、彼れ以外の人間を離れて何事も意志することは出來ません。彼れには神の思召以外のことを意志する能力がないと同時に、より以上に、外の人間の意志することを全く離れて意志する能力もないのです。神の意志にのみ從つてゐると信じてゐる彼れは、その實、より以上に、彼れの從屬してゐる人間の意志に從つてゐるのです。キリストの教を支那人に教へる。そんな大仕事を、イギリスの片田舍の小さな教會の牧師が、何うして思ひ立つのでせう？」

「だからそれが神の思召なのだ。」

　老人はいつた。

「同時に人間の思召です。然し、」彼れはつゞけた「彼れがそれを思ひ立つた時は、全く神の意志だけだと信じたのです。彼れはさつきの御話しのリップスさんのやうに、それを神の聲として自分の耳で聽いたでせう。然し、彼れには、キリストのやうに、海を徒で渉つたり、パンを手品のやうに空中からとつたりする能力はありません。支那に行くには旅費も入り、支那でキリストの教を說くには莫大な費用が入ります。神は、彼れにその意志を與へるが費用までは與へません。彼れがその莫大な費用を得たのは、神からではなく人間からでした。即ちそれは彼れが人間の意志に從屬して働いてゐるためです。」

「然しそれを與へる人間はやつぱり神の意志に從つたわけだ。」

　と老人はいつた。

「彼れもさうとしか考へませんでした。」彼れはつゞけた「そこで彼れは支那に來て、キリストの言葉を傳へるために命がけで働きました。無論それは支那に來てゐるすべての宣教師のしてゐることで彼れ一人がさうであつたといふわけではありませんが、然し、彼れほど純粹に、その仕事がたゞ全く神の思召であるといふことを信じ切つてゐたものは澤山ないと思ひます。多くの宣教師は、より多く彼等の背後にある人間の、また自分達の、意志を感じてゐました。あるものはたゞ

それだけを感じてゐました。これに反して彼に於ては、自分の意志や人間の意志やは全く彼れの心境から追ひやられて、少しでもそれが彼れの心にふれた時には、彼れは大きい罪を冒してゐることを感じたのでした。所がかういふ彼れの生涯も一大變化を蒙らねばならない時機に到達しました。』

さう云つて彼れは、それが何事を意味するかを一同に考へさせるやうに、言葉を途切らせた。

『それは何ういふことです？』

誰れかゞ訊ねた。

『すべての人が必ず一度は經驗することですが……』

彼は答へた。

『原罪？』

事務長は即座に應じた。

『さうです。彼れは北京の彼れの教會に隣してゐるイギリスの商人の娘と戀に陷ちました。その邊のいきさつは私は彼れから詳しく聽いてゐないのでお話しは出來ないが、とにかく、それは彼れには神の思召であつたのでせう。二人はやがて結婚しました。無論、二人は幸福でした。殊に、それまでは單にバイブルそのものであつた彼れは、更らに幸福そのものでもありました。』

『それが何んで彼れにとつて一大變化なのです？』

と事務長はいつた。

『その時既に神の思召に變化があつたのですが、神はすこしでもそれを彼れに知らせなかつたのです。』彼れはつゞけた。『二人は無論神の思召で結婚したと信じてゐたのでした。殊に彼れは、さう信じてゐなかつたら決して結婚なんかはしなかつたでせう。然るに、彼れの妻は、結婚後三年目に、例の拳匪の亂で殺ろされてしまつたのです。』

『無論、それも神の思召です。』

と老人はいつた。

『彼れもそれは神の思召だと信じてゐました。神の思召の變化と私がいつたのはそのことではありません。然し、その前に、彼れの妻が何うして死んだかをお話ししなければなりません。拳匪の一團が彼れの教會を襲つた時に、彼れの妻の外に、三人のイギリス人が殺ろされました。その時の恐ろしい光景を彼れは決して忘れることは出來ないといつてゐたが、彼れはそれを人に話すことも恐ろしいと、詳しく語ることをしませんでした。がとにかく、生き殘つた人々の間では、彼れの妻はその時殆んど不必要に死んだのだといはれました。といふのは、殺された三人のうちに大使館付の武官であつたAといふ若い大尉があつたが、教會の傍の住宅に隱れてゐた彼れの妻は、大尉が刺されたといふ報告をきくと同時に、狂氣のやうにその隱れ場所から走り出して、また暴徒の群が斃れた大尉等を圍んで犇めいてゐる眞中に飛び込んで行つたのです。妻を追ひかけて行つた彼れは、妻が恐ろしい叫び聲をあげながら暴徒の群を目がけて飛び込んだので、流石の暴徒も

拂いて道を開いたのを見ました。その間に彼女は倒れてゐる大尉の傍に駈け寄つて、彼女の身體で大尉を蔽ひました。その時、暴徒は再び二人の周圍に集つて來て、彼れは最早何も見ることは出來ませんでした。

『それは全く恐しい光景でした。然し彼れはその恐ろしい光景よりも、もつと深い印象を彼れに與へたものを見たのでした。それは彼れの妻の不可解の擧動でした。大尉と彼女とは彼れが彼女と結婚する以前からの親友でした。さうして大尉の本國から同道した美しい妻も彼女の親友でした。ですから、彼女がその親友の危險をきいて走り出したことも、また狂氣のやうになつたことも、必ずしも不可解なことではないかも知れませんが、然し、それを目撃した彼れには、それがただの親友のための犧牲的行爲とは考へられませんでした。殊に彼女が夫や子供と共に隱れてゐた所から、あのやうな泣聲をあげて飛び出したことは、暴徒に彼女の隱れ場所を知らせることだつたので、それがために彼れと子供とは、暴徒の襲撃をうけて殆んど奇蹟的に逃れ得たのでした。

『此の事件後は、彼れは全く憂鬱な人間になりました。それまでは、彼れの全生存は、鮮明に彼れに理解されてゐた神の思召によつたものと思はれたのでしたが、その後は、その神の思召が彼れに全く理解されない謎となつてしまつたのです。元來、神が何を考へてゐたのか又ゐるのか、彼れには全くわからなくなつてしまひました。神があることを考へてゐられたならば、何うしてそれを彼れに明かにされなかつたのだらう？ 彼れは、少くとも、神が、彼れの妻について考へて居られたことを、少しも彼れに啓示されなかつたのは、餘りに殘忍な仕打だと思はないわけに行かなかつた。彼れが大變疑ひ深い人間になつたのは、神も咎めるわけに行かなかつたでせう。彼れはその後、いろいろの方法で彼れの妻と大尉との關係を知らうと努めました。その結果は彼れを永久の不幸に陷れました。彼れは結局、現に彼れと共に生き殘つてゐる一人の男の子が、自分の子であるか大尉の子であるかを判斷することが出來ないといふ破目に陷りました。

『彼れは最早、牧師がするやうに、神が何うしてそんな思召をもつに至つたかといふ風に問題を考へることは出來なくなつて、一般俗人がするやうに、彼れの妻は何うして大尉とそんな關係を結ぶに至つたかといふ風に問題を考へることになりました。さうすると神樣を通過するよりも、本當のことをよく知ることが出來るやうな氣がしました。

『彼れの妻は、彼れが人間のことよりも神の事を考へてゐるのに失望したのでした。彼れが彼女と結婚したのは、彼れ自身のためでも、彼女のためでもなく、たゞ神のためでした。彼れの妻は、地上に於て彼女の欲望を充たさうとしてゐるのに、彼れはそれを天國に於て充たさうとしたのでした。彼女は幾度考へたのでせう「此男は何故女と結婚なんかしたのだらう？ 此男は何故人間の形をしてゐるのだらう、だから私は欺されたのだ」と。

「彼れが彼れの妻のかういふ心理に氣のついた時は、彼女は最早大尉と重なり合つて死んでゐるのでした。けれども彼はさう氣づいた時には、思はず聲を出して、大尉と共に天國にある彼女に叫びました、『それはお前の間違ひだ、私も地上の生活を求めてゐたのだ。たゞ神が私にあんな恰好をさせてゐたのだ。恰好だけだ。私の心は神よりもお前に在つたのだ。私の心には神よりもお前があつたのだ。お前は全く私を誤解したのだ。』けれどもその言ひわけはもう餘りに遲いと知つた彼れは、地だんだ踏んで子供のやうに泣いたのでした。

「彼女と大尉との關係はある方面では殆んど公然の秘密であつたといふことも、彼れは、その後知りました。彼れは自分の手に殘された子供が、あの時に彼女等と共に匪賊に殺されなかつたことを、殘された二人のために此上もない不幸であつたと考へないわけに行かなかつた。がすべてを殘忍に彼れに匿してゐた神が、彼れと子供とに對して正しい處置をとらないのに不思議はないと、彼れは考へました。あなた方は『神に欺された』と彼れが考へるに至つたは誠に已むを得ないことだとは思ひませんか？』

さういつてジヤクソンは一同を見廻したが、皆迷惑らしく首をふるのみで、何ともいはなかつた。

暫らくは沈默が支配した。

『いかにも一大變化ですな。』

と事務長が口を切つた。

『變化はこれからです。』と彼れはいつた。

「彼れは、まだそれまでは、自分が神に欺かれたのは觀念に關してのみだと思つてゐたのでした。所が、もつと深く知らされる時が來たのです。彼れは、まるで衞生術が酢になるやうに、漸次に彼れと妻との關係の、又妻と大尉との關係の、眞實が、神を排して直接に彼れに觸れるに從つて、最早從來の職業をつゞける良心も根氣もなくなつてしまつて、とう〳〵生れ落るとから運命的に置かれたその地位を棄てることとなつた。無論、文字通りにその翌日から新らたに地位を求めなければならなかつた。支那を除いては彼れの昔の教區と大尉との外に知人も信賴もない彼れは、當然支那で何かの地位を得なければならなかつたのです。がバイブル以外の智識を禁じられてゐた彼れの能力に適する仕事は、流石の支那にもあんまり見當らなかつた。偶然一つ二つあつたのは何づれも藥劑に關する商店でした。がインオーガニツク・ケミストリーといふ書物を見て、ケミストリーは皆オーガニツクの筈だがと怪しんだ程の彼れの智識では、藥劑店も二の足が踏まれたに相違ありません。が全く神の思召を知らない癖に、充分知つてゐるつもりで二十年餘りも牧師が勤つたところを見ると、インオーガニツク・ケミストリーを全く知らないでも、藥劑店の時位は勤まるだらうと考へられました。でその最後の機會を捉へて、表口のある藥劑店に行つたのでした。

『こゝで彼れはまた發見をしたのです。彼れの入つた商店は、藥屋の

看板を掲げて實は阿片の賣買をするのでした。あなた方のやうに支那で商賣をしてゐる方には、これ以上お話する必要もありませんが、とにかく彼れはさういふことが一般的の事實であるといふことを知ると同時に、イギリス人として、いな人類として非常な耻辱を感じたのでした。で全く馬鹿らしい話ですが、彼れは十字軍でも起さなければならないやうな意氣込みで、同國人は無論のことフランス人ドイツ人の間に說き廻つたものです。所が誰れもそんなことは百も承知で、彼れの攻擊なんかに鼻もひつかけるものもありません。「そんなことはジエネバへ持つて行つたがいゝ」といつた調子で、てんで氣違ひ扱ひです。白人の耻辱を觸れ廻してゐるのか御當人の耻辱を觸れ廻してゐるのか譯がわからない始末です。

『でも中には親切者もあつて、ヨーロッパと支那大陸との經濟的關係だとか、諸强國の支那に於ける資本主義的帝國主義の現狀だとかを說明して聽かせるものもあつたので、流石の彼れも少しは目が覺めたのでした。その結果、とうとう彼れは、神が自分を欺してゐたのは、かの戀愛時件に關してのみではなかつたといふことを發見させられたのでした。彼れは自分が支那にキリストの教を傳へに來たのは、全く神様の思召の外に何の目的も利害もない天國的の仕事だと思つてゐたのでしたが、それは實は、支那を開發して、本國の資本主義の領分を擴げるためだといふことを知りました。それは支那人に帽子を被らせ、洋服をきせ、靴を穿かせ、シガーを呑ませ、ランプを使はせ、鐵道を敷かせ、その他、あらゆる文明國の製品を使用するやうに支那人の生活を改めさせて、それらの商品を四億の人間に賣り込むための、全く大砲や鐵砲と同じ役割の仕事だといふことを知りました。神がどこまで自分を欺してゐたかわからない。さうして結局自分達は神の代理人となつて支那人を欺してゐたのだ」と彼れはそんな風に考へ出しました。さう考へると、同じ仕事を、神の名などを汚さずにやつてゐる商人の方が余程道德的で本國のためにも支那人のためにもなるわけだと氣がついて、阿片征伐の十字軍の夢も忽ち覺めてしまつたのでした。「なるほど阿片の密賣はよくないことだらうが、俺も三十何年の永い月日の間阿片をのまされてゐたのだ」そんなことを彼れが考へるに至つたのは、彼れ自身阿片の密賣を始めたからです。「阿片から阿片へ」だ。彼れはそんなことをいつて自分を笑つてゐました。

『以前彼れの愚直を憐れんで忠告した友人等は、今度は彼れの自墮落を攻擊し出しました。その度に彼れはこんなことをいふのです「前にはインノセントに他人のために間接に働いてゐたのだが、今は故意に自分のために直接に働いてゐるので、やつてゐること自身は、今も前も全く同じなのだ。」彼れは全く、資本主義の前驅運動としての布教の時代が過ぎ去つたので宣教師の足を洗つて商人になつたのでした。戀愛の葛藤なんか無くとも彼れは當然さうなる運命にあつたのです。現に昨今續々支那から引あげてゐる宣教師は、恐らく一人だつて戀愛事件を動機としてゐるものなんかないでせう。時代が心的阿片のそれか

ら物的阿片のそれに移れば、心的阿片家が退いて、物的阿片家がそれに代るのは當然です。』

『それも神の意志です。』

老人はなほそれを主張した。

『つまらない長談しをして失禮しました。』

ミスター・ジヤクソンはさういつて立ち上つた。

『いや何うもありがたう、大變面白いお話でした。』事務長はさういつて、『そのあなたの友人といふ方は、今は幸福ですか？』

『その神秘的の子供さへ居なければねへ。』

さういつて彼れは、落ちつかない顔色を列べて彼れを見送つてゐる人達を殘して、サルーンを出る時に淋しく笑つた。

素人の美術觀

兼常清佐

美術館の扉はいつも私共民衆の前に開かれてゐる。美術館にはいる權利のあるものは、必ずしも眼の肥えた美術通や、頭のある美術批評家だけではない。そして私共民衆も、一度美術館にはいると、やはり素人なりに何等かの感想が胸に浮んで來るものである。

美術館の扉が私共の民衆の前に開かれてゐる樣に、この雜誌もまた私共民衆を相手として作られてゐる。この雜誌は決して專門の學問の教科書ではない。それで雜誌記者はいつも餅を餅屋にばかり注文する頭腦を學んでゐない。それがかうじると、たうとう美術に何の緣もゆかりもない私に、美術に關する一篇の記事を求めたりする樣にもなる。

もと〳〵、物が民衆の前に開かれた美術展覽會である。そして民衆相手の雜誌である。その民衆の一人である私が、その展覽會の感想をその雜誌に語るのも、また大御代の春の一興であるかもしれない。私は大膽にもこの仕事を引きうけた。

疑惑

古名畫は私共の胸に一種の輕い疑惑を投げる。

先月私共は大隈氏と松方氏とが蒐集した西洋の名畫の展覽會を見た。それは日本にゐて西洋美術を鑑賞しようとする人々にとつては、誠に貴重な機會であつた。たゞ私共にはこの蒐集の意味はよくわからない。どういふ目的で、どういふ主義で、これだけの畫が蒐集されたものか、この蒐集全體としての意義は、私共には甚だわかりにくかつた。しかしそんな事は結局どうでもいゝ事である。私共はいつかこの蒐集の全體を見る機會があつたならば、それは多少明瞭にわかるであらう。今この得がたい機會には、私共はたゞ一枚一枚づつに見て行けばそれでいゝ。さうすると、あらゆる古名畫は、私共の胸に一種の輕い疑惑を投げかける。

この名畫は果して本物であらうか。もしや贋物ではなからうか。――私共の胸には、どこからともなく、こんな疑惑が起つて來る。

私共はこの疑惑を卑しいものとして斥けてはならぬ。本物か僞物かといふ事は、骨董店の店員だけが取扱ふ問題とばかりは限られない。それは私共も一應考へて見なければならぬ大切な問題である。もちろん、私共は、この蒐集者の鑑識眼を疑ふわけではない。また私共は、この畫は本物ではない、と主張する様な材料は一つも持つてゐない。また蒐集者にしても、この畫は必ず本物である。と證據立てる事は、古名畫では甚だむづかしいであらう。結局いくら論じても際限のない事である。論じるだけが無駄な事である。しかし、それだからと言つて、この本物か僞物かの疑惑を私共の心から捨てゝしまふわけには行かぬ。それは私共には、かなり大切な問題である。

私共が僞物といふのは、本物の模寫の事である。本物と寸分違はずに作られたもの丶事である。または、或る作家自身がそれを描いたものでもある様に、よくその作風に似せて作つたもの丶事である。私共はさうした僞物が天下に横行してゐるといふ話を度々聞かされる。そして誰が考へても、それは十分に有り得る事の様に思はれる。

しかし本當は、畫は決して模寫されたり模倣されたりしてはならないはづである。畫はその作家の獨特の性格なり、獨自の感情なりが盛られてゐて、決して他人にはそれが眞似られないものであるべきはづである。或る作家が自分の人格をもつてゐる限り、そして藝術がそれを正しく反映してゐる限り、畫には他人がどう眞似ても眞似きれないものがあるべきはづである。さうであるからこそ藝術は尊い。この畫は本物であるか、僞物であるかといふ事は、つまりこの誰にも眞似られないものについて考へる事である。それこそ畫の大精神を鑑賞する事である。それであるから、本物と僞物の問題は、決して蒐集者に對して體を失するものではない。

たとへばミレーの作だといはれる一枚の畫をとつて、この中にある他人の眞似て眞似きれないものは何であるか、と本當に問ふ人があつたならば、その問にそもそも誰が答へ得るであらう。それこそ誠に困難なる問である。そして明かにミレーの作である事が證明されてゐるルーヴル博物館の畫と比較して、そのルーヴル博物館の畫に含まれてゐるミレー特有の或るものが、この畫の中にも十分に含まれてゐる、といふ事を言はうと思ふならば、それはなほさら困難な問題になつて來る。恐らくそんな事は誰も説明出來ないであらう。また説明する方法さへもないであらう。もし畫以外の材料が全然なかつたならば、この畫が本當にミレー自身の畫筆から生れたものであると斷言する事は、誰も一應は躊躇するであらう。たゞしこれはミレーであらう、どうもミレーらしいと言ひ得るだけである。

そのミレーらしいと言ふ判斷は、恐らく感情が基礎になつてゐるのかもしれない。ルーヴルにある本當のミレーの畫を見て、それから得た一種の特有の感情が、この畫からも明かに感じられるから、この畫も恐らくミレーであらう、といふ様な判斷かもしれない。それはちやうど熟知の人に出會つた様なもので、一見して誤なく、あゝあの人と

だ！とわかる樣なものであらう。そしてさういふ種類の感覺は、十分に訓練された專門家なら、甚だ鋭敏で、そして甚だ正確なさうである。從つて私共は、多くの場合にはそれに信賴するより外に途はあるまい。また實際ミレーの畫には、ミレー獨特の技巧があつて、專門家の眼でその技巧を見つけ出せば、それが或る畫を完全に他から區別する標準になる事は言ふまでもない。とにかく、この樣にして、或る畫が、これこそ正にミレーの作であると斷定されるのであらう。

　もしさうだとすれば、畫の本物か僞物かは甚だあいまいな事になる。その判斷の基礎が感情にあるならば、それはよほど多くの人々の判斷が一致したものでない限り、個人個人の主觀だけでは到底最後の正確な事實には到着しない。感情は動きやすい。殊に無知の人に出會つたのならば、お互に物を言ふから僞もわかるが、畫は物を言はない。間違つたかどうか確める方法がない。いつまで行つても、つまりはまづ確であらう。と思つてゐるだけの事である。

　また、もし本當にルーブルの畫を研究して、ミレー特有の技巧、獨特の手法といふ樣なものが確に發見出來たとするならば、そのために僞物を作る事は非常に可能になる。その獨特の技巧は、決して形のないもの、目に見えぬものではないはづである。よしそれが例へばロマン・ローランの著にある樣なミレー獨自の精神を體現したものであつてもそれを體現するものは色と形との技巧より外にはないはづである。たゞ色と形とである。必ずそれだけである。そして目で見える色と形とならば、それは恐らくその通りに、寸分違はない程に、いくつでも出來てもいゝものである。少くも原物と寸分違はない樣な模造だけは出來るであらう。もしミレーの精神はたゞミレー自身の畫筆が作つた最初の一枚だけに現はれる、と言ふ人があるならば、それはその模造品の精密さがまだ足りないといふ事である。十分に精密に外形を模造したならば、その最初の一枚に含まれてゐるものは、また必ずその模造品にも含まれるわけである。それは精神を現はすものは、たゞその外形だけであるからである。そして、それは人間のからだを作る事が出來たならば、魂も自然にはいるかといふ樣な問題とはよほどその趣が違つてゐる。今日現在に、どれほど精密に外形が模造されるか、それは私共素人にはわからない。しかし、科學の力や細工の力は、必ず原物の完全な模倣物を作るまでにはなるであらう。よし完全とまでは行かずとても、完全と見做される樣なものは作り出すであらう。

　さうなれば私共の畫に對する考へはやゝ違つて來る。畫もやはり活動寫眞のフイルムの樣なものになる。作家の精神は、たゞその畫の構圖や色や形や、或はその技巧などを考へ出したといふ點に現はれる。しかし、同じ畫が同時に、世界のいろ〳〵の場所で展覽される事になる。そしてそのどの畫も、全く正しい作家自身のものである。ちようどチヤツプリンのフイルムは、武藏野館で見ても、帝國館で見ても、全く同じである樣なものである。さうなれば畫の作家は、藝術的には活

動のフイルムの作家、或は監督、或は俳優の様なものになる。さらなる事が果していゝか惡いか、それは私の知つた事でない。しかし、畫はさうなり得るものだとは考へられる。

こゝが恐らく畫が音樂と違つてゐる主な點の一つであらう。畫はいくら多く作られてもその一つ一つは原畫と殆ど同じものである。同じと見做れてもいゝものである。そして作家の技巧や、或はその技巧だけを通して現はれる作家の精神は、それで正しく一般の民衆に、傳へられる。しかし音樂はそれとは全く様子が違ふ。音樂ではどうしても模倣も複製も出來ない。音樂家は自分の創作を譜に書いて置くより外に方法はない。音樂家のためには譜が命である。そしてその肝心の命と稱する譜は、決して音樂を十分には現はさないものである。畫家がその藝術を畫布の上に現はさうとした時には、その畫布にはこの畫家の心の中の殆ど全面が現はれる。思ふ通りの畫が描ける。その畫を巧に模製しさへすれば、それにはやはり畫家の心があるとも言はれる。樂譜はそれとは全く違ふ。

樂譜は曲を精確に示さない。強くとは言ふけれど、どれほど強くとは言はない。弱くとは言ふけれど、どれほど弱くとは言はない。段々に早くとは言ふけれど、その『段々に』には無數の段階がある。それで一枚の樂譜であつても、十人演奏すれば、それから十種の違つた曲が出來る。その十種の曲に共通なものは、たゞメロデイや和聲などの樣な骨格的に決定してゐるものだけである。そして音樂の細かい表情には、この描寫的な技巧がかなり重要であるから、今の樂譜の様式では、到底音樂家の藝術は正しく世に傳へられるわけには行かないといふ事になる。私共が今聞いてゐるベートーヴエンもワーグネルも、それは決して本當のベートーヴエンの複製でもなく、本當のワーグネルの複製でもない。たゞそのメロデイや和聲などの質的に決定されてゐる部分だけが本當のベートーヴエンであり、本當のワーグネルであるだけである。あとの部分はみなそれを演奏する人々自身のものである。もし畫の世界で言ふならば、つまり後人の勝手次第な僞作である。たゞその僞作の目的が決して惡い事でないといふだけである。そしてこの僞作なしには、今日ではベートーヴエンもワーグネルも、決して存在し得ないといふだけである。

これに比べると、畫は誠にそのままを僞作しやすい。正當に模倣しやすい、遂にはフイルムの様に、同時に多數の畫が作られてもいゝものである。私はこの性質を利用して、いつその事に、東京に一つの模寫の繪畫館がほしいと思つてゐる。ウフイチやルーヴルの畫が十分に模寫されて日本に送られたならば、それはつまり別のウフイチやルーヴルの博物館である。その畫としての價値は、決して多くは損なはれないであらう。そして日常、ウフイチやルーヴルの名畫に接するといふ事が、どれほど東京にゐる私共の生活を幸福にする事であらう。

たゞその東京のウフイチでは、名匠自身の筆だといふ事から來る一種の歴史的な感興、一種の偉人崇拜の感激だけは缺けるであらう。そ

れはどうも仕方がない。その感激だけで古名畫を見てゐる人には、そんな新しい第二のウフイチなどは、全く價値のないものであらう。しかし、例へばルーヴルの老大なるルーベンスの畫でも、果してそのどこがルーベンスの自身の筆であるかは疑問である。この新しい第二の東京のウフイチも、その様な特別の例であると思へば、恐らく誰にもあきらめがつくであらう。

松方氏の蒐集された畫が將來どうなるか。それは恐らく誰にもわかるまい。たゞその様な大蒐集の展覽會を見ると、私の心の中にはいつも東京の新しい第二のルーブル、第二のウフイチといふ様な事が浮んで來る。そして、これが私の言はうとする僞作の問題の結論である。

日本畫

西洋の名畫の蒐集が貴重であると同じ様に、現代の日本の畫家の展覽會もまた貴重である。西洋の名畫に歴史上の權威と偉人に對する感激があるならば、現代の日本の畫家には、私共のこの現實の生活の表現が求められる。それはいづれも私共が美術に期待する主な感情である。私共は大原氏や松方氏の展覽會を見ると共に、どうしても槐樹社や光風會の畫をも見なくてはならぬ。

日本で繪を鑑賞する人々は、誰もみな一度は日本畫と西洋畫の對立といふ不思議な事件に出會ふ。恐らく外國の人々の經驗しない事であらう。私自身は日本畫にはあまり同情はない。私が畫家なら斷然西洋畫をかく。私共は小學校の時からして已に西洋の學問を教へられて來た。今日の私共の生活の大半は、西洋の學問や西洋の文明を基礎としてゐる。明治維新以前の人々が今の私共を見たら、恐らく彼等は私共を西洋人と云ふであらう。その私共が西洋畫を好むと言つたところで、それは決して不自然ではないはづである。私共にとつては、むしろ日本畫の方が異國の畫の様に見える。むしろ日本畫の方が理解しにくいかもしれない。

西洋畫家は日本畫を休息所の様にしてゐる。西洋畫で一生涯を仕遂げた人々が、やゝもすると日本畫をかいて見る。たとへば私共が學生の頃に初めて見たあの津田青楓氏が、今日は良寬の歌などを愛し、毛筆で枯淡な日本畫と優美な假名文字を書いてゐるといふ事は、實に普通の人には思ひもかけぬ變りかたである。そしてまたその様な例はいくらもある。

日本畫は、なるほど洋畫家のための休息所くらゐなものかもしれぬ。しかし私が畫家なら、もう一つ日本畫の中から求めたいものがある。そしてそれを西洋畫の上に試みたい。それは筆勢である。筆が紙の上を走つた跡を見る時には、私共は一種の面白い、そして非常に複雜な心になる。畫家も筆を紙や絹の上を走らす時には、かなり複雜な心持ちになるであらう。日本畫を見てこの筆勢から受ける様な感じは、めつたに西洋畫からは受けられない。それは西洋畫の筆觸といふ事とは、多少その内容に相違がある様に見える。私は石橋和訓氏が非

常に流暢に筆を揮つた畫を見た事があるが、しかし、それでもけつの手筆の運びを見る時の様な感じは起らなかつた。いろ／＼な材料の上の困難に打ち勝つて、この運筆の技巧を西洋畫の世界に試みるのは、正に日本に生れた西洋畫家の一特權であらう。そしてこれが西洋畫家が日本畫を利用する一番主な點ではあるまいか。

恐らくこれは已に古い議論であらう。このくらゐな事を専門家諸君の氣づかないはづはない。また恐らく已に試みられたものかもしれない。たゞ私はまだその様な試みの成功した例を知らない。もし本當にこの様な試みが成功するならば、西洋畫の技巧の批評の標準に他の新しい一つのものを加へる事になるであらう。それは日本に生れた西洋畫家の仕事としては、甚だ愉快な事であらう。恐らく日本畫は西洋畫家の休息所となり得るばかりのものではあるまい。

退屈

畫はいよ／＼畫らしくなつて行く。畫家はいよ／＼畫そのもの丶中に自分の全體を沒却して行かうとする。私共素人にはさう見える。そして畫はだん／＼に理解しにくゝなる。

私共は西洋畫の展覽會に行くならば、まづ澤山の裸體畫を見る。大ていの展覽會ならば、各室に必ず一二枚の裸體畫がある。私共素人にはそれがどういふ意味であるか、それはよくわからない。女の裸體は、どれもこれもまづ大體同じ様なものである。女の裸體が寫生されてゐるといふ事からは、別にどういふ意味も私共の眼に浮ばない。また畫としての存在の理由も、恐らくそんな意味などにはないであらう。たゞ或る畫家が女の肉體をどう見たか、どう寫したか、どうしてその量の感じを表現したか、その表現のために使つた色はそれ／＼畫面の上に十分に動かない位地を占めてゐるか、全體としての構圖や色の配合は美しいといふ條件にかなつてゐるか、といふ様な事が恐らくあの多くの裸體畫の主な問題であらう。畫家もたゞその様な事がらを頭に置いて、その爲めにこそ熱心に畫筆を揮つたのであらう。そしてこれは純粋に畫としての畫の問題である。畫のいろ／＼な約束をよく理解しない限りは、私共素人には容易にわからない問題である。

それは畫題がまづ私共を動す様な畫とは、段違ひに理解しにくいものである。たとへばミレーの『晩鐘』や『落穂拾ひ』などは、その畫自身ももちろん畫としてのいろ／＼な美の條件を滿足してゐるであらうが、しかし何よりもまづその畫題が私共の心を捉へる。ロマン・ローランの『ミレー』が畫論として果して價値があるかないか私は知らないが、しかしあの様な見事な評論がミレーの藝術について書かれるのは、ミレーの捉へた畫題が大いにその原因を作つてゐる。そしてこの様な評論が書かれる畫こそ、私共素人に一番わかりのいゝ畫である。しかし今の日本の畫界には、その様な畫は極めて少い。畫はたゞ畫であつて、そしてそれ以外の何物でもなくなつて行く。

畫がたゞ畫であるならば、私共は畫そのもの丶約束を十分に理解

し、私共自身をも畫の中に沒却してしまはなければとてもその畫は本當にはわからない筈である。しかしそれは本當に考へれば、決して素人に出來る仕事ではない。私共素人がたとへば田邊至氏や上野山淸貢氏の裸體婦人の畫の前で、これが果して正確に人體を寫生されてゐるか、またその正しい寫生といふ事から來る快感を感じられるか、と問はれたら、私共には何とも答へようはない。いはんやその畫の感じとか、色の調子だとか、構圖だとか、筆觸だとかいふ事になれば、恐らく畫家自身にその妙所を說明されても、それが私共素人に理解出來るか、どうかが疑はしいくらゐである。そしてそんな事では、その畫を正しく理解し、正しく享樂する事は、とても望まれない。私共素人には、近代の畫は、一般にみなさうした傾向になつて行く樣に見える。しかしそれが恐らく畫の當然行くべき道であらう。畫は純粹に畫であれば、それで畫としては十分なのであらう。畫は私共素人の方からその理解に努力しない限り、畫の方からは私共素人にもわかる樣な通俗な世界には降りて來ないのであらう。そしてその樣な事はたゞ畫の世界ばかりでない。音樂でも全く同じ事である。

私共の心は幸にして畫の展覽會に馴れてしまつた。それも音樂會に馴れてしまふと全く同じ事である。習慣の力は恐ろしい。たび〳〵畫の展覽會を見てゐると、私共の心はいつともなく展覽會に馴れて、畫といふものはつまりこんなものだと思つてしまふ樣になる。ちやうど音樂がよくわからなくても、たび〳〵音樂會に行くと、たうとう私共は音樂といふものは、つまりこんなものだと思つてしまふ樣になる。そしてそれから先きは、この藝術が私共のこの生活とどう關係があるか、私共の心の要求がどう表現されてゐるか、私共の生活がこの藝術のためにどれほど豐富にされたか、どれほど深酷さがましたか、そんな事は殆ど考へても見なくなる。考へて見なくとも、それで氣がすむ樣になる。そしてそこから展覽會の淡い退屈さも湧いて來る。たゞ私共はこの退屈さを、なるべく心の奧の方にかくして置くだけの事である。

私共はめざましい畫が見たい。私共素人でもなほびつくりする樣な畫が見たい。畫が純粹に畫だけの世界に沒入してしまうて、私共の心はだん〳〵と畫から離れないとも限らない。この退屈さがだん〳〵心の表面に浮び出て來ると、たうとう槐樹社や春陽會の裸體畫を見るよりも、クラ・・ボウの映畫でも見る方が、もつと〳〵私共の心を滿足させるといふ樣になるかもしれない。私は非常な興味をもつて、展覽會と私共の心との交涉を見まもつてゐる。

（取消申込） 本誌四月號高橋龜吉氏の「金權に汚辱せられた普選」の記事中（一一一頁）、山梨縣南都留郡谷村小學校に於て昨秋同校兒童の級長選擧に際し小遣錢を提供して自薦運動をしたと云ふ個所があつたが、同校に於ては絕對右樣の事實なき旨、同校長大村朋市氏より取消の申込があつた。

維新回天史の一面（其五）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　徳富猪一郎

（第二十五）阿部對水戸

阿部の生存中は親藩の大難物たる水戸の隠居、即ち前中納言齊昭でも、天下の奸雄と稱せられたる英邁なる島津齊彬でも、又た何人の手にも思ふやうにならず。松平定信、若くは水野忠邦の如き大政治家でさへも、手を燒きたる千代田城の大奥をも、將た追ひ〱と頭を擡げ來りつゝある京都の公家をも、兎や角大なる破綻を來たさざる程度に撫で廻して居た。

彼が煮え切らない態度は、如何にも齒がゆくあつたが、しかも彼は決して、無策、無謀、無方略ではなく、一通りの見當はきつとつけて居た。然も彼は理想家でなく實行家であるから、成可く仕事に瑕がつかぬ樣、怪我が出來ない樣、穩當に、着實に、而して安全に出來る丈けの手段をとつたから、その結果は兎角曖昧模稜に見えたのである。併しそれは寧ろ過を見て仁を知るとも云ふべきものであらう。彼は諸々の要素を取り纒める爲にあらゆる犧牲を拂つた。

先づ水戸の隠居の氣嫌をとるために、その愛子の七郎麿を一橋家の養子に周旋した事は既記の通りだ。それからアメリカ事件が出來てからは、將軍家慶の遺命であつたとは云へ、彼の周旋にて水戸齊昭も隔日登城といふ事になり、その報酬として、年々五千俵、後には增加して一萬俵を給する事となり。斯くて齊昭が種々の難題を持込むのを柳に風でそれを上手く受け流し、或は彼に軍艦製造の主任を申付け、或は彼に軍制改革の總裁を依賴し、兎も角も阿部の生存中は、水戸の隠居も不平は云ひつつも、幕府に背をむけるやうな事はなく、口には反對しつつも、其實は幕府の廟議に引ずられて行つた。

× × ×

且つ阿部は必ずしも事每に齊昭の意を迎へたのでなく、時としては齊昭の意見に反對もし、忠告も試みたのである。例へば齊昭は露西亞人を一所に誘導して、盡くこれを鏖殺にせんとする策を、二回までも正弘に勸めた。それに就いて、正弘は懇々その不都合なるを說き、

『御論の如く隨分計策を以て、鏖しに仕られ申すべく候得共、此儀かの本國に相知れ候はゞ、彼の遺恨骨髓に徹し、忽ち國を傾けて復讐の兵を差越申すべく、外國々にても此儀承り及び候はゞ、日本人卑怯の致方と、我邦をいやしめ候は申すに及ばず……』と懇々その不可なる理由を開陳し、更に、

『大節目のかど〳〵はせい〳〵押強く掛合はせ候樣仕り度、その危難を救ひ遣し候細目のかど〳〵は、國家御仁恤之場を以て可成丈厚為ニ取扱ヒ恩威並び施すの儀に仕度く』と云つてゐる。

これは露國の船が伊豆の海にて難船したる時の話である。然るにこれに就き水戸齊昭よりは、

『過日は醜賊の一條縷々御投文、畢竟年中變もなく、危き論を發し候故、かへつて壯年の御方に御心配相掛け氣毒致し候』と齊昭の方から謝つてゐる程である。これを見ても、阿部が必ずしもすべての人に向つて、すべての事に對して、唯々諾々でのみなかつたことがわかる。

(第二十六) 阿部對薩摩

又た薩摩に對しては、第一齊彬の爲に骨折つて、その父齊興

を態よく隱居せしめ、齊彬をして薩摩藩主たらしめたるのみならず、更に齊彬と協力して、島津家と德川家との結婚を成就せしめた。既に記したる通り將軍家齊の御臺所は島津重豪の養女である。されば德川家と島津家とが今更ら結婚する事は、必ずしも不思議の事ではない。

將軍家定はその身體に欠陷ありて、男女の道を解せざるのみならず、既に二回もその御臺所を失つて居る。然るに第三回目の御臺所としての内議が出で來つたのが、卽ち齊彬の養女篤子である。これは齊彬から持出したのであるか、或は阿部から持出したのであるか。或は當初正引は、彼女を家定の妾として入るゝ積りであつたが、齊彬はこれを肯じなかつたから、改めて御臺所としたといふ説もあるが。いづれにしても、その實、篤姬は齊彬の叔父島津安藝の女で、一門中に婚約があつたのを取消して、これを齊彬の養女とし、更に改めて近衞忠煕の養女として、千代田城に入るゝこととなつた。これが所謂天璋院と稱して、靜寛院宮、卽ち内親王和宮と相並んで幕府の最後を飾る女性の一人である。

×　×　×

この結婚に就いては、水戸齊昭は衷心から最も反對した。彼はこれに對して、

『東照宮御敵の薩の家來の娘を、御臺樣にして、御腹初御旗下の娘共夫へおなき抔候ても、自分に益さへ行レ之候へば宜しくと存候樣、廉耻もなき世態故、斯る大變も出來候筈に御座候。實に德川の天下は如レ此相成候ては、萬々一他家へ將軍を被レ仰付候ても、彼是と德川家よりは申兼候半。實に以御同樣心配恐入候事に候。御先々代、御先代の如く御奢侈等は一切不レ被レ遊、御庭の鵞鳥抔を御追遊レ被、又は御側にて豆小豆抔煎候て、御側向へ被レ下候抔が御慰の由に伺及候へば、御入費と申候ては、不レ被レ遊候かに内々伺及候へ共、御肝要の征夷之御任に候得ば、ケ樣の所は晝夜老若初御役々付候て、御直に御評議被レ遊、御直に御指揮不レ被レ遊候ては、假令御障抔出候ても、不レ被レ行事と奉レ存候。他言御無用直に御火中願候』と云つてゐる。

×　×　×

されど阿部と齊彬との間は、親類同樣の關係であり、而して阿部と齊昭の間も切るに切られず、離るゝに離れられざる關係

にあり。更に斉昭と斉彬の間も、互にその胸中にては、感心もせず、不審も抱き、斉昭からは、常に薩摩が琉球に於て、國法を破り、外國と密貿易の利を恣まゝにするものと、邪推し。又た斉彬の方からは、斉昭は議論ばかりで、實行にうとく、己が足許たる水戸藩さへも思ふやうに治め兼ねたる手際にては、天下の大政など思ひもよらぬと考へ、松平慶永などに向つては、余りに斉昭に近付かぬ様に忠告さへした程だつたが、彼もなかなかのしれ者にて表面水戸とは良好の關係を保つて居た。

（第二十七）阿部の施設

京都に向つては既記の通り、新皇居の經營をたし、主上の思召にも叶ひ、又た外交問題に就いてもそれぐ御報告をも申上げ、物質的にも、精神的にも、なるべく京都の方面の感情を害せず、好意を厚くする手段をとつてゐたから、彼はその十數年間の執權中にも、可成り嫉妬者も出來、可成り反對者も出來、可成り彼を排斥する陰謀も醸されたが、遂に何等の失脚する所もなかつた。

阿部は所謂臨機應變者の質のよきものにて、必ずしも主義主張などといふことはなく、流に從つて下り、風に向つて帆を張るといふ如き政治家であつたから、元より天下の大勢に反抗するなどといふことは、彼に期待せらるゝ事でなく。さりとて己一人突進して、犧牲者となり自ら潰すなどといふこともなく、衆と共に動き、衆と共に進むといふ、極めて安全なる道を辿つたのである。

（第二十八）堀田の入閣

從つて外交問題に就いては、攘夷、開國の間に處し、甚だ困難なる立場にあり。その爲に自身外交の衝に立つことを避けて、自から老中筆頭に退き、これを堀田正睦に讓つた。これが即ち安政二年十月である。堀田は天保十二年老中に任じ、同じく十四年にやめ、爾來足掛十三年間溜間詰格として閑地にあつたのである。

然るに彼が突然入閣し、しかも勝手掛を命ぜられ、即ち閣老の首班となつたのは、實に人皆意外とした所である。

これに就いて斉昭は松平慶永に與ふる書中に、

『此度再勤之者抔は、兼々關係故と申阿も不好、下官も不好

候處、何れよりの建白にて相成哉、表發後中納言（德川殿慇）咄にて初て承り申候。例閣老出來候節は、三家へ御相談有之候得共、此度指かゝり故無二御相談一被二仰付一候と申候由、右に而拙老は初て承知致し候。細々たる事は格別、閣老抔は天下之御爲御大切之職に候處、右さへ御相談も無レ之上は全く案山子に讒間候儀故……」と云うてゐるが、全くその通りで、しかもそれが阿部の推薦に出でたとは、意外と云へば意外であつた。

× × ×

阿部は必ずしも責任を回避するといふことはなかつたが、自ら外事を處理するに於て其の力の十分ならざるを知り、已に内務大臣として、内をまとめ、堀田をして、專ら外にあたらしめんとしたのであらう。然も堀田の閲歴は世間にかくれなきことにて、堀田がその衝に當れば、自然外に對する折衝も都合よく行くと見たものであらう。

斯くて堀田はいよ／＼安政二年十月には外國御用取扱を命ぜられ、いよ／＼專任外務大臣となつた。

（第二十九）阿部と開國

阿部の在職中に、日本は事實上殆ど開國をした。そこで世上或は阿部を以て開國家の第一人となす者があれども、それは寧ろ買ひ被りである。阿部は、勢に餘儀なくせられて、これに應じたといふ迄にて、自らその勢を引張つて行つたといふのでない。實を云へば鎖國ですむ事なら、彼は成可く鎖國で居たいのであつた。彼は本來現狀維持者で、決して改革家でなかつた。何ぞ況んや革命家をやだ。

彼は大勢に抵抗するの不可なるを知り、これと共に推移したのである。故にその結果から云へば、彼は開國者といふことも出來るが、併し日本を開國せん爲めの開國者でなかつた。若し開國者と云はゞ、彼は自動的の開國者でなく、他動的の開國者だ。

× × ×

併し彼の在職中、安政元年三月には、米國との間に神奈川條約締結せられ、同じく五月にはその附則が下田に於て議定せられ、安政元年八月には、日英の條約が長崎に於て締結せられ、

同じく二年九月には又長崎に於て附則が議定せられ、又安政元年十二月には下田に於て日露條約が締結せられ、同じく同所に於てその附則が議定せられ、又日蘭條約が安政二年十二月長崎に於て締結せられた。

× × ×

これは日本から進んで締結したのでもなければ、又阿部が一人自ら進んで然かせしめたのでもない。けれども彼が内閣の首班であり、若くは堀田に讓るも、尚ほその實力に於て、首班同樣の働をなしたる時代に行はれたるを見れば、彼自身が開國家であると否とに關はらず、開國の歷史は實に彼と共に存すと云ふも差支あるまい。殊に彼が手腕を認むべき事は、此の外國關係に於て、彼の時代に、京都の攘夷論と、何等大なる衝突を來たさなかつた事である。

（第三十）朝廷と外交

京都は初から外國交際を好まず、——唯だ鷹司政通だけは必ずしもさうでなく、日本の王朝時代には、外國と交際したから今更交際したとて差支なしとの意見を持つてゐたが——。

即ち安政二年九月二十日附京都所司代脇坂安宅より、阿部以下の閣老に與へたる書翰によれば、朝廷も必ずしも外國條約を否認せられなかつたのである。即ちその報告書は左の通りである。

「駿河守（都筑峰重）京着之上其御地ヨリ持越候ロシヤ、イギリス、アメリカ之條約書寫持參ニ付、委細演說之趣承レ之兼テ被ニ仰下一候義モ有レ之ニ付申談、一昨十八日駿河守同道關白殿ヘ致レ伺候條約書寫拙者指出被ニ仰下一之趣及ニ演說一引續キ駿河守ヨリ御直話致シ相尋ラレ候箇條モ有レ之、同人ヨリ逐一及ニ御答一候處、委細被レ致ニ承知一、是迄應接之次第並三國トノ條約無ニ御據一譯柄、其外異國ノ事情等實事分明ニ相譯リ被レ致ニ安心一、右之段可レ被レ及ニ言上一候間、是等之趣ハ宜申上旨關白殿被ニ申聞一候。且各樣ニモ彼是御配慮之段是亦宜申進旨被ニ申聞一候間、此段申進候。右之節傳奏衆議奏廣橋大納言、萬里小路中納言被レ致ニ侍坐一候。以上。

九月廿日　脇坂淡路守

阿部伊勢守樣
牧野備前守樣

久世大和守様
內藤紀伊守様

尚ほ又同年同月廿二日附にての報告書は左の通りである。

『月並爲ニ伺ニ御機嫌ニ今二十二日拙者參內致シ候處、關白殿被レ逢十八日三箇國への條約書爲持參演說之趣並都筑駿河守直話之次第等委細被レ及ニ奏聞、條約書モ被レ入ニ叡覽ニ候處、段々之御處置振具サニ聞食殊ノ外叡感被レ爲レ在先以御安心被レ遊候。不ニ容易ニ事狀追々居合候段千萬御苦勞之御儀ト被ニ思食ニ候。猶此上之御取扱振御國體ニ不レ拘樣御賴被ニ思食、右之趣宜申上旨被ニ仰出ニ候。且又各樣ニモ不ニ一通ニ御心勞其外掛リノ面々モ骨折候儀ト被ニ思食ニ候。是等之趣　各樣迄能々可ニ申進ニ旨御沙汰候旨、今日關白殿被ニ申聞ニ候間、此段申進候。以上。九月二十二日　脇坂淡路守』

斯くて幕府はこの事に付き安政二年十二月二十七日附にて左の如く布令を出した。

『魯西亞、英吉利、亞米利加國への條約書入ニ叡覽ニ候處段々之御處置振殊之外叡感被レ爲レ在被レ遊御安心千萬御苦勞之御儀ト被ニ思召ニ、御年寄衆ニモ不ニ一通ニ御心勞其外掛リ之面々ニモ骨折ノ儀ト御察被ニ思召ニ候旨、關白殿被レ逢候段傳奏衆被ニ申聞ニ趣所司代ヨリ申越候事』

(第三十一)阿部と公武合體

斯る次第で、對外的感情若しくは意見の輕重、濃淡の差はありとするも、兎も角も京都側にても、幕府の措置を是認遊ばされたのであつて、事實外交問題に就いて、阿部の在世中は兎も角も公武合體してゐたのである。然るに天は幕府に幸せずしてと云ふよりも、日本に幸せずして、阿部正弘は安政四年六月十七日、三十九歲にて病の爲に斃れた。これは實に日本の開國史に於て、又幕末史に於て、又維新回天史に於て、最も重大なる事件と云はねばならぬ。

この人一度去つて江戸に於ける幕府閣老間の統一は失はれた。又幕府と有力なる大名間の脈絡は中斷せられた。而して江戸と京都との間もその聯絡が全く絕えたと云はぬが、頗る圓滑を缺くに至つた。且つ有力なる大名は名々に直接行動を京都に向つて逞くし、遂に總ての事が亂脈となつて來た。

人或は阿部を微力と云ふが、阿部自身の力は大にあつたにせ

よ、小であつたにせよ、彼は實に力と力の間の連鎖であつた。彼一度逝いてその連鎖が殆ど悉く失はれた。

（第三十二）堀田正睦

堀田は年齢に於ても阿部よりも九歳の長者であり、又閣老に初めて出仕したる經歴も古くある。彼は佐倉藩の藩主であり、その家柄も五代將軍綱吉の時に大老を勤めたる、堀田正俊の後であり、門地から云つても阿部に勝るも何等劣ることはなかつた。加之彼が阿部に比して、外國の事によく通曉してゐた事は、かくれなき事實だ。併し彼は不幸にして阿部の如き政治的天才ではなかつた。

彼はいづれかと云へば、當時の大名中では賢明であり、又その性質も偏屈でなく、陰險でなく、強情でなく、順良であつたが、併し彼は人心の機微を察し、これを收攬するなどといふ聰明と、その手練とを二つながら缺いてゐた。堀田は理解ある長官として、その部下の海防掛からは信用せられたが、閣内ひねくれ者の雄物である松平伊賀守を、統御する腕前なきのみならず、大奥などには一切その手が廻らず、京都などの事も寧ろ一通りの挨拶にて足れりとなし、何等深く氣をくばり、手を盡す事もせず、さりとて親藩の雄なる水戸齊昭などの機嫌をとる事などにも拙なかつた。

その極彼は幕閣の首班として孤立、無援の地に立たざるを得なくなつた

（第三十三）安政の地震と戸田藤田

阿部の死以前安政二年十月二日所謂安政の大地震なるものが江戸に起つて、その爲に非常なる物質的損害を與へた。されど總べての物質的損害より以上の損害は、この地震の爲に、水戸齊昭の左右の手とも云ふべき藤田東湖、戸田蓬軒二人を失つたことである。

戸田は門閥であり、藤田はその父以來實力で出身して來たが、この二人は何というても齊昭にとつては暫くも缺くべからざる必須の人物であつた。彼等は弘化元年五月以來、その主齊昭と共に幕命によつて逆境に落ち、廢蟄の身となり、嘉永六年米艦浦賀に來り、齊昭が幕政に參與するに際して、戸田、藤田相共に藩主より江戸に召出され、やがて戸田には忠太夫と云ひ、

藤田には誠之進といふ名を賜はり、天下皆な、戸田、藤田を兩田と稱して、この君にしてこの臣ありといふほどであつた。戸田はいづれかと云へば人格者として重ぜられ、且つ信用せられた。藤田は所謂一世の智勇を推倒し、萬古の心胸を開拓すると云ふべき程の快男兒として、天下の志士に仰がれ、齊昭が大名として天下の望を負うたるより以上に、彼は士人として天下の志士の望を負うてゐた。彼は廢黜十年の間頗る學問をなし、學者としても立派な一人であつたが、云はゞ彼は手も八丁口も八丁、更にその事務に鞅掌する才氣は湧くが如く、彼は齊昭に代つてその文書を起草し、若くは修正するのみならず、その意見をも提供し、併せて又その提供したる意見を齊昭の名によつて實行せんことを務めた。

× × ×

而して戸田は門閥の士であるに關らず、何等の猜疑心もなく、藤田と妥協し、藤田をして十二分にその力を致さしめ、己は自己の信用によつて、常に藤田を支持してゐる。若し藤田が管仲であれば、戸田は鮑叔以上の働をしたのである。この二人が齊昭の左右にあつて、彼をして脫線せしめなかつたのである。

× × ×

然るに天は如何なる意にや、同時にこの兩田を齊昭の手より奪ひ去つた。兩人去つて以來、何人も齊昭の過を誡め、足らざるを補ひ、曲れるを矯め、彼をしてよくその所を得、その任務に從はしむる程の人は一人もなかつた。

斯如くその周圍には兩田なく、その友人としては阿部正弘なき齊昭は、自己の考のまに〳〵働いたから、それが彼自身の脫線となるのみならず、延いて意外の影響を他に及したのも、誠に餘儀なき次第である。卽ち島津齊彬が松平慶永に答ふる書中にも、

『水府老公の御處置、誠に大失策兩田居らず候ては、闇と奉存候』とある通り、全くお先眞闇となつてしまつたのである。而してその直接の影響は、これが爲に公武合體の大局が、いよいよ破綻を來す一の動機とならざるを得なかつたのである。

（第三十四） 將軍繼嗣問題

我等は此處に又重大なる一の問題に到着した。それは將軍の

養子問題だ。前にも述べたる通り將軍家定は隠れなき凡庸暗愚の君主であり、又三十歳を過ぎても、三回も御臺所が出來ても、子供の出來るべき望は無く、然るに外國との接觸は日に增し切迫を告げ、いづれにしても、上に天皇を戴き、下に大名を提げて、天下に號令すべき賢明、有力なる將軍を最も要する時に於て、斯る態たらくであれば。當面の問題は現將軍を廢して新に賢明なる將軍を立つるか、さもなければ將軍の養子として、事實に於ては、將軍の仕事を代理せしむるか、二者その一を選ばねばならぬ。

前者は固より行ふべからず。此に於てかすべての問題は、賢明なる養子の選擇に集中して來た。

× × ×

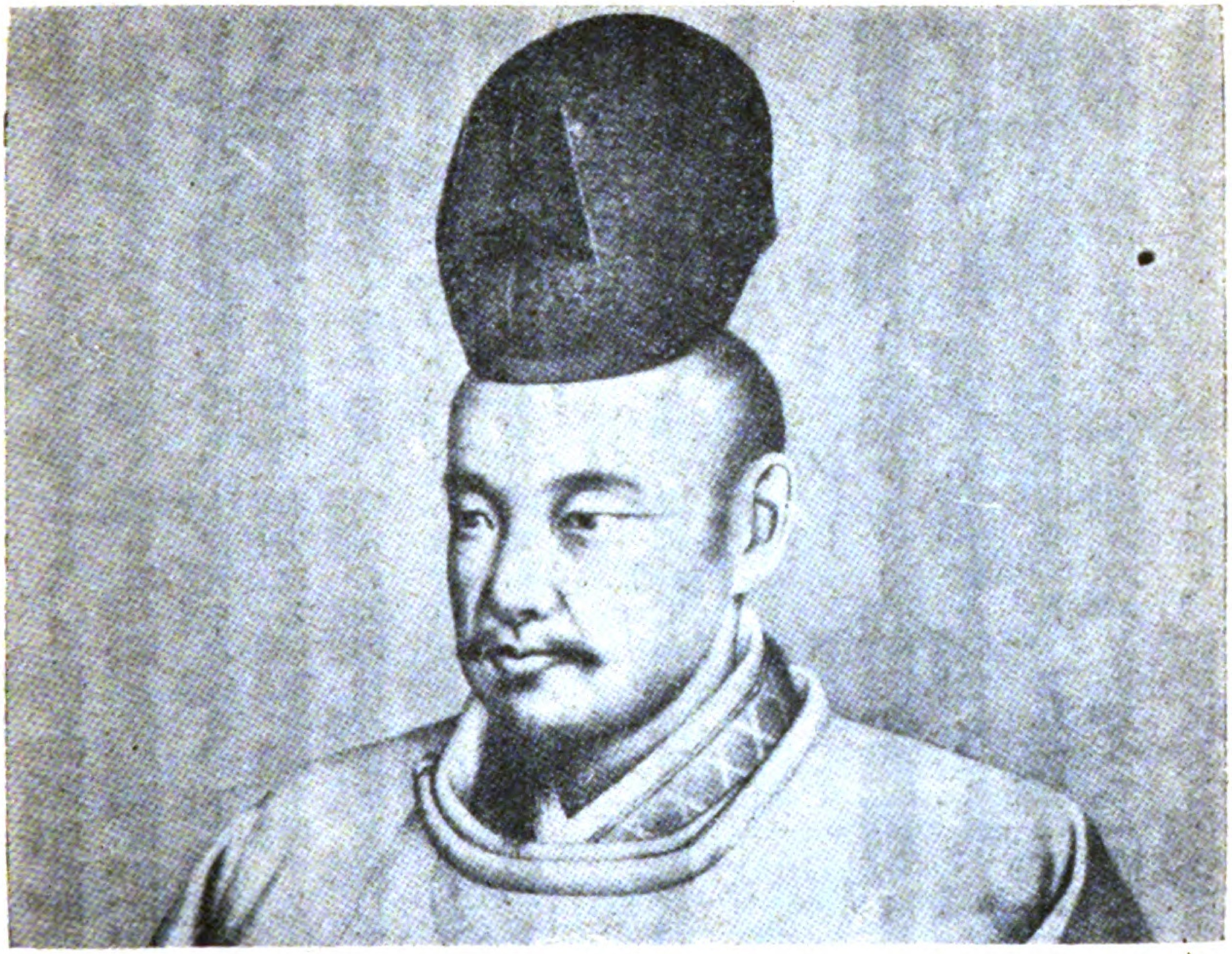
元來家定の父家慶も、當初からその子家定の到底將軍たる資格無きを知り、せめて適當なる養子をと物色し、これが爲に夙に賢明の名ある水戸の七郎麿に目をつけ、これが爲に彼は一橋家を相續する事になつて、卽ち彼が水戸より入つて一橋家を相續したるは、やがて將軍の養子となり、西城に入る前提であらうと推察した者も少くなかつた。而して將軍家慶は、その意味を近臣――小納戸頭取朝日奈甲斐守、御側御用取次本郷丹後守等――に洩したと云ふことだ。

將軍家慶は世子の外に同伴する例の無きに、嘗て嘉永五年十二月三河島に鶴の羽合せを試みるに際して、一橋慶喜を伴ひ行かんと云はれた事がある。併しそれは餘りに早きに過ぎると云ふことにて阿部伊勢守が諫めたから止めたといふ事である。

又或場合は、濱御殿に夏日伴ひ行きたるに、一橋慶喜が麻の丸袖の襦袢を着したるを見て『將軍家は丸袖の夏襦袢は召さぬものぞ』とその袖を引いたとの事である。

× × ×

されば家慶の心が當初から一橋に屬してゐた事は、眞に近からんと思はるゝ。併しながら將軍の繼嗣を定むることは、固より重大なる問題で、家慶はそのまゝ逝いたが、彼の信用を得たる阿部伊勢守は、事件がやうやく發展し來るべきを豫期しないことはなかつたが、彼は最も大事をとる政治家であつて、第一新將軍家定が、一橋は嫌であるし、大奥の空氣も何となくその傾きがあつたから、彼は斯る問題の出で來らんとするを抑へ、只管時節の到來を待つて居た。



德川齊昭公肖像　(侯爵　德川圀順氏所藏)



島津齊彬公肖像　(公爵　島津忠重氏所藏)

（第三十五）松平慶永と島津齊彬

されど內外の事情は、到底この問題を閑却する譯には參らなかつた。兎に角この事が公然越前國主松平慶永と、島津齊彬との間に打合せが出來たのは、嘉永六年七月二十二日家慶の喪が發せられたる當時であつた。——一說には當時齊彬は在國であつたと云へば、先づ其頃と概說するを穩當とする——松平慶永は二十六歲の血氣正に旺んなる時であつて、彼は當時は殆ど水戶齊昭の最も熱心なる崇拜者の一人で、或は齊昭から催眠術でも施されては居なかつた乎と思ふ程の水戶信者であり、且つ齊昭より以上の攘夷論者であつた。しかも彼は田安家より越前家に養子に行き、その越前家は、尾州、紀州、水戶三家の次に位する御家門の隨一であつた。

松平慶永は當時から天下の望を負ひ、一方には水戶齊昭と親く、他方には島津齊彬とも親しく、且つ阿部とは、親類の關係にて、尚更親しき間柄であり、此の如く彼は彼自身の力としても有力であるに加へ、その門閥とその社交上の關係とによつて、いよ／＼重きを加へ來つた。

島津が實力に於ても、聲望に於ても、外樣大名に冠たることは、改めて云ふ迄もない。そも／＼この問題を持出したものは、固より松平慶永であつたが、島津も當初からその贊成者の一人であつた。而して熱心なる贊成者の一人であつた。

× × ×

島津は何故にこれを贊成したる乎。その一は彼が一橋の人物に傾倒したからであらう。併し他の一は、あらゆる政策的意味に於て然かしたものであらう。彼がその養女篤姬を將軍の御臺所となす事に就いては、松平慶永なども陰乍ら隨分骨折つてゐた。彼は或は交換的の意味にてこれを贊成したかも知れぬ。

彼の胸中は果して全くその通りであつた乎、否乎は暫くおき、彼が云ふ處によれば、その養女を御臺所として將軍につけおく一の重なる理由は、彼女を透して、養子問題を直接に將軍に吹込まんが爲といふことであつた。卽ち具體的に云へば、一橋を西城に入るゝ爲に、先づ己の養女を御臺所に入れ込むといふ譯合ひだ。これが必ずしも島津齊彬が、其の養女を將軍の御臺所とする全き動機としては受取られないが。兎に角それも一つの理由であり、若くは原因でなくとも、少くとも結果であつた

かも知れない。

兎に角齊昭は養女を御臺所とする以前から、この事には慶永と協力し、御臺所となしたる後も、西郷などは彼の命を承けて、奔走し周旋した。彼は死に至る迄この事に就いては、その意見を渝へなかつた。此に就ては齊彬から近衛家や、堀田閣老などに送りたる書簡もある。慶永は嘉永六年八月、阿部正弘を訪うて、その同意を求めたが、阿部は自分も異存はないが、これを行ふには、機會がある。それ迄は先づ他言無用と口を封じた。

（第三十六）　形勢の急轉

然るに形勢はいよ／＼急轉し、安政三年米國總領事ハリスは下田に渡來し、漸々外交問題が具體的になつて來た。當時慶永は既にその意見が當時の攘夷一點張りから進化して來た。これはその近臣たる橋本左内の爲に動かされたのである乎、若くはその客卿たる横井小楠によつて啓發せられた乎、或は他に理由があつた乎。兎に角彼の外交知識は長足の進歩をなし、これが爲に彼は、しば／＼世の所謂攘夷家から異端視せらるゝに至つたか。併し彼は幕府の現狀に滿足せず、如何にもして中央政府に有力なる將軍の代表者を必須とする事を痛切に感じ、これよりしていよ／＼養子問題に熱中し、その手を八方に延ばして同論者を求めた。

×　×　×

その中には阿波藩主松平齊裕、尾張藩主尾張中納言慶恕の如きがある。而して齊裕は徳川家と最も關係ある——即ち大御所家齊の子にして——彼は一議もなく同意したが、徳川慶恕は、未だ慶喜その人を識らず、されば容易に推擧し難く、又餘り團結すれば、かへつて親族結黨の嫌疑があるとて、容易に贊同を表しなかつた。

×　×　×

當時水戸側では、齊昭當人はその表面は、一橋はその器でない、血族の關係からすれば、紀州が將軍家にはより近くある。聲望からすれば、尾張、田安、それ／＼の人がある。不肖の兒、一橋は眞平御免を蒙ると屢々斷言したが、併し口に彼は斯く斷言する程、その心には最も熱心に、その多くの子の中の最も愛し且信じ且重んじたる慶喜の、西城に入ることを熱望し

たに相違あるまい。

× × ×

而して慶喜その人は又その父同樣、屢々辭退の口吻を洩したが、これも果して本音であるや否や、疑へば疑はれない事もない。併し彼はいづれかと云へば、政治的に大經綸あり、大野心があり、大方略があるといふ程の人でなく、云はゞ聰明、怜悧、手から口へといふ向きの人であつたから、或は時局の漸々困難なるを知りて、自ら進んでその渦中に飛込む事を衷心好まなかつたかも知れない。いづれにしても彼がその父齊昭ほどに熱心でなかつた事は明白である。

併しながら彼の懷刀とも云ふべき平岡圓四郎なる者は、遮二無二彼を西城に入るゝべく、必死の運動をした。平岡は當時に於て、最も一橋の爲に大なるプロパガンダをなし、いやしくも一橋の利益となるべき事は、大となく小となく悉くこれを宣傳せざるはなかつた。

而して一橋の爲には齊昭の最も信任したる水戸の重臣、安島帶刀の如きも亦最も熱心に骨折つた。

水戸では最初からこの事を心がけてゐたものと見えて、藤田東湖なども、うす〳〵この事に與つてゐた筈に、彼の往復した文書の上にても、猶それが窺れるが。不幸にして彼や戸田は、安政二年十月、地震の犧牲となつて去つたから、今は水戸の方でも安島を中心として、その他の人々が運動するに過ぎなかつた。

× × ×

前にも述べたる通り、一橋慶喜を、將軍家定の養子とする熱心なる主張者は、松平慶永であつた。彼は殆どその全力をこれに向つて集中した。彼の外交論は嘉永六年から日一日を經る毎に、當初の熱烈なる攘夷的熱度を薄くし、安政四、五年の頃には、寧ろ開國論者に近くまで進んだが、これに反して養子一件は寧ろ日一日とその熱度を加へ來つた。而して彼のこの意見に賛同したる重なる者は、大名中に於て、阿波國主松平齊裕、薩摩藩主島津齊彬、土佐國主山內豐信、宇和島藩主伊達宗城の徒であり、殊に伊達、山內、慶永三人は、當時の三人男とも云ふべき程親密の間柄であつて、而も長面先生とか、醉侯とか、綽名を以て互に相呼ぶ程親密であつて、この方面にそれ〴〵盡力した。

老中の中でも阿部は用心深くて露はにその意見を明言しなかつたが、併し彼の心も恐らくは一橋に傾いてゐたのであらう。彼の後を引受け、内閣首相の位地に立つた堀田正睦は、一橋の賛父水戸齊昭からは、蘭癖先生などと稱せられ、寧ろ排斥せられてゐたが、併し彼はいづれかと云へば、無我の性質にて、當初は寧ろ紀州に傾いてゐたが、漸次一橋贊成者の方に接近し來つた樣だ。

又老中上田城主松平忠固の如き彼は嘗つて水戸齊昭の爲に排斥せられて、一時老中を罷められたが、阿部の死後堀田の爲に再び引張り出されて閣老の一人となつた。從つて彼の態度には隨分松平慶永なども心配をしたが、如才なき彼はその胸中はともかくも、露はには一橋贊成者の如く裝つて、慶永等を安心せしめた。

× × ×

又當時幕吏の錚々たる者の中に於て、卽ち海防掛ともいふべき者の中に於て、これといふ有力者は殆んど皆一橋黨の中に數ふるを得た。卽ち大目付土岐丹波守、目付永井玄蕃頭、鵜殿民部少輔、岩瀬肥後守、箱館奉行堀織部正、田安家家老水野筑後守等は、いづれも一橋黨と見るべき者にて、唯だ川路左衞門尉のみは、如何にも老猾にて、その態度を明白にしなかつたが、しかも彼もその底意は固より一橋に傾いてゐた事は、皆その仲間の認めたところであつた。

又島津は專ら搦手の方から、その養女たる、御臺所篤姫の手を透して將軍家定を動かさんと試み、松平慶永も亦其の所縁を便りて、頻りに大奧の模樣を偵察せしめなどした。

而して此處に注意すべきは、一橋黨の面々は、外交問題に付いては、必ずしも一致してゐないのみならず、例へば水戸齊昭と岩瀬忠震との如きは、殆ど正に兩極を代表するとも云ふべきものであつた。岩瀬は安政條約の締結者且調印者であり、齊昭はその最も反對者であつた。

（第三十七）一橋推戴者の一致點

斯る次第で、彼等は對外問題、寧ろ當時に於ては、國家の政治に於て、第一であるのみならず、殆ど唯一の問題とも云ふべきこの問題に就いて、各々意見を異にしたるに關はらず、彼等が一橋推戴に一致したのは、兎にも角にも中央政府に有力なる將

軍若くは將軍の代表者を据置きて、然る後に初めて萬事を處理する事が出來るといふ事から割出したものであつた。

　而してこれが爲には、兩者互ひに讓歩し、赫然なる攘夷論者の水戶齊昭なども、いくらかその鋒先を和らげ、若くは開國論に傾きたる慶永の如きも、時としては攘夷者らしき保護色を被り、第一目的たる將軍繼嗣問題を都合よく運ばせんと企てた。

× × ×

　而して慶永は當局者たる堀田忠睦、松平忠固等に向つては、若しこの問題が京都から起つてくれば、幕府は朝廷の御干渉によつて、繼嗣問題を定むる事になり、從つて幕府の威信を傷つくるから、寧ろ自發的に速にこの事を決するが、幕府の爲に得策であるといふ理由をもつて盛に速決運動をなしたが。又齊彬はその養女の手許から、段々大奧の模樣が報知せられ、大奧は殆ど反對黨の巢喰ふ處となつて、到底手がつけられないから、寧ろこの上は朝廷の力を借りて、この問題を解決するの外はないと信じ、京都に向つて運動した。卽ち安政四年十月十六日附にて、松平慶永は阿波國主松平齊裕と連署して、一橋慶喜以外にはその人なき旨を建白した。その中には、

『何分宗室の中最も御賢明に在らせられ、且御年も長せられ候て、差當り御名代御務めも御出來なされ、殊に御人望も御德御座候御方然るべく奉レ存候。就いてはこの御大任外御人には御座ある間敷く、是非一橋公に相限り申べく奉レ存候』

と申してゐる。

又齊彬は同年十二月附にて、

『早く御養君御治定仰せ出され候はゞ上下一同人心安堵仕り、皇國御鎭護もいよ／＼根深に相成り申すべく、勿論御血筋近き御方當然の御事には御座候得共、斯る御時節に御座候へば、少しも御年ましの御方天下人心の堅めに相成るべく、然らば一橋殿御事御器量、御年配旁々人望に御叶ひなさるべく奉レ存候』と云つてゐる。

× × ×

　而して前に申す通り、それだけでは安心が出來ず、齊彬は近衞忠熙にその旨を告げ、京都より內勅を以て、この事を決せんと請願した。それは實に安政五年正月六日附にて、卽ち左の通りである。

『乍レ恐奉ニ言上一候。然ば西丸え御養君之儀此節別紙之通

老中え申立仕候。右ハ閣老交代之處何に處置變化仕候義根本不レ閊故ニ御座候。此節異人申立旁勘考仕候處此上萬々一之義御座候節、人心動亂仕候而は、天下之御爲可レ恐事と奉レ存候間、人望旁一橋を御養被ニ仰出一候様申立候事ニ御座候。尤紀州、田安御近親ニ御座候得共、中々競候御人物にては無レ之と奉レ存候。勿論私計にても無レ之、尼州を始御家門國持有志のもの過半同意の事にて追々申立候様子に承知仕候。右ニ付誠に恐入候得共、國家の御爲少しも早く御養君被レ爲レ在可レ然旨内勅被ニ仰出一候御事は相叶申間敷哉。尤閣老之内堀田、伊賀、久世三人は越前守より申立能々承知之よしには御座候得共、萬々一南紀之方に相成候得ば、有志之面々望を失ひ候ハ必定と奉レ存候。左候得バ天下之御爲別而奉ニ掛念一候間、何卒以ニ御賢慮ニ根本を御堅め相成候様奉ニ願上一候。尤二條様えも此節奉ニ申上一候間、何分宜敷願上候。且又御臺様にも兼而申上置御承知御座候へ共、猶亦此節申上候事に御座候。乍レ恐書添此段奉ニ申上一候。恐惶謹言。

正月六日　齊彬」

斯如く一橋黨は表からも裏からも、いやしくもその手の屆かん限りは、それ〴〵この事に力を盡した。而して京都に於ては、青蓮院宮―朝彦親王―の如きは、一方に於ては水戸以上の攘夷論者に在しつゝ、他方に於ては亦た一橋慶喜を將軍の世嗣とする方の支持者にて在した。



泥濘

（當選）

保高徳藏

一

「待つてまつせ、直き來とくれやす」

橋川の主人からかういふ電話がかゝつて來た時、丑之助はこの老人に對して幾分氣の毒だといふ氣が起きた。だが、いくら熱心に勸告しられても、もうこの上留任することは出來ない、老人が機嫌を惡くしても、それは仕様のないことだ、俺は自分の仕事に少しでも早く進みたいからな——と彼は肚の中で繰返して云つた。

もと／＼、法律上の破產といふ名目は免れたけれど、工場から機械器具や在庫品の一切を債權者團の手に依つて競賣に附せられ、同業者間の信用が地に墜ちてしまつた馬島の兄弟三人に後援して、もう一度活動の餘地を與へようといふこの老人と、もう二人の後援者達の好意は有難いものに違ひはなかつた。だが、丑之助にして見ると、父親の在世中に文學に志して東京へ飛出してしまつたのが、いろんな行き懸りで、弟等を援けるために一年間といふ豫定で工場の監督に來たことであるから、事業が失敗に終つた今日、燒跡を搔き集めるやうな仕事に何時までもべん／＼と携つてゐることは無意義なことだと彼は思つてゐたのである。

それに丑之助は、肝心の相手の弟等に失望してゐた。元來、今度の失敗の直接の原因となつた石油の蒸餾精製といふ仕事は、上の弟の辰二郎の大まかな計劃と杜撰な研究とで遂行せられたもので、打續く欠損に見かねて、局外者の彼が工場に入り込み、油にまみれ、強烈な苛性曹達や硫酸に手や顔を焼き爛らせて懸命な勞働を續けてゐるのに、當事者たるその辰二郎といひ、下の弟の羊三郎といひ、全くの重役氣分で、氣取つた洋服を着込んで郊外の住宅から毎日午前の十時か十一時頃にのつそり事務所へ顔を見せるのであつた。しかも後援者の援助に依つて僅に餘喘を保つてゐる今日ですら、さうした態度を更めないのであつた。さういふ弟達を引率して、まち／＼な意見と目的と性格とをもつてゐる後援者達の機嫌を損ねないやうに努めることは、丑之助にとつても好い加減に厭や氣のさすことであつたのだ。

ただ、辭職の時機といふことに就いては、彼は可成りに苦心をした。といふのは、彼等兄弟は、整理に際して少しの隱匿する處もなくきれいに一切の資産をバランスシートに記入して、債權者團に提供してしまつたから、丑之助には實際五十圓と餘分な金はなかつたのである。だが、彼にして見ると、震災以來三年間離れてゐた東京へ再び行つて、彼等夫婦が新しく生活を持續して行くには、せめて千圓位の金が欲しかつたのである。一方、後援者達は――同時にまた債權者達でもあつたが、競賣に先立ち、在庫品の目星しいものを他の債權者達に秘密で、棄て値同様の價格で買占めたり、粗惡な品物と優良な中身のすりかへをやつたり、可成り悪辣な行爲で三千圓以上の金を浮かせて、それが今もなほ馬島商會といふ組合の名義で遊ばせられてあつた。丑之助はその金に目をつけてゐた。後援者達の弱點につけ込む氣はないが、馬島の兄弟を援助するといふことが本當なら、その中から希望の金額位は支給してくれてもいゝ筈だと彼は考へてゐた。しかし、それには殊に長兄だといふこと以上に彼を重用してゐる後援者達の感情を害しないで、旨く自分の辭職を聽き屆けさせねばならないと、彼は機會の來るのを待つてゐたのである。

處が、その機會はたうとうやつて來た。前々夜、會合の席上で、後援者の中でも數理に鋭敏な松浦礦油店の主人が、兄弟三人が同額の高給を食んでゐては利益が薄くなるから、彼等の給料を三分の一宛減額しろといふことを提唱したのである。これは營利的の立場から云へば當然の話であるが、それでは彼等三人は非常に生活費に不自由を感じねばならなかつた。と云つて、被後援者たる彼等兄弟の立場ではこの減給案に正面から反對することは出來なかつた。辰二郎も羊三郎も當惑の色を浮べてゐるばかりで何も云はなかつた。だが、丑之助にとつてはこれは待受けてゐたやうな機會となつた。彼は早速口を開いて、

意を洩らした。「三分の一も減給されては生活にも困るから、自分の代りに安い給料の人間を傭つて、減給の代りとして、弟等の給料はその儘にして置いてやつて欲しい、自分には別に食ふべき道があるからといふことを理由にして……。

この申出に對して松善の主人は、事業家らしい大きな人道頭を「うむ〳〵」と頷かせて、ほゞ同意するらしい樣子を見せた。だが、橋川の主人と生田礦油店の主人とはウンともスンとも云はずに沈默し續けて居た。丑之助はその顏を見て、この二人は彼の辭職に不同意であることを察した。

すると推察通り、會合が終つての歸途、電車にこの二人と丑之助とが乘合はせると、橋川老人が先づ色白のお猿と云つた風の顏に不平さうな色を浮べて、甲高い嗄れ聲で云つた。

「松善はあゝ云ふけど、わしや丑之助はんの辭職には反對や」

「さよ〳〵、その通りや」と生田もそれに調子を合はせて、如何にも前垂掛けの大阪商人を思はせるやうな樣子で云つた。「わてもそない思ひました。かういふと何やけど、丑之助はんがゐやはれへなんだら、わて等今日のやうに馬島を後援してるかどうか分れへん」

これを聞くと橋川老人は額に横皺をよせ、いよ〳〵お猿のやうな表情を見せながら、相變らず甲高い嗄れ聲で續けた。

「丑之助はんがやめて、辰ちやんでも三ちやんでも工場へ行くとこ見たはれ、男のゐる時はとに角、留守になつたらあの二人の嫁はんやつたら、他所から電話がかゝつて來ても、丑之助はんの奧さんみたいに、あゝてきぱきと應對が出來へん」

電車の中の人が見るのと、變な擽つたさとを感じて、丑之助は思はず顏を赤くした。

彼はこの二人の赤すけ好意には厭な感じもしなかつたが、同時にまた純粋にその好意を受入れることも出來なかつたのだ。といふのは、彼の妻の幸子はもう三十を少し越えて、その態度にも身裝にも以前の樣子は微塵も留めてはゐないが、嫉妬をしてゐたことがあるだけに幾分魅惑的な容貌をもつてゐたし、また多少はコケチッシュな處もあつたからでもあらうか、この二人の後援者の眼は彼の妻を見る時には、いつも好色的な光を帶びるのを彼はよく知つてゐたからである。

この二人の後援者はいよ〳〵後援するといふ話が決つて、初めて工場へやつて來た時、近隣から見つて來る馬島——馬島の工場は堺筋の附近にあるだけに、皮細工、骨細工、箔細工の仕事場に圍繞されてゐた——に登場して、一々見い〳〵、こんな所にはとてもゐられん、反吐が出さうや」と大業に鼻を摘まんで云つて置きながら、その後はこれといふ用事もない時でも、いろんな口實を設けて殆んど毎日

のやうにやつて來て、彼の妻の前で、後援者振つた傲慢と温情とを金の光にぶら下げながら、とりとめもない話をして歸つて行くのであつた。丑之助はこの六十幾つの老人と、五十に手のとゞきさうな中老人を見ると、夫として彼後援者としての立場から、屈辱感と滑稽感とのまざり合つた奇妙な心持に捉はれて、變な苦笑を肚の中で洩らしてゐるのであつた。

また、彼等の好色的な心持を充分に意識しながら、樫川の老人を捉へて、「あなたは私等のお父さんみたいな氣がします」と如何にも頼り切つてゐるやうな嬉しがらせを云つて、老人を悦に入らせてゐる幸子の様子を見ると、彼は自分に對してするのか樫川老人に對してするのか、彼自身にも意識されないやうな嘲笑を洩らさずにはゐられないのであつた。彼は輕い嫉妬を感じた。けれども、もう暫くの辛抱だ、ある程度の歡心を買つて置かぬと、退職の手當に響くだらう」と、強く自分をごまかしてゐた。

それに恐らく彼、この二人の後援者には衝動的に彼を惜しむといふことの半面に、かういふ好色的な心持も動いてゐることを彼は見逃すことが出來なかつたのだ。とりわけ一番年長で、一番財力のある樫川老人は、好色の方面にかけても一番積極的でもあつた。丑之助が辭職して上京する意思を洩らしたその翌日、即ち昨日の午後、牛田と二人で工場へやつて來て、彼が所用で不在だつたので、樫川老人は彼の妻に、「丑之助はんの辭職は思ひ止まつて貰はなならん、それを止めさせるのは、奥さん、あんたでないとならん。樫川が月給のことで[illegible]いふたら、わしは弟の[illegible]やんをそれだけの月給を出してわしの方の店へ引取らうと思ふてる位やから、奥さん、旦那さんを引止め役になつとくれやす」と、かういふ意味のことを懇々と說いて、話の後で牛田が倉庫の品物を見に行つてその場にゐない間に「二十圓使ふて半端になつたが、何ぞ買ひたまへ」と云つて、十圓紙幣を二枚そつと彼女の手に握らせ、それから「一ぺん何處ぞへ遊びに行きまよか」と云つたのである。「へえ、おほきに」と幸子が云ふと、老人は眼を輝かして、「何處がえゝやろ」と膝を乗り出した。「何處でも結構です馬鹿も遊びますやろ」から彼女がいふと、老人は急に興醒め顏をして、「なんや、丑之助はんに云ふのんかいな」と云つたまゝ、ぷつつり話題を途切らせてしまつた。

丑之助が歸つてから、幸子はこのことをまるで一つの笑話のやうに話して、

「わて、これで名古屋帶を買はう」と云つて、金の入つた紙入れを帶の間に挿んで、ポンとその上を叩いたのであつた。

彼は老人の行爲を[illegible]ゐるよりも、幸子に依つて、[illegible]化され

ゐる老人を騙すやうな狡猾な心持に、内心ではにこ〳〵してゐた。

こんなことのあつた昨日の今日である。彼を送り出して來た辰子も、橋川老人の電話に就いてはかういつた。

「それは屹度、辭職は思ひ止まつてくれたつせ」

二

道頓堀川の黝色に濁つた水は、うすら寒い春風に小皺のやうな小波を立てゝゐた。白日の光に照らされて、向ふ岸に列んだ青樓の裏手も、橋の袂に繋つた蠣船も、親船の上に伏せられて、赤や紫のペンキ塗の腹を見せてゐる幾つかの貸ボートも、宛ら眠つてでもゐるやうに變に白ちやけて、燈火と鳴物の活氣に充ちた夜を思はせるには遠い風景であつた。

丑之助は窓際の食卓を挾んで辰二郎と向き合つて、この窓外の景色を茫り眺めてゐた。彼は先刻からのことをいろ〳〵に考へて見たが結局は腑に落ちないのであつた。電話で呼ばれて橋川の家に行つて見ると、そこには計らずも辰二郎が行き合はせてゐた。彼は橋川老人の物堅い留任の勸告を豫想しながら、老人に挨拶をした。だが、老人はそれには物倦さうな挨拶を返したきりで、いやに押し默つて、じめ〳〵した感じを與へるばかりで、電話を掛けた時のやうな弾んだ調子は何處にも聞かれなかつた。辰二郎も[illegible]。三人は妙な沈默に包まれてゐた。と、その時辰二郎は不意に物々しい調子で云つた。

「兄やん、僕決心して兄やんに話したいことがあるねん」

「うむ、何だ」と彼は問ひ返した。

「いや、それは歸りに話す」と辰二郎はいつた。

丑之助は彼の留任に就いて橋川老人が何事か策を廻らせて、それを辰二郎に話させるのではあるまいかと思つたので、老人の顏色に注意して見たが、一向にさういふ氣勢はなく、老人は相變らずじめ〳〵した態度で默り込んでゐた。さうして彼を電話で呼び寄せたことなどは忘れたやうにけろりとしてゐた。

彼は橋川の家を出てからも、道頓堀のこの小料理屋に辰二郎の所謂「決心した話」を聞きに入つてからも、老人が何のために電話で呼び寄せて置きながらその用件を云はなかつたのか、また辰二郎が物々しい態度で何を云はうとしてゐるのか、いろ〳〵と考へて見たが一向に見當がつかないのであつた。

時分はづれの時間だつたので料理屋はひつそりしてゐた。

「それで、話つて云ふのは何だね」と丑之助は、酒と肴が來ると辰二郎を促した。

「うむ、それはな」と辰二郎は心の準備をするもの丶やうに盃の酒をグッと乾してから云つた「兎に角、思切つて、決心していふのやよつてに、その代り僕の頼みも諾いて貰ひたいねン」

「うん、聞けることなら諾くが、一體何だね」と、物々しい辰二郎の様子に彼は不審の中にも多少の不安を感じて云つた。

「いや、兎に角、是非諾いて貰ひたいねン」と辰二郎は押し着けるやうに云つて、「頼みといふのはな、僕の話を聞いても決して興奮せんといて欲しいといふことや」

「どんなことか知らないが冷靜に聞かう」

「うン、ほんまに興奮してなや、頼むで」

こ丶で辰二郎は言葉を切つて、緊張した顔でまじ〳〵と丑之助の顔を注視した。それから、「實はな、嫂さん河田と關係してるわン。兄やんが東京へ行てた間にな……それで今でも時々逢ふてるさうや」

「ほーう、さうか」

丑之助は呻くやうに云つた。俺の妻が――と、彼は餘りに豫期しない話に自分の耳を疑つた。だが、これを聞くと、彼の心には以前に埋れたま丶になつてゐた疑惑の火がかき起こされた。

「今でも逢つてるつて、何處で逢つてるのだ」

と、彼は顫へる心を制して云つた。

「工場でや……兄やんの留守に」

「外では逢つてゐないのか」

「さあ、外では知らん」

丑之助は幸子と河田との間に疑惑を抱き始めてからは、二人の行爲に對しては細心な注意を拂つてゐたから、逢引の場所が工場だといふだけでは、妻の秘密を新しく教へられたとは思はなかつた。だが、以前の幸子の行爲に就いては彼も疑惑を抱いたゞけに、今それにはつきりと裏打ちをするやうな言葉を現在の肉親の口から聞かせられると、彼の心は怪しく亂れるのであつた。

今度の經濟的破滅の來る一ケ月程前のことであつた。彼は多忙の身を十日餘り東京に滯在したことがあつた。それは相當な額の代附を回收のためで、その回收が不能の場合には彌縫に彌縫を重ねて來た資金の運轉に忽ち狂ひを生じて破滅が立ち處に迫つて來る程重要なものであつた。しかも不得要領に一日延ばしに延ばされて、彼も可成りいらいらしてゐる最中に、大阪から電報や電話で、出資者が出來たから至急に歸れと促して來たので、彼は勇躍して歸つて見ると、河田といふ男が出資者だと云つて工場に控へてゐたのである。

「やあ、今度は奥さんや御令弟の御盡力に依りましてな、いよ〳〵出資することに決しました」と、河田は[illegible]〳〵した調子で云つた。

丑之助は、河田の古臭い皮肉の不自然的な言や、冴えないキョロンとした眼つきや、ねち〳〵した言葉の調子には、初めから好感をもつことが出來なかつた。それでも彼は前夜の汽車の疲勞を堪へて遅くまで酒の相手をした。すると、不意に幸子が云つた。

「河田はん、今夜は寒いよつてに泊つて行きたはつたらどうだす」

「さよか。そんなら泊めて貰ひまよか」河田は渡りに船といつた風に云つた。

「さうだ、お泊ンなさい」と彼は口では云つたが、思はず妻の顔を凝視した。

前夜の汽車の疲勞もあれば、六疊と四疊半きりの手狭な間どりでもあるのに、こんな中へ泊られては、丑之助にすれば久し振りで旅の疲れを休めることも出來なかつたからである。いや、それ以上に、彼は今の幸子と河田の言葉の調子に依つて、それまでにも泊り馴れて居る河田と、泊め馴れてゐる幸子を感ぜずにはゐられないのであつた。

河田が便所へ立つた隙に彼が目顔で不滿を示すと、幸子は小聲ではあるが、眼に角たてゝ云つた。

「なに怒られることがおますねン、留守中のわての苦心も汲んでくれんと」

それは、出資させようといふ大切の瀬戸際に見苦しい痴情沙汰は止めてくれと、たしなめられたやうなものであつた。

幸子は、河田との交渉をそこまで運ぶには熟練れた兵二郎の腕にかくれて、彼の留守中どれだけ苦心したか知れないと、その成功を誇り、彼に恩に被せるやうな調子でいふのであつた。

「でも、金は確かに出來るのかね」と彼が訊くと、

「それは、もう大丈夫」と、大丈夫に力を込めて云つた。

彼女は、河田が彼の店の得意先に當る丸水商會の出資者だといふだけで、河田の經濟的能力を頭から信じてゐるやうであつた。だが丑之助は、對談中にも絶えず視線の動く河田の眼つきや、ねち〳〵して直截に言葉の流れ出ない樣子を見ると、心が始終右顧左眄してゐる男のやうな氣がして、陰險と青二才とが混淆してゐるやうに感じられて、どうにも信ずる氣持にはなれなかつた。けれども腹の中では、どちらにしろ瀕死の工場だ、青二才なら大して邪魔にもなるまいし、陰險だとしても、こんな工場からなに旨い汁が吸へるものか、それに萬一彼の觀察が誤りで、幸子の信ずる通り來月早々に來る手形の決濟に一萬圓と、あと一ケ月位りの間に三萬圓の出資をするものとすれば、それこそいゝ拾ひ物だ」と考へて、話をその儘進行させて行つたのであつた。

處が、次ぎの夜も河田は電車のなくなるまで尻を据ゑてゐて、ぐづ

ぐつに泊つてしまつた。それから三日目の晩は流石に九時過ぎに一度歸りはしたもの丶、眠れなくつたといつて、夜中の二時頃にまたまた彼等を叩き起して泊り込んだのである。

かうして三晩續け樣に河田に泊り込まれて見ると、丑之助には、幸子に對する河田の心の動きが手に取るやうに感じられるのであつた。彼もまた動搖し苦しんだ。四日目の朝、彼は水道端へ洗面に行くと、そこには河田が先に行つて頻りに揚子を使つて齒を磨いてゐた。丑之助は河田のその手許を見ると、石のやうにそこに突つ立つてしまつた。河田の使つてゐる揚子は幸子のものであつた。彼はその瞬間、彼と幸子とが一緒になつた時のことを思ひ出した。

「これ使ふといとくなはれ、私の揚子やさかい」

あの朝、幸子はかう云つて、彼に自分の揚子を渡したのである。彼は三日も四日も一つの揚子を幸子と二人で使用し合つた。

「あの癖が河田に對しても出たのだ」

丑之助は呆りして平氣で幸子の揚子を使つてゐる河田の手許を凝視しながら、心の中で呟いた。

その日河田が歸つた後で、丑之助は幸子に云つた。

「おい、家庭を持つてゐる河田がかう毎晩續けて泊るのは變だね。僕の留守中なんかは一體どうしてゐたんだい」

「それは、あんたが歸りやはつてから、辰ちやんや洋ちやんと與うて、よう話が合ふよつてにだすやろ。留守中なんぞ泊りやはつたことなんぞおますもんかいな」と幸子は白々しい態度で答へた。

「さうかも知れぬが、昨夜なんぞは昨日今日の交際の僕に對しては、ちよつと出來ない遣り方だね。三晩續けて泊つた揚句だ、しかも夜中の二時だ、ほかに理由がなければ普通の人間には來られない處だ。それに今朝洗面をつかふのにお前の揚子で齒を磨いてゐたよ。あれは一體どうしたのだ」

彼は幸子の顏色に注意をした。だが、彼女は微動だも表はさないで、彼の言葉を刎ね飛ばすやうに云つた。

「あんた、えらい怪つ體なことを云ひなはるな。わてとあの人と何ぞ關係でもあるやうな口ぶりをしなはるが、阿呆らしい、よう考へて見とくなはれ。今、そんなことをしたら、それこそ、これは美人局やと思ふて、出資の話なんぞ一ぺんに手を引いてしまひまつせ。まして、揚子なんぞ何で私があの人に貸しさすものかいな。あの人が勝手に使ふたんたすやろ、こゝろ惡い」

丑之助には返す言葉がなかつた。彼は「何か證據が欲しい、動きのない證據が欲しい」と肚の中で思つた。生殺しのやうな疑惑に責められることは堪らないと思つた。だが、さう思ふだけで目的を達する

やうな方法はなかつた。彼は切迫した金融のために狼狽し、絶望的の斷末魔の中に踠きながらも絶えず幸子と河田の行爲に蛇のやうな猜疑の眼を向けてゐた。

その中に破産といふ嵐が來た。出資といふ根も葉もない河田の嘘が暴露した時には、もう絶望が眼前に迫つてゐた。債權者會議の前後に於ける債權者達の、少しでも損害を少くしようと自分勝手に立廻る無理強いと癇癪の俎上に載せられて、馬島の兄弟は可成りな疲勞と困憊とを感じてゐたのに、辰二郎のふとした手落ちから工場の抵當權を一債權者にこつそり奪はれてしまつたので、事件は一層紛糾して折角の整理案も水泡に歸し、訴訟に次ぐ訴訟に、心身ともにすり切れるやうな日を送つたのである。さういふことのためと出資の嘘が分つてから河田が暫く姿を見せたくなつたのとで、疑惑に悩んだ彼の心は一時的に鎭靜してしまつたのである

その鎭靜した疑惑が今また辰二郎の話に依つて急にむらむらと彼の心に起つて來た。

「まあ、一杯やれ」

丑之助は激動してゐる自分の心を弟に見透かされるのが厭やだったので、強いて落着きを見せて辰二郎に盃をさした。だが、それを受けた辰二郎の手はぶるぶる慄へ、酒をつがうとした彼の手も慄へるので、銚子と盃とがカチ合つた。

「どうしてそれがお前に分つたのだ」

「河田が羊三郎とこへ行て喋りよつたんや。四五日前に羊三郎の近所の玉突屋へ行てて、そこで羊三郎に會ひよつたのや」

「河田がまたどういふ譯で羊三郎の近所の玉突屋へ行つたんだ」

「さあ、それは分らん」

丑之助は、河田がわざわざかけ離れた郊外の玉突屋まで出かけて行つたといふことは、初めからこの事を羊三郎に話さうといふ目的で行つたのであることを直ぐに知つた。紛糾を重ねた債權者間の係爭が漸く納まり、二人の後援者を得て彼等兄弟が再び商賣を續けて行くやうになつてから、一時姿を見せなかつた河田がまたちよいちよいやつて來てゐたが、幸子も河田に取合はないし、彼は彼で河田に幸子と二人つ切りになる機會を與へないやうに注意してゐたので、手の出しようがない處から秘密をこんな風に暴露して來た、これは河田の惡るあがきだ――と彼は考へた。だが、その惡るあがきを輕蔑してやるだけの餘裕は彼の心にはなかつた。辰二郎の言葉に依つて油を注がれた火のやうに燃え立つた彼は、言葉の手前落着いてゐるやうな顏はしてゐるが、「おのれ卑怯者、今に見ろ、今に……」と肚の中では歯ぎしりする程口惜しがつてゐた。

「しかし冷静に考へてや、嫂さんを離縁するともせんとも、それは兄やんの考へ次第やけれど、決して興奮だけはしてたや」と辰二郎は彼の顔色を見て宥めた。

「有難う、出来るだけは冷静に考へるよ」

「うむ、頼む。僕は辛三郎もえらい困りよつて、僕に相談に来よつたのや。これはたゞのこつちやないよつてにな、僕も随分煩悶したで。しかし、どうしても僕自身が一ぺん事実を確めないかんと思ふてゐると、昨日河田が工場へ行きよるとこをはつたり逢ふたんや。それで、話があるいふて引つ張つて行て訊いて見ると、やつぱりほんまや云ふて、どうぞ兄さんには内しよにしとくなはれて頼みよるねン。僕は一つ呶鳴さしたらないかんと思ふて、君みたいな失敬な奴はないぞ、兄貴こそ知らんが、工場の者はみな君が来たら酷い目に合はして、硫酸タンクに放り込んだるいふて、中には十一時頃まで忍んでゐたものもあるぞと嚇したつたら、赤なつたり青なつたりして、どうぞ兄さんに云はんと穏びんに済しとくなアれて頼みよるねン。僕も兄やんには云ふてえゝか悪いかとえらい考へたが、これはやつぱり耳に入れないかんと決心したので打明けるのやよつてに、僕の心を汲んで、どうぞ冷静になつてゝや、これだけは頼むよつてにな……」

「有難う。出来るだけ冷静になつて解決しよう」

彼はかう云つたが、心の中はすつかり混乱してゐた。コケチッシュな幸子の白い顔と、浅黒い河田の顔とが彼の頭の中をぐる／＼と駆け廻つた。彼には食欲が少しもなくなつて、酒の味が苦がかつた。だが彼は酒ばかりがぶ／＼呑んだ。弟の手前、冷静には装つてゐるものゝ、心には一ぱい涙の溢る程口惜しがつてゐた。彼は河田のきよろんとした眼つきを思ひ出して腹を立てた。好色的な眼つきで幸子を見る橋川や生田にも腹を立てた。しかもまた、その好色振りを漫画化して幸子が話すのを得意になつてヤニ下がつて聞いてゐた自分のことを思ひ出して、自分自身に腹を立てた。青二才と軽視し、「潰れかゝつた工場だ、なに旨い汁が吸へるものか」と高をくゝつてゐた男に、その時には既にもう一番大切なものをこつそり盗まれてゐた自分のお目出たさを思ふと、前歯が肉にくひ込む程、唇を嚙みしめ自分自身に腹を立てた。さうして、かうした腹立ちは、結局幸子に向つて集中して行つた。

「畜生、俺が東京で苦しい日を送つてゐた間に、俺の心も察しないでよくそんな真似をしやがつたな、おのれ畜生!!」

彼は拳を握り締めて、幸子の顔を心に浮べながら、肚の中でこんなに呶鳴つた。

三

丑之助が工場へ歸つた時には既に四邊は暗くなつてゐた。何事も知らない幸子は平和な笑顏で彼を迎へた。

「あんた御飯はまだ」と彼女は云つた。

「いや、食つて來た」と丑之助は出來るだけ平靜を粧つて答へた。

「何處で、喜久屋？」と彼女は幾分甘つたれるやうな調子で云つたが、彼の否定するのを見ると、「ぢやア、瀧島、みやけ、それとも紫藤？」と心當りのありさうな處を列擧して、最後に、「もう分らん、どつちの方面？」と云つた。

「稻田の方だ」と彼は皮肉に云つた。

「そんなら小松原町か」と、幸子は彼が以前からよくする遊戲的な嫉妬に答へるつもりで、へら〳〵笑ひながら揶揄的に云つた。小松原町とは稻田の勤めてゐる花柳町のある町名であつた。

だが彼の心は遊戲どころの騷ぎではなかつた。幸子のこの言葉を聞くと、自分で誘つて置きながら彼は心にグーッと來る或るものを感じた

「もう戲談は止してくれ。今日はもつと眞面目な問題があるんだ」と彼は急に言葉の調子を變へて云つた。

「何だす、えらい改まつて」と幸子も流石に彼の樣子の異つてゐるのに氣づいて眞顏になつた。

「僕は率直に云ふからお前も率直に答へるんだぞ」

「………」幸子は頷いた。

「僕は今日辰三郎に忠告されたんだ。稻田がお前のことを辰三郎に告白したつて……それで過去のことはかれこれ云はないから、現在ではどんな關係になつてゐるのだ、それを聞かせて貰ひたい」

これを聞くと彼女の顏色はすつかり眞劍な色を浮べたが、返辭は齒牙にかけるにも足りないことのやうに、

「ふーン、稻田が何のためにそんなことを云ひよつたのやろ……しかしわてには過去も現在も、そんなことは關じておまへん」

「關じてない？　おい、今更そんなことを云ふのは幼稚だぞ」

「幼稚にも何にも、私には關じて居るがないからないといふより仕樣がおまへん」

幸子はきつぱり否定した。だが、自分の疑惑に對する辰三郎を通じての稻田の立派な證明をもつて來た彼には、そんな否定を信じることが出來なかつた。

「では訊ねるがね、僕が東京から歸るより幾日位前から稻田が出入の話で來るやうになつたのだ」と彼は追窮を始めた。

「一週間位前からだす」と彼女は答へた。

「やはり僕が東京から歸つて來た當座のやうに、こゝで酒や御飯を出したのだらう。さうして二人つきりになつた時もあるのだらう」と云ひつゝ、彼はその場景を思ひ浮べて心を苛ら立たせた。

「それは辰ちやんや神さんに用事が出來て出て行くやうなことになりますさかい、自然私が御飯を出さんならんことになります」

「そんな時、河田は何時頃までゐたんだ」

「大抵は九時頃だすけれど、遲い時は十二時過ぎになつたことが二度あります」

「では杉井はどうしてゐたのだ」と彼は、彼の留守中泊つてくれることになつてゐた職工のことを思ひ出して訊ねた。

幸子は少時云ひ澁つてゐたが、直ぐきつぱりした調子で、

「正直に云ひますから、どうぞ信じて疑はずに置いとくなはれ」と縋るやうに前置きして

「杉井はそんな晩は歸つて貰ふてゐました。職工にお金の話を聞かせては惡いと思ふて……」

「馬鹿ッ」と彼は思はず呶鳴つた。

このガランとした工場で、夜になれば隣り近所には全く人のゐなくなつてしまふ暗く工場に囲まれた狹苦しいこの工場で、彼の妻が河田と差し向ひで酒の相手をしてゐる場景が、今は判然り、本當に瞭然り彼の心に浮び出して來たのである。

「よく考へて見ろ、二人や三人位の人殺しは誰にも知れずにやつてしまへる程淋しいこんな工場で、十二時過ぎまで二人で飲んだり食つたりして置きながら、こんな場合に嫌疑が掛ると思はんのか」

「その點は何と云はれても私の落度だす。謝ります」と幸子は殊勝氣に云つた。

「謝る氣持があるなら正直のことを云つてくれ、正直のことを……僕はそれを聞いても決して過去のことは咎めない。たゞこれからの方針を立てたいからだ」と彼はもどかしさうに云つた。

「ほんまに正直のことを云ふてます。今後の方針を立てる必要はおまへん」

こゝでも幸子の答はきつぱりしてゐた。だが、以前からの疑惑が先入主となつてゐる彼には些かの効果もないばかりか、寧ろその反對の作用をさせずには濟まされないやうな、或る必要以上の慾望に驅られてゐた。それは化膿した腫物を掻くやうな苦惱の快感があつたからである。

「それなら假りにお前は何ともないとして置いてもだね、河田の方でお前に何か仕掛けて行きはしなかつたかい」

「いゝえ、……なんにも……」

彼女の返事は蝸牛が殻の中に入つて蓋をしてしまつたやうに、彼に追窮の爪を掛けるやうな隙を少しも與へなかつた。彼は焦燥した。過去の彼が目撃したあれだけの事實と、現在その相手の河田の告白があるだけに、幸子の返辭が否定である限り、彼は絶對にそれを信じることは出來なかつた。彼は自分の望むやうな告白を幸子にさせようとして、夢中で幸子を責めてゐるのであつた。だが幸子は、彼の怒を鎭めるやうな殊勝氣な態度で悉く自分の上に降りかゝつた疑惑を否定した。彼は、幸子が河田に手紙のやうな證據になるものを一切與へてゐないので、彼がどんな疑惑を抱いてゐようと、河田がどんな告白をしてゐようと、自分さへ否定し通せばそれで濟むのだと彼女が思つてゐるやうに考へた。若しさうだとすれば、何といふ圖々しさだらうと思つた。そして、さう思ふだけで、彼の怒と焦燥とは倍加した。

「貴樣はそんなことを云つて隱すのは、まだ河田を愛してゐて彼奴を庇つてやらうと思ふからぢやないか」

彼は腹立ちまぎれに出鱈目な非難を幸子に浴せかけた。

「そんなことありますものか」と幸子は絶叫するやうに云つた、「見せられるものなら、どないしてなと私の心を見せたい位だす」

この言葉は可成りた力をもつて彼を動かした。疑惑の虜となつてゐる彼にも、過去の事實は兎に角、現在の彼女の心持に嘘のないことは首肯することが出來た。だが、それだけでは無論彼は滿足することが出來なかつた。やはり彼女の口から、彼女の過去に對する告白を聞きたいといふ欲望に驅られてゐた。

「河田と何處かへ行つたことはないのか」

「いゝえ、辰ちやんや幸ちやんが河田を招待しようとしましたが、現金がなかつたので、二人に先に行てもろて、わてが松井さんでお金を都合して後から持つて行つたことがおました。それつきり……」

幸子は最後の「それつきり」といふ言葉を斷定的に強調して云つた。それが却つて彼の記憶に微妙な刺戟を與へた。彼は先刻辰二郎の話を聞いた中に、彼女が河田を招待するのだといつて、河田と中村といふ御帳係を連れて、辰二郎のよく客を招待した高樓へ行つたことがあるといふことをフト思ひ出した。さうして幸子の言葉が強調されてあつたゞけに、妙に喉られるやうな心持になつて、彼は念を押して訊ねた。

「きつとそれだけかい」

「えゝ、きつと」

答がきつぱりしてゐたゞけに、彼はたうとうこの女の尻つ尾を抑へてくれたぞと思つた。隱すところを見ると、御帳係の中村位はどうに

でもなるのだから、或は――彼の心には、彼にも記憶のある、道頓堀川に臨んだ、竹の家といふその青楼の座敷に幸子と河田が二人つきりでゐるシーンが自然に浮んで來た。彼はくら〳〵ッと眼の眩む程の神經的な興奮を感じた。

「嘘を吐くなッ」と彼は思はず大聲に怒鳴つた。「貴樣、河田と竹の家へ行つたぢやないか。その拂ひがまだしてないので、辰三郎のところへ請求に來て困るつて辰三郎が云つてたぞ。そんな恥さらしをして置いてまだ白らばッくれるのか」

から怒鳴つてゐる中に、彼は自分の聲に餘計興奮して、こみ上げて來る衝動に思はず幸子を突き飛ばした。幸子は疊の上へ毬のやうに轉がつた。

「惡かつた、わて、うつかりして忘れてゐました」と彼女は起き上るなり素直な調子で謝つた。「しかし、その時でも、わての行動は調べてもろたら分ります。わては河田の奔走が本當やと思ふたので、一ぺん會らんならんと思ふて、帳場の中村さんと一緒に連れて行て、わてだけは三十分程で歸りました」

「云はれてからの辯解は役に立たんぞ」

「だから、わて謝つてます。しかし間違ふたことは決してしてゐまへん。たゞ、何でも河田に出資させたいと思ふて一生懸命だしたので、竹の家へも連れて行きましたが、わてのことは首をかけて誓ふてもよろしい」

それからは、結局同じやうた問答が繰返されただけで、話は少しも進展しなかつた。以前の疑惑の本體を今日こそは膽りと掴んでやらうと、勇ましい意氣込みで歸つて來たのに、結果は同じことで、疑惑は依然疑惑として、一層深い懊悩の底へ彼を陷ち込ませて行つた。

夜が更けてからも彼は容易に眠ることが出來なかつた。とりわけ彼を苦しませたものは、彼の妄想が描く幸子と河田とが二人つ切りでゐるいろいろな場景であつた。彼は寢床の中で輾々した。また、破綻前のあわたゞしい幾日かを、根も葉もない出資話で一層多忙に疲れさせられた時にも、「まあ〳〵」と胸を押へて辛抱してゐただけに、河田に對する彼の憤懣は心の中で一層荒れ狂つた。

「河田の奴、どうしてくれよう」

彼はから呟き〳〵した。そうしていろんな復讐の方法をあれこれと獨りで妄想した。

「さう云はいでも、あんたの苦しみはよう分つてゐます。河田の奴め、ほんまにこの復讐をせいで置くものか」

幸子も口惜しさうに齒ぎしりして云つた。

四

空は曇つて、行き過ぎた冬がまた二三步後もどりしたやうな寒い天氣であつた。彼は正午近くなつても寢床から起きやうとしなかつた。

「さうだ、幸子め、ひろ子の時の復讐のつもりで、こんなことをしやがつたのだな」

彼は頭からすつぽり蒲團を被りながら、忌ま〳〵しげに口の中で呟いた。妄想に馴れた彼の頭には、去年の夏から半年程の間、戀愛關係の續いてゐた或る撞球場の、色の白い、肌の濃い、丸ぽちやのひろ子といふ娘の顏が瞭りと浮んで來た。白痴的な氣持から、彼はその娘のもつてゐる魅惑的な笑顏や肉體を享樂するもの丶やうに、記憶の底から探り出してゐた。だが、もう一度「復讐」といふ言葉が彼の頭に浮んだ瞬間、彼はスツと心の寒くなるのを感じた。彼は今、その娘との戀愛關係が、幸子のために發見せられてからも、なほ未練が殘つて、一と月程ぐづ〳〵に關係が續いてゐる中に、夫婦の間にたつた一人しかなかつた子供の明子が、五歳の春を迎へたばかりでぽつくり亡くなつた時の幸子の心持にぴたりと突き當つたのである。彼は肺炎の爲に多少窶れの見えた明子が、病院でその小さな體を看護婦に押へつけられ、カラシ濕布の烈しい苦痛に叫びかれ、幸子の手に縋りつきながらも彼を呼び續けてゐた、あの死ぬ二日前の夜にも、呪詛にも近い情熱と綱引きをしてゐたことを思ひ浮べた。子供は死に、夫は他に情婦をもつてゐる——かういふ不幸に立つた時の彼女の怨恨を思ふと、彼は全く慄然と心の寒くなるのを感じたのである。

「今こそ思ひ知つたか」——

表面では何氣なく裝つてはゐるが、何處かでかう叫んでゐる幸子の魂の聲が、彼には瞭り聞えるやうな氣がした。死の斷末魔の苦しい子供の喘ぎ聲は、無情な父を怨む子供の呪ひの聲とも聞え、また薄倖な夫に對する妻の怨言とも聞えて、彼はこれ等の記憶から眼も耳も蔽ひたいやうな思ひをした。

「それも、俺一人の罪ではないのだ。一半は、幸子、貴樣もその責めを負はねばならないぞ」彼は苦し紛れに心の中でこんなにも呟いて見た。

彼女を落籍して圍つてゐた男の執拗から逃れるために、二人が東京へ逃走してからは、二人の口を糊するために、また大阪に殘した彼女の養父を養ふために、無名な彼が、宛ら埃溜を漁り歩く野良犬のやうに、雜文や童話や飜譯の下譯などの安價な仕事に、心の休息する暇もない生活を送つてゐたことに對して、彼女は幾分理解の缺けた悋氣

な處があつた。そんな調子で進んで行けば、何時まで經つても彼は下積みの生活に甘んじてゐなければならなかつた。だが、それでも彼は少しの傑作を作つてゞも、一流的の作家をやらうと努力してゐたのに、その豫定を狂はせたのは彼女であつた。そこへ明子が生れた。それからは一層生活苦は彼の上にひし／＼と壓して來た。彼は一層勤勉な野良犬のやうに、彼方此方と仕事を探り歩いた。處が、明子が生れて三年目の夏、彼女は深い理由もないのに、この悲慘な野良犬を見棄てゝ、自分の持物を賣り拂ひ、明子を連れて遮二無二大阪の養父がたつた一人で住んでゐる侘び住居へ歸つて行つたのである。尤も、大戰中の好景氣時代を人氣のある藝妓として派手に暮し、續いて圍はれ者の贅澤三昧な生活を送つて來た彼女に、無名な貧乏文士の生活は辛いものであつたかも知れないが、五年間の夫婦生活に彼の仕事を理解しない處に、彼女の我儘と愛の不足とがあつた。彼はこの無情な妻と斷然別れようと思つた。だが、明子に對する愛情がそれを許さなかつた。彼はそれまで妻に對して持ち續けてゐた純粹一徹な愛情が一時に冷却して、宛ら箍のゆるんだやうな心になつたのである。

「俺の心持をこんなにしたからこそ、俺は餘所の娘を愛するやうになつたのだ」

彼はこんなに自分の心に囁いた。だが、それは要するに淋しい辯解に過ぎなかつた。明子を亡くした時の悲痛は、彼も彼女も共通のものであつたが、彼はその上にもう一つ、今日彼が嘗めてゐるやうな苦痛を彼女に與へてゐたのである。其の、彼女の愁嘆を思ふと、彼はいくら彼女に對する不滿を持出して來ても、力に於いては足許へも及ばないやうな感じがして、どうにもならなかつた。

「明子はあんたが殺したも同然や。これだけは私一生怨んでやる」

あの當座、よくかう云ひ／＼した幸子の言葉を彼は思ひ出した。彼は幸子に對する心持が弱つたのを感じた。

「結局、俺にも罪があるのかな」と、彼はかうも思つた。だが油斷からぬッと首を出すとそこには理窟があつた。理窟はさう簡單に彼に心持を轉換させることを許さなかつた。

その朝も、普段と變りなく起きて、家事向きのことから商賣上のことまで、平常と同じやうにしてゐた幸子が、朝の支度を濟ませて、彼の枕許へ來て、遠慮勝ちに、

「あんた、御飯が出來てまつせ」と云つた時、

「僕はいらん」

から彼は、背を向けたまゝで突つ放すやうに云つた。幸子は、「さう」と遣る瀬ないやうな返辭をして、彼方へ行つてしまつたが、彼女もそれつきり朝飯を食べなかつた。それから晝になつて彼女はまたやつ

て來たが、彼もまた同じやうに突つ放した。

「俺の時にはサッパリと告白して謝つたのに、あいつは強情でそれをしないからいけないのだ」彼は自分の獨斷をこんな風に自分に辯解した。

　彼はまた河田に對する憤慨が身内にのたうち廻るやうに思つた。河田がまだ出資話の馬脚を露はさない頃、「羊三郎君はかういふと何やけれど、商人としてはまだもう一つ修養が足りませんなア」とか、「僕が出資してしもて工場の基礎が定まつたら、僕は奧さんにも月給を上げないかんと思ふてるんや」とか、よくこんな風な立ち入つた、丑之助の立場から云へば無禮なとまで思はれることを云つたが、こんなこと位で喧嘩してはと、胸を擦つて彼は我慢して來たが、さういふ河田の面皮を剝いでゐないだけに、今度のことに思ひ及ぶともうぢつとしてゐられないやうな口惜しさが心をかきむしるのであつた。そして幸子がさういふ河田に許したのかと思ふと、河田に對する口惜しさが幸子にも共通のものとなつて、彼の心を一層頑なにして行つた。彼は不機嫌に數時間、一言も幸子に言葉をかけなかつた。その無言は千萬言にも勝る責め道具であることを彼は知つてゐた。幸子も惱んでゐるらしかつた。「もつと惱め、もつと惱め、貴様が自分のことを告白するまでは、うんと惱ましてやるのだ」と、彼は呪つたやうな[illegible]で心に繰返して云つた。

　彼は幸子の動作を見てはゐないが、その氣勢に依つて、彼の無言の言葉がだん〳〵幸子に影響して行くのを感じた。幸子は摑まれた蟲がだんだん萎れて行くやうな感じを彼に與へた。彼は、彼の言葉を待つてゐる幸子を感じた。「貴様も強情だが、俺も今日こそは強情を張り通すのだ」と彼は獨りで力んだ。心の底ではベソをかくやうな氣持でゐながら……

　夕方近くなつた頃、幸子は彼の寢てゐる背後の袋棚を開けてパシャパシャと何かの紙片をいぢくつては、しく〳〵啜り泣いてゐるやうであつたが、彼は氣にも留めずにゐた。すると、ものゝ五分と經つかたぬに彼女は彼の枕許へやつて來て襖から斜に云つた。

「わたし、かうしてゐたら、あんたの迷惑になりますから、上町のお養父さんのとこへ歸ります」

　この言葉が終るか終らぬかに、彼女はゲーッと烈しい吐音を始めた。何か服んだな――といふ考が、この瞬間今し方の紙片の音に依つて彼は連想した。彼はいきなり寢床から刎ね起きて、疊の上に突つ伏してゐる幸子に抱きついた。

「どうした、どうした。何を服んだのだ、さッ、早く云つてくれ、早く、早く……」

彼は夢中になつて叫んだ。幸子は、耳の附け根まで真つ赤にして、胸を波打たせながら二度三度と吐瀉を續ける。彼はその背を擦りながら四邊に眼を配ると、枕棚の前に藥の包紙の擴げたのが幾枚も丁寧に重ねて置いてあつた。生憎その日は定休日で、工場の方にも事務所の方にも誰もゐなかつた。彼は狼狽して、かゝりつけの醫師に電話をかけたが、往診中で夜にならぬと歸つて來ないといふ返辭だつた。彼は一層狼狽して、心當りへ電話をかけて弟等を捜した。弟等は折よく本郷にゐたので、簡單に事情を話してすぐ來るやうにと頼んだ。幸子の吐瀉は尚ほ續くので、藥品の智識のない彼は、手遲れになりはしまいかと、うろ／＼した。

「さあ、何を服んだのだ、云つてくれ。今こんなことをされちや、困るのは俺一人ぢやないか、さア、何を服んだのだ、云つてくれ」

彼は泣きさうな低聲で云つた。

「心配せんとおいとくれやす。何でもおまへん。放つといて貰ろたらよろしい」

幸子はかう云つたまゝで、また默つてしまつた。彼はいろ／＼と問き訊したが、幸子はいつでも同じことを云ふばかりであつた。

「決して自殺するのやおまへん、心配せんと放つといとくなはれ」

だが、彼には却つてそれが氣味惡く感じられた。彼は狼狽しながらもいろ／＼思案して後に就いて考へてゐた。その時チラと彼の頭に浮んだのは、幸子の服んだ藥が彼等が新婚旅行へ散歩の時に或る藥局で彼女が特別に註文して調劑して貰つた最も強い催眠劑であつたことだ。彼女はそれをあるだけ七回分服んでしまつたのである。彼は一方の活路を見出したやうに急いでその藥局へ電話を掛けて、大體のことを話して、その藥がどの程度に人體に作用するものであるかを訊ねた。すると返辭は案外であつた。

「多分御心配はいりませんでせう。三四日も眠り通しに眠る位で生命に關するやうなことはありません。尤も時間が早やければ吐瀉させて藥を出してしまふと、何の作用も起らずに濟みます」

彼は先づホッと安心した。有難いことには彼を驚かせた吐瀉は却つて最も理想的な手當の方法と一致してゐるのだと彼は思つた。だが次ぎの瞬間には、誑かされたやうな氣がした。「何アんだ、幸子め死ぬつもりで服んだのではなかつたのか」と彼は思つた。

「でも私、昨夜は一睡もしないし、今日は今日であんたの苦しんでゐるのを見てゐると、頭が病めて重くつて辛くつて、こんな思ひをする位なら、せめて一日でも二日でも譯が分らぬまで眠つてしまつたらえゝと思ふて服んだのだす」

彼が訊ねると幸子はかう答へた。これには幸子が彼の無言の裏から

逃れるための手段も幾分かまざつてゐたことが、彼に察しられた。ただ彼は腹も立たなかつた。寧ろ、また[illegible]のやうに蒲團の上に突つ伏してゐる彼女を見ると、彼は彼女を憐れに思つた。さうして朝から續けて來た意地張りな氣持が心の中に影も形もなくなつてゐるのに彼は氣づいた。

「俺はやつぱりだらしもなくこの女を愛してゐるのか」と彼は自分自身に呟いた。

三十分ばかりして辰二郎が息せき切つてやつて來た。彼は弟の顏を見ると、先刻狼狽して大袈裟な電話を掛けたことを氣恥しく思つた。

「どうや、嫂さんどうもないか」と辰二郎は彼の顏を見るなり云つた。

「吃驚させて濟まないね。いゝ工合に藥を出したので、どうやら無事に濟むらしい」と彼は答へた。

「さうか、それはよかつた。こんなことで嫂さんに死なれでもしたら、それこそ僕等世間に顏向け出來んやうになると思ふて、えらい心配したで」

彼は弟に對して恥しく思つた。

「嫂ちやん、心配さして濟んまへん」と、投げ出されたやうに壁際に轉がつてゐた幸子が低聲に云つた。

丑之助は辰二郎が來たので、今迄の[illegible]やうな氣持がニッと開けて、明かつた。出來ることなら今夜は少し遅くまで[illegible]たいと、心から思つた。で、彼は辰二郎に訊ねた。

「お前今晩別に用事はないかね」

「何や、何ぞ用事があるのか」

辰二郎の返辭は案外無愛想な處があつた。彼は稍や期待を裏切られたやうな不滿を感じて云つた。

「用事があるんだつたらいゝよ」

「實は靜木と晩に會ふ約束がしたアるのでナ」

これを聞くと丑之助は一層不滿を感じた。靜木とは辰二郎が兵隊にゐた頃の飲み友達で、二人が晩に會ふといふことは無論飲酒の約束であることが彼にも察しられたからである。それで彼は強いて頼むやうに云つた。

「さうか、僕はお前に用事がなかつたら、今晩は少しこゝにゐて貰ひたかつたのだが」

「さうやなア」と辰二郎は生ま返辭をした。

彼は弟に親身な心持のないことがいよいよ不滿になつた。昨日河田と幸子のことを彼に打ち明けた時の、彼のことをあれ程心配してくれてゐるやうな態度がガラリと變つて、今日は彼のこの[illegible]態度を

飲所にして、友人と日曜の慾を滿たしに行くことに急である辰二郎の心持が冷たく白らけて彼の心に映じた。

「酒を飲まうか」と彼は自棄的に云つた。

「うむ」と辰二郎は仔細らしく首を傾けたが、直ぐ決心したといふやうた調子でキッと首を上げて「うむ、のも」と云つた。

二人は殆ど無言で酒を飲んだ。辰二郎は飲みながらも、暗くなりかけて行く屋外の光を氣にしてはちよい〳〵腕時計を眺めた。それがまた彼の神經を苛ら立たせた。だが、いゝ加減飲んだ時分に半三郎が入つて來た。しやれた洋服を着込んで、散髪をしたてののつぺりした顔をしてゐる。少くともこの場の空氣にはそぐはぬ間のぬけた悠長な感じのするしやれ姿であつた。この二人の樣子、破産前も破産後も少しの變化もない樣子を見ると、丑之助はこの時抱き出して來た二人の義弟の背後へしよんぼり坐つた幸子の樣子に、何とはなしに慨然たる感じにうたれた。「さうだ、この女もやつぱり、どうかして工場を生かしたいと思つて、熱心に努力してゐたのだ」と彼は肚の中で思つた。この心持が彼をして二人の弟等に次ぎのことを云はせた。

「お前達はどう思ふか知らんが、俺には今度の事件の眞僞が分らないのだ。河田はどう云つたか知らんが、幸子は絶對に變な關係はないといふし、確實な證據もなし、からなれば本人以外に眞僞の分るのは神樣だけたつて、俺としては、幸子が河田を愛して居ない限り、關係しやうとは思はない。俺はこいつを愛してゐるのだ。まして眞僞が分らないのにそんなことは出來ないからね……だが、お前達は關係があると思ふのかね」

「僕はあると思ふ」と言下に辰二郎が答へた。

「僕もや」と半三郎も續いて云つた。

「河田の云ひよつたのを聞くとなア」

「そや、河田は初め僕とこイ來よつて、嫂さんのことをどう思ひよるかはる、兄さんと一緒に東京イ行きやはつても直き歸つて來やはりまつせて云ひよつてなア、僕はわてあの人に誘惑しられましたんやて、頭かき〳〵とう〳〵今度のことを白狀しよつたんや」と、口の重い半三郎が、「頭かき〳〵」といふ處でクスリと半分笑ひを洩らして云つた。

丑之助は半三郎の家庭で、河田のおどけた身振りに興じたがら彼等の夫婦生活の噂をしてゐる光景を思ひ浮べた。

「そやよつてに、兄やんも嫂さんと別れる別れんは、もう一ぺんよう確めてからにしたらどうや」と辰二郎が云つた。

彼は今、「俺はこいつを愛してるのだ」と云つたばかりなのに、弟等はそんなことは眼中にないらしい樣子で、どうやら彼に幸子を離別させようとしてゐるらしかつた。それが彼には腹立たしかつた。尤

も、義弟として兄嫁の不行跡を憤慨する餘りに出た言葉でないことはないか、それだけでは餘りに不自然に感じられたのである。彼は胸の中で呟いた。何だ、貴様達は幸子にそんなに威張れる立場かい、俺が東京へ行つてた留守中、手形の決濟に困つて千何百圓の金の融通をして來て貰つた時は何と云つて幸子に感謝したのだ、その他財政上のことでも金融のことでも幸子はお前達の役には立つてゐるが、邪魔をしたことはちつともないぞ、それに今度のことでも、出資の相談に行つて最初に河田を引張つて來たのは、さういふ辰二郎自身ぢやないか――かう思つて來ると、彼はいよ〱幸子が憫れになつて、弟等にいよ〱腹を立てた。さうだ、俺達夫婦が後援者の間に評判のいゝのは、幸子が弟等のことを後援者につゝ突くからだといふ僻みをもつてゐやがるのだ――かうも彼は思つた。

「別れる別れないは僕にまかせて置いてくれ、それは僕一個の問題だからね」かう云つてゐる中に、今度の事件に就いても多分な嘲笑と好奇心とで迎へてゐるらしい弟等の態度が想像されて、彼は急にむか〱と腹立たしさがこみ上げて來た、「それより僕はお前達の態度が不滿だ」と思はず彼は呶鳴つた。

「何が不滿や」と辰二郎も氣負つて云つた。

「僕がお前達だつたら、河田がそんな不面目な態度で兄貴の恥辱になるやうなことを喋るのを聞いたら、其の儘は聞過でなしにその場で殴り倒してゐるよ。僕はお前達の仕事を助ける場合でも、兄としてこれ位の氣持はしよつちう抱いて來たのだ。殊に今度のことは工場の用事で俺が東京へ行つてる留守中の出來事で、しかも工場に關係したことから起つた事件ぢやないか それにお前達はよくもおめ〱兄の侮辱されるのを聞き流してゐたね―

「違ふ〱、兄貴の云ふことは分らん」と辰二郎は一層氣負つて云つた。

「何が分らんのだ」と丑之助も烈しい聲で云つた。

「……………」

辰二郎は返辭をしなかつた。丑之助も一言も發しなかつた。少時沈默が續いた。すると不意に、先刻からちよい〱暗くなつて行く戸外と、自分の腕時計とを氣にして見てゐた辰二郎は、いかにも悄然のため座にゐるに堪へないと云つた風な樣子で、

「失敬する」と、かう棄て科白めいたことを云つたかと思ふと、プイと立つて行つてしまつた。

いゝ口實を見つけて出て行つたナ――と思ふと、丑之助はむら〱と怒氣が頭に上るのを感じた。

「あいつは心のピントが合はないのだ」と彼は吐き出すやうに云つ

た。
　少時、息苦しい沈默が續いた。この間に活動してゐる胜之助の心は、またしても瀬田に對する憎惡の情に驅られて、彼は夢中で立ち上つた。
「俺は行つてくる。どうしても瀬田の奴に制裁を加へて來てやるのだ」
　かう叫んだかと思ふと、彼は次ぎの瞬間には、主婦が何か云つて止めてゐるのを背後に聞き流して、戸外へ飛び出した。彼は火のやうになつて暗い道を步かく急いだ。さうして電車通りへ出ると、折よく來合はせた圓タクに乘つて、瀬田の家へ走らせた。彼は瀬田の家へは初めて行くのであつた。「畜生、今晩こそは酷い目に遭はせてやるぞ」苛ら／＼した神經にふさはしいやうなスピードで疾驅する車の中で、彼は拳を握りしめながら獨語つた。やがて聞き憶えてゐる番地所の傍で車を捨てゝ、いゝ加減暗い横町を捜し廻つた。
「御免下さい」
　彼はやうやく見出した瀬田の家の格子戸を開けながら、慄へる心を壓へつけて云つたが、返事はなかつた。彼はもう一度、前より大きな聲で云つた。
「はい」と寢ぼけたやうな女の聲が奥の方でした。
　それから間もなく、如何にも寢た後らしい、二十八九の高い額をした瀬田の細君が寢間着姿のぼんやりした顔つきで出て來た。
「僕は馬島ですが、瀬田さんは居られますか」と、彼は鋭い語氣で訊ねた。
「へえ、只今留守でおます」と氣のぬけたやうな聲で細君は答へた。
「さうですか」と彼も幾分氣ぬけがしたやうな調子で云つたが、思ひ直して、「何處へ行かれたんですか、そして何時にお歸りになるのですか」とまた訊ねた。
「何處へ行きましたか、毎晩のことで……それに毎晩十一時か十二時やないと歸つてけえしまへん」と、瀬田の夜遊びの不平をありありと色に出して細君は云つた。
「さうですか」
　彼は本當に氣ぬけがしたやうに云つた。だが、まだ諦め切れぬやうな調子で時計を見た。時計は九時を過ぎたばかりであつた。
「それでは、また來ませう」
　かう云つて彼は戸外へ出た。さうして暗い道路へ出るなり、しまつた、瀬田の歸るまで上り込んで待つてゐればよかつたに――と思つた。だが、さうかと云つて引きかへすのは今更臆劫であつた。よし、それぢやア、この暗い横町で待伏せしてゐて、うんと懲らしめてやら

う――と彼は思ひ直した。それから、ものゝ半時間程、暗い道をあつちへ行き、こつちへ行きして待つてゐたが、靜かな空氣と冷たい夜氣とが、彼の熱した頰を冷やして、彼をだん〳〵沈靜させて來た。彼は結局、河田を懲らしめた後の、河田と自分の惨めな狀態を考へるやうになつた。

「さうだ、同じ制裁を加へるなら、もつと考へてしなくちや駄目だ」

と彼は自分に自分で呟いた。

彼は踵を返した。さうして來がけとはすつかり落着いた心持で、早や淋しくなつた道を、工場の方へととつて返した。

五

翌日の午後、工場の彼等の部屋へ橋川の爺さんがひよつこり入つて來た。老人は彼等夫婦を前にして、火鉢に向つて小さな體を重々しさうにどつかりと坐らせた。相變らず色の白いお猿のやうな顏をして、一と眼で分る程な上等のラシヤの洋服を着込んで、チヨツキの兩側のポケットに、小柄な體には不似合ひな太い金鎖を架けてゐた。この老人に大阪に於ける自社のガソリンの販賣權を與へてゐる帝國石油株式會社のことを、油屋仲間では「帝石」と略して呼んでゐるのに、この老人だけはどういふものか、「帝國會社、帝國會社」と特別な呼び方をし、輸入のガロンのことを、また「ガラン、ガラン」と、片言を云つて、臆面もなく押し通してゐるのであつた。丑之助は、最初これが可笑しくつて隨分耳障りになつたが、幾度か聞いてゐる中に耳馴れてしまつた。この老人には、かうした、間違つたことでも平氣で押し通す「橋川流」とでも云つた、押しの太い處があつた。

「やあ」と老人は二人の挨拶を輕く受け流したまゝ、悠つたりした手つきで煙草を取出して、ぷか〳〵喫し始めた。

丑之助も幸子も手持無沙汰でその前に坐つてゐた。

可成り長いことしてから、老人は彼の顏を見ないで、眼を火鉢の中に落しながら、ポツリとこれだけのことを云つた。

「わしもあんたに居てもらひたいんやがなア」

それは口先きだけの熱のない調子であつた。去り行く者は敢て追はない――といつた風な調子があり〳〵と讀みとれた。だが、この言葉に依つて、丑之助にはこの二三日、幸子のことで頭から消えてゐた辭職のことが、またいろ〳〵と考へられて來た。

だが、それにしても、彼の留任に就いてあれ程熱心であつたこの老人が、一昨日電話でわざ〳〵彼を呼び寄せて置きながら、終に用事らしいことは何一つ話しもせなかつたのも、彼には不審に思はれるのに、今日またこの冷淡な態度はどうしたことかと、彼はいよ〳〵不思

氣に思はずにはゐられないのであつた。

電話が掛つて來たり、作業場の方に用事が出來たりして、彼は三四度座を外したが、何時歸つて來ても老人はむつつりして碌に物も云はなかつた。妙にぎこちない沈默がその場を支配した。丑之助は、老人が彼等に對してこんなに冷淡に餘所々々しくしてゐながら、何のために何時までも、むつつりしたまゝこゝに坐つてゐるのか判斷がつかなかつた。その中に一時間程の時間が經つた。すると、老人はやつと腰を上げて、結局彼には何のために來たのか、疑問のまゝで歸つて行つた。

「橋川さん、一體何のためにやつて來たのだね。ウンともスンとも云はずに煙草ばかりふかして消えるやうに歸つて行つたが」と彼は不思議さうに云つた。

「さあ、さうでもおまへんやろ」と幸子は彼の言葉を否定した。

「どうしてだ。では僕のゐない間に何か云つたのか」

彼は思はず眼を瞠つた。

「あのね」と幸子は擽つたさうな微笑を浮べて、「あのお爺さい、あんたが立つて行つた間に、丑之助はんか辭職してもあんたは決して心配せえでもよろしいぜて、わてをつかまへて云ひましたわ」

「ふーむ、ではもう辭職を引留めないのか」

「それや、かうなつたら一寸引留めにくいしえ」

「どうして？　まさか河田のことが知れたんぢやあるまいね」と彼は思はず口走つた。

「いゝえ、知れてますの。辰ちやんが云ふたんだす」と幸子は苦笑を浮べながら云つた。

「なにツ、辰三郎が？」と彼は意外なことに一寸面くらつた形で、「馬鹿だなア、何故こんなことを他人の耳に入れるんだ」と呟くやうに云つた。

「それはた、自分では思案がつかん、どうしたらよろしいかと橋川へ、相談をもちかけて行つたんだす。處が橋川は、こんなこと、わしからは工合が悪うて兄さんに云はれへん、これは辰ちやん、お前からいふて。わし等は何も知らん態にしといて貰はな困ると云はれたのやさうだす」

「またどうしてそんな事がお前に分るのだ」

と彼は不審さうに訊ねた。

「昨夜辛さんから聞きました。あんたが怒つて河田のところへ行きそなはつた間に、橋川から心配して様子を探りに電話を掛けて來たのへ、ひよいと辛さんが出たんだす。それで、電話の話を聞いてゐるわてには、辛さんも默つてゐることが出來んやうになつて、仕様ことなしに打明けたのだす。しかし、若しこの事が兄貴に知れたらえらい怒るよ

つてに、これは絶對に秘密にしといてくれて、半さん、くれぐも頼んでゐましたわ」

「さうか、それですつかり分つた」と彼は思はず呟した「一昨日橋川は自分から電話で呼んで置きながら、何も云はずに僕を歸したのは、僕の行く前に辰二郎が行き合はせて、すつかりそのことを話してしまつたから、橋川の爺さん、呼びは呼んだものの、もう辭職の引留めが出來なくなつて、それであんなに默り込んでしまつたのだね」

「わてもえらいこと喋られたと思ひましたが、今更もうどう仕樣もないと思ふてます」

「これで俺達夫婦に旨くケチがついたわけだね」と彼も苦笑を洩らした。

「えゝ、橋川や生田が今まで餘りわて等に好意を持ち過ぎてゐましたので、へんにし（一種の嫉妬）でつい云ふ氣になつたんだすやろ」

「では橋川の爺さんはそのことでは何にも云つてはゐなかつたか」

「えゝ、知らん態といふだけに、そのことでは別になんにも……けれどもほかのことで、また怪つ體なことをいふてましたわ」と幸子は探つたさうな笑を浮べて云つた。

「どんなことだ」と彼は聞き耳を立てた。

「今日もまた、あんた東京へ行くまでに何處ぞへ一ぺん行けへんかて云ひますねん。わては今日も白らばくれて、おほきに、馬鹿も遊んでお伴しますやろと云ふてやると、ふーン、いつも丑之助さんにぶぶぶふいふねンなアと云ふたきり默つてしまひましたわ」

「河田のことを聞いてから、今度はわしも一と口つて役にたつたのだらう」と丑之助は皮肉に云つて苦笑を洩らして、「成る程、それを聞いてあの爺さんがやつて來た理由が初めて分つた……あゝあ、それにしても俺達夫婦の値打は下落したものだね」

彼の調子は嘆息するやうであつた。今はもう、他人の嫉妬と嘲笑の渦に捲き込まれてゐる自分達二人を彼は見るやうに思つたばかりか、彼自身の結婚生活に對する心持そのものまでが、以前の熱意と緊張とを呼び起すことの出來なくなつてゐるのを知つたのである。彼は、彼女を世話してゐた男の執拗な執着のため、どうにも方策が盡きて、着のみ着の儘で車軸を流すやうな風雨の夜を、二人で梅田の驛に驅けつけ、やつとの思ひで東京行の列車に乘込んだ、七年以前の、彼等が初めて夫婦の生活に入つた當時の純眞な心持を懷しんだ。また、結婚して、漸く器械の力を借りて生れた、窒息してゐる子供が、産婆の手當に依つて息を吹き返し、この世に於ける最初の泣き聲を放つた時、この子供とこの妻を幸福にするために、今までよりは一層努力して行くのだと心の中で獨りで叫んだ、あの時の緊張した心持を懷しんだ。經濟的

の破滅の前に、半ば絶望しながらも、その怖しい結果から逃れようと惡あがきにあがくやうに、彼は今、精神的の破滅に瀕し、半ば絶望しながら、その絶望の淵から逃れようと煩悶し、懊惱してゐる自分を見た。池田の顔が浮んで來る。彼の心は嫉妬に火と燃えた。幸子の黙つた顔を眺めてゐると、秘密を包んだまゝ強情に打明けないといふ憎さが彼の心に殘つた。彼は暗黒の中から光明を求めるやうに、幸子の中の何處かにでも、彼の心に一點の光を與へるやうな處はないかと捜し求めたけれど、闇のやうな感じがして光となるやうなものは少しも見當ることが出來なかつた。

外には、四月が近づいて、太陽の光は朗らかであつたけれども、風上に當る隣地の營繕工の作業場にはまたしても皮を剝いだ犬の死骸が天日に曝されてゐるかして、腐味を帶びた泥臭い臭氣が襲つて來て、少しも彼らしい朗らかな氣分にさせなかつた。

六

四五日經つ中に、退職手當に就いて彼の上に思ひかけない紛糾がふりかゝつて來た。

彼はその朝、いつになく松藏の二階の應接室へ通された。そこは周圍と巧く遮斷された一室で、秘密の會談や重要な商談などによく使はれてゐた。彼はこの部屋に通されたことに依つて、松藏の主人と自分との間に凡そどんな話が持出されるかゞ豫想されて、心は自然に緊張した。

それは一昨晩のことであつた。營業品の代金が首尾よく全部回收することが出來たといふので三人の後援者達は、丁度帳簿の點檢を受けるために松藏に行き合はせてゐた丑之助と常三郎を無理矢理に引つ張つて、前祝ひ盃を挙げるために隣地の青樓へ行つて、思ふ存分な遊蕩をした。營業品の代金が故障なく回收することが出來たといふことは、營業品に就いての不正が他の債權者達に暴露せずに無事に濟んだといふことになるのであつた。

さて、その席上で、まだ妓達が來ない中のことであつた。一番事務的な松藏が先づ後援者の檜川の耳へ口を持つて行つて、何事かほそぼそと囁いて、「これだけでどうや」と云ひながら、まるで商品の取引をしてゐるやうな調子で、食卓の下で、何本かの指を出して相手の檜川に握らせた。するとまた檜川が生田の耳へ口を持つて言つて、松藏の言葉を傳へるものゝやうであつたが、それが濟むと三人の間には、いよ〳〵商品の賣買でも開始されたやうに、食卓の下で指を握りつ握られつして、「これでえゝが」とか、「いや、この位にしとこ」とか、ほそ〳〵囁き合つてゐた。丑之助には、それが彼の退職手當の金額に就い

ての相談であることが、一見して明瞭に推察することが出來た。彼は、彼を商品扱ひにしてゐる人達の行動を苦笑をもつて見るよりほかなかつた。すると、その翌日、即ち昨日になつて、果して主人が松浦から一通の封書を托されて來たのである。丑之助が開封すると、商品見積用紙の裏に、赤鉛筆の走り書きで次ぎのやうに認めてあつた。

丑之助殿渡シ
一金四百圓也
内譯　金貳百圓　即金
　　　金壹百圓　四月十五日渡シ
　　　金壹百圓　五月十五日渡シ

これを見ると彼の心にはむく／＼と不滿が起つた。

「おい、これをごらん、隨分馬鹿にしてゐるぢやないか」と彼は、いきなりその紙片を幸子の方へ突きつけて云つた。

「まア、たつた四百圓、それも三ケ月の月賦やおまへんか」と幸子もその紙片を見るなり云つた。

「さうだ、しかしこれで見ると、今月分の給料もくれるかどうか分らないよ。若しくれないとすれば、本當は貳百七拾圓しか貰はないことになる――これぢや多いとか少いとかの問題ぢやなしに、實際にやつて行かれないや」

「それにお金が無いといふのやないのに、この十倍からのお金をこつそりたゞ儲けして遊ばして置きながら、チビチビ月賦で拂ふなんて、ほんまにケチ臭いやり方だんな、呆れてしまふわ」

「兎に角、足りないからもつと出してくれつて云つてやらう」

「云つてやんなさい、云つてやんなさい。しかし、生田や松浦はあきまへん。云ふのやつたら橋川に云ひなさい」

たとへ好色的な野心に刺戟されてとはいつても、幸子に四十圓の金を惜しげもなく與へた橋川が、こんな場合、一番多くの同情を持つらしく幸子にもまた彼にも思はれたのである。彼は僅か四百圓の金を支拂ふのに三度に分割した處にケチ臭い生田の細工を感じた。それをまたズバズバと線の太い赤鉛筆の走り書きで書いて來た處に、搾取的な事業家らしい松浦の意志を感じた。殊に、前夜の青樓の食卓の下での指評定が、かういふ結果となつて現れて來たのかと思ふと、彼は侮辱をさへ感じた。同時にまた彼は、皮肉なことには金に對する慾望を痛切に感じた。妻子を養ふために、宛ら塵埃箱を漁る野良犬のやうに童話や雜文や飜譯の下譯なぞと、安價な仕事に貪りつきながら、たは絶えず悪夢のやうな生活の不安に襲はれ續けた、そして彼が親に反いてまで進んだ創作に費す時間の殆んどなかつた東京での生活を思ひ起すと、どうしても豫定の金額位は欲しいと思つた。彼は長い間人眼

から離れてゐたけれど、亡き父の同業者として、また友人として幼い中からの見知り越しの、その上彼の姿に對して多少好意的の温りはあつても、彼の今日までの努力に對して一番好意を持つてくれた橋川こそ、この際一番彼の力となつてくれるべき人だと思つた。さう思ふと、少しでも餘計に金を出さうとしてゐる橋川を頻りに牽制してゐる指評定の際の生田や松尾の様子が眼に見えるやうにさへ、彼には感じられたのである。

彼は他の二人の後援者達の冷たい態度を訴へたいやうな心持を抱いて橋川へ出かけて行つた。丁度、彼は橋川の家の一丁程手前まで來た時、折よく彼方から來る橋川にぱつたり出くわした。彼は挨拶を濟ませると、橋川が當惑し、慰めてくれるであらうことを豫期しながら、松尾から寄越した例の紙片を示して云つた。

「實は、松尾さんからこんなに云つて來られたのですが」

すると彼にとつて全く意外なことには、紙片の文字を讀みながら彼の言葉を聞いてゐた橋川の眼は見る〳〵險しくなつて、頬がサツと緊張したかと思ふと、眼を紙片から移してキツと彼の顏を見て云つた。

「儂や、これで足らんのだすか」

「えゝ、足りません」

「何で足らん」

彼は結果が餘りに意外であつたので、幾分呆れ氣味であつたが、また橋川の威嚇的な態度にはグーツと反感を喚られた。

「それでは伺ひますが、これには僕の今月分の給料も入つてゐるのでせうか」

「…………」橋川は頷いた。

「すると、最初の二百圓で今月の生活費を支辨して、その殘りの金で東京行きの旅費や、新しく世帯を持つ費用や、當座の百圓を殘つ一圓ふまでの生活費やを全部支辨することになりますが、足りるか足りないかは一寸考へて下されば直ぐ分ることだと思ひます。それに……」

「そんなら四百圓全部一ぺんに渡したらどうだす」と、橋川は彼の話をみなまで聞かずに云つた。

「いや、それは單に足りないといふ一例を聞いて頂いただけです。本當はその四百圓でも足りないことを聞いて頂きたいのです。僕も三年振りで東京へ行くのですから、全然生活の根據がないのです。ですから、せめてもう二三ヶ月位支へる餘裕が欲しいのです。それにあなた方にひどく御迷惑にならないでもいゝお金もあることですから、[illegible]の兄弟を本當に救つて下さるのでしたら……」

「いや、松尾に云ふて貰はう、わしには分らん」と橋川はまた彼の言葉を遮つて、[illegible]ゆすりでも追つ拂ふやうに[illegible]で云つた。

丑之助は烈しい侮辱を感じた。同時にこの老人が、好色的な野心のためにはたわいもなく四十圓の金を彼の妻に與へて置きながら、他の方面では意外にもケチな人間であることを知つた。こんな男だ、あの金を寧子に與へる時にどんなことをしたか知れたものぢやない——かう思ふと、彼はカッとなつて云つた。

「僕はゆすりでも乞食でもないから、場合に依れば一錢の金も貰はなくつてもよろしい。この點はどうか誤解せられませんやうに」

「…………」

彼は橋川と別れると、とある路傍の自働電話へ入つて松善に電話をかけた。だが、折惡しく松善の主人は不在であつたので、その儘歸宅すると、今朝になつて松善の方から電話で彼を呼んで來たのであつた。

ものゝ二三分と待つか待たぬ中に、階段に重々しい足どりがしたかと思ふと、松善の入道頭が現れた。松善は卓子に向ひ合ふと、實業家らしい幾分猪首のその入道頭を鷹揚と擧げて、[illegible]らた眼でぢつと丑之助を眺めながら云つた。

「丑之助さん、我々はもう商會をやめます。清算して利益金を分配することにしましたから、そのつもりで居つて下さい」

だが、聲の響きに何處か不自然な處があつた。嘘だ、しら／＼しい嘘だ——から彼は思つた。そして彼の態度も自然に變つた。

「さうですか、承知しました」

そんな子供のやうな嘘にかゝるものかといふ風に彼は云つた。お互に、腹を探り合ふやうな沈默が少時續いた。すると松善は云つた。

「大體あんたが心得違ひをしとる。ほんまなら馬島は潰れて一錢の金も持つて行けんのに、四百圓といふ纏つた金を貰ふのやから喜ばんならん。それに一錢もいらんといふのは穩當でない。あんたが商會の金をみんな浚つて行かうとしとるといふて、昨夜みんなで寄合つたんだす」

「それは大變な誤解ですよ。僕は商會の金を全部浚つて行かうなんてことは、思つたことも云つたこともありません。馬島を後援するといふことは、破產した馬島の兄弟三人を身の立つやうにして下さることだと、僕は考へてゐたのです。ですから僕は、僕の身を立てるには、あれだけでは不足するといふことを云つてゐるのです。自分の方にはどれだけ必要か分らないが、商會の方にこれだけの金があるから、それをみんな貰つてやれといふやうな單純な意で云つてるのぢやありません。それに一錢もいらないといつたことも、たゞ僕が脅迫的に云つたのだと取られてるやうですが、それも誤解です。橋川さんが僕のいふことをよく聞いてくれないで、頭からゆすりを[illegible]押ふやうな態度

をせられますから、僕は觀ろ、そんな風にゆすられたと思ふやうな企なら一錢もいりませんと云つたのです。それをから誤解せられちや困りますね」

「それやいかん、それやいかん」

松藏は低聲に早や口でかう云つた。それは彥之助の辯解がよく分つてゐながら、故意に分らない樣子をしてゐるのだ、容易に他人に言質を取られまいとする物馴れた事業家らしい態度をとつてゐるのだといふことを彼に感じた。

「兎に角、あんたがそんなことをいふのが間違ふとる。自分で云ふてはいかん、弟はんや……弟はんに云はさないかん」

「さうですか、僕はまた弟等に云はせて、そのため言葉が違つたりして、却つて誤解が生じてはいけないと思つて、自分で云つたのです」

「まあ、弟はんと相談しといなさい。わしは分つとるが、牛田や橋川は三百圓でえゝといふたんや。それをやつとわしが四百圓にしたんや。兎に角弟はんと相談しといなさい」

松藏は威嚇的な態度を巧に妥協的に變らせて行つた。彼は松藏の話を聞くに及んで、橋川老人に對する觀察の誤つてゐたことを益々明瞭に知つた。それだけしか松藏の方が話の理路が[illegible]るだけの難點がある——と彼は思つた。

それにしても、橋川に對するこの觀察の誤りは、彼の豫期しない恐い結果に彼を陥れたことを彼は知つた。彼の不足を訴へるのを、てつきり好機に來たのだと鵜呑みに早呑み込みをした橋川の通知に依つて、中途仲介をした暗い處のある後援者達の狼狽振りを見ると彼は滑稽な感じさへした。操り人形の操りの絲は自分の掌中にあるのだ、自分の絲の引きやうで、彼等は慄へたり飛び上つたり、どうにでも自分の思ひのまゝになるのだといふ、自分の支配力に對する一種の誇りを彼は感じたが、しかし彼の本心にはそれを好まないものがあつた。よし、どんなに誤解されてゐても、後援者達に好意の分子があればこそかうした交渉も生じたのだと思ふと、彼にはどうしても操りの絲を引く心持が起きなかつた。まして、後に殘る弟等のことを思ふと尙更それは出來なかつた。だが、最初の出方通りに溫和しい態度をとつてゐるとすると、脅嚇されてゐるといふ觀念が先入主となつてゐる後援者達の心をほぐして、穩かに自分の要求を通させるといふことは、それは非常に困難なことのやうに思はれた。

——俺は率直に云つて誤解されたのだ、だが仕樣がない、矢つ張り態度を變へずにこの儘で押し通して行くよりほかに道がない——と彼は幾度か決心した言葉を繰りかへした。

七

「お前達は、僕が今日まで お前達のために盡したことは認めてくれるか」

彼はその日、外出先から別々に電話で用事の有無を聞きに來た 弟達を呼び寄せてから訊ねた。

「うむ、それや認めるとも」

辰二郎がかういふと、準三郎もそれに尾いて頷いた。

「それなら今度は僕の方から頼みたいことがあるが、諾いてくれるか。たつた一つ、僕がお前達に對する最後の頼みだ。それもさう難題でないつもりだ」

「どんなことや、兎に角、出來ることやつたらどんなことでもするが」と云つて、辰二郎は、「なア」と準三郎をうながした。

「うん」と準三郎も云つた。

「それなら云ふがね、實は……」と彼は退職手當のことから橘川の誤解を受けたことまで簡單に話して、「兎に角、かういふ譯で、松岡は僕の要求をお前達を通して云つて來いといふのだ。で、僕としては生活の根據が一切なくなつてゐる土地へ行くのだから、せめて千圓位の金は持つて行きたかつたのだが、四百圓と云つて來られたのに千圓とはいくら何でも切り出せないから、經費を最少限度に計算して見ると、どうしても八百圓は必要なんだ。で、ねえ、それも八百圓その儘にくれと云つては駄目だらうから、四百圓の上に、今月分の月給としてもう百圓、合せて五百圓だけ貰ひたい、それから後の三百圓は僕が生活の安定を得たら必ず返すから一時貸して貰ひたいとね、かう傳へてくれないか。それでも愚圖々々云ふやうだつたら、その三百圓はお前達に保證に立つて貰ひたいのだ。そして馬島を助けてくれる氣なら、兄貴の云ふことも諾き入れてくれ、兄貴は決して脅迫したんぢやない、橘川さんへ頼みに行つたのに、言葉が下手でつい誤解されてしまつたんだといふことを、くれぐれも云つて欲しいのだ。どうだ、やつてくれるかね」

「うむ、そんなこと位云はう〳〵」と辰二郎が力を入れて云ふと、準三郎も一緒に頷いた。

「それなら三百圓の保證にも立つてくれるか」

「うむ、立つとも」

「それぢや頼むぞ」

丑之助は頼もしい弟達の返辭に内心の喜びを思はず面に現して云つた。彼は矢つ張り辰二郎にも兄に對する情誼はあるのだと思つて、先夜興奮して河田の家へ出かけて行く前にこの弟と諍ひをして弟

を罵つたことを肚の中で後悔した。さうして、これだけ理路を正して弟達に頼んで貰へば、後援者達も彼の眞意をよく理解して、その要求をも叶へてくれるであらう、さうすれば弟等とも快く盃を交はせて、今迄の厭な行き懸りもきれいに忘れ去つて、また忘れても貰つて、東京へ出發する時には愉快に袂別しようと、こんなことまで思つた。

「やつぱり兄弟は有難いものだ」と、弟を褒め出しながら腹の中ではこんなことまで彼は呟いてゐた。

だが、次ぎの日も、その次ぎの日も、それに對する何等の回答がなければ、弟達も顔を見せないばかりか、電話さへ掛けて來なかつた。

「どうしたんだらう、變だな、變だな」

「ほんまに辰ちやんもおかしい人だすな、あんなにえらさうに引受けて置きながら……」

彼と幸子とは顔を見合つてはこんなことを云ひ合つてゐた。

彼の神經には漠然とではあるが、後援者と彼との間に不穏な空氣が低迷して來つゝあるのが感じられた。彼の心はまた重苦しい氣分に襲はれるやうになつた。

或る晩、彼は夕飯に少し遲れて歸つて來た。すると、幸子は彼の不在中に再三後援者から電話がかゝつて來たので、出かけて行つたと云つて、職工の杉井が一人でしよんぼり留守番をしてゐた。彼は杉井を歸して、一人で幸子の歸りを待つた。

十一時近くなつて、幸子は勢よくドアを排して歸つて來た。

「どうだつたのだ」と彼は幸子の顔を見るなり云つた。

「いや、もうお話になりまへん、すつかり誤解してしもて……」と、彼女は性急さうに云つて、「兎に角、あんたが八百圓耳を揃へて寄越せ、寄越さんのなら承知するもんかと云ふてるさうやなんて云ふて、すつかり反感をもつてるのだす」

「ふーむ、そいつは意外だね、辰三郎はどんな風に僕の頼んだことを傳へたのだらう」

「どんな風かそれは分りまへんが、あんたの云ひなはつた通り傳はつてゐないことは確かだす」

「さうか、頼み甲斐のない奴だなア」と彼は思はず呟いたが、それより後の話を聞くのが急がれて、「で、今晩は何處でどんな話をしたんだ」と訊ねた。

「宗右衛門町の萬花へ行たんだす。まあ話はいろ〳〵ありましたが、兎に角牧田や橋川はあきまへん。牧田のお話にならんのは初めから分つてゐましたが、橋川でもこつちが東京へ行くとなると、急にケチク

チ云ひ出しましてな。それから思ふと、まだ松善か一番よう分つてゐます。ぶつつかるのやつたら松善だつせ」

「で、結局はどんな話になつたんだ」

「どんな話にもこんな話にも、皆お酒を飲んで、てんでに云ひたいことを喋り散らしますので、何がなんや一向譯がわからずに歸つて來ました。尤も、橋川が勿體振つて食卓の下で片手を擴げて、これだけで辛棒出來んかと云ひましたけれど、わては取上げもしまへなんだ」

「しかし、誤解の點はよく辯解しといてくれたか」

「そんなこと出來ますもんか、みんな醉ふてゐて、思ひ〳〵に好きなことをいふて、誰の話も聞かうとはしまへんもの……中でもあの生田はほんまに腹のない赤づらだすな。醉つ拂つて、馬鹿々々云ふてもわてが相手にせんもンやよつてに、業腹で、海老のやうに赤い顔をして、馬島は破產者やよつてに、實際いふたら裸一貫で東京へ行かんならん、それに荷物や着物も持たして貰ふて、その上四百圓といふ大金を惠まれるのやよつてに、後援者の前で地面に頭をすりつけて禮を云はんならん、それに、その恩人に向つて脅迫するとは何事やと、管をまいてな。しかしこつちはすまアして聞き流してゝやつたら、餘計眞つ赤いけに怒りよつて、それやおかしいおましたで……」

幸子は惡戲つ子らしい微笑を見せて、生田の醉態を巧みに描寫した。

「結局、生田は道化役だね」

「さう〳〵、あれや芝居の三まいめだすわ」

二人は聲を揃へて笑つた。だが、丑之助の心には、今となつてはもう後援者の云ひなりにならない限り彼等の誤解を解くといふことは不可能だといふことが判り分つて來た。といつて、それだけの金では、上京後生活の安定を得るまでに窮乏に陷ることは考へるまでもなかつた。一度東京での生活を味つてゐるだけに、彼はつく〴〵金といふものの魅力を感じた。大阪商人の狡さを可成り極端にもつてゐる三人の後援者を相手に、僅かの金で爭ふ煩さゝと不快さとを考へると、金といふものゝ價値が無上なものに見えるやうな氣がした。

中一日をいて、前の續きとでも云つた風な口實で、後援者達はまた幸子を呼出しに來た。

「何故僕を呼ばないのだらうね」と彼は不滿さうに云つた。

「まあよろしいが、あんたやと話が堅うなるよつてに、お酒の場では似合ひまへん。それよりわてが行て、巧いこと話をつけて來る方がよろしいわ」と幸子は彼を宥めるやうに云つた。

「しかし大丈夫かね、相手は酒を飲んでるんだよ」

「わてのことを心配してるの？それなら大丈夫。わたしもう大阪か

つく〲厭やになつたので、成るべくお金を餘計に出さして、二人でちよつとでも早う東京へ行きたいので、一生懸命になつてますねン。だから、ほんたうに安心してゝ、ねえ」

「的股大丈夫だね」

「へえ、きつと……」

幸子のはつきりした言葉の調子を聞き、眞面目な顏色を見ると、丑之助も彼女を信ぜずにはゐられなかつた。それに、橋川、生田、松善と、かう後援者の顏を一々思ひ浮べて見ると、この交渉は彼にとつては可成りうんざりせずにはゐられない性質のものであつた。それを幸子がこんな風に買つて出たとすれば、さうして彼が幸子を信じることが出來さへすれば、或は案外彼自身が交渉するより以上の効果を得ることが出來るかも知れないと彼は思つた。

「では、本當に賴むぞ、いゝかい」

「へえ、それや大丈夫」

幸子は彼を殘して出かけて行つた。さうして、その夜も歸りは十一時に近かつた。しかもその晩も結局話は不得要領に過ぎた。彼は多少の苛立たしさをさへ感じた。

「まあ待ちなはれ、もう少しは出すやらうと思ひますさかい」

彼女はかう云つて彼を宥めてゐた。すると、その翌晩も、その翌々晩もと云つた風に、續け樣に三度も四度も後援者達から幸子を呼び出しに來た。丑之助は此の都度幸子がこの交渉に當ることを心から同意して置きながら、こんな風に幾晩も彼女が呼出されて行くのを見ると、心は何時か穩かではなくなつて行くのを感じた。手輕に手際よく化粧を濟ませて、美衣を纏つて出かけて行く幸子の姿を見ると、彼は輕い嫉妬をさへ感じた。何かといふと會合の口實をもうけて、享樂的な行き方をする後援者達の酒席の光景を想像すると、彼の心は自然に騒いで來るのであつた。陰氣な工場の電燈の下で、一人きりで彼女の歸宅を待ち佗びてゐる彼の心には、所謂「安上りなおもろい遊ひ」を狙つてゐる生田の酒に醉つて赤くてら〱光つた顏や、酒には餘り趣味を持たぬが、それだけ好色的には鋭い橋川のにた〱した猿のやうな顏や、どこまでも精力的な松善の入道頭などが、幸子を取りまいて露骨な誘惑を試みてゐるらしい光景が繪卷物のやうに浮んで來るのであつた。幸子も河田の事件以來殊勝には構へてゐるけれども、彼の思ひなしか、後援者達から電話がかゝつて來て、出掛けて行く時には何とはなしに興味をもつてゐるやうな樣子が感じられるのであつた。河田の事件から、近頃病的に鋭くなつてゐる彼の猜疑心は、今迄に連れられて行つた後援者達の數度の放埒狼藉な酒席を思ひ浮へて、その渦卷の中に幸子のまざつてゐる光景を彼の頭に彷彿と現出させて、彼の苛ら

立つた神經を烈しく刺戟した。
だが、一方幸子は歸つて來るといつも元氣であつた。彼女は宛ら凱旋の兵士がその手柄話をするやうな調子で、その時〳〵の交渉の顛末を彼に話して聞かせた。同時にその努力の結果と見えて、手當の金額も最初の四百圓が五百圓になり六百圓になりと云つた風に鰻上りに上つて行つた。かうした幸子の様子と、この交渉の結果を見ると、丑之助の心には何處となしに猜疑心の痕跡は殘りながらも、それを口に出す程には到らなかつた。
もう、いゝ加減この交渉にも倦き〳〵する時分であつた。二た晩程途切れた會合がまた催されたと見えて、幸子に呼び出しの電話がまたもかゝつて來た。
「どうしまよ、一昨晩の話のやうに、六百圓で承諾して來まよか。もうこれ以上は一寸むつかしいと思ひますけれど」
彼女は電話口を離れると、彼の方へやつて來ながらかう云つた。丑之助にはもうこの上僅かな金で爭ふ根氣がなくなつてゐた。破產當時の紛擾から河田の事件や、續いて今度の退職手當の問題と、彼の神經は烈しい嵐の中を潜りつゞけてゐて、殆んど休養の暇もなかつた。彼はもう一刻も早くこの惱ましい環境から逃れて、東京へ行つて靜に自分の心持を統一したいと願ふやうになつて來てゐた。
「足りなくつても仕様がない。もう面倒でとても我慢がならないから、それでいゝつてことにして置かうよ」と彼は眉をしかめて云つた。
「そやけれど考へて見ると癪に觸つて仕様がない。むかうの態度が態度やよつてに、一時のこと、贋造品のことを債權者團に持ち出してやると、一つ嚇してやりまよか」と幸子は何に憤つたのか突然力み出した。
「それは止してくれよ。僕の趣味ぢやないからね」と彼は思はず遮つた。
「でも、さう云ふてもグーの音も出んやうなことを云ふてよるのだすもん」
「どんなことだ」
彼は思はず耳を峙てた。すると幸子は急にフイと警戒したらしい様子で云つた。
「それは一寸一と口には云へまへん」
「何に關係したことだ、簡單でいゝから云つてくれ」と彼は好奇心に煽られて云つた。
「それを云ふてると話が長うて遲れます。歸つて來てから、悠くり落着いた時に話すとしまよ」
幸子はいゝ加減に言葉を濁して出かけて行つた。

丑之助は一人後に殘つて、今の言葉を不愍に思つて考へた。考へると單に今の言葉だけではなかつた。この四五日以來、生田や橋川に對する幸子の態度が眼立つて强くなつて來てゐることを彼は秘に感じてゐた。これはどうしたことであらうか、そこに何かの事情が伏在してゐるに相違ないが、それは一體何であらう？ と彼は初めてまた新しい疑惑にとり憑かれた。しんと靜まり返つた工場の中で、彼は一人でいろ／＼考へて見たが、結局は何の見當もつかなかつた。さうして見當がつかないだけに、彼の心はまたしても惱みが殘つた。

彼は今、這ひ上ることの出來ない惡どい泥濘の中へ陷ち込んだやうな感じにうたれた。こんな時、せめて弟等でも眞面目に力を貸してくれたなら、さうして彼の云つたことを正直に傳へてくれたなら、後援者達と彼との關係がもつと明るいものにされたであらうと愚痴つぽい考に捉はれた。弟等は後援者にどんなことを云つたのであらうと、彼はふと考へた。さうして、次ぎの瞬間、思はず獨りで呟いた。

「さうだ、奴等は三百圓の保證に立つことが厭やなので、俺が八百圓を全部寄越せと云つてゐるやうに傳へやがつたのだ。それに相違ない。それで後援者が怒つたので、その鼻息を窺つて俺に近よつて來ないのだ」

彼は今迄弟に盡した心持が眞面目であつたゝめに、弟等のこの冷淡な態度には餘計に憤怒のこみ上げて來るのを感じないではゐられなかつた。

その夜は、いつもより幸子の歸宅が遲かつた。彼は十時頃からそろそろ待ちきれなくなつて、もう十分、もう五分と時計と首つ引で時間を區切つて待ちぬいたが、彼女は中々歸つて來なかつた。彼はそろそろ猜疑心のために苦しみ出した。十時半から十一時と待ち、結局十一時二十分になつて待ちきれなくなつて、彼は幸子の呼ばれて行つた料理屋へ電話を掛けた。すると、意外にも女中の艶つぽい聲が答へた。

「はア、あの御婦人なら、もう一時間半か二時間程前にお歸りになりました」

彼の心は慄へた。彼は受話器を耳に當てゝ、交換手が出るなり橋川の番號を云つた。夜更けの電話は早速通じた。

「はア、もし／＼」と電話に出て來たのは橋川の主人であつた。

「あゝ、橋川さんですか、馬鳥ですがね、もうあなたはお歸りになつたのですか」と彼はもどかしさうに早口に云つた。

「はア、もうちよつと先に歸りましたがなア、何ぞ用事でやつか」

「いや、さうですか、實は私の方の家内はまだ歸りませんが一體どうしたんです」と彼は思はず聲を彈ませて相手に詰め寄るやうに云つた。

「えツ、まだでやつか」と橋川は不審さうに云つたが、「わしや戎橋で別れたんやが、もう歸りますやろ」と宥めるやうに續けて云つた。

そこへ、ぱつと入口のドアが開いて幸子が入つて來た。

「どうしたのだ、遲いぢやないか」と彼は睨むやうな眼つきで幸子に云つてから、「いま橋川さんへ電話をかけてゐる處だ」

「さう、をそなりました。わて一寸代らせてもらひまつさ」と云つて、彼女は彼から受話器を受取ると、「もし〱橋川さんでつか、わたし馬島の家内だす。今歸りました。おほきに御心配をかけまして……」と、早口に云つた。

その様子は、傍で見てゐた丑之助には、まるで彼女が自分の出所進退を明かにして、相手の誤解を防がうとでもしてゐるやうに感じられた。

「どうしてたのだ、萬花へ電話をかけたら一時間半か二時間程前に歸つたといふし、橋川へ電話をかけると橋川は歸つてゐるし」と電話を切つた幸子に彼は疊みかけて訊ねた。

「さう、濟んまへん。寶は今晩どうしても六百圓よりあかんといふので、これや松善をつかまへてもう一ぺん云ふてやれと思ふて、生田や橋川に別れて二人で戎橋から難波のステーションまで歩いて、歩きながら話をしたんだす。松善は肥つてゐる上に足が悪うてフウフウ云ふし、その中に雨が降つて來るしするので、しばらく待つてゐましたが、雨は中々やみさうにもないので、仕様がなしに、とうぞ圓タクを呼んでもろうて歸つて來たんだすわ」と、幸子はすら〱と淀みなく辯解した。

「それだけで一時間半も二時間もかゝつたのか」

「そんなことおまへん、萬花の女中が間違ふてますねン。戎橋から難波まで二十分、難波からこゝまで自動車で十分、せい〴〵三十分か四十分程だす」

「…………」

丑之助にはまだ腑に落ちない點があつた。彼はまだ何か彼女に訊ねたいものがあつた。だが、この場合彼の立場からはこれ以上に云ふべき言葉が發見せられないのであつた。それに彼女が歸つて來たといふことが、彼の猜疑心を柔らげるに可成りな力があつた。彼はまだ何だか燃え切らないでぶすぶす心の底で燻つてゐるものがありながらも、これ以上深く咎めることが出來なかつた。

「兎に角な、今夜の話では」と幸子も巧に話頭を轉じて、「橋川や生田はどうしても六百圓よりは出せんといふて肯かんのを、難波まで歩いて松善を攻めてやつたので、松善も仕様ことなしに、七百圓なら自分が引受けて渡すからそれで我慢してくれと云ひましたわ……もう、こ

れ以上は駄目だつせ」と手柄顔に云つて、「どうしまよ、これ位で切り上げまよか」と彼の返辭を促すやうに訊ねた。

「もうそれでいゝさ、出かけには六百圓でもいゝつて云つてたんだから、百圓ふえたらなほ結構さ」と彼は半ばはすねたやうな、半ば棄て鉢のやうな調子で云つた。

幸子はなほ二た言三言、彼の機嫌をとるやうな調子で、その夜の會合の様子を話してゐたが、急に話につり込まれたらしく、

「しかし生田や橋川は狡うて何てケチ臭い奴だすやろ」と憎惡を籠めて云つて、「わてが、あの連中は駄目と見て、松善にばかり話を持ちかけて行くので、やきもちやいて餘計反對しよるのだす。わても腹が立つて、一つ吃驚さしてやれと思ふて、あんたらの云ふてなはることを馬島に云ふたら馬島は怒るし（これは作りごとやけど、）馬島のいふてることをこゝで云ふたらあんたらは怒るしして、結局喧嘩になつてしまひまつせ！さうなると、それこそあんた方には八百圓にかゝはらん御迷惑になりまつせて云ふてやつたんだす。そしたらグーの音も出せずに默つてしまひましたわ」と云つた。

「僕の怒ることつて、何だ。むかうで何か僕のことを云つてるのか」と彼は思はず聞き咎めた。

「いえ、それはな」と幸子は云つたが、グッと何事かに詰まつて、「いろいろ取りとめのないことをな……どうせかうなつて來たら、おかうは、ごう腹でしようがおまへんさかい、それやいろんなことを云ひますわいな」と胡魔化した。

「そんな取りとめのないことぢやないだらう、何かあるんだらう」

「いゝえ、そんなことはおまへん」

それから彼はなほいろ／＼と問ひ訊したが、彼女は池田の時のやうにこゝでも強情に否定し通した。

八

その朝はどんよりと曇つた、春先きのうすら寒い天氣であつた。豫感とでも云はうか、工場を出る時から丑之助の心には、えたいの知れない不吉な空氣がひた／＼と彼に迫つて來てゐるやうな感じがしてならないのであつた。長い間、苦しい空氣を呼吸し續けて來た彼の心は、今は疲勞と困憊の重厚な層の底に漸く餘喘を保つてゐるやうな感じがせられるのであつた。彼はこの氣力の消耗した心で、これから起るであらうと豫想せられる生田や橋川との諍ひを思つて見ただけでも、心持は苦しくなるのであつた。

昨日の午後、その前夜の幸子と松善との約束に依つて、彼は手當の金を受取るために松善の店に行つて、所用を濟ませて、暗くなつてか

ら工場へ歸つた。その時のことである。丁度電話口を離れた幸子が、昂奮してボッと赤味を帶びた顏にへら〳〵とした笑を浮べながら、彼の姿を見るなり云つた。

「今、生田め、えらい怒つて來よつて面白うおましたで」

「ふーむ、どうして怒つたのだ」と彼は思はず耳を聳てた。

「今、松善に集つてよるのだす。松善が獨斷であんたに七百圓渡したといふので、へんにしい（一種の嫉妬）からカーッと腹を立てよつたと見えて、早速こつちへあたつて來よつたのだす」

「うむ、それで……」

「わては電話がかゝつて來たので、あんたか知らんと思ふて出て行くと、わての聲を聞くなり、カーッと受話器が唸るやうな大きな聲で、あんたら夫婦はゆすりや、八百圓とろと思ふて競賣品のことを債權者團に云ふといふて脅迫するが、云ふなら云ふてもらはう、そんな脅迫はちよつとも恐いことないぞて、お酒に醉ふてよると見えて、それやえらい權幕だンね。わては云ふだけ云はしといて、もう云ふことがなうて默つて終ひよつてから、生田はん、もうちよつと落着きなはつたらどうだす、まああんた胸に手を置いてよう考へて見なはれ、馬島はあんたらを脅迫したこともなし、わてゞも、あんたらが云ふてはることを馬島が聞けば怒るし、馬島の云ふてることをあんたらが聞けば反對にあんたらが怒るし、結局喧嘩になる、さうなるといかんといふことをいふたゞけだつせ、脅迫なんて氣の利いたことをした覺えは更におまへん、まあ、よう氣を鎭めなはれといふなり、ガチャッと受話器をかけてしもてやつたんだす」

彼はこれを聞くと、生田や橋川らと自分達夫婦の間の空氣が一層險惡になつたことを考へざるを得なかつた。かうなればどうせ後援者達は彼等夫婦をゆすりのやうに取扱ふに相違ない、さういふ汚名を蒙るのなら……から思つた時、彼は自棄的な氣分から、またも操り人形の絲を操る誘惑に襲はれた。だが、彼の教養がそれを遮つた。

「さうだ、彼等はどんなに思つたつて、かういふ成り行きになれば仕樣がない。俺は俺の信じたゞけのことをやつて行くのが一番いゝのだ」彼は獨でこんなに呟いたのであつた。

すると今朝になつて彼は橋川から、「一寸來てくれ」といふ電話を受けたのである。どのみち生田も同席するであらうことが彼には豫想されたた。同時にその用件のどんなものであるかといふことも……。

彼が橋川へ行き着くと、直ぐ續いて生田もやつて來た。これは彼が初めから豫想してゐたことであるから、彼は別に不審にも思はなかつた。寧ろ、この豫想の的中に依つて次ぎに起るべき事柄の何であるかといふこともほゞ推察することが出來て、彼の心は自然に反撥的に緊

張してくるのであつた。

二た言三言挨拶が済むと直ぐ眠するやうな沈黙が來た。だが、それも少時の間で、猿のやうな顔に色をなした梅川の威丈高な詰問に依つて破られた。

「丑之助はん、あんた八百圓耳を揃へて出さんと、わし等が油をすり代へたことを債權者側に云ふといふてるのか」

「それは誤解でせう」と彼は直ぐに否定して、

「僕は四百圓のほかに今月分の給料としてもう百圓だけ貰ひたい、それから別に三百圓だけ弟等二人の保證で貸して貰ひたいといふことを、弟等に頼んで松善さんへ通じて貰つてある筈です。僕は、どうしてもそれだけの金が必要ですから、こんな方法まで考へてお願ひしてゐるのです。あなた方に暗い行爲があるから、それをタネに脅喝して餘計な金をとらうとしてゐるのぢやありません」

これを聞くと梅川は黙つてしまつたが、生田が代りにくつてかゝつて來た。

「さあ、それがわて等からいふと脅迫といふもんや」

「どうして脅迫です」

「立派に脅迫たす。實際いふたらあんたらは破產者やによつてに、裸で東京イ行かんならんねン。それに着物も道具も持つて行ける上に、四百圓といふ金を貰へるのは、わて等が後援してるからや。それを有難いとも思ふどころか、八百圓耳を揃へて出せなんて、あんたそんな無茶なことがおますかいな。これや立派な脅迫だンが」

「生田さんはもう少し僕の云つてゐる意味を嚙み分けて下さるといゝな。僕はあなたの思つてられるやうな、そんな脅迫は決してしてはゐないんですからね」

「いや、よう嚙み分けても脅迫たす」

「そんなことはないでせう」

「いや、脅迫たす、立派な脅迫たす」と生田は色の黒い、額の狭い顔を眞つ赤にして咆り立つた。

「ま、靜かに聞いてもらひませう。僕があなた方を脅迫してゆするのだつたら、八百圓なんて、へんてこな半端の金額を云ひはしません。千圓とか二千圓とかと、きちんと半端のないやうにします。殊にこのゆすりのたねは五千圓でも六千圓でも、先方の人柄に依つては一萬圓でも二萬圓でもゆすれるだけの値打は充分にありますよ。刑事問題ですからね。それに松善さんとは犬と猿のやうな商賣がたきの梅村さんが、馬島の變壓器油を落札して、まだ引取りもしないで工場の倉庫に保管してあるのですからね。油の規格を檢査したら直ぐに事實は分ります。しかし、僕はそんなことは微塵もしようと思つたことはありま

せん。今までに云つたこともありません。生田さんが、脅迫だ〳〵と僕を無理にでもゆすりに仕立て上げようとしますから、ゆすりとはこんなものだと云ふ區別をするために云つたまでです。尤も、松善さんや橋川さんに强い言葉を出したこともありますが、それは賣言葉に買言葉で、相手の方が非常な應對をしてくれなかつたからです。松善さんが、弟を仲に立てゝ云つて來いと云はれたら、僕は直ぐその通り實行してゐるのですからね。これを無理往生に脅迫だのゆすりだのにしられちやア、堪りませんよ」

「しかし、どつちにしても商會からは八百圓も出せまへんな」と、丑之助の言葉を吹き飛ばすやうに、橋川が高飛車に云つた。

彼はもう早話も解決して金も受取つてしまつてあるのに、この老人は何のためにこんなことを云ひ出したのか、と、可笑しく思つた。と、この時、唐紙が開いて羊三郎が入つて來た。橋川は羊三郎の顏を見るなり、

「辰ちやんはどうしてゐるねン。えらい遲いな」と待ち侘びてゐるやうに云つた。

「さあ、私はもう兄貴は來てると思ふて參りましたが」

これを聞くと、丑之助は今日の會合が生田のほかに、彼の弟等も加はる豫定であることを知つた。さうして彼等がどんなことをもくろんでゐるかといふことに、不安と不愉快な好奇心とを起こさせられた。

「辰ちやん、何してるねン、早よ來るとえゝねやがなア」

少時の間にも橋川は二三度もかういふことを云つたが、辰二郎は中中來なかつた。

「ほんまに辰ちやんが來るとえゝのやがなア、しかし、まあえゝわ、羊ちやんがゐるよつてに話をしてしまはう」と、橋川は待ち切れないものと見えて、たうとう云ひ出した。「實はなア、丑之助はん、わし、えゝことをあんたに云はうと思ふてるのやが、あんた何も云はずに聞いてくれるのやつたら云ふがなア、どうや」

丑之助は不意に更まつた猫撫で聲の橋川の言葉の底に、何等かの危險が潛められてあるやうな氣もしたが、同時に、それだけ好奇心も動かされた。彼は少時默つてゐた。すると橋川は猿に似た尖つた脣に、妥協的といふよりは機嫌を取るやうな愛想笑ひを浮べて、話したさにむづ〳〵してゐたが、たうとう堪へきれなくなつたといふ風に嗄れ聲を低くして云つた。

「どうや、諾いて貰へんか……たあ……兎に角、わしと生田はんには辰ちやんや羊ちやんの肚は分つてゐるし、この二人にもまたわしと生田はんの肚は分つてるねン。そやけど、あんたの肚だけは誰にも分ら

ん。しかしあんたが、わしの云ふことを諾いてくれたら、あんたの心もよう分つて、皆心は一つになつて、あんたが東京へ行てからも交際するし、二人の弟も兄と思ふて今後も助け合ふて行くが、若し諾けんのやつたら、わしも生田はんも絶交するし、弟等は兄弟の緣を切るといふてるが、どうや。默つてわしの云ふ通りに出來んか」

「さあ、それは一寸困りますね。何だか重大なことらしいですから、云つて貰つてからでないと、諾く諾かないのお返辭は出來ませんね」

と丑之助は云つた。

「そんなら諾けなんだら、こゝだけの話にして一切他言はせんといふ約束をして貰はうかな」と云つて、橋川は彼の頷くのを見ると、一段と聲を落して、「しかしわしは是非諾いてもらひたいねン」と唾を吞み込んで、「どうや、あんた一錢も持たんと一人で東京行けへんか。あの嫁はんと一緒やと、あんた一生出世がでけへん。金を持つてると、とられてしまふよつてに、ちよつとも持たんとな、(金はない、わし一人で東京で一と旗擧げてくるよつてに、お前はどうなとして此方で待つてゝくれ)からいふて一人で行てしもたら、後はわし等があんぢようしたげる……どうや、思ひ當る節があるやろ」

「さよ〳〵、それは橋川はんの云やはる通りや」と生田も嘴を入れて、「丑之助はん、あんたの前でからいふと何やけど、あんたの奧さんは多情な人だつせ。今度でも東京イ行ても直き歸つて來ると云ふてはるし——それはわてら聞いたよつてに何時でも證據人になりまつせ——それにこの間も怪つ體なことがあつたし、前の男もまた北濱にゐるといふし、それにこの二三日前にも十一時頃に花川亭から自動車で歸つたりしてはりますやろ」と、こゝまでいふと、

「いや、それは何でもない、何でもない」と橋川が慌てゝ取消した。

だが、話の九分までは丑之助にとつては何でもなかつたが、取消されても最後の言葉は彼の心をグワンと撲つた。二三日前、十一時頃に幸子が歸つたのは、我孫子から難波の停車場まで彼女が松善と一緒に歩いたといふ晩しかなかつた。しかも幸子は難波から圓タクに乘つて歸つたといつてゐるのに、生田は花川亭から自動車に乘つたといつてゐる。花川亭とは松善のよく行く席貸(連れ込み宿)である。

「なあ、丑之助はん、あんたも、しつかりせんとあきまへんで」

丑之助は生田の言葉を夢のやうに聞いた。彼の心には河田の時と同様な激動が起つた。けれども生田や橋川のこの突飛な忠告も決して純粹のものとは思はれなかつた。彼は騷ぎ立つ心を抑へて、今急に起つた疑惑の謎を解かうとしたが、それはとうてい至難のことであつた。

「どうだす、今返事が出來なんだら、ようまあ考へてしとくなはれ」

丑之助の沈默してゐるのを見ると、自分達の言葉の反應を驗してゞ

もゐるやうに橋川は彼の顔を注視しながら云つた。その猿のやうな顔には「大分に薬がきいたわい」と云つてるやうな色が現はれてゐた。

九

丑之助はせか〱した心持で工場へ歸つて行つた。

「今度こそ赦さないぞ、今度こそ眞相を捉へてやるぞ」と彼は幾度この言葉を繰返して獨りで呟いたか知れなかつた。

あの晩の萬花の女中の言葉や、自動車で歸つた彼女が橋川より歸宅が遅れてゐたりする點やを綜合して考へると、確に一時間前後の時間が辻褄が合はないのだ、よし、今日こそ彼女の正體を捉へずにおくものか――と彼は新しく起つた疑惑にともすれば亂れ勝ちな心を抑へ抑へして歸つて行つた。

幸子は白い顔に笑を浮べて彼を迎へた。

「お歸り……何だしたの、話は」

「詰らないことさ」と彼は冷笑的に落着いて答へることが出來た。

「詰らないことてどんなこと」

「お前と一緒になつてゐると僕が出世が出來ないから、お前を放つて置いて僕一人で東京へ行けつて、橋川と生田と二人がかりで云つて來たよ。それで、若しこのことを諾き入れないのなら、橋川や生田も僕と絶交するし、辰三郎や辛吉郎も兄弟の緣を切るつて……」

「へーん、今度はあんたにまでそんなことを云ひましたか」と幸子は急に氣色ばんで「眞に怪しからん奴等やなア」と云つた。

「あんたにまでつて、それぢや、お前にも何か云つたのか」

「いや、わて東京イ行くまではこの話默つててやろと思ふてましたけど、あんたにそんなことを云ふのやつたら、お金なんぞどうでもよろしいから、一つ大喧嘩をしてやりましよいな」

「お前にはどんな話をしたのだ」と丑之助は幸子の態度に眼を瞠つた。

「いや、橋川や生田はな、河田のことが耳に入つてから、これは物になると思ふたかして、わてにはあんたに別れつて云ひますねン。何でも心齋橋を横へ曲つた邊に橋川が近頃借つた家があるさうだすな」

「うむ、あるにはあるが、お前どうしてそこを知つてるのだ」

彼は思はずから反問した。その家は、橋川が二年程思ひ續けてゐる病妻を隱居させるために借りたものゝ、家が廣いので躊躇してゐるのを聞いて、松葉が住吉公園の取拂ひになる青樓の女將に席貸をさせるから讓つてくれと交渉してゐたことを、彼は以前會合の席上で耳に入れたことがあつたからである。

「いや、そこをな、橋川は氣のきいた席貸しにして、金は六千圓まで

出すさかい、あんた丑之助はんと別れて入る氣はないかと云ひますねン。生田も、行きなはれ、その方がずつとあんたも得や、あんたが行たら、わては三日でも四日でも向ふ鉢巻で手傳ひに行きますて云ひよるのだす」

「へえ、本當かい、それは」

「嘘なもんですか、こないだから、あんたが聞けば怒ることがあるて云ふてましたやろ、それはこのことだす。河田の話を聞いてから、これは夫婦別れするかも知れんと思ひよつたのが、この計劃の發端だす。でも、わてが滿足な返事をせんので、今度はあんたをハメ込まうとしよつたんだす。ほんまに怪しからん奴や」

「橋川のことに、生田までがよくそんなにむきになつたものだね」

「生田は橋川のそんなとこを掴んで置いて、後でお金の融通をさせようと思ふてよるのだす」

「成る程、さうかな……では松善は？」

「あれは悧巧だす。橋川はん、そんなことはまだ云ふもんやないと、止めてゐました」

幸子が松善を褒めたことが、彼の抑へてゐた嫉妬心を刺戟した。

「お前はまた、何故こんなことを俺に隱してゐたのだ。お前も多少はこの話に心が動かされてゐたのだらう」

「そんなことありますもんか。あんたが聞けばカッと怒つて、折角のお金の話も無茶苦茶になると思ふたよつてにだす。歸りが遲れてあんたの機嫌の惡い時でも、餘つ程口まで出かゝつてゐながら、まア、もうちよつとの辛棒やと思ふて控へてゐたんだす」

「それも嘘ぢやないか、お前は物事を隱すから信じられない」

かう云つてゐる中に、丑之助の心には幸子に對する疑惑がだん／＼深まつて來た。

「嘘なもんですか。あんたは河田の事件から隱す／＼て云ひなはるが、今度のことなんぞは、あんたの心一つでどんな事件が起るかも知れまへんから、これは東京へ行くまでわての肚にしもとくに限ると思ふて、止むを得ず隱したんだす」

「それぢや、ほかにもう何にも隱してゐることはないのか」

「へえ、別におまへん」

「何もないのか」

「おまへん」

「乾度か」と彼はだん／＼興奮して來て、鋭い調子で云つた。

「なんだす、あんたも……裁判官みたいに」と憎さうに云つて、幸子は彼の威嚇的な視線を睨み返しながら、「隱してることがあつたら、何ぼでも云ふてもらひまよ」と吐き出すやうに

云つた。

「よし、後であやまるな」

「あやまるものか」

この反撥的な言葉は彼の心を極度に興奮させた。

「こらッ」と彼は大聲に呶鳴つた、「貴様をとといの晩、松善に難波で別れて圓タクに乘つて歸つたといふたが、それや嘘だらう。一緒に石川亭へ行つて、そこから自動車に乘つて歸つたのだらう」

「さうだす。それがどうしたんだす」

幸子は行き張りですつかり居直つた。

「それでも隱してゐないのか」彼は憤怒に打ち慄へた。

「わてにはちよつとも疚しいところはないけど、あんたが餘りやきもちをやくさかい隱したんだす」

「貴樣、そんなしあ〳〵したことを云つていいと思ふのか」彼は嫉妬に燒かれた。

「惡かつたらどうします」と云つた幸子の聲には嘲弄的な響があつた。

「何ッ、よく云つた。俺は今日まで隨分貴樣のために犧牲を拂つて來たぞ。貴樣のために俺の兩親は俺を不孝者と思ひ込んで死んで行つたぞ」

「それはお互ひ樣や、わてどもお母はんの死に目にも會はずじまいや」

幸子の聲にはいよ〳〵嘲弄的な響きが強くなつた。彼は眼の眩むやうな怒を感じた。

次ぎの瞬間、何時の間に手にしたのか、彼は鐵槌の口開け用の二尺ばかりの鐵のスツパナを提げて、「人殺し、人殺し」と逃げ歩く幸子を追つて、ガランとした工場の中を極度の興奮に息をはづませ、血の氣の失せた蒼白な顏をしながら、あちらこちらと馳せ廻つてゐた。



裸木

「明るい人」の終篇

犬養健

四

どれほどの時間が經つたか。兎も角も幹子の歩き過ぎを用心して、やがて二人は路にすぐ沿つた或る貸別莊のヴエランダに腰をおろしてゐた。ヴエランダには借り主の發つた後の荷札がまるまつてゐた。髮網の袋が落ちてゐた。輕便鐵道の發着表が剝がれかゝつてゐた。それらのすべてを取り卷いて、まるで落葉でも時をり音を立てさうな小さい、動かない日溜りが其處にあつた。

「やはりさうだつたか」

禎三はその日溜りに向つて、心のなかで繰り返してゐた。思ひ當る事が次次に浮んで來た。いつぞや幹子が禎三に「大體氣の合ひさうな人を妹に尋ねて見たところが」と云ひかけて、不意に狼狽へ氣味に話を切つた事や、それから三日前の停車場の歸りに「思つたとほりを云はなければいけない、幹子も雛雄も話しいゝ人ぢやないか」と禎三の問ひつめた時に松子が急に態度を替へた事や――彼は今はすべてを見通したやうに思

つた。永い間躊躇いてゐた漠然とした想像がいまこの灌木ばかりの小さい日向で最後に固定してしまつたのだ。松子が彼といふ人間を摑んじてゐる、ずつと前から。——このはつきりした事實を、彼はいきなりつい鼻先きにぐんぐん押しつけられた形だつた。

「こんなに不躾にお話しするつもりは、ほんたうに御座いませんでした」並んで腰かけた幹子が、やはり足元の腐土を見た儘云ひ續けてゐた。「藥局でお目にかゝつた時に思ひついた、それこそ二倍も三倍も申しあげてしまひましたわ。でも、妹の事はやはりわたくしが一番心配してゐるのです。母は年寄りで昔の人間ですし、兄は何と云つても男でございますからね。それはわたくしが一番妹をよく知つて居りますわ。そのわたくしがまた來月の中ばには多分もう彼地に歸つてしまふのですから。——でも、どうせ直きに北平へ行つてしまふのだからなどと思つて無遠慮にお話したわけではございませんのよ。分つて下さいませうね」

幹子は上氣した顏色で、涙ぐみさうにさへ思はれる聲を出してゐた。禎三を惹き入れるだけの力があつた。

「あの人は半端なのです。物を感じることは人並みな癖に自分の思つた事は現はせない。——片方が出來て片方は出來ないのです。ですから得體の知れないぼんやり者に見えるのです。縁遠いのはみんなそれですわ。それでも物を感じる方は人並みたのですから、段段、自分に合つた方なんぞ世間にはなかなかないと思ひ込んでしまふ、といふ風なのです。ですから時偶に自分に氣のしつくり合つた方と思ふと——(幹子は禎三を見上げたが、流石に紛らせてしまつた。)——そこへ森島さんにしても芳子さんにしても、あんまり妹を特別ないゝ娘のやうに扱つて下さるもので——」

細かい岐路の澤山出來てしまつた考をもう一度纏めようとして、幹子は口を噤むだ。

「それあ僕だつて、今のまゝの松子さんがいゝとは思つちやゐませんよ」

禎三が短かく云つた。

「ついこの間松子さんにお話したばかりですがね」

「えゝ、何か仰有つて下さつたとか。でもその話でまた妹は、かう、大變考へ込んでゐるのです」

「どういふ風に」

幹子は默つてゐた。

「つまり僕なぞの考に頼り過ぎる——さつき仰有つた、それですか——

「えゝ」

「それがいゝ事はない——さうですか」

幹子は一寸困つたやうに默つてゐた。

「ぢやあ僕は默つてゐるより仕方がありませんね。松子さんにはもう啞になるか」

重苦しい空氣を拂ひのけようとして祐三は冗談まじりに云つた。しかし幹子は苦笑してゐて答へなかつた。答へる氣配さへ見せなかつた。幹子はさうして貰ひたいのだ。障壁に打つかるやうに祐三はその新しい沈默に打つかつてしまつた。

さうだつたか、さうだつたか、と彼は繰り返し思つた。

「幹子さんの仰有りたい事が、だんだん分りましたよ」

幹子は何か云はうとした。

「まあ僕から云ふ事にしませう！」

彼は無理に頬笑まうとしたが、そのために却つて挑むやうな口元を見せてしまつた。幹子から強制されたやうな氣持にでもなると却つてい丶事はないと考へたのだが、彼はその自分の物言ひこそ強制に近いのに氣が付かなかつた。が、さう云つて置きながら彼は一寸默つてしまつた。たうとう決定するといふ心持と、いやまだ自由が殘つてゐるといふ心持とが頭のなかで激しく入れ混つてゐた。

彼はつい先刻の藥局での切迫した氣持を思ひ出してゐた。それに比べて今は自分でも變だと思ふほどに客觀的なところがあつた。どうしてだらうと彼は思つた。だがそれはやはり松子に對して少しのさぐりも入れる必要がなくなつた——意識的にも無意識的にもその習慣がもう要らなくなつた。さういふところから來てゐるらしかつた。それは結局相手の性格が松子の性格だからであつた。相手が松子だから。——彼は強いてそれを頭に置かうとした。そして相手があ丶いふ松子である以上、これは自分から或る定まりをつけなければいけないのだと彼は思つた。松子をあまりに細かく識つてゐる事がこの場合祐三を縛つてゐた。そして彼が長い間何となくさぐりを入れるやうな態度を續けて來たゝめに、その態度が松子に自然影響してゐるものならば、猶更自分から決算しなければならない事柄であつた。觸れにくい事柄だけに、いまになつても觸れずに逃げるのはあまりに生活のうへの綺麗好みに過ぎると思つた。——彼は氣を奪られて、しばらく茫んやりした顏付きになつてゐた。

「どうかなさいましたの」

「え丶。——あなたの心配していらつしやる事、大丈夫ですよ」

云つてしまつて、やはりよかつたと彼は思つた。說明よりも結論を先きに云つたのは双方のためによかつたと思つた。これで幹子が氣を惡くするならば勝手にしろ、彼はそんな風に考へてゐた。

「一體何を心配してゐると思つていらつしやるの。何か思ひ違へてい

らつしやるんぢやないでせうか」

「僕が松子さんに近づき過ぎる事でせう！」

「さうぢやありません」

しかしどの位の強さで答へてゐるのか、祐三には分らなかつた。

「でもそれに近い事でせう」

「わたくしは妹が變人になつてくれなければいゝんです」

「それを僕が變人にしさうだ——さうなんでせう」

幹子は云ひそびれた。

「兎に角僕は松子さんに一番大事なことをお話してしまつたのだから！」祐三は知らず知らず高い聲を出してゐた。「これ以上もう云ふ事はないんですよ。もうこれで、傍觀する仲間に入つてもいゝんです」

連續してゐた音の急に休んだやうな、歩いて來た人間の急に停つたやうな、間の抜けた心持を彼は味つてゐた

「誰も彼も松子さんの性質を呑み込んでゐないと思ふのがいけなかつたんです。——僕が出過ぎたんでせう」

「そんな事ありませんわ」

「いゝんですよ。いゝんですよ」豫想よりもずつと生き生きしてゐる自分に快感を感じながら、祐三は反對に宥めてゐた。「僕はこの通りですけれど、かう云つてしまへばまたそれで腰が据るんです」

この通りだらうな、誇張はないのだらうな、彼はしきりに自分に確めてゐた。

「あなたの心配していらつしやるの、この事でせう？」

幹子はやはり答へなかつた。祐三は焦立つて來た。

「さうなんでせう？」

「そのお話、もう止めませうね」

不意に幹子が云つた。二人はしばらく別別に默つてゐた。乘客のない輕便列車が道向うの別莊の庭堤の下をゴトゴトと通つて行つた。

「いまの話、本當に濟んだ事にいたしませう」

幹子がもう一度確かめた。それで祐三は、幹子が默つてゐる間その事を考へ續けてゐたのだと知つた。

「濟んだ事つていふと」

「森島さんとわたくしと——此處つ限りのことに致しますわ」

「それで濟んだ事になるものかしら」

「わたくしが思ひ餘つたのです」

と幹子が云つた。祐三が打ち明ける氣持を重點にしてゐたところを、幹子は高飛車な云ひ開きを主にして受け取つてゐるらしかつた。兎も角も祐三にさういふ云ひ開きを思ひ切つてさせた、その點を幹子は氣の毒がつてゐるのだ。その點に壓迫されてゐるのだ。

「わたくしの取り越し苦勞で大變になつては、どうしていゝか分りませんわ」
「松子さんは、當分家においでにならない方がいゝでせう！」
禎三が不安に驅されて獨り言のやうに云つた。
「そんな意味ぢやございませんわ」
幹子もいつの間にか容赦のない云ひ方をした。
「どうぞ、今の事、此處きりで仰有らないで下さい」
「そんな事が出來るでせうか——」
禎三は自分に云ひ聽かすやうに云つてゐた。
「大變になつては堪つていけないといふ事柄も世の中にはありますわ。——さうでございませう？」
抽象的な云ひ方だが、禎三にはその意味が分つた。
「えゝ。不自然でない範圍で——」彼は自分のなかの策略家を吟味して——恐れてゐた。「不自然になつたら、お約束はしませんよ」
「勿論でございますわ」
一寸不快な顔をして、幹子は話を外らせてしまつた。彼女はひと息つくやうにヴェランダを見廻してゐた。このやうな土地でも用のあるものと見えて、道の傍に沿つてゐる電信線がしきりに低い音をたててゐた。
「芳子さん、ちつともお變りになりませんのね」出し拔けに幹子はそんな事を云ひ出した。「いつでしたか——もうずつと前に——御一所にテニスをした事がありましたわ」
さうだ、芳子を昔から知つてゐるために幹子は殊更疎遠にしようとしてゐるのだと禎三は思つた。さういふ點が、何と云つても幹子の世馴れた人間になつてゐるのを彼は感じてゐた。何かまた云ひ殘した心持と、餘分な露骨さを避けたい心持とが二人に往來してゐた。
「煙草は召しあがりませんの」
「えゝ、飲みません」
他愛のない會話で繋ぎをとりながら、彼等はその儘しばらく休息してゐた。
「お子さんの多いお家と見えますのね」
幹子は態とらしく周圍の柱や欄干の疵に目をつけたりしてゐた。
「えゝ。——もう一つ、肝心な話に戻りますけれども」禎三が思ひ切つて口に出した。「明後日は僕は晝過ぎの汽車で東京に歸りますよ。二時二十分でしたか。——そのおつもりで」
暗に内に發つ筈の松子とは別々になる意味で云つたのだ。
「二時ね」やはり頭に入れて置かうとして、幹子は眼を外らせてゐた。「もうこんなお話ほんとに止めませうね。わたくしはやつぱり、芳

子さんに一寸お目にかゝつて行きますわ。ついお傍まで來て、何だかあんまり惡いやうに思ひますから」

裏の畑道から見た町はまつたくの田舎家だつた。いかにも信濃の山國の寂れた低い家並みだつた。さういふ景色を見ながら、禎三は昂奮のあとの反動の來ないやうにと用心してゐた。幹子に對して露骨に云ひ過ぎたとしても、やつぱり云つてしまつてよかつたのだと彼は繰り返し思ひ込んでゐた。――詰る所は彼の弱い證據を曝露しただけで終つてゐるのかも知れなかつた。しかしそれにしても、禎三はその性格なりの力を盡しただけだつた。相手が深い、細やかな、しつかりと根柢のある感情を向けてゐるのだと知ると同時に自分を強いて抑制する事が、或る人には弱い行爲になるとしても、それは自分の本性には少しも關しない事なのだ、こんな風に彼は考へてゐた。(といふ訣は、この出來事をいつか血氣旺んな友達の間に知られて、批評される場合を想像してゐたからだつた。)だが彼にとつては、弱い行爲とは結局全力で試みない行爲のことだつた。――

ふと彼は、意志を持つ事と諦めを持つ事とがいかにも同じ生活法の楯の兩面になつてゐる事實を、眼のあたり見たやうに思つた。今の場合、まつたくそれは形容詞の差に過ぎなかつた。彼は酔つてコツプを振り廻したニコルを想ひ出した。地理的にではあるがニコルの世界人らしい生活を想ひ出した。さうだ、東京には新らしい、久しぶりの生活がある、身體の恢復した自分にとつてはもう空想とか幻影とか、それらは生活のなかの一小部分になつて行くに違ひないのだ。から無理にも考へようとしてゐた。

「役人なんぞ」――禎三の氣を引き立てるつもりで、幹子が思ひ出したやうにそんな事を云つた。「嘘ばつかり云つてゐるやうなもので仕樣がありませんのね」

「え？　なぜまた役人なんぞ持ち出したんです」

「だつて、妹もそれで隨分迷惑しましたもの」

「あゝそれですか」禎三が迂濶に云つた。「僕はまた御主人のお話かと思つて驚きましたよ」

幹子はその偶然の冗談に、子供の泣き笑ひに似たやうな笑ひ聲をたてゝゐた。

しかし彼は笑へなかつた。彼もまた結果から云へば松子の縁談が耳に入る毎に壞して來た人間だつた。結果は仕方がないとしても、壞したその時々の心持の深さの記憶が彼を重苦しくした。そして今はまた今で、松子に對する或る危險な氣持と一所に自分の生活上の綺麗好み、弱さ、狹い詩人氣質などをすべて次手に切り棄てようとする主張的な本能の働いてゐるのに、彼は氣がついてゐた。轉んでも只で起き

ない本能と云へばそれは誤解になるが、芳子に關して早速さういふ本能を働かせてゐる事が、やはり彼には寂しく、苦痛だつた。

五

雨のなかを車夫は行李だけ載せて停車場へ向つて行つた。家の前がだらだら坂になつてゐるので滑り易いのを用心してか、幌車の後姿は突き當りの雜木林の裏へなかなか曲らなかつた。

「ほんとにわたし達は大丈夫なのに」

芳子はまだ腑に落ちない樣子で良人に相談してゐた。

「東京にだつて御用は溜つてゐるし、ひと汽車でも早い方が、明日がお樂ぢやなくつて」

禎三は答へずに階段をのぼつて行つた。荷物の用意だけはして置いて娘とゆつくり遊んで行くのが彼の豫定だつたから。——二階の部屋の濡れた硝子越しに、薄墨色の車はやつと林の向うに隱つて見えた。

この町の車溜りの車夫達は田舍者らしい質朴さで、八重子の病氣以來禎三の家に樣々な手助けをしてゐてくれた。この朝もさういふ關係から、二汽車ほど早く送り出すチッキの荷物を受け取りに來たをりに、今日の雨は午頃からひどくなる、午まへに發つといゝなどと玄關で注意してゐた。車夫は停車場の掲示で知つたのだ。厄日の雨で、これは越後の方から來るのだから、下手をすると丁度雨雲と一所に峠から高崎邊へかけて降りることになる、などとも説明した。

「御用がなければさうなさい。なんでせう、お荷物はこれきりでせう」

實際禎三は半端な時間を嫌ふところから、荷物拵へは起きるとすぐに濟ませてゐた。もう體力を取り返すだけになつた娘のために、規則的な運動をつけるのが毎朝の快活な日課になつてゐて、この日も彼はそれを拔かしたくなかつた。が、朝早くから天候を氣にしてゐた芳子は、車夫の話を聞くと一層熱心に奬め出した。

「本當にさうなさつたら。——こつちは無人でもいゝのよ。二三時間長くゐて下すつたつて同じ事よ」

禎三はその丸顔の淡泊な表情を凝つと見た。妻の淡泊さが彼には苦痛になつてゐた。どうしてかういつまでも從妹臭いのだらう……と彼は思つてゐた。

「吹き降りになつたら停車場までこれで一寸あつてよ。大變ぢやありませんか」

「ひどい雷でも鳴るんだと女ばかりで困るがな」禎三はそれには答へずに、迷つてゐる氣持を外らすやうにして車夫へ振り向いた。「雷は子供がひどく恐りてゐるのでね」

「神鳴りもありませんね」空模様を見ながら田舍者の車夫は簡單にさばいてゐた。「たゞひとしきり强いだ。ゆうべの降り出しが早いと、もちつとよかつたが」

「吹き降りになるものなら、もうやめてもいゝんだ」

事實、いつそやめてしまへと彼は思つてゐた。雨のために、誰も知らない事で彼だけが頭を使ふのが腹立たしくなつて來た。裏のせゝらぎや、建て附けの悪い方々の戸の軋む音を聞くと、彼は法事に行くのをやめても云ひ譯が立つやうな氣になつた。

「そんな事、伯母さんに悪いわ」

「八重子の樣子次第で强いてとは云つて來てゐないのだから――」

「だからなほ悪いわ」と芳子が强く云つた。「このくらゐの雨ならば、あと一時間も間がある事だし、次の汽車にお乘りになれば何でもない事ぢやないの。――あなたがいらつしやらないと伯母さんはまた八重子がどうかしたやうに思ふわ。――それに、默つてゐれば伯母さんは家の掃除までして置いて下さりさうよ。御法事はやめて掃除にだけ歸るのは可笑しいわ」

「兎に角荷物だけ運んでくれ給へ」云ひ譯のなくなつた彼が稍々焦立つて車夫に云つた。「一つ早い汽車にするやうならばこつちから云ふよ」

「こつちからつて、この雨に女中も可哀想ぢやないこと」

「自分で車溜りまで行くんだ。荷物はなし、それでいゝぢやないか」

濡れて光つてゐる合羽姿の車夫が梶棒をあげて、坂を下りて行つたのはその時だつた。――

いま八重子はしぶきを受けた窓際で、膝の周りに玩具を散らかしながら、女中を相手に紙人形をこしらへてゐた。同じやうな亂雜さで一時は贅澤な道具が幅を利かしてゐただけに、そのやうな繪本や玩具の彩どりは部屋のなかをすつかり見違へさせてゐた。其處はもう病室ではなく、元の通りの子供部屋だつた。あくどい程の彩色がこんな天候の日には寧ろ天井や壁を温く見せた。

どつち道雨では運動が駄目なうへに、八重子は女中がわざと滑稽に作る紙人形を可笑しがつて、前ほどにはあまり取り合はなかつた。的の外れた彼は手持不沙汰に足を投げ出してゐた。彼は豫定のやうに娘の傍で氣輕な時間をつぶす心地になれないのを感じてゐた。――殊に、他の玩具にまざつて幹子から貰ひたての寄木細工の輪が轉がつてゐるのを見ると、彼は今更變な氣がした。

幹子はあの日歸り途に立ち寄つて、一時間あまりも芳子と主婦らしい寛いだ話をして行つた。八重子に玩具を約束して、中道松子との連名で町の店から屆けたりした。だがその態度のあまりにそつがなく、

誰にも不快を與へないだけに、禎三は却つて何か中途半端で落ち着かなかつた。幹子自身から別に輕薄な印象を受けた譯ではなかつたが、何となく巧み過ぎる、徹底しない感じが其處に殘された。頭に昂奮のある間は自分の氣強さで幹子を壓迫してしまつた心意であつたのに、今では幹子の望んでゐるとほりの人間に自分を當てはめて、それに成り濟ましてゐるかのやうな束縛を感じてゐた。この束縛を破りたい衝動が稍もすると彼に起るのだつた。そのうへ、穿鑿して行くと結局は、松子と同じ汽車に落ち合ふ想像が強い魅力になつてゐるのだ。

「これ見てよ。これ見てよ」

女中の新らしく作つた頭の大きい人形を見せながら、八重子は身體を搖つて笑ひ崩れてゐた。八重子はもう眼も窪んでゐず、笑へば頬の肉がくりくり盛り上るまで恢復してゐた。彼はさういふ娘に同化しようとした。娘の頬の生き生きした運動に見とれやうとした。せびられる通りに道化た目鼻をその人形の顔に描いて、彼も一所に笑はうとした。姑息な自己欺瞞だつた。——その時に芳子が入つて來た。

「ほら、こんな顔描いちやつたのよ」

八重子は燥いで、母親にも早速見せてゐた。

「ねえ、もつと拵へてね。よう、拵へてよ」

芳子は明かに沈んだ顔付で、いゝ加減な返答をしてゐた。やがて女中が出て行くと、禎三の豫期したとほりに口を切つた。

「やつぱり二時のになさるのね」

「あゝ、さうしよう」

彼は汽車のことなぞ忘れて子煩惱を發揮してゐる振を見せたつが、やはり不自然を隱せなかつた。

「おかしいのね。何故でせう」

「——時間に氣儘なのは普段からぢやないか」

「だからおかしいのよ。朝からあなたはちつとも氣儘にしていらつしやらないわ」

「どうして？——二時のにはじめから定めてゐる。車屋の話で變へる氣になれない。——それでいゝ譯ぢやないか」

「えゝ、いゝ譯なのよ」芳子は階下で十分に考へて來たらしく、なかなか譲らなかつた。「それがさつきから一人で窮屈になつていらつしやるの、ちやんと分つてゐるわ」

荒荒しい心で禎三はしばらく妻を直視した。

「なぜそんなに睨むの」

「俺の勝手にさせないといけないぞ」

「なぜ」

「お前のためにならないんだ」

「なにをそんなに恩にお着せになるの」
芳子はたゞ反撥のやうに眼を大きく瞬いて、彼の視線をその儘受けてゐた。彼は自暴に似た心持で云つた。
「そんなに次の汽車で發つて貰ひたいんだね」
「えゝ――さうして頂戴」
芳子は精一杯な、こはゞつた顔をしてゐた。或る技巧から、禎三はすつかり決定したといふ素振りを見せて部屋を出てしまつた。急に高まる廊下の雨垂の音を彼は聴いた。彼は私部屋に入つて、ぼんやり手荷物にするものを考へようとして本棚を見廻した。――芳子の意地になつて奬めるとほりに次の汽車に乘つてしまへば、どつち道今よりは安定のある狀態が獲られるのだつた。松子がそれに乘らなければよし、松子に出會つたとしても、彼は充實した、的確な言葉で、直接に適度な、はつきりした距離をつくり直すことも出來るのだと考へてゐた。まつたくそれは魅惑的な考だつた。冒險であつた！――しかし幹子にあゝいふ應對をした事を思へば、これも又同じ程度の冒險に過ぎないではないか。一方があのとほり可能だつたのならばこれも出來ないとは云へない。――彼は湧き起つて來るこの考を持て餘して、疊み寢臺のうへに寢轉んでゐた。放つて置けばそれはどんどん大きい塊になりさうな考だつた。――と、芳子がまた從いて來た。
「わたしが間違つてゐたら、本當にお詫びしますけれど」
一寸躊躇した後に、芳子がひどく力のない聲で云つた。
「あなた松子さんの汽車のことを朝から考へてゐらつしやるんぢやないの」
禎三は頑固に默つてゐた。
「こんな事を聞いちや、いけないのでせうか」
彼はやはり返答しなかつた。――が、幹子との一應は賢い、周到なやうな約束も、事實の前に置くとまつたく一時のつくり物に過ぎなかつたのを彼は感じてゐた。いかにも眼のあたり想像に苦しめられてゐるやうな妻の表情を見ると、やはり知らせた方がいゝのだと彼は思つた。隱してゐて何になると思つた。率直さ、純粹さで自分の殼を毀さうといふ筋道をとつた以上は、妻にもその一本道を用ゐなければやはり徹底した遣り方ではなかつた。中途半端なのは幹子の態度ではなく、實は彼自身にも原因してゐた。禎三は妻を相變らずの從妹だと批評してゐる。しかし良人を知る範圍の據つてこそ妻は從妹以上の複雜さを持つて來るのだつた。――彼は妻に細かく聞かせようとした。が、口に出すと反對な物言ひになつた。
「それだけ分つてゐれば澤山ぢやないか」
「やつぱりさうでせう！さうでせう！」

芳子は一時に疳高い聲をたてた。

「お前は、松子さんと同じ汽車に乗るつもりで俺が遲らせてゐると思つてゐるんだね。——その反對だよ」

どうだか、といふ顔で芳子は眼を落してゐた。

「誰にも頼まれた譯ぢやない。たゞ自分でさうしようと云ふんだ。——變に思はれるのは覺悟の前さ」

「變に思はれるやうな譯があるの」

「第一梶田が僕を疑つてゐる。——」

豫期した激しい言葉が來ないので祐三が振り向くと、芳子は眼に一杯涙を溜めてゐた。

「馬鹿な。早合點してゐるんだらう。梶田は——」

「梶田さんなんぞどうでもいゝのよ！」嗄れた聲で芳子が遮つた。「梶田さんの事なんぞに話を外らせるのは狡いわ」

「おとゝひ幹子さんと長い間散歩をした、あの事を云つてゐるんだ

「ね

「さうですとも」

「だから同じ話なんだ！——いつもの手帖を置いて行くから讀むといゝ。——幹子さんは梶田から貰つた手紙で不安になつたんだ。梶田も別に露骨な事を書いた譯ぢやないだらうが。——話を外らすほど俺だつて卑怯ぢやないぞ」

「幹子さんも随分ね」芳子が稍々和らいだ聲で云つた。「何もたかへたやうに此處へ寄つて行つたりして」

「思ひ過しをしてわるいやうな氣になつてゐるんだ」

「……」

「それも納得出來ないんだね。幹子さんに云つたとほりをお前に云はうか。——松子さんの事なら——紙一重まで氣持が近づく事があつたとしても、俺は結局大丈夫だよ」

芳子は無意味に窓の外へ眼を外らせて、そこが痛むかのやうに横腹のあたりを妙に押へてゐた。

「これで俺を疑つた連中には皆に云つてしまつた！もう何も殘つちやゐない」彼は豫想よりもずつと大きい身輕さを感じて仰向けになつてゐた。「——結局大丈夫といふ事柄なら自分だけで默つてゐる方が、誰にもとばつちりが行かないでいゝのだと今までは思つてゐたんだ。二つの反對な氣持が同時に動いても、その一つを心のなかで殺してしまへば誰ひとり迷惑はかけないで濟むと思つたんだ。俺は想像を掘つて行くと際限のない人間なんだ。しかし梶田の事が起つて——かうなつた以上もうなんにもない！お前が想像で苦しんでゐる事があるなら次手に聞くといゝよ」

芳子はやはり當てもなく窓先きの雨景色をぼんやり眺めてゐた。禎三は妻がなにか一人で感動してゐるのだと思つた。彼は氣輕に話を替へようとした。

「もう汽車のこと留めないだらうね」

「どつちでもいゝわ」

芳子が低く、咽喉に呟いた。

「なぜそんな物言ひをするんだ」彼はむつとして云つた。「お前、松子さんに嫉妬してゐるね」

芳子は光つた眼で良人を睨むだ。

「それあお前の自由だよ。しかし今のやうな話をした後で、まださつぱりしないのは恥だぞ」

「うむ——」

芳子は云ひ詰つた。窓硝子が前よりも烈しく軋んでゐた。なるほど雨はひどくなつた樣子だつた。頭だけ見えてゐる高い欅が半町ほど先きでゆつくり揺れてゐた。

「あなたはわたしを當り前の人間に扱つて下さらないのね」

突然芳子が昂奮してそんな事を云ひ出した。

「なぜ」

「わたしだつて二つの心持が一所にはたらく事くらゐあるわ」

禎三が解らずにゐると、芳子は一層聲を震はせ、涙を溢れさせ、その聲音で彼を撃つやうにして云つた。

「自分ばかり幹子さんに云ひ譯をたてゝしまへばいゝ氣になつて——あなたはわたしのお友達をとつたのよ」

「とつた？」

「えゝ。わたしからとつたぢやありませんか。わたしのお友達を減らしちやつたのよ！」

減らした。それはさうだと彼は思つた。彼は胸が痛んだ。松子のゐる事が、看護疲れの出てゐる頃の芳子にとつて、どの位力になつてゐたかを彼は想ひ返してゐた。

「わたしは、松子さんを憎んぢやゐないわ。そんな——あなたの思つてるやうに嫉妬はつかり——嫉妬はつかり——」

彼は呆然と眼の前の感情の激しさを眺めてゐた。しかしそれは純粹な激しさだつた。妻は口元にまで涙を流してゐた。嫉妬などといふ言葉にもむき出しな幼稚さがあつた。それは古馴染の禎三にとつては懷古的な幼稚さだつた。こんな言葉を昔聞いた事があつたやうに思つた。「えゝ、わたしの級ではさうね、Hさんと松子さんとがあなたと氣が合ふわ」女學生の芳子が嘗てから云つた事があつた。——彼は堪へられない心地で、部屋を出ようとした。すると芳子が稍えた、低い聲

で呼び留めた。

「どうぞ、二時のにして下さい――」

頼三は結局豫定のとほりの汽車に乘つた。燈のついた大宮、王子、田端と東京に近づきながら、彼は買つたばかりの夕刊で東海道の各線が颱風の被害を受けた記事を讀んだ。それに比べると山の今朝の雨はまだ穩やかな方だつた。――松井田から高崎、熊谷あたりまで一時晴れてゐたのが、夜に入つたこの邊ではまた音もない細雨になつてゐた。沿道のぬかるみや濡れた屋根にうつる灯が嘘のやうな平和で美しい影をつくつてゐた。たつた一人で知り合ひもない車室に乘つてゐるのが彼には全く平和だつた。その坐席で、彼は妻に云つた通りに一種空手になつたやうな顏付をしてゐた。――

彼は松井田を過ぎた頃の珍らしい大きい夕燒を思ひ出してゐた。あちこちの崖に瀧の出來てゐる吹き降りの碓氷峠をおりて、さて汽車が平らな桑畑を走る頃に、彼はいつの間にか雨の止んでゐるのに氣が付いたのだ。彼は窓を開けた。すると汽車の走る眞後ろに碓氷峠、一文字、富士見なぞの山々が連なつて焦げつくやうな赤い日を受けてゐるのをふと見つけた。よく町はづれから眺望した連山の丁度裏側を見るわけだつた。その裏側の山々の上に濃い紫の淺間山がくつきりと聳やかすやうに抜き出て、煙を横なぐりに靡かせてゐた。斷れ斷れになつてしかも全體の輪郭が大きく動いてゐる夕燒雲のなかで、彼は淺間山の凄味のある形に不安を受けた。あの下に家族がゐて、近い距離のために却つてその大きい凄味に氣が付かないでゐるのだと思つた。彼は山にくらべれば極く極く小さい家の小さい硝子窓を開け閉てしてゐる妻を頭に浮べた。幹子ともあゝいふ工合になつた以上は、彼は妻を高原の一軒家に殘して來たやうな心地になつた。――が、それにも係らず、頼三には家族から、一家内の小さい葛藤から逃れる自由な心持が強かつた。松井田、磯部、安中と、白壁の目立つ、桑をつくる農家の間を走つて、彼は自分自身が葛藤の中心であつたのに、その逃れつゝあるやうな奇妙な心持をしきりに繰り返してゐた。

日暮里を過ぎると往來の夥しい雨傘が彼の目についた。彼には、人間のごたごたした大きい塊りのなかに入つて行くことが不思議に安樂であつた。漁村にしても山にしても、狹い地域で自分の考へた事、する事が一々他人に響く煩はしさを、彼はもう味ひ盡してゐた。しかし東京での生活が始まれば、彼のする事を誰も振り返りはしない。彼は都會の地道な一分子になる。――空いてゐる汽車の坐席で頼三はまつたく足を伸はしてゐた。大勢の人間のなかに入ることが現在の彼には一番の慰めで、また刺戟であつた。

久し振りで禎三は正面に赤い廣告塔を見た。

十七回忌の行はれる禪寺は芝公園に近い裏町にあつて、雜草の茂り放題に荒れた禎三の新らしい住居からは一時間近くもかゝつた。朝から大掃除を手傳つてゐた彼は、やつと時刻に間に合つて長い石段をのぼると、本堂の廣い疊の末席に坐つた。彼の隣りには從姉の隆子が神妙な低い息づかひをしてゐた。倫敦で三人の子の母親になつて、隆子はこのやうな長い時間坐る勤めは女に似合はず不得手であつた。讀經は空氣の淀んだ天井の下で虻のうなり聲か何かのやうに單純に調子よく響いた。隆子は飽きて來ると時々禎三の方に身體を寄せて雜談を耳打ちした。その度びに彼は從姉の單衣から發つ洋行歸りらしい化粧の匂を嗅いだ。

住職を先頭にして、やがて僧達が立つて影の多い疊の上をぐるぐると廻りはじめた。「願くはこの功徳をあまねく衆生に及ぼし……共に佛法を行ぜんことを」――最後にこんな經文を聲のよく徹る住職が誦してゐた。そして住職は集つた者に燒香を促した。

「禎三さん、あの嵐によく出て來てくれたのね」

もう一度風とほしのいゝ書院へ親戚の仲間が引きあげた時に、紋服で改まつてゐる福田の伯母が近づいて挨拶した。

「どうも遲れて失禮しました」

「隆ちやんは昨日のあの天氣で、あなたの事だからきつと氣前よくやめたんだらうなんて噂してゐたんですよ」

「どうして！――もうしばらく廻つて來ない法事だつて云ふから」

彼はやはり芳子の奬めるとほりに出て來てよかつたと考へてゐた。

「大掃除はどうだつたの。明日は誰か手を貸しますよ」

「えゝありがたう。この通りです」

彼はまだ掃除の汚れのよく除れてゐない手首を見せて笑つた。

親戚の女達が八重子の見舞を禎三に述べてゐるのを見ると、福田の伯母はその返事までを一手に引き受けて喋つた。

「あんな事になるんなら、わたしは餘計なお世話なんぞしなければよかつた」

伯母は東京人風な大業さで眉を顰めてゐた。

「ほんたうに命びろひ。――可哀想に子供つてものはうとうとし大儀さうになつた時が一番危いのに、この人達はわりあひに音無しいなんて、枕許で話し合つて云ふんですから――わたしは、芳ちやんの手紙を讀んぢやゐられなかつた」

この、貶すやうな物言ひで愛情を示す方法は福田の伯母獨特のものだつた。

揃つて夕食を共にするにはまだ半端な時間があつた。倫敦から歸つて半年とは經たない隆子は久し振りの禎三にしきりに親しみを見せてゐた。隆子は女仲間の塊つてゐる席から立つて、禎三と庭の高みにある亭へ行つて見ようとさへ云つた。それは愛宕山へ續く崖の一部を境内にとり入れた德川中期からの庭園だつた。頂上に登ると品川沖の水平線に淡い入道雲が見えた。

「ちよつと、伯母さん達からこゝは見えないでせうね」

隆子は眼下の坐敷を見透しながら、袂から良人のものらしい舶來の紙卷煙草を取り出して燐寸を擦つた。

「去年のお葬式で頭痛がしばらくとれなかつた時分から、こんな癖が少しついたのよ。でも伯母さん達には内密よ」

「その肝で連れ出したんだな。しかし、内密にするところが神妙になつたもんだ」

隆子は亭の腰掛けをハンケチではたきながら、狡い眼付で笑つてゐた。

「わたし變つたでせう？」

「さう――」

「心細い返事なのね。もう禎三さんを慰めてあげる勇氣なんぞ、殘念ながらなさゝうだわ」

實際隆子は頭のあたりに餘分な肉が付き、昔よりは氣が拔けてゐた。

前日の雨に洗はれた大木の梢では蟬が啼いてゐた。築場の裏に商船學校の練習船らしい帆船が白いペンキを反射させて停つてゐた。此處にはまだまだ夏が殘つてゐた。あまりに高原とは違ふ樣子だつた。禎三にはあの情熱までが、何か勝手の違ふ土地でぐんぐん醱酵してしまつた特別な產物のやうな氣がした。――行儀のいゝ町家の屋根を遠くまで見晴らしてゐると兎角聯想がその方へ行かうとするのを、彼はなるべく紛らせてゐた。

「あつちでね」しばらくして禎三が、稍々氣の引けるやうな顏付きで云ひ出した。「下山さんの例のお孃さんに會ひましたよ。あの人はまだ獨身でね――」彼は梶山の話を表面の筋道だけあらまし話した。

「僕が分別臭いことを云つたら、その友達にひどくやつつけられた」

「ちよつと變こつこね」

「何？」

「因緣話ねつていふのよ」

「まあさうです――」

隆子の良人が、田舍から出て來た故人の弟を案内して登つて來たので、話は途切れた。

後書

その年の秋が終つた。十一月に入つて、禎三は九段に新築された聯合學生會館の圖書部に高木の世話で勤めるやうになつた。

それは偶然の機會からだつた。十月に禎三には或る學校への就職口があつた。郊外の美しい川のほとりに建つてゐる自由な氣風の學校であつたが、勤める時間の多過ぎる點に彼は躊躇してゐた。禎三はかゝりつけの醫者に健康診斷をして貰つた。それから念のために、高木の家へ相談に出かけて行つた。

もう學校町の街路樹の黄葉は厚ぼつたい層になつて汚れはじめてゐた。高木は特別にその日の區切りのいゝ時間を禎三のためにとつて置いてくれた。高木の診察は綿密なものだつた。それから仕事着を投り出した高木がゆつくりして行けと奨めるのをいゝ事にして、禎三は晩食の時刻になるまで思ふ通りを打ち明けて相談した。——彼は出來るならばもう一年ほど几帳面な勤めは避けたかつた。やつと恢復して來た精力を、その方へ一杯に費ひながら引き擦られて行くのはまだ不安であつた。それに彼は伊豆にゐる間に、新らしい研究めいた仕事の計畫も多少建てゝゐた。しかし無職で我儘な事も云つてゐられない關係から、學校の口をきつぱり斷ることも躊躇してゐたわけだつた。

高木は禎三のこんな云ひ分まで點頭いて聽いてゐた。——つまり普通の醫者のやうに、健康が丁度就職に堪えられるだけになつてゐるからと云つて元氣をつけても、君の場合は頼りにならない氣がするのだらう、と高木が云つた。さういふ譯ならば、僕の傳手で君に向いた仕事がないでもないよ、さうも云つてくれた。その時に禎三は學生會館の名前をはじめて聞いたのだ。

二人は晩食をとりに丸ノ内まで出た。大きい植木鉢の列を衝立がはりに使つてゐる落着いた地下室の洋食店だつた。その食事の最中に高木が不意に話題を替へた。

「北京に天然痘が流行つて、幹子さんが發つのを延ばしてゐるよ。知つてゐるかい」

「あゝ僕も一寸通知を貰つた」

禎三はそればかりでなく、松子と芳子との間に一度便りの往復のあつたのを知つてゐた。芳子は口に出さなかつたが。

「梶田の話を、君は無論知つてゐるね」高木は彼の顔色を窺つてゐた。「あれも——僕が間に入つたのだが——梶田には氣の毒な結果だつた」

唐突に云はれて、禎三はたゞ高木を見返してゐた。

「梶田つて妙な奴だ。——東京へ歸つても時々忙しい時間に遊びに來た

りしてゐたが、どうせ云ひ出す事なら早く云へばいゝのに。――しかし僕は贊成ぢやなかつた。誰にも贊成されない形になつてしまつて、梶田にはどうも氣の毒だつた」

誰にも、といふ言葉で、禎三は自分の無論含まれてゐるのを感じた。

「僕も歸つてから手紙を出したが、返事を貰へなかつた。――尤も、いつぞや少し云ひ合ひの形になつたのだから、返事の來ない方が當り前かも知れないけれども」

「その話も少し聞いたよ」

高木が眼鏡を光らせて、一寸具合のわるい笑顏をしてゐた。

「少し？」

「いや大いに聞いたのかも知れないよ」

高木は紛らせるやうに笑つた。

「どうも、君にあ、武裝なんて事は出來ないんだね」

「さうかも知れない――」

「しかし、思ひ立つとかつとするところにまた脈はあるよ」

慰めるやうにまた高木が云つた。

新らしい皿が來て二人は默つた。

「下山さんでは、梶田にどういふ返事をしたんだらう」

少時して禎三が尋ねた。

「松子さんはなかなか考へてゐるね。――あまり年の若い男にはかたづさたくないらしいよ。再縁でもいゝから氣の細かい、しつかりした人間がいゝなどと云つてるさうだね」

禎三は思はず顏を擧げた。強い明りを浴びた植木に取り巻かれて、彼は自分の考を松子の口から云はせたやうな氣がしたのだ。

一週間ほどして、高木はあらためて禎三に學生會館の職を紹介して來た。高木が其處の事務時間を引き受けてゐる關係だつた。そして禎三の役目といふのは、毎日通ふかはりに藏書の整理と新刊書の買ひ入れとを理事に相談して行けばいゝ樂な仕事だつた。日の經つにつれて、彼は自分の調べものゝ書類を持ち込んで、その事務室を書齋のやうな外見に變へてしまつた。

禎三に宛てがはれた部屋と高木の部屋とは大きな室内運動場一棟を隔てゝゐた。そして双方の部屋を通じてゐる廊下が丁度室内運動場の二階觀覽席の外廊にあたつてゐる具合だつた。高木は一週に一度しか會館に顏を出さなかつたが、禎三を誘つてはよくその觀覽席に入つた。丁度戸外の運動の終る季節で、其處は扉を開けるといきなり人いきれを感じるほどに込んでゐた。天井や壁の白い漆喰の色に包まれ

て、高木と彼は眼の下にバスケットボールの練習や合同體操などを眺めながら、給仕の搜しに來るまで長話をつゞけたりした。

　或る朝その壁に貼つてある廣告ビラが禎三の目についた。それは露西亞生れの音樂家が東京の管絃樂團を指揮して近代音樂ばかりを公演するといふ豫告であつた。切符はすぐ階下の事務室で扱つてゐた。久し振りの變つた音樂會に出かける氣になると、禎三は給仕に二枚分の代を渡して置いた。

　會場はやはり公園の隅にある公共會館だつた。もう襟卷の要る寒さが來てゐた。いかにも冬の音樂會らしく、玄關の明るい石段には枯草のまじつた靴の土があちこちに光つて散らばつてゐた。相變らず子供にかまけて出不精になつてゐる芳子は人ごみに頰を火照らせ、物珍らしく四邊の座敷を見廻したりしてゐた。

　その休憩時間だつた。禎三が廊下から會場に戻つて行くと、座席の通路の角でふと芳子が後向きに立ち話してゐるのを見つけた。殆んど一年振りの派手な場所で、芳子は多少氣押されてゐる樣子に見えた。彼は近づいて行つた。すると、人の影で見えなかつた芳子の相手は、平常のとほりに控へ目な眼を稍々外らせてぽつりぽつり物を言つてゐる松子だつた。松子は眞面に彼の方を向いてゐた。

　禎三は躊躇した。すぐ横に塊つてゐる見知り合ひの常連仲間に入つて、その笑ひ話を意味も分らない中途から聞いてゐた。が、正面の松子がもう氣づいてゐるのを感じると、彼はやはり近寄つて挨拶した。近寄つて──彼は芳子が或る努力を押し隱してゐるのを見てとつた。しかしそれは彼にだけやつと判る努力であつた。

「御不沙汰してゐます」

「こちらこそ」

　こんな話ですぐに途切れるのだが、肩を押すやうにして絕えず人の出入りする通路の事で、さう不自然にはならなかつた。

「こんな角にぼんやり邪魔して」芳子が紛らすやうに良人を見上げてゐた。「わたし達のやりさうな事ね」

　松子は聲を立てずに、ゆつくり控へ目に笑つてゐた。

「兼雄さんは」

「合憎霞ヶ浦の飛行隊へ呼ばれて行つてをります」

　舞臺の裏で樂器の調子を合せる音が小忙しく聞えはじめたので、[illegible]子の最近發つて行つた噂をしてゐた彼等はその儘別れた。そして又も音樂を聽くために、禎三と妻とは別別な氣持になつた。

　最後の曲目が終つた時に芳子は多少氣に懸けながらも、松子を搜さずに人に押されて玄關へ出た。そして蝙蝠傘を受取る禎三だけが地下室の下足場に降りて行つた。

地下室への階段は容易く動けないほど混雜してゐた。しかし妻を吹きさらしの戸外に待たせてある禎三が少しづつ人を越すやうにして急いでゐるうちに、つい一間ほど下の壁際に人波を避けてゐる松子を見つけた。彼は通りすがりに挨拶するつもりでひと足ひと足降りて行つた。挨拶だけにとゞめるといふ氣持にはやはり努力が要つた。が、松子は彼を認めると急に動き出した。前をばかり見てゐる横顏があきらかに不自然だつた。

禎三は侮辱されたやうな氣がした。その儘別れる抑制を失つてしまつた。彼は片意地な心持で人を分け、松子の横に出て行つた。松子は耳をまで赤らめて、おどおどした顏で四邊を振り向いてゐた。

「芳子さんはどちら」

「草履ですから表で待つてゐます」

「わたくしもお伴れがありますから、どうぞお先きへ」

短い間二人は顏を見合せてゐた。

「松子さんやつぱり誤解してゐるんですね」

通り越して行く男に髮を押されて、松子はそれに氣を奪られた振りをしてゐた。

「高木さんを送りに行つた歸り途の話を、やつぱり勘違ひしてゐるんですね」

禎三は執拗く繰り返した。

「勘違ひなんぞしてゐませんわ。――でもこんな所で立ち話するの、やめませうね」

「なぜです」

しかし松子は無理に頬笑みながら、返事をしなかつた。

「なぜか、大概分りましたよ」

少時おいて禎三が云つた。混雜のなかで彼は幹子に激しい、透きとほるやうな反感を持つた。

「幹子さんはあなたとは隨分違うんですね！」

「なぜ。姉は何にも關係ありませんわ」

禎三は默つてゐた。

「ほんとに姉はなんにも云ひませんわ。でも――」

松子はまた口を噤んでしまつた。手摺の際に立ち止つて、松子はそれきり動かうとしなかつた。

「ぢやあ、失禮しませう」

禎三がまた云つた。

「誰かゞ何か云つた事だけは分つたのですから」

「誰に云はれたからどうするといふのぢやありませんわ」松子はやはり隱すやうな重い口振りだつた。「でも、ずるずるに暮すのがいけない

つて仰有つたのは森島さんぢやありませんか」

彼は何か云ひたかつた。短い時間に云ふ事があまり多過ぎた。それに云ひ出すとすれば、今しがた芳子の努力してゐた心持まで松子に通じてしまひさうだつた。それは松子には堪らえ難い苦痛に違ひなかつた。——不思議な生きた形式で、彼は松子から「勘違ひしてゐない」證據を受け取つてしまつた。

松子の伴れが人波とは逆に階段を登つて來た時に、禎三は離れた。

「芳子さんには御挨拶出來ませんでしたから——」

誰に聞えてもいゝ、和らいだ、複雜な物言ひで松子が後ろから附け足してゐた。

芳子は肩掛で口を押へながら、風あたりの强い玄關の玻璃戸の陰に立つてゐた。、落葉と秋草とのすつかり掃除してある、公園の暗い細徑を抜けながら、禎三はまだ一心に考へてゐた。誰が松子に暗示を與へたか？誰がたうとう結末をつけたか？——ふと彼は一本調子な梶田の妹をありありと頭に浮べた。——會場の暖房室の蒸汽の音が距離よりもずつと近くに聞えてゐた。

「下足場で松子さんに出會つたよ」

暫くたつて禎三が云つた。

「さう？——松子さん、何も知らないでせう」

彼は答へなかつた。敎へる勇氣がなかつた。

二日ほど經つた午休みに、高木と禎三とは學生會館の食堂で落ちあつた。食堂の卓は汗ばんで息を切らせた、運動着のまゝの學生や女學生に大部分占領されてゐた。室内運動場で運動の冬季講習會がその頃毎日續いてゐる關係だつた。すると、高木は思ひ出したやうに背嚢鞄のなかゝら繪葉書を取り出して見せた。高木はまだ外套を着た儘で、外から入つて來たばかりだつた。

「君にもよろしくつて書いてあるよ」

大連の消印の押してある、幹子からの便りであつた

「一家で正月の休暇を送るのださうだ。小さい連中はどうしてゐるかな」

繪葉書には支那人の車夫の蟻のやうに集つてゐる埠頭の遠景寫眞が刷つてあつた。

二人は絶えず扉の開け閉てされる騷ぎのなかで辨當を濟ませた。が、食後の息つきに例の二階の觀覽席に納まると、高木はまた話題を同じところへ戻した。

「發つ前に松子さんの事も頼まれたのだが」

と高木が煙管を取り出しながら云つてゐた。

「僕には本當のところあの人がよく分つてゐないんだ。——どう說明したものだらうな。別に缺點といふほどのものもないのに大分離れてしまつてゐるのは。——ひとつ君に助太刀して貰はうかね」

一瞬間禎三は、高木が自分の感情の痕跡をさぐつてゐるのではないかと思つた。

「どういふのかね。——松子さんは、あれは少し茫やりを裝つてゐるのかな」

「裝ふ藝當なんぞ出來るものか」

「僕もさうは思うんだが——」

「萬事外へ現はすのが下手なんだ」禎三はつい二三日前のあの證據を頭のなかにありありと置いてゐる心意だつた。「それで內の生地がちよつと見えないんだ」

「人は善いのだらうけれども」

高木が獨り言のやうに云つてゐた。

「それも本人はよく飮み込んぢやゐないかも知れない」

「そんな事もまさか云へないからね」

高木は笑ひ出した。しかしその語氣で何か具體的な緣談の心當りのあるのを察しると、禎三は妙に焦立つた熱心さで喋り出した。

「あの人には自覺が少ないんだよ。外見と生地にまだ聯絡が少ないんだ。誰かゞ傍で自覺を持つやうに仕向けてゐれば、もつとずつと目立つて來る人なんだ。あんまり謙遜すぎる。ひとり立ちの出來る性ちやない。家を持つて良人に頼つて行くと、その生地があらはれて、段段いゝ細君になつて行くに違ひないけれども——」

喋つてゐるうちに禎三はふと自分の空々しさを感じた。自分を故意に苦しめて無理な踊を踊つてゐるやうな自身をはつきり見たやうに思つた。禎三は浮かない、樂しまない顏つきをあらはして默つてしまつた。それから講習に氣を奪られた振りを見せて、彼は一番前の席に出て行つた。

下では毛織の上衣一枚になつてゐる女學生達が、講師を取り卷いて何か實地の說明を聽いてゐた。膝を折り敷いた姿勢の講師は、合圖の短銃を鳴らして貰ふと、二三人の男の學生と一所に五六間ほど走つて見せた。走つた男達はすぐには止らずに、關節を大切にしてその細かい足踏みを暫らく續けてゐた。

「無理をして飛び出さないように——君達は百米を短く思ひ過ぎてゐる」

硝子窓からの薄日を浴びながら、こんな太い聲を禎三は聞いた。

「手をもう少し開いて——身軀の重みですべり出すやうに」

その說明を高木は煙管をつめながら、禎三は手持不沙汰に——聽き

とつてゐた。

「どう、君もあの仲間に入らないか」萠三の樣子を見てゐた高木が、話題を替へて勢はるやうに云つた。「瑞典體操の講習もあるぜ」

「うん。――運動をつけなくつてもこの頃は工合がいゝんだよ。どういふ譯だらう」

「變つた場所が相當氣に入つてゐるからさ。その氣分が胃の作用を助けるんだ」

「そんなに微妙なものかなあ」

氣を替へて、萠三が單純に尋ねてゐた。

「さうさ。それが動物的制約といふやつさ」高木は先刻からひと議論したいのを堪らえてゐるといふ語氣で云ひ出した。「君も何かかんか云ひながらそれに服從してゐるんだぜ」

　しかし、その說教臭い他力的な云ひ廻しが萠三には少し不服だつた。彼にはまだ公共會館の晩の昂奮が何處かに殘つてゐた。

「ぢやあこつちからそいつを利用してやるんだね。先手を打つて！服從は有り難くないな」

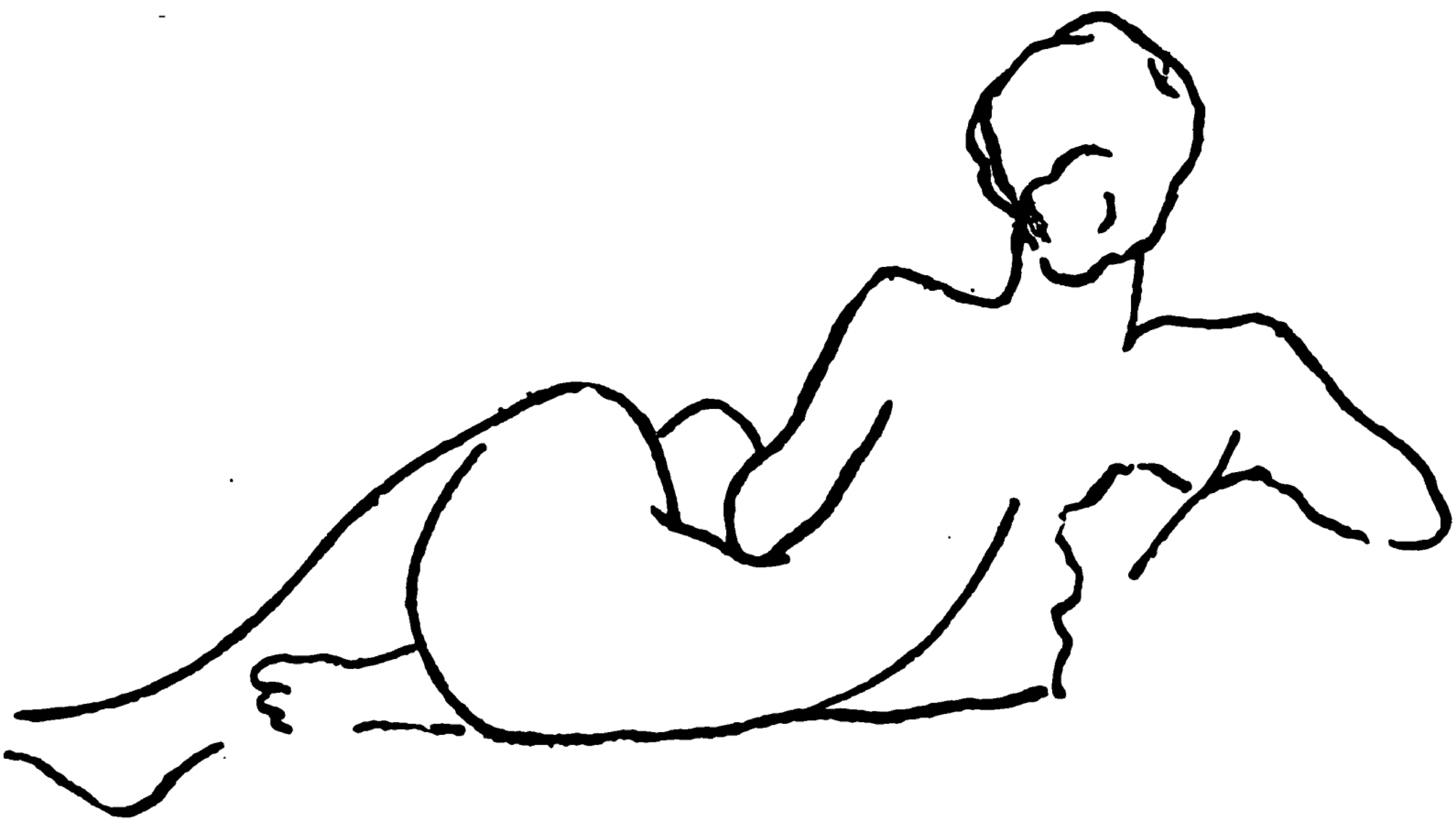
「なんだ、やつと癒つたばかりの癖に――」下からのざわめきに取り卷かれながら、高木は苦笑してゐた。「無理にそんな考へ方をしたつて仕樣がないぢやないか」

女學生達は教はつたとほりに五六間走つてゐた。走つた女學生はまつたく自分の脚に滿足した表情で、笑ひながら跳ねるやうに細かい足踏みを續けてゐた。外の風と電車の響に混つてそのゴム靴の音は室一杯に擴がつてゐた。煮え切らない顏をした者のひとりもゐないのが萠三までを氣輕にした。

　あれは服從してゐるのか利用してゐるのか、萠三はそんな事を考へながら眺めてゐた。揃ひも揃つてどつちの返答も同時にしさうなはしやぎ方だつた。溫室のやうに明りとりの窓のずらりと竝んでゐるその室で、合圖の音は妙に大きく反響した。彼は嘗て塀の外から聞いたことのある公園の運動會の短銃の音を想ひ出してゐた。

（終）

「明るい人」はあまり長くなるので、「後書」と題した部分はほんの筋書きのやうなものにしました。他日單行本として出版する時にすべて手を入れますから不惡。作者。



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その三

そして光子さんは、ほんとにあなたに氣の毒でたりません、すみませんすみませんと何遍もお云ひになるものですから、わたくしの方が却つて氣の毒になりまして、「いゝえ、いいえ、あなたが悪いことありません。憎いのは校長先生です。教育家ともあらうものが、まあ何て云ふ卑劣な、…………けど、わたくしでしたらどんなことを云はれようとちつとも構ひませんけれど、あなたこそお嫁入り前の身で、そんな悪辣な人たちの罠にかからないやうに御用心なさいませ」と、此方からあれこれと慰めて上げますと、「けふはあなたにすつかりお話することが出來て、ほんとによい事をいたしました。これでやうやう胸がすッとしました」とお云ひになつて、「あのう、かうして二人で話なんかしてゐると、又なんやかや云はれますから、もうこれだけにしときませうねえ」と笑ひなさるのです。「折角お友だちになつたのに、名殘り惜しうございますねえ」とわたくし何だか、ほんとにそんな氣がしまして暫くもぢもぢしてゐました。すると光子さんは「あなたさへよろしかつたらお友だちになりたいんですが、今度内へ遊びにお越しになりません

か。わたしハタからどう云はれても恐いことありませんわ」とお云ひになるのです。「はあ、わたしかつて恐いことありませんわ、あんまりうるさいこと云ふなら、あんな學校なんか止めてしまひます」と云ひますと、「ねえ、柿内さん、わたしいつそのこと、知つて仲ようしてみんなが冷やかすのを見てやりたいと思ひますわ。あなたどう思ひなさる？」「はあ、それがよろしいわ、そして校長さんがどんな顏をなさるか見てやりたいですわ」と、わたくしもすぐその氣になつてしまひました。「そしたら、あのう、面白いことがありますわ」と光子さんは手をたたいてやんちやのやうに嬉しがりなさつて、「ほんとに今度の日曜に、二人で一緒に、大軌で奈良へ行きなされしませんか。」「ええ、行きませう、行きませう、それが知れたらえらい評判になりますわ。」――そんなことで三十分か一時間ほどの間に、お互ひにもうすつかり打ち解けてしまひました。

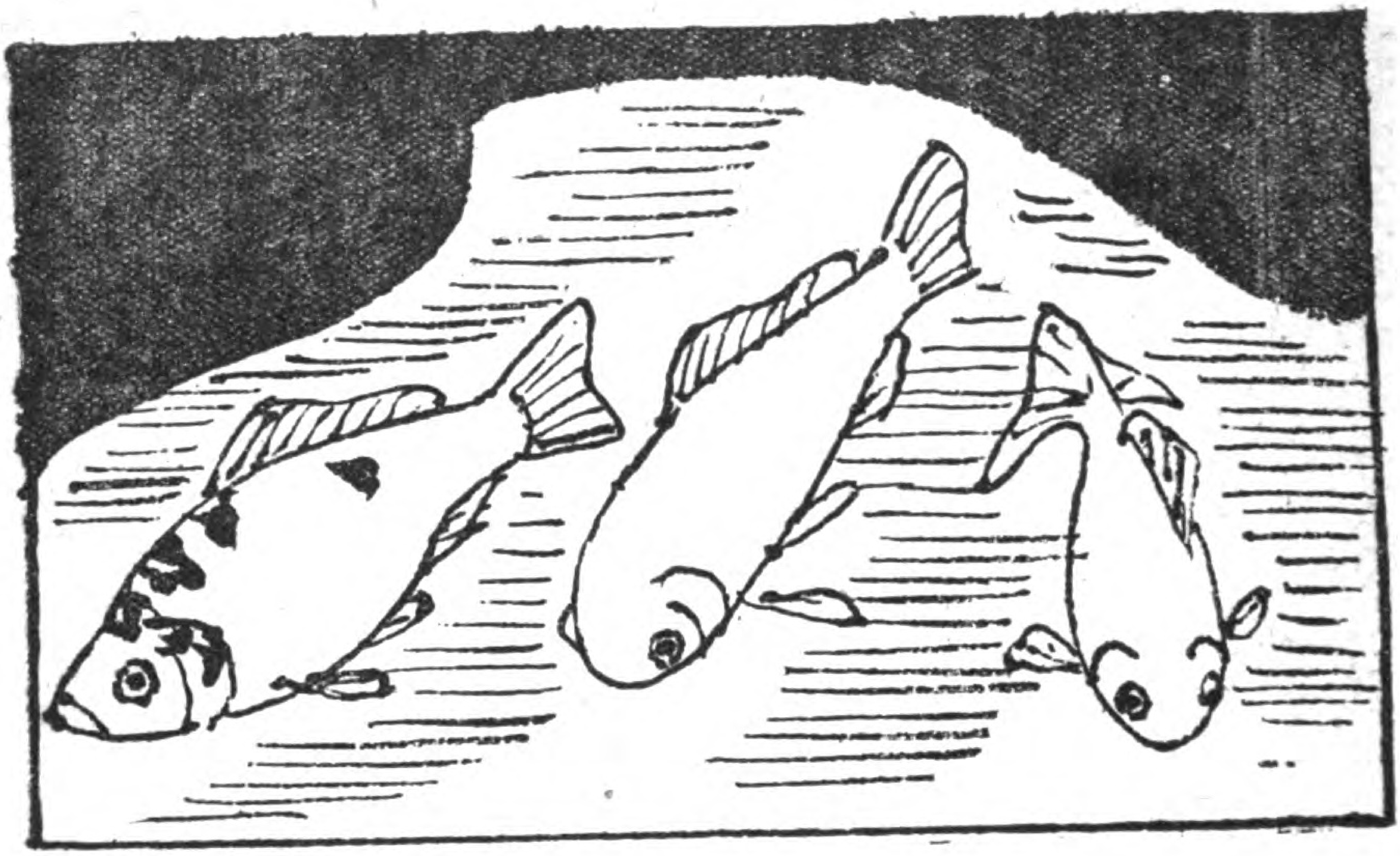
けふはもう學校へ歸るのも馬鹿らしいし、何なら此れから松竹へでも行きませんかと、孰方からともなく云ひ出しまして、その日は夕方まで一緒に遊んで、光子さんは「ちよつと店へ寄つて行きます」と心齋橋筋を散歩しながらお歸りになり、わたくしは日本橋からタクシーに乘つて今橋の事務所へ參りました。そしていつものやうに主人を誘うて阪神電車で歸りましたのですが、その時主人が、「お前今日いやにそわそわしてゐるねえ、何ぞうれしい事でもあつたんか」と云はれましたので、やつぱりいつもと様子が違うてゐるのかしらん、光子さんとお友達になつたことがそれほど自分を幸福にさせたのかしらん、と、さうひとりで思ひました。「それでもわたし、今日ほんとによい人とお友達になつたんやもの。――」「何と云ふ人かね。」「何と云ふ人かて、そりや綺麗な人やもの。――あんた、あのう、船場の徳光云ふ羅紗問屋あること知らん？そこのお孃さんやねんけども。」「何處でお友達になつたんや？」「同じ學校の人やわ。――それが、あのう、わたしとその人と、こなひだからけつたいな噂が立つてなあ、――」わたくし別に疚しいことなんかありませんものですから、面白半分に校長先生と喧嘩した事から、一から十まで話してしまひますと、「ずゐぶんひどい學校だなあ。けれどお前がそんなに美人だと云ふなら、僕も一遍會つてみたいもんやがなあ」と、冗談にさう云うてゐました。「いまにきつと内へも遊びに來なさるやらう。わたし此の次ぎの日曜日に、一緒に奈良へ行く云うて約束したんですけど、行つたらいかん？」「そら行つてもかめへん。」主人はさう云ひまして、「校長さんが怒るぜエ」と笑つてをりました。

明くる日學校へ行きますと、きのふ一緒に御飯を食べたことや活動を見に行つたことがもういつの間にか知れ渡つてをりまして、「柿内さ

ん、あんたきのふ道頓堀を歩いてたなあ。」「お樂しみやなあ。」「あれ一體誰やつたなあ。」なんて、女の人つて、も、ほんとにうるさいんです。そしたら光子さんは又それを面白がりなさつて、知つて傍へ寄つて來られて、此れ見よがしになさるんです。さう云ふやうなあんばいで、それから二三日するうちに、とつてもそれは仲好うなつてしまひました。校長さんは却つて呆れてしまはれたのか、ただ恐い眼をなさつてじつと睨んでをられるだけで、もう何ともお云ひになりません。光子さんは「なあ、柿内さん、あの觀音さんの繪をもつと私に似るやうに畫いて御覽。そしたらどないに云やはるか知らん」と云ひなさるので、前よりもつともつと似るやうに直しましたけど、校長さんはそれなり教室へも來られません。わたくしたちはいい氣になつて「痛快やなあ」と云うてゐました。

さうなつて來ると、無理に奈良へ行く必要もないやうになりましたが、ちやうど四月の終りのことで、たいへんによいお天氣の日曜でしたから、電話をかけて相談しまして、上六の終點で待ち合ひをして、お午すぎから三笠山の方をぶらぶら歩き廻りました。光子さんは歳のわりにたいさうおませなところもありますし、又子供のやうな無邪氣なところもあつて、山の頂邊へ上りますと、蜜柑を五つも六つも買うて、「ちよつと見てて御覽」と、それを上から轉ばしたりしました。すると蜜柑は頂邊から下までころころと轉がつて、その拍子にぽんと一足つ往來を飛び越して、向ひ側の家の中へ這入るのを、面白がつていつ迄でもさうしてゐなさるのです。「光子さん、そんな事してたら切りがない依つて、蕨でも採りに行きませう。わたし此の山に蕨や土筆のたんと生えてるとこをよう知つてるわ」と云うて、それから日の暮れまでかかつて、蕨やら、ぜんまいやら、土筆やら、たあんと採りました。——はあ、その場所でございますか、それはあのう、三笠の山が三つ重なつてゐる、その一番前の山と、その次ぎの山との間のへつこんだ所、——あそこら邊いつたいに、ずつともう一杯に生えてゐまして、あの山のは、毎年春に山燒きをしますので特別においしうございます。——そんなことでもう空が大分暗うなつた時分、二人とも又前の山の方へ戻つて來まして、あんまりくたびれました依つて、山の中途へんに腰をおろして休みながら、暫くぽんやりしてゐます時でした。「柿内さん」と、急に光子さんが何や斯う少し改まつた樣子で、「わたしどうしてもあんたにお禮云はんならんことがあるねんけど」と、云はれるのです。「一體何やのん？」とききますと、「わたしあんたのお蔭でなあ、あんなイヤな人のとこへ嫁入りなんかせいでもええやうになりさうやねんわ。」——さう云うて、何か知りませんけどニヤニヤ笑うてゐなさるんです。「まあ、又なんでそんな事になつたん？」「ほんとに噂云ふものは早いもんで、もうちやあんと、あんたと私のことが向うへ知れてしまうてますのや。」

（つづく）



春光

里見弴

時——現代。

人——老父。（七十歳以上）
老母。（六十歳位）
その娘、貞子。（二十一二）
嫁、百合子。（二十四五）
その一人子、一雄。（五六歳）
下男。（五十五六）

景——正面十疊の座敷。當主の居間兼客間。調度よろしくあるなかに、椽側の隅に重ね置きたる小鳥の籠を目立たす。
棟續きながら、小庭を隔てゝ上手に四疊半ほどの中二階、老父の書齋なり。
下手に垣、庭木戸、植込。
總て山の手のもの靜なる中流家庭の住居の態。
春光あたゝかき朝なり。

氣象者らしき老母、既に中二階の掃除を終り、紫檀の机上に清拭をかけ、あとに筆硯、唐本の類を置き直したり、まめ〳〵しく働きゐる。

下男、竹箒と塵取りを提げて、上手より下手へ庭先を通りぬけて行かうとする。

老母。爺や！

下男。(むッつり者らしく、ろくに中二階の方を見あげもしずに、)お早う御座います。

老母。お早う。お前、御隱居様を……。

下男。はい、裏の畑においでなさいます。お呼びいたしませうか

老母。いゝえ、いらつしやりどころさへわかればいゝんだがね、……それアさうと、(ト、緣側に身を乘り出して、やゝ低聲になり、)昨夜、お前、旦那様のお歸りを知つてたかい。

下男。は、いゝえ、つい心づきませなんだが……。

老母。お歸りがなかつたんだらう？

下男。さア……。耳門だけあけときまして、ついそのまゝぐつすり寢込んで了ひましたもんですから……。

老母。不用心だよ、お前！　これからは、晩くお歸りの時は叩いて頂くとして、寢る前にちやんと締りをしてお了ひなさいよ。

下男。はい。畏りました。

小腰をかゞめ、下手庭木戸よりはいる。老母もあたりを片づけ終り、障子をしめる。

舞臺無人。飼はれたる小鳥、——鶯、カナリヤ、繡眼兒など、長閑に歌ひゐる。

「花咲かば告げんと云ひし山里の……」と、中音に謠曲鞍馬を口誦みながら、老父上手より登場。當主の居間の緣先に腰をおろして、庭の草木を眺めたりしてから、鳥籠の前に膝行りより、なかを覗く。

老父。おい〳〵。(ト、奥の方へ呼びかけ、返事を待たずに、)鳥の餌はどうした。水も替へてないやうだぞ。

奥にて、はーア？　と問ひ返すやうに答へながら、貞子、襖をあけて出る。

貞子。お早う御座います。(ト、おてんばに、ちよつと疊に手を突く。)

老父。相變らず寢坊だな。これから御飯なんだらう。

貞子。いゝえ、もうとつくに頂きましたわ。

老父。これごらん。(ト、鳥籠を指さして、)今朝はまだ餌がやつてないよ。どうしたんだ。

貞子。(意味ありげな微笑。)は、今やります。(ト、立ちかける。)

老父。今やりますつて、お前、靖彥はどうしたんだ。めつたに人手に任したことのない、あれの一役ぢアないか。

貞子。（曖昧に、）えゝ。

老父。まだ寢てゐるのか。

貞子。さア、どうですか、いまお嫂さんに訊いて參りますわ。

ト、逃げるやうに奧の襖をあけてはいる。長閑に小鳥の聲。

老父、暫く待つてみるが、そのまゝ誰も出て來ない所在なさに、緣よりあがり、室內、當主の机邊、床の懸物、違棚の飾付など、だん〳〵に見廻りながら一旦奧へはいり、間もなく中二階の障子をあけて姿を見せる。手焙を前に、銀煙管にて煙草をのみ、新聞を擴げる。

貞子、十疊の間の襖を靜にあけて、あたりを窺ひ、うしろを振り向くと、低聲に、

貞子。だいじよぶ！　もうどつかへ行つてお了ひンなつたわ。

なほも、庭先の方まで目をくばりながら、座敷にはいつて來る。續いて百合子、鳥の餌を入れたる器を盆に載せて出る。

貞子。どこイいらつしたんだらう。（ト、緣先にて見廻し、庭下駄に氣がつくと）あら、もうお部屋へいらしちやつたらしいわ。

百合子。（努めて不機嫌を押し隱したる表情）さう？　でも、まアよかつたわねえ。

ともかく小鳥の籠の前に蹲居り、捨臺詞よろしく、餌や水の世話をやく。總て、事に馴れざる態なり。

貞子。阿母樣、知つてらつしやるらしいわね。

百合子。さう？　どうして？

貞子。なんだか、そんな風な口吻だつたわ。でも、却つてその方がいいかも知れないわ。阿母樣から阿父樣に知れて、一度うんと叱られた方がいゝんだわ。

百合子。さうねえ。（ふと考へを變へて）でも、まさか、子供ぢアあるまいし……。（輕き笑。）

貞子。そイでも、いくらか矢つ張り、可怕がつてはゐるわよ。男つて、存外氣の弱いもんね。わたしなんぞ、阿父樣くらゐ、へとも思つてやアしないけれど……。

百合子。さうでもないことよ。だつて、ずゐぶん圖々しいぢアないの。先には、どんなに晩くなつても、歸るだけはきつと歸つて來たんだけれど、この頃ぢア、月に一遍や二遍は、きまつて泊つて來るんですものね……。

貞子。へんねえ。一體何がそんなに面白いんでせう。

百合子。だつて、それア……。（云ひ淀む）。

貞子。どうして……？

百合子。どうしてつて……。

貞子。お酒に醉ッぱらつて、藝者たちと騷いでるんでせう？

百合子。あら、さうぢやないわ。

貞子。さうお？（ト、しんから驚き、）ぢや、何してるの？

百合子。何つて……。

貞子。（やゝ自ら悟るところあるものゝ如く、とんだことを云ひだしたといふやうな、後悔の面持。）……でも……。

百合子。それアさうよ。好きな人が出來てるのよ。

貞子。あら、そんなことないでせう。

百合子。さうでなくつて、たゞ遊んで、騷いで來るだけのことなら、何もうちをあけるまでのことはないぢやないの。二時にならうと、三時にならうと、その晩のうちに歸つて來られる筈よ。

貞子。だつて、……そんなことないでせう？

百合子。ぢア、朝までかゝつて、お酒を飲んで騷いでるんだと思ふの？

貞子。（曖昧に、）ぢやないかしら……。

百合子。それアさうよ！

貞子。あら、さうかしら。……でも、もしさうだとすれば、ずゐぶんいやなお兄さんねえ。

百合子。でもね、男つてみんなさういふものらしいわ。

貞子。そんなこと……。

百合子。いゝえ、さうなのよ！

貞子。さうだとすれアずゐぶん醜ね！

この言葉に、百合子、急に胸がいつぱいになり、返事が出來ない。自然、鳥籠を扱ふ手がお留守になり、ガタリと膝から取り落す拍子に、なかの一羽が飛び出し、馴れぬ羽根をはためかして、あたりを二三度舞ひ廻つてから、空高く去る。籠を取り落した瞬間に、「あらッ！」と低聲に叫んだきり、百合子、いかんともなすところを知らず、たゞ悄然とあとを見送つてゐる。

同じくあつけにとられてゐた貞子、急に笑ひ出す。百合子も誘はれて、ちよつと笑ふが、すぐ眞面目になり、

百合子。あら、大へんだわ！

貞子。（なほ笑ひ續けながら、）だつて仕方がないぢやないの。

百合子。いゝえ、歸つてから、どんなに叱られるか知れないわ。

貞子。（それアさうだ、と思ふと同時に、急に笑ひがとまり、眞面目な目つきになる。）どうしませうね。

百合子。困つちやつたわねえ。

貞子。全く、お兄さんと來たら、鳥のことつて云ふと、まるで半氣違ひなんだから……。

百合子。あたし、これからすぐ行つて、おんなじやうなのを買つて來とかうかしら。

貞子。だつて、あんなに夢中なんだから、きつとそれアわかることよ。

百合子。さうねえ。どうしたらいゝでせうねえ。

貞子。いゝことよ。構やアしないぢやないの。どうせ兄さんだつて惡いことしてるんですもの。

百合子。でもねえ……。

貞子。いゝわよ。いゝ懲戒だわよ。

百合子。それもさうだけれど……。

奥にて、「貞子！　貞子や！」と老母の呼ぶ聲。「はい」と答へ、すぐ立ちあがつて、行きかけながら、

貞子。いゝから、ほつときなさいよ。

ト、奥へはいる。

百合子、ひとりぢッと考へ込むうち、だん／＼ヒステリカルに亢奮して來る。遂に、やゝ發作的にからの鳥籠を傍に投げ捨て、他のいくつかも、片ッぱしからあけ放ち、バタバタと鳥を追ひ逃して了ふ。それから急に袂に顔を埋め、聲を忍びながらも、烈しく泣きだす。

飛びたつた小鳥のうちの一羽が、中二階の欄干近くに枝をさし延べてゐる老樹に舞ひ戻つて來て、冴々と啼く。この以前より、机に向ひ、熱心に唐本の一つに讀み耽つてゐた老父、ふと心づき、老眼鏡の上から、ぢッとそれに眼を注ぎ、さも滿足げなり。

貞子、戻つて來て、泣き沈んでゐる嫂の樣子を見、驚きてそばへよる。

貞子。あら、嫂さん、どうしたの？

百合子。（更に悲みを深くする。）

貞子。いゝぢやないの、あんな鳥の一羽や二羽……。（云ひながら、傍の鳥籠が一つ殘らずからッぽになつてゐるのに心づき、）あら！　まア！　どうしたの？

百合子。（いよ／＼泣く。）

貞子。みんな逃しちやつたのね？（ちよつとの間、あつけにとられてゐる。）

百合子。あたし……、あたし……。（嗚咽のために言葉を成さない。）

貞子。いゝわよ！　構やしないわよ！　いゝ氣味だわ！　こんなこつちアまだ／＼たりないくらゐだわ！　ほんと云へば、もつとひどい目に會はしてやつたつてもいゝんだわ。……ね？　だから、泣いちア駄目よ！　いゝから、歸つて來ても、知らアん顔して、えばつていらつしやいね？　ね？　ね？　……さうよ、あたりまへよ、このくらゐのこと！

百合子。（泣き聲が高まらうとする。）

貞子。駄目々々！　阿父様のお部屋まで聞えるわよ。……みんなお兄さんが悪いんですもの。ちつとも泣くことなんぞありやアしないわ。

襖にて老母の聲「一雄や！　一雄！　一ちやんはどこイ行つちまつたんだい？」と呼びながら、半紙に包んだ菓子を持つて出る。

百合子、庭の方へ顔をそむけて、慌たゞしく涙を拭く。貞子は、手早く、亂雜になつた鳥籠を片づけ、積み直し、その前に座を占めて、なかの見えないやうにする。

老母。（何事も心づかず、近より來る。）一ちやんどこイ行つたか知らないかい？

貞子。なんだか、玄關前の方で騒かしてたやうですよ。

老母。あゝ、さうかい。（ト、行きかゝり、ふと、片づける間のなかつた飼道具のひつくり返つたのを見つけて）まア、お前さんたちは、何をしたんだい？　そこらぢう水だらけぢアないか。

貞子。よござんすよ、いま拭きますから。

老母。百合さん、お前さんもまた、いゝひとが來て口を利いてるのに、そつぽばかり向いてゝ……。

百合子。（泣いたあとの、鼻の詰つたやうな聲で。）はい、どうもすみませんでした。（ト、伏目ながら、顔を振り向ける。）

老母。どうしたんだい？　お前さんたち喧嘩でもしたのかい？

二人とも、黙つて目を伏せてゐる。老母は、緣近く、座敷のうちに坐る。

老母。（やゝ優しく。）百合さん、何をお前さん泣いたんです？

百合子。（頭垂れたまゝ、はら／＼と膝の上に涙を落す。）

老母。貞子、お前さんがまた何か……。

貞子。なんでもないんですよ……。

老母。なんでもないつて、……そイぢア百合さんは、なんだつて泣いたりするんです。

言葉のうちに、ふと貞子の背後の鳥籠に目をつける。貞子は、小半身で、どうにかその視線を遮らうとする。

老母。ちよいとどいてごらん。(ト、貞子を押し退け、躙りよつて、)おや！　これアまアどうしたつて云ふんだらう！

百合子。(決然として、)わたくしが、みんな逃して了ひましたんです。

老母。(驚き、眼を瞬つて振り向き、)なんだつてさ。

百合子。(無言。)

貞子。餌をやらうとして、ついはづみで……。

老母。だつて、それにしちア、お前、一つ殘らずぢアないか。

百合子。繡眼兒だけはついだつたんですけれど、あとは……。

老母。なんだつてそんな亂暴なことをしたんです。日比のあんたにも似合はない……。

貞子。そんなこと仰有つたつて、阿母さん、もとの起りはと云へば、お兄さんが惡いんですもの、お嫂さん一人ほツたらかしといて、自分は勝手放題……。

老母。あんたは默つてらつしやい！　あんたの知つたことぢアないぢアありませんか。……昨夜靖彦が歸らなかつたくらゐのこと、あたしだつてちやアんと知つてます。それア靖彦が、この頃ちよくちよくうちをあけるつてのも、決して褒めた話ぢアありませんけれど、さうだからつて、その腹いせに、なんの罪科もない飼鳥にあたり散すなんて、そんな意地のわるい仕打つてのがありますか。

貞子。鳥に當り散したりなんぞしやアしませんわ。もと〳〵お兄さんが、餘所でいけないことばかりたすつて……。

老母。ですからさ、あんなに大事にしてゐなさることを知つてたから、それをみんな放しちまうなんて……。それくらゐなら、靖彦が歸つて來た時、撲つなり喰ひつくなりした方が、まだしもわけが分つてるけれど、知らない間に、あれほど大事にしてゐなさるものを、一羽殘らずゐなくしちまうなんて……。見てゝごらんなさい、明日ッからうち中どんなに淋しくなるか……。いつかお隣の臺所から火事が出かゝつた時だつて、靖彦が一番先に持つて出たのは、何んだと思ひます。——この鳥籠だつたぢやありませんか。……お前さん達だつてさうでせう、まだ一雄の生れなかつた時分には、それこそほんとに、懷に入れて抱いて寢ないばかりにして可愛がつてたもんぢやありませんか。第一、あの不精なお祖父様が、毎朝御自分で裏の土手から蘩蔞を採つていらつしやるほどのお慰みになつてゐたんぢやありませんか。……いくら腹が立つたからつて、あんまり自分勝手な仕打だと思ひますよ。少しはたの人のことも考へて見たらどうです。ほんとにあんたにも似合はない、無考へなまねをし

てくれたもんですね。

貞子。だつて、さう仰有つたつて、それア阿母樣、片手落ですね。第一に、お嫂さんを、そんなことしないではゐられないやうな氣持にした、そのお兄さんといふ發頭人を差し置いて、お嫂さんばかり惡いやうに仰有つたつて……。

母。ですから、靖彦の方は、歸り次第お祖父樣に、嚴しく叱つて頂くつもりですよ。そんなこと、決してわたしは、自分の子だからどうの、よそから來た人だからかうのつて、そんな差別はつけやしません。お前さんは、默つてひつ込んでれアいゝんです！

この以前より、だん〳〵聲高になつて來た老母の聲に、中二階の老父は耳を傾けてゐるが、この時襖を廻つて、そこに立ち現はれる。

老父。なんだな、お磯！朝ツぱらからガン〳〵みつともないぢやないか。

老母。いゝえ……。

老父。いゝえぢやない！百合が鳥をみんな逃しちまつたつて云ふんだらう。いゝぢやないか。欲しかつたらまた買つて來ればいゝんだし、そのくらゐのこと、何もそんなにガミ〳〵云ふにアあたらないぢアないか。

老母。でも、あんまり、することが女らしくありませんから……。

老父。何が、何が女らしくないんだ。至極女らしいぢアないか。お前だつて、若い時分には、よくさういふ八當りをしたもんだ。同じことでも、物を投げつけて毀したりするよりも、生き物を放してやる、つまり放生會だ。咎めるどころか、結構なことだ。つい今しがたも、俺の部屋の前に差し出した梅の枝に、繡眼兒が來て、可愛らしく啼いてたつけが、人怖しない樣子が、どうも飼はれてたやつに違ひないと思つて眺めてたんだ。いかにも嬉しさうに、もの珍しさうに、枝から枝へ飛び交してゐた。いま思へば、百合が放してやつたうちのどいつかだつたんだ。……靖彦が歸つて來て、愚図々々いふなら、俺からよく解るやうに云つて聽してやらう。なアに、飼ひたかつたら、またいくらでも買つて來るさ。

百合子、しく〳〵とすゝりあげる。

老母は、徐かに首を垂れてゐる。

貞子は、心ひそかに凱歌を擧げてゐる。嬉しさうである。

下手、植込の枝にガサ〳〵と音をたて、護謨の彈力を利用した玩具の飛行機が舞ひ込んで來、ガチヤリと地面に衝突する。

人々驚いて見返る。
同時は、一雄、庭木戸の扉を突きあけ、駈け込んで來る。

老父。そーら、飛行機が墜落したぢアないか！

一雄。うゝん、だいじよぶなんだよ！
時に、下手玄關前の砂利場に、自動車の乗り込んで來た音、警笛。

一雄。やア、パ、だ、パ、だ！ パ、が歸つて來たんだ！ト、飛行機をひッ掴んで、庭木戸より飛び出して行く。
老父ののびやかなる笑聲。

――幕――

共產黨事件と勞農黨解散問題

冷靜に而してファシズムを警戒せよ

長谷川如是閑

反對の立場を無視すること又はそれを極度に恐怖することとは、政治心理に共通の錯誤的感覺である。財產制度の起源であつた共產制度の如きは、如何に私有制の發達した社會に於ても、何等かの形式でその進化的又は變態的形跡をとゞめてゐるものであつて、如何なる社會といへども絕對的に共產的の制度を內藏してゐないといふものはない。これは如何に古代の共產的の社會であつても全く私有的形式のないものはなかつたのと同じことである。

然るに一定の財產制度に立脚した社會の觀念的態度は、それが內藏する異る形式の社會的存在を不可能視するために、その現實の存在を無視する傾向をもつ。この傾向は、社會一般の統制に於ては甚だ強くはないが、國家といふ政治的統制に於ては極端に强烈となる。たとへば今日でも家族といふやうな統制に於ては、共產的傾向を必ずしも絕對に反撥するやうなことはなく、今日の多くの社會の家族制度は、根柢を多少の程度で共產制の上に置いてゐないものはない。家長の私有といふのも、共產制の變態的形式で、そのこと自身が、觀念の上では、共產に立脚してゐる私有制である。國家に於ても、共產制の變態的發展を內藏してゐることは、古代の土地を國王の私有とした時代から、今日の財產を抽象的人格の私有とする時代に至るまでのすべての國家に共通の事實である。が政治的統制そのものゝ心理が元來甚しく錯覺的であるために、共產制的現象を無視し又は恐怖することは家族に於ける場合とは比べものにならぬほど强烈である。現に如何なる國家にも存在する自治體財產制、家族財產制、法人財產制、その他國家の、土地收容、租稅徵收、を始めすべて所有又は收得を抽象化して個人的私有から引離す制度は私有制度の社會に於ける、共產制度の正態的又は變態

的存在であつて、從つてその制度の科學的理論の根柢は共產制をもつてするにあらざれば解釋すべからざるものであるに拘らず、今日の法理學、行政學等の國家的理論は、さういふ科學的解釋に觸れることを極力、、してゐる。これは國家の政治的統制がある一定の財產制に基いて發展した特殊の階級的統制を代表してゐるものであるからである。

故に財產に對する實際の科學的統制は、決して右のやうな政治國家的錯誤にのみ依つては居らぬ。財產制度の社會的進化は、生產分配の過程に於ける進化に伴つて一定の進行をとる。國家は、そこで其の進化過程に應じてその觀念的態度を變化せしめて政治的統制の新らたな形式を進展せしめねばならぬ。故に社會制度の科學的認識は、常に國家的靜態を支持する政治的錯覺を矯正して行かねばならぬ。これ國家そのものに於て、社會的の意義に於ける科學的運動の重要なる所以である。

然し、行動が全く科學的であり得るのは微生物の行動位なもので、それ以上の複雜な有機體の行動は科學の認識を超越した發動である。尤も今日の科學は行動の綜合的體系を見出すことによつて、あらゆる行動に對する科學的認識を構成せしめつゝあるが、然し、歷史の科學が甚だ幼稚である通り、行動の超科學的性は、漸次減退しながらもなほ如何ともすべからざる現狀にある。從つて政治運動に於ける『科學的』なるものは甚しい誤差をもつた認識に基いたもので、その錯誤の原因も、最惡の場合に於ては全く在來の非科學的な本能的政治行動のそれと共通のものであることは已むを得ない。政治運動に於ける科學的計算と其の實際の結果との懸隔は、科學的に必然な誤差といふよりは、寧ろ行動に伴ふ本能的、衝動的の盲目性が、錯誤の算出を幻覺的に可能ならしめるに原因する場合が多い。太閤の幻覺が朝鮮征伐を可能ならしめ、忽必烈の幻覺が日本征伐を可能ならしめたやうな極端な場合は甚だ稀れでも、政治行動による支配意識がそれと程度の差に過ぎない錯覺をもつことを全く免れることは不可能である。これは行動の本能性といふ根本性質の致すところで、行動がさういふ錯覺から全く免れて、幻想を失つたやうな人間となれば、それは所謂枯木冷灰に等しい無行動者として死滅する外はない位である。

然しまた政治行動者の錯覺的性質は、ある點で、、者のそれに共通である。、、者は、社會一般が强硬に禁制する行動の敢行者であるから、その社會的禁制を無視する心的超越性をもたねばならぬものであるが、その超越性を構成せしめるものは、彼れにある個人的本能性であるといはれる。而かもこの本能的の性質が行動に現はれる時には必ずそれに伴ふ積極的心理狀態卽ち感情を具體化した理想的生活形式の空想をもつ。それは詩人の詩的天地と似たものである。政治家にも亦必ずそれがある。而して、、のそれは、、行動となつて現はれ、詩人のそれは詩的言語幷行動となつて現はれ、政治家のそれは政治的壓迫又は反抗となつて現はれる。

共產的の社會が私有を壓迫し、私有的の國家が共產を壓迫するといふことは、必ずしも右にいつたやうな幻想に基く行動ではなく、それは

一定の統制を支持する科學的意識でさへあり得るが、然し、社會的進化の認識に、、、、、でまで、その政治的觀念の桎梏に閉ぢ籠ればそれは幻想的である。近代の國家の進化に對して、國家的支配者が共同防禦線を張らうとした『神聖同盟』の如きは、その稱呼からして幻想的であつた。社會進化はそれ故にその幻想的の政治的桎梏に拘らず近代國家を作り上げる過程を進めて、今日の國家形態を完成せしめた。而してその近代國家は、それ以前の國家に於てある程度まで抑壓されてゐた私有制を極度に發展せしめた所から産れたものであるから、私有制の防護といふことは、全く必然的の立場で、ある程度までは已むを得ないことである。然し、それが生産の過程に於て難澁に陥り、内的進化の段階に入り込めば、社會的繁榮の根源は、これをその進化過程に求めねばならない。それに對する神聖同盟はあまりに本能的の盲目的執着で、決して國家の『進運』――彼等の所謂――を促す道ではない。又所謂『學問の獨立』といふことも、さういふ盲目的執着に目を明けて、社會的乃至政治的統制に於ける錯覺を矯正するといふ過程としてのみ意義をもつのであつて、決して眞理の超越性といふやうな非人間的非社會意義に依るべきものではない。

行動に於ける盲目性が、決して政治行動に特有のものではないやうに、政治行動に於ける盲目的性も決して保守的のそれにのみ特有のものではない。所謂進歩的乃至革命的な政治行動も全く幻想を失つたら死滅する位で、それが『理想』といふ體裁のいゝ名をつけられる程度のものでもさうでないものでもその點に變りはない。從つて一般の政治行動を發展せしめた本能的乃至衝動的諸動機はやはりこの進化的側面を代表する政治行動にも伴ひ勝ちであることを免れない。勿論この方面の運動は、元來、傳統的の政治統制の盲目的執着に反抗して起るものであるから、それ自體、政治に於ける本能性に反して理智性を支持する性質をもつものであるが、具體的に行動する時には、やはり、行動の一般的性質に支配されて、統制の進化といふことよりも行動自體の、、性に興味をもつに至る。それは恰も利害を爭奪するために行ふ喧嘩に於て、その利害を超越して毆り合ひそのことに興味をもつに至るのと同じである。英雄小説や探偵小説やが人間の本能性にふれて起させるやうな興味を政治行動も起させる。『政治的克服の興味』とでもいふやうなものが、スポーツ心理に於ける如く政治心理にもからみついてゐる。それは昔なら『英雄病』と呼ばれる筈だが、今日はその反對にそれが『小兒病』と呼ばれてゐるのは、小兒は元來本能的であることが科學的に明かにされたからである。然し、小兒らしい本能性がないものは英雄になれないといふ狀勢は、今日の社會も昔の社會も同じことで、それだけ社會的統制が、動物の飼育や生産の機械的過程などに比べて非科學的に幼稚であることを示してゐるのである。

而してかやうな錯覺は、現實の經驗がそれを矯正する役目をもつものであるが、政治現象は、その形態の發生に於て、所謂『偶發的』の原因をもつた場合多く、動にも反動にも、その幻想の醱酵素となるや

うな經驗が頻發する。又觀念が國境を超越して交通するところから、他國の事情が生んだ特殊の現象さへ、とつてそれを幻想化することを妨げない。そんな風で、政治行動に於ける衝動性の空想を構成する材料には決して事を缺かない。從つて『經驗』といふものゝ性質もいろ〳〵で、歷史的のそれもあれば觀念的のそれもありそれ〴〵の力で政治行動者の目標を與へる。現實の政治的統制の成立は歷史に規定されるが、政治運動の幻想は歷史に規定されずに奔放的に構成される。

こゝに當面の事件として起つてゐる共產主義の彈壓とそれを誘發せしめた共產主義的秘密結社とは共に、前述の問題に觸れた現象である。一言でいへば、前者は、現に支配的地位を占める政治的發動の基礎が社會的、、を缺乏してゐるところから起り、後者は、現在の政治的統制の機構に對する認識の缺乏から起つてゐるといへる。今これら彈壓及び反抗の過程に於ける方法論を批判する遑はないが、現にかくの如き政治的發動を見た場合に、一般に最も警戒すべきことは、それが惡より、、に進む虞のあることである。この場合に於てはそれは所謂ファシズムへの進展である。

日本に於いてファシズム成立の可能性があるか無いかといふ問題については、或は消極的の答をせねばならぬ材料が多いかも知れぬ。然し、イタリーのそれのやうなものではなく日本式のそれが進行の餘地をもつてゐることは考へられる。

イタリーに於けるファシズムは、同國の社會主義運動が一九一九—二〇年に於てボルシエヴーキの影響をうけて過激化したことの反動から起つたものであつたが、その社會的動因としては、勞働運動並に消費組合運動に於ける中產社會の態度の變化であつた。これらの運動が自由主義的社會進化に、伴ふ必然として起る時に、中產階級の地位は次第にそれに對する同化の過程をとるのは、大資本主義への進化が中產階級を脅威する實質をもつてゐるためであつた。從つてこの時期に於ては、社會運動の背景として小市民的場合によつて相應の大市民的勢力を必要とするので、イタリーでは、この中產階級的背景は主として運動の政治的進出に對する援助と、その財政的後援として作用した。然るに、ロシヤの傾向をうけた一九——二〇年度に至つて起つた、、、、、がたゞに大資本家及び大地主に對して行はれたのみならず、中產階級的地位のそれに對しても行はれ、その結果、勞働階級と大資本家及び軍人階級とのシーソーの中間に座してゐる中產階級は、忽ち今迄と反對の方向へ辷つて行つて、勞働組合と、中產的商業を脅かす消費組合運動とを反對に引下げる重量となつた。それにはそれらの社會運動の現實の脅威が中產的市民階級の側に加へられたといふよりは、寧ろ、より多くそれらの階級の觀念的立場がイタリーの在來の國家的教化によつて、それを強迫觀念的に恐怖する心理に置かれたことが重大な原因を爲したと考へられる。これは丁度我邦の大震當時に於ける小市民の盲目的行動を引起さしめた動機と似たものであつた。

かやうな錯誤的現象は、即ち政治行動者の好んで捉へる機會であつ

て、イタリーの支配的階級を代表する政治集團は、戰後全く失つたその幻想的目標を、この市民階級の錯覺によつて回復したのであつた。前に勞働階級が暴力化した時には全く屏息してゐた中間市民群の地位は、甚だデリケートな性質のものであつたので、政治的統制者の暗示によつて忽ち反動的に發動するに至つたのである。而して、目下の處スペインのそれがやゝそれに近い外には世界に類例のないといふ反動的獨裁政治を現出せしめる力となつたのであつた。

かくの如く政治が、、、、、、依頼することの甚だ強いといふ事情は、今日の日本の形勢に於て、既に反動的政治家の無意識的に理解してゐることである。社會的認識の上に於ては、國家統制の進化過程に於ける意識現象として、均等の機會をもつて取扱はるべき種々なる政府的觀念及び行動を、、的に錯覺せしめる手段をとるのは必ずそれに相應する目的があるからである。かゝる政治的反抗の起つた時に、一般人の理性に訴へるよりは寧ろその恐怖心に訴へるやうなことは、無論科學者ならざる政治家の態度としては、上述の理由によつて、當然のことではあるが、社會は、かゝる場合、一層その認識の正確を求めて愈々冷靜であらねばならぬ。

反抗者の側に政治的暗示による盲目性のある事は、イタリーの例によつて明かであり、日本人がその例外であるべき筈はないが、またその、、をよりよく利用して、社會的進化と政治的統制との、、を妨げる便宜をもち、その成功の可能性をもつものは、寧ろ傳統的政治行動の集團であるといふことも、イタリーの例が明示してゐる事實である。

この意味では、新聞紙の如きも無意識に政治的統制の暗示的効果を助けるやうな態度をとつてゐることが認められる。今少し、かゝる暗示の實體を鮮明にし、一般人に批判の材料と心理とを與へるやうに努めなければならない。

もしかゝる場合、認識の正確と判斷の理智性とを失はないならば、かゝる經驗は、政治的進化の歷史に意識的方向を與へる資材とならうとも、それを妨げる材料とはならぬ道理である。冷靜に、而してファシズムを警戒せよ。

勞働農民黨の解散

麻生　久

一

今度、日本共産黨の秘密結社事件に關聯して勞働農民黨が解散された。

農民勞働黨解散の直後、萬難を排して單一政黨としての勞働農民黨の結成に努力した私としては、實に感慨無量なるものがある。私は今日、日本勞農黨の一人であるけれ共、既往を顧みるならば、決して之れを他人の政黨と考へる事は出來ない。

私共は、日本の現在の無產階級の狀態からして、黨が分裂してゐる事は絕對に無產階級運動のために不利であり無用であると考へる。その考へからして、農民勞働黨解散後に於ても、日本の國情現狀に妥當した指導精神を確立し、小異を棄てゝ大同に就き、單一政黨を結成しなければならないと考へて、勞働農民黨を結成したのであつた。

併しながら、所謂左翼分子の中には、更に其心核をなす中心分子……宗派的分裂主義者、即ち、今回明かになつた日本共產黨……があつて、或ひは表てから、或ひは裏から、不斷に策動して黨の指導權を把握しなければ承知しないが爲めに、遂に、右翼分子と衝突して黨は分裂に導かれ、今日の狀態を現出するに至つたのである。從つて、最初は單一な大衆黨として生れた勞働農民黨は、其指導權を宗派的分裂主義者の手に握られて遂に極左翼黨となり終つたのである。

勿論、勞働農民黨全體が宗派主義者でもなければ、日本共產黨でもない事は明かである。併しながら、其指導權が彼等の手に握られた事は疑ふ餘地なき事實である。私共は、黨と黨との交涉に於ても、その表面上の幹部と約束した事が、事實に於てはホゴの如くに棄てられて顧みられない事實を幾度か經驗せざるを得なかつた。

私共は、眞に協同一致的な合同を行ひ、强力な單一大衆黨を結成するためには、日本の國情と狀態とを無視する小兒病的宗派分裂主義者と戰つて、之れを克服しなければ眞の合同の出來ない事を幾多苦き經驗に依つて痛感したので、日勞黨は、合同實現の前提要件として痛烈に之れと戰ひ來つたのであつた。而も最近に至つて、合同の聲は無產大衆の間に澎湃として起り、勞農黨大衆の中に於ても、宗派的分裂派の指導精神及びそのやり方に對して批判の矢が向けらるゝに至り、之れを克服して合同に向はんとする傾向は急速度を以て進展しつゝあつたのである。

二

此時に當つて、突如として日本共產黨事件の檢擧となり、勞農黨は官權に口實を握られて、その側杖を食つて解散せらるゝの悲運に至つた。私は單に之れを勞農黨のために痛惜するばかりではない。全無產階級運動のために痛惜せざるを得ない。

治安維持法の不當なるは、今更論を俟たない。併しながら我々の運

動は支配階級との激げしい戰ひである。我々は何時如何なる時と雖も敵を甘く見る事は誤りである。我々の戰ひは絶えざる彈壓下に於ける戰ひである。既に戰ひである以上、最も巧妙なる策戰を必要としなければならない。

日本共產黨と名乘る以上、其結社は秘密なものであつて、若し發見せらるゝならば、直ちに解散せられ、治安維持法に觸るゝは最初より自明の事である。今回の所謂共產黨事件なるものが、眞に實在せるものなりや否やは裁判の結果を見なければ確實とする事は出來ないが、若し然りとするならば之れに關係してゐた人々は、豫め今日あるを覺悟してゐた事であらう。之れに對しては、私共は、今後我等が勢力を增大して、如何にしても治安維持法を撤廢せしめねばならぬと考へるのである。

たゞ、斯くの如き結社の存在をその內部に包藏してゐる事を知らない多數の大衆を包含する舊勞農黨が、その側杖を喰つて解散せられた事は何と云つても痛惜に堪えない事である。勿論、支配階級の斯くの如き、、、、、、、、、しなければならないが、少くなくとも彼等に口實を與へるに至つた事は策の拙なるものとしなければならない。

併しながら、殘れる多くの舊幹部諸君が、宗派主義者に對抗する事が出來なかつたとすれば致し方がない。勢ひの赴くところ解散結構と云ふ事なれば、又何をか云はんである。而して又、なあに解散なんか出來るものかと考へてゐたとすれば、常に彈壓を叫ぶ者としては甘い、見當違いな考へ方である。

併しながら、私は、今でも宗派主義者のやり方に對しては斷乎として反對意見を有すると共に、勞農黨の解散を痛惜するものである。

今日の無產階級勢力の四分五裂は正當な事であらうか。勞働組合運動は如何、農民組合運動は如何、殊に多年心血を注いで、盛り立て來つた農民運動の最近の狀態を見て、誰れか感慨なきを得ぬであらう。金城鐵壁を以て誇つた香川縣の狀態を聞くもの誰れか涙なきを得るであらう。一度運動に絶望して反動化した農民運動は容易に水平に上つては來ない。而も、左翼の斯くの如き小兒病的失敗は、階級性をさへ失へる右翼に敵々口實を與へて、彼等に墮落の地步を固めしめ、未た無產階級運動の何ものたるかさへ知らざる一般大衆を我等の運動から離反せしめて、反動主義者によき耕地を與へるの結果をもたらすのみである。

三

私は、勞農黨の甦生を衷心から希望するものである。併しながら夫れは過去の過失を再びするものでなく、其甦生は勇敢に宗派主義者を精算して、直ちに分裂せる無產黨を合同に導く如き甦生でなければならない。

そして夫れは、單に私のみの衷心の希望に止まらない。傳へ聞くところに依れば、從來勞農黨の大衆的母體として、忠實に舊勞農黨を支

持し來つた日本農民組合の衷心からの希望ではないか。

私は、勞農黨の解散に對して、憤慨をく能はざる口調を以つておざなりな、、、、がさしさはりのない事を知つてゐる。併しながら、我々の運動は、今やそんなお座なりを以て事を濟ますべき時ではない。冷靜にして明徹なる批判を我々の過去に加へて、其批判の上に更に強力なる一歩を踏み出すべき秋である。

私は苦難に立つ舊勞農黨の殘れる幹部諸君に對して、心からの、、と同情とを捧げると同時に、よりよき甦生を衷心から切望して止まないものである。

覆面を除ぞかれた　某重大事件

山川均

前後二十七日の間、『某重大事件』なる覆面の蔭から、疑惑につゝまれたその姿を、僅かに隱見せしめてゐた三月十五日未明の全國的な大檢擧は、いまやすべての新聞の全紙面をあげて、一齊に報道された。北海道の果てから九州にいたるまで、事實上日本の全土に亘つて一千餘名の勞農運動者が檢擧され、稀代の、、と見做されてゐる治安維持法によつて起訴せられる者が五百名に上ぼるといふこの前代未聞の出來事は、そもく何を意味するだらうか。支配階級がこれから受けた激動と極度の恐怖とが、これを物語つてゐる。彼らはこの出來事の社會的意義を、本能的に知つてゐる。

この事件の檢擧の局に當つた一司法高官は、この『國難』が、社會制度の缺陷から生まれたものだといふことを認めてゐる。（四月十一日の諸新聞）。少なくともこの事件の發生は、『國難』の眞實の原因たる社會制度の缺陷が、治安維持法の制定によつては、少しも除去されなかつたことを實證した。治安維持法の適用と強行とに、果してこの力があることが立證せられるであらうか？　この出來事は、冷靜な考察と研究の對象としての一社會現象としても、深甚な意義がある。

□

いま數百名の勞農運動者の上には、治安維持法の重刑が擬せられてゐる。けれども彼らの如何なる行爲が、治安維持法の犯罪を構成するものと認められたのであるかは、まだ具體的に發表せられてならぬ。

さらにその行爲が、果して治安維持法の犯罪を構成するものであつたか否かは、少なくとも裁判の結末を見ないでは明らかでない。

これらの人々の行動は、或は治安維持法の犯罪を構成するものであつたかも知れぬ。もしそうだと假定すれば、檢擧は合法的だといふ意味では、もとより當然であつた。世論の多くは斯う云つてゐる（四月十二日諸新聞の社説）。けれども法律上、この檢擧が當然であつたといふことは、それが何ら政策的な意味を持たなかつた證據とはならぬ。諸新聞の社説に現はれてゐるように、世論の多くは、現にそれを疑つてゐる。當然なことも、しば〳〵政策的に利用せられてゐる。

總選擧の投票の迫つた微妙な空氣の中に、かの有名な内相の聲明書の砲彈が撃ちこまれたことは、國民の記憶になほ鮮やかに殘つてゐる。當局者は、今回の大檢擧が何ら政策的な意味を含まぬことを、繰り返して辯疏これ努めてゐるにもかゝはらず、皮肉にも新聞は、『政府一部の觀測』として、事件の發表が、政府のために政局を有利に導いた』と見られてゐること、勞農黨の解散によつて、『政府の血路開く』等々（十一日諸新聞）を報導してゐるのである。わづか三名の實業同志會員を漁獲するためにも、政府の高官がわざ〳〵大阪まで、再三出獵するの勞をいとはぬほど、それほど微妙な形勢にある臨時議會を目前にひかえてゐる。、、、、を仕留めるために、、、、、を一網打盡する漁夫もあり得るといふことは、必ずしも想像を絶した不可思議なことではない。

[一]

、、、、、、、、する大檢擧が、政策的に利用せられたかどうかはしばらく別問題として、かゝる、、が漂ふてゐることは事實である。この、、は、勞働農民黨の禁止によつて、一そう濃厚となつた。政府が勞農黨の結社を禁止した最も主要な理由は、勞農黨の指導機關が、共産黨の主要人物によつて構成せられてゐたといふ事實にあつた。もしそうだとすれば、共産黨員の檢擧そのものが、かゝる狀態を一變し政府は共産黨員の檢擧そのことによつて、勞農黨禁止の最も主要な理由を清算した筈であつた。政府自ら、國家權力によつて、解散理由を一掃したあとで、なほ解散の理由が殘つてゐるといふのが、政府の説明であつて、かゝる行動が、當然に、、に値ひすることは言ふまでもない。

さらにこの、、は、檢擧事件に關係がないと見做されてゐる、舊勞農黨議員の除名問題によつて一そう濃厚となつた。、、はもはや、、のないものとなつたと云つてよい。

□

内相の聲明には、政府はこの大檢擧によつて、『社會運動の正常な發展を阻止せんとするものではない』とある。それはかりでない。貴族院方面の觀測としては、この強壓政策によつて、『無産黨の健全な發達の機會』が作られたのだといふことである。何か正常な發展で、何か健全な發達であるかは別問題として、支配階級はこの強壓政策によつて

社會運動全體をして、或る一定の方向――彼らにとつて『正常』『健全』な方向――を取らしめようとしてゐることは爭はれぬ。これは禁止命令がひとり政黨のみならず、勞働組合の全國的聯合體にまで及ぼされたことによつても知ることができる。

支配階級が、無產者運動のうちの、最も好ましからぬ部分を分割して攻擊することによつて、その全運動を支配する政策は、決して新しい方法ではない。無產者運動の戰線が、幾つにも分裂してゐることは、かゝる分割支配の政策を最も容易にする絕好の條件であると同時に、分割支配の政策は、さらに戰線の分裂を促進し、統一を困難ならしめる。それ故に、無產者運動の眞實に『正常な發展』に關心する者から見れば、最も重要なことは、この强壓政策が、戰線統一問題の上に、いかに影響するかといふことにある。

この影響は、相當の時間に亘つて作用するものであつて、今日直ちにこれを批判することはできぬ。けれども少なくとも今日までに現はれた事實によれば、無產者運動はこの强壓と分割支配の政策に對して『健全』に反作用しつゝあるといふことができる。對立的な關係にあつた無產政黨及び勞働團體の聲明書は、これを物語つてゐる（四月十二日）。

共產黨事件その他に就て

河野　密

先づ私一個人の『身邊の雜事』から話し出すことを許して頂きたい。

大正十二年第一次共產黨事件のあつた當時、私は大阪朝日新聞の記者をしてゐた。至つて記者的第六感の乏しい私は、あのセンセーショナルな宣傳にのせられて、ふたを明けたらどんな事態がとび出すか――第二の大逆事件？――とまで考へさせられたのであつた。丁度その日九州社會運動救援の爲の演說會が大阪天王寺公會堂で開かれたが、私も盲目が空中に杖をふりまわすやうなメートルを擧げたことを覺えてゐる。

大正十五年の學生檢擧事件の時は、同志社大學の一講師として、私は京都に住んでゐた。私の敎へてゐた學生が事件に連座した關係上、私自身も大分睨まれて家宅搜索を受け、證人として召喚され、記事解禁の際には號外に寫眞までのせられて大分迷惑を蒙つた。その後は何

かにつけて學校に居づらく、日勞黨の結黨を機會に學校をとび出してしまつた。

それから今度の事件である。私は今同じ無産政黨の一員として働き乍ら、今度の事件に當面してゐるのである。

『共産黨』と銘を打たれた三つのセンセーショナルな事件を、三つの都に於て、三つの生活態に於て受けとつた經驗を、私はひそかに面白いと思ふ。私の卒直な感想を言ふならば、第一次の共産黨事件の印象は、どこか大阪式で、大衆的、世俗的であつた。學生檢擧事件は、その發祥地京都に適はしく、恐しく批判的＝分析的であつたやうに思へる言はゞアカデミツクな『共産黨』事件とでも言ふべきであらう。それに比して今度の事件は、東京を中心とする丈け、頭の尖から爪の尖まで政治的である。

× × ×

第一次の共産黨事件の發表が、一般世俗に與へた驚愕的印象は今日よりはるかに强かつたやうに思ふ。然しそれ丈け無産階級の組織的陣營内に於ける『結束』──兎も角それを守れと云ふ漠然たる『結束』──も、はるかに强かつたやうに思ふ。

學生檢擧事件は、學生なるが故にではあるが、一般には同情を以て迎へられた。その結果は學園内に於ける社會科學運動を支除するどころでなくむしろ學園内に於ける社會科學運動をより深刻化せしめた傾向がある。事件そのものの内容が極めて抽象的で捕捉するに苦む點が多かつたからでもあらう。事件そのものゝ發表を以ては否定的に効果を擧げ得なかつた。そこで和辻哲郎教授の如きドンキホーテ式登場人物が現はれて、架空の藁人形に向つて刀を振りまわすことが必要になつた（學生檢擧事件所感を見よ）兎も角、學生檢擧事件は、倫理學的な否定をかりることなしには、一般的の效果を期待し得なかつたのである。

今度の事件はどうであらう。全般的な發表のない今日に於て、問題に對する詳しい批評は暫く差し控えなければなるまい。然し、、、、の最大級の、、をこめた言葉なしには、『異常なるセンセーション』を期待し得られないのではなからうか、と云ふ漠然たる感想を有つ。

× × ×

田中首相はこの事件に關して聲明書を出し、『身を以て國難に當る』と言ふ。これは誠に結構である。政友會はまた聲明書を出して、『兇惡危險なる非國民のいん滅を誓ふ』と言ふ。これまた誠に結構なことである。然し乍ら、何が故に國難であるのか、何が故に兇惡危險なる非國民が金甌無缺の我が國にかくも多數に輩出したのか、その原因の原因をつきとめることがより急務ではあるまいか？ 然らずんば、國民が『唯一つの、、』を有たないことを悲んだ古のローマの、、の歎を繰り返すことになりはしまいか。、、の政治は秘密の結社を培ひ、探偵政治は客（アナツキ）の集團を培養する。反動の政治はまたこれに對應する堅固な對陰的集團を結成するとは考へないのであらうか？

× × ×

無產階級運動に於ける前衛の結成に就ては私は自ら別個の見解を以てゐる。『また動もすれば反動勢力の擡頭を見むとする我が國に於て、無產階級運動の採るべき方針に就ても異つた見解を有つてゐる。私はかつてかう書いたことがある――

『極左翼の指導的論者は言ふ、若しマルクス主義的分子、意識的左翼分子の結合――×××なくして徒に沈潜し、妥協を說くのは無條件的な沈潜であり、妥協であり、結局墮落に落ちつかねばならぬ……と。

『然しこれに對しては我々は多くの疑點を有つ、第一は現在に於てかゝる分子の結成が可能なりや否やの點である。第二にかりにかゝる分子の結合が可能なりとするも、結局解放運動上の實勢力と遊離せざるやの點である。第三にかゝる分子の結合が充すべき任務が、他の結合に依つて（日本の現實的事情に徵する時）代行せらるゝことなきやの點である』

これは勿論一年半前に書いたもので未熟なことは自認するが、私が當時漠然と考へてゐたことの次第に成形を得つゝあるかに考へられる』

これ等諸點に關する積極的の見解は稿を改めて書きたいと思ふ。唯私は言ふ、私には勿論勞働農民黨その他の大衆團體の解散に對して、これを抗議することに於て人後に落ちない、然し大衆團體と前衛の結成との混同、大衆團體としての具體政策、前衛分子結成の過程に關する觀方に於ては自ら見解を異にするものである、と。現在の時局は一部爲政家にとつて『國難』であるが如く、無產階級運動にとつてもまた一の『難局』でなければならない。如何にこの『難局』を克服すべきかの問題こそそれに課せられた任務であると信ずる。（四月十三日）

勞働農民黨の解散について

清瀨一郎

血が通つて居る？

大正十四年十二月一日憲政會內閣の若槻內務大臣は、農勞黨の前身たる農民勞働黨を解散した。翌十五年二月二十七日、私は、右若槻內相に、農民勞働黨の綱領に不穩の點を發見せず、又、同黨は未だ何等の活動もして居らぬ。此政黨を解散するの理由はないではないかと

詰つた所が、若槻內相は、共產主義的主張は嚴重に取締らなければならぬ。而して、之を取締る上に於ては眼光紙背に徹する考を以て進まなければならぬと答へた。——昭和三年四月十日、政友會內閣の鈴木內務大臣は勞働農民黨に向つて解散命令を一下した。翌十一日、舊勞農黨の細迫兼光君外二名が鈴木內相を訪問して、勞農黨の解散理由を聞きたゞした所が鈴木內相は平然として「勞農黨と共產黨との間には一脈の血が通つて居ると認めた」と答へて居る。

所謂、共產黨なるものが存在したのか。それが、いかなる行動を爲したのかは、未だ之を確知することが出來ない。よし吾々が、多少聞き及んで居つたとしても、今日なほ未だ之を記述するの自由がない。假りに日本に共產黨なるものが存在し、且、共產主義の宣傳をしたとして、之と血が通つて居るといふ譬喩的說明だけで、一の現存政黨を解散するに足るであらうか。私は、今、共產黨檢擧の當否は毫末も論議するの意思は有たぬ。しかし、共產黨なるものが存在するものと假定して、又其檢擧が國法上當然のこと柄と假定して、之と血が通つて居るといふ勞農黨の解散は正當視(ジヤスチフアイ)せられるであらうか。

「血が通つて居る」といふことは、そもそも、如何なることであるか。同じ鈴木內相の言に「黨が解散せられたといふ事によつて、全黨員が憲法に保證せられたる結社權を全然、剝奪されたものと考へられない。從つて差支ないと認められた綱領政策により、共產黨と目される人物を黨の幹部內より除外した形に於て、又其運動方法に於て、いはゆる共產黨と血の通つた狀態に非ざる狀態において、再び結社をなし、運動することは何等差支なきものと認む」と在る。之に依つて見ると鈴木內相が、共產黨と勞農黨間に血が通つて居るといふは主として共產黨と目せらるゝ人物が黨內に在るといふことらしい。何となれば、舊勞農黨の綱領政策は同黨成立以來、世間に公示されたものであつて、爾來、何等、物議を釀して居らぬ。個々の運動方法がいけなければ、之を禁止する方法も多々あるのである。鈴木內相の管下である警保局では大山、細迫の兩氏は傀儡に過ぎず、舊勞農黨の幹部は他に在りと洩して居るやうであるが、之には、何等、證據が擧げてない。、、大山郁夫氏は名實とも、舊勞農黨の中央執行委員長としての活動をして居り、細迫氏は書記長としての仕事をして居る。故に血が通つて居るといふ共產系の人物が舊勞農黨內に於て占むる位地は必ずしも最高幹部ではない。斯る狀態に於ての人物共迫が果して治安警察法第八條第二項の適用に値するや否や。內務大臣の發表せし理由は薄弱である。

蠢いた眞似ではないか？

一八四七年の「共產黨宣言」には「大きな化け物が歐羅巴を橫行する。此化け物の名は『共產主義』だ」とある。此化け物は隨分人を惱ましめた。化け物は本來無形だ。刄を以て斬らんと欲するも斬る事は出來ぬ。春の風を斬り盡さんとして正宗の刀を振り廻すも同樣であ

る。畢竟ドン・キホーテの仕事である。田中首相は十二日聲明書を發して、共產主義の憎むべく、怖るべき所以を縷述し、最後に、

「私はこの點につき職責の重きに顧み、固く自ら決するところあるを以て、深く思を潜め、心を新らにし、身を以て今日の困難に當る覺悟である」

と結ばれて居る。田中大將が帶劍の柄に手をかけて、身を以て困難に當ると呼ばるゝ心持には同情もするが、、、、、、では危險思想は喰ひとめられぬ。此點については他日所懷を陳ぶる機會もあらう。たゞ、私どもが田中首相の聲明を讀んで直覺した所は、これは、また、既成政黨の常套手段ではあるまいかといふことである。ほんとうに、此度の共產主義運動を、、たのではなく、之を誇張して、大に、、、、、をする。例へば、彼の朴烈事件がそうであつた。今日から考へれば、當時彼等は、ほんとうに、之を、、の一大事と考へたものではなかつたのである。何となれば、所謂「深甚なる考慮」の一言と引き換へに朴烈問題は忽ち拋棄せられ、甚だしきに至つては朴烈事件の糾彈者と責任者とが同一黨を組織するに至つた。或る出來事を、、とか、、、とかといふことがらと結びつけて、悲憤慷慨すれば人氣が寄ると思つて居る。今回の共產黨事件の檢擧の當否は、前にも言つた通り、今一言も之に論及せぬ。しかし、これと舊勞農黨とを結びつけた所に彼等慣用の技巧が施されて居るのではないか。此陰謀を、私は惜む。(三、四、一二)

勞働農民黨の解散とその再起への展望

大山郁夫

一

二年と一個月の果敢なる不斷の鬪爭の跡をとゞめて、、、あるわが勞働農民黨の生活のページは閉ぢられた。

その、、、は、いふまでもなく田中反動內閣だ。同黨の前身であつた農民勞働黨の、、者が若槻憲政會內閣であつたやうに。

かうして政友會は、今や憲政會(現在の民政黨の主要なる一構成部分)と同樣に、その手を、、、、、、、、染めつゝ、いと高き

政治舞臺の上から、全被壓迫大衆を睥睨して立つてゐるのだ。

既に政治的に眼ざめて來た全被壓大衆は、これまでのところでは、大正十四年十二月一日を彼等の、、、、として忘れることができなかつた。だが今や、昭和三年四月十日が、また彼等にとつて、より深刻なる、、の日となるに至つた。

それにしても、勞働農民黨の解散は、何といふ悲壯な光景を描いたか！ それは戰ひのたゞ中に討たれた勇士の花々しき最後であつた。それは政治的自由獲得闘爭の、、、犧牲者の大きく倒れゆく姿であつた。

我々をして、逝ける勞働農民黨を潔よく葬らしめよ！ だが、我々をして同時に、その潑溂たる闘爭精神を完全に保存し、繼承し、活躍せしめよ！ 然り、いやしくも全被壓民衆のための政治的自由獲得闘爭の必要の存續する限り、我々をして、勞働農民黨の足跡を追ひ、それが大衆の面前に揭げた闘爭目標を目がけて、まつしぐらに正しく戰ひ進ましめよ！ それこそ我々が、勞働農民黨の二年一個月に亘る短き生存をして、、、、、の歷史的任務のあるものとして記念すべきものたらしむべき唯一の途であらねばならぬ。

二

勞働農民黨の解散は、表面上は日本共產黨事件に聯繫せしめられてゐる。そして、日本共產黨事件は治安維持法違反を構成する、ものだといはれてゐる。

果してさうであるか？ それはまだ判然しない。それは少くとも、裁判確定の日をまたなければ何ともいへない。況んや、該事件に關して今までに政府から發表された經過報告によつたゞけでは、猶更らその核心が漠然としてゐて、眞相が精確に掴めないのだ。

それだのに、それを頭から一も二もなく治安維持法違反に、、、、、、、、、してかゝつて評價し、しかもそれから早急にも何等かの具體的結論を現實に引き出さうとするが如きは、明かにブルジョアジーの、、、、、、、、、、ある處置だ。プロレタリアートへの、、、、、、の容易さと敏速さ！ さうした周知のことは、玆で言はでものことであらう。、、、、あらば、我々はたとへば過ぎし總選擧期間中およびその後に於ける我々の經驗のうちからだけでも、それに關する手近かの實例をいくつでも提供することが出來るが、しかし玆ではさうする必要すらないであらう。

だが、かりに日本共產黨事件が治安維持法違反を構成してゐるといふことが明白なる既定の事實だとしても、その治安維持法といふものからしてが、我々の立場からは、批判の餘地が大にあるのだ。――といふことは、同法制定當時から我々が極力唱道して來たことであつたが、特にいはゆる京大學生事件が起つた際には、我々は一層その感を強めざるを得なかつた。しかも我々は、今や再び同じことを繰返して切言しなければならない運命の下におかれてゐるのだ！

治安維持法は、第五十議會に於て、普選法とならべて制定されたところの、資本家地主の階級的利益の擁護の役目を果たすための必須の法律であり、同時にまた我々の側から見れば、無產階級、、諸法令の筆頭におかれてある稀代の、、である。從つて我々は、從來に於て既に屢々、筆舌の限りをつくして、それに對する假借なき批判をして來た。で、我々は今は玆でそれを重ねて企てないであらう。だが、この際たゞ一言だけそれに觸れることが許されるならば、我々はかういひたい。──卽ち、治安維持法は國體を變革しまたは私有財產制を否認する目的を持つて結社を組織したり、それに參加したりするものを嚴罰に處することを眼目にしてゐるものであるが、無產階級の立場から見て厄介千萬なことには、その、、、、、、、、が極めて廣汎であつて、しかも當局の、、、の餘地を非常に多く殘してゐるのだ。そして無產大衆は、いはゆる當局の、、、なるものゝ正體の如何なるものであるかを、その不斷の體驗を通じて、餘りにも痛切に、知りすぎるほど知りぬいてゐる。この點から見て、治安維持法は無產階級運動の前に伏せられてある最も危險な、、だといへるのだ。しかも金融資本の支配の確立と共に資本主義の內在的矛盾の愈々急速に深化しつゝある現在の社會狀態は、無產階級運動に從事するものゝ不知不識のうちにその、、に落ち込む機會を益々多く再生產しつゝあるのだ。それ故に我々は、この、、こそ、我々の政治的自由獲得鬪爭への、途上に於て、まづ第一番に、、にあげるべきものだといふ確信を、益ゝ强めつゝあるのだ。

當局の發表に從へば、日本共產黨事件に連座して治安維持法違反に問はれようとしてゐるものが百名とか二百名とかの上に出ようとしてゐるとのことだ。で、萬一裁判確定の日に事實がその通りになつたならば、何がそれによつて證明されるであらうか？　人々は、それを考へたゞけでも、、するやうなことはないか？

三

治安維持法に關しては、今はこれ以上のことを言はないことにする。

だが、その治安維持法に關係があると報ぜられてゐる日本共產黨事件は、まだその內容が裁判によつて明確に決定されない前から、それが如何に、、べき性質のものであるかゞ、、、、宣傳されつゝある。そしてそのために、その事件に適用されるかも知れない治安維持法そのものが如何に、、べきものであるかの問題が、完全に蔽ひかくされてあるかの觀がある。

この事實に直面して、我々は『またか！』の感を强めざるを得ない。

それはそれとしておいても、日本共產黨事件の裁判確定前に、當局が、、、勞働農民黨をそれに聯繫せしめて解散した直接の動機は何處にあるか？　我々は今や、その點を究明しなければならない。

四

勞働農民黨の解散に附帶して、早くも勞働農民黨選出の二名の代議士の除名問題が或る方面から提起されたとき、さすがにブルジョア代議士連の間に於てさへも、日本共産黨事件の裁判確定前にその二名の代議士に對して除名處分を斷行するのは不當だと主張するものが少からずあつたやうだ。

では彼等は何故に、同樣の理由によつて、その二名の除名處分以上に重大なる勞働農民黨の解散處分の不當を鳴らさないのであるか？

我々は、勞働農民黨の解散を、、、、、が故に、從つてその二名の代議士の除名を、、、、、。殊に、當局が、、、勞働農民黨を共産黨に結び附けて解散を斷行した時に當つて、政友會の代議士中の頑迷派が、勞働農民黨選出の二名の代議士が、大衆黨としての舊勞働農民黨、、、、、、、、、、を議會に於て說明する機會をさへも絕滅しようとするが如き暴擧に對しては、我々は舊勞働農民黨を熱烈に支持して來た勞働者農民および無産市民の名に於て、斷乎として反對する。

だが、彼等よりも幾分か、より啓發されてゐるかに見える他のブルジョア代議士連にしても、既に一方に於て、日本共産黨事件の裁判確定前に勞働農民黨選出の二名の代議士を除名することを不當と認めた以上は、何故に他方に於て、同じ理由によつてなりとも、勞働農民黨そのものに對する、、、、、なる解散處分をだけでも、、と認めないのか？　彼等はその間に何等の矛盾をも感じないのであるか？

否、彼等は恐らく內心ではその矛盾に氣附いてゐるのであらうが、しかし同時にまた、それを如何ともすることが出來ないのでもあらう。それは恰度、資本家地主の政黨として活動する彼等が、勞働者農民および無産市民にも迎合する必要を感じてゐながら、それらの諸層の利害の眞の代表者であつた舊勞働農民黨の、、を是認することによつて、公然彼等を敵とする態度に出なければならなかつた矛盾を如何ともすることが出來なかつたやうに。

五

田中反動政府は、舊勞働農民黨が日本共産黨と關係があつたことを表面上の理由として前者に解散を強行したが、しかしその關係が同黨の解散を餘儀なくするやうな性質のものであつたことに關しては、何等の有力な根據を示してはゐない。

舊勞働農民黨は勞働者農民を基礎的構成分子とする大衆黨でこそあつたが、しかし勞働階級のみの前衛黨である共産黨とはその性質を異にするものであつた。もとより舊勞働農民黨は、かゝる意味に於ける大衆黨として、樣々の主義主張乃至思想傾向の人々を包含してゐたのだから、その中には共産主義者も居たが、同時にまた社會民主主義者、組合主義者等々も居た。當局は、日本共産黨の主要人物と舊勞働農民黨の主要人物とに共通のものが多かつたことを言ひ立てゝゐるやうに新聞紙は傳へてゐるが、しかしそれは單なる彼等の、、、、、、、ない。尤も我々は、日本共産黨事件の關係者として起訴されたであらう

と推定され得る人々のうちに、舊勞働農民黨の主要地位を占めてゐるもの〻若干は存してゐたことを認めるが、しかし彼等といへども、大衆黨と共産黨との區別に對する明確なる認識から、舊勞働農民黨の大衆黨としての本質を些かでも變へるやうなことを決してしなかつたことは、我々がきつぱりと斷言し得ることだ。

誰もが知つてゐる通り、舊勞働農民黨は、すべての無産黨のうちにあつて、最も左翼的な、かつ最も戰鬪的な政黨として、その眞價を發揮してゐたものであることは事實である。而してそれは、支配階級が極度に反動化してゐる今日の情勢の下に於て、眞に勞農大衆の利害を代表し、その生活と自由とを擁護することを任務とする無産黨にとつては、、、、、、、、、、。だが、それかと言つて、舊勞働農民黨は、その政治行動に於て、決して合法的大衆黨としての限界を超えたやうなことはなかつたのだ

當局はまた、勞働農民黨の綱領および政策が日本共産黨のそれらと共通のものが多かつたなど〻言つてゐるやうであるが、併しこの點に關しても我々は、たゞ漫然と共産黨と共通のものがあつたか否かを問ふべきではなく、端的に勞働農民黨の綱領および政策そのものについて、それらが果たして大衆黨として掲げ得られる限度を超えてゐたか否かを檢討するのが當然だと主張する。そして我々は責任を以て斷言する、舊勞働農民黨の綱領および政策は決してさうした限度を超えてゐたものではなく、寧ろ遙かにその手前に止まつてゐたものであつたことを。否、舊勞働農民黨の綱領および政策は、寧ろ社會民衆黨や日本勞農黨のそれらとこそ、殆んど一致してゐたといひ得られる位だ。たゞ舊勞働農民黨は、それらの綱領および政策の實行に關しては、果敢なる大衆鬪爭を主位におき、議會行動をそれに從屬せしめた點に於て、他の無産諸黨とは全然行き方を異にしてゐただけだ。だが、その果敢なる大衆鬪爭にしたところで、決して合法的行動の範圍を逸脫したものではなかつたのだ。

當局は、また舊勞働農民黨が共産黨の指導下にあつたといふやうなことを言ひ立て〻ゐるやうだが、しかしそれもまた彼等の、、、、、にすぎないものだ。だが、かりにそれが事實だとするも、苟くも舊勞働農民黨の行動が合法的大衆黨としての範圍の外に出ない限りは、それは合法的に禁止され得る何等の根據もないものだといはなければならないのだ。

六

以上述べたやうな諸理由によつて、我々はあくまでも、勞働農民黨の上に加へられた解散處分を、、、、、、なものと主張することを躊躇しないものである。

だが我々は、さういふことを、何時までも女々しく繰り返してはゐないであらう。我々は寧ろこの際舊勞働農民黨が資本家地主の政府の、、、、、となつたのは、――然り、それは茲では詳說の暇はない

が、我々はあくまで、勞働農民黨の解散は、田中反動政府および政友會の、、、、以外の何物でもなかつたことを斷言する、——それが最も誠實に勞働者農民および無産市民の、否、全被壓迫民衆の、生活と自由とのために、最も果敢なる日常鬪爭を展開し續けて倦むことを知らなかつたからだといふ一點を强調して、本文を結ばうと思ふ。

特に舊勞働農民黨は、それ自身の上に加へられた解散を通して、その從來の政治的自由獲得の鬪爭目標の、、さを、遂に身を以て最終的に證明したものだといふとが出來る。實際この解散は、現在の資本家地主の政府の下に於て、勞働者農民および無産市民が、如何に言論集會の自由の外に、更らに、、、、、をも奪はれてゐるかを、我々に餘ますところなく痛感せしめた。さうだ、勞働者農民および無産市民は彼等自身の、、を持つ自由をさへも完全に持つてはゐないのだつた。

それ故に我々は、彼等と一層堅く手をとつて、我々の從來のスローガンの上にさらに——

『我等に結社の自由を與へよ!』『我等の政黨を作れ!』

等々をつけ加へて、一層勇敢に我々の政治的自由獲得鬪爭を戰ひつゞけなければならぬ。そしてそのためには、我々は一層强固なる組織を持たねばならぬ。我々の再起の已むを得ざるゆゑんである。

それこそ、——我々は繰返して云ふ、——舊勞働農民黨の二年一個月に亘る短き生存をして、、、、の歷史的意義のあるものとして記念すべきものたらしむべき唯一の途である、と。

長谷川如是閑氏稿『冷靜に而してフアシズムを警戒せよ』補遺 八三頁上段終より四行目「……材料が多いかも知れぬ。」の次へ追補。

たとへばイタリーに於けるフアシズムの發生には、元來同國特有の社會的癌腫たるマフイア、カモーラ等の秘密結社的大犯罪團を現存せしめるやうな歷史的事情の存在することが必要條件であるが、日本には古來より今日に至るまで秘密結社的大犯罪團などを成立せしめるやうな社會的條件に乏しく、今日に於てはそんな餘地のないことはいふまでもない。フアシズムは國家が秘密結社と連絡して發生したものであるから、さういふ結社の可能性のない日本はフアシズム發生の條件に乏しい。又日本の社會主義はその實行に於て、、、傾向に於て、反動主義者とは比べものにならない程低度で、各國殊にイタリーに於けるやうな暴動化の歷史をもつてゐない。從つてそれに對する反動的暴力を挑發する機會が鮮いといふこともフアシズムの發生に不便である。日本人はその點からは可なり常識に富んでゐて、從つて偶像的英雄の出現の困難なこともまたその不便に一層を加へる。ダヌンチオのフユーメ占領のやうなことを企てる日本人は今日では皆無であらうし、萬一出た所で續く同勢がない。なほ以上のやうな直接の動因に乏しい上に、日本の資本主義の國內的乃至國際的性質も最早フアシズム的政治を許す段階を出てしまつてゐるといふ根本的事情もある。

労働農民黨を顧みて（小史小論）

青野季吉

労働農民黨の前身とも言ふ可き農民労働黨は、大正十四年十二月一日に組織されて、僅か三時間の存在の後、時の加藤内閣のために解散を命ぜられた。翌年三月五日、その後をうけて樹立された労働農民黨は、昭和三年四月十日、田中反動内閣のために解散を命ぜられて、こゝに多難なりし二ヶ年一ヶ月の生命を終つた。

私は、いま、すべての興奮を抑へて極く簡單に、今は亡き労働農民黨の興亡の後を、たどるであらう。

労働農民黨は、農民労働黨の解散の後をうけて、『新政黨は、全然、共産系を排して、現實的な政黨組織を以て進むこと』云々の、かの有名な『玉姫クラブの申合』に基いて、とにかく單一無産政黨の形容を具へて、樹立されたものであつた。この創立に際して、飽まで共産系を排さんとする總同盟と、他の参加團體との間に若干の軋轢があつたがこの事實こそ、労働農民黨の運命の讖を成したものと、言つてよいであらう。

創立から約半年の間は、黨の門戸解放問題を中心として、内紛を續け、黨としては殆んど記載するに足るやうな政治的活動を爲すことが出來なかつた。即ち一般に門戸は開放するが、明白に共産系と目すべき評議會、政治研究會、無産青年同盟、水平社無産者同盟の四團體員の入黨は、これを黨の基礎が確立するまで拒絶するといふ總同盟側とかゝる明白なる、區別を設けず、玉姫クラブの申合に基いて、正當の機關において入黨の資格を審査することを主張する日本農民組合側との間に、到底融和し難い抗爭がつゞいた。この間の事實を綜合して考へて見ると、總同盟は飽まで黨をその支配の下におかうと策したのであり、日本農民組合は曲りなりにも單一無産政黨の實を擧げやうと圖つたのであり、組合評議會その他の左翼團體は、玉姫クラブの申合は止むないとしても、事實上黨の大衆の中に、その勢力を植ゑつけやうと圖つたのであつた。

かく、總同盟系は飽まで門戸閉鎖策を押し通してゐる間に、黨大衆の間には前記四團體の構成員が介入し、各支部の有力な活動分子と成つた。この形勢は遂に市電自治會、組合總聯合、司厨同盟の中間組合の『左右兩翼の對立抗爭』を理由とした黨脱退を誘致し、つゞいて總同盟の脱黨となつた。この分裂は、實に結黨後、約半年後の十月二十四日の

ことであつた。

分裂後の勞働農民黨は、事實上、これまで排除されて來た共産系の四團體員に門戸を開放し、委員長杉山元次郎氏の辭任を認めて、大山郁夫氏を委員長に推し、共産系介入の故をもつてこれまで承認を拒絶されてゐた地方支部を、續々として認めた。かくて、單一無産政黨の形容は全く崩壞して、新裝して現はれた勞働農民黨は、實際において左翼の大衆黨となつたのであつた。

この陣容を建直した黨も、勿論その綱領等においては、何等變改を加へることがなかつた。この綱領は、黨の再組織に關し田中反動内閣が構成要素さへ變更すれば、それで差支へなしと言つてゐるもので、記憶を新たにしておく必要があると思ふので、こゝに掲げておかう。

『綱領。一、我等は、我國の國情に即し、無産階級の政治的、經濟的、社會的解放の實現を期す。二、我等は、合理的手段に依り、不公正なる土地、生産、分配に關する制度の改革を期す。三、我等は、特權階級のみの利害を代表する既成政黨を打破し、議會の徹底的改造を期す。』

勞働農民黨は、その新陣容をもつて同年十二月十二日に第一回大會を開催して、諸般の準備を整へ、その斷えざりし内部抗爭より轉じて實際の政治鬪爭へと進出した。その第一回大會から第二回大會(昭和二年十二月十、十一、十二日)までの行動を、黨の報告書その他に依つて摘記すると次の通りである。

第一回大會前後から翌昭和二年三月まで。議會解散、耕作權確立等をスローガンとして、前後四回全國的の請願デーを決行した。一方、政府の支那國民革命にたいする干渉が明白となるや、黨は、對支非干渉の運動に着手した。

四月より六月末まで。黨は、大資本間救濟のためにせる臨時議會の七億圓支出に徹底的に反對し、都市においては工場代表者會議を指導し、農村においては、耕作權確立のための村民大會を指導する等、各種の指導、宣傳に努めた。

七月から九月末まで。この時期は府縣會議員の選擧において、無産政黨が始めて選擧戰に參加した時期である。勞働農民黨も勿論、果敢にこの機會を捉へ、全國的には一、天下り知事を排せ！ 二、府縣の事は府縣會で決めろ！ 三、税金は、、、、、に出させろ！ 四、勞農無産市民は勞働農民黨へ！ 五、勞働農民黨の旗の下に！ といふスローガンを掲げて、地方協議會等の特殊の強靱な組織で戰つた。この選擧戰における黨の立候補者數は一〇六名、總得票數は十二萬千四百三十五票、當選者十三名で、他の無産政黨の成績を遙かに拔いたものであつた。

たゞこゝに記憶さる可きは、この選擧戰において、黨は、他黨との對立交渉(所謂選擧協定)に關し、社會民衆黨及び日本農民黨に絶對排擊を宣したに拘らず、革新黨にたいして『部分的協力』を宣した事實であり、日勞黨との協定に關して遺憾の點のあつたことである。更にま

た、黨の實際上の指導新聞『無産者新聞』が、この選擧戰の結果に關し、『エセ無産諸黨に對する勞農黨の輝ける勝利』の祝杯をあげた事實である。

十月から一月まで。黨は、臨時縣會において、黨出身の縣會議員及び支部を督勵して、當該縣下における勞働者、農民、小市民の政治的利益のために戰はしめた。また十一月七日のロシア革命、十周年紀念日には、帝國主義戰爭の危機と戰へ！等のスローガンの下に、各地で各様の鬪爭を指導し、一方、愈々露骨となつて來た政府の言論・出版・集會の彈壓にたいして、反對運動を指揮した。更にこの時期に黨は、問題の無産政黨の合同にたいして、表面上積極的に働きかけて行つた。合同問題にたいする黨の行動は後段に說かう。

一月から三月末まで。この時期は總選擧戰の時期である。勞働農民黨が、いかなるスローガンの下に、いかなる戰術を以つて、この選擧戰を戰つたか、また他黨との選擧協定にいかなる態度をとつたかは、餘りに記憶に新らしい事實であるから、更めて說くまでもないであらう。、、、、の言語に絕した壓迫の下にあつて、黨は約四十名の候補者を立て、總數十九萬一千六百九十八の投票を得、二名の當選者を出した。これを秋の府縣會選擧戰の成績に比較すると、必らずしも大きな進出とは言はれないが、總選擧に際しての政府の、的とも言ふべき彈壓を思へば、これだけでも一つの進出と言ふことが出來やう。

かくて三月十五日、謂ゆる日本共産黨なるものの大檢擧に關聯して勞農黨の前途に一抹の暗雲が低迷してゐたが、遂に四月十日、日本共産黨の記事掲載禁止解除と共に、政府は『安寧秩序を害するもの』との名目の下に、勞働農民黨に解散の命を下したのである。

勞働農民黨の行動において、特に記憶を新たにしておく必要のあるのは、無産政黨の合同問題にたいするそれである。抑々合同問題は、勞働農民黨の創立の殆んど直後から既に起つてゐたもので、如何なる團體に屬する者と雖も、極左翼小兒病は排斥すること等の七個條を基礎とせる日本農民組合のそれが、最初の合同の提案であつた。この提案に對して、日勞黨は『勞働農民黨が、自ら黨內の左翼小兒病を排除整理し云々』の理由で否定的態度を執り、勞農黨はまた、『日本勞農黨現在の指導精神にして變更せざる限り』絕對に合同に反對する旨を聲明した。爾來、日勞黨側の左翼小兒病即ち福本イズムの排除の條件と、勞農黨側の『指導精神の變更』の條件とは、合同の實際上の進展に、越ゆ可からざる障害となり、數度の合同運動は常にこの暗礁に乘り上げた。

その後勞農黨は日勞黨に向つて、幾度びか共同鬪爭を提議し、その共同鬪爭を通じて、『戰鬪的合同』(1)を實現する戰術を執つたが、これは山川氏が正當に指摘してゐるやうに『或る限定せられた共通の鬪爭を有効に遂行することを直接の目的とし、かゝる共同鬪爭の發展によつて、黨と黨との合同を可能とすることを間接の目的とするものでなく、日勞黨の「指導精神」を排撃する機會を作らうとするものであつ

た。』(『社會科學』第四卷第一號)從つてそれは、決して合同を齎らすものではなかつた。

だが日勞黨は、議會解散要求や對支非干渉の問題で、勞農黨と共同鬪爭を試み、そこに合同へのかすかな希望がつながれたが、日勞黨は二三の共同鬪爭の後、再び以前の否定的の態度に歸つた。その理由とするところは勞農黨の『一角に巣喰ふ人々』が、常に名を協同戰線に假つて實は常に日勞黨を攪亂すると云ふにあつた。こんなわけでその後、常に合同の問題が持上る度に、日勞黨は、左翼小兒病の清算を要求し、勞農黨は依然として指導精神の變更を要求した。現に二年の十一月初旬まで、勞農黨は昂然として、相手の指導精神の克服に依る合同を唱へてゐた。然るに半月とたゝぬ十一月十五日に、勞農黨の事實上の指導新聞『無産者新聞』が『全ての勞農政黨合同協議會の開催』を提議する。と、黨は掌をひるがへすが如くこれに應じて、一二日の後、『指導精神にこだはらぬ。』『各無産政黨の合同のための協議會の開催を提唱する』決議をした。勞農黨のこの猫の目の如き變化は、ひどく世を驚かしたが、日勞黨は勞農黨の事實上の指導者たる『宗派的分裂主義者』のこの『急角度を描いた轉換』の誠意を疑ひ、依然、同主義者即ち福本イストの清算の要求をもつてこれに答へ、一方、新らたに勞農、社民、日農の三黨に、右の條件を附した合同の提案をなした。だが、この合同の大旋風もやがて何の結果をも生むこと無くして止んだ。かくて一度び眼前に擴大された無産四黨の合同は、再び視野を去つた觀があつた。

かうした數次の合同問題の擡頭は、無産大衆の合同の要求に押された結果であることは疑ひない事實であるが、その要求は過般の總選擧の實踐を經て、再び高められた。而してこゝにまた合同の問題が持ち上つたが、勞働農民黨は、一方に指導精神を問はずと言ひながら、他方に、社會民主々義の批判の自由といふ合同の條件を附さうとした。かうしてゐる間に黨にたいする大彈壓が襲來したのであつた。合同問題にたいする勞働農民黨のこれらすべての行動に、我々は何を觀て執るか？ それはこゝに問はない。たゞ日農黨の『福本主義の排斥』の條件と共に、勞農黨の『指導精神の變更』の條件——後にはその姿を更へて、社會民主々義の批判の自由、となつて現はれた——は、事實上、合同を不可能ならしめる結果しか持たぬことは明白で、一方に合同問題を問題としながら、他方にかゝる暗礁を設けて憚らないのは、大衆の要求を取上げる假面の下に、實はそれを拘束するものであると言ふ非難はまぬがれないと思ふ。

これまでのところで屢々勞農黨の『一角に巣喰ふ』宗派的分裂主義者即ち福本イストなる一群の人々のことが、言及された。それは事實上勞農黨の指導權を握つてゐた書記局にその先端を表してゐた勢力を指すものであつて、宗派的分裂主義者とは、彼等を批判したコムインタンの用語である。即ちその行動の方法が大衆的でなく、宗派的で、その政策が凡て分裂に結果する一派と言ふ意味

である。勞働農民黨は、誰が見たつて大衆的共同戰線黨であり、それであつて、始めて意義のあるものであるが、彼等宗派主義者は、最初勞農黨を××黨と誤認して、××黨の組織、戰術を、そつくりそのまゝ勞農黨に適用しやうとした。その後世の激烈な批判に會つて、彼等はその誤りを一應は認めたが、事實においては、最後までその清算を行ふことが出來なかつたと言つてよいであらう。例へば彼等は、勞農黨の正式な機關を經ないで、過般の總選擧に際して、『、、、、、、、、の樹立』といふスローガンを掲げて、戰つた。このスローガンが大衆的共同戰線黨のそれとして妥當なものであるか否かは、殆んど說明するまでもないと思ふ。しかもかゝるスローガンを掲げて來たところに、彼等の勞農黨の性質規定における過去の誤謬の未清算が、鮮やかに表現されてゐると思ふ。プルジョア新聞の報ずるところによると、大山元委員長の一派は、實はこの宗派主義者の傀儡に過ぎなかつたと言ふ。その事實の實否は分らないが、宗派主義者の政策を離れた、大山元委員長の一派の獨自の政策なるものは、尠くとも濃厚には黨の活動に表はれなかつたと言つてよいであらう。

最初に、勞働農民黨は民主的組織の大衆的共同戰線黨であるにも拘らず、黨内民主々義が確立されてゐたか否かを、私は大いに疑つてゐる。例へば黨の存在の最後において、一つの波紋を描いたところの、大山元常務委員の罷免などが、それを疑はせる有力な事實である。大道元委員の聲明書の趣旨の正否は別問題としても、聲明書の配布は既に常務委員會の承認を經たものであり、別に黨の統制を亂す性質のものではなかつた。その理由にならぬ理由を楯として、執行委員會が大道元委員の常務委員を罷免するは兎も角として、その權限外に出でて、執行委員たることさへ罷免して、大會の權限を犯してゐる。その他、この問題の解決に際して召集された擴大執行委員會[illegible]到底黨内の民主々義の存在を疑はざるを得ないもの[illegible]れなども、大衆的共同戰線黨として勞働農民黨を、××黨[illegible]派主義者の、根強い誤謬の一つの遺產であつたのかも知[illegible]。

舊勞働農民黨は、かく内部に矛盾と、大きな困難とを持つてゐた。がともかくにもそれは、戰鬪的な勞働者と農民の政治的團結であつた。もし内部に矛盾があり、困難があつたならば、それはその勞働者と農民の大衆の健全な批判力によつて、批判され、清算さるべきものであり、また批判され、清算されるものであつた。田中反動内閣が、未だ、、、、、も經ず、、、、、やかならぬ日本共產黨を、、として、勞働者農民の公然の大衆組織たる勞働農民黨に、忽ちにして解散の命を下すことは、明らかに、、、、、、、と言つてよい。

勞働者農民の大衆は、この、、に向つて、、、、、、しなければならぬ。(四・一三)

編輯だより

◇三日見ぬまにさしもの東京名物の櫻花も地に委した。花散つて淡い哀愁をそそるとき又喧噪の聲を日比谷に聞かなくてはならない。世の廻り舞臺をかく眺むるのみで何等まとまつた貢献が遂げられぬ我々の努力が耻しい。だが我々の執つている態度が眞劍で、何れの階級にも阿らぬものであることだけは世に廣言が出來る。

◇我々は正しく純に一生を戰つて行く、何れにも偏せす、そしてこぢれずに。

◇新聞紙法案、出版法案についてはいいたいことが山程ある。しかし幾度も本誌上に繰返したことであるから玆に架說するの要はない。ただ檢閲課の規模を數倍して實際[illegible]に當れる人々を議員若くは囑託として任命し賠償制度を認め、出訴權を認めることだけは洩らさぬやうにしてもらいたい。新聞紙の發賣禁止と雜誌のそれとは損害の程度に於てお話にならぬことも承知していてもらいたい。そして必ず今度の通常議會には出してもらいたいことだ。

◇其筋より「達」で勞農黨の文字の上には舊の字をいれるやふにとのことであつた。もう紙型になつた後であつたものは皆勞農黨を舊勞農黨と訂正する。

◇本誌の懸賞募集は百五十枚以内として四月號に發表しましたが、可成百枚以内であるならば尚更幸ひです。尚昨年の懸賞應募の作作の分は何れそのうち發表するものがあらふ。

◇本誌五月號に執筆した小泉七三君は野田爭議團の中心人物です。我々はこの爭議が一日も早く解決さるることを衷心より希ふものです。

◇高畠素之君が心魂を打込んだ「資本論」の改譯全部終了、一兩日中に第五卷を發送する筈です。玆に譯者の勞を謝する。

◇マルクス全集エンゲルス全集の全體系成り玆に豫約募集をすることになりました、完璧を期した權威ある全集であることをいひ得る。そして本集の現段階における重要さもここに改めて說くを要しない。

◇又、本全集に對峙して重きを存す「マーシヤル經濟學原理」の縮刷版も同時に現代の要求するところです。希くばマルクス全集と併讀して下さい。

◇我文壇における偉大なる功績者上田敏全集を本社より出すこととなつた。その內容、[illegible]裝共に申分のない全集として五月早々街頭に出るやうになるのはうれしい。

◇今後本誌に大衆文藝の力作を毎號登載したいと思ゐます。六月號には大佛次郎氏の幡隨院長兵衛の快作を載せます。

◇世界大衆文學全集の四月配本は讀みものの中での讀みもの「ルパン」です、五月配本はスチブンソンの「寶島」です。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵税不要
壹ケ年	六圓	郵税不要

昭和三年四月十八日印刷納本
昭和三年五月一日發行

（五拾錢）
（税貳錢）

東京市[illegible]
編輯兼發行人 [illegible]

東京市[illegible]
印刷人 [illegible]

印刷所 [illegible]

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京八四〇二三
電話芝(43)一一三一　一一三二　一一三三　一一三四

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

株式會社秀英舍印刷